金沢城史料叢書35
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書12

金　沢　城　跡

―本丸附段・北ノ丸―

2019

石川県金沢城調査研究所

例　　言

１．本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財調査報告書である。

２．事業は石川県土木部公園緑地課（以下、公園緑地課）が所管し、文化財調査は公園緑地課から石川県教育委員会事務局文化財課が依頼をうけ、本丸附段、北ノ丸（御宮、藤右衛門丸）の発掘調査については、財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。いもり坂脇石垣の試掘調査と玉泉院丸の立会調査、報告書の作成・刊行については、石川県金沢城調査研究所が行った。

３．事業期間と担当は次のとおりである。

【現地調査】

本丸附段（第１次）［平成10年度（1998)］

期　間　平成10年５月６日～８月12日

担当者　財団法人石川県埋蔵文化財センター　滝川重徳（主事)、熊谷葉月（主事)、土田友信（講師）

本丸附段（第２次）［平成12年度（2000)］

期　間　平成12年12月12日～ 12月25日

担当者　財団法人石川県埋蔵文化財センター　滝川重徳（主任主事)、土田友信（講師）

北ノ丸［平成12年度（2000)］

期　間　平成12年６月13日～８月25日

担当者　財団法人石川県埋蔵文化財センター　冨田和気夫（課主査)､滝川重徳（主任主事)、湊屋玲美（主事)、土田友信（講師）

いもり坂脇石垣（試掘調査）［平成20年度（2008)］

期　間　平成20年10月21日～ 12月12日

担当者　石川県金沢城調査研究所　冨田和気夫（主幹)、吉田千沙子（嘱託）

玉泉院丸（立会調査）［平成24年度（2012)］

担当者　石川県金沢城調査研究所　宮川勝次（所主査)、坂下博晃（嘱託）

【出土品整理】

平成12、15年度（2000、2003）　財団法人石川県埋蔵文化財センター

４．報告書の作成は、滝川重徳（主幹)、西田郁乃（調査研究専門員)、辻森由美子（嘱託：平成29年度まで)、知田真衣子（嘱託）が担当した。執筆分担は目次に記した。なお、第５章第４節は、株式会社パレオ・ラボによる分析報告である。

５．調査に関する記録・遺物は研究所が保管している。

６．当事業に際して、次の方々から指導・助言並びに協力を賜った。

文化庁文化財第二課　石川県立図書館　石川県立歴史博物館　金沢市立玉川図書館　東京大学総合図書館　公益財団法人前田育徳会　防衛研究所戦史研究センター

石黒信二　市川浩文　金田明大　北浦 勝　北垣聰一郎　北野博司　久保智康　千田嘉博

田中哲雄　堤 徹也　成瀬晃司　新谷洋二　西形達明　橋本澄夫　平井 聖　堀内秀樹　宮里 学

森島康雄　横山隆昭　吉岡康暢　（敬称略）

凡　　例

１．本書の水平基準は海抜高を表し、東京湾平均海面標高（Ｔ．Ｐ）である。
２．方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
３．土層注記の色調に関しては、農林水産省農林水産技術会議事務局等監修「新版標準土色帖」を使用している。
４．石垣のID番号や呼称は、『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』（金沢城調査研究所2016）の記載に拠っている。
５．本報告書中の調査番号IDは次の通りである。

本丸附段（第１次）：199801、本丸附段（第２次）：200007
北ノ丸：200003（御宮、藤右衛門丸）
玉泉院丸（石垣）：200807（いもり坂脇石垣）
玉泉院丸：201204（玉泉院丸北石垣）

６．遺構測量図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」の通りである。
７．遺構断面図中に使用した塗り部分については、次のとおりである。

燻瓦　越前赤瓦　石瓦　石垣

８．遺構図や遺物実測図の縮尺は、各図中に示した。
９．本文中に使用される石垣用語は、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」の通りである。
10．遺物名は次の略号を使用した。

Ｐ：土器・陶磁器・土製品　　Ｔ：瓦　　Ｍ：金属製品※　　Ｓ：石製品（石瓦を含む）

※金属製品とセットになるような革製品についても、Mの略号を使用した

11．遺物図版中の遺物番号はゴシック体が本書報告番号、明朝体が遺物ID（調査ID番号-実測番号）を示す。
12．陶磁器類の胎土表記には「磁器胎土表記」、「陶器胎土表記」に、瓦についての計測方法等は「瓦計測部位凡例」に示した通りである。
13．引用参考文献は、原則的に一括して巻末に掲載した。

平面図線種表

	ケバ種	上端線／下端線
トレンチ		崖ケバ
		実線
近代以後		短・短ケバ
		実線
近世以前		長・短ケバ
		実線

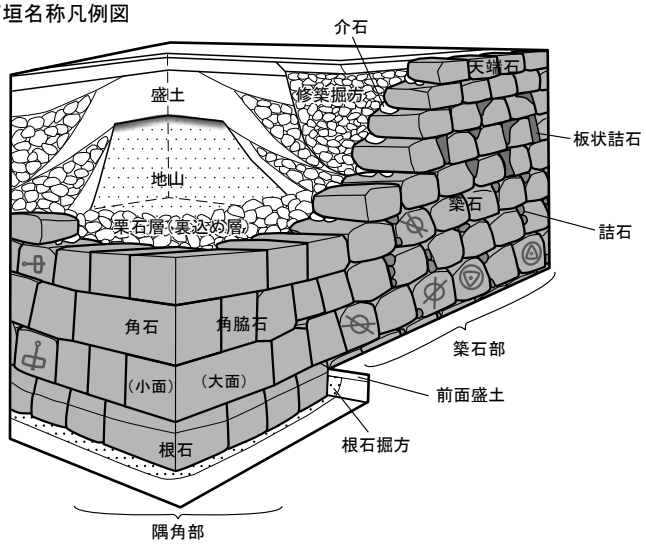
	ケバ種	上端線／下端線
遺構（未完掘）		長・短ケバ
		一点鎖線
遺構（検出のみ）		長・短ケバ（下端線なし）
（壁のみで確認された遺構）		長・短ケバ（下端線なし）

	ケバ種	上端線／下端線
遺構壁の傾斜変換線		長・短ケバ（下端線なし）
遺構以外（土質境）		実線・ケバなし
石（埋没部分）		一点鎖線

石垣用語表

用　語	読　み	解　説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノギ角	しのぎすみ	出角の一つで、鈍角状に組まれる
輪どり	わどり	石垣の壁面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下部の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石（ひらいし）とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振りの石
板状詰石	いたじょうつめいし	石垣面を平滑に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を詰石とする技法
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
栗石	ぐりいし	築石の裏込めなどに用いられる円礫
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため据え置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる
丁張	ちょうはり	石垣普請時に石積の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻き石垣	はちまきいしがき	斜面上部だけに鉢巻状に石垣を築いたもの。斜面裾部だけに築いた石垣を腰巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石材の後ろ側
胴	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅういかこう	切石の石面の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
練積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの接合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を緊結・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落とし積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する２面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
孕み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで張り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



磁器胎土表記

平滑性		光沢		器壁の空洞	
1	極めて平滑	A	強い	a	目立たない
2	平滑	B	弱い	b	目立つ
3	凸凹目立つ				

陶器胎土表記

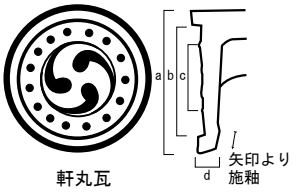
硬さ		平滑性		砂粒		器壁の空洞	
Ⅰ	硬質	1	極めて平滑	A	希少	a	目立たない
Ⅱ	軟質	2	平滑	B	細砂含む	b	目立つ
		3	凸凹目立つ	C	粗砂以上含む		

土師器皿胎土分類

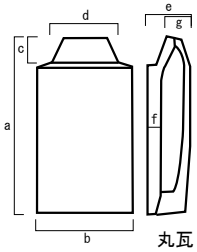
		特　徴
A		中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ
B		砂粒比較的少なく、均質（細分の余地大きい）
C		砂粒ごく少ない、均質
D		細砂多い、均質（粉質）
E	1	礫含み、粗砂・細砂多い（含有量の程度差大きい）
	2	礫無～微、粗砂・細砂少ない （Bよりも粒子大きく、素地が粗い。E1より精良）

［石川県金沢城調査研究所2014c］

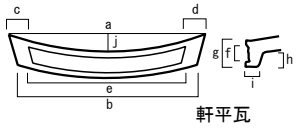
瓦計測部位凡例



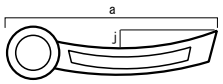
軒丸瓦



丸瓦



軒平瓦

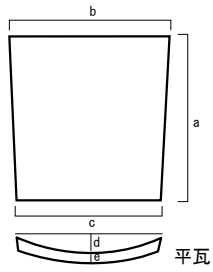


軒桟瓦

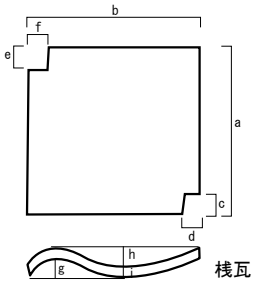
軒丸瓦（軒部）　a 瓦当径　b 文様区径　c 内区径　d 瓦当厚

丸瓦　a 全長　b 体部幅　c 玉縁長　d 玉縁幅　e 体部高　f 体部厚　g 玉縁高

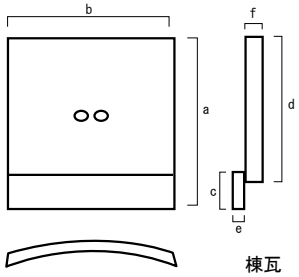
軒平瓦・軒桟瓦（軒部・平部）　a 上弧幅　b 下幅　c 右周縁　d 左周縁　e 文様区幅　f 文様区厚　g 瓦当厚　h 顎高　i 顎下部高　j 弧深



平瓦



桟瓦

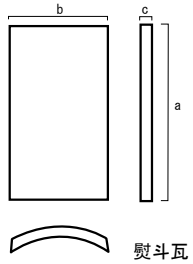


棟瓦

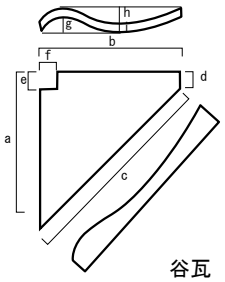
平瓦　a 全長　b 広端幅　c 狭端幅　d 弧深　e 厚

桟瓦　a 全長　b 全幅　c 平部切込長　d 平部切込幅　e 桟部切込長　f 桟部切込幅　g 桟部弧深　h 平部弧深　i 厚

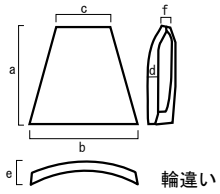
棟瓦　a 全長　b 全幅　c 桟部長　d 体部長　e 桟部厚　f 体部厚　g 高さ



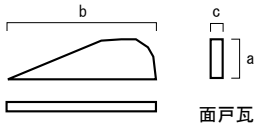
熨斗瓦



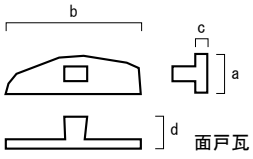
谷瓦



輪違い



面戸瓦



面戸瓦

熨斗瓦　a 全長　b 全幅　c 厚

谷瓦　a 全長　b 全幅　c 谷部長　d 平部長　e 桟部切込長　f 桟部切込幅　g 桟部弧深　h 平部弧深　i 厚

輪違い　a 全長　b 広端幅　c 狭端幅　d 厚　e 高さ　f 高さ

面戸瓦　a 全長　b 全幅　c 厚　d 高さ

金沢城史料叢書35
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書12

金　沢　城　跡

―本丸附段・北ノ丸―

2019

石川県金沢城調査研究所

目　次

第１章　経緯と経過 ……（滝川・西田）…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 3
第２章　歴史的環境 …… 7
　第１節　金沢城跡と周辺の歴史的環境 ……（知田）…… 7
　第２節　金沢城の沿革 …… 12
　第３節　本丸附段・北ノ丸の沿革 ……（滝川・知田）…… 14
　第４節　既往の調査成果 ……（知田）…… 23
第３章　本丸附段 …… 27
　第１節　調査の概要 ……（滝川）…… 27
　第２節　遺構 …… 27
　第３節　遺物 ……（辻森）…… 54
　第４節　小結 ……（滝川）…… 145
第４章　御宮 …… 169
　第１節　調査の概要 ……（西田）…… 169
　第２節　遺構 …… 173
　第３節　遺物 ……（辻森）…… 209
　第４節　小結 ……（西田）…… 304
第５章　藤右衛門丸 …… 321
　第１節　調査の概要 ……（西田）…… 321
　第２節　遺構 …… 321
　第３節　遺物 ……（辻森）…… 335
　第４節　出土人骨の分析 ……（梶ヶ山・小林）…… 342
　第５節　小結 ……（西田）…… 345
第６章　いもり坂脇石垣 ……（西田）…… 352
　第１節　いもり坂脇石垣の試掘調査 …… 352
　第２節　玉泉院丸北石垣の立会調査 …… 360
引用・参考文献 …… 366
報告書抄録 …… 371

図版目次……頁

第１図　調査区位置図　本丸附段…… 5
第２図　調査区位置図　北ノ丸…… 6
第３図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡(S=1/25,000)…… 8
第４図　近世後期の金沢城全体図……11
第５図　近世初期の金沢城……12
第６図　本丸附段（近世前期）……16
第７図　本丸附段（近世前期・後期・近代）……17
第８図　北ノ丸（近世前期）……20
第９図　北ノ丸（近世後期）……21
第10図　北ノ丸（近代）……22
第11図　金沢城跡発掘調査位置図（～平成30年度）……24
第12図　本丸附段　調査区位置図……28
第13図　本丸附段　調査区・絵図照合図……29
第14図　本丸附段　調査前状況平面略図……36
第15図　本丸附段　調査区全体図……37
第16図　本丸附段　遺構等位置図……38
第17図　本丸附段　調査区南部平面図……39
第18図　本丸附段　調査区中央部平面図……40
第19図　本丸附段　調査区北部平面図……41
第20図　階段（雁木坂）南東部（上部）平面図……42
第21図　階段（雁木坂）北東部（下部）平場付近平面図・断面図…43
第22図　階段（雁木坂）南北軸断面図……44
第23図　階段（雁木坂）各段平面図・断面図……45
第24図　石垣立面図……46
第25図　石垣1412W（SW03）・1415E(SW06）基礎平面図・断面図……47
第26図　石垣1415N（SW08）東部基礎・SK05平面図・断面図 ……48
第27図　石垣1415N（SW08)西部基礎平面図・断面図……49
第28図　門柱基礎（根固）・排水溝平面図・断面図 ……50
第29図　下層遺構（SK04）平面図・断面図……51
第30図　下層遺構（SX01）平面図・断面図……52
第31図　調査区南西遺構平面図・断面図……53
第32図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器１……64
第33図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器２……65
第34図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器３……66
第35図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器４……67
第36図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器５……68
第37図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器６……69
第38図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器７……70
第39図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器８……71
第40図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器９……72
第41図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器10……73
第42図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器11……74
第43図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器12……75
第44図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器13……76
第45図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器14……77
第46図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器15……78
第47図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器16……79
第48図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器17……80
第49図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器18……81
第50図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器19……82
第51図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器20……83
第52図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器21……84
第53図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器22……85
第54図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器23……86
第55図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器24……87
第56図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器25……88
第57図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器26……89
第58図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器27……90
第59図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器28……91
第60図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器29……92
第61図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器30……93
第62図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器31……94
第63図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器32……95
第64図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器33……96
第65図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器34……97
第66図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器35……98
第67図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器36……99
第68図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器37…… 100
第69図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器38…… 101
第70図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器39…… 102
第71図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器40…… 103
第72図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器41…… 104
第73図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器42…… 105
第74図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器43…… 106
第75図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器44…… 107
第76図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器45…… 108
第77図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器46…… 109
第78図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器47…… 110
第79図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器48…… 111
第80図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器49…… 112
第81図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器50…… 113
第82図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器51…… 114
第83図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器52…… 115
第84図　瓦　胎土分類…… 116
第85図　軒丸瓦　瓦当文様分類…… 117
第86図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類１…… 118
第87図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類２…… 119
第88図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類３…… 120
第89図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類４…… 121
第90図　本丸附段出土遺物実測図　瓦１…… 122
第91図　本丸附段出土遺物実測図　瓦２…… 123
第92図　本丸附段出土遺物実測図　瓦３…… 124
第93図　本丸附段出土遺物実測図　瓦４…… 125
第94図　本丸附段出土遺物実測図　瓦５…… 126
第95図　本丸附段出土遺物実測図　瓦６…… 127
第96図　本丸附段出土遺物実測図　石製品…… 128
第97図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品１…… 129
第98図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品２…… 130
第99図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品３…… 131
第100図　階段（雁木坂）とその周辺施設 …… 146
第101図　本丸附段　初期主要遺構位置図 …… 148
第102図　御宮　調査区位置図・絵図照合図 …… 170
第103図　御宮東　調査区全体図 …… 171
第104図　御宮西　調査区全体図 …… 172
第105図　御宮東　調査区平面図　１ …… 175
第106図　御宮東　調査区平面図　２ …… 176
第107図　御宮東　調査区平面図　３ …… 177
第108図　御宮東　調査区平面図　４ …… 178
第109図　御宮東　調査区平面図　５ …… 179
第110図　御宮西　調査区平面図　１ …… 180
第111図　御宮西　調査区平面図　２ …… 181
第112図　御宮西　調査区平面図　３ …… 182
第113図　御宮西　調査区平面図　４ …… 183

第114図　御宮西　調査区平面図　５ …… 184
第115図　御宮西　調査区平面図　６ …… 185
第116図　SE3・4区　断面図 …… 186
第117図　SW2区　断面図…… 187
第118図　SW3区　断面図…… 188
第119図　SW4区　石垣5113E・石垣5100W平面図…… 191
第120図　SW4区　石垣5100W立面図 …… 192
第121図　SW4区　石垣5113E立面図・アゼ断面図 …… 193
第122図　SW4区　石垣5113Eアゼ断面図・石材観察図 …… 194
第123図　SW5区　南壁土層断面図…… 195
第124図　SW6区　西壁（南北面）断面図…… 196
第125図　NS1区　平面図…… 199
第126図　NS1区　断面図…… 200
第127図　NS1区　石垣5120Ｎ平面図・立面図・断面図…… 201
第128図　NS2区　平面図…… 202
第129図　NS2区　調査区西壁断面図…… 203
第130図　NS2区　調査区東壁断面図…… 204
第131図　NS2区　石瓦出土状況…… 205
第132図　NS2区　調査区北端部断面図…… 206
第133図　NS2区　石垣5120N平面図・立面図 …… 207
第134図　NS2区　石段平面図・立面図…… 208
第135図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器１ …… 219
第136図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器２ …… 220
第137図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器３ …… 221
第138図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器４ …… 222
第139図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器５ …… 223
第140図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器６ …… 224
第141図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器７ …… 225
第142図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器８ …… 226
第143図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器９ …… 227
第144図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器10 …… 228
第145図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器11 …… 229
第146図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器12 …… 230
第147図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器13 …… 231
第148図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器14 …… 232
第149図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器15 …… 233
第150図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器16 …… 234
第151図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器17 …… 235
第152図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器18 …… 236
第153図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器19 …… 237
第154図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器20 …… 238
第155図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器21 …… 239
第156図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器22 …… 240
第157図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器23 …… 241
第158図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器24 …… 242
第159図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器25 …… 243
第160図　御宮出土遺物実測図　瓦１ …… 244
第161図　御宮出土遺物実測図　瓦２ …… 245
第162図　御宮出土遺物実測図　瓦３ …… 246
第163図　御宮出土遺物実測図　瓦４ …… 247
第164図　御宮出土遺物実測図　瓦５ …… 248
第165図　御宮出土遺物実測図　瓦６ …… 249
第166図　御宮出土遺物実測図　瓦７ …… 250
第167図　御宮出土遺物実測図　瓦８ …… 251
第168図　御宮出土遺物実測図　瓦９ …… 252
第169図　御宮出土遺物実測図　瓦10 …… 253
第170図　御宮出土遺物実測図　瓦11 …… 254
第171図　御宮出土遺物実測図　瓦12 …… 255
第172図　御宮出土遺物実測図　瓦13 …… 256
第173図　御宮出土遺物実測図　瓦14 …… 257
第174図　御宮出土遺物実測図　瓦15 …… 258
第175図　御宮出土遺物実測図　石製品１ …… 259
第176図　御宮出土遺物実測図　石製品２ …… 260
第177図　御宮出土遺物実測図　石製品３ …… 261
第178図　御宮出土遺物実測図　石製品４ …… 262
第179図　御宮出土遺物実測図　石製品５ …… 263
第180図　御宮出土遺物実測図　石製品６ …… 264
第181図　御宮出土遺物実測図　石製品７ …… 265
第182図　御宮出土遺物実測図　石製品８ …… 266
第183図　御宮出土遺物実測図　石製品９ …… 267
第184図　御宮出土遺物実測図　石製品10 …… 268
第185図　御宮出土遺物実測図　石製品11 …… 269
第186図　御宮出土遺物実測図　石製品12 …… 270
第187図　御宮出土遺物実測図　石製品13 …… 271
第188図　御宮出土遺物実測図　石製品14 …… 272
第189図　御宮出土遺物実測図　石製品15 …… 273
第190図　御宮出土遺物実測図　石製品16 …… 274
第191図　御宮出土遺物実測図　石製品17 …… 275
第192図　御宮出土遺物実測図　石製品18 …… 276
第193図　御宮出土遺物実測図　石製品19 …… 277
第194図　御宮出土遺物実測図　石製品20 …… 278
第195図　御宮出土遺物実測図　石製品21 …… 279
第196図　御宮出土遺物実測図　石製品22 …… 280
第197図　御宮出土遺物実測図　石製品23 …… 281
第198図　御宮出土遺物実測図　石製品24 …… 282
第199図　御宮出土遺物実測図　金属製品１ …… 283
第200図　御宮出土遺物実測図　金属製品２ …… 284
第201図　御宮出土遺物実測図　金属製品３ …… 285
第202図　御宮出土遺物実測図　金属製品４ …… 286
第203図　御宮出土遺物実測図　金属製品５ …… 287
第204図　御宮出土遺物実測図　金属製品６ …… 288
第205図　御宮出土遺物実測図　金属製品７ …… 289
第206図　御宮出土遺物実測図　金属製品８ …… 290
第207図　御宮　調査区内の建物変遷 …… 306
第208図　鳥越城・舟岡山城・御宮石垣（5113W） …… 307
第209図　藤右衛門丸　調査区位置図・絵図照合図 …… 322
第210図　藤右衛門丸　調査区全体図 …… 324
第211図　藤右衛門丸　調査区平面図　１ …… 325
第212図　藤右衛門丸　調査区平面図　２ …… 326
第213図　藤右衛門丸　調査区平面図　３ …… 327
第214図　藤右衛門丸　調査区平面図　４ …… 328
第215図　藤右衛門丸　調査区平面図　５ …… 329
第216図　N1・3区　平面図・断面図…… 330
第217図　N3区　平面図・断面図 …… 331
第218図　N4区　サブトレンチ１平面図・断面図 …… 332
第219図　N4区　土層注記 …… 333
第220図　N6区　断面図 …… 334
第221図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器１ …… 337
第222図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器２ …… 338
第223図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器３ …… 339
第224図　藤右衛門丸遺物実測図　瓦１ …… 340
第225図　藤右衛門丸地点出土人骨 …… 344
第226図　火葬関連遺構 …… 346
第227図　調査区位置図 …… 354

第228図　調査区現況・絵図照合図 …… 355
第229図　いもり坂脇石垣現況 …… 356
第230図　石垣立面図､断面図、調査区位置図…… 357
第231図　第１地点　平面図、断面図 …… 358
第232図　第２地点　平面図、断面図 …… 359
第233図　玉泉院丸北石垣トレンチ位置図、地形断面図 …… 360
第234図　玉泉院丸北石垣トレンチ断面図 …… 361
第235図　玉泉院丸北5-3地点…… 362

表目次目次……頁

第１表　周辺の近世遺跡地名表…… 9
第２表　金沢城の沿革……13
第３表　本丸附段の沿革……15
第４表　北ノ丸の沿革……19
第５表　金沢城跡発掘調査一覧（１）……25
第６表　金沢城跡発掘調査一覧（２）……26
第７表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器１…… 132
第８表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器２…… 133
第９表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器３…… 134
第10表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器４…… 135
第11表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器５…… 136
第12表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器６…… 137
第13表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器７…… 138
第14表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器８…… 139
第15表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器９…… 140
第16表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦１…… 141
第17表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦２…… 142
第18表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦３・石製品…… 143
第19表　出土遺物観察表　本丸附段　金属製品…… 144
第20表　主な瓦の取上げ番号と器種…… 205
第21表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器１…… 291
第22表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器２…… 292
第23表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器３…… 293
第24表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器４…… 294
第25表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器５…… 295
第26表　出土遺物観察表　御宮　瓦１…… 296
第27表　出土遺物観察表　御宮　瓦２…… 297
第28表　出土遺物観察表　御宮　瓦３…… 298
第29表　出土遺物観察表　御宮　石製品１…… 299
第30表　出土遺物観察表　御宮　石製品２…… 300
第31表　出土遺物観察表　御宮　石製品３…… 301
第32表　出土遺物観察表　御宮　金属製品１…… 302
第33表　出土遺物観察表　御宮　金属製品２…… 303
第34表　出土遺物観察表　藤右衛門丸　陶磁器・土器・瓦…… 341
第35表　藤右衛門丸出土人骨一覧…… 343

写真図版目次……頁

写真図版１　本丸附段遺構写真１…… 149
写真図版２　本丸附段遺構写真２…… 150
写真図版３　本丸附段遺構写真３…… 151
写真図版４　本丸附段遺構写真４…… 152
写真図版５　本丸附段遺構写真５…… 153
写真図版６　本丸附段遺構写真６…… 154
写真図版７　本丸附段遺構写真７…… 155
写真図版８　本丸附段遺構写真８…… 156
写真図版９　本丸附段遺構写真９…… 157
写真図版10　本丸附段遺構写真10…… 158
写真図版11　本丸附段遺構写真11…… 159
写真図版12　本丸附段遺構写真12…… 160
写真図版13　本丸附段遺構写真13…… 161
写真図版14　本丸附段遺構写真14…… 162
写真図版15　本丸附段遺構写真15…… 163
写真図版16　本丸附段遺構写真16…… 164
写真図版17　本丸附段遺構写真17…… 165
写真図版18　本丸附段遺構写真18…… 166
写真図版19　本丸附段遺構写真19…… 167
写真図版20　本丸附段遺構写真20…… 168
写真図版21　御宮遺構写真１…… 308
写真図版22　御宮遺構写真２…… 309
写真図版23　御宮遺構写真３…… 310
写真図版24　御宮遺構写真４…… 311
写真図版25　御宮遺構写真５…… 312
写真図版26　御宮遺構写真６…… 313
写真図版27　御宮遺構写真７…… 314
写真図版28　御宮遺構写真８…… 315
写真図版29　御宮遺構写真９…… 316
写真図版30　御宮遺構写真10…… 317
写真図版31　御宮遺構写真11…… 318
写真図版32　御宮遺構写真12…… 319
写真図版33　御宮石瓦写真…… 320
写真図版34　藤右衛門丸遺構写真１…… 347
写真図版35　藤右衛門丸遺構写真２…… 348
写真図版36　藤右衛門丸遺構写真３…… 349
写真図版37　藤右衛門丸遺構写真４…… 350
写真図版38　藤右衛門丸遺構写真５…… 351
写真図版39　いもり坂石垣遺構写真１…… 363
写真図版40　いもり坂石垣遺構写真２…… 364
写真図版41　玉泉院丸北5-3地点 …… 365

第１章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１．金沢城公園の開設に至る経緯

金沢城は、16世紀半ばに成立した金沢御坊（金沢御堂）を前身とし、天正８年（1580）以降、織田政権下の城郭となった。天正11年（1583）には前田利家が入城し、これより前田家歴代当主14代が約300年間にわたり城主となり、最大の大名の居城として機能した。

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成５年（1993）３月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成３年（1991）８月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成５年３月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成７年（1995）３月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成８年（1996）１月に28.5haを都市公園に利用する都市計画を決定し、同年３月に国から大学跡地21.77haを取得した。

２．金沢城公園整備（第一期整備から第三期整備）

平成８年度に始まった第一期金沢城公園整備は、平成16年度（2004）までを公園としての基盤整備とする10カ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓、内堀等）を進めることとした。また、保存目的として、石垣の記録化（石垣現況測量）や動態観測にも着手した。

公園の開設は、平成９年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）９月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。

その結果、平成９年度(1997)に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成10年(1998)には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成11年(1999)には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、新丸広場（湿性植物園）、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所、二ノ丸園路等の整備に係る発掘調査が行われた。

公園整備に係る調査は以後も引き継がれ、平成12年度(2000)には北ノ丸(御宮・藤右衛門丸)、尾坂門、三ノ丸北、鶴ノ丸、いもり堀、平成13年度(2001)には風呂屋口門等、橋爪門、尾坂門で、園路整備に伴う遺構確認調査が実施されている。

本書で報告する対象は、このうち平成11年度に実施した本丸附段階段、12年度に実施した北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）の各調査地点である。

石川県は、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成16年(2004) ２月に「金沢城復元基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成26年（2014）までとする第二期整備計画が策定され、復元整備の拡充をはかった。具体的には、①三御門（河北門・橋爪門・石川門）の整備、②いもり堀の段階的整備、③玉泉院丸庭園整備である。また、保存目的として玉泉院丸南西石垣の保存修理も行っている。
平成26年をもって第二期整備が完了となることから、平成27年（2015）３月に「金沢城公園第三期整備計画策定懇話会」を設置、同年６月には来園者へのアンケート調査などを実施し、12月には第三期整備を策定した。①鼠多門の復元整備、②鶴ノ丸休憩所一帯の再整備、③石垣の保全を掲げ、石垣の計画的な「金沢城の石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書」を作成、基本計画の策定やそれに基づく保全対策の実施を目指し、現在も事業を進めている。

３．金沢城の調査研究

公園整備を進める一方で、石川県は、平成13年（2001）７月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。（平成19年（2007）石川県金沢城調査研究所に改組）

平成14年度（2002）からは、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）などを対象に金沢城の総合的な調査研究に着手した。埋蔵文化財では、金沢城跡の変遷と構造を探る目的で平成14年度（2002）より国庫補助を得て本丸・本丸附段・東ノ丸附段等の確認調査を継続している。また、平成19年度（2007）から23年度（2011）には、石川門の修理に伴う遺構確認調査も実施した。一方、金沢城公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査も主幹部局である土木部の依頼により実施している。第二期整備事業では平成10年（1998）から続くいもり堀の調査を始め､平成18年（2006）には河北門（～H20)、平成20年（2008）に玉泉院丸（～H25)、平成22年（2010）に橋爪門（～H24）を、第三期整備では、鼠多門の整備に係る遺構確認調査を実施している。

４．国史跡指定

こうしたなかで、整備着手から12年後の平成20年（2008）１月11日に、金沢城跡の主要部分275,155.14㎡について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成20年５月16日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成20年６月17日付け文部科学省告示第100号で国の史跡に指定された。また、平成20年12月24日には石川県が管理団体に指定された。翌21年から『史跡金沢城跡保存管理計画書』に着手し、23年４月に策定された。

第２節　調査の経過

１．本丸附段調査区　（第１図）

本丸附段北側の階段については、近世の絵図によると大規模なものであったが、明治末期に推定される改変を受け、以後縮小された状態で存続していた。石川県では金沢城跡の整備を進めるにあたり、この階段を近世段階の景観に復することを図り、「金沢城址公園整備実施計画図」に整備案を反映させ、平成９年11月27日に開催された「第１回　金沢城址公園整備懇話会」において、平成13年度に予定されている「第18回全国都市緑化いしかわフェア」までに整備を行う区域の一部として報告した。

当該年度には文化財課と公園緑地課との協議が進み、平成10年３月30日付文書で公園緑地課から文化財課へ本丸附段調査区をはじめとする金沢城跡の発掘調査依頼があった。翌平成10年度には石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、４月１日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第１項に基づく発掘調査届出書は４月１日付け及び７月１日付けで提出された。この年度の調査区は本丸附段（今回報告、約500㎡）・三ノ丸第１次・いもり堀第１次・二ノ丸五十間長屋の４地点である。

本丸附段調査区に着手したのは５月６日で、最初に平板測量を実施し、続いて近代改変に係る石材の撤去を進めた。また、調査範囲南端にあった手水鉢とみられる石造物を調査区外へ移動した[1)]。５月20日から人力による掘削に着手し、トレンチ状に設定した部分において近世地盤を探り、順次検出面を広げた。５月中は主に階段上方（調査区南部）の掘り下げを行い、６月以降、下方（中部～北部）の調査にも取り掛かり、調査区東側の近代以後堆積土を対象とした重機掘削を行いつつ、近世階段跡の検出を進め、７月15日・８月６日の両日には写真測量を行った。対象とした階段は全般的に改変が著しかったこともあり、調査のとくに初動において、近代と近世の遺構・土層の見極めが必ずしも十分ではなく、試行する日々が続いた。ただし規格的な遺構であることも幸いして、部分から全体を推量できる場合もあり、最終的には幅約19ｍに及ぶ当初階段の形状を把握し、併せてこれに先行する初期金沢城の遺構・遺物を一部確認することができた。現地作業の完了日は８月12日である。

なお、平成10年度の調査では、調査区の中央付近にあった樹木の処置が保留されており、その周辺を残して発掘したが、平成12年度になって樹木は伐採されることとなった。このため同年度に切株周辺約20㎡を対象とした調査を行った（第２次調査）。

平成12年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、４月３日付けで業務委託契約、13年３月５日付けで変更契約が締結された。文化財保護法第57条第１項に基づく発掘調査届出書は４月７日付けで提出された。調査区は、北ノ丸第１次（御宮・藤右衛門丸地点）、三ノ丸第４次（河北門・河北坂地点）、いもり堀第３次（土橋地点・鯉喉櫓地点）、新丸第３次（尾坂門地点）、本丸附段第２次の５地点である。本丸附段第２次調査は上記の経緯のとおり年度当初の計画には挙がっていなかったが、途中で追加されることとなった。調査着手日は12月12日、現地作業完了日は12月25日である。

平成12年７月１日に開催された「第８回　金沢城址の石垣､櫓に関する修築･復元専門委員会」では、「本丸附段階段の整備について」と題し、埋蔵文化財調査の結果についても報告した。これに基づき、平成12年度に整備が実施されている。

1)　この石造物は「文禄年中以来等之旧記」（金沢市立玉川図書館後藤文庫、[日本海文化研究所1976][石川県金沢城調査研究所2008c]所収）、「御城高石垣之事等（御城中御門々名目并御長屋間数等之事）」（後藤文庫、[日本海文化研究所1976]所収）において本丸にあったとされる手水鉢の可能性があるが、詳細な原位置は定かではない。金沢南部に産出する坪野石（溶結凝灰岩）製とみられる。

２．北ノ丸調査区　（第２図）

北ノ丸の発掘調査については、御宮広場の整備に伴い側溝等の敷設が計画されたことから、その工事影響範囲内での遺構確認調査を実施したものである。従って、御宮、藤右衛門丸の両調査区とも、郭の縁辺部を取り巻くような調査予定地となった。

調査に係る契約事務等については、前項の本丸附段（平成12年度）を参照いただきたい。

北ノ丸の発掘調査は６月13日より、まず藤右衛門丸の表土除去から着手した。６月14日より人力による遺構検出、遺構掘削を開始し、７月５日には、空中写真測量を行った。７月４日から７日にかけて遺構の完掘写真撮影を行い、調査を終えた。

藤右衛門丸と一部並行して、７月７日から御宮の重機による表土除去を開始した。7月10日からは、人力による遺構検出を行い、順次遺構掘削作業も進めていった。７月12日には、NS2区の斜面において石垣や石段が検出された。７月27日には先行して調査が完了したSW2・3区、SE3・4・5・6区を対象としてリフトセンサーによる第１回の空中写真測量を行った。

NS2区で検出した石垣については、２段分の解体が必要となったため、一段毎に測量を行いながら解体を進めていった。８月９日には、１段目の石垣についてリフトセンサーによる空中写真測量と、解体を行った。石垣前面の斜面についても、石瓦が大量に出土したことから、出土状況について測量後、瓦の取り上げや現地の断面精査等を行った。

８月22日には第３回の空中写真測量と、現地に残っていた遺物の取り上げや、遺構の完掘写真、断面図作成等を行った。

現地作業は８月25日に完了した。なお、調査がほぼ終盤を迎えた８月22日の北陸中日新聞において藤右衛門丸から出土した骨片について、翌23日には同じく北陸中日新聞で御宮の棟石転用の石段について報道された。

３．予備調査および立会調査

本丸附段と玉泉院丸の間にある斜面上に位置する、いもり坂脇石垣（ID1500W）については、変形が著しく、また来園者が頻繁に往来するいもり坂園路の直近に位置することから、これまでも観察が続けられてきた石垣である。今後、修理も含めた何らかの対策を検討する必要があると判断され、その基礎資料を得るため、予備調査として現状の詳細観察と試掘調査を実施した。調査は平成20年度10月21日から開始し12月12日に完了した。

玉泉院丸色紙短冊積石垣を中心とする雛段石垣の段上には二ノ丸側からの崩落土が厚く堆積しており、玉泉院丸庭園の整備の一環として撤去作業を実施した。周辺では玉泉院丸庭園の遺構確認調査として色紙短冊積石垣の前面で調査（第５地点）が行われていたことから、その担当者が併せて立会を行った。（庭園調査については、金沢城調査研究所2018dを参照）

４．出土品整理の経過

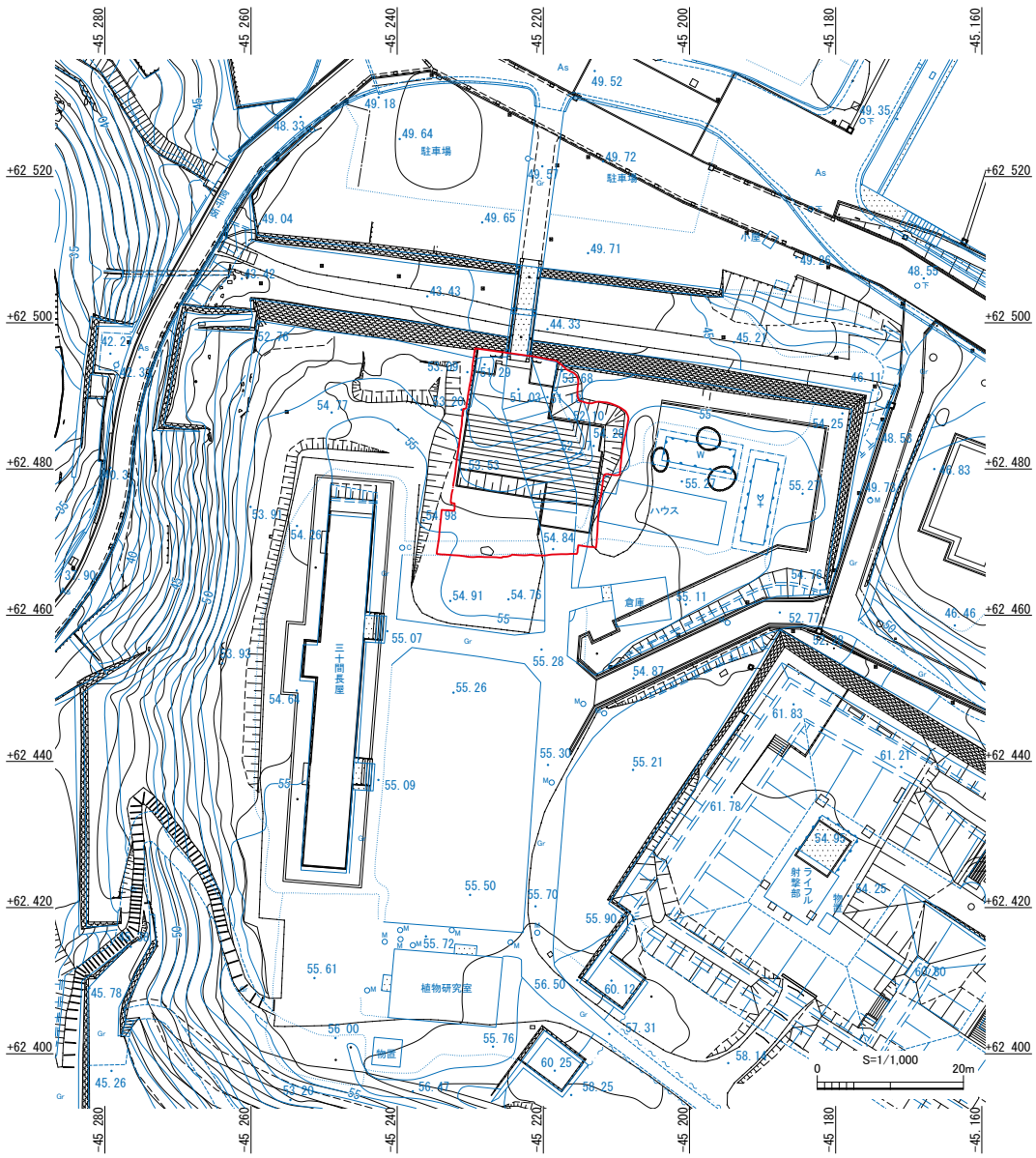
大部分については石川県教育委員会から委託を受けて（財）石川県埋蔵文化財センターが実施し、一部金沢城調査研究所が補足した。前者の委託事業について、今回の報告対象調査区に係る部分を抄出する。

［平成12年度（2000)］

本丸附段階段調査出土の陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。

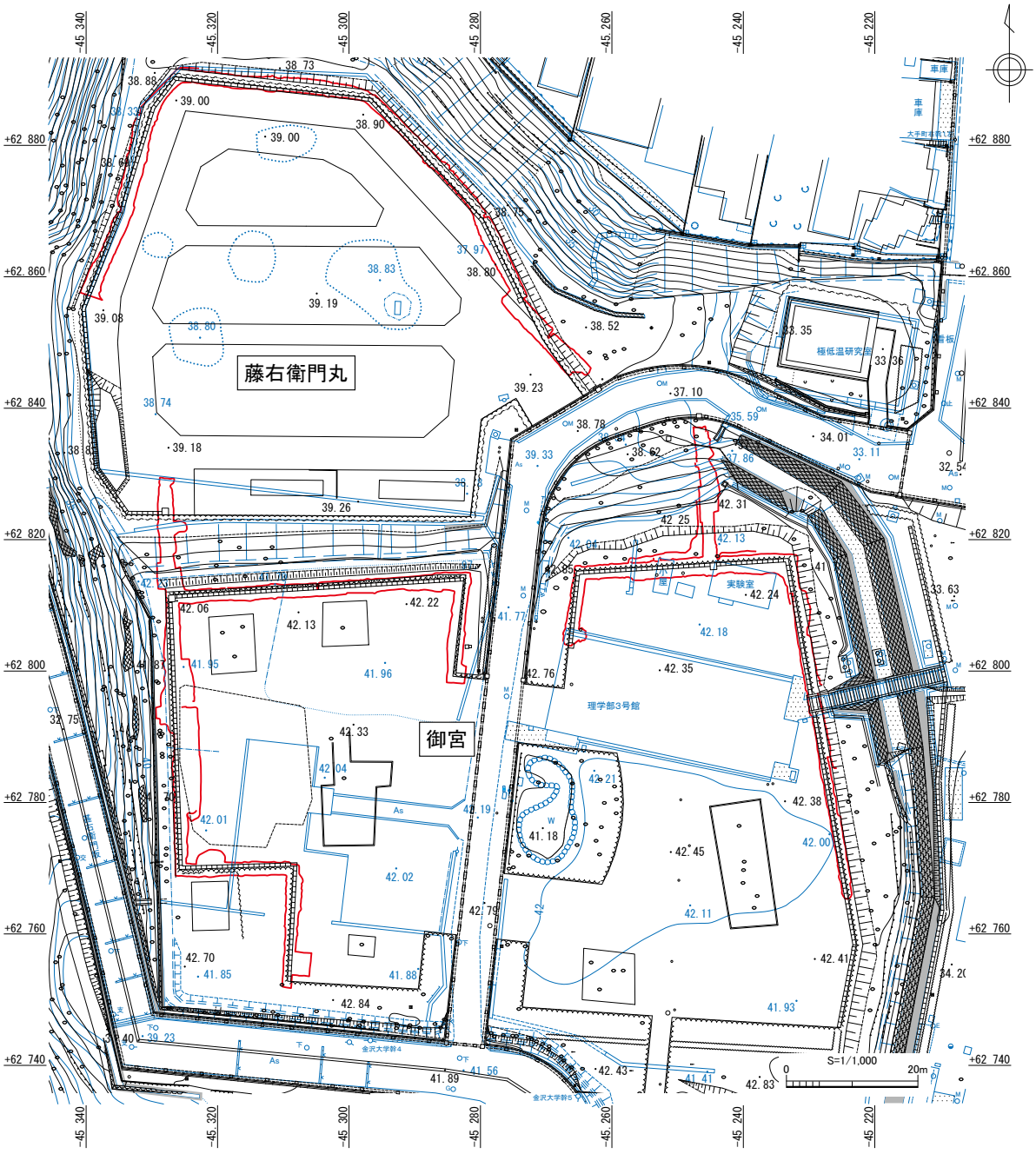
［平成15年度（2003)］

北ノ丸調査出土の陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。



黒:現況図　青:整備前(調査時)　赤:調査区

第1図　調査区位置図　本丸附段



黒:現況図　青:整備前(調査時)　赤:調査区

第2図　調査区位置図　北ノ丸

第２章　歴史的環境

第１節　金沢城跡と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく[藤1999]、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

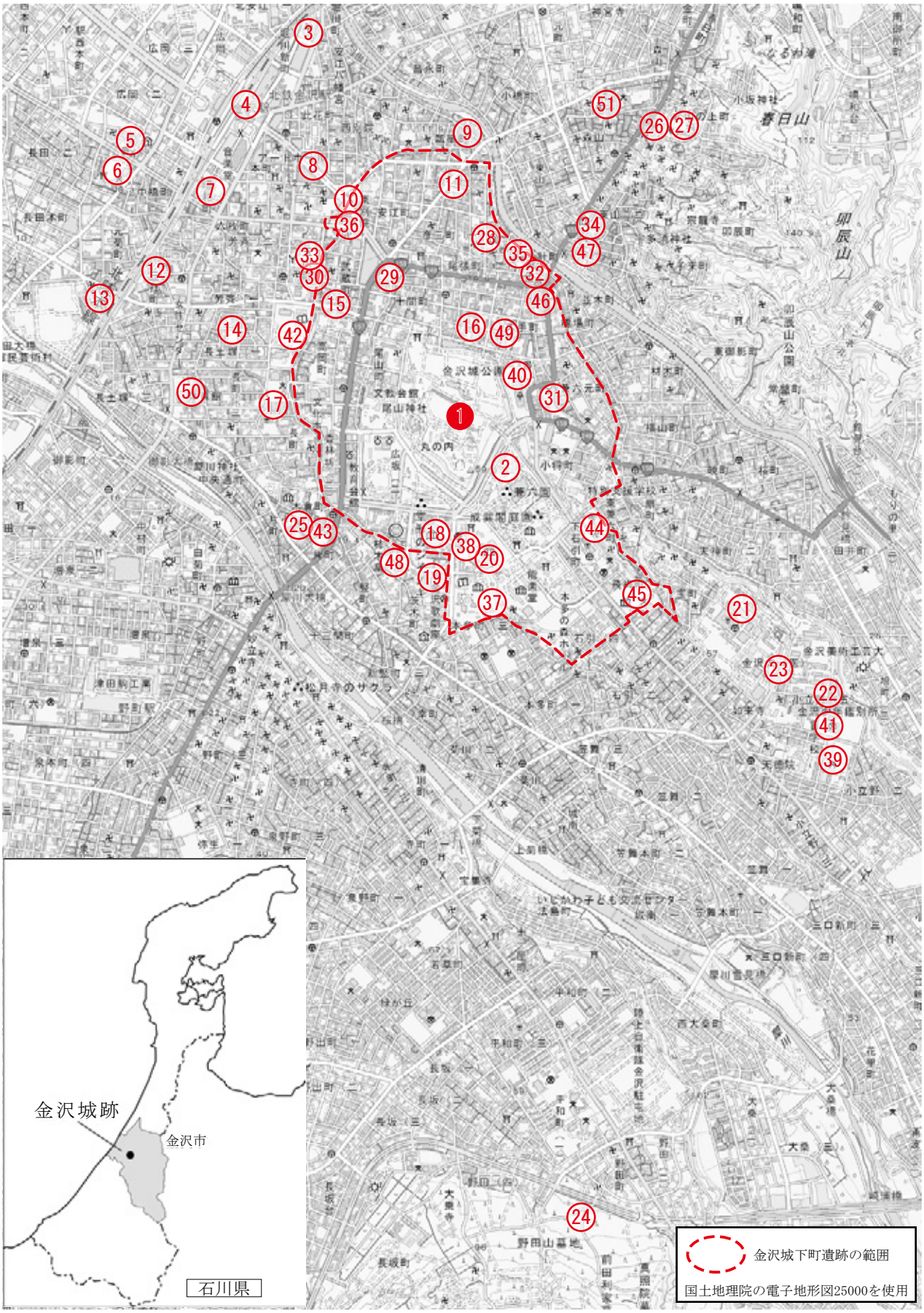
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点[石川県教育委員会・(財）石川県埋蔵文化財センター 2002e]、広坂１丁目遺跡[金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a・2005c・2006a・2007a・2009a]・丸の内７番地点[石川県教育委員会・(財）石川県埋蔵文化財センター 2014a・2015a]の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c］や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年４月１日には、第３図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内７番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内７番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂１丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点[石川県教育委員会・(財）石川県埋蔵文化財センター 2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a]で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡[金沢市埋蔵文化財センター 1999]や彦三町一丁目地点[金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b]では中期の遺構が、広坂１丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成９年度の調査において８～９世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で７世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）［石川県教育委員会・(財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・(公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c]でも７世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂１丁目遺跡では７世紀初め頃から



第3図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡（S=1/25,000）

第１表　周辺の近世遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	（別掲）	城郭	（別掲）	（別掲）
2	兼六園	（別掲）	庭園	（別掲）	（別掲）
3	木ノ新保遺跡（久昌寺遺跡）	H8（1996）・H9（1997）	寺院（墓地）	近世墓292基	増山1997、金沢市埋蔵文化財センター 2004b
4	木ノ新保遺跡	H5（1993） H6（1994）・H7（1995）	寺院？（墓地）→足軽組地→ 下級武家地、町人地、百姓地	近世墓、水利施設（管井戸・竹樋）、 溝（堰・しがらみ）、建物跡（土蔵基礎、木柱）	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b 金沢市埋蔵文化財センター 2005b
5	醒ヶ井遺跡	H7（1995）～H10（1998）	百姓地→下級武家地	前田氏（直之系）下屋敷 水路、水利施設（竹樋・溜升）	金沢市埋蔵文化財センター 2001c 谷口・増山2004
6	長田町遺跡	H6（1994）	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 1998
7	昭和町遺跡	H5（1993）～H7（1995）	町人地・下級武家地	延宝５年（1677）火災資料出土、近世鞍月用水	金沢市埋蔵文化財センター 2001b・2003b・2004c
8	本町一丁目遺跡	H2（1990）・H6（1994）・ H9（1997）・H15（2003）	町人地	廃棄土坑、墨書木製品多数、焼成遺構、 鍛冶関連遺物（輸羽口、椀型鉄滓）	金沢市教育委員会1995・1997b 金沢市埋蔵文化財センター 2003c・2006b
9	甕窯町遺跡	S61（1986）	上級武家地	前田氏（主膳系）上屋敷、整地層から遺物多数出土	金沢市教育委員会1991
10	安江町遺跡	H3（1991）～H5（1993）	町人地・中級武家地	板塀跡（布堀土坑）、墨書木製品多数、 「乾山」銘向付出土	金沢市教育委員会1997a
11	金沢城下町遺跡（彦三町地点）	H11（1999）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 2002
12	三社町遺跡	H3（1991）・H9（1997）	百姓地→町人地	道路・側溝、肥溜め群、操人形かしら	（財）石川県埋蔵文化財センター 2001b・2007
13	元菊町遺跡	S62（1987）・H1（1989）	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター 1990 （公財）石川県埋蔵文化財センター 2014d
14	穴水町遺跡	H8（1996）	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター 1998
15	金沢城下町遺跡（高岡町地点）	H8（1996）・H10（1998） ～H11（1999）・H9（1997）	上級町人地、水溜	礎石建物、桶棺墓、廃棄土坑、瓦溜り （鬼瓦を桟瓦で囲む）、石灯篭基壇、椀形鉄滓	金沢市埋蔵文化財センター 2001a・2003a （財）石川県埋蔵文化財センター 2002d
16	金沢城下町遺跡 （前田氏（長種系）屋敷跡地点）	H8（1996）・H27（2015）	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e 金沢市埋蔵文化財センター 2016a
17	長町遺跡	H8（1996）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 1998
18	広坂1丁目遺跡	H8（1996）～H12（2000） H14（2002）・H17（2005）	中～上級武家地	寛永の大火火災資料、大型土坑 （廃棄土坑、地下室、池等）、楽焼窯道具、 惣構跡、紀年銘木製品等の基準資料検出	金沢市埋蔵文化財センター 2004a・2005c・2006a・2007a・2009a
19	下本多町遺跡	H4（1992）	下級武家地→上級武家地	宝暦の大火による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター 1999
20	金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）	S55（1980）・H21（2009）・ H22（2010）・H26（2014）・ H27（2015）・H28（2016）・ H29（2017）	上級武家地、武家地	溝、階段（地下室？） 本多家上屋敷、塀基礎石積、門跡、石垣、道跡	石川県立埋蔵文化財センター 1992 金沢市埋蔵文化財センター 2012b・2015a・2016a・ 2017 （公財）石川県埋蔵文化財センター 2016・2019
21	金沢大学宝町遺跡 （医学部附属病院地点）他16地点	H9（1997）～H14（2002） H23（2011）	下～中級武家地等	地下室多数	金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000～2003・ 2017
22	金沢大学宝町遺跡 （医学部保健学科地区）	H10（1998）・H11（1999） H13（2001）	下～中級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000～2003・ 2017
23	経王寺遺跡	H9（1997）・H10（1998）	寺院（墓地）・中級武家地	近世初期の灰塚、池状遺構、塀跡	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002c
24	野田山墓地	H12（2000）～H14（2002） H16（2004）～H19（2007） H20（2008）～H24（2012）	墓地	藩主家の墓所を中核とした近世墓地	金沢市埋蔵文化財センター 2003d・2008a・2012a・2012e・2013c
25	片町二丁目遺跡	H15（2003）・H23（2011）	武家地		金沢市埋蔵文化財センター 2005d
26	妙国寺門前遺跡	H15（2003）	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター 2006c
27	三宝寺前遺跡	H16（2004）	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター 2005a
28	金沢城下町遺跡（彦三町一丁目地点）	H16（2004）	武家地	廃棄土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2007b
29	金沢城下町遺跡（下堤・青草町地点）	H17（2005）	町人地		金沢市埋蔵文化財センター 2007c
30	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡武蔵町地点）	H17（2005）・H21（2009）	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況　土居盛土	金沢市埋蔵文化財センター 2008b・2011c
31	金沢城下町遺跡（兼六元町３番地点 兼六元町７番地点）	H17（2005）・H23（2011）	武家地	井戸、土坑、石組溝	金沢市埋蔵文化財センター 2007b・2012a
32	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋北地点）	H18（2006）	惣構	堀の改変状況	金沢市埋蔵文化財センター 2008b
33	玉川町遺跡	H18（2006）	武家地	土坑、溝	金沢市埋蔵文化財センター 2016b
34	東山一丁目遺跡	H20（2008）	町人地	鍛冶関連遺構・遺物（炉跡、輸羽口、椀形鉄滓等）	金沢市埋蔵文化財センター 2010b
35	金沢城下町遺跡 （金沢城西内惣構跡主計町地点）	H20（2008）	惣構	素掘の堀、室町～戦国期の鍛冶関連遺物	金沢市埋蔵文化財センター 2011b
36	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡升形地点）	H20（2008）～H22（2010） H30（2018）	惣構	堀、升形遺構、建物跡、石垣	金沢市埋蔵文化財センター 2012d・2013b・2018
37	金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）	H22（2010）	武家地	道路、水路（辰巳用水分流）	金沢市埋蔵文化財センター 2012c
38	金沢城下町遺跡 （西外惣構跡本多町三丁目地点）	H21（2009）	惣構（西外惣構起点付近）	堀、土居基部	金沢市埋蔵文化財センター 2012b
39	小立野四丁目遺跡 （旧天徳院加賀藩主前田家墓所）	H22（2010）	寺院、墓地	堀	金沢市埋蔵文化財センター 2013c
40	金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）	H21（2009）～H23（2011）	武家地（公事場、屋敷）	庭園遺構（石組池状遺構、景石等）	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014a・2015a
41	小立野ユミノマチ遺跡	H22（2010）～H24（2012）	武家地	階段付大型土坑	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014b・2015b
42	長家上屋敷跡	H24（2012）～H25（2013）	上級武家地	長氏上屋敷、柱穴	金沢市埋蔵文化財センター 2015b
43	片町二丁目遺跡（５番地点）	H23（2011）	武家地	地下室、井戸、建物跡（石列基壇、礎石）、水路、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2014b
44	金沢城下町遺跡（東兼六町５番地点）	H25（2013）～H27（2015）	墓地	土坑（甕棺墓、木棺墓等）、石列（墓石区画）	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2017
45	金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）	H25（2013）～H27（2015）	武家地	前田氏（長種系）・大音氏下屋敷 土坑（粘土採掘跡、地下室）、井戸	金沢市埋蔵文化財センター 2014a・2015a・2016a
46	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋南地点）	H24（2012）	惣構	堀	金沢市埋蔵文化財センター 2014c
47	東山南水溜跡	H21（2009）	水溜跡		金沢市埋蔵文化財センター 2010a
48	柿木畠遺跡	H28（2016）・H29（2017）	武家地	曲水遺構、建物跡（土台、礎石）、区画溝、 方形石組遺構、石列、池跡、土坑、井戸	金沢市埋蔵文化財センター 2017・2018
49	金沢城下町遺跡（大手町３番地点）	H29（2017）	武家地（人持組津田玄蕃邸跡）	石敷き、井戸、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2018
50	長町三丁目遺跡	H29（2017）	武家地	土塀基礎、井戸、溝、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2018
51	森山二丁目遺跡	H29（2017）	武家地（足軽屋敷）	道路、石敷遺構、ゴミ穴	金沢市埋蔵文化財センター 2018

※金沢市埋蔵文化財センター：2001年は金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）、2002年以降は金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
（財）石川県埋蔵文化財センター：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター（2013年度から公益財団法人）

11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂１丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～ 14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～ 17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地（堂形）では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内７番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第３四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年(1546)には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが(第３図･第１表)、まとまった量の遺構･遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続･再生が図られる変遷過程が判明している［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c、木越2013］。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永８年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661 ～ 1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂１丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点がある。広坂１丁目遺跡は､17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内７番地点では、16世紀後半～ 17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永８年大火頃の町屋→大火以降から万治２年の武家屋敷→万治２年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡［金沢市・金沢市教育委員会1997a］は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡［金沢市教育委員会1995］は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む)･三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡［金沢市（金

沢市埋蔵文化財センター）2004b］では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b］では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2007］でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡［石川県金沢城調査研究所2008e・2013c］は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の９割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d・2008a・2012e］。辰巳用水［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b］は寛永９年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木樋、石樋）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。

「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年(1830)

第４図　近世後期の金沢城全体図

第２節　金沢城の沿革

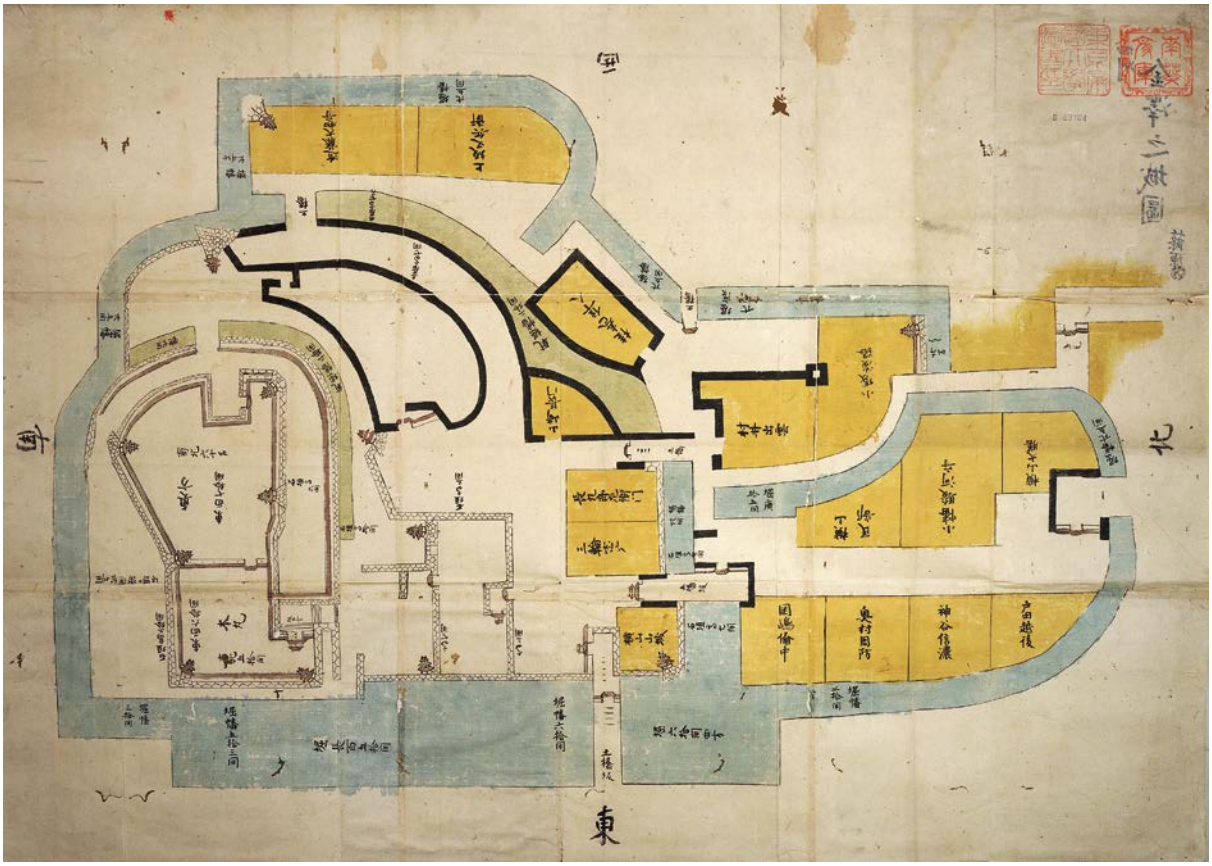
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所2008d]が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第２表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を４期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した４つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永８年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦９年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城図」（東京大学総合図書館蔵）近世初期

第5図　近世初期の金沢城

第２表　金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出　来　事
前	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舎）を設置、金沢城の前身
初期金沢城	天正８年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
	天正14年	1586	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされたとの記述（『北信愛覚書』）
	天正15年	1587	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長７年	1602	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和６年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永８年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼　【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永９年	1632	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年 ～ 万治３年	1640 1660	20年間藩主不在、城内が荒廃
	寛文元年	1661	５代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文２年 ～ 寛文11年	1662 1671	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
宝暦の大火後	宝暦９年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害　【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明和２年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明８年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文化５年	1808	二ノ丸火災
	文化６年	1809	橋爪門を再建、12代藩主斉広二ノ丸御殿に移徙
	寛政11年	1799	
	安政２年	1855	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政５年	1858	
近代以降	明治４年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治９年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	1907	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200ｍに渡り上部2 ／ 3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成７年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成８年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	2008	国史跡に指定

第３節　本丸附段・北ノ丸の沿革

１．本丸附段の沿革

本丸附段を含む、本丸とその周辺の沿革については、『確認調査報告書Ⅱ』［石川県金沢城調査研究所2014d］の中で記載されている。本節もこれに準じ、広く本丸周辺について触れつつ、今回報告する本丸附段について若干の補足を加えた。

位置　（第１図）

本丸附段は、本丸の西側に隣接する郭である。中央平坦部の標高は約55.６～ 55.８ｍで、隣接する本丸・東ノ丸区域における最高所約60ｍより３ｍ程度低い。郭は北辺が長く、南辺が短い逆台形の平面形を呈するが、明治40年（1907）の本丸南側の石垣崩落に伴う改変により南縁部が削平されており、削平以前の南北長は約110 ～ 120ｍに復元される。現在は、最長部東西80ｍ、南北100ｍを測る。

郭内には、宝暦の大火後に再建された三十間長屋が現存する。本書で報告する北部の階段は、調査着手前では近代に改変されながらも形状を留めていた。

初期の様相

本丸とその周辺においては、金沢城以前には、一向一揆・本願寺勢力の拠点である金沢御坊（尾山御坊・金沢御堂）の中心施設があったとされるが、同時代の史料は知られていない。続く佐久間盛政の城主時代も不明なところが多い。前田利家入城（天正11年（1583））直後の様子に関しては、天正15年（1587）４月に金沢城を訪問した南部家の家臣北信愛の覚書（「北信愛覚書」、［瀬戸2000］）がある。この史料には数寄屋、御座敷、さらに天守の「くりん」（最上階）に招かれ饗応を受けたことが記されており、本丸とその周辺にこれらの諸施設が具わっていたことが窺える。

「三壺聞書」等によれば、天守は慶長７年（1602）落雷によって焼亡したとされる。この後天守は再建されず、替わって建てられたのが三階櫓である。三階櫓は寛永８年（1631）大火に被災したものの再建され、近世前期を通じ存続していたが、宝暦９年（1759）大火で再び焼失し、以後再建されることはなかった。

慶長の天守焼失と寛永８年の大火の間、元和６年（1620）にも本丸は火災に見舞われている。この火災を契機とし、翌年本丸の拡張工事が行われ、近世城郭への変換が進行した。

元和７年（1621）前後の景観をある程度反映していると想定される「加州金沢之城図」（第５図）には、寛永大火以後の本丸区域が「奥方」、東ノ丸区域が「本丸」と記載されており、東側が「表」、西側が「奥」あるいは「詰の丸」に相当したと考えられる。

なお、17世紀末頃の景観内容とみられる「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）では、本丸附段を「舞台跡」と記載する（第６図）。また『越登賀三州志（来因概覧附録）』（文化２年（1805））では、本丸にある舞台の址は、慶長末年頃、前田家三代の夫人達の「戯芸」観覧に供するため設けた跡地と推論している。『金沢古蹟志』（明治24年（1891））でも上記三州志や「金沢細見図譜」の所見を紹介するとともに、「三壺聞書」等を引用し、慶長後期から元和にかけて、金沢城内が「音曲諸芸」の者達により賑わった様子を記している。

平成15 ～ 19年度の金沢城跡埋蔵文化財確認調査では、本丸附段南部に寛永８年（1631）の大火以前の遺構群が検出され、当初は本丸との間に堀があったが、上述した元和７年（1621）頃に埋め立てられたこと等が明らかになり、本丸御殿奥側の空間に取り込まれていく過程が窺える結果を得た。「舞台跡」に直結する遺構は明確ではないものの、本丸附段の当該期利用の在り方としては、絵図・文献に伝わる事象と大きく異ならないように思われる。

近世前期～後期の様相　（第６・７図）

元和期に再整備された本丸御殿や櫓等の建物は、寛永８年（1631）の大火で焼失し、以後金沢城の

中枢部は二ノ丸へ移ることとなった。ただし、宝暦９年（1759）大火までの近世前期において、本丸には御殿の一部の機能（広間）のみを残したと見られる建物や、上記の三階櫓と周辺石垣上の櫓群、干飯や鮎の塩辛桶等軍用食を保管する三十間長屋等がなお存在した。

本丸附段は、改めて二ノ丸から本丸に至る正門側に位置づけられ、空堀に架かる極楽橋からの上り口において、幅20m近い階段が設けられた。「加州金沢御城来因略記」（金沢市立玉川図書館蔵）では「雁木坂」と記される石段である（本書において発掘調査結果を報告）。建造物としては、三十間長屋を始めとする長屋・櫓が数棟建ち並び、本丸との間には重厚な櫓門として鉄門があった。

なお『金沢古蹟志』では、本丸附段に「御茶土蔵」と称される建物があったとするが、近世前期の絵図に該当するような建物は見いだせない。『金沢古蹟志』が典拠とする史料には「附段御門御茶土蔵」とあり、本丸附段ではなく東ノ丸附段を指しているとも思われる。東ノ丸附段では、近世前期に南北二棟の土蔵があり、上記「来因略記」では、北側の土蔵の位置に「御茶具土蔵」との書き込みがある。一方「金沢城東之御丸・御本丸絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）には、北側が「御武具奉行」、南側は「表御納戸方」預りとする記載がみられる。この場合表納戸方所管の土蔵の方がふさわしいように思われ、「来因略記」とは一致しないが、いずれにせよ南北どちらかの土蔵に茶道具が収納されていた可能性も考えられる。

寛文２年（1662）・寛保元年（1741）等には本丸附段北側の石垣破損・修復記録がある。宝暦９年（1759）の大火で本丸周辺の建物は全焼し、本丸附段では1830年頃までに物置や番所が建てられたのみであったが、安政５年（1858）になって三十間長屋が再建された。

近代以降の様相

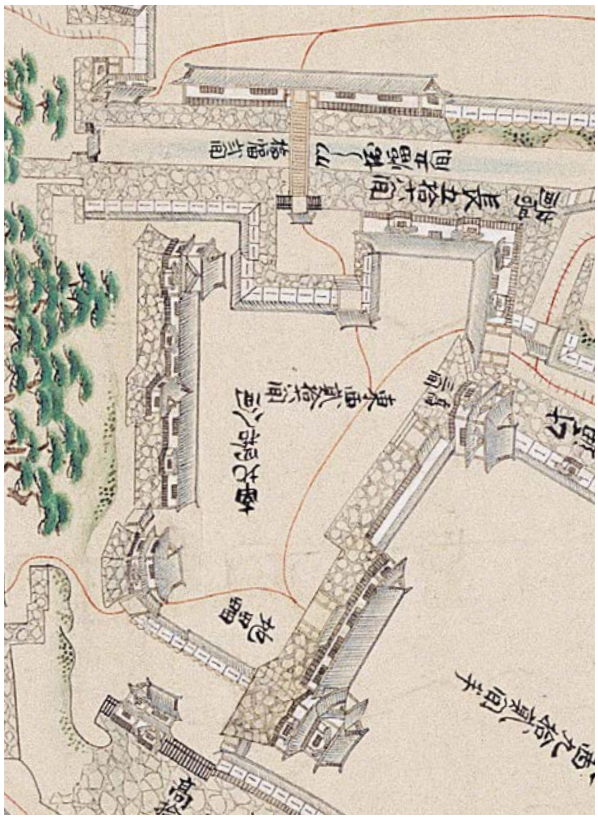
明治４年（1871）、城域は兵部省（後陸軍省）の管轄となった。本丸とその周辺に残された建物も次第に撤去されていったが、本丸附段の三十間長屋、東ノ丸附段の土蔵は維持され、現在ともに重要文化財に指定されている。明治40年（1907）には辰巳櫓下の石垣が崩壊し、その後の措置として東ノ丸から本丸附段までの約200mにわたり、郭南辺の石垣上段が撤去され、段状地形に改修された。このため郭面も幅10 ～ 20m分削平を受けることとなった。

翌年の明治41年（1908）、融雪・雨水処理のため本丸からの排水路を設けることが計画された（「排水路築設工事ノ件（陸軍省肆大日記）」（防衛研究所戦史研究センター蔵））。その付属図（第７図）によると、本丸附段階段（雁木坂）を縦断する水路が認められる。この時の計画は認可されず、施工時期は遅れたようであるが、調査着手前までの形状は、この頃の改変によるものとみられる。

第３表　本丸附段の沿革

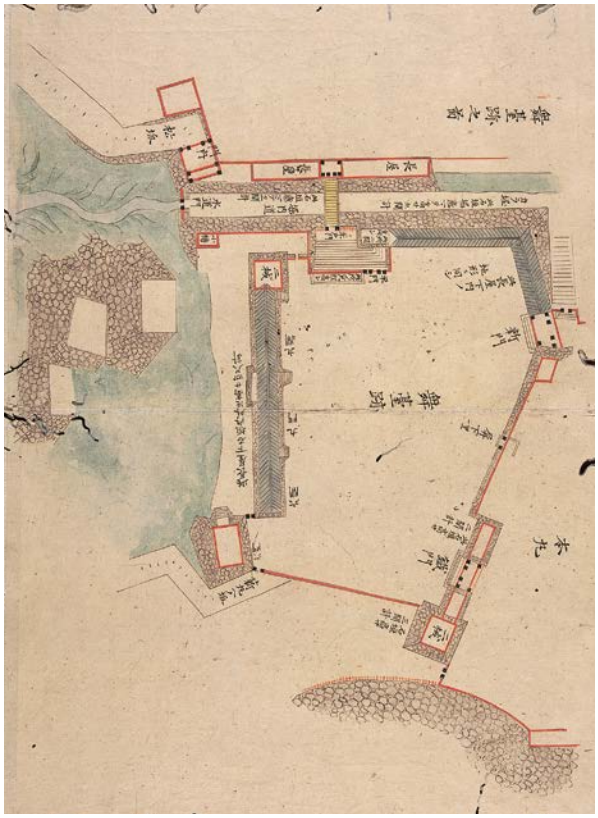
年号	西暦	月	事項	出典
慶長～ 元和頃			本丸との間に堀、ゴミ穴や地下室状遺構が存在。 （本丸附段は本丸御殿の裏手、東ノ丸唐門が本丸大手）	『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
元和６年	1620	11月	本丸火災により、本丸御屋形等が焼失。	〔元和六年書状案〕（『加賀藩史料２』） 「松井文庫所蔵文書」（松井文庫）等
元和７年	1621		御屋形再建、本丸西堀を埋め立て西北に拡張。	「古ヨリ公儀江被上候御城絵図御国 絵図改申品々之帳」（加越能文庫）
			以後、塀・池状遺構・鍛冶遺構などが展開。	『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
寛永８年	1631	４月	寛永の大火（後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態となる）	「安居寺文書」（安居寺）、 『黄薇古簡集』、「川合文書」（富山大）等
			以降、広場の役割へ（本丸附段が本丸正面となる）	『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
寛文２年	1662	５月	地震により複数箇所の石垣破損（本丸附段北）	「加州金沢城絵図」（育徳会）、 「古ヨリ公儀江被上候御城絵図 御国絵図改申品々之帳」（加越能文庫）
		６月	複数箇所の石垣普請が許可され、 寛文11年にまで損傷の著しい箇所を修復する。	
寛保元年	1741		本丸附段北石垣を修復	「勤方之覚」（後藤文庫）
宝暦９年	1759		宝暦の大火（本丸等全焼、石垣にも被害）	〔宝暦九年金沢火事之一巻〕 （『加賀藩史料８』）等
			三十間長屋再建（これまで簡素化した門、番所、物置のみ）	『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
明治41年	1908		本丸からの排水路設営が計画される。	「排水路築設工事ノ件（陸軍省肆大日記）」（防衛研究所）

「加州金沢城絵図」
（(公財)前田育徳会蔵）　寛文７年(1667)



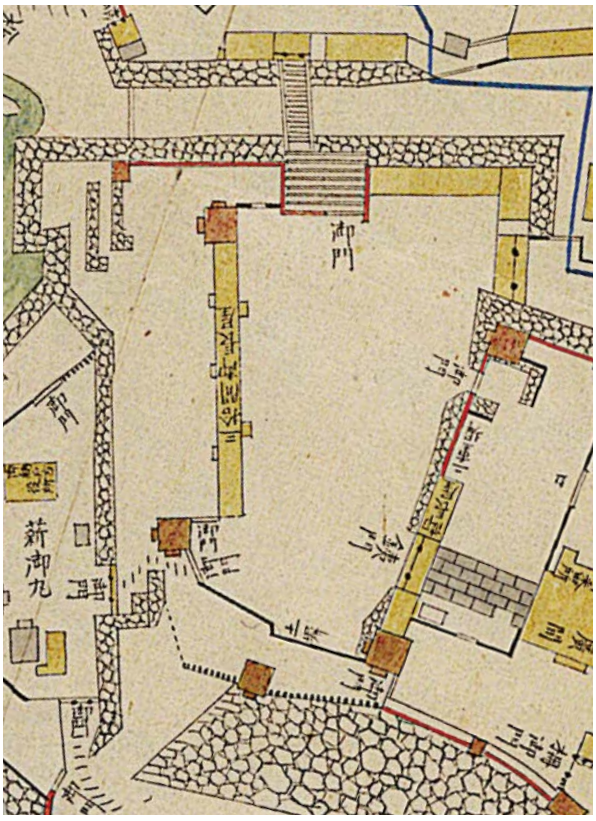
「加賀国金沢之絵図」
（金沢市立玉川図書館蔵）　寛文８年～延宝年間(1668～1681)

「金沢城絵図」
（石川県立歴史博物館蔵）　延宝４年～元禄年間頃(1676～1704)



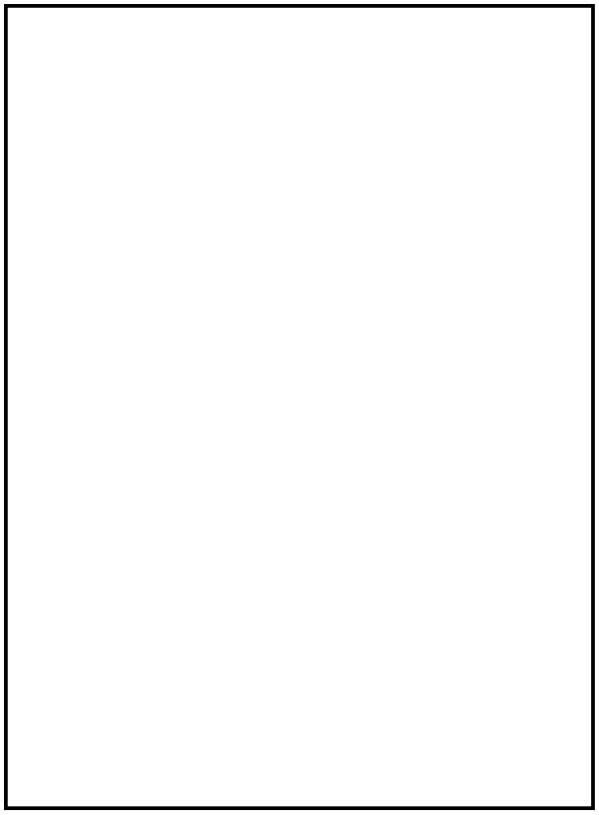
「金沢古城図(舞台跡之図)」
（石川県立図書館蔵）　天和２年～貞享４年頃(1682～1687)

第6図　本丸附段(近世前期)



「金沢城図」
（金沢市立玉川図書館蔵）　18世紀前半

「金沢城本丸・東丸之図」
（金沢市立玉川図書館蔵）　文化３年～天保元年頃（1806～1830）



「御城分間御絵図」
（（公財）前田育徳会蔵）　嘉永３年（1850）

「金沢旧城廓（本丸）一部平面図」
『排水路築設工事ノ件（陸軍省肆大日記）』
（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵）　明治41年（1908）

第７図　本丸附段（近世前期・後期・近代）

２．北ノ丸の沿革

位置

北ノ丸は、二ノ丸の北側に隣接し、金沢城の最北端に位置する郭群である。北ノ丸南側の郭を御宮、北側を藤右衛門丸と呼び、本丸に向かって御宮の後方に藤右衛門丸が段丘状に低くなって位置する。北ノ丸周囲の斜面には部分的に江戸期の石垣が残存しており、西北の郭沿いでは甚右衛門坂が取りつく。近代以降は旧陸軍施設の敷設に伴い、両郭の中央を横断する道が造られるなど改変を受けた。また、藤右衛門丸の後方地には、北ノ丸御宮から移転した尾崎神社（金沢東照宮）が鎮座している。

近世初期の様相

初期の金沢城内には、有力家臣の屋敷があったことが古絵図や文献からわかっている。有沢永貞（江戸前期の加賀藩軍学者）の考証によれば、慶長期における北ノ丸には御宮の郭に村井出雲、藤右衛門丸に小塚藤右衛門の屋敷があったとしている。しかし、小塚藤右衛門は、天正11年（1583）の時点で既に戦死しているという森田平次（幕末～明治の郷土史家）の指摘がある（『金澤古蹟志』）。森田は、藤右衛門丸には小塚藤右衛門の弟・小塚淡路（秀正）が居住したものと考えており、実際に近世初期の金沢城絵図の中には「小塚淡路」と明記されたものが確認できる（第５図）。

このほかに御宮の郭には、山崎美濃の屋敷があったとする史料もみられる。元和６年（1620）に発生した金沢城本丸火災により、本丸の藩主御屋敷が焼失したため利常父子が家臣屋敷に移住することとなる。『三壺聞書』によると、被災した利常らは、三ノ丸の興津内記邸や北ノ丸の山崎美濃屋形に入り、翌日には横山大膳邸（新丸）に移住したとされる。

近世前期～後期の様相

寛永年間では、加賀藩の４代藩主前田光高の発願により、北ノ丸に金沢東照宮が創建された。東照社は徳川御三家をはじめ、家康ゆかりの地でいくつか建立されているが、外様である加賀藩前田が領国に東照宮勧請を許されたのは、光高が徳川と血縁関係にあったからとされている。寛永17年（1640）に幕府から勧請を許可された後、寛永19年（1642）には天海の指導をうけて社殿の造営が始まった。翌年の寛永20年には竣工し、遷座式が行われている。以後、金沢東照宮が置かれた郭は「御宮」と呼ばれるようになる。北ノ丸は、大火に見舞われることがなかったため、御宮も基本的には創建当初の建物配置のまま鎮座してきた。しかし、近世前期からあったと考えられる宝蔵（経蔵）が、天保年間以降（1830 ～）の絵図に見られなくなっており、御宮における最大の変化とされている。

藤右衛門丸は、慶長期における小塚氏の居住以後のことはよくわかっていない。宝暦の大火（宝暦９年（1759））以前の絵図によると、接木畑へ利用された時期もうかがえるが（第８図）、絵図のほとんどは描写のないものが多い。御宮の後方地であったため、絵図の通り明地であった可能性もある。ただし、文化の大火（文化５年（1808））以降の絵図では、物置や井戸の描写がみられ、御宮と藤右衛門丸間の通用口も出現することから（第９図）、何らかの利用があったとものといえる。

近代以降の様相

明治を迎えると、東照宮は遠ざけられる存在となる。明治２年（1869）、神仏分離により金沢東照宮の管理に当たってきた天台寺院や別当寺が外され、仏像・仏器も取り除かれた。明治７年（1874）には尾崎神社と改名するが、明治11年（1878）に算用場跡地であった現在の場所に移ることとなる。その後の北ノ丸は、兵舎が敷設された旧陸軍時代を経て（第10図）、昭和24年（1949）に金沢大学が開学してから現在に至るまで、主に駐車場として利用されている。

第４表　北ノ丸の沿革

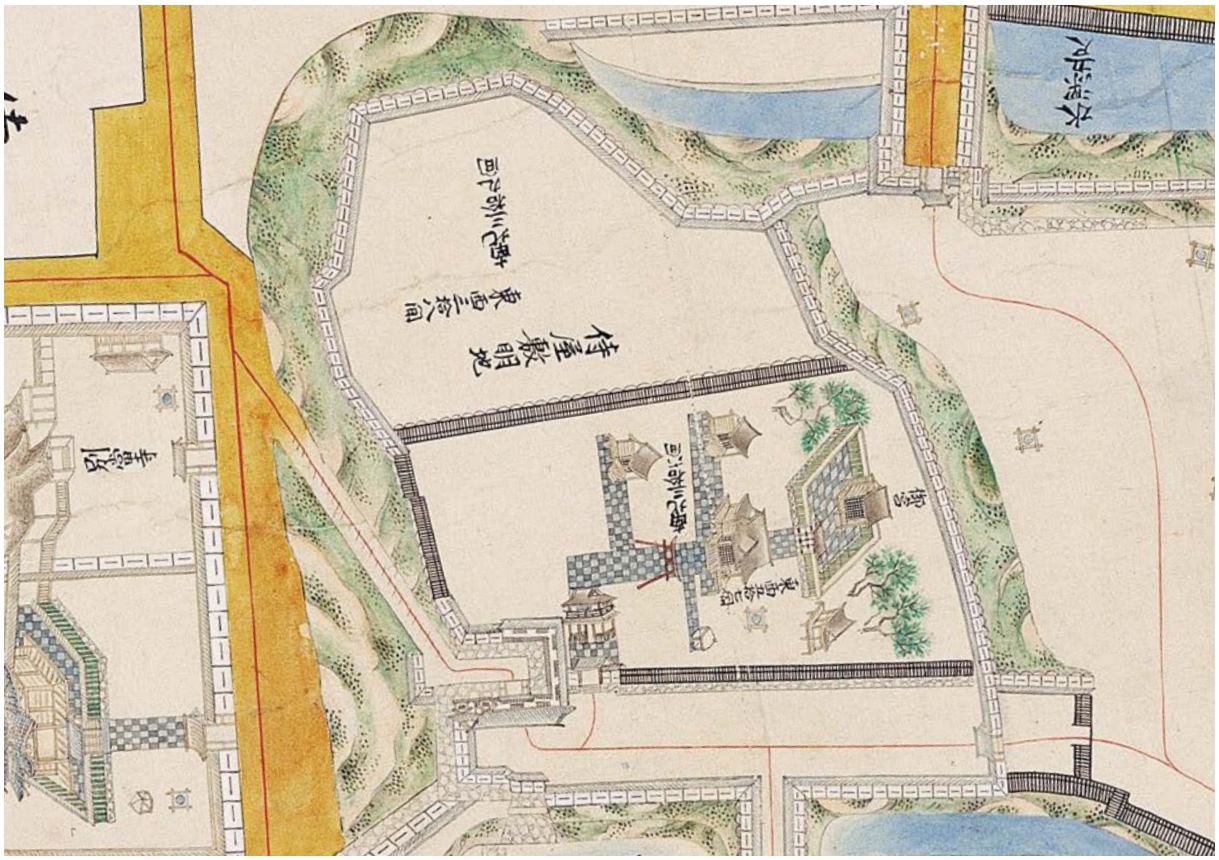
年号	西暦	月	事項	備考
慶長期			北ノ丸に村井氏・小塚氏の屋敷所在か。	「慶長金沢城図」（金沢市立玉川図書館）
元和６年	1620	11月	本丸火災、被災した利常父子が 三ノ丸の興津内記邸、北ノ丸の山崎美濃屋形に入る。	「三壺聞書」（加越能文庫）、 「文禄年中以来等之旧記」（後藤文庫）
寛永８年	1631		寛永の大火	「安居寺文書」（安居寺）、 『黄薇古簡集』，「川合文書」（富山大）等
寛永17年	1640	11月	４代光高、幕府へ東照宮勧請を申請し、許可される。	「寛永諸家系図伝」（内閣文庫）
寛永18年	1641		幕府大工頭の木原杢允が社殿の設計にかかる。 利常、東照宮勧請許可の礼状を大老酒井忠勝に送る。	「加藩国初遺文」（加越能文庫）
寛永19年	1642		金沢東照宮、金沢城内北ノ丸にて造営開始。	
寛永20年	1643	８月	東照宮の霊代、村井兵部長朝に守られ、江戸から金沢に到着。	「金沢尾崎神社文書」（尾崎神社）、 「金沢東照宮造立棟札」（尾崎神社）
		９月	金沢東照宮、竣工。 上野寛永寺常照院を招いて遷座式を執行。	
正保２年	1645		東照社に「東照宮」の宮号宣下。 光高、江戸にて急逝。	
万治３年	1660		神護寺内にて大猷院仏殿の造営を開始、寛文２年に完成。	
寛文２年	1662		大猷院仏殿の祭祀を行う松寿院（常照院の弟子）が 金沢に常住し、毎年20石を支給。	
延宝５年	1677		綱紀により、金沢東照宮が修理される。	「金沢東照宮修営棟札」（尾崎神社）
宝暦３年	1753	３月	金沢東照宮、修復につき外遷宮が行われる。	「高畠左門留帳」（加越能文庫）、 「大野木日記」（加越能文庫）等
		９月	金沢東照宮西側の柵下土留石垣、修復完了する。	「勤方之覚」（後藤文庫）、「奥村尚寛 御城方覚書」（『石川県2016b』）
宝暦５年	1755		金沢東照宮、修復につき正遷宮が行われる。	「泰雲公御年譜」（加越能文庫）、 「金沢東照宮修営棟札」（尾崎神社）
宝暦９年	1759		宝暦の大火（北ノ丸、火災を免れる）	〔宝暦九年金沢火事之一巻〕 （『加賀藩史料８』）等
宝暦13年	1763		常照院８代光研、10代藩主重教の要請により 金沢を訪れて金沢東照宮の遷宮祭を執行。	
安永年間	1772 ～ 1781		東照宮祭祀について、神護寺の留守役理性院と 金沢天台宗触頭寺院との論争が起きる。	
文化５年	1808	１月	二ノ丸火災により、金沢東照宮の御神体を一時神護寺へ移す。	「御城中家事ニ付東照宮遷御一件ノ内」 （大野湊神社文書）
文化12年	1815	４月	金沢東照宮、修理につき遷座が行われる。	「旧記抜書」（『加賀藩史料12』）
明治２年	1869		神仏分離により、金沢東照宮の社僧を還俗させ、仏像・仏器を排除する。	
明治６年	1873		金沢東照宮から尾崎社に改称。	
明治７年	1874		尾崎社から尾崎神社に改称。	
明治11年	1878	９月	尾崎神社、北ノ丸から現在地の西町へ移転。	「金沢東照宮移転時棟札」（尾崎神社）

＊第３・４表 出典欄の略称は次の通り
本丸附段
［史料蔵書機関］
松井文庫＝財団法人松井文庫、加越能文庫＝金沢市立玉川図書館加越能文庫、安居寺＝富山県南砺市安居寺、富山大＝富山大学附属図書館、
前田育徳会＝（公財）前田育徳会、後藤文庫＝金沢市立玉川図書館後藤文庫、防衛研究所＝防衛省防衛研究所戦史研究センター

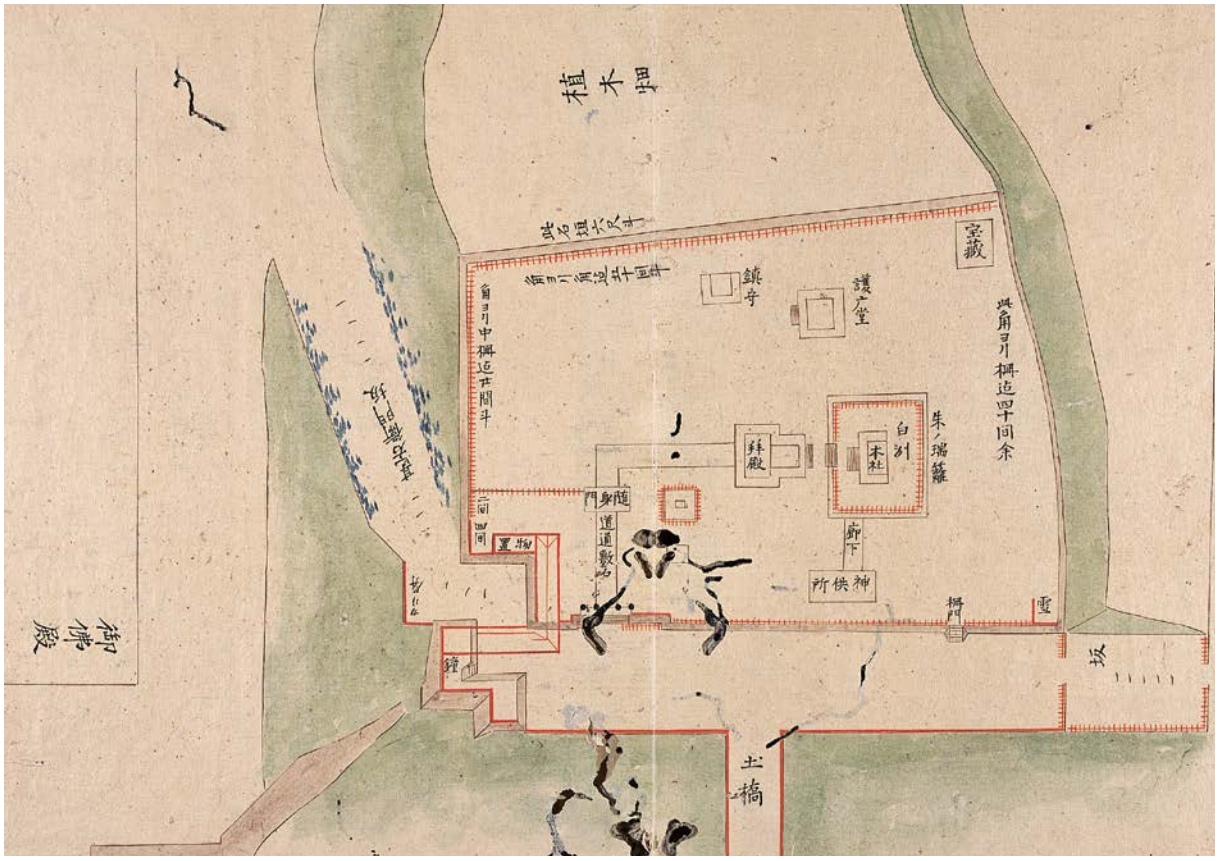
［図書］
『加賀藩史料２』＝『加賀藩史料 第２編』1980清文堂出版、『黄薇古簡集』＝『岡山県の中世文書―黄薇古簡集―』2016戎光祥出版、
『加賀藩史料８』＝『加賀藩史料 第８編』1980清文堂出版

北ノ丸
［史料蔵書機関］
加越能文庫＝金沢市立玉川図書館加越能文庫、後藤文庫＝金沢市立玉川図書館後藤文庫、安居寺＝富山県南砺市安居寺、富山大＝富山大学附属図書館、
内閣文庫＝国立公文書館内閣文庫

［図書］
『黄薇古簡集』＝『岡山県の中世文書―黄薇古簡集―』2016戎光祥出版、『石川県2016b』＝『金沢城普請作事史料４』2016 石川県金沢城調査研究所、
『加賀藩史料８』＝『加賀藩史料 第８編』1980清文堂出版、『加賀藩史料12』＝『加賀藩史料 第２編』1981清文堂出版

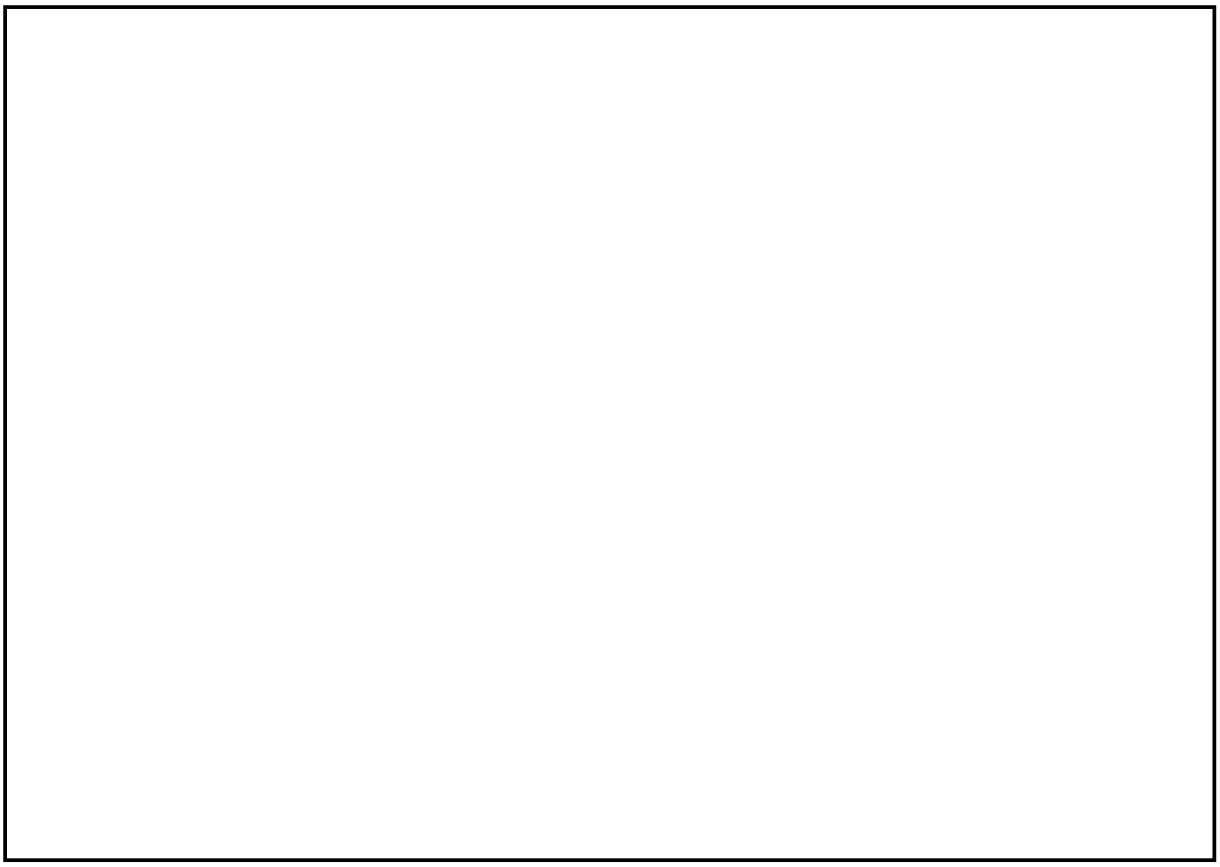


「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）　寛文８年～延宝年間(1668～1681)

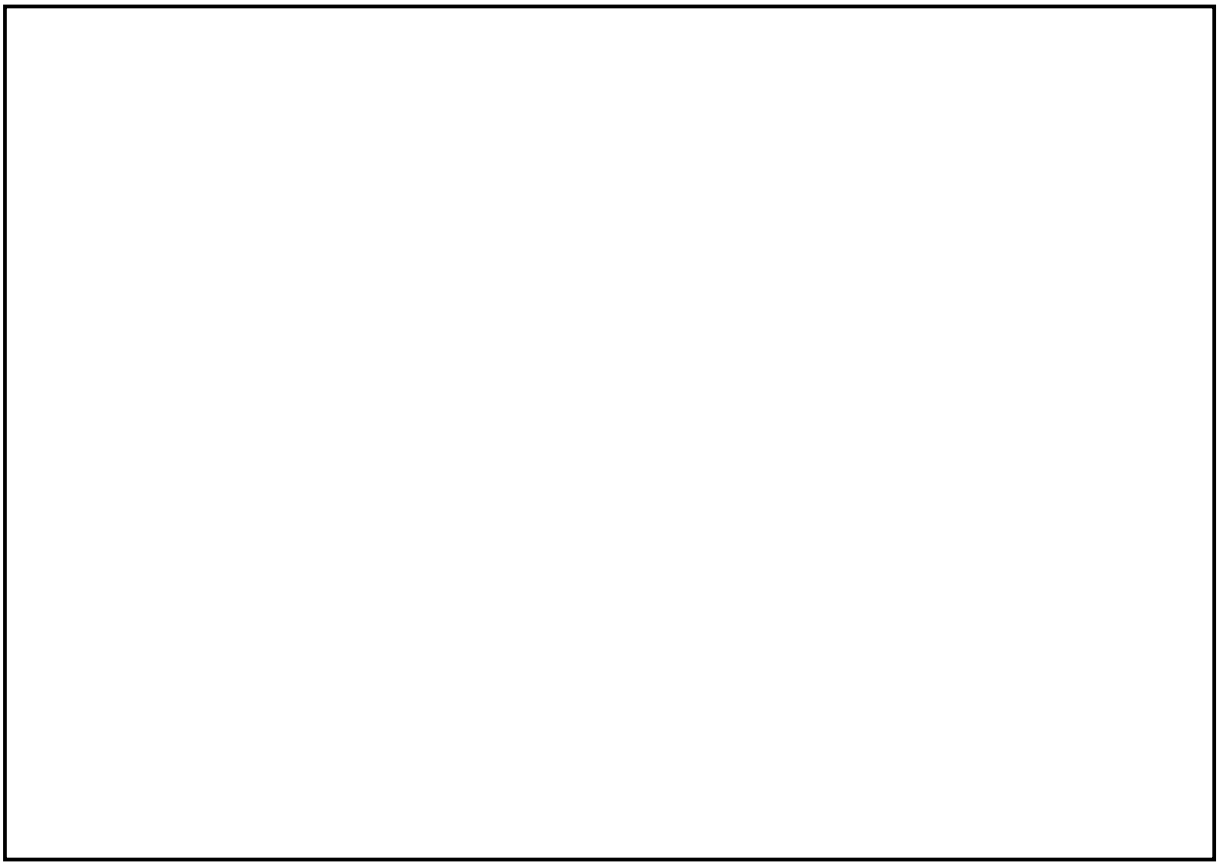


「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）　天和２年～貞享４年頃(1682～87)

第8図　北ノ丸(近世前期)

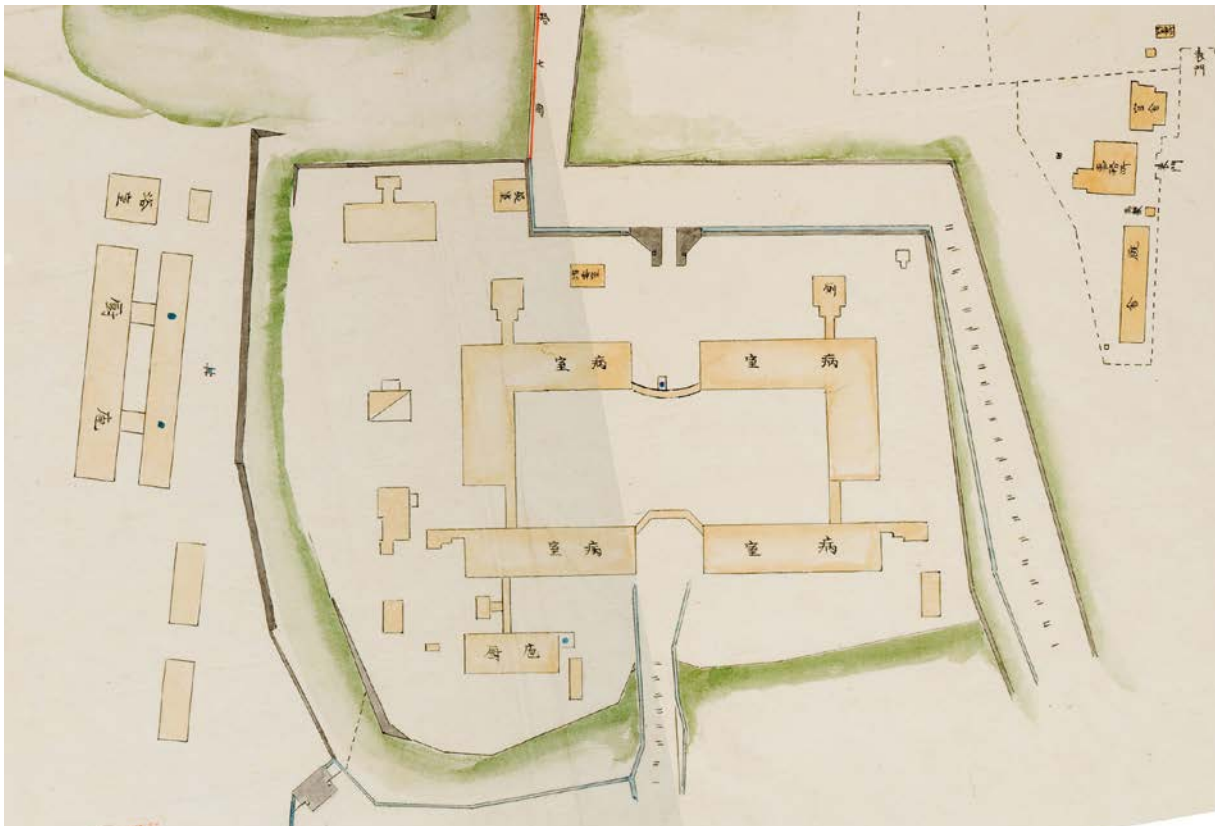


「金沢城内絵図」（石黒信二氏蔵）　文化７～13年頃(1810～16)

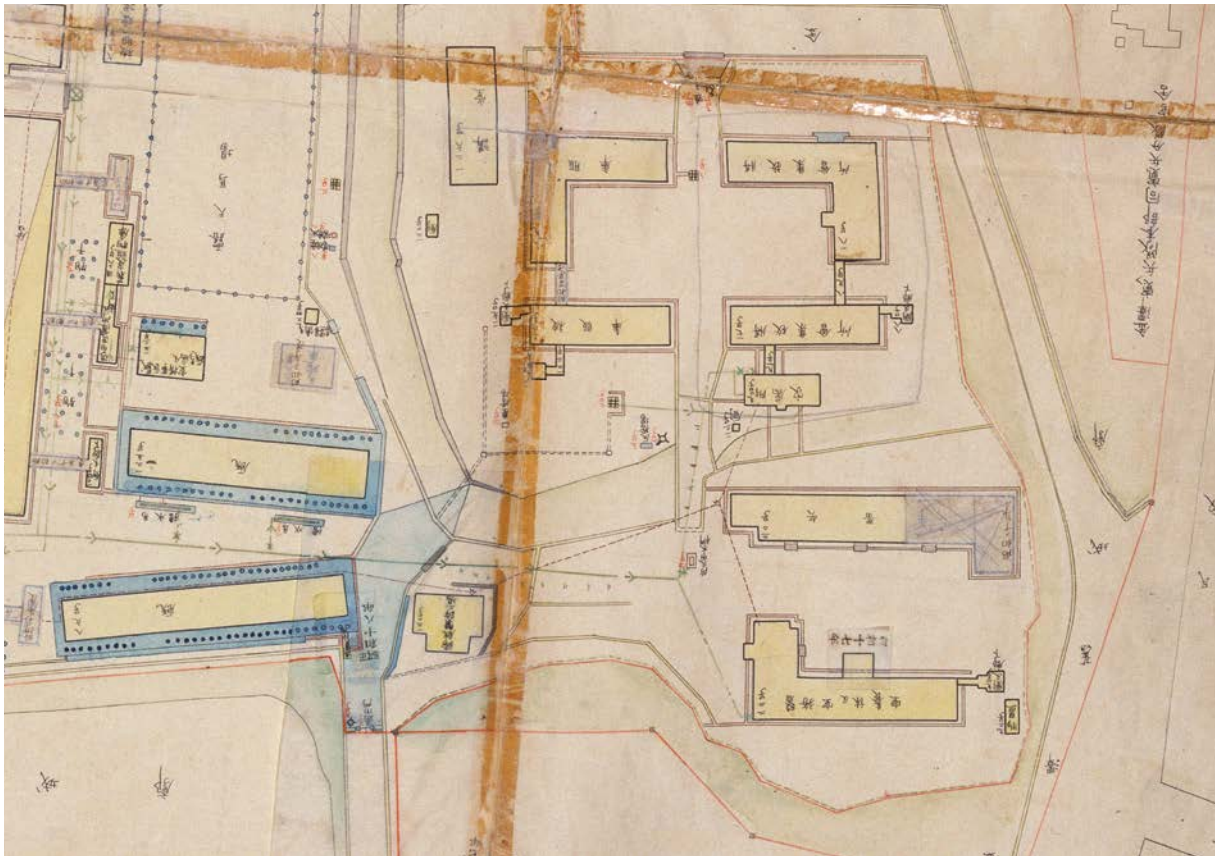


「御城分間御絵図」（(公財)前田育徳会蔵）　嘉永３年(1850)

第9図　北ノ丸(近世後期)



「歩兵第七連隊構外木柵解除之図」『歩兵第七連隊外構木柵改修ノ件（陸軍省伍大日記）』
（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵）　明治32年（1899）



「歩兵第百七聯隊図」（石川県立歴史博物館蔵）　昭和20年（1945）

第10図　北ノ丸（近代）

第４節　既往の調査成果

１．金沢城の発掘調査

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50 ～ 61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成４～６年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成８年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成９～ 13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査が実施された。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の４分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸・橋爪門で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心軸整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

２．北ノ丸の発掘調査

金沢大学考古学研究室による昭和56年度調査［貞末ほか1986］で、藤右衛門丸北側法面裾部において石垣が検出された。ただし、現存する西北隅角部の西面および北面の一部は、一般的な築石が斜面全体を覆う石垣であるのに対して、前者以東の北面では階段状の石垣列が構築されていた。昭和61年度調査［貞末ほか1989］でも、黒門横北側懸崖部頂上で石垣列が検出されており、藤右衛門丸北側法面の石垣列と連続すると推定される。先の調査から、両者は最下段の第１石垣列を基礎としており、その石垣列の基盤部前面に敷き詰められていた瓦から18世紀後半～ 19世紀の構築と推定されている。

３．本丸附段の発掘調査

平成15・16年度の調査［金沢城調査研究所2008d］において、寛永８年（1631）以前に遡る遺構面を三面確認した。初期遺構面Ⅱは地山を基盤とするが、溝状の遺構（2004-1SX03）がある他不明な点が多い。初期遺構面Ⅰ（古）は造成土を基盤とするもので、食物残滓を廃棄した土坑や地下室状遺構等が高い密度で営まれている。初期遺構面Ⅰ（新）では塀による区画がなされ、本丸寄りには池・水溜の可能性がある遺構（2004-1SK11）等､その外側には鍛冶等金属加工に関連する遺構が認められた。焼土面の状況や出土した土師器皿等の年代観から、遺構面Ⅰ（古）は慶長～元和頃、遺構面Ⅰ（新）は寛永８年（1631）大火までと考えられる。これら遺構の濃密な展開から、本丸附段はこの当時本丸の奥側あるいは裏手であったと位置付けられる。またこの状況は、本丸大手が東ノ丸唐門側であったことも示唆している。

平成17・18・19年度の調査［金沢城調査研究所2014d］では、本丸西面石垣下部の特徴をより明確にすることに加え、堀の規模・本丸との連絡路（土橋等）・埋没過程とその後の利用状況の確認等、堀の構造と変遷の解明を目的とした発掘調査を実施した。また、堀の深さ等を探るため、ボーリング調査も行っている。

第11図　金沢城跡発掘調査位置図(～平成30年度)

第５表　金沢城跡発掘調査一覧（１）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	四脚門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸附段	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査		井上1969・吉岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委･金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委･金大	学術調査	三階櫓・三十間長屋跡	県教委1970・吉岡1985・増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・櫓石垣	上野1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年焼失の御殿跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	貞末ほか1986・増山1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	貞末ほか1989
12	兼六園（江戸町推定地）	平成元年(1989)	県埋文センター	店舗改築	17世紀初期の遺構面（礎石建物等）	県埋文センター 1992
13	石川門前土橋（石川橋）	平成4-6(1992-94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程　16世紀後半頃の鍛冶関連遺構等	県埋文センター 1997・1998
14	車橋門	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター 1996
15	内堀第１次・菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備（復元整備）	堀・橋脚（埋置された刀・鏡・銭）・菱櫓礎石等	金沢城調査研究所2011d・2012b
16	本丸附段	平成10･12(1998･2000)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	階段跡	本報告
17	三ノ丸第１次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	鉄砲所跡（鍛冶場遺構）、鉄砲部品	金沢城研究調査室2006b
18	いもり堀第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	天正～元和頃の堀・土橋、元和以後の堀・櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10-11(1998-99)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	石垣内部構造　櫓・長屋礎石、17世紀初頭の遺構面	金沢城調査研究所2011d・2012b
20	内堀第２次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	西半北側石垣の構造把握	金沢城調査研究所2011d・2012b
21	新丸第１次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	近代に埋没した堀の範囲確定	金沢城調査研究所2016d
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	礎石建物（番所跡）、石組井戸	(財）県埋文センター 2002a
23	鶴ノ丸第１次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	木樋・石樋（辰巳用水）	金沢城調査研究所2016d
24	新丸第２次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財）県埋文センター 2002a
25	橋爪門外橋橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	橋脚基礎の構造把握	金沢城調査研究所2011d・2012b
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	礎石、石組遺構	金沢城調査研究所2016d
27	三ノ丸第３次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（設備設置）	土坑	金沢城調査研究所2011d・2012b
28	鶴ノ丸第２次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	16世紀末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2015c
29	いもり堀第２次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	慶長後半から元和年間の石垣	湊屋・土田2001
30	北ノ丸第１次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園地整備）	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	本報告
31	いもり堀第３次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	元和以前の堀・土橋・土俵護岸　金箔瓦	湊屋・土田ほか2001
32	三ノ丸第４次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末頃の遺構面	金沢城調査研究所2011c
33	新丸第３次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	尾坂門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面 36と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016d
34	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	石段、石組溝 数寄屋屋敷調査区として報告	金沢城調査研究所2016d
35	橋爪門枡形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	土坑、ピット	金沢城調査研究所2015c
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（植栽）	石組溝、路面 33と合わせ尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016d
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008d
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術調査	三十間長屋続櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008d
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永大火以前の２面の遺構面	金沢城調査研究所2008d
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	築城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2004a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階櫓石垣	金沢城調査研究所2014d
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	近代の改修、石垣上部の二重塀の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010b
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城調査研究所2014d

第６表　金沢城跡発掘調査一覧（２）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
45	玉泉院丸（南西石垣）	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	部分修理の把握、初期金沢城石垣	公園緑地課・調査研究所2010
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城調査研究所2011c
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
49	石川門（右方太鼓塀）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
50	玉泉院丸（南西石垣）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣修築）	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010b
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	枡形門創建前(慶長後期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2011c
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008a
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
54	石川門（右方太鼓塀）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣解体調査（ニラミ櫓台、一ノ門類当）	金沢城調査研究所2011c
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	堀の南岸、辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009a
57	玉泉院丸（泉水）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
58	玉泉院丸（いもり坂石垣）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	石垣変形箇所の基底部試掘	本報告
59	兼六園栄螺山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所2010a
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水中央部、北部の遺構確認（中島、出島、景石等）	金沢城調査研究所2015d
62	兼六園栄螺山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
63	石川門(左方太鼓塀)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	金沢城調査研究所2015c
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北東部の遺構確認（護岸石組・景石等）	金沢城調査研究所2015d・2018d
66	兼六園栄螺山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣・石造物の解体調査	管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方太鼓塀)	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
68	橋爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015c
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備 (遺構確認・復元整備)	色紙短冊積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
70	橋爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石組暗渠、石垣台、枡形路面	金沢城調査研究所2015c
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	色紙短冊積石垣周辺と滝石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
72	玉泉院丸（南石垣）	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備 (石垣修築・復元整備)	石垣の解体調査、近世初期の土塁確認	公園緑地課・調査研究所2017
73	東ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	学術調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015e・2016a
76	金谷出丸	平成27(2015)	金沢市埋文センター	建物新築	塀または柵跡、瓦廃棄土坑、石組遺構	金沢市埋蔵文化財センター 2016a
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2016e・2017a
78	数寄屋屋敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	学術調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018a
79	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2018a
80	玉泉院丸（南東）	平成30(2018)	金沢城調査研究所	学術調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018e
81	玉泉院丸	平成30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	
A	県庁跡地（堂形）	平成15(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備 (確認調査)	焼米（堂形米蔵関連遺物）、近世初期以前土塁遺構	(財）県埋文センター 2010
B	県庁跡地（堂形）	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備 (確認調査)	足軽番所、堂形馬場	(財）県埋文センター 2010
C	県庁跡地（堂形）	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備 (施設建設)	古代～近世の遺構面	(財）県埋文センター 2012
D	県庁跡地（堂形）	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備 (施設建設)	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	(財）県埋文センター 2012
E	県庁跡地（堂形）	平成24(2012)	(財)県埋文センター	都心地区整備 (施設建設)	石列、石組遺構	(公財）県埋文センター 2014c

県教委：石川県教育委員会　　県埋文センター：石川県立埋蔵文化財センター　　(財）県埋文センター：石川県教育委員会・(財）石川県埋蔵文化財センター（2013年度から公益財団法人）
金沢城研究調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室　　金沢城調査研究所：石川県金沢城調査研究所　　管理事務所・調査研究所：石川県金沢城・兼六園管理事務所
石川県金沢城調査研究所　　公園緑地課・調査研究所：石川県土木部公園緑地課　石川県金沢城調査研究所
金沢市埋文センター：金沢市埋蔵文化財センター　　金大金沢城調委：金沢大学金沢城学術調査委員会　　金大：金沢大学

第３章　本丸附段

第１節　調査の概要

１．調査区の位置と調査の概要　（第12 ～ 15図）

本調査区は、本丸附段の北部、二ノ丸との間に設けられた空堀（堀切）に面した斜面に相当する。当該地は17世紀後半以後の絵図において、二ノ丸に連絡する橋（極楽橋）、石垣・塀で囲まれた枡形状の区画、幅広い階段（石段・雁木坂）等が認められる（第６・７図）。近代に入ると幅が大きく減じられる等の改修を受けたが、調査着手時まで階段としての体裁を留めていた。

調査を進めるにあたり、最初に現況地形の平板測量を実施し、次いで近代に改変された部分を重機等により取り除くこととした。この時階段の袖石や下方（北側）脇に散乱していた石材だけでなく、階段本体を構成していた足掛かりの石材（延石）も一部を除き対象とした。着手当初は、延石についても、近世絵図の描写と異なっていたこと等から、近代以後の据え直しと考えていた。ただし発掘の進捗とともに、近世段階の位置を踏襲していたものが多くを占めていることが明らかになった。

調査区は東西両側に厚く近代の整地土が堆積しており、このうち東側の一部は調査区外から重機で掘削した。その他は人力で掘削を行った。階段一帯は全体的に攪乱を受けており、延石裏込め土の流出状況の扱いを始めとして、階段痕跡の見極めが十分に至らない部分もあった。このこともあり、階段痕跡等を反映すると思われる部分は、近代以後の抜き取りが想定される場合も含め、遺構平面図の表現において長短ケバで示した。なお、調査区内の区分けについては、平板測量に際し設置した杭を基準にⅠ～Ⅶ区を設定した（第15図）。

２．基本層序　（第22図）

本調査区の層序は、Ⅰ：階段（雁木坂）近代改変後の土層、Ⅱ：階段造成・改修期の土層、Ⅲ：階段造成以前の土層、Ⅳ：地山（基盤層）に大別した。このうちⅡ層は、延石裏込め土・造成（整地）土（整地土Ａ～Ｃ層）・石垣裏込め等が該当する。Ⅲ層は階段以前の造成土（Ｅ層）や遺構埋土（SK04・SX01）等が該当する。階段（雁木坂）第１段から極楽橋間の造成（整地）土（整地土Ｄ層）も本層に含めた。層序ごとに土質に明確な傾向があるわけではないが、Ⅱ・Ⅲ層は地山層起源とみられる黄褐色・黒褐色粘質土の互層やブロックが主体となる土層が多い。

第２節　遺構

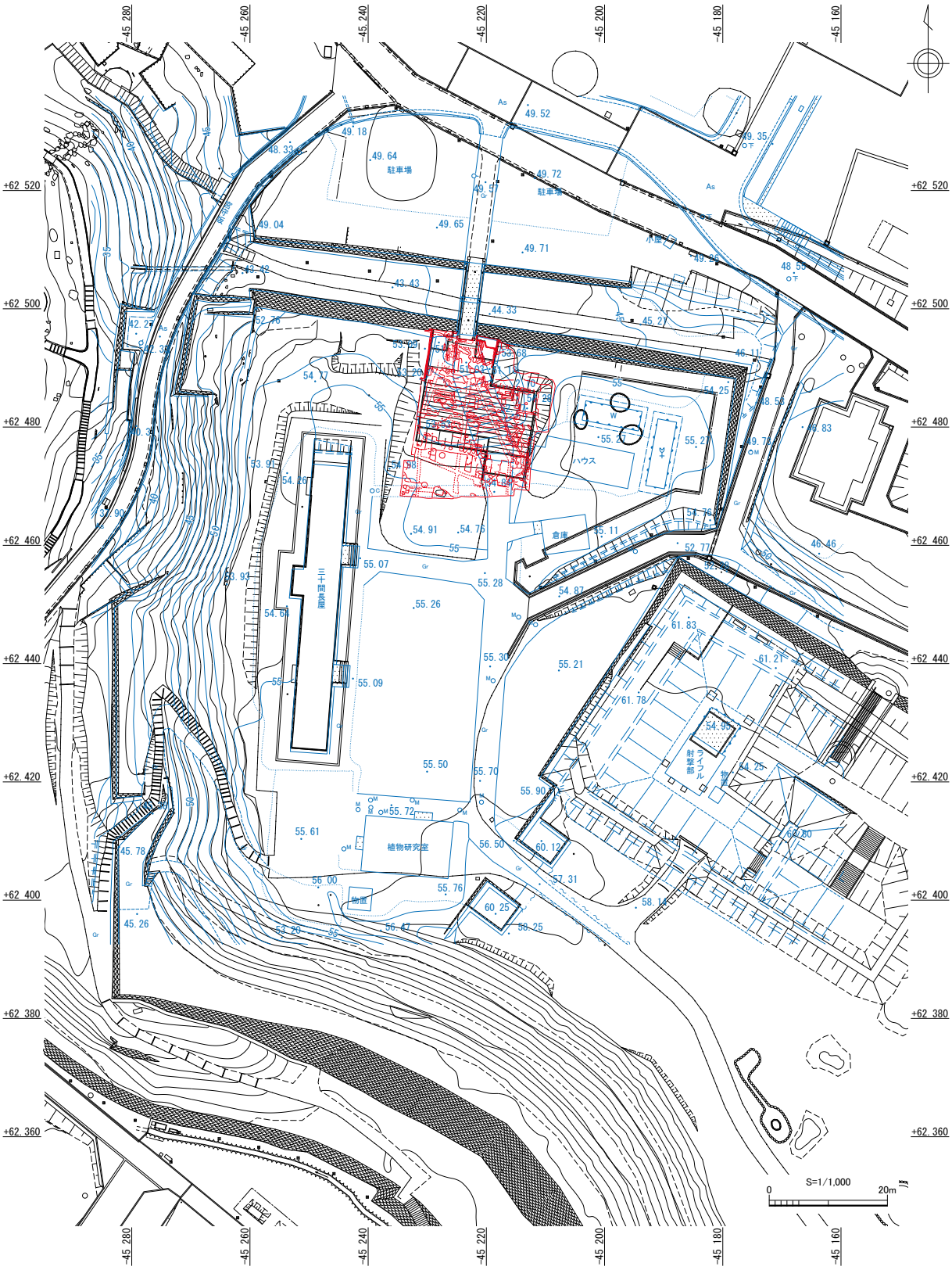
１．階段

（１）調査前の状況　（第14図）

調査着手前の階段の状況は、近世絵図の描写と異なり、両側に斜面に斜行した袖石を有した形状で、袖石間の幅はおよそ5.5ｍであるが、踏面自体は斜面に直交し、その状態での長さ（奥行）は12.7ｍを測った。段数は10段を数え、踏面先端には直方体状の石材（延石）が据えられていた。階段両脇の袖石の外側は、郭面に向かって緩やかに上る斜面となっており、地表上では石垣は階段下方・極楽橋詰両脇にのみ認められた。第２章で言及した通り、明治41年（1908）からしばらくのうちに、近世初期以来の階段（雁木坂）が改修を受けたものと考えられる。

（２）検出遺構の状況　（第16 ～ 23図）

遺存状況　近代階段の両脇は、主に近世後期～近代初期の陶磁器・瓦片を多く含む土層が堆積していた。このうち初期の陸軍兵営で使用された、アラビア数字を絵付した碗・皿類が最も年代の下る一群とみられ、明治末頃と推定される改修時期とも対応する。この近代土層を除去したところ、延石の大



黒:現況図　青:整備前(調査時)　赤:調査区

第12図　本丸附段　調査区位置図

黒:現況図　青:整備前(調査時)　赤:調査区

絵図:「御城中壱分碁絵図」(横山隆昭氏蔵)　文政13年(1830)

第13図　本丸附段　調査区・絵図照合図

半は撤去され、ごく少数残るのみであった。延石が失われている箇所でも、階段状を呈する地形が認められ、延石背後の裏込めに起因すると推定される土層も所々で検出されているが、流出や攪乱等により、延石の厳密な位置を特定するのは難しい状況であった。

近代階段部分については、基本的に近世階段の一部を踏襲したものであり、食い違い状を呈する近世階段の上部・下部の出入り口を繋げた範囲のみ残し、両側の延石の大部分を撤去し袖石で区切った状況が明らかになった。踏襲した中央部分についても、近世階段の２段分をもって１段とし、間の延石は撤去されていた。また近世階段の最上段の南に更に１段分付加したり、周囲石垣撤去部分（1415E（SW06）北端）に延石を延長している箇所があった。この他腐植土層の上に位置するもの、斜面を縦断して設置された鉄管が下方を潜るもの等もみられ、近代以後に据え直されている場合も想定される。しかしこれら延石の多くは、その下位に地盤の整形や根固め石が残っていて、両脇に残存する発掘した延石やその抜き取り痕等と考えられる階段状の地形に対応しており、近世時の位置を示すものである。以上のような遺構の状況からみて、階段の段数は18段を数える。

なお近世階段は、上下の出入口の他は、階段側に面を持つ石垣で囲繞されていた。近代に多くの部分が撤去され、地上露呈部はわずかであったが、発掘により下部・根石・抜き取り痕等が検出された。

全体形状と規模（第16 ～ 21図） 平面形については、中央部が東西に長い矩形で長大であるのに対し、出入口部は相対的に狭く、さらに下方（北・極楽橋側）は西に、上方（南・本丸附段郭側）は東に寄せ、軸をずらして設けられており、全体として鍵形を呈する。周囲の石垣の存在とも併せ、桝形としての体裁を残したものと考えられる。

斜面に直交する南北長は、階段本体部分（第１段（最下部）前面～第18段（最上部）前面）で12.7ｍ、第１段前面から極楽橋詰まで6.4ｍ、最大幅18.8ｍ、第１段下面から第18段までの高さ3.9ｍを測る。段（踏面）の奥行は一定ではないが、およそ70 ～ 80㎝に復元される。下部の第３～７段東端には南北3.5ｍ、東西2.3ｍの平場があり、主軸に直交し、西から東へと上る段（踏面）が派生している（第21図）。なお第３段東部と直交する東第１段は、踏面奥行きが狭くなっている。

基盤の構造（第22図） 階段の第１段から第13段付近までは、基本的に地山を整形した削平面が基盤となっている箇所が多い。第14段より上位では、地山面に展開する遺構を造成土（整地土）で覆い、嵩上げを行って基盤を形成している。階段に関する造成土（整地土）については、下方延石の裏込め土、上方延石の裏込め土・基盤層とも整地土Ｃ層として一括したが、当初構築以後の改修とも関連し、近世後期以後の出土遺物を含む箇所もある。

階段第１段より北側の平坦面（Ｉ区）については、地山が急激に北に向かって下降している。この落ちを埋めるように下層に栗石、上層には造成土（整地土Ｄ層）が施されている。本層の範囲は、不明瞭な部分もあるが、およそ壇状施設の内側、通路部分に相当する。

階段第18段より南側には、整地土Ｃ層に先行、もしくは一体的に施工された造成土（整地土Ａ層）が展開する。また整地土Ｂ層は、最上段付近において部分的に認められる土層で、整地土Ａ層を切って充填されており、近世後期の陶磁器や釉薬瓦を伴う。階段の東辺である1412W（SW03）南端部（第17・25図）は、整地土Ｂ層中に収まっており、石垣の改修等に関連して施工された可能性がある。

段の状況と延石（第22・23図） 各段は、近代の改変が著しいが、近代階段として踏襲された箇所の他、抜き取りを免れた延石（第１・２段、第４・５・８段東、東１・２段等）、延石抜き取り痕とみられる段状の遺構、裏込め土とみられる土層、裏込め・根固め石等が所々に検出された。これらは部分的で、確定し難いものも含むが、階段地割が規格的であることを考慮し、近世後期の絵図描写も参考にすると、各段は奥行き70 ～ 80㎝で、主たる南北方向では18段を数えるものと判断される。

各段の最前方（北端）には、略直方体状の延石が配置される。延石は第12段の２基の凝灰岩を除き戸室石製の切石材で、背面・側面・下面の調整は粗い。また枘穴のある転用材もみられる。長さは

35cm ～２ｍとばらつきがあるが、１～1.5m程度が半数を占める。幅は30 ～ 40cm前後、高さ（各段自体の高さとほぼ同じ）20 ～ 30cmが主体である。階段下方では、延石の裏込めとして地山との間に主に褐色～暗茶褐色の砂質土が施されるが（第23図）、上方では、扁平な川原石が裏込め・根固めとして用いられる割合が高い（第20・22図）。背後の踏面は土の面のままの仕上げとなる。階段下方の一部では、最上面に黄灰褐色～灰褐色砂質土が薄く堆積している箇所がみられる。

多くの延石が抜き取られる中、東西軸の段と南北軸の段とが直交する東側平場付近は比較的良好に遺存していた（第21図）。これによると、主軸第４段と東第１段とが同一レベルを形成し、主軸第７段と平場が対応することとなる。ただし平場の西辺（東第４段最前方）は、通常の延石ではなく、幅12 ～ 15cmほどの細長い材で仕切っている。

なお延石は厳密には一直線に揃っておらず、第１段、第２段、第18段等で顕著である。経年的に変形したことが推定されるが、当初から多少の出入りがあった可能性もあり、特定しがたい。また同一段でも高さに10cm以上の差がみられる場合もあり、第22図では平均化した数値を示した。

この他、第16段については、延石・根固め石の範囲が、後述する石垣1415E（SW06）の北延長ラインよりさらに西へ広がっており（第20図）、近世後期の絵図の描写と整合していない。第16段西端の延石については、裏込めから釉薬瓦が出土しており、近代に拡張した可能性があるが、近世後期絵図の景観以前に遡る造作である可能性も考えられる。

構築時期　下層遺構や造成土の出土遺物や周囲の石垣基礎部分の特徴等から、構築時期は17世紀前半と判断され、寛永８年（1631）大火後の本丸一帯の土地利用の在り方からみても整合する。

２．階段関連遺構

（１）石垣　（第17 ～ 20・24 ～ 27図）

階段は出入り口付近を除き、石垣で囲繞されている。石垣石材は戸室石（角閃石安山岩）である。

1412E（SW01）（第18・19・24図）　郭の西辺において東面する。極楽橋詰から階段第３段付近まで遺存するが、これより南側は損壊し、地上部分にはみられない。今回の調査では北側で基礎部分、南側でⅣ区1415N（SW08）西端に至る抜き取り痕が確認された（第18図）。現存南北長8.9m、抜き取り痕を含めた延長19.4m、階段第１段下面から現存南側天端までの高さ2.54mを測る。

石垣の地盤については、階段第１段付近以南は約15°勾配の地山斜面、以北は地山が急激に下がっており、栗石の充填域に相当する。階段第１段の北2.5 ～ 4.5m付近、標高50.7mあたりでは、根石とみられる粗加工石の上端が一部検出された。この上位からは切石積となり、正面を多角形に整形した石材による乱切合わせの手法が採られており、金沢城石垣編年５期（寛文～元禄年間）の特徴をもつ。

1411W（SW02）（第19・24図）　郭の東辺北部において西面する。現状では北端のみに天端が残り、南側の大半は階段状に石材の取り外しを受けている。現存長5.1m、階段第１段下面（50.75m）から天端（54.37m）までの高さ3.62mを測る。検出最下段とその上段北寄りは粗加工石積で、最下段の下端は未確認であるが、階段第１段下面のレベル等からみて根石の可能性がある。石材は大型の刻印を有するものもあり、石垣編年４期（寛永年間）の所産である。これより上位は５期の切石積となる。

1412W（SW03）（第17 ～ 19・24・25図）　郭の東辺南部において西面する。発掘前は地上に露呈していなかった。南端から北に5.94m分、高さも一段分が検出されたのみで、損壊が著しい。南端の石垣石の設置状況については（第25図）、整地土Ａ層を掘り込み、整地土Ｂ層と一体的に施工されている。また北部の地盤（北に下降する斜面）においては、根石抜き取り痕は未検出である。現存部北端の根石と思しき石垣石材は粗加工石、南端の５石分は切石である。南端の切石積は、整地土Ｂとの関連から近世後期に改修を受けていることが明らかであるが、石垣編年５期の特徴が保持されている。

1411S（SW07）（第18・19図）　SW02南端から東へ連続し、SW03北端に至る石垣で南面する。発掘によ

り検出された根石が遺存するのみであるが、両端を欠くものの長さ6.4ｍを測り、郭本来の側辺長に近い。地盤は東に向かって緩やかに上っており、東端の根石上面は西端より90cm程高い。根石は粗加工石で、大型の刻印を有するものがある。控えの長さは40cm ～ 80cm程度である。

1414S（SW04）・1413S（SW05）（第19・24図） 郭北辺、極楽橋詰の両側に位置する。後述するように、絵図に見える壇状施設南側を削平した面に構築されたとみられ、近代以後に下る可能性が高い。なお橋詰東側の1413S（SW05）では、近代の排水溝が石垣西半の下を通っている。ただし両石垣とも、橋側に面した端部の短い南北辺については、壇状遺構の地割を踏襲していると推定される。

1415E（SW06）（第17・24・25図） 1415N（SW08）東端より南へ直角に折れ、東側のSW03南部と相対し、東面する。発掘で検出した石垣で、1415N（SW08）との出角から南へ4.86ｍ遺存していた。櫓台状施設の東辺に相当する。地盤は北から南に向かい上がっており、北側では２～３段（検出高75 ～ 120cm）、南端では根石１段が残る。天端の高さについては不明である。

石垣は平面的には階段第18段（最上段）以南に対応している。最上段に続く近世地表面（本丸附段郭面）は標高54.5 ～ 6ｍを測り、石垣残存レベルに近い。検出した石垣は、近世において概ね地中に埋もれている状態であり、近代の石垣の撤去は、ほぼ地表面より上位で行われていることを示す。

第25図は、北端角石から南へ３石目付近の東西土層断面である。この箇所では階段構築以前の土層（Ⅲ層）であるＥ層を基盤として根切りされ、根石下端が据えられている。掘方の上位には整地土Ａ層が施され、これが近世地表面の基盤層となっている。

石垣石材は、北端角石（上面のみ検出）を除き、粗加工石で構成されている。ただし、ほぼ地表より上となる残存上面より上位に切石が積まれていた可能性も考えられる。

1415N（SW08）（第17・20・26・27図） 1412E（SW01）南端から東へ連続し、1415E（SW06）北端に至る石垣で北面する。地上部分は失われており、長さ10.9ｍ、幅1.75ｍの溝状抜き取り坑の埋土を取り去ったところ、東側では築石の根石５基と東端出角部分が掘方内に遺存していた（第17・20図）。櫓台状施設の北辺に相当する。掘方前方（北側）は地山を基盤とし、緩やかな下降から急傾斜となる壁面で、背後（南側）は直立気味に立ち上がる（第26・27図）。幅1.75ｍ、深さ59cmを測る。掘方内の埋土は、下部に栗石が多く含まれるが粘質土が混在し、上部前面には互層状の粘質土が認められる。西側では根石ごと撤去されており、一部を除き石垣裏込め層もほとんど残っていないが、掘方形状は東側と大きく変わらず、抜き取りは掘方を若干広げる程度で行われたようである。なお1412E（SW01）との接続部分では（第27図）、根石前面（北側）に黄褐色粘質土・粘砂質土や、黒褐色粘質土との混土層が互層状となる部分があり、平面がやや広がった掘方における埋土と判断した。

根石は粗加工石で、寸法は控えの長さ88 ～ 106cm、幅64 ～ 83cmと比較的均質である。大型の刻印をもつものがあり、石垣編年４期に属する。

（２）門柱基礎（根固）（第28図）

階段（雁木坂）上方（Ⅴ・Ⅶ区）において東西２基の遺構が検出された。西側の遺構は1.4×1.2ｍ、東側は90×85cmを測る略円形を呈し、ともに10 ～ 40cm台の礫が集中していた。東西間の芯々距離は約3.5ｍを測る。礎石が抜き取られ、根固の礫が残存した状況と考えられる。

近世前期の「金沢城絵図」（第６図）では、西側石垣（1415E（SW06））と東側石垣（1412W（SW03））を結ぶ塀があり、中程に門の表記がある。1415E（SW06）に接して礎石状の自然石があり、絵図にみえる塀の基礎に対応すると思われる。絵図では３間半との表記があるが、これは両石垣間の距離に近い数値であり、出入口部分は描写からみて２間（3.64ｍ）程度と推定され、遺構とも概ね一致する。近世後期の絵図に門は見えず、宝暦９年（1759）大火で焼失し以後再建されなかったと考えられる。

なお「金沢城本丸・東丸之図」（第100図）・「御城中壱分碁絵図」（第13図）等では、階段最上部の南側に東西方向の区画が描かれている。発掘調査では、第18段前端から約5.3ｍ南のあたりで浅い溝

状の窪みが一部検出されており、関連する可能性がある。

（３）壇状施設　（第17 ～ 19図）

壇状施設とした方形区画は、南（階段上部の第16・17段西側、Ⅳ・Ⅴ区）及び北西・北東（階段下方の東西石垣1412E（SW01)･1411W（SW02）に接したもの、Ⅰ区）の３箇所ある。このうち南の施設（第17・18図）については、絵図では東側の階段出入口部より低い表現となっており、遺構面も東側より若干低いことが確認されたが、明確な区画は検出できなかった。

北西部･北東部の施設（第19図）については､近世後期の「御城分間御絵図」「金沢城本丸･東丸之図」（第100図）等によると前者が２区画、後者が１区画で構成されていて、寸法が記載されている。調査着手前の状況では、極楽橋詰の東西に南北幅１～ 1.6m、高さ80cm ～ １m程の築地状の高まりがあり、橋側及び南側に低い石垣が巡っていた（1414S（SW04）・1413S（SW05））。この高まりが壇状施設の名残と見られる。これより南側は近代の土層が堆積しており､区画上部は撤去され攪乱を受けていたが、東西石垣の根石に近いレベルで区画の基礎と考えられる石材列が部分的に検出された。

北西部では、階段の足掛かりと類似する延石が、1412E（SW01）と概ね平行して２列検出された。より石垣に近い西側では、長さ98cmの規模のものが１基のみの構成であるが、石垣との距離は2.48mで、絵図に描写された２区画のうち南側のものと寸法がおおよそ一致する。ただし北辺・南辺については不明である。この東側にも延石３基で構成される長さ2.08mの石列があり、北側の築地状高まりの東端（1414S（SW04）東端）とおおよそ揃っている。絵図とは合致しないが、近代初期までに、区画を修復・拡張した可能性も考えられる。

北東部では、1411W（SW02）と平行して石垣石材３基が検出された。これらは北側の１基は石垣根石と同様、面を外側に向けて設置されていたが、南側の２基の長軸は区画のそれと揃った状態であった。なお南端の１基と中央の１基とは約50cmの間隔がある。石垣石材列自体の長さは3.12mで、1411W（SW02）からの距離（東西幅）は列外側で3.50mを測る。これは北側の築地状高まりの東西幅（1413S（SW05）長）ともほぼ一致する寸法で、高まりを含めた南北の長さは4.53mを測る。絵図に記載された区画の寸法に対し、東西で30cm、南北で60cmほど大きいことになるが、基礎であることを考えれば、おおよそ対応しているとも考えられる。

（４）排水溝　（第28図）

階段下方、Ⅰ区で２条の排水溝が検出された。

SD01　Ⅰ区の中央西寄りに位置する暗渠の石樋で、概ね階段の南北軸に一致する。北側先端部が損壊を受け、反対側も失われている可能性があり、現存長は2.65mを測る。整地土D層を基盤とし、幅１m程の掘り方内に収められている。周囲の近世面の遺存状況が悪く確定的ではないが、蓋上部のレベルが整地土D層上面にほぼ対応しているようである。

石組は北側の下段と南側の上段で構成される。下段本体は凝灰岩を凹型に成形したもので、ほぼ同形の二石で構成される。全長1.78m、北半90cm、南半88cm以上、幅外法36 ～ 38cm、内法20 ～ 23cm、高さ外法17cm、内法13 ～ 14cmを測る。底面勾配は約4.2°である。蓋石は不定形な凝灰岩や戸室石の石材が用いられている。

上段本体は北側大部分と南端に細分される。北側の部材は下段と類似した作りで、下段末端近くに積まれている。長さ67cm、幅外法38cm、内法21cm、高さ外法21cm、内法13cmを測る。先端部については継ぎ手状の加工があり、その部分は幅29cm、高さ16cmを測る。南端の構造は、凝灰岩製底板と左右側板を組み合わせたもので、造作は粗い。長さは35cmを測る。下段全体の底面勾配は約2.8°である。なお下段最前方に不定形の蓋石が一部遺存していた。

これらの部材は、主として転用材と考えられる。年代については、後述する木樋暗渠SD02を切っており、近世後期に設置されたと推定されるが明確ではない。

SD02　SD01の東で検出された溝状の遺構で、暗渠の木樋跡である。長さ2.24m、最大幅60cm、深さ30～40cmを測る。階段の南北軸に対し、西へ大きく振り、前方（北側）がSD01に切られている。本体の材質はほとんど腐朽しているが、材を打ち留めていた鉄釘が30点ほど出土した。

断面は箱状を呈し、上層は褐色、下層は暗褐色の砂質土が充満していた。鉄釘の多くは壁面に沿い、頭部を上あるいは下にした状態で並んで検出され、木質がわずかに付着していた。これらの状況から、断面矩形の木樋の痕跡と判断される。木樋痕の外側に掘方は見つかっておらず、判然としない点もあるが、整地土と一体的に埋め込まれた可能性も考えられる。

頭部を上とする鉄釘に付着する木質は、ほとんどの場合上下に分かれ、下段が溝に平行、上段が直交していた。頭部を下とする鉄釘では、上下の別は判別し難いが、木質は概ね溝に対し全体に平行していた（第28図下、第97～99図）。これらから前者は蓋板と側板、後者は底板と側板を連結していたと判断される。蓋板については、あるいは長大ではなく、長手方向が樋に直交する板を並べていたのかも知れないが、上記傾向と齟齬をきたす少数例を含め、木樋構造の詳細はなお検討を要する。

SD02の年代に関しては、SD01に先行することの他、初期の整地土と一体的に構築されている可能性があり、近世前期に存続したとみられるが明確ではない。

３．下層遺構・土層

（１）地山削平段・盛土　（第20・22図）

調査区南東部（Ⅴ区中部）において、階段造成土（整地土Ａ・Ｂ）の下位で検出された。トレンチ１において、主として南北方向の奥行や断面が確認されたが、東西方向の広がりははっきりしない。

地山削平段は、階段14段以南に重複し、三段の平坦面が認められる。南北の奥行は全体で４m以上、高さは50cmを測る。下方北側の第１・２段の奥行は50～60cm、上段の第３段（標高53.81～67m）は2.5m以上である。なお、第３段は、北端が高まりとなっており、南側は11～14cm低い。

第３段の上部には、細かな互層状を呈する黄褐色・黒褐色粘質土で構成される台形状の盛土が構築されている。盛土は基底部南北長2.38m、高さ40cmを測る。盛土上面の南北1.8mの範囲は、径10～20cm前後の平たい川原石で覆われていた。第３段北端の高まりの形状等からみて、削平段と盛土は一体的に形成された可能性が考えられる。

これらの遺構は、全体の平面形状は明瞭ではないが、階段（雁木坂）とは断面形状が整合的ではなく、別の遺構と判断される。階段（雁木坂）に先行する通路の一部であり、上段の盛土は東西に延びる土居状の施設となる可能性も考えられる。

また盛土南端は、上部に炭層を伴い17世紀前半の土師器皿がまとまって出土する造成土（Ｅ層）によって覆われている。この造成土はやや広い範囲で認められ、盛土と一体的とは考え難い。なお土師器皿は当該期の一群においては新相を呈し、年代について1630年前後を目安としつつやや下る可能性も考えられ、階段の構築時期の詳細とも関わって検討を要する。

（２）SK04　（第29図）

調査区中央部（Ⅳ区東部～Ⅴ区西部）、階段（雁木坂）第11～15段の下位で検出された。当該範囲周辺については、地山とは異なる土質の広がりが認められ、下層遺構の存在が想定されたため、ほぼ東半分に相当する部分を対象に検出・掘削を行い、遺構の構造を確認した。

本遺構は斜面等高線に直交する軸を有し、北側にやや広がる台形状の平面形を呈する。北端はわずかに近代以後の攪乱を受けているが、南北3.69m、東西4.3m以上を測る。南側・東側の壁面は垂直に近く、底面から斜面下方の北側へは緩やかな段状を為している。西壁は未確認であるが、東壁と同様に推定される。南壁の高さは1.47m、北端と底面最深部との差は49cmを測る。

埋土下部はおよそ水平で、上部は若干北へ向かって下降する。しまりの弱い黒褐色・暗黄褐色・褐

色・明茶褐色を呈する砂質・粘砂質土が主体である。出土資料のうち、銅釘（第99図）等は上層からの混入品とみられ、主体となるのは17世紀前半の土師器皿や陶磁器、燻瓦である（第35・36・90図）。

通路状遺構の脇に位置し、これに何らかの関連をもつと考えられ、切岸のような機能も想定されるが判然としない。

（３）SX01 （第30図）

調査区南東部（Ｖ区東部）、階段（雁木坂）第12 ～ 15段下位で検出された。本遺構上面には近代階段の東辺を限る袖石が設けられていて、これより東側はとくに攪乱が著しく、このため本遺構の大部分は、本来の形状が失われていると考えられる。

検出した平面は南北に長い長円形を呈し、断面の形状としては南側が高く急傾斜で、北側は緩やかで低く立ち上がる。この部分は長径3.22m、幅1.91m、南壁の高さ88cmを測る。埋土下部は大きな単位の土層で構成され、土層には異なる土質のブロックが混在する。上部には均質で比較的小さな単位の粘質土が堆積している。出土資料は少ないが、17世紀前半の土師器皿がある（第36図）。

西側のSK04と通路状の遺構を挟んで相対する位置にあり、同様の性格を有していた可能性がある。

４．その他の遺構（調査区南西遺構群）（第26・31図）

調査区南西部で検出された、階段（雁木坂）に直接関連しないと考えられる遺構群である。ただし櫓台状施設の範囲と重複するSK05・P01については、階段（雁木坂）存続中（櫓台改修等に伴う場合）の他、これに先行する可能性もある。

（１）SK01 （第31図）

Ⅵ区南西で検出された。調査区外に伸長するため全形は不明であるが、検出部分の平面は不整円形を呈し、底面も凹凸が著しい。南北3.98m以上、東西1.42m以上、深さは浅くやや平坦な部分で25 ～ 37cm、ピット状の部分で57 ～ 93cmを測る。近代の釉薬瓦が出土している（第91図T009）が混入品とみられ、出土資料（第37 ～ 41図）の主体は18世紀後半～ 19世紀前半の年代を示している。

（２）SK02 （第31図）

Ⅵ区南西で検出された。東西方向の溝状を呈し、西端がSK01、東端が近代のピットと重複する。SK01との前後関係は判然としない。長さ2.34m、最大幅1.05m、最深部53cmを測る。

（３）SK03 （第31図）

Ⅵ区南部で検出された。調査区外に伸長するため全形は不明であるが、検出部分の平面は略三角形状を呈し、東西3.56m以上、南北2.2m以上を測る。南部の底面はやや平坦で深さ13 ～ 26cmと浅いが、北部の一角は一段低い長円形を呈し、長さ2.36m、幅1.47m、深さ92cmを測る。

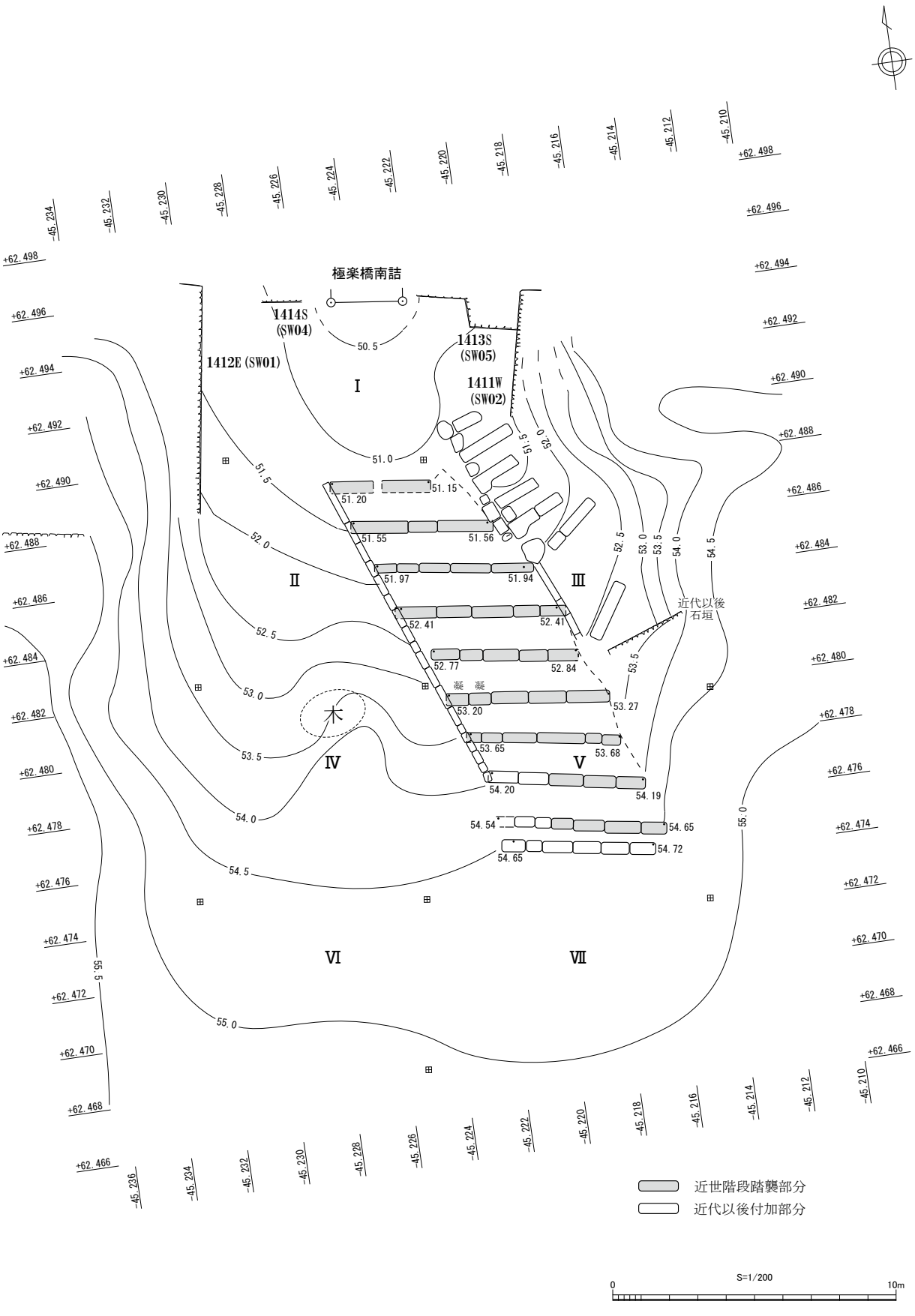
土師器皿（第42図P049）や越前赤瓦の平瓦・熨斗瓦の破片（第91図）が出土しており、遺構は17世紀後半頃形成された可能性がある。

（４）SK05 （第26図）

Ⅶ区北部、トレンチ３で検出された。平面は略円形と推定され、断面は逆台形を呈する。検出長は1.97m、深さは80cmを測る。階段造成と一体に施工された整地土Ａを基盤とする。北側の1415N(SW08)との構築時の切合い関係は明らかではないが、1415Nの石垣石材抜き取り時の掘り込みにより北端を削られている。内部には栗石・戸室石破片等が充填されている。

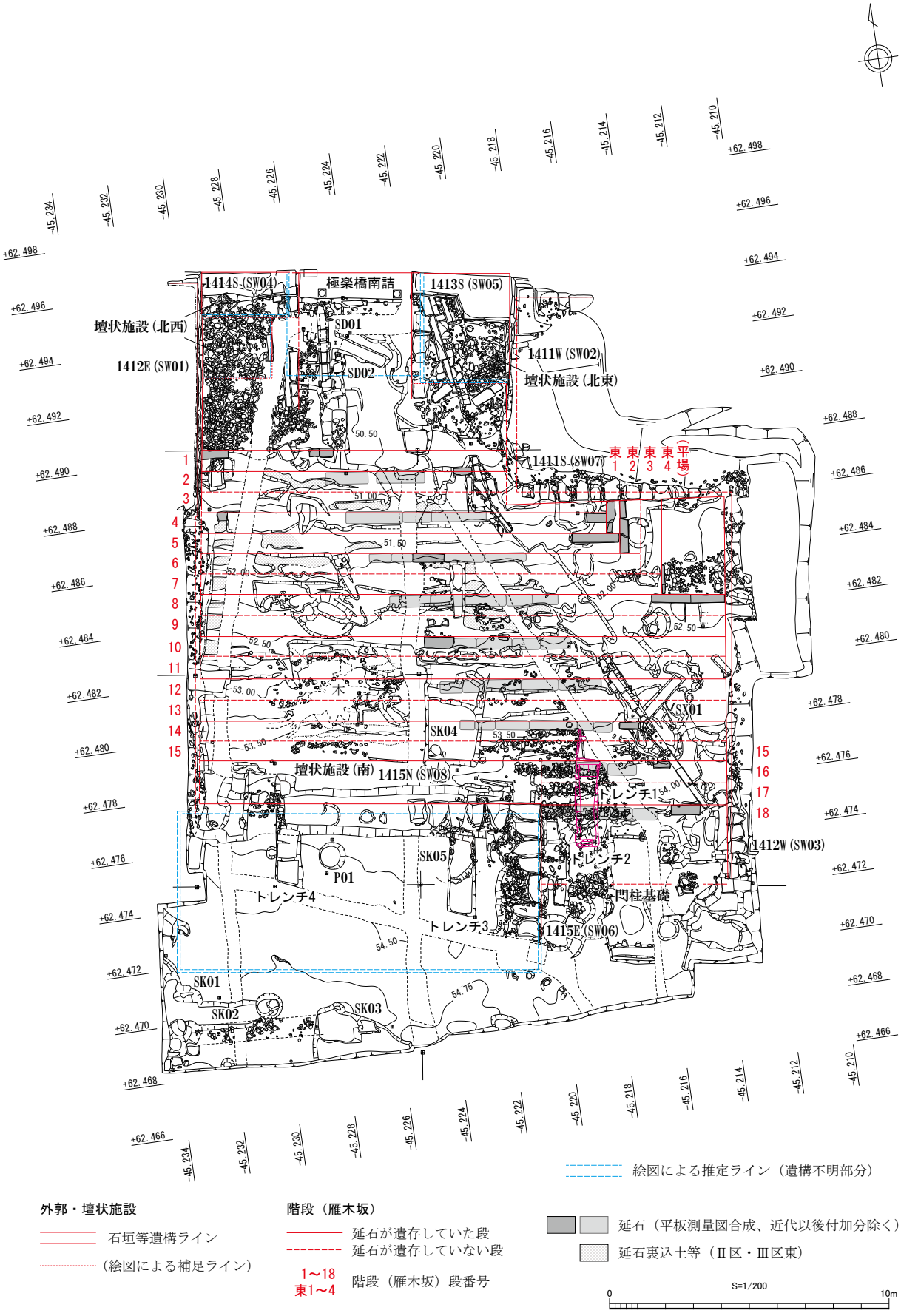
（５）P01 （第31図）

Ⅵ区北部、1415N（SW08）のすぐ南側で検出された平面円形のピットで、直径96cm、深さ84cmを測る。近世に属するとみられるが、詳細な時期は判然としない。

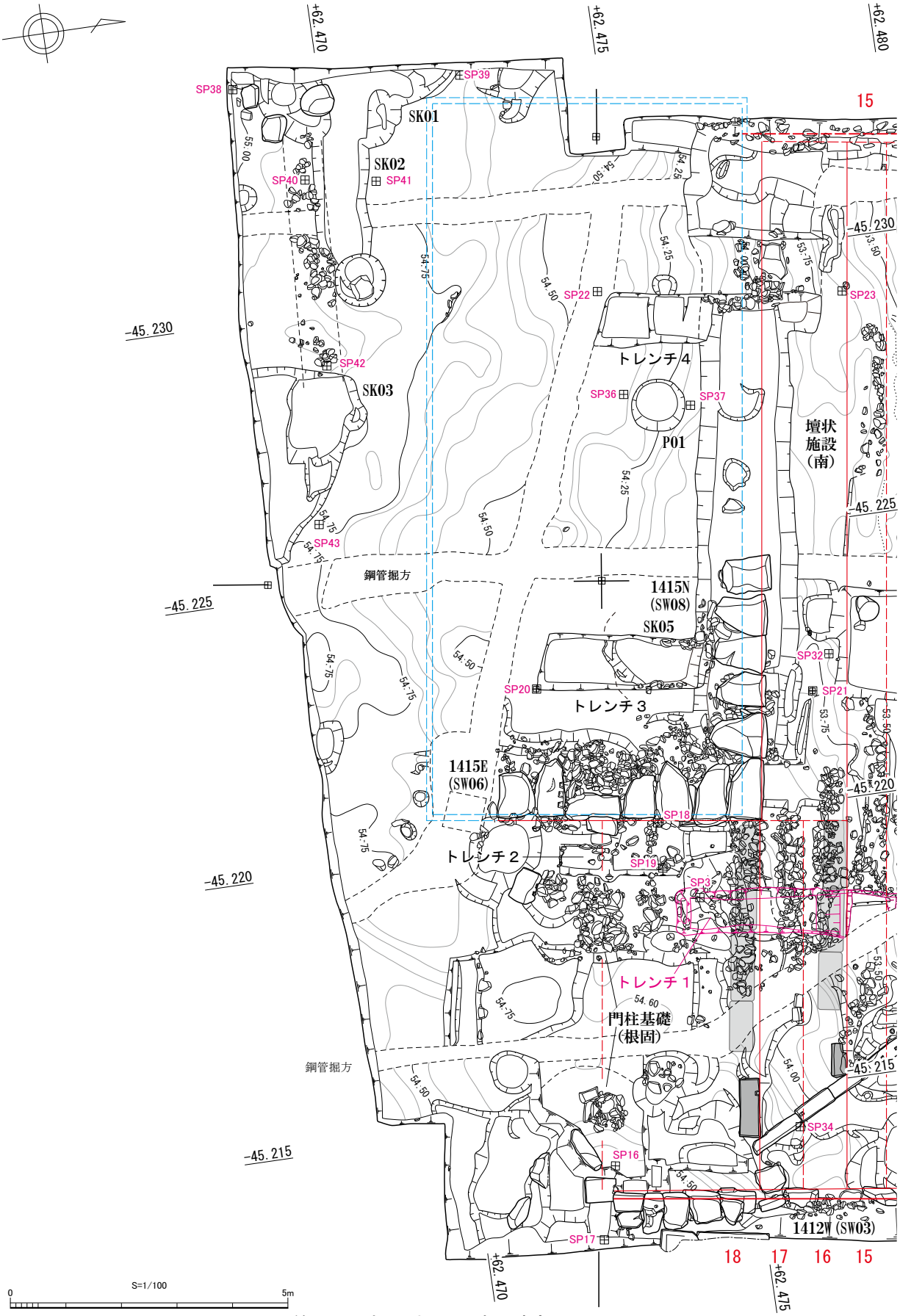


第14図　本丸附段　調査前状況平面略図

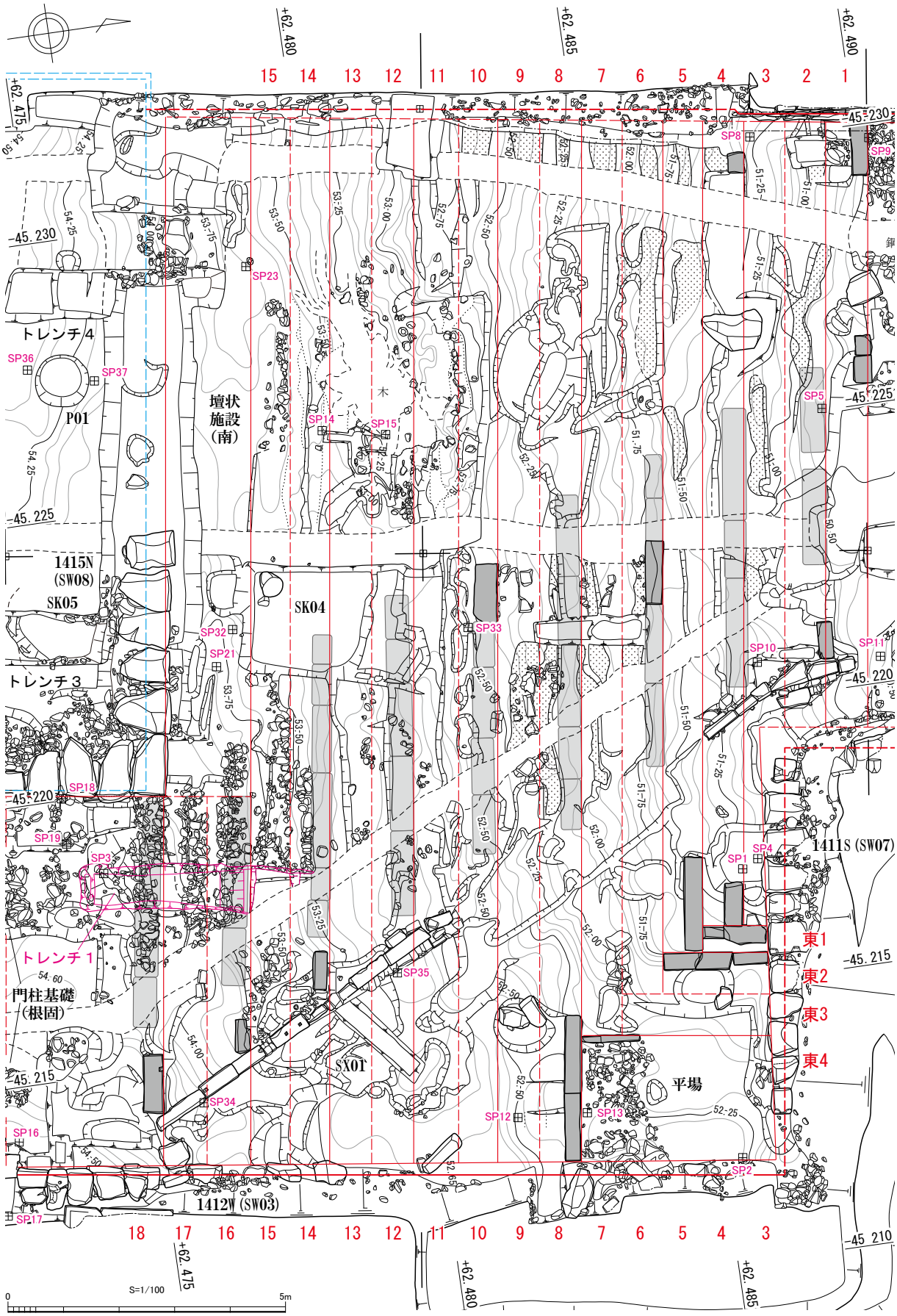
第15図　本丸附段　調査区全体図



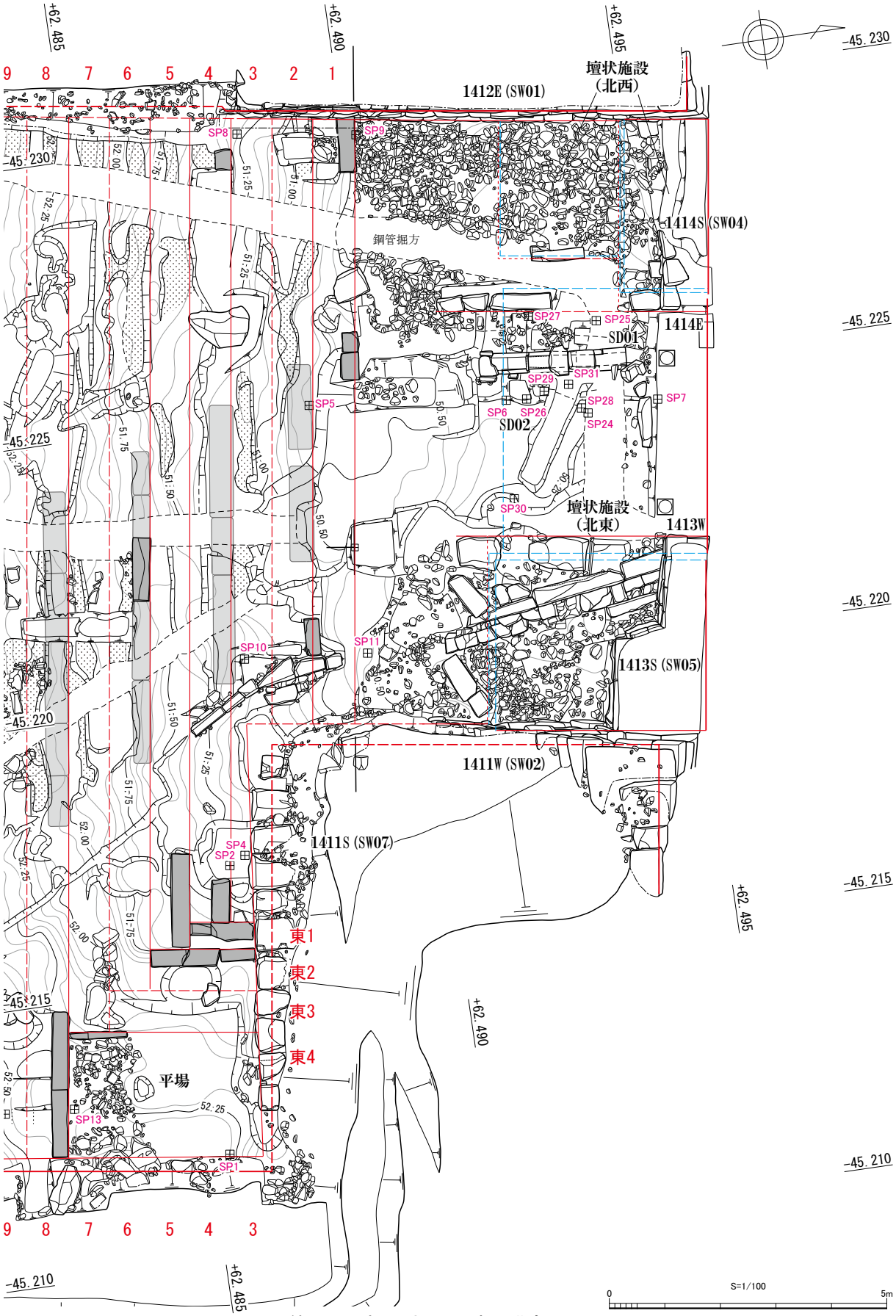
第16図　本丸附段　遺構等位置図



第17図　本丸附段　調査区南部平面図

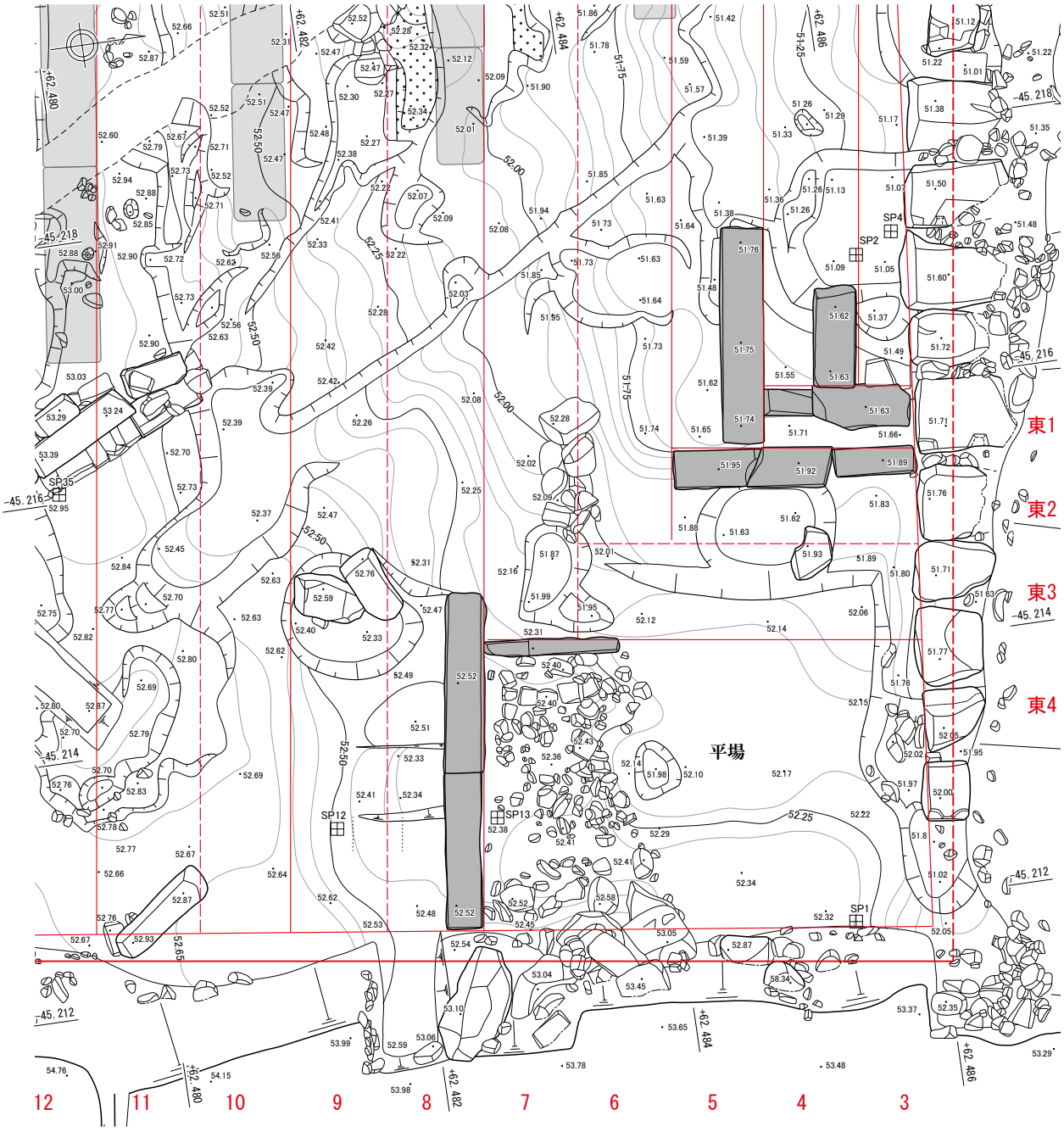


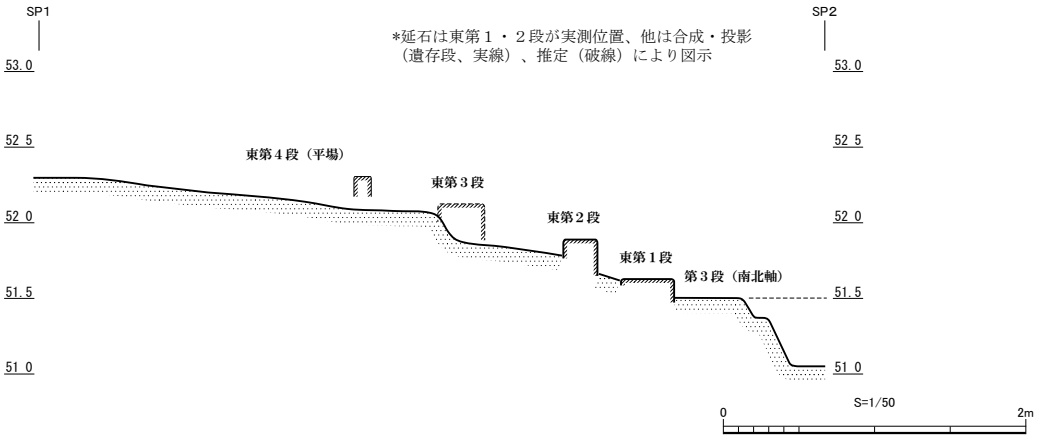
第18図　本丸附段　調査区中央部平面図



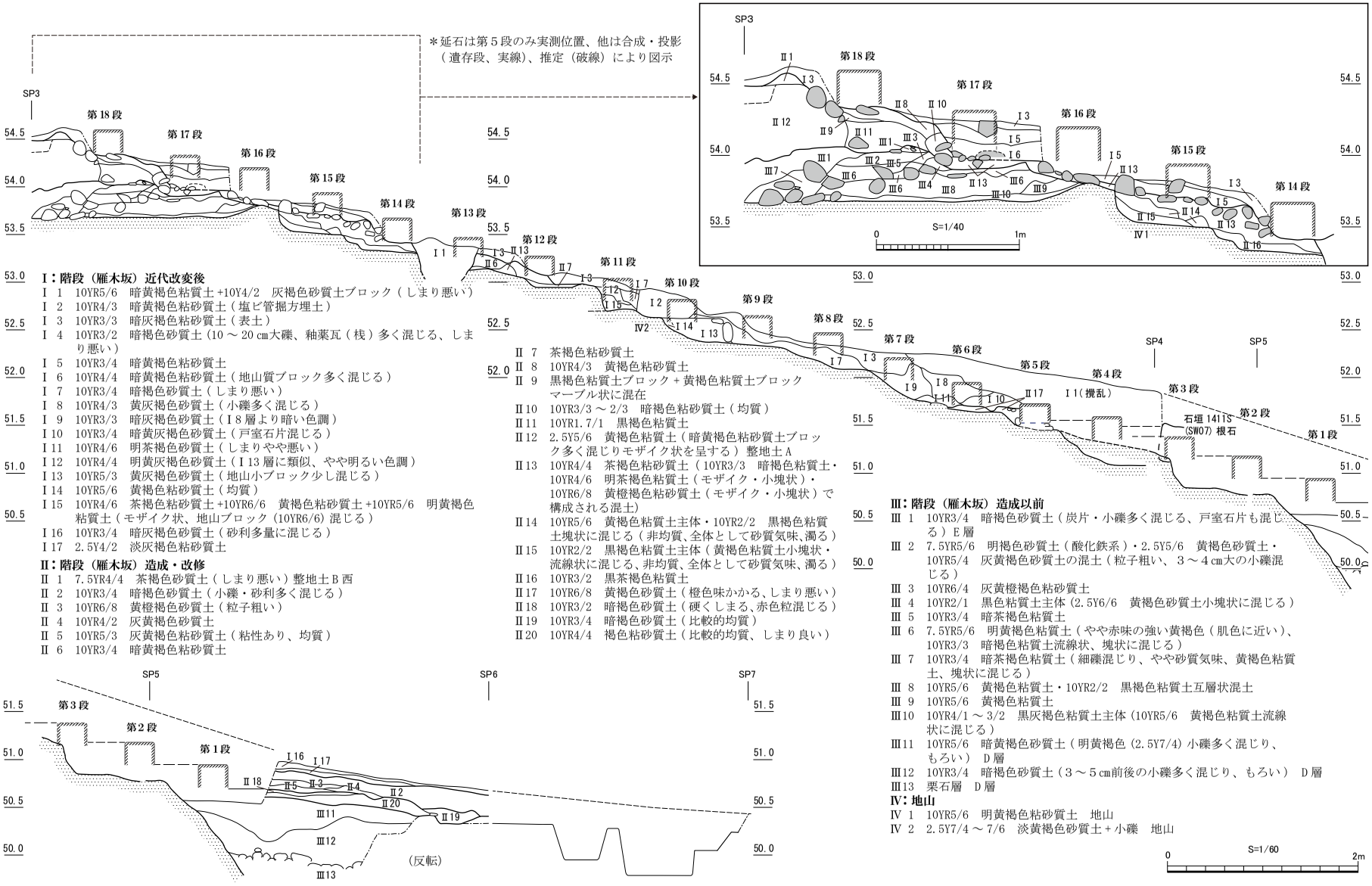
第19図　本丸附段　調査区北部平面図

第20図　階段(雁木坂)南東部(上部)平面図





第21図　階段（雁木坂）北東部（下部）平場付近平面図・断面図



Ⅰ：階段（雁木坂）近代改変後

Ⅰ 1　10YR5/6　暗黄褐色粘質土+10Y4/2　灰褐色砂質土ブロック（しまり悪い）
Ⅰ 2　10YR4/3　暗黄褐色粘砂質土（塩ビ管掘方埋土）
Ⅰ 3　10YR3/3　暗灰褐色粘砂質土（表土）
Ⅰ 4　10YR3/2　暗褐色砂質土（10～20㎝大礫、釉薬瓦（桟）多く混じる、しまり悪い）
Ⅰ 5　10YR3/4　暗黄褐色粘砂質土
Ⅰ 6　10YR4/4　暗黄褐色粘砂質土（地山質ブロック多く混じる）
Ⅰ 7　10YR3/4　暗褐色砂質土（しまり悪い）
Ⅰ 8　10YR4/3　黄灰褐色砂質土（小礫多く混じる）
Ⅰ 9　10YR3/3　暗灰褐色砂質土（Ⅰ8層より暗い色調）
Ⅰ10　10YR3/4　暗黄灰褐色砂質土（戸室石片混じる）
Ⅰ11　10YR4/6　明茶褐色砂質土（しまりやや悪い）
Ⅰ12　10YR4/4　明黄灰褐色砂質土（Ⅰ13層に類似、やや明るい色調）
Ⅰ13　10YR5/3　黄灰褐色砂質土（地山小ブロック少し混じる）
Ⅰ14　10YR5/6　黄褐色粘砂質土（均質）
Ⅰ15　10YR4/6　茶褐色粘砂質土+10YR6/6　黄褐色粘砂質土+10YR5/6　明黄褐色粘質土（モザイク状、地山ブロック（10YR6/6）混じる）
Ⅰ16　10YR3/4　暗灰褐色砂質土（砂利多量に混じる）
Ⅰ17　2.5Y4/2　淡灰褐色粘砂質土

Ⅱ：階段（雁木坂）造成・改修

Ⅱ 1　7.5YR4/4　茶褐色砂質土（しまり悪い）整地土Ｂ西
Ⅱ 2　10YR3/4　暗褐色砂質土（小礫・砂利多く混じる）
Ⅱ 3　10YR6/8　黄橙褐色砂質土（粒子粗い）
Ⅱ 4　10YR4/2　灰黄褐色砂質土
Ⅱ 5　10YR5/3　灰黄褐色粘砂質土（粘性あり、均質）
Ⅱ 6　10YR3/4　暗黄褐色粘砂質土
Ⅱ 7　茶褐色粘砂質土
Ⅱ 8　10YR4/3　黄褐色粘砂質土
Ⅱ 9　黒褐色粘質土ブロック＋黄褐色粘質土ブロックマーブル状に混在
Ⅱ10　10YR3/3～2/3　暗褐色粘砂質土（均質）
Ⅱ11　10YR1.7/1　黒褐色粘質土
Ⅱ12　2.5Y5/6　黄褐色粘質土（暗黄褐色粘砂質土ブロック多く混じりモザイク状を呈する）整地土Ａ
Ⅱ13　10YR4/4　茶褐色粘砂質土（10YR3/3　暗褐色粘質土・10YR4/6　明茶褐色粘質土（モザイク・小塊状）・10YR6/8　黄橙褐色粘砂質土（モザイク・小塊状）で構成される混土）
Ⅱ14　10YR5/6　黄褐色粘質土主体・10YR2/2　黒褐色粘質土塊状に混じる（非均質、全体として砂質気味、濁る）
Ⅱ15　10YR2/2　黒褐色粘質土主体（黄褐色粘質土小塊状・流線状に混じる、非均質、全体として砂質気味、濁る）
Ⅱ16　10YR3/2　黒茶褐色粘質土
Ⅱ17　10YR6/8　黄褐色砂質土（橙色味かかる、しまり悪い）
Ⅱ18　10YR3/2　暗褐色砂質土（硬くしまる、赤色粒混じる）
Ⅱ19　10YR3/4　暗褐色砂質土（比較的均質）
Ⅱ20　10YR4/4　褐色粘砂質土（比較的均質、しまり良い）

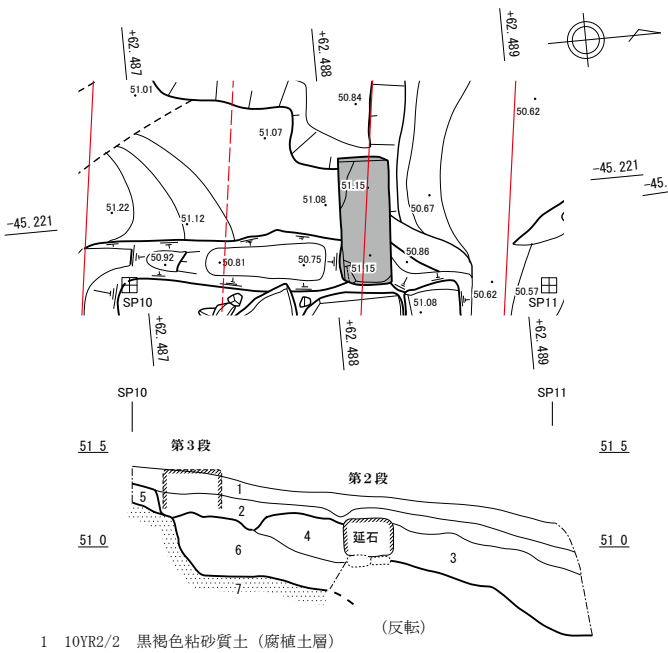
Ⅲ：階段（雁木坂）造成以前

Ⅲ 1　10YR3/4　暗褐色砂質土（炭片・小礫多く混じる、戸室石片も混じる）Ｅ層
Ⅲ 2　7.5YR5/6　明褐色砂質土（酸化鉄系）・2.5Y5/6　黄褐色砂質土・10YR5/4　灰黄褐色砂質土の混土（粒子粗い、３～４㎝大の小礫混じる）
Ⅲ 3　10YR6/4　灰黄橙褐色粘砂質土
Ⅲ 4　10YR2/1　黒色粘質土主体（2.5Y6/6　黄褐色砂質土小塊状に混じる）
Ⅲ 5　10YR3/4　暗茶褐色粘質土
Ⅲ 6　7.5YR5/6　明黄褐色粘質土（やや赤味の強い黄褐色（肌色に近い）、10YR3/3　暗褐色粘質土流線状、塊状に混じる）
Ⅲ 7　10YR3/4　暗茶褐色粘質土（細礫混じり、やや砂質気味、黄褐色粘質土、塊状に混じる）
Ⅲ 8　10YR5/6　黄褐色粘質土・10YR2/2　黒褐色粘質土互層状混土
Ⅲ 9　10YR5/6　黄褐色粘質土
Ⅲ10　10YR4/1～3/2　黒灰褐色粘質土主体（10YR5/6　黄褐色粘質土流線状に混じる）
Ⅲ11　10YR5/6　暗黄褐色砂質土（明黄褐色（2.5Y7/4）小礫多く混じり、もろい）　Ｄ層
Ⅲ12　10YR3/4　暗褐色砂質土（３～５㎝前後の小礫多く混じり、もろい）　Ｄ層
Ⅲ13　栗石層　Ｄ層

Ⅳ：地山

Ⅳ 1　10YR5/6　明黄褐色粘砂質土　地山
Ⅳ 2　2.5Y7/4～7/6　淡黄褐色砂質土＋小礫　地山

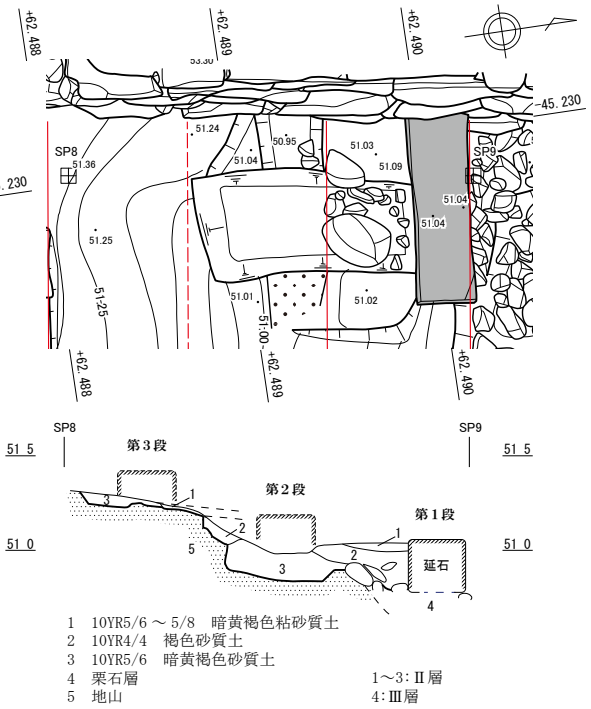
第22図　階段（雁木坂）南北軸断面図



1　10YR2/2　黒褐色粘砂質土（腐植土層）
2　10YR3/2　暗褐色砂質土
3　10YR3/3　暗黄灰褐色砂質土（粒子細かい、比較的均質）
4　10YR4/4　暗茶褐色砂質土（3 層に比べ粒子ややや粗い、色調多少明るい）
5　10YR5/6　暗黄褐色砂質土（粗砂、硬くしまる）
6　10YR5/4　暗黄褐色砂質土（5 層に比べ粒子細かく粘性やや有）
7　地山

1～3：Ⅰ層　4～6：Ⅱ層

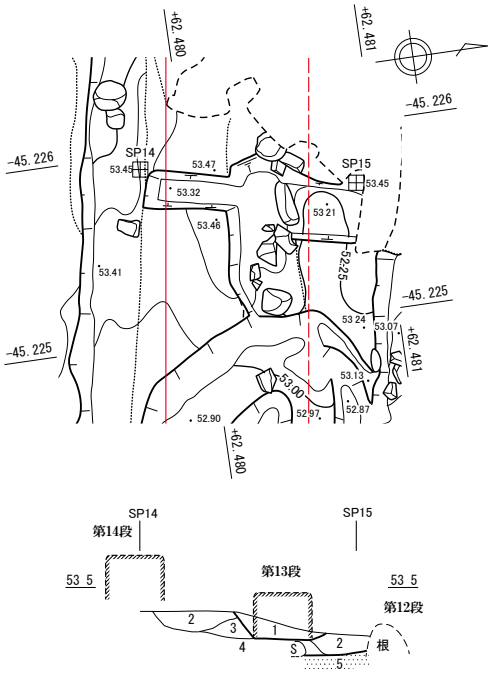
階段（雁木坂）第2段東平面図・断面図



1　10YR5/6 ～ 5/8　暗黄褐色粘砂質土
2　10YR4/4　褐色砂質土
3　10YR5/6　暗黄褐色砂質土
4　栗石層
5　地山

1～3：Ⅱ層
4：Ⅲ層

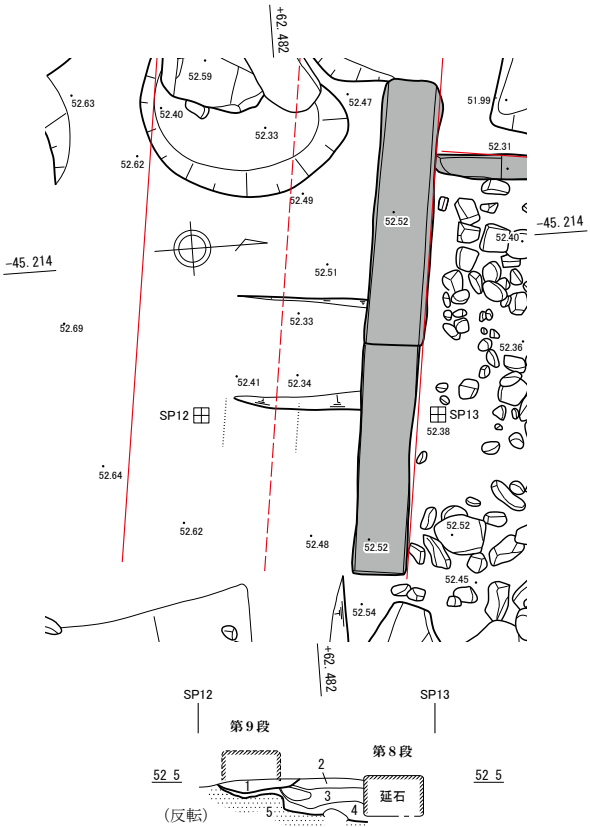
階段（雁木坂）第 1～2 段西平面図・断面図



1　明灰褐色砂質土（もろい、戸室石砕片多く混じる 延石抜取後）
2　暗褐色粘砂質土（小礫混じる、17C 末～ 18C 初陶磁器片出土）
3　茶褐色砂質土（もろい、 2 ～ 3 ㎝ 大礫混じる）
4　明茶褐色粘砂質土（小礫混じる）
5　明黄褐色粘質土（地山、ただし SK04 埋土の可能性あり）

1：Ⅰ層（延石抜取後堆積土）　2～4：Ⅱ層（2層は階段改修時の造成土か）
5：Ⅳ層（Ⅲ層の可能性あり）

階段（雁木坂）第 12 ～ 13 段西平面図・断面図



1　10YR5/4　黄灰褐色砂質土（延石抜取後堆積土）
2　10YR4/3　灰褐色砂質土（小礫混じる）
3　10YR3/3　暗茶褐色砂質土
4　10YR4/6　明茶褐色粘砂質土（小礫混じる）
5　地山

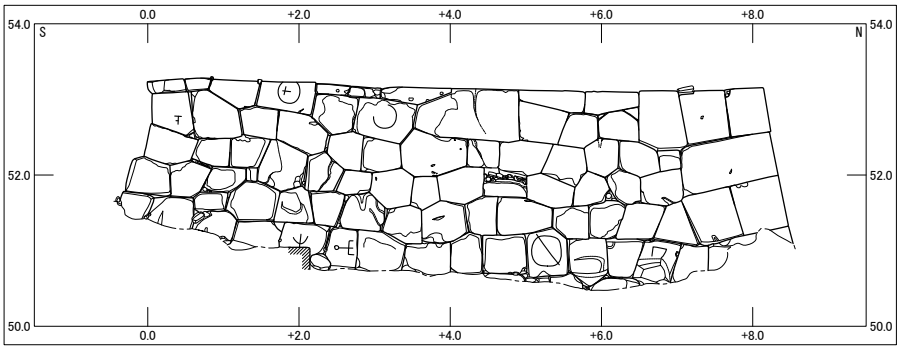
1：Ⅰ層
2～4：Ⅱ層

階段（雁木坂）第8段東平面図・断面図

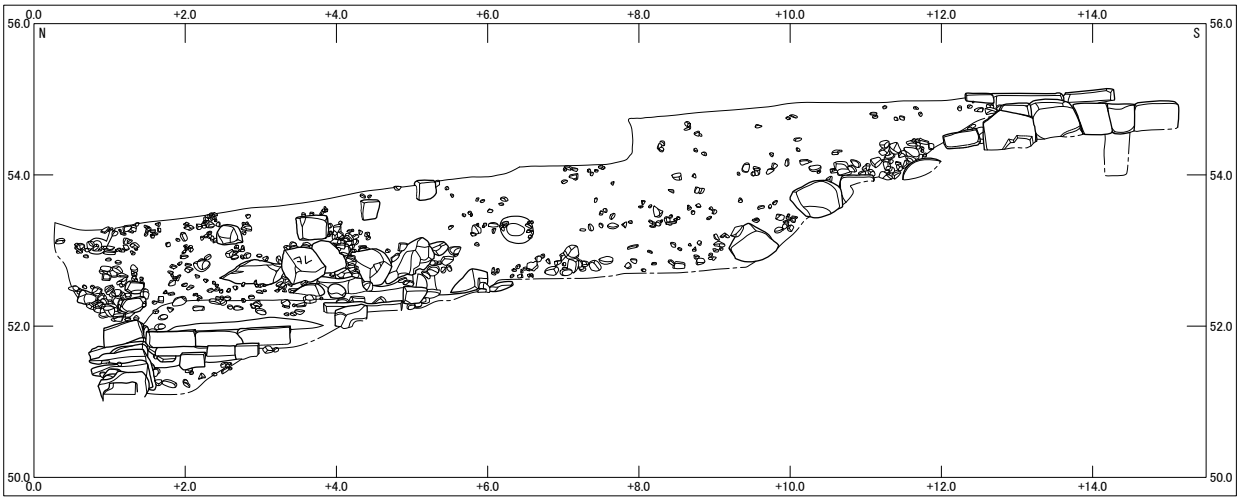
＊破線表示の延石位置は推定・投影による

S=1/40
0　2m

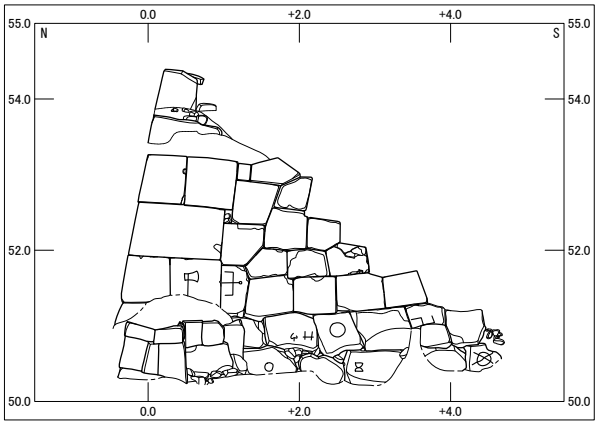
第23図　階段（雁木坂）各段平面図・断面図



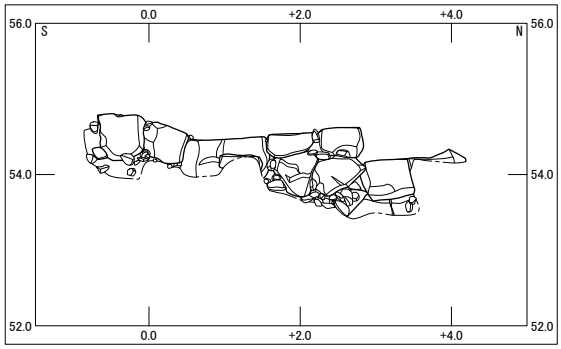
石垣1412E（SW01）



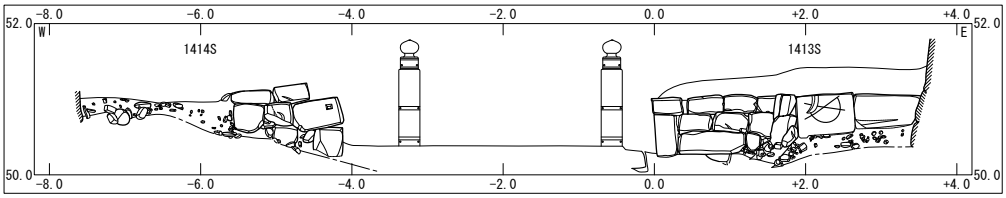
石垣1412W（SW03）



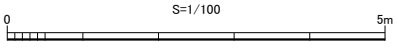
石垣1411W（SW02）・1413W（SW05西面）



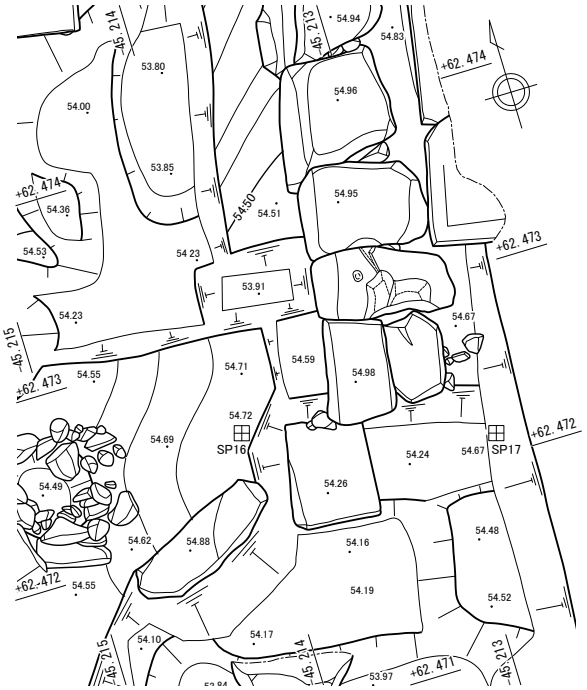
石垣1415E（SW06）

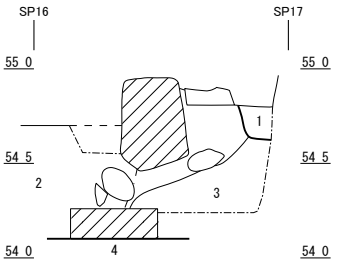


石垣1414S（SW04）・1413S（SW05）



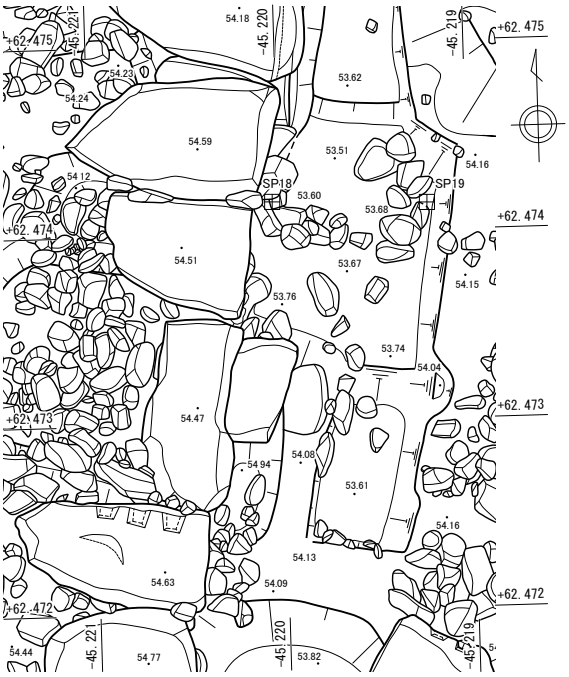
第24図　石垣立面図

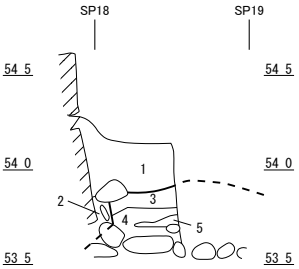




1 （攪乱）
2 7.5YR4/4 茶褐色砂質土（しまり悪い）整地土B
3 2.5Y5/6 黄褐色粘質土（暗黄褐色粘砂質土ブロック多く混じりモザイク状を呈する）整地土A
4 10YR3/4 暗褐色砂質土（炭片・小礫多く混じる、戸室石片も混じる）E層

2～3:Ⅱ層
4:Ⅲ層





（反転）

1 暗黄褐色粘砂質土（非均質、小礫（3～5㎝大多い）混じり、モザイク状黄褐色粘質土混じり、10YR5/6・10YR4/6 明褐色粘質土・10YR4/4 暗褐色粘砂質土・10YR6/6 明黄褐色粘質土モザイク状に混じる混土層） 整地土A
2 10YR4/4 暗茶褐色粘砂質土+10YR5/6 暗黄褐色粘質土混土（非均質、1層類似）石垣掘方埋土
3 10YR3/4 暗褐色砂質土（炭片少し含む、E層上部主体）
4 10YR3/4 暗褐色粘質土（粘性強く均質、下部20～30㎝大礫あり）
5 10YR4/4 暗茶褐色砂質土（4層中にレンズ状に入る、比較的均質な砂層

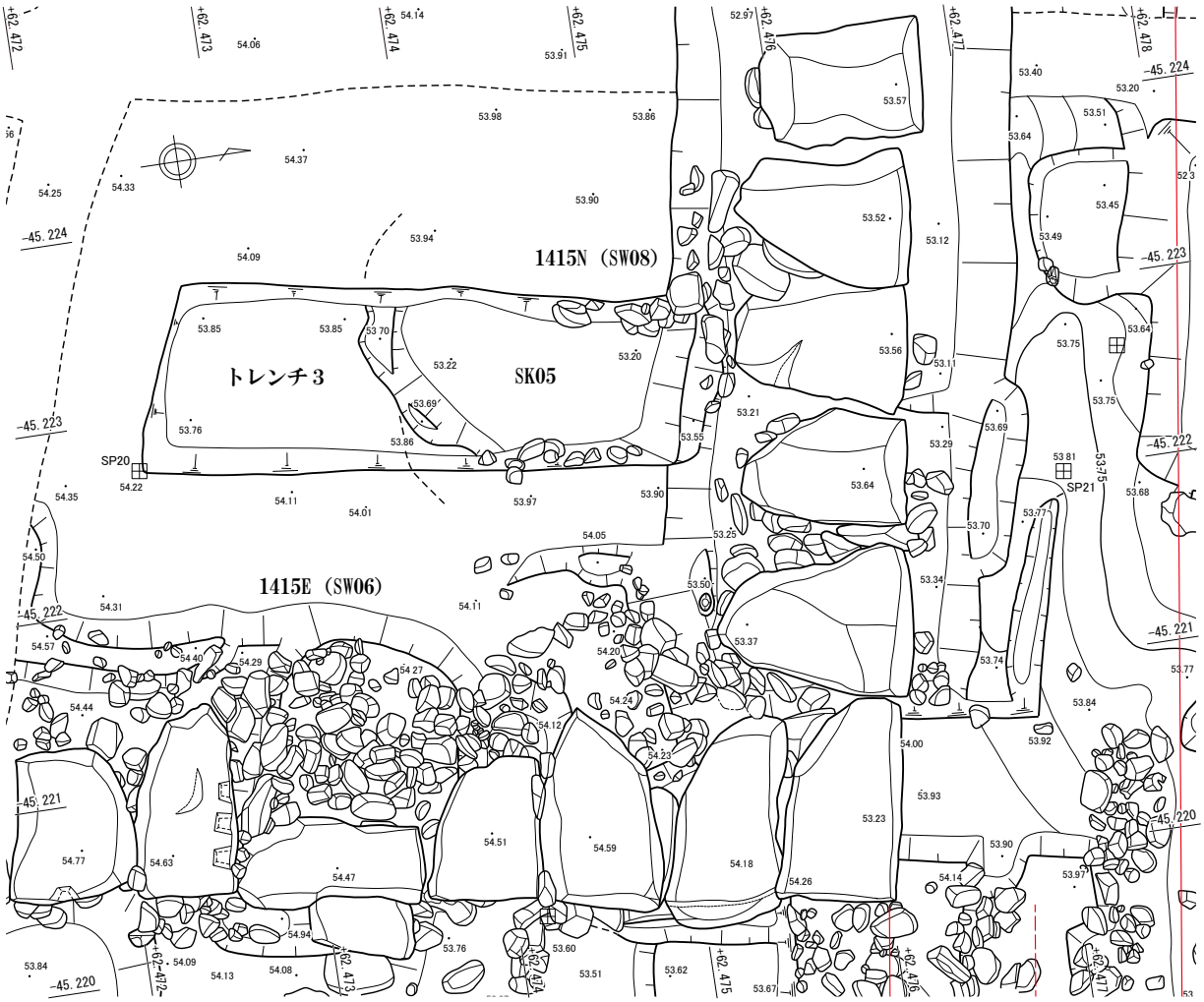
1～2:Ⅱ層
3～5:Ⅲ層

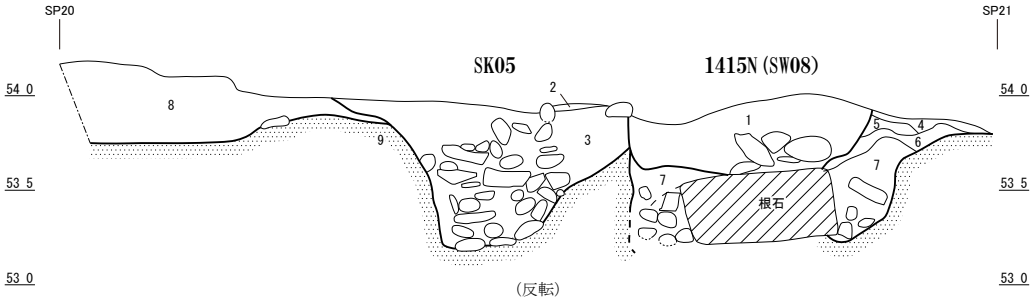
石垣 1412W（SW03）南端基礎平面図・断面図

石垣 1415E（SW06）基礎平面図・断面図

S=1/40
0 1m

第25図 石垣1412W(SW03)・1415E(SW06)基礎平面図・断面図





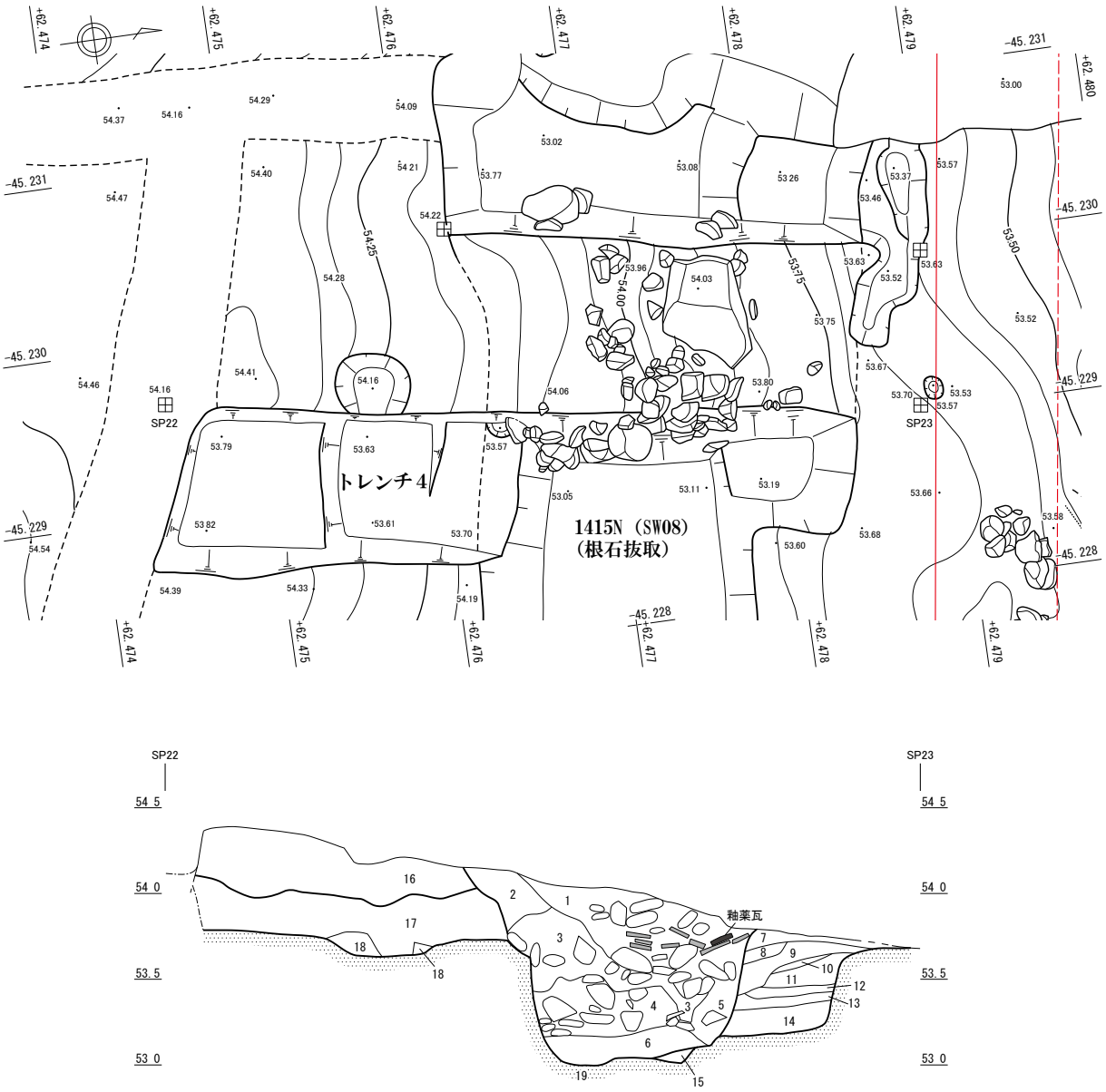
（反転）

1　10YR4/4　暗褐色粘砂質土（石垣抜取後堆積土）
2　10YR3/3　暗灰褐色粘砂質土（表土）
3　栗石・戸室石破片充填　SK05 埋土
4　10YR5/8　黄褐色粘質土、10YR4/6　暗黄橙褐色砂質土、10YR4/4　暗茶褐色粘砂質土のモザイク状混土（黒褐色粘質土ブロック含む、小礫混じる）
5　10YR3/4 ～ 10YR2/2　黒褐色粘質土、暗褐色粘質土の混土
6　10YR6/4　黄褐色粘質土（炭小片・礫混じる、非均質）
7　10YR5/6　黄褐色粘質土、10YR4/4 ～ 10YR3/4　暗茶褐色粘質土主体の混土（3 層に類似、下部礫多く混じる、1 層より黄褐色粘質土優勢）
8　2.5Y5/6　黄褐色粘質土（暗黄褐色粘砂質土ブロック多く混じりモザイク状を呈する）整地土 A
9　地山

1 ～ 2: Ⅰ層
3:SK05 埋土
4 ～ 8: Ⅱ層（4 ～ 7: 石垣掘方埋土）

S=1/40
0　1m

第26図　石垣1415N（SW08）東部基礎・SK05平面図・断面図

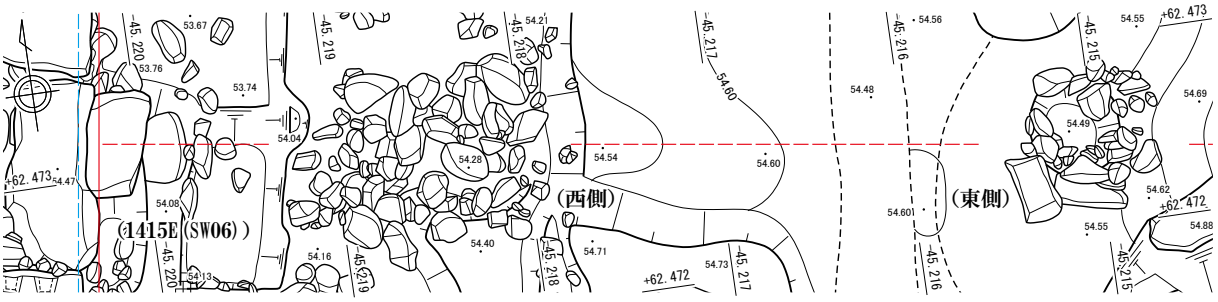


1　10YR3/4　暗褐色砂質土（礫・釉薬瓦多く混じる、しまり悪くもろい）
2　10YR5/4　暗黄灰褐色粘砂質土（炭片、黄褐色粘質土小塊（10YR6/6）等混じる、しまり悪くもろい）
3　10YR6/6 ～ 6/8　暗黄褐色粘質土塊主体（暗褐色砂質土塊（10YR3/4）混じる、礫多く混じる、しまり悪くもろい）
4　10YR3/4　暗褐色砂質土（黄褐色粘質土小塊混じる、礫多く混じる、しまり悪くもろい）
5　10YR5/4 ～ 5/6　暗黄褐色粘質土塊主体（灰褐色粘砂質土（10YR4/3）混じる、炭片少量混じる、しまり悪くもろい）
6　10YR4/3 ～ 4/4　暗褐灰色砂質土（暗黄褐色粘質土小塊（10YR5/4 ～ 5/6）上部中心に混じる、釉薬瓦出土）
7　10YR5/4 ～ 4/4　暗黄褐灰色砂質土（径２㎝前後小礫多く混じる）
8　10YR2/2　黒褐色粘質土+10YR4/6　明茶褐色粘質土　混土層
9　10YR4/6 ～ 10YR5/6　明茶褐色～黄褐色粘質土（黒褐色粘質土小塊少量混じる、小礫・細礫混じる）
10　10YR6/8 ～ 5/8　明黄～黄褐色粘砂質土+10YR2/2　黒褐色粘質土+10YR4/4　褐色砂質土　混土層
11　10YR6/8 ～ 10YR5/8　明黄～黄褐色粘砂質土＋褐色砂質土混土（細礫で構成、もろい）
12　10 層に類似（黒褐色粘質土（10YR2/2）主体）
13　11 層と同じ
14　9 層に類似　（小礫～細礫ほとんど混じらない、ややもろい）
15　10YR5/6　黄褐色粘質土（非常に細かい白色微粒子混じる、地山と同じ、黒褐色粘質土極小塊（3 ㎜程度）少量混じる）
16　2.5Y5/6　黄褐色粘質土（暗黄褐色粘砂質土ブロック多く混じりモザイク状を呈する）整地土 A
17　10YR3/4　暗褐色砂質土（炭片・小礫多く混じる、戸室石片も混じる）E 層
18　10YR3/4　暗茶褐色粘質土（細礫混じり、やや砂質気味、黄褐色粘質土、塊状に混じる）
19　地山

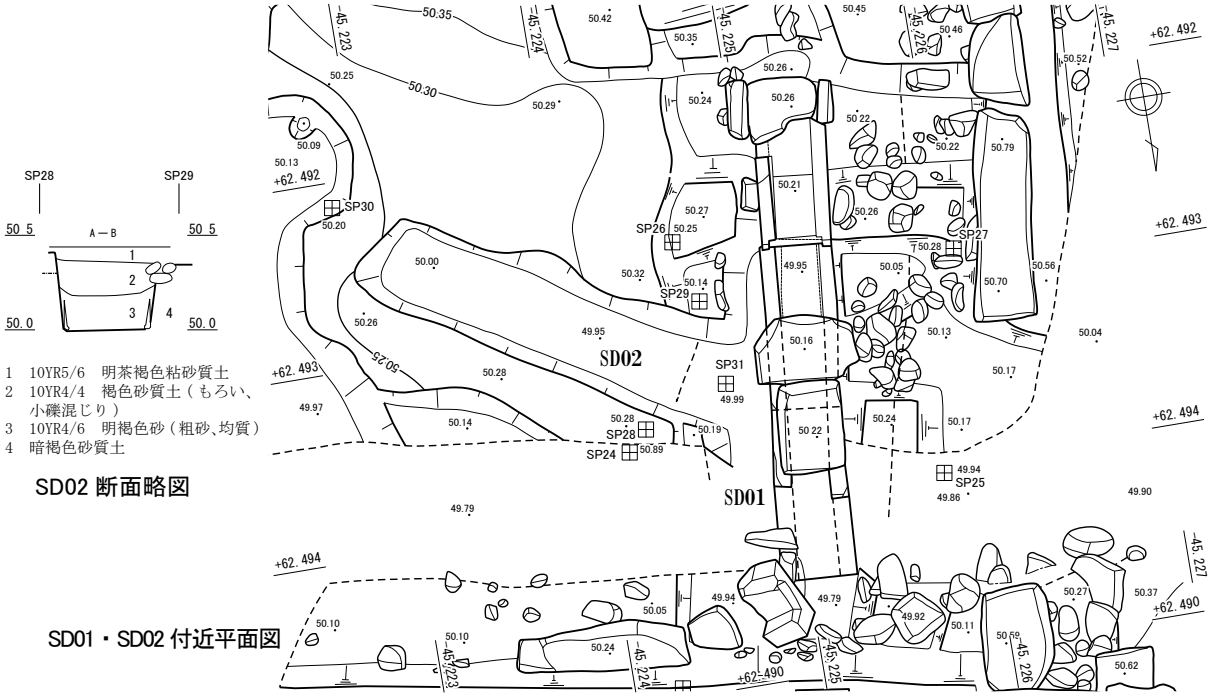
1～ 6：Ⅰ層（石垣抜取後堆積土）
7 ～ 16：Ⅱ層（7 ～ 15：石垣掘方埋土）
17 ～ 18：Ⅲ層

S=1/40
0　1m

第27図　石垣1415N（SW08）西部基礎平面図・断面図



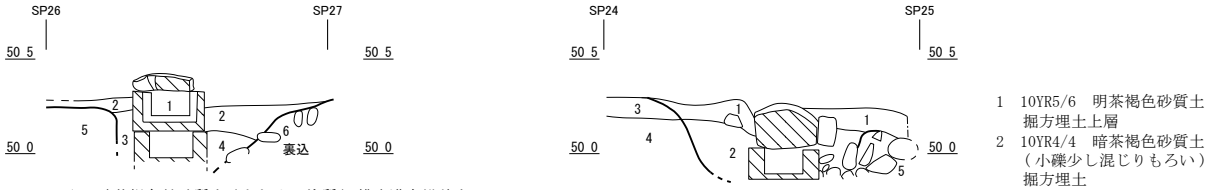
門柱基礎（根固） 平面図



1　10YR5/6　明茶褐色粘砂質土
2　10YR4/4　褐色砂質土（もろい、小礫混じり）
3　10YR4/6　明褐色砂（粗砂、均質）
4　暗褐色砂質土

SD02 断面略図

SD01・SD02 付近平面図



1　10YR4/4　暗茶褐色粘砂質土（きわめて均質）排水溝内堆積土
2　10YR5/6　明茶褐色砂質土　掘方埋土上層
3　10YR5/4　暗灰黄褐色粘砂質土（比較的均質）　掘方埋土
4　10YR4/4　暗茶褐色砂質土（10YR4/6　茶褐色粘砂質土塊状に少し混じる）　掘方埋土
5　10YR3/4　暗褐色砂質土（3～5㎝前後の小礫多く混じり、もろい）　D層　掘方基盤
6　栗石・栗石間詰土　掘方基盤

1～4：Ⅱ層　5・6：Ⅲ層

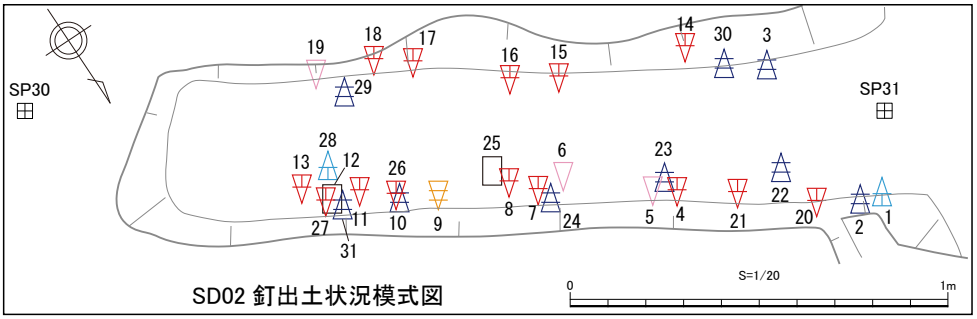
SD01 断面図（南）

1　10YR5/6　明茶褐色砂質土　掘方埋土上層
2　10YR4/4　暗茶褐色砂質土（小礫少し混じりもろい）　掘方埋土
3　10YR5/6　暗黄褐色砂質土（明黄褐色（2.5Y7/4）小礫多く混じり、もろい）　D層　掘方基盤
4　10YR3/4　暗褐色砂質土（3～5㎝前後の小礫多く混じり、もろい）　D層
5　栗石・栗石間詰土　掘方基盤

1・2：Ⅱ層　3～5：Ⅲ層

S=1/40

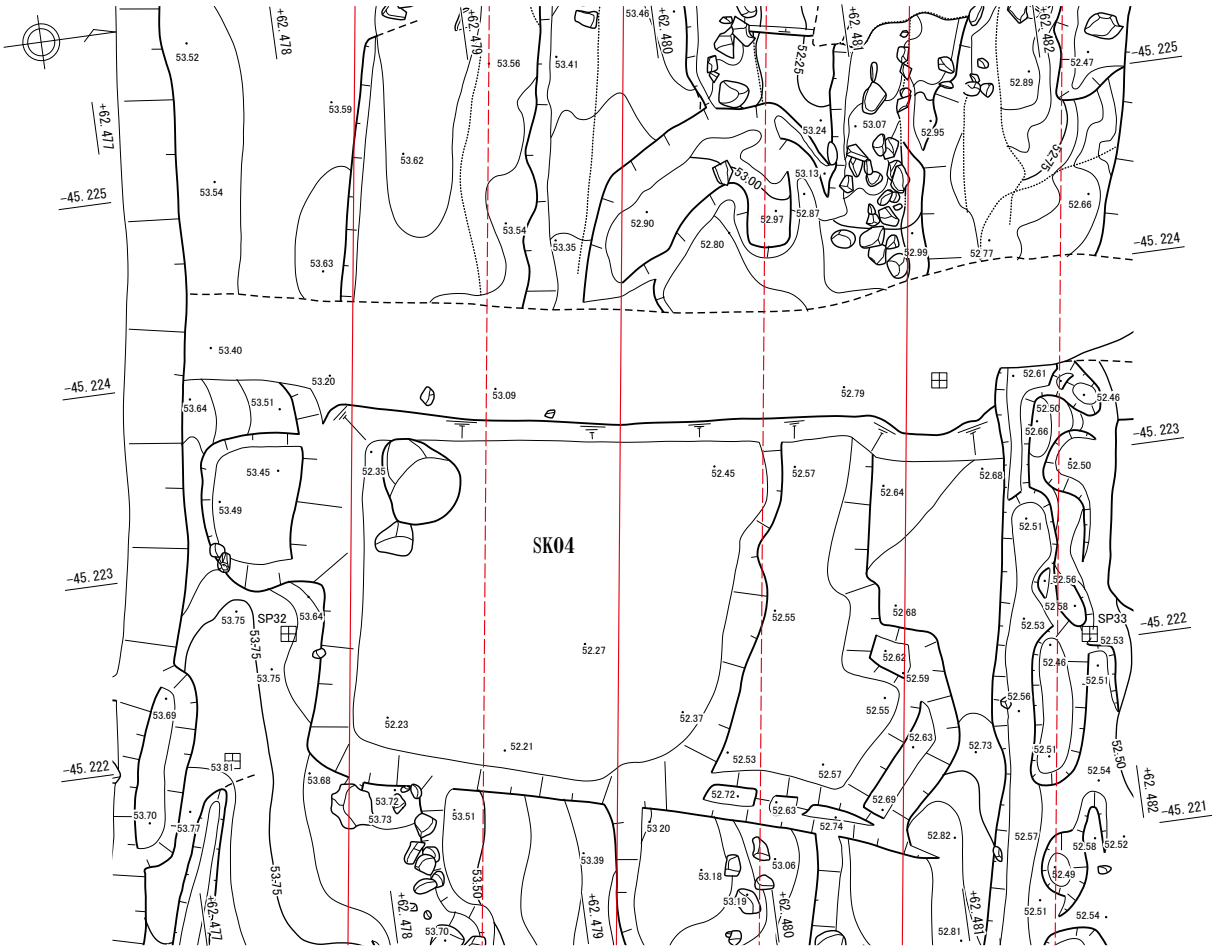
SD01 断面図（北）

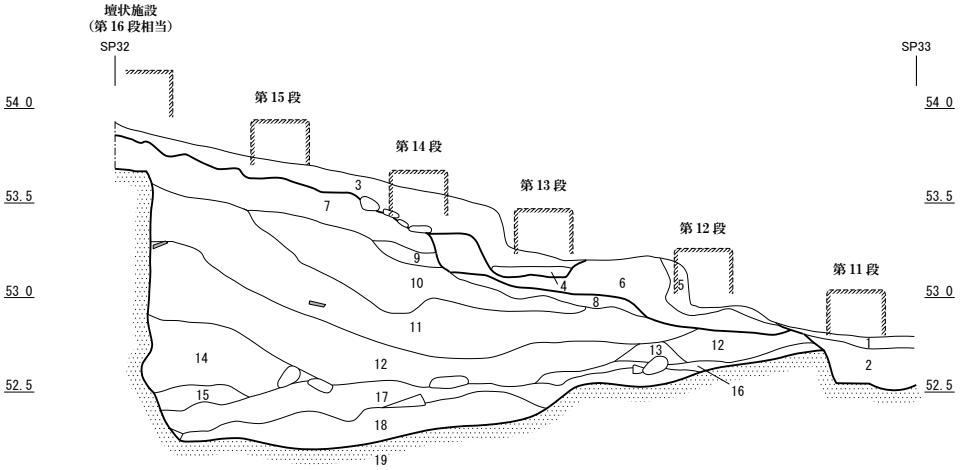


SD02 釘出土状況模式図

頭上 木質片上下交差（下部が溝に並行）
頭上 木質片上下並行（溝に並行）
頭下 木質片方向不明
頭下 木質片上下交差（上部が溝に並行か）
頭下 木質片上下並行（溝に並行）
横転・木質方向不明等

第28図　門柱基礎（根固）・排水溝平面図・断面図





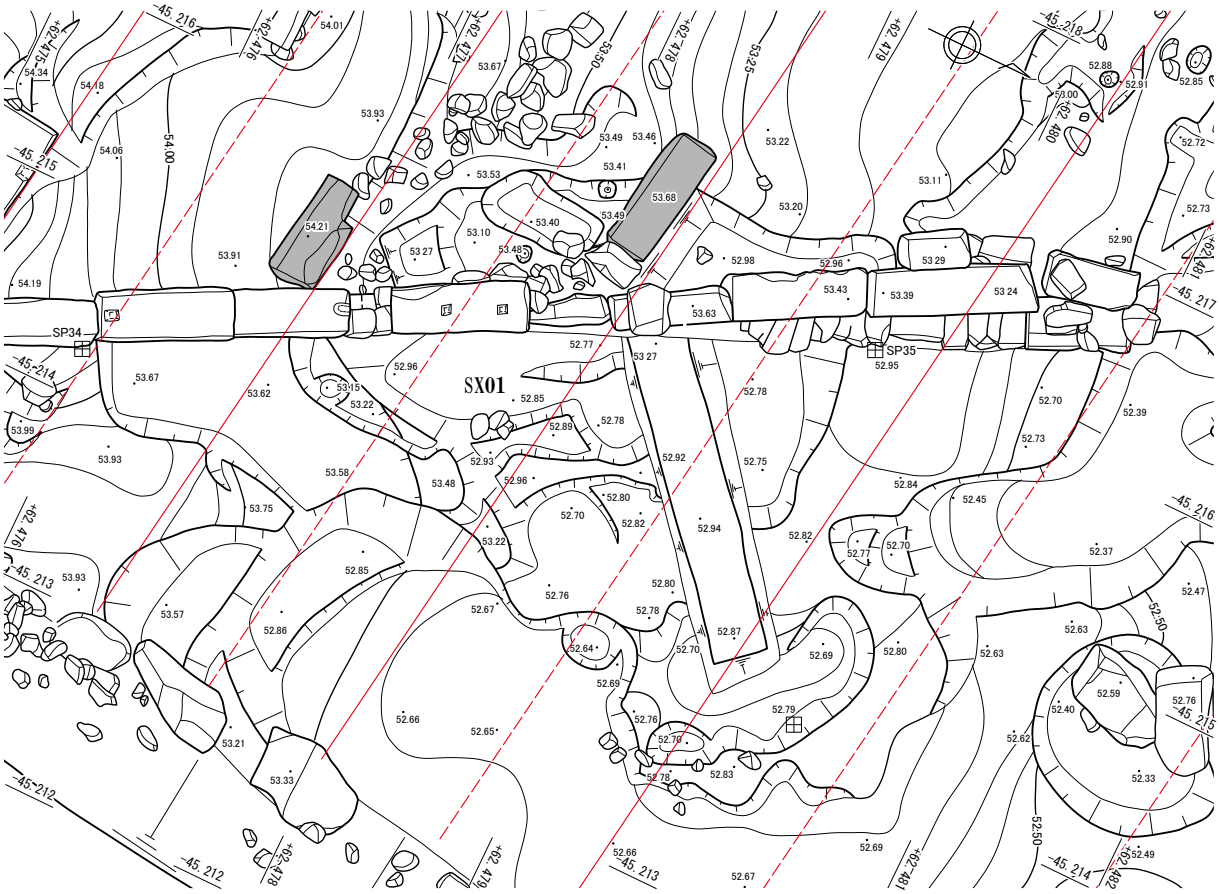
1　10YR2/2　黒褐色粘砂質土（腐植土層）撹乱（プラ管）
2　10YR4/4　茶褐色粘質土（地山ブロック（黄褐色）塊状混じる）撹乱（プラ管）
3　10YR2/3　黒褐色粘砂質土（腐植土層）表土
4　10YR4/3　暗黄褐色粘砂質土（地山ブロックマーブル状混じる、しまり悪い）
5　10YR2/3　黒褐色粘砂質土（礫混じる）
6　10YR4/4　褐色砂質土（しまり悪い）
7　10YR5/6　明茶褐色粘砂質土（しまり良い、小礫混じる）
8　10YR4/6　暗黄褐色砂質土（しまり悪い）
9　10YR4/6　明褐色粘質土（しまり良い、均質）
10　10YR2/2　黒褐色粘質土（しまり悪い、地山小ブロック少し混じる、小礫多く混じる）
11　10YR4/3　褐色粘砂質土（しまり悪い、地山ブロック少し混じる、炭片少し混じる）
12　10YR5/4　暗黄褐色粘砂質土（地山ブロック（明黄褐色）塊状に混じる）
13　10YR3/3　暗褐色砂質土（しまり悪い、木の根？）
14　10YR4/4　褐色粘砂質土（10層に類似、やや暗い色調）
15　10YR4/4　暗茶褐色砂質土
16　10YR6/6　明黄褐色粘質土（均質）
17　10YR2/2　黒褐色粘質土（9層より均質、粘性強い、地山ブロック（明黄褐色）塊状に混じる）
18　10YR5/6　明茶褐色粘砂質土（小礫多く混じる、しまり悪い、7層より黄色味強い）
19　地山

1～4：Ⅰ層
5～6：Ⅱ層（階段造成土）
7～18：Ⅲ層（SK04埋土）

＊破線表示の延石位置は推定・投影による

S=1/40
0　1m

第29図　下層遺構（SK04）平面図・断面図



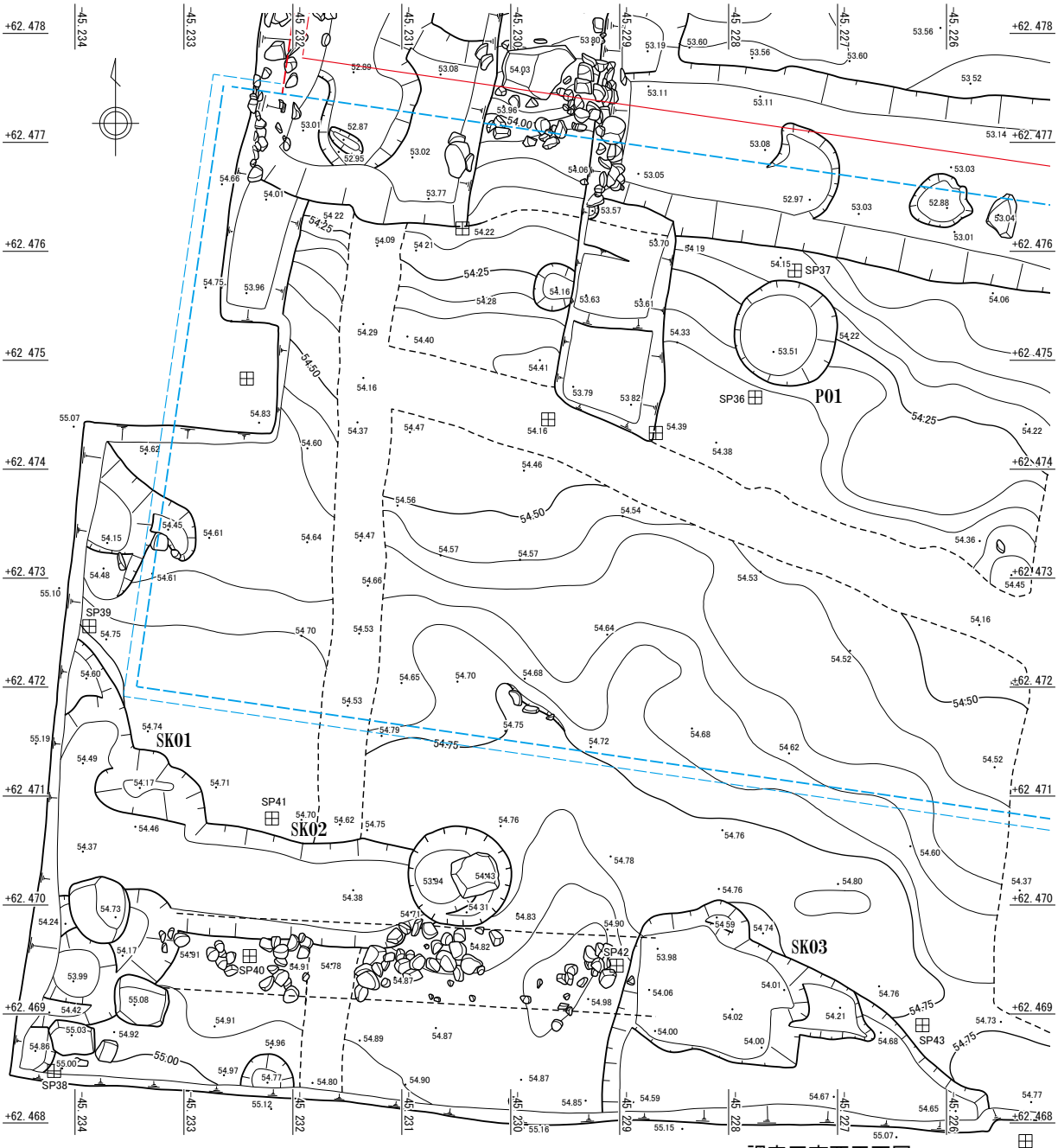
1　10YR4/3　暗黄灰褐色粘砂質土
2　10YR5/8　明黄褐色粘質土（均質）
3　10YR4/4～5/6　暗黄褐色粘砂質土（暗茶褐色土、細礫混じる）
4　10YR4/4　灰茶褐色粘質土
5　10YR2/3　黒茶褐色粘砂質土（黄褐色（地山質）小ブロックマーブル状混じる）
6　10YR2/3　黒茶褐色粘質土（均質）
7　10YR5/4　黄茶褐色粘質土（均質）
8　10YR3/4　暗茶褐色粘質土（均質）
9　10YR5/6　黄褐色粘質土（均質、2層よりやや暗い色調）
10　10YR3/3　暗灰褐色粘質土（黄褐色（地山質）・黒褐色土小ブロックモザイク状に混じる、非均質）
11　10YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐・黄白色土（地山質）ブロック塊状に混じる、非均質）
12　10YR3/3　暗褐色粘砂質土（黄褐色土（地山質）ブロック混じる）
13　10YR2/2　黒褐色粘質土
14　地山

1～5：Ⅰ層
6～8：Ⅱ層（階段造成土）
9～11：Ⅲ層（SX01 埋土）
12・13 層：Ⅲ層（遺構埋土）

＊破線表示の延石位置は推定・投影による

S=1/40
0　1m

第30図　下層遺構（SX01）平面図・断面図



第31図　調査区南西遺構平面図・断面図

第３節　遺物

１．概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品などが出土している。大部分が遺構に伴わない上面からの出土で、17世紀初頭から20世紀までの遺物が混在している状況であるが、土坑・溝などからの出土も見られる。

以下に材質ごとに大別し、更に出土地点ごとに記述していくが、器種を優先する部分もある。

２．陶磁器・土器　（第32 ～ 83図、第７～ 15表）

陶磁器では、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、再興九谷などの国内各産地のものがあり、陶器擂鉢では堺産のものが多くみられる。また少量ではあるが中国産のものもあり、19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパ製品かと思われる硬質陶器の皿が１点出土している。土器では、17世紀の土師器皿が多く、他には火鉢が多数出土している。陶磁器の分類・年代観については、[九州近世陶磁学会2000]・[服部1993]・[石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002b]・[石川県金沢城調査研究所2012b]・[石川県金沢城調査研究所2014d] 等を参考にして記述した。また、陶磁器・土師器皿の胎土分類については、[石川県金沢城調査研究所2014d] に依っている。

石垣1415N（SW08）（第32図P001 ～ P004）

P001は掘方下部（裏込め）から出土した中国徳化窯の製品かと思われる白磁端反り小杯である。P002は掘方北から出土した17世紀前半の土師器皿である。平底から外へ開くように直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに摘み上げている。内面体部と底部の境には凹線が巡り、外面の口縁と体部の境には、細い凹線が巡っている。P003は抜取坑中層出土の万古焼の色絵陶器碗である。内外面に白泥を塗ったうえで灰釉を掛け、その上から赤と水色で文様を描いている。外底面は露胎で、「萬古」の陰刻がある。P004は抜取坑上面から出土している。須佐唐津灰釉鉢の底部で、灰釉はごく薄く、外面は被熱によって白濁している。内面に橙色の胎土目跡が８個ある。

整地土Ａ・整地土Ａ下　（第32図P005・第33図P006・第77図P206）

Ⅳ区トレンチ４の整地土Ａ出土のP005は17世紀前半の土師器皿で、やや丸味を帯びた平底から体部は急に立ち上がり、口縁は内屈する。内面は一方向ナデで、体部との境に凹線が巡る。口縁には全周に油煙痕があると推定される。Ⅶ区整地土Ａ下出土のP006は17世紀前半の土師器皿で、平底で立ち上がりの急な体部で、口縁の摘み上げは明瞭ではない。内底面の調整は摩耗のためはっきりしないが、外底面には板目状圧痕が残り、外側面には指頭圧痕が残る。口縁のおそらく全周と内面に油煙痕が厚く付着している。P206はトレンチ４の整地土Ａと石垣1415N（SW08）掘方から出土した破片が接合している。やや丸味を帯びた平底から少し開き気味に体部が立ち上がり、口縁は内屈するが端部の摘み上げは強くない。内面の体部と底部の境の凹線はごく弱く、見込みは一方向ナデであろうか。口縁には油煙痕がある。17世紀前半の製品である。

整地土Ｂ　（第33図P007・第34図）

P007・P008は丸形の土器火鉢である。P007には円形脚が３個付く。口縁外面には沈線が巡り、体部には菊花の印花文がある。殆ど剥離しているが、赤漆の痕跡がある。P008は体部には直径4.6㎝の菊花文と1.6㎝の花文の２種類の印花文がある。外面の沈線より下は赤漆塗りで、上は剥離しているが黒漆塗かと思われる。

SK04　（第35図～第36図P015）

P009は中国景徳鎮窯系の青花碗である。非常に薄手で、呉須の発色も良い。P010は陶器灰釉鉢口縁片である。P011・P012は肥前ロクロ成形擂鉢口縁片で、口縁端部付近のみ鉄釉が掛けられている。

P011は口縁端部が平らになり、内面側に延びている。P012は口縁端部がP011と同じように内面側に延びるが、外面は屈曲が緩くなり、強い稜を持たない。口縁端部付近のみに掛けられた鉄釉は被熱のために、黄褐色に変色している。P013 ～ P015は17世紀前半の土師器皿である。P013は平底で外底面は指押さえ、内底面は一方向ナデで、内面体部と底部の境には浅い凹線が巡り、口縁端部はわずかに摘み上げている。P014は小型丸底で、底部と体部の境は明らかではない。口縁部は内外面ともヨコナデが入るが、端部の摘み上げは見られない。P015は平底からやや外開きに体部が立ち上がり、外底面には板目状圧痕がわずかに残っている。内面の体部と底部の境には明瞭な凹線が巡り、遺存部分では口縁全部に油煙痕がある。

SX01 （第36図P016）

P016は小型丸底の土師器皿で、口縁はやや内弯し、油煙痕が１か所ある。

Ｅ層上炭層 （第36図P017 ～ P019）

P017は17世紀前半の肥前陶器鉢口縁片で、小片のため遺存部分に卸目は見られないがロクロ成形擂鉢と思われる。口縁端部は内側に突出し、口縁部内外面のみ鉄釉が掛けられる。石垣1415E（SW06）前面のＥ層上炭層出土のP018は17世紀前半の土師器皿である。平底から体部が短く立ち上がるがP019よりは外へ開いている。口縁端部は内屈している。見込みは不定方向ナデと思われ、外底面には板目状圧痕が残る。内面の底部と体部の境には稜が入るが凹線状にはなっていない。口縁には油煙痕がある。P019は17世紀前半の土師器皿である。平底から体部が短く立ち上がり、外面の底部と体部の境には稜を持つ。口縁端部は内屈していて、見込みは不定方向ナデ、外底面には板目状圧痕が残る。口縁には全周に油煙痕があると思われる。

Ｅ層 （第36図P020 ～第37図P026）

P020は白磁の皿か鉢の口縁小片である。内面に陽刻があり、口唇部は口銹になっている。P021 ～ P025は17世紀前半の土師器皿で、P021は見込み不定方向のナデで、外底面には板目状圧痕があり、口縁端部は内弯している。P022は見込み不定方向のナデ、外底面に板目状圧痕があり、口縁端部はわずかに摘み上げている。遺存部は全周に油煙痕がある。P023は口縁外面のヨコナデが強く、体部との境に稜を持っている。P024は平底で底部外面には板目状圧痕が見られ、体部外面には指頭圧痕が残る。口縁外面から体部内面はヨコナデで、内面体部と底部の境は凹線が巡り、底部側に強い稜を持つ。口縁は遺存部分全周に油煙痕がある。P025は外底面には板目状圧痕があり、内面体部と底部の境には浅い凹線状のナデが巡る。口縁に油煙痕がある。P026は小型の土師器皿で、口縁端部はわずかに摘み上げている。口縁に油煙痕が１か所ある。17世紀前半の製品であろうか。

SK01 （第37図P027 ～第41図）

P027は磁器染付碗底部であるが、陶器質の胎土で、釉には内外面とも貫入が入っている。19世紀の若杉窯の製品であろうか。P028 ～ P030は18世紀の肥前磁器染付碗である。P028の素地は灰白色で呉須の発色も良くなく、外面にはコンニャク印判による松文が施されている。P029は幾何文の腰張半球形碗、P030は山水文の筒碗で、どちらにも口縁内面に四方襷文が施されている。P031は中国景徳鎮窯系磁器青花皿である。内面は二本線とダミで描かれた唐草文で、高台内にも圏線がある。後述のP102と類似している。P032は肥前磁器染付大型輪花鉢で、高台はごく低く、内側が釉剥ぎされているので、中央部が欠損しているが蛇の目凹型高台と思われる。内側面には花唐草文、見込みは松竹梅文、外側面には二本線とダミによる唐草文が描かれている。18世紀末から19世紀前葉の製品であろう。P033も肥前磁器染付碗で、内面の花唐草文、外面の唐草文とも、太い筆で描かれている。P034は肥前磁器染付蓋で、上面に蛸唐草文が描かれている。口縁端部と内面１㎝程度は釉剥ぎされ、アルミナが付着していて、内面釉剥ぎから内側へ1.5㎝程度の部分には、擦痕が多く残っている。水注の蓋であろうか。

P035はナズナ文の陶胎染付碗で、呉須は生掛けのため滲んでいる。P036・P037は京・信楽焼の陶器

碗である。P036は灰釉碗で、体部上半には凹線が４条巡り、高台は輪高台で中央には兜巾を持ち、露胎になっている。見込みにはハリ目痕が２個残っているが、間隔からすると３個あったと思われる。P037は灰釉端反り碗で、内外面とも細かい貫入の上に更に粗い貫入が入ったように見え、粗い貫入は煤が浸み込んでいるのか灰色を呈している。P038は陶器鉄釉甕で、口縁は外に肥厚し、肩に強い稜を持っている。P039・P040は堺の陶器擂鉢である。P039は幅4.8㎝の口縁帯に２条の沈線が巡り、内面は口縁近くまで伸びた卸目の端部が、強いナデで消されている。P040は底部で、高台は内面に強いナデを巡らせることで作り出し、外底面と見込みに輪状の重ね焼き痕がある。畳付には板か蓆のような線状の圧痕が見られる。接合しないが同一個体と思われる体部片があり、P039も同一個体の口縁かもしれない。

P041は施釉土器の灯明受皿である。内面と口縁外面に鉛釉が掛かり、外面体部と底部は回転ケズリされている。P042は土師器皿で、外面は口縁を除き回転ケズリされ、底部は平底で体部との境に稜を持っている。内面はヨコナデで、体部と底部の境に凹線が１条巡っている。口縁には油煙痕がある。P043は焼塩壺の蓋で、上面に刻印がある。「七度本屋き塩」であろうか。P044は瓶形の焼塩壺でほぼ完形である。外面は丁寧なミガキで、底部は少し窪んでいる。SK01からは他に３個体出土している。P045 ～ P048は土器火鉢である。P045・P046は線刻のある口縁片で、P045は口唇部にあり、「寛政」と思われる。P046は丸形火鉢の口縁外面に「役所」と読める線刻がある。P047は口縁端部と外面に斑状の墨痕がある。P048は円形脚の丸形火鉢底部片で、外面は丁寧に磨かれている。

SK03　（第42図P049）

P049は17世紀後葉の土師器皿で、若干丸味を帯びた底部には板目状圧痕が見られる。体部は外反し口縁端部は摘み上げられて、内面体部と底部の境には、浅い凹線状の圏線が巡っている。

上面　（第42図P050 ～第83図）

本調査区の遺物のほとんどは上面から出土していて、被熱した陶磁器を多く含んでいる。P050 ～ P069はアラビア数字が描かれた陶磁器である。体部外面の口縁と腰部付近に圏線を引いて、その間を１～３本一組の縦線で３つに区画し、中に「１」～「４」のアラビア数字を描いている。金沢城跡からはアラビア数字が描かれた陶磁器が多数出土していて、染付の製品に赤の後絵付けを施したもの、白磁に青の上絵付で数字などを描いたもの、染付で作られたものなどバラエティーに富んでいる。後絵付けを施された染付製品の年代などからみて、19世紀末から20世紀初頭の製品と思われ、同じものが多数あるので、旧陸軍で使用されたものであろう。

P050 ～ P059は磁器染付で、陶器質に近い胎土などから19世紀末から20世紀初頭の再興九谷の製品と思われる。P050 ～ P054は端反り碗で、高台は輪高台である。縦線は全て３本一組で、数字は「１」～「４」がある。内面は口縁部に１本と立ち上がり部に２本の圏線があり、P050とP053には見込み文があるが、P051とP052には無い。P055 ～ P059は皿で、高台は幅1.5 ～ 1.7㎝の幅広輪高台である。縦線はP058が２本一組で、他は３本一組である。内面も口縁に１本、立ち上がり部に２本の圏線があり、P055とP056には見込み文があり、他には無い。P060 ～ P064は圏線・縦線・アラビア数字が上絵付されているもので、色が分からなくなっているものが多いが、残りの良いものから判断して青色と思われる。縦線は３本一組で、数字は「３」と「１」がある。胎土は陶器質に近く、19世紀末から20世紀初頭の再興九谷の製品と思われる。P060とP061は端反り碗で輪高台である。P061は遺存部分の内面には上絵付も染付も見られないが、他の４点の内面には口縁部に１本、見込みに２本の圏線と中央に小さい円がある。皿の高台はP062のみが幅1.6㎝と広い輪高台であり、皿の見込みにはハリ目跡が見られるが、P062とP064は圏線の上に５か所あると思われるのに対して、P063は圏線より内側に３か所あって、畳付にも５か所の目痕が見られるなど、染付の製品よりバラエティーに富んでいる。

P065 ～ P069は19世紀末の瀬戸・美濃の製品と思われる磁器染付の端反り碗と蛇の目凹型高台皿に、

赤で圏線・縦線・アラビア数字が上絵付されているものである。P065とP066は縦線が２本一組で、数字は「１」であり、P067は縦線が３本一組で、数字は「１」であろうか。P068は縦線が３本一組で数字が「３」、P069は縦線が１本で数字が「４」である。

P070 ～ P074は瀬戸･美濃の磁器染付端反り碗である。P070は19世紀後葉の製品で､ほぼ完形である。外面は３つに区画された中に松竹梅と思われる文様があり、見込みには寿字文がある。P071はおそらくP070と同じように３つに区画された中に草文のような文様が描かれている。P072には「禄」の文字が描かれている。「福禄寿」と描かれていたものであろう。P073は山水文碗である。P074は口銹を施していて、外面に草文と源氏香文かと思われる文様がわずかに見られる。P075は肥前磁器染付端反り碗で、大型でやや深い。見込み文は輪状の松竹梅と思われ、外面の唐草文は呉須の発色は良いが若干滲んでいる。19世紀の製品と思われる。P076とP077は磁器色絵端反り碗で、黒の線描きと赤･青･黄･緑で花文が描かれ、P077には太い赤で源氏香文も描かれている。

P078 ～ P094は肥前磁器染付碗である。P078・P079は暦文の小広東碗である。P081 ～ P85は18世紀後半から19世紀初頭の製品で、呉須の発色はやや悪く、P084以外は口縁内面に四方襷文や圏線がある。見込みにも圏線があり、P085に手描きの五弁花文が見られることから、他のものにも見込み文がある可能性がある。P084の内面は無文で､外面は２つに区画されて松竹梅と思われる文様が描かれている。また、P084は被熱のため釉が一部白濁している。P085とP086は器形が腰張半球形と筒形で異なっているが、外側面に雪輪文、高台脇に唐草文、口縁内面に四方襷文、見込みに二重圏線という文様構成は同じである。P087は青磁染付の筒碗で、口縁内面には四方襷文、見込みには二重圏線がある。18世紀後半の製品であろう。P088･P089は18世紀前半の浅半球形碗で、三角高台で端部は釉剥ぎされている。外面には若松文と笹文が描かれているが内面は無文である。P090は丸文と幾何文が細い筆とダミで丁寧に描かれていて、一部に墨弾きも使われている。17世紀末から18世紀初頭の製品である。P091・P092はコンニャク印判による松文・団鶴文が施されている17世紀末から18世紀の製品である。P093は17世紀後半の碗か鉢の底部片で、火を受けて降灰し、全体に自然釉が掛かったようになっている。P094は向付で、口縁外面に七宝繋ぎ文が施されている。

P095･P096は瀬戸･美濃の隷書体文の小碗で､19世紀の製品である。P097は肥前磁器染付猪口である。外面の蛸唐草文および見込の五弁花文は、輪郭を細い線で描いて塗りつぶしている。高台内には一重圏線と「□珠ヵ玩珍」の銘がある。17世紀後半から18世紀の製品である。P098は瀬戸･美濃磁器染付蓋で、19世紀の製品である。P099も蓋で、外面は青磁釉が掛かり、口銹で、内面天井部に染付の二重圏線が見られる。18世紀後半の肥前の製品である。

P100は青白磁型押し皿である。一部染付と赤橙色が釉下に施されている。口縁の一部欠損した部分と畳付の釉剥ぎされた部分に煤が付着している。P101は灰白色の胎土にやや発色の悪い染付が施されている。見込は蛇の目釉剥ぎされ、重ね焼きの痕跡も見られる。

P102 ～ P108は肥前磁器染付皿である。P102は内側面の唐草文の輪郭を細い２本線とダミで描いている。P031の中国青花皿とよく似ているが、P031は体部から口縁にかけて厚さが殆ど変わらないが、P102は口縁が薄くなっている。P103は蛇の目凹型高台で、外側面の唐草は１本線で描かれている。18世紀中葉から19世紀の製品である。P104は輪花皿である。薄手で丁寧な作りで、口銹があり、外側面の花唐草は２本線とダミで描かれている。高台内には一重圏線と二重方形枠内に「金」の銘があり、17世紀後半の製品である。P105は薄手で丁寧な作りの小皿で、口縁は内弯し、高台は三角高台でやや内傾している。内側面には模式化されない牡丹唐草文が描かれ、見込みには簡略化されない手描きの五弁花文がある。外側面の唐草文は、２本線で輪郭を描いてダミを入れている。高台内には一重圏線の中に二重方形枠内に渦福の銘がある。17世紀末から18世紀の製品である。P106は輪花皿で、内側面には唐草文が描かれ、外側面の唐草文は茎を線描きのみで、葉などを線描きとダミで描いている。

P107は底部が厚く、高台は短く、胎土は灰白色を呈している。見込みにはコンニャク印判の五弁花文がある。畳付は使用による摩耗のためか平滑になっている。P108は釉が青味を帯びて､青白磁に近い。畳付のみ釉剥ぎしているが砂が付着している。17世紀中葉の製品であろうか。P109は中国景徳鎮窯系青花皿である。薄手で、外面底部中央と高台脇に砂が付着し、外底面の鉋目が顕著である。

P110・P111は肥前磁器色絵染付皿である。P110は方形小皿かと思われ、外面は染付で梅のような文様と高台に鋸歯文が描かれている。内面は何色かで文様が描かれているが、被熱のために変色し、よく分からない。P111は内外面とも色絵が認められる。P112は中国の製品と思われる白磁型押し皿である。全体に灰白色を呈し、口縁は欠損しているが外反すると思われる。高台は三角高台で内傾し、畳付と外面2.5㎜程度が釉剥ぎされている。P113・P114は肥前青磁皿である。P113の高台は三角高台で内傾し、外面は体部との境に明瞭な屈曲を持たずなだらかに続いている。全面施釉後、畳付から外面1.8㎝程度釉剥ぎされている。P114は口縁片で、見込みに輪状の釉剥ぎがあるタイプであろうか。

P115 ～ P119は肥前磁器染付大皿である。P115は外面の唐草文は２本線にダミ、内側面の蛸唐草文はダミのみで描かれている。P116は内側面には山水文が、外側面には蝶が丁寧に描かれている。胎土は均質緻密であるが、わずかに陶器質に近い。P117の内側面は草花文であろうか。外側面は２本線とダミで描かれている。呉須の発色は良く、釉の透明感もある。P118は内傾する高台から体部は丸く立ち上がっている。胎土は白色堅緻で呉須の発色も良く、外側面の唐草文は２本線とダミで描かれている。P119は内側面には牡丹文、内底面は二重圏線で側面と区切られ、牡丹文かと思われる文様があり、呉須は滲みが無く、線描きとダミで丁寧に描かれている。胎土は均質緻密であるが、やや黄色味を帯び、わずかに陶器質に近い。実測図では、接合しない口縁片を図上で復元している。

P120・P121は中国景徳鎮窯系青花の口縁片である。P120は折縁鉢であろうか。熱を受けて内外面とも荒れている。P121は鉢か碗の口縁で、被熱している。外面には馬の絵が描かれている。P122・P123は肥前磁器染付鉢である。P122には内外面に花唐草文かと思われる文様が、P123には外面に牡丹唐草文、内面に牡丹文が丁寧に描かれている。P124は肥前青磁染付鉢口縁片である。外面は青磁釉が施され、内面は松文が染付されている。口縁端部はわずかに外反している。P125は白磁輪花鉢である。三角高台で体部は16面に面取りされている。口縁部と底部は接合していない。他にも同タイプの破片があり、揃いであった可能性がある。中国徳化窯の製品であろうか。P126は肥前磁器染付合子の身である。方形で側面には幾何文が描かれている。P127は中国景徳鎮窯系青花で、方形の合子の蓋であろうか。被熱している。P128は肥前白磁小壺である。口縁端部が釉剥ぎされているので蓋が付くものと思われる。透明感に欠ける白釉が外面と内面下半に掛けられ、畳付の釉剥ぎはやや雑で、平らなところと２面を持つところがある。

P129は、硬質陶器の皿の口縁片である。青色の銅版転写で、窓絵部分には帆船が描かれている。小片のため明確ではないが、幕末から明治初期に輸入されていたイギリスのドーソン窯またはオランダのペトゥルス・レグー窯の製品の可能性がある。

P130 ～ P155は陶器碗である。P130 ～ P133は陶胎染付碗である。P130･P132は灰色で硬質のややザックリした胎土に粗い貫入の入った釉が掛かっている。P131･P133の胎土は、灰黄色で硬質緻密である。P131は被熱のため釉が白濁し、一部剥落している。P134はにぶい赤褐色で硬質緻密な胎土に鉄絵で草花を描いている。P135は18世紀の京焼の小杉碗である。淡黄色の胎土に非常に細かい貫入が入った釉が掛かっている。P136･P137は鉄絵部分が欠損しているが､小杉碗であろう。P138･P139は灰釉筒碗で、釉は黄灰色で非常に細かい貫入がはいり、外側面には染付と鉄絵がある。P139は口縁端部特に外面の稜線が強く、内面にはロクロ痕が残っている。P140 ～ P141は灰釉せんじ碗で、18世紀の製品である。P140は体部上半欠損のため不明であるが、わずかに鉄絵と白泥かと思われるものが残っている。高台内が墨で黒くなっているのは、硯または墨溜として使用したためであろうか。見込みにはハリ目跡が

１か所残り、釉は熱を受けて変色している。P141は、体部外面に平行沈線が巡っている。P142は灰色で緻密な胎土に細かい貫入の入った灰釉が掛かっている。腰に明瞭な稜線が入り、見込みにはハリ目跡が１個残っている。P143・P144は京・信楽の灰釉平碗である。P143は見込みに鉄絵があり、釉は黄色味を帯びている。P144は、灰白色で透明感のある釉が掛かり、底部が欠損しているため鉄絵は不明である。P145は黄色味を帯びた柔らかい胎土に白っぽい釉が掛かる。見込みに文様は無く、高台内に墨書がある。18世紀から19世紀の瀬戸の製品である。P146 ～ P148は京焼の色絵碗である。赤以外の色は殆ど剥離している。P149は肥前京焼風と思われる丸碗である。やや黄色味を帯びた白色の緻密な胎土に非常に細かい貫入の入った灰釉が掛かっている。高台脇から外底面は無釉であり、外底中央に円圏文がある。P150は瀬戸・美濃の拳骨茶碗で、黒褐色で透明感は無いが均質な釉が掛かっている。P151は灰色で緻密な胎土で、黄色味を帯びた灰白色の透明感の無い藁灰釉に鉄釉が流し掛けられている。高台は強いケズリで作りだされている。P152は刷毛目碗である。褐灰色で硬質の胎土に外面は白泥を塗った後に櫛状具で掻き落として波状文にし、内面は白泥の打刷毛目を施した上に透明釉を掛けている。畳付のみ釉剥ぎされている。P153も刷毛目碗である。外面は白泥で渦巻状の平行線を、内面は打刷毛目を施した後に、細かい貫入の入った灰釉が掛けられている。見込みにはわずかに降灰が見られる。P154は灰釉碗底部である。高台内に刻印があり、「御菩」のみ残っているが、「御菩薩」ないしは「御菩薩池」と思われる。P155は黄色味を帯びた灰釉が掛かる底部片で、高台内に「六」の墨書がある。

P156・P157は陶器灰釉皿である。P156は口縁は玉縁で、外面体部上半から内面は灰釉が掛かっているが被熱のためか白濁している。外面体部下半以下は露胎で、内面口縁近くに鉄絵がある。P157は底部だけであるが、全体に灰白色の透明感のない釉が掛かっていて、畳付のみ釉剥ぎされている。見込みには渦巻き状のナデがあり、４か所の砂目跡は、摩耗により平滑になっている。17世紀の肥前の製品であろうか。P158 ～ P166は陶器鉢である。P158・P159は瀬戸灰釉鉢の底部で、P158の釉は黄緑灰色で透明感があり粗い貫入が入っている。高台は貼り付けている。P159は微粒砂を多く含む胎土に緑灰色で透明感があり粗い貫入の入る釉が掛かっている。P160・P161は灰色で緻密な胎土に緑灰色で貫入の入らない釉が掛かっている。P162は灰釉鉄釉流し鉢口縁片で、素地は灰白色に浅黄橙色の斑が入り、やや砂っぽい。19世紀中葉の再興九谷若杉八幡窯の製品であろう。P163は三島唐津鉢で、白泥象嵌の後灰釉を掛けていると思われるが、被熱のためか釉が全体に白濁している。外面体部下半は、鉄釉を刷毛塗りしている。P164は刷毛目唐津鉢底部である。外面は回転ケズリで、内面には同心円状に白泥を施している。P163・P164は18世紀前半の肥前の製品である。P165は瀬戸灰釉大型鉢の底部片である。P166は須佐唐津灰釉鉢の口縁片である。胎土は精良で灰釉は薄く、被熱のためか白濁している。

P167 ～ P194も陶器である。P167 ～ P170は灰釉合子と蓋である。P171は上面に白泥を塗り鉄釉と緑釉で文様を描いている、いわゆる山水土瓶の蓋と思われる。P172は土瓶である。外面に白泥を塗り鉄絵と緑釉で山水文を描いている。破片は広範囲から出土し、底部は接合していないが、図上復元した。P173は甕肩部片である。内面はヨコナデに鉄漿、外面は鉄釉を流し掛けしている。丸を３個つなげた形の貼花がある。P174は信楽の壺の口縁から肩部片である。肩が張る形で、外面と口縁内面には鉄釉が掛かり、内面には鉄漿が塗られている。P175は口径72㎝、器高71.4㎝の陶器大甕である。底部外面以外は鉄漿が刷毛塗りされている。越前の製品である。P176は行平蓋である。内面には口縁部を除き灰釉が掛かる。外面は飛び鉋を施した後、鉄漿を帯状に刷毛塗りし、飛び鉋の上に白泥で筒描きしている。口縁内面は使用による摩耗のためかやや平滑になっている。P177は鉄釉行平である。体部外面は飛び鉋を施した後、鉄漿を刷毛塗りしている。内面と片口部は鉄釉が掛けられ、口縁部と体部下半から底部は露胎で、底部には煤が付着している。鉄釉が一部被熱のために沸いて縮れている。P178は鉄釉土鍋である。遺存部分は全面に光沢のある茶色い鉄釉が掛かっている。口縁は強く外反した後、

先端を内側に巻き込んでいる。

P179 ～ P193は擂鉢である。P179は19世紀の再興九谷若杉八幡窯の製品であろうか。卸目は密に施されていて、幅3.1㎝、16本以上と思われる。卸目の先端はヨコナデによって消されている。内面に薄い鉄釉を掛けた後、口縁部と外面全体に光沢のある鉄釉を掛けている。P180は小片のため卸目は残っていないが、肥前ロクロ成形擂鉢と思われる。口縁部のみに鉄釉が掛かっている。17世紀前半の製品であろう。P181は肥前ロクロ成形と思われる擂鉢口縁片である。内外面全体に鉄釉が掛かっている。卸目は密に施されているので明確ではないが、幅4.3㎝で15本以上はあり、幅6.8㎝で24本に見えるが、広すぎて器壁が曲面になり、板状の工具がきちんと当たらないと思われる。18世紀後半から19世紀前半の製品である。P182は内外面とも鉄釉が掛かり、卸目は先端がヨコナデによって消されている。越中瀬戸の製品であろうか。

P183 ～ P191は堺の擂鉢である。P183は外面口縁帯に２条の沈線が巡る。片口部の口唇部内面に扇形の中に「上」を陰刻した刻印がある。卸目は幅3.5㎝に９本である。P184は外面口縁帯には太い沈線が２条巡っている。卸目は幅3.8㎝、９本で、隙間なく密に施されているが、先端は強いナデで消されている。P185はやや小振りのものであろうか。外面口縁帯の２条の沈線も細く簡略化され、卸目は幅4.2㎝に14本と細かく浅い。卸目の先端はナデ消されているがナデは強い稜を持つほど深くない。P186は外面口縁帯には２条の沈線が巡る。卸目は少なくとも幅3.1㎝、６本あり、やや間隔が広い。先端はヨコナデによって消されている。P187は底部である。卸目は重なり合っているため明確ではないが、幅4.2㎝で11本と思われる。外底面は回転ケズリの後、高台の内側を強くナデている。　P188 ～ P190は口縁片で外面口縁帯には２条の沈線が巡っている。P188の卸目は3.6㎝幅に10本ある。P189は卸目が4.1㎝幅に11本あり、先端は口縁部のヨコナデによって消されている。口縁端部には重ね焼きによるものか溶着が見られる。P190の沈線は外面口縁帯下方で細い。卸目は4.1㎝幅に11本あり、先端は口縁部のヨコナデによって消されているがヨコナデが弱いため、かすかに残っている。P191は底部で、内面には卸目が密に施されているため、幅2.8㎝で８本以上であることしか分からない。内側面と見込みの卸目は別に施され、見込みおよび畳付は、使用により平滑になっている。外底面には蓆状の圧痕が見られる。

P192・P193は越前擂鉢である。P192は硬質で薄手、胎土は砂粒を多く含んでいる。内面口縁のヨコナデの後で、幅2.5㎝、12本以上の卸目を施している。内面に縦に溶着痕がある。17世紀中頃から後半の製品であろう。P193は口縁端部内面側に強いナデを入れて面を作っている。卸目は幅３㎝、11本で、端部まで延びている。17世紀前半の製品であろうか。P194は灯明受皿で、かえりは口縁より低い。内面には白釉が掛かっているが、かえり端部は釉剥ぎされている。外面は露胎で、体部下半から底部にかけて回転ケズリが施されている。

P195は灰器として使用されたと思われる産地不明の製品で、被熱している。内外面暗灰色で、瓦質土器に似た灰色で砂粒と細かい気泡を多く含んだ胎土である。P196は華南三彩輪花皿の口縁片で、陰刻が施された後、緑・黄・紫で彩色されている。P197 ～ P199は施釉土器である。P197は鉢で内外面とも鉛釉が施されている。P198は灯明受皿である。外面は露胎で、剥離した部分に煤が付着している。P199は灯明皿で、内面のみに薄く鉛釉が掛かり外面は露胎である。内面には圏線が２本巡り、底部と体部は回転ケズリが施されている。口縁部に油煙痕がある。

P200 ～ P223は土器で、P200 ～ P209は土師器皿である。P200は精製品で、胎土は橙色を呈し精良で堅緻、内外面とも丁寧に磨かれている。P201は外側面と外底面には指頭圧痕が残り、口縁外面と内面はヨコナデして、口縁端部は摘み上げている。内面の体部と底部の境には凹線状の圏線が巡っている。胎土は精良で粉質、遺存部には油煙痕は見られない。P202は外底面に板目状圧痕があり、内底面の調整は摩耗のため不明である。遺存部分は口縁全周に油煙痕がある。P201は平底から体部が短く立

ち上がり、口縁端部は内屈している。内面と口縁外面はヨコナデし、体部外面には指頭圧痕が残っている。遺存部分は内外面とも全体に油煙痕がある。P204は外底面に板目状圧痕があり、見込みは不定方向のナデである。体部はP202より開いている。口縁に油煙痕がある。P205は外底面には板目状圧痕が残り、見込みは一方向ナデで、胎土は砂粒の含みが少なく焼き締まっている。油煙痕が口縁から内底面まである。P207・P208はロクロ成形と思われ、内外面とも丁寧なヨコナデで、P207は外底面に、P208は体部下半まで回転ケズリが施されている。内面の体部と底部の境に沈線が１条巡り、口縁には油煙痕がある。P209は体部がまっすぐ外へ開き、外面は指頭圧痕が残り、体部と底部の境ははっきりしない。内面は丁寧なナデで、体部と底部の境には底部側に稜を持つ凹線が巡っている。口縁には一部油煙痕がある。P201 ～ P206は17世紀前半、P209は18世紀前半の製品である。P210・P211は焼塩壺である。P210は鉢形で、胎土は細砂を多く含み砂っぽい。P211は瓶形で、外面はミガキが施され、底面には回転糸切り痕が残っている。P212は焼塩壺の蓋である。橙色の砂っぽい胎土で､上面には刻印、天井部内面には布圧痕がある。刻印は「鷺坂」であろうか。金沢で一般的にみられるタイプではない。P213 ～ P223は火鉢である。P213 ～ P217は丸形で、口縁と外面にはミガキ、内面はヨコナデが施されている。P213は円形脚が３個付く形で、外面は菊花の印花文を施し、赤漆を塗っている。P214は円形脚を持つ底部で､体部には沈線文と円形浮文がある。胎土は砂粒を含むが､粘土は細かく粉質である。P215は口縁外面に沈線が１条巡り、体部には菊花と思われる印花文がある。外面には赤彩の痕跡がある。P216は外面口縁端部から３㎝のところに沈線が１条巡り、体部には花の印花文がある。口縁外面には墨を塗ったような痕跡がある。P217は口縁外面に沈線が１～２条巡っている。P218は丸形ないしは円筒形の火鉢口縁で、口縁外面に沈線が１条巡っている。胎土は細砂を多く含み砂っぽく、海綿骨針を含んでいる。P219は円筒形火鉢の口縁と思われるが、体部は薄い。P220は風炉の口縁片で、内面には突起がある。P221は角形火鉢である。口縁部は丁寧に磨かれ、体部外面は横のケズリ、内面は口縁近くに１条の横のナデが入り、体部は縦にナデ上げている。内底面は雑なナデで、外底面には離れ砂の痕跡が残る。P222は口縁が欠損しているが円筒形火鉢で、円形脚が３個付く形である。外面はミガキが施されていて、墨を塗っているのは漆塗りの下塗りであろうか。内底面にも墨のような痕跡がある。P223は板状脚の丸形火鉢で､口縁部は欠損している。内面はヨコナデ､外面はミガキが施され､体部には菊花の印花文が見られる。

３．瓦　（第84 ～ 95図、第16 ～ 18表）

本調査区からは燻瓦・釉薬瓦・越前赤瓦などの多数の粘土瓦が出土している。以下に出土地点ごとに記述していく。なお、瓦の胎土・瓦当文様の分類は第84 ～ 89図に依っている。

整地土Ａ　（第90図T001・T002）

整地土Ａからは燻瓦のみが出土している。T001は丸瓦である。内面調整はコビキＢと刺縫痕が見られる。T002は平瓦で、胎土はやや硬質のB2である。上面と正面・側面は丁寧なヘラナデが施されているが、下面は未調整である。

整地土Ｂ　（第90図T003・T004）

整地土Ｂから出土した瓦は、殆ど燻瓦であるが、T004など釉薬瓦も少量ある。T003は燻腰瓦で、側辺中央の凹みは円形凹Ａで深い。尻側側辺に焼き台の痕跡がある。T004は釉薬熨斗瓦である。濃紫色の釉が上面と側面に掛かるが、被熱のためか一部白濁している

SK04　（第90図T005 ～ T008）

SK04から出土しているものは全て燻瓦である。T005 ～ T007は軒丸瓦である。瓦当文様は巴文で、珠文は欠損しているものも含めて16個と推定される。T005は巴文Ⅱ-2a類で、巴文の頭部は小さめで丸く盛り上がり、尾は長く伸びて全体が繋がっている。T006は巴文Ⅱ-2c類で、巴文は丸味を帯びて

いる。T007は巴文Ⅱ-2b類で、巴文は丸く盛り上がっている。T005とT006は瓦当面と体部の接合部で割れているので、割れ口に接合するための櫛目が残っているのが見える。T008はSK04の９層から出土した丸瓦である。内面調整はコビキＢで、布圧痕と刺縫痕が見られる。

SK01　（第91図T009）

SK01からは近世末の釉薬瓦が数点出土しているが、図示したT009は混入品と思われる近代の釉薬瓦である。わずかに光沢のある濃紫（茶）色の釉が両面に掛かり、外面には「□分式特許□　商ヵ標　田」金田　□咋郡字中沼」の刻印がある。石川県立歴史博物館に展示されていた大正２年（1913）銘の雪止め付平瓦に「森□式特許機　商標㊥西盛　羽咋郡字二ツ屋」という刻印があることから[米澤義直・米澤義光2008]、同時期のものと推定される。

SK03　（第91図T010 ～ T012）

SK03からは、燻瓦と越前赤瓦が出土していて、釉薬瓦は見られない。T010は、燻丸瓦で、胎土は赤橙色を呈する１である。内面調整はコビキＢに刺縫痕が見られる。T011は、越前赤瓦の平瓦である。硬質緻密で縞状の胎土で、上面に鉄漿が刷毛塗りされている。T012は越前赤瓦の熨斗瓦である。硬質緻密な胎土に上面2/3と正面に鉄漿が施されていて、下面には深い櫛描きがある。

SK05　（第91図T013）

SK05からは燻瓦のみが出土している。T013は、軒丸瓦である。瓦当文様は巴文Ⅱ-2b類で、珠文は８個残っているが、16個と思われる。巴文は丸味を帯びているが、高く盛り上がっていない。

上面、その他　（第91図T014 ～第95図）

釉薬瓦が多く、燻瓦・越前赤瓦がある。T014 ～ T017は軒丸瓦である。T014は、瓦当面の下半部分である。黒褐色の釉が掛かっているが、器面が荒れているためか光沢はあまりない。瓦当文様は丸味を帯びた扁平な花弁と軸がわずかに残っているので、梅鉢文Ⅱ類かⅢ類と思われる。制作時のひび割れのためか、断面の一部に釉が流れ込んでいる。T015は越前赤瓦で、瓦当文様は巴文Ⅱ-2b類である。巴文は扁平で、尾は次の巴につかず、離れている。胎土は灰色で砂粒の含み少なく、硬質緻密である。T016は燻瓦で、瓦当文様は巴文Ⅱ-2b類である。珠文は11個残っているが、16個と推定される。巴文は扁平で、尾が全て繋がって円形になっている。T017は燻軒丸瓦であるが、瓦当面が欠損している。瓦当面と接合する部分には、強く接合するための櫛目が残っている。内面調整はコビキＡで、布圧痕が見られる。

T018 ～ T021は燻軒平瓦である。T018は瓦当文様は垂下型三葉文であり、下向きの三葉文の上に付く小さな葉は、向かって左側だけにある。T019は瓦当文様が三葉文Ⅰ類である。焼成不良のためか胎土は浅黄橙色を呈するC2で、砂粒を多く含んでいるが、瓦当面であるためか空隙は少ない。T020は軒平瓦であるが、側辺を瓦当面に対して斜めに切っているので隅瓦であろうか。瓦当文様は三葉文Ⅰ類である。T021は、瓦当文様は三葉文Ⅲ類である。

T022 ～ T033は釉薬瓦の軒桟瓦である。T022 ～ T024は瓦当文様が五弁花文と思われるもので、暗灰色の釉が薄く掛かり、胎土は７である。T022は小丸部の瓦当文様は梅鉢文Ⅲ類で、軒平部は中心飾りが欠損しているが、唐草文の形から五弁花文と思われる。T023は山部が欠損しているが、瓦当文様が五弁花文であるので、軒桟瓦と推定した。T024は中心飾りが欠損しているが、唐草文の形から五弁花文と思われる。小丸部は剥離していて、接合のための櫛描きが残っている。T025は山部が残っていないが、瓦当文様が玉文Ⅱ-3類であるので、軒桟瓦と思われる。T026の瓦当文様は玉文Ⅴ類である。T027は小丸部が欠損しているが軒桟瓦で、光沢のある濃紫（茶）色の釉が遺存部全面に掛かっている。瓦当文様は梅鉢文Ⅳ類で、唐草文は菊文Ⅲ-3類と同じである。T028は軒平部の瓦当文様は菊文Ⅲ-2類で、濃紫（茶）色の釉は上面は光沢がないが、下面には少し光沢がある。胎土は砂粒を多く含み、層状に重ねて作っているのがわかる。T029は瓦当文様は小丸部が梅鉢文Ⅲ類、軒平部は中心飾りが欠損

しているが、唐草文の形から菊文Ⅲ-3類と考えられる。T030は瓦当文様は菊文Ⅵ類である。T031も光沢のある濃紫（茶）色の釉が掛かった軒瓦で、軒桟瓦と思われる。瓦当文様は桜文である。胎土は砂粒の含みはやや少ないが、全体に白い縞が入っている。T032はわずかに光沢のある黒褐色の釉が掛かる軒瓦で、平部しか残っていないが軒桟瓦の可能性がある。瓦当文様は宝文で、中心飾りは宝袋と思われ、唐草文の代わりに房の付いた紐のようなものがある。

T034 ～ T036は丸瓦である。T034は釉薬丸瓦の玉縁部付近である。内面調整はコビキＢで、棒状圧痕が見られる。体部から玉縁部への屈曲部には、「○」と思われる刻印がある。T035は越前赤瓦で、上面には鉄漿が掛けられ、内面調整はコビキＢと刺縫痕、上面の釘穴のところで割れている。「○」のような陰刻がある。T036は燻丸瓦の側縁近くの小片で、「○」の陰刻が２個ある。上面及び、下面側縁付近2.5㎝程度は、丁寧に磨かれていて、内面はコビキＢの痕跡と布圧痕がある。T037は燻平瓦正面部分と思われる小片で、正面に「□」の中に「上」の陰刻がある。上面は丁寧に磨かれていて、上面側の角は面取りされている。T038はⅣ区トレンチ４の東から出土した燻丸瓦の玉縁付近である。内面調整はコビキＢと布圧痕が認められる。

T039・T040は鬼瓦と思われ、表面は燻されたように暗灰色になっているが、T039には屋根に取り付けるための銅線を繋ぐためのやや太い銅線が成形時に埋め込まれていて、焼成されていないと思われる。胎土は灰白色を呈し、細砂を含むが均質で、細かい繊維質のものが含まれている。表面の調整は風化のためか平滑でなくなっている部分が多いが、遺存状態の良い部分では丁寧なミガキで平滑に仕上げられている。

４．石製品　（第96図、第18表）

石製品は全て上面からの出土である。S001は石製硯で､海側の縁部であろうか。上面に陰刻で「大」が２個と「大」の横棒かと思われる「一」が１個ある。破損後再利用しようとしたものか、片側の側縁は割れ口を平滑に再調整している。S002は石製硯の陸側の隅である。裏面の中央が縦長の方形に一段窪む形のものである。S003は石臼である。欠損しているが上面に縁があるので､茶臼の上臼である。側面に挽き手を差し込む穴を開けているが、その周りに二重の菱形の浮彫を施している。非常によく使いこまれているため下面は擦り減って、菱形の浮彫の下の部分が無くなっている。卸目も細く、間隔・方向ともにバラバラで、何回も引き直していると思われる。側面と上面も平滑になっていて、半分に割れているが、割れ口がデコボコしていないので、何かに再利用されたのであろうか。S004は凝灰岩製の角形火鉢の口縁部片である。被熱によりもろくなっている。S005は風化が著しいが、宝篋印塔の相輪請花部分であろう。被熱していて、割れ口に溶融鉛であろうか、付着物がある。

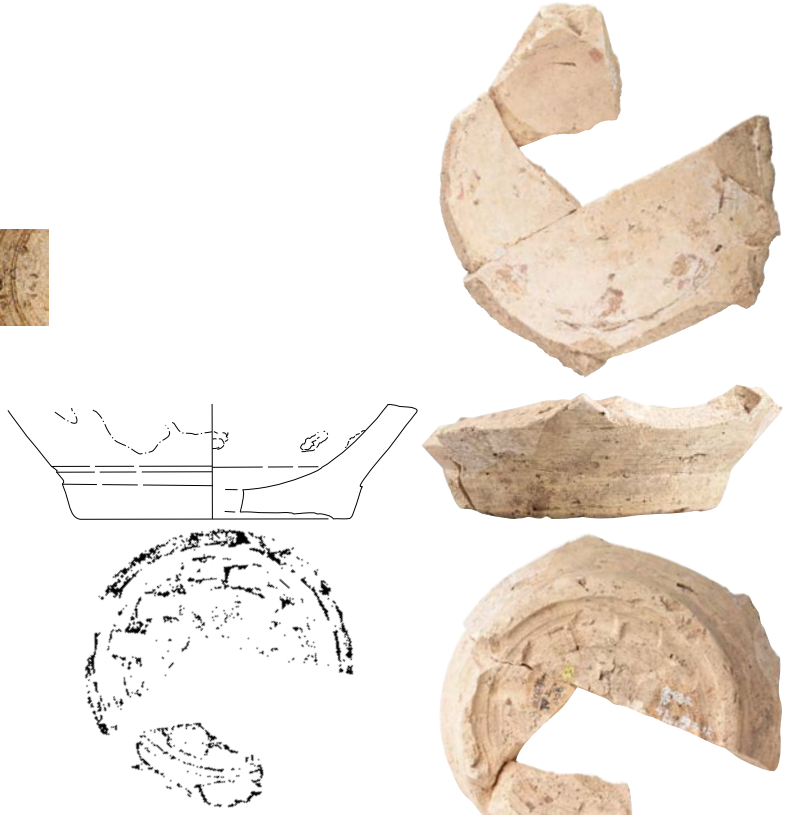
５．金属製品　（第97 ～ 99図、第19表）

M001はⅢ区の第８段東延石の背後から出土した銅釘である。頭部は円形で扁平、軸部断面は円形を呈している。M002・M003はⅣ区石垣1415N（SW08）抜取坑中層から出土した銅釘である。どちらも頭部は崩れた円形で、軸部は方形である。M002のほうがM003より大きい。M004 ～ M030はSD02から出土した鉄釘である。直立または倒立した状態で出土し、木質が付着している。M004・M007・M010・M011・M013 ～ M019・M021・M022・M027・M028は木質片が上下交差し、M005・M006・M012・M023 ～ M026・M029・M030は木質片が上下並行になっている。M031・M032はSK04から出土した銅製の貝折れ釘であるが上部からの混入と思われる。どちらも完形で、M032のほうがM031より太く、少し短い。M033はSK03から出土した銅釘である。頭部は不整円形で、軸部の断面は方形である。M034・M035は、上面出土である。M034は銅製の匙で、完形である。M035は長方形で、四隅に穴が開けられた鉛板である。鉛瓦の一部であろうか。

P001　199801-D022

P002　199801-D023

P003　199801-B011



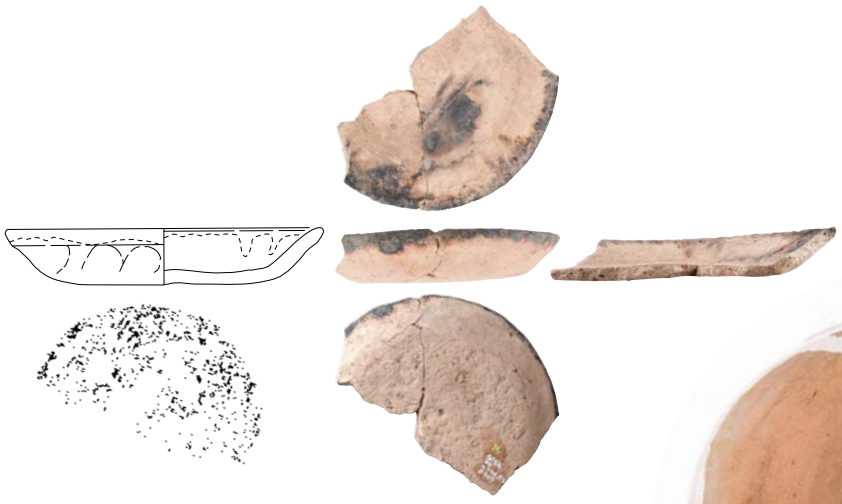
P004　199801-D055

P005　199801-D025

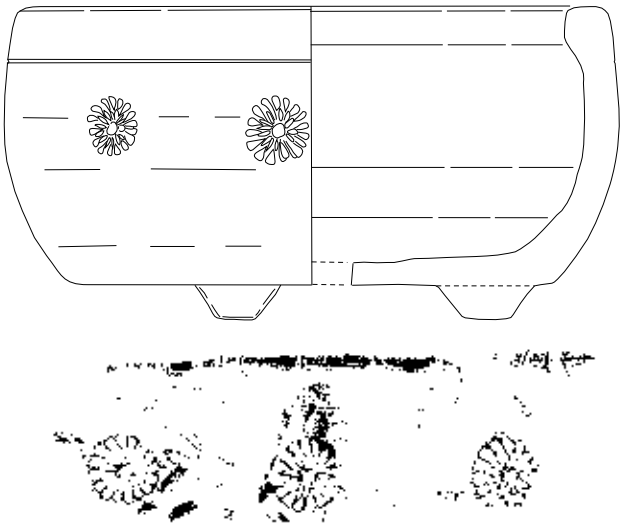
P001；Ⅴ区　石垣（1415N SW08）掘方下部（裏込）
P002；Ⅳ区　石垣（1415N SW08）掘方北
P003；石垣（1415N SW08）抜取坑中層
P004；Ⅳ区　石垣（1415N SW08）抜取坑上面
P005；Ⅳ区　トレンチ4　整地土A

S=1/3
0　10cm

第32図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器1



P006　199801-D024



P007　199801-D027

P006；Ⅶ区　整地土A下
P007；Ⅴ区　東　整地土B、Ⅱ・Ⅲ区　東　上面

S=1/3
0　10cm

第33図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器2

P008；Ⅴ区　整地土Ｂ、上面

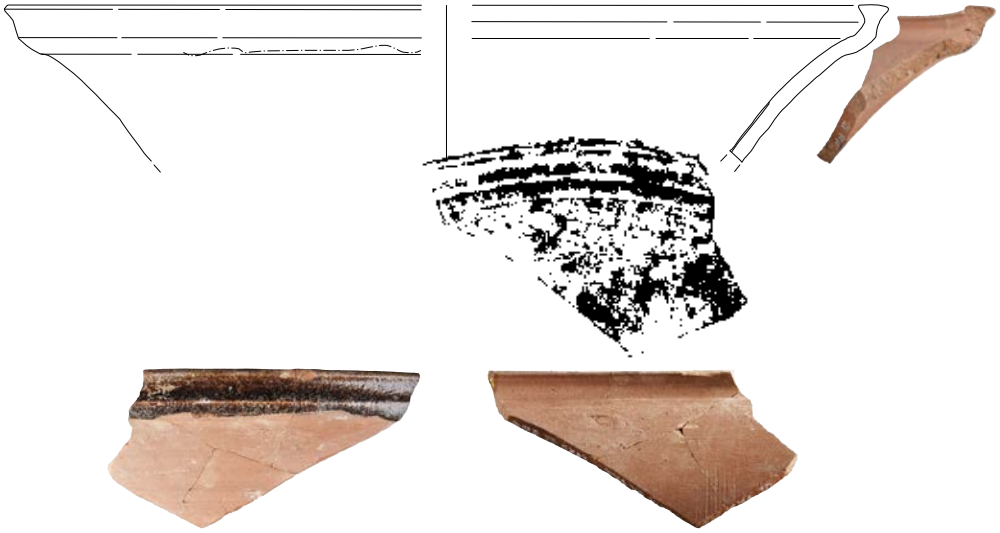
P008　199801-D028

S=1/3
0　10cm

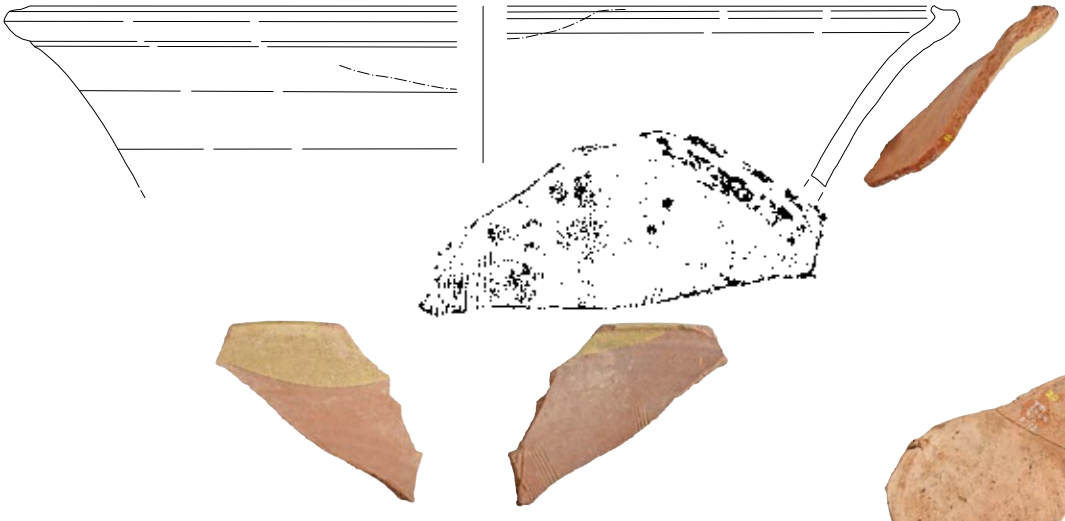
第34図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器3

P009　199801-B010

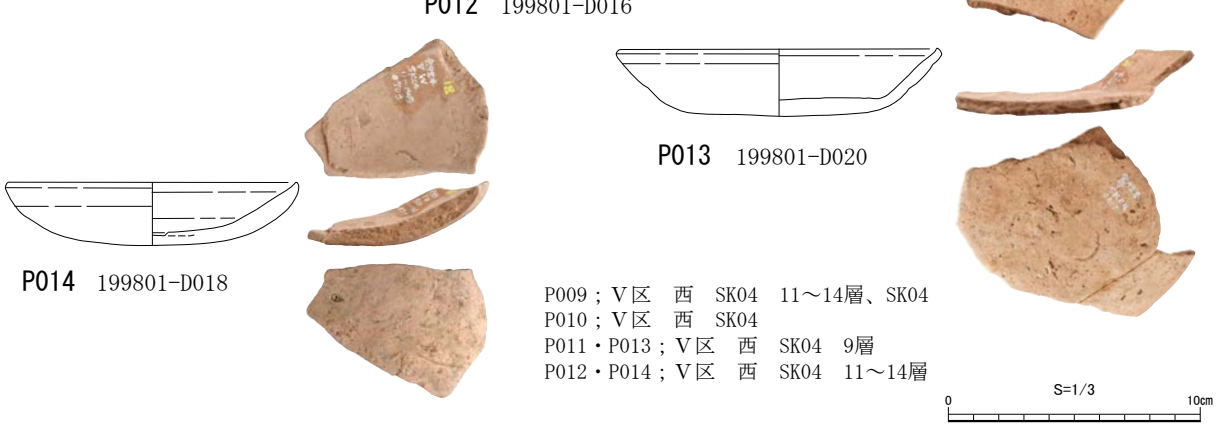
P010　199801-D017



P011　199801-D015



P012　199801-D016



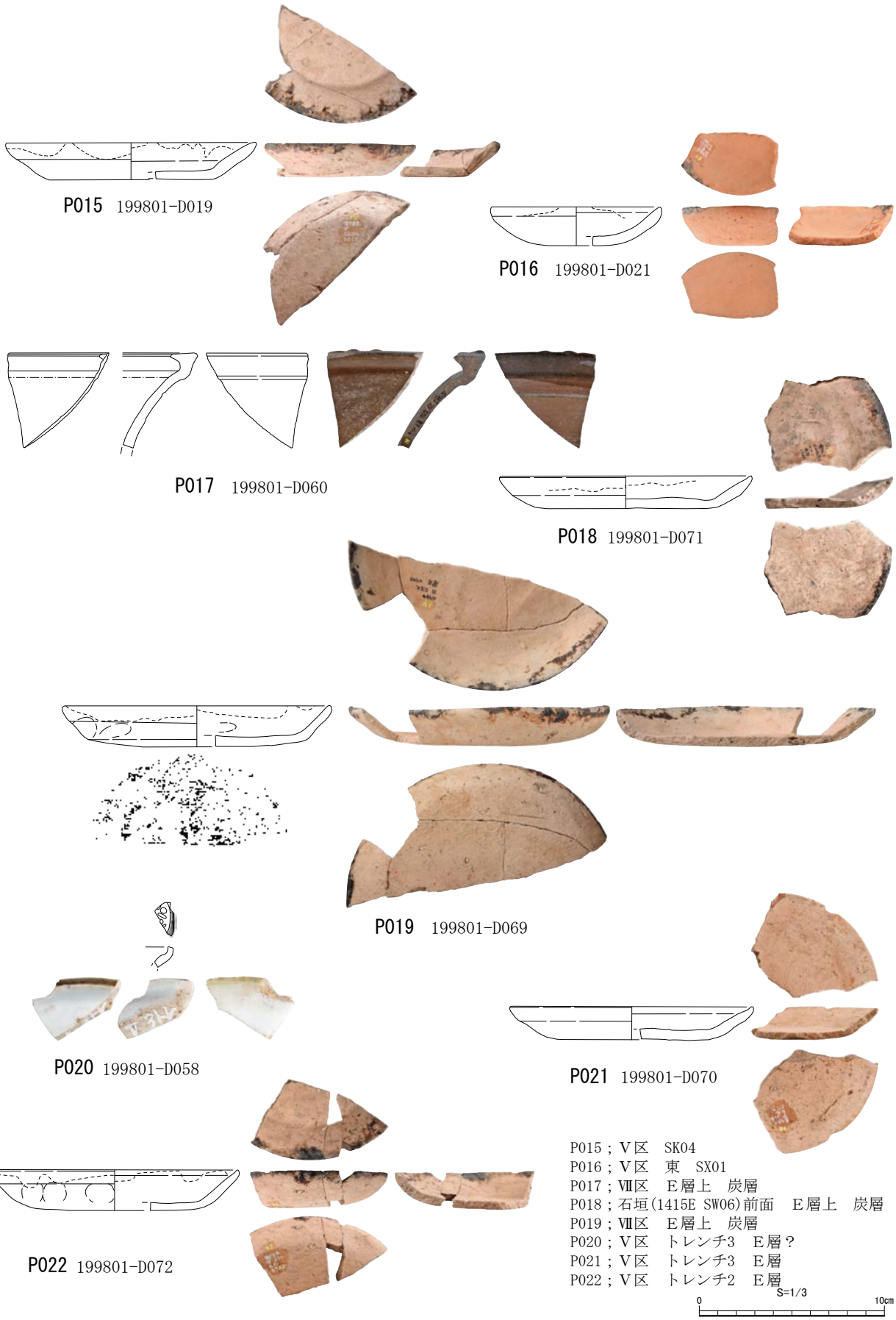
P013　199801-D020

P014　199801-D018

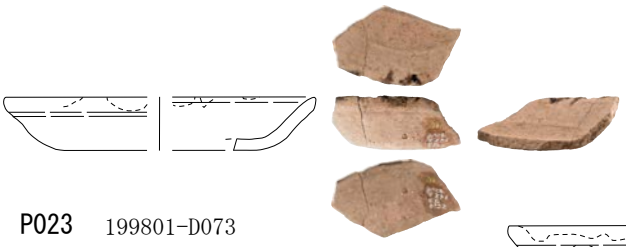
P009；Ⅴ区　西　SK04　11～14層、SK04
P010；Ⅴ区　西　SK04
P011・P013；Ⅴ区　西　SK04　9層
P012・P014；Ⅴ区　西　SK04　11～14層

S=1/3
0　10cm

第35図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器4



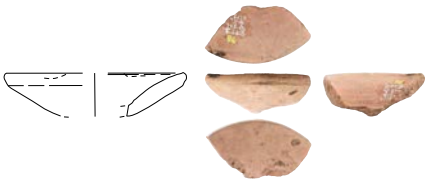
第36図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器5



P023　199801-D073

P024　199801-D075

P025　199801-D074



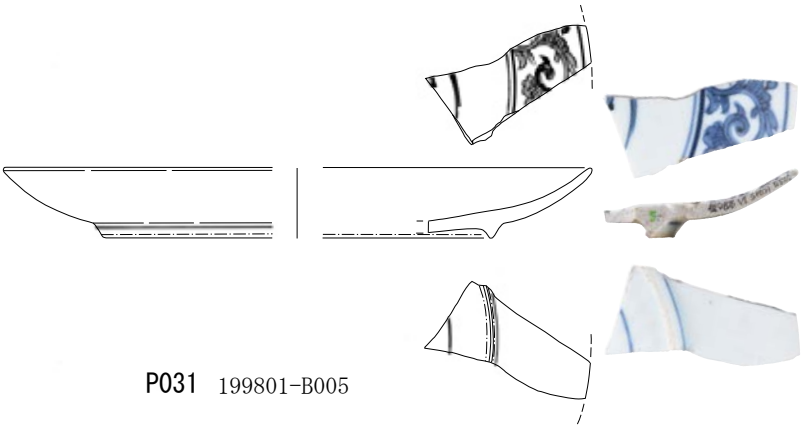
P026　199801-D076

P027　199801-B004

P028　199801-B001

P029　199801-B002

P030　199801-B003

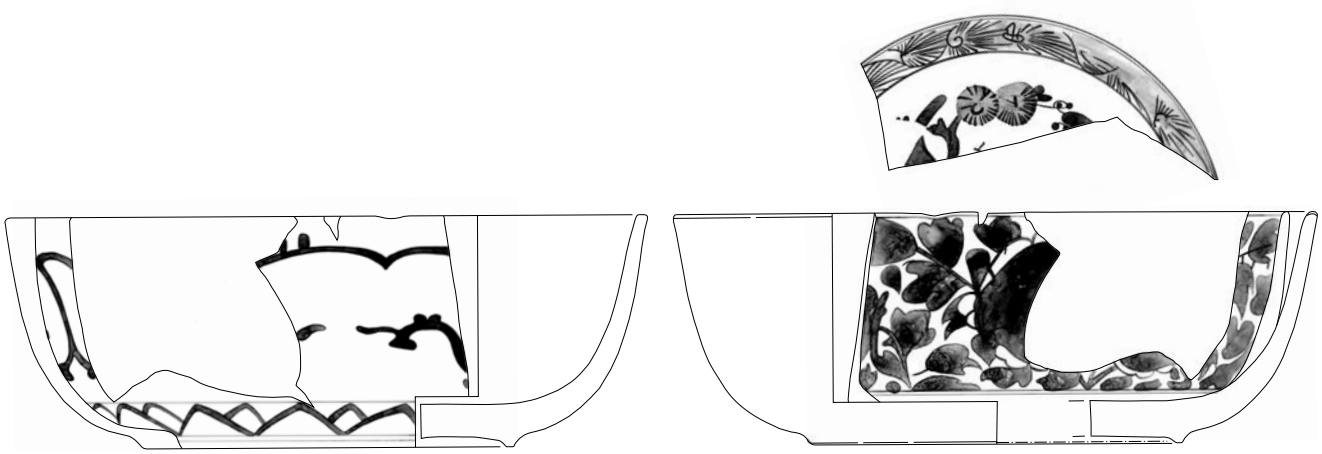


P031　199801-B005

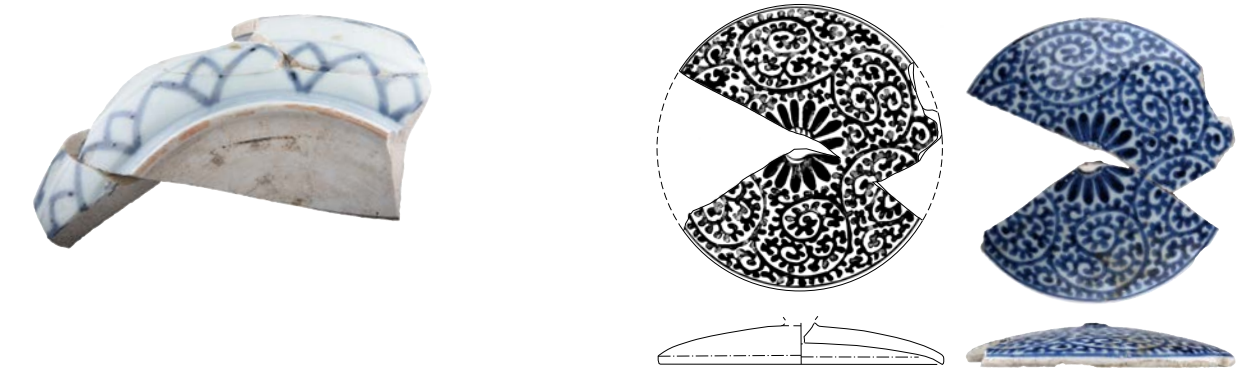
P023；Ⅴ区　トレンチ2　E層
P024・P025；Ⅴ・Ⅶ区　トレンチ3　E層
P026；Ⅴ区　トレンチ3　E層
P027～P031；Ⅵ区　SK01

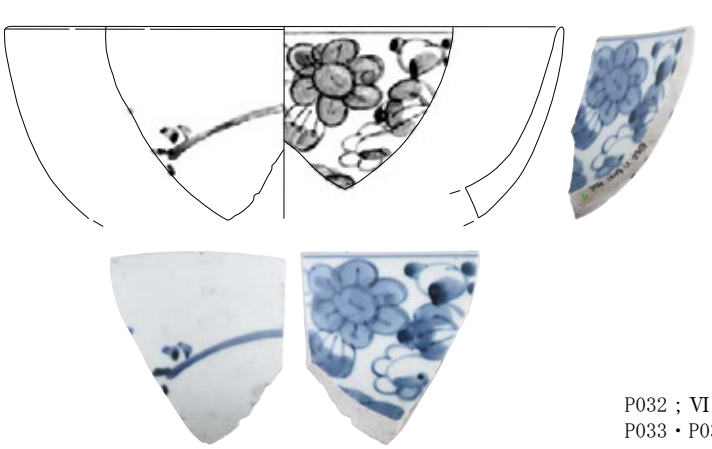
S=1/3
0　10cm

第37図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器6



P032　199801-B009





P033　199801-B007

P034　199801-B008

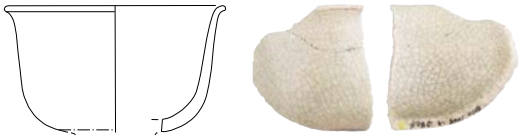
P032；Ⅵ区　SK01、上面、Ⅶ区　上面
P033・P034；Ⅵ区　SK01

S=1/3
0　10cm

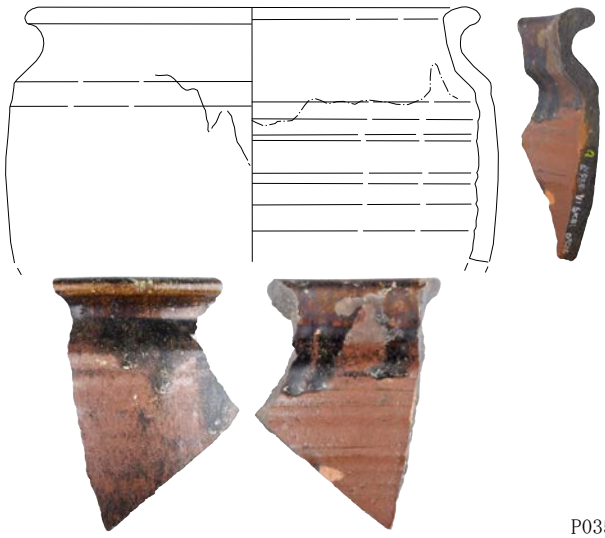
第38図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器7

P035　199801-B006

P036　199801-D001



P037　199801-D002



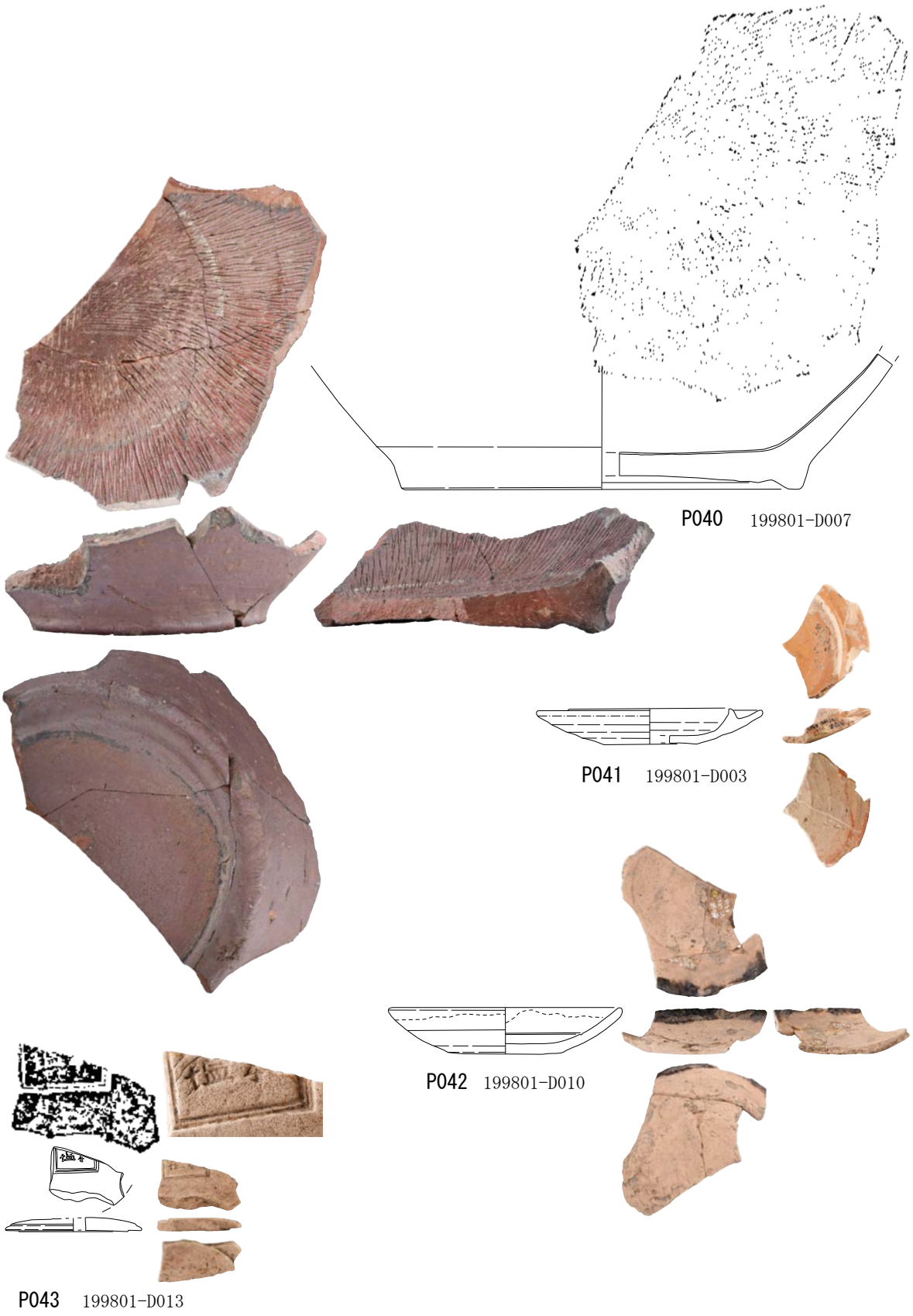
P038　199801-D009

P035；Ⅵ区　SK01　上面
P036～P039；Ⅵ区　SK01

P039　199801-D008

S=1/3
0　10cm

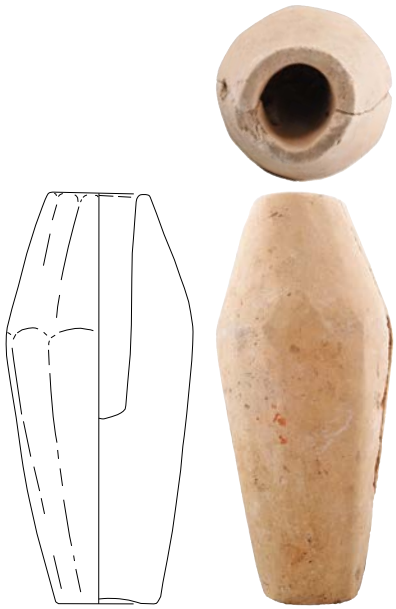
第39図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器8



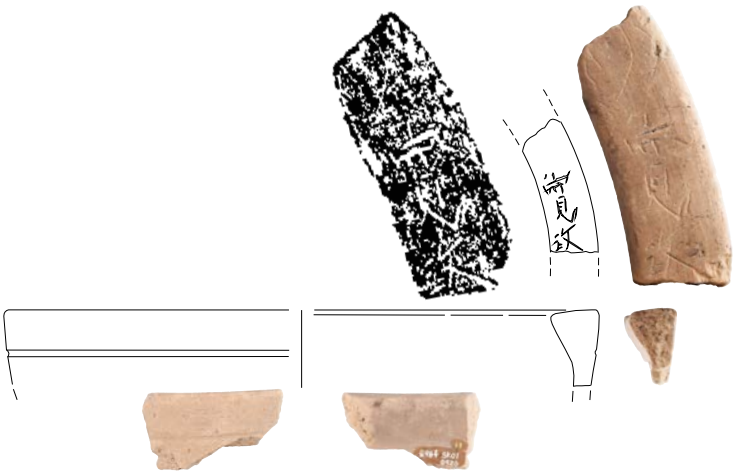
P040～P043；Ⅵ区　SK01

S=1/3
0　10cm

第40図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器9

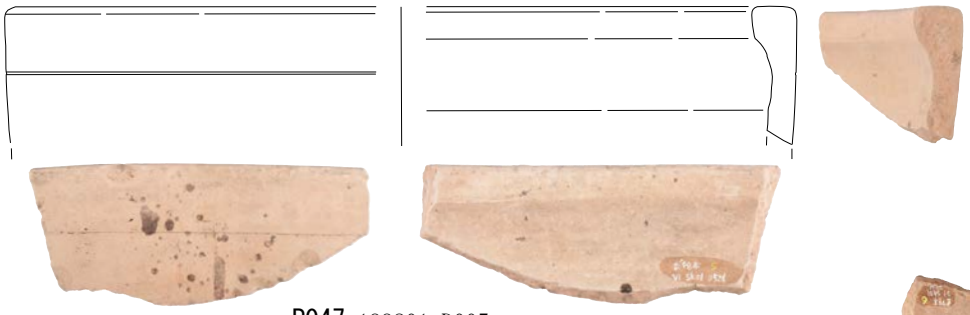


P044 199801-D004

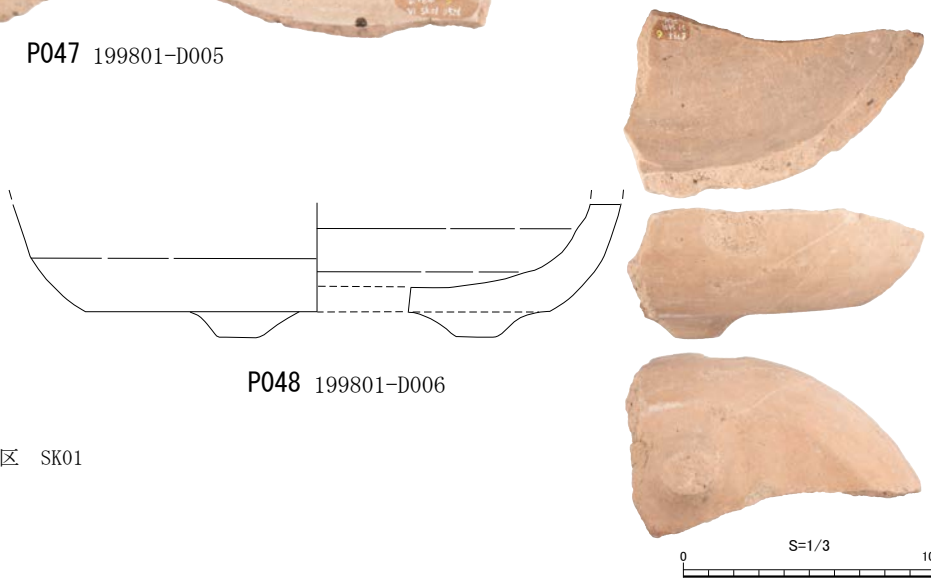


P045 199801-D011

P046 199801-D012



P047 199801-D005



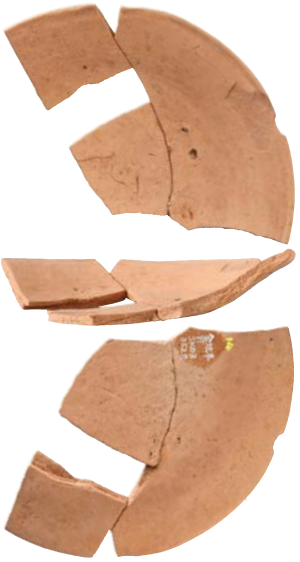
P048 199801-D006

P044～P048；VI区　SK01

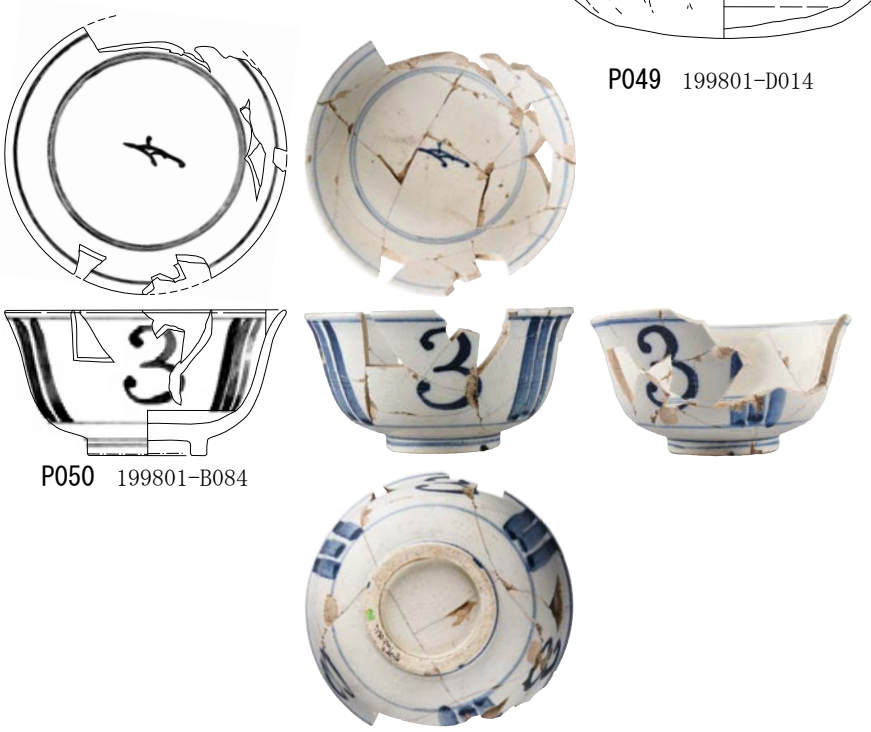
S=1/3

0　10cm

第41図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器10



P049　199801-D014



P050　199801-B084

P051　199801-B085

P049；Ⅵ区　SK03
P050；Ⅰ区　西　上面
P051；Ⅱ区　上面

S=1/3
0　10cm

第42図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器11

P052　199801-B096

P053　199801-B103

P054　199801-B104

P055　199801-B097

P052；Ⅰ区　西　上面、Ⅳ区　上面、Ⅴ区　上面
P053；Ⅰ区　西　上面、Ⅱ区　上面
P054；Ⅰ区　東　上面
P055；Ⅲ区　東　上面

S=1/3
0　10cm

第43図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器12

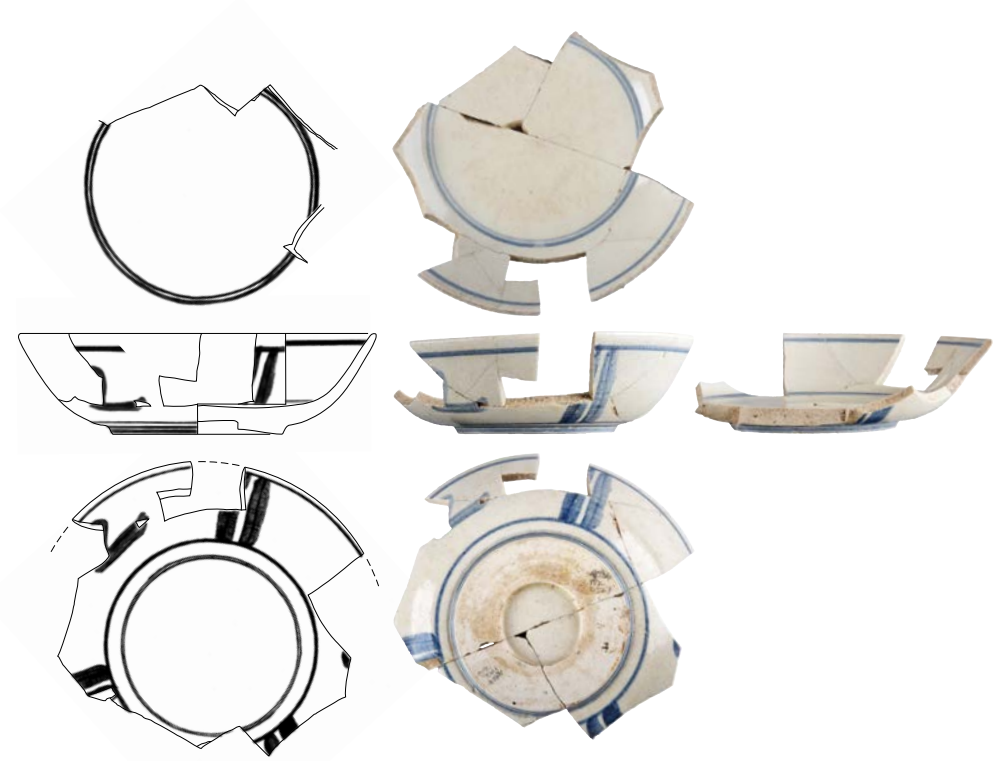
P056　199801-B087

P057　199801-B086

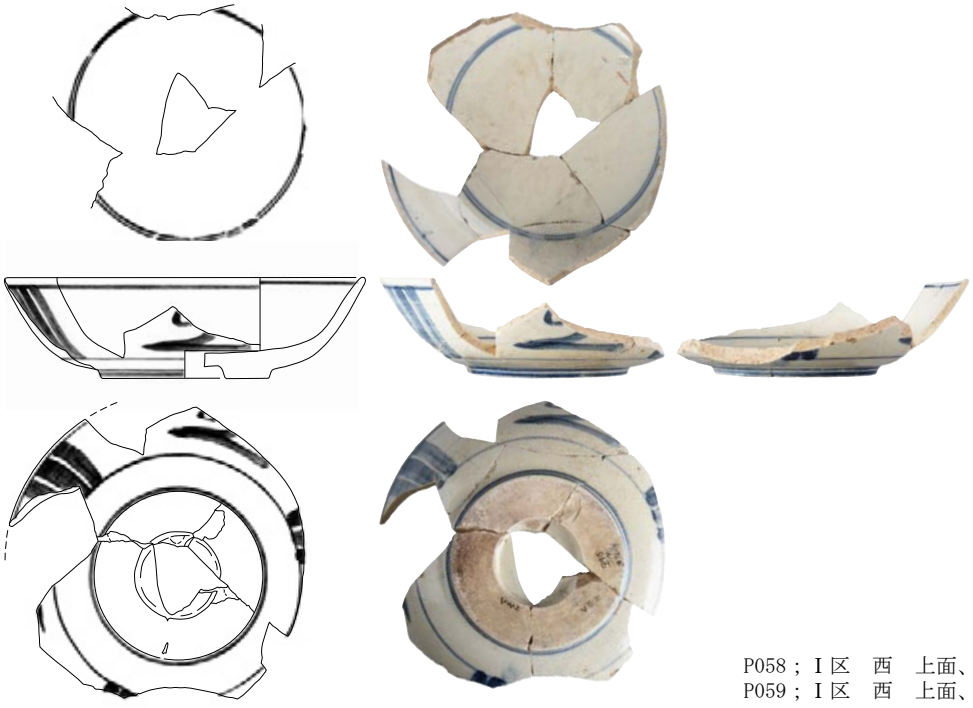
P056・P057；Ⅰ区　西　上面

S=1/3
0　10cm

第44図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器13



P058　199801-B101



P058；Ⅰ区　西　上面、Ⅳ区　上面
P059；Ⅰ区　西　上面、Ⅴ区　上面

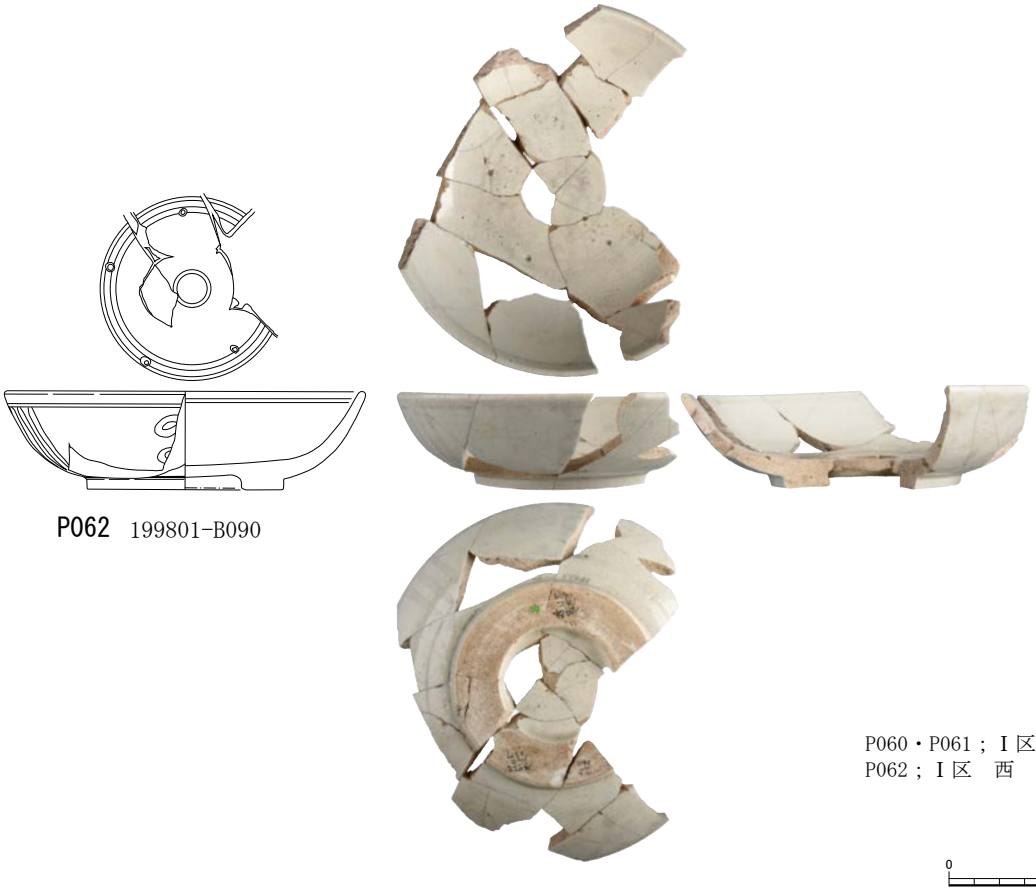
P059　199801-B102

S=1/3
0　10cm

第45図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器14

P060　199801-B088

P061　199801-B089

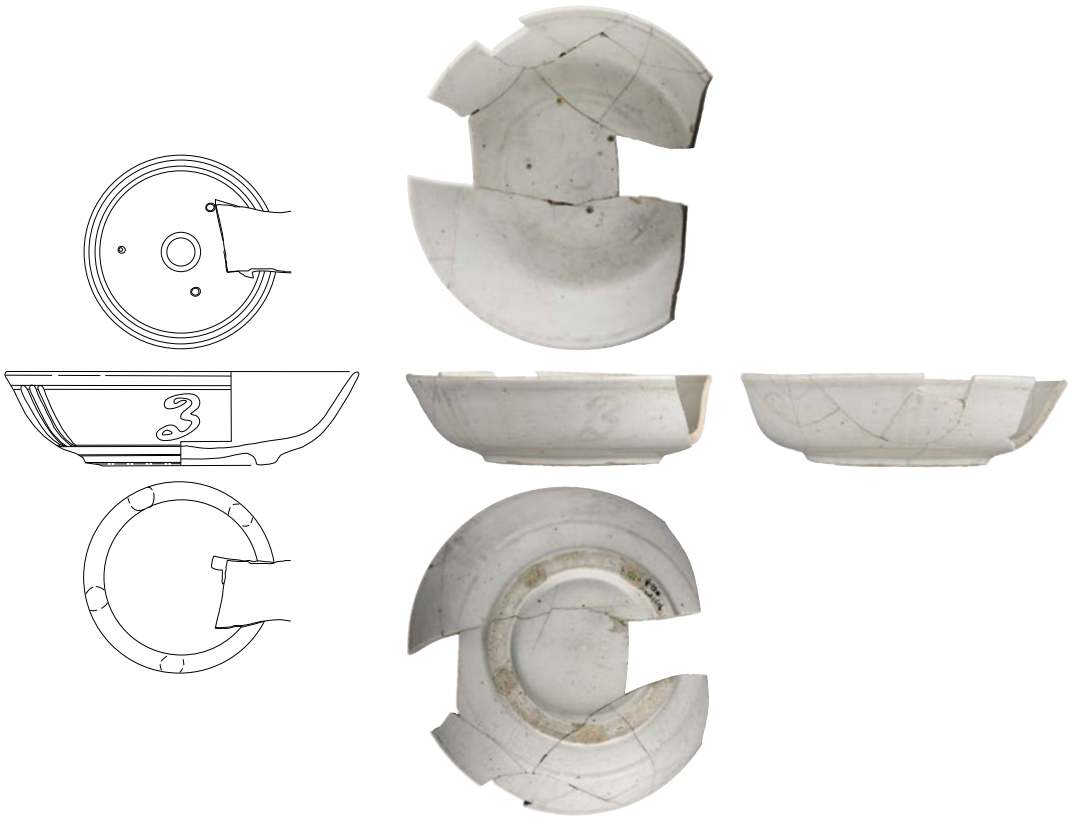


P062　199801-B090

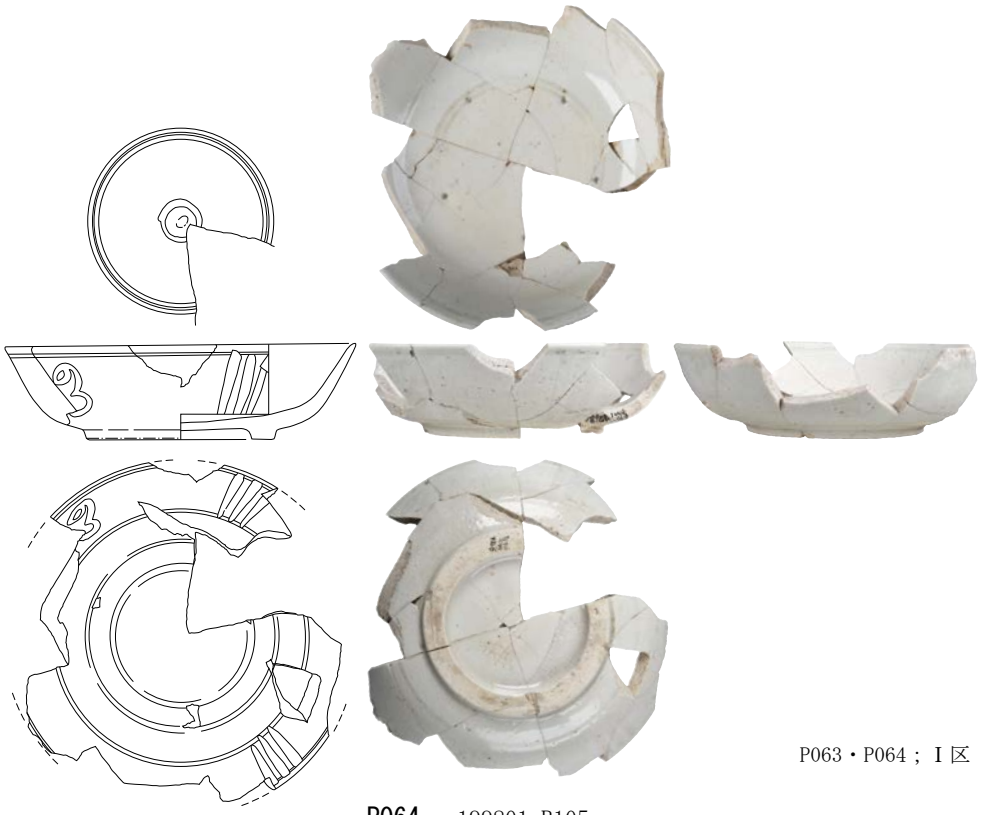
P060・P061；Ⅰ区　西　上面
P062；Ⅰ区　西　上面、Ⅱ区　上面

S=1/3
0　10cm

第46図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器15



P063　199801-B091



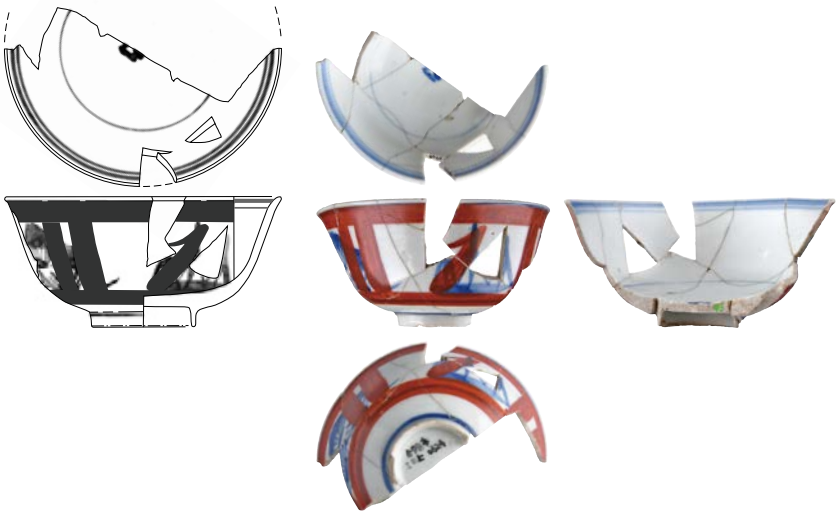
P063・P064；Ⅰ区　西　上面

P064　199801-B105

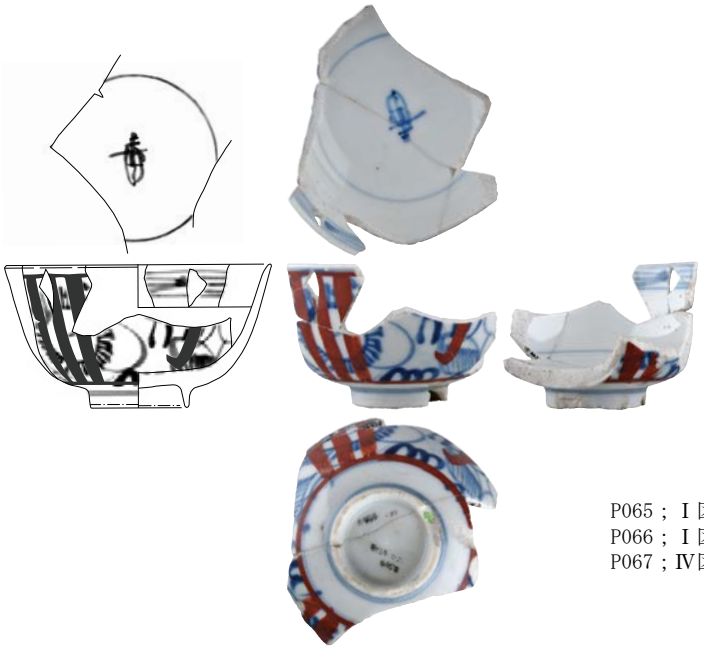
S=1/3
0　10cm

第47図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器16

P065　199801-B092



P066　199801-B093



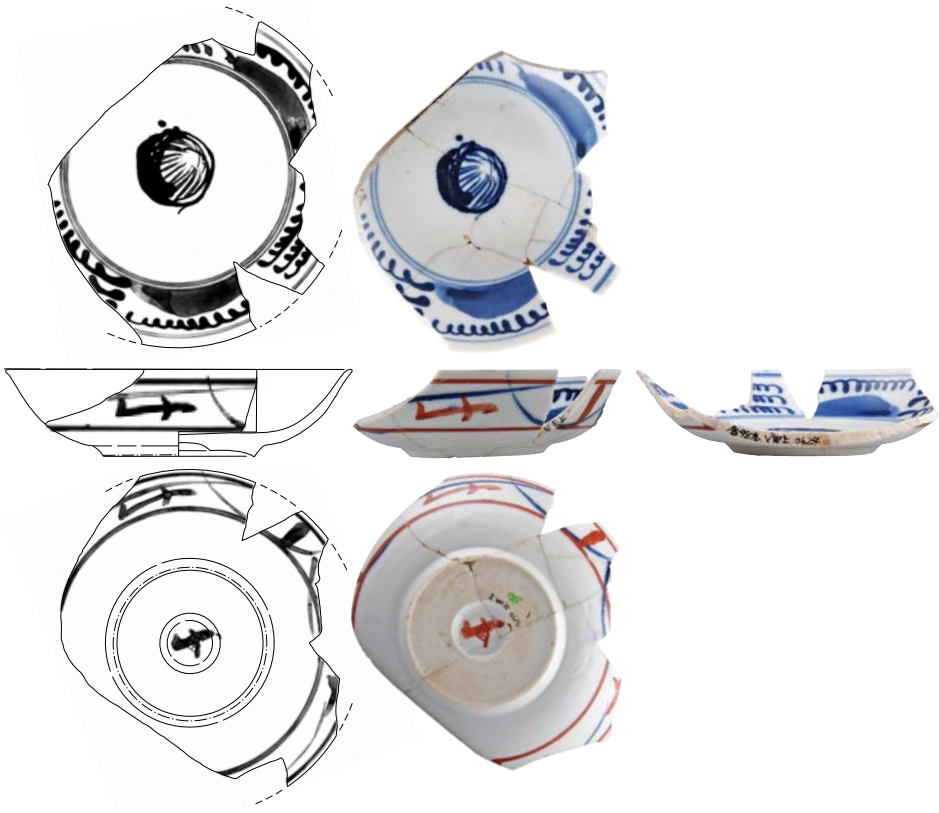
P065；Ⅰ区　西　上面
P066；Ⅰ区　東　上面
P067；Ⅳ区　上面

P067　199801-B094

S=1/3
0　10cm

第48図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器17

P068　199801-B095



P069　199801-B098

P068；Ⅰ区　東　上面
P069；Ⅰ区　西　上面、Ⅳ区　上面、Ⅴ区　上面

S=1/3
0　10cm

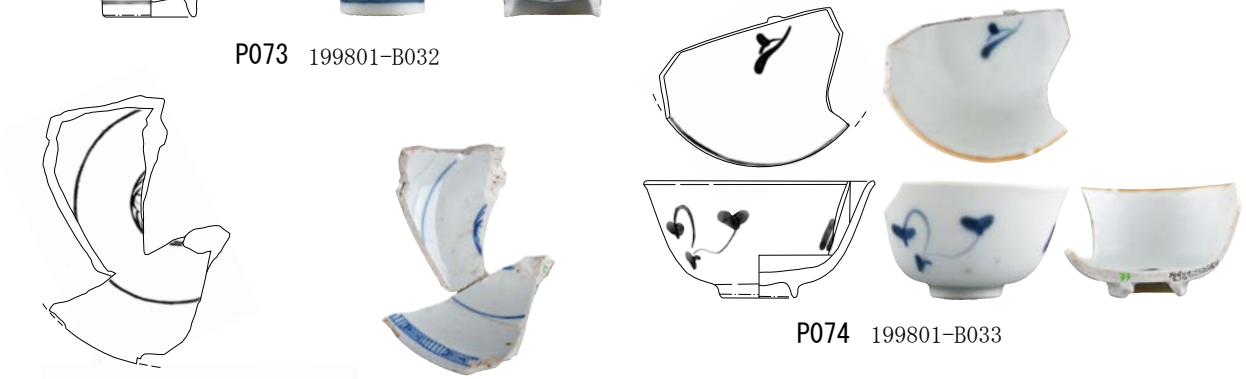
第49図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器18

P070 199801-B016

P071 199801-B013

P072 199801-B014

P073 199801-B032



P074 199801-B033

P075 199801-B019

P070・P072・P075；Ⅰ区　西　上面
P071；Ⅰ区　西　上面、Ⅱ区　上面
P073；Ⅱ・Ⅲ区　東　上面
P074；Ⅲ区　東　上面

S=1/3
0　10cm

第50図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器19

P076　199801-B099

P077　199801-B100

P078　199801-B054

P079　199801-B029

P080　199801-B052

P076；Ⅱ～Ⅴ区　上面
P077・P079；Ⅲ区　東　上面
P078；Ⅲ区　東　上面、Ⅵ区　上面
P080；Ⅵ区　上面

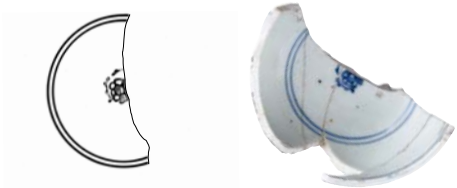
S=1/3
0　10cm

第51図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器20

P081　199801-B025

P082　199801-B026

P083　199801-B028



P084　199801-B050

P085　199801-B051

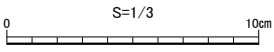
P086　199801-B027

P087　199801-B017

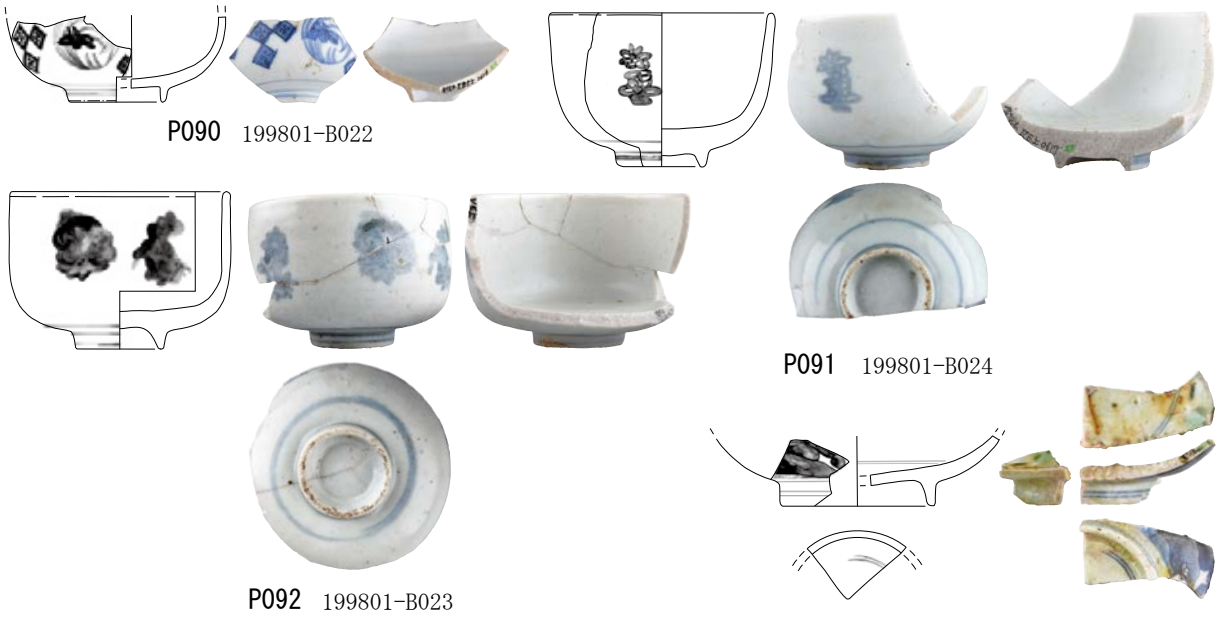
P088　199801-B012

P089　199801-B049

P081・P082；Ⅴ区　東　上面
P083；Ⅱ・Ⅲ区　東　上面
P084・P089；Ⅶ区　上面
P085；Ⅵ区　上面
P086；Ⅲ区　東　上面、Ⅳ区　上面
P087；Ⅰ区　西　上面
P088；Ⅰ区　東　上面



第52図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器21



P090 199801-B022

P091 199801-B024

P092 199801-B023

P093 199801-B046

P094 199801-B048

P095 199801-B034

P096 199801-B015

P097 199801-B030

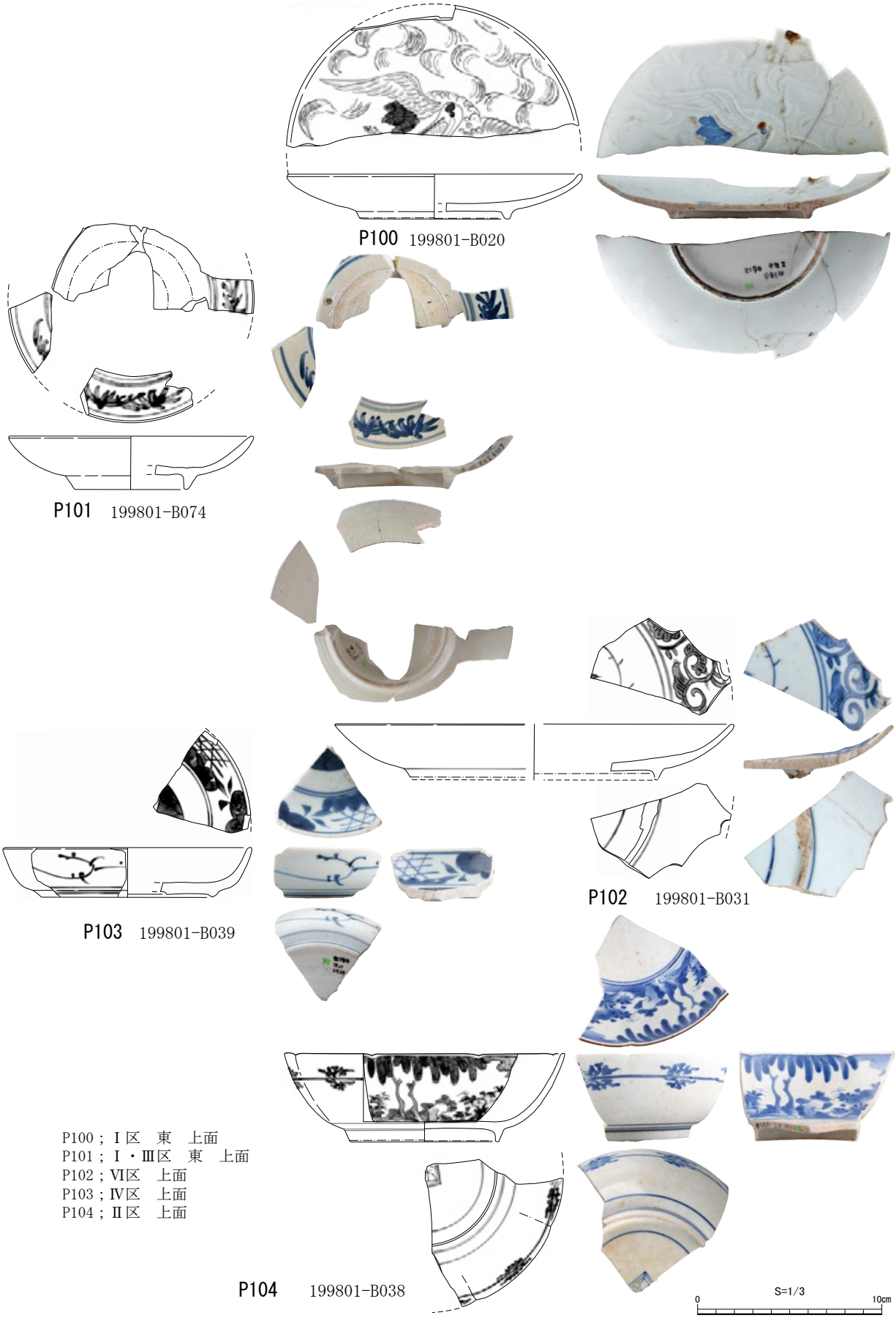
P099 199801-B018

P098 199801-B035

P090；Ⅱ・Ⅲ区　東　上面
P091・P098；Ⅲ区　東　上面
P092；Ⅲ区　東　上面、Ⅴ区　東　上面
P093・P095；Ⅴ区　東　上面
P094；Ⅵ区　上面
P096・P099；Ⅰ区　西　上面
P097；Ⅴ区　上面

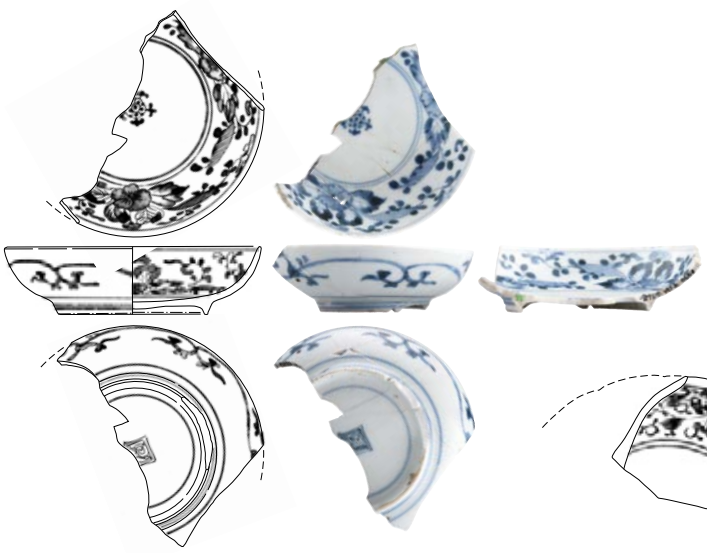
S=1/3
0　10cm

第53図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器22



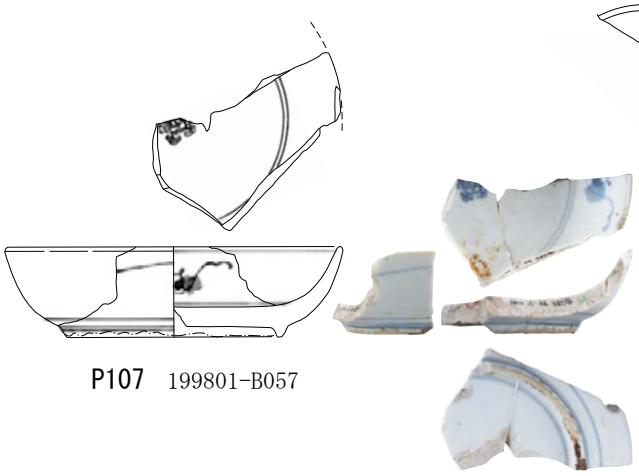
P100；Ⅰ区　東　上面
P101；Ⅰ・Ⅲ区　東　上面
P102；Ⅵ区　上面
P103；Ⅳ区　上面
P104；Ⅱ区　上面

第54図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器23



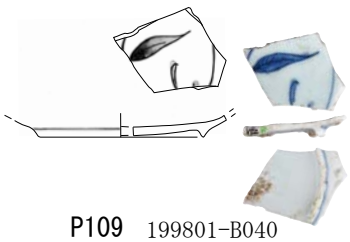
P105　199801-B055

P106　199801-B056

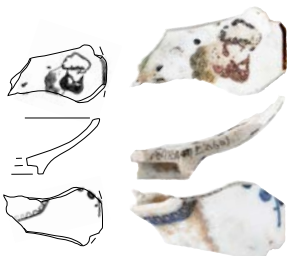


P107　199801-B057

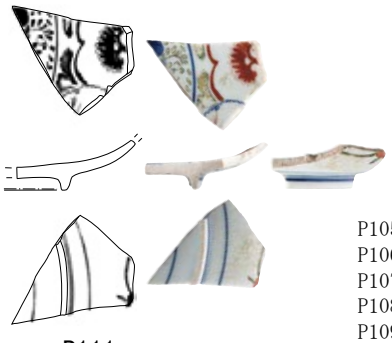
P108　199801-B041



P109　199801-B040



P110　199801-B053

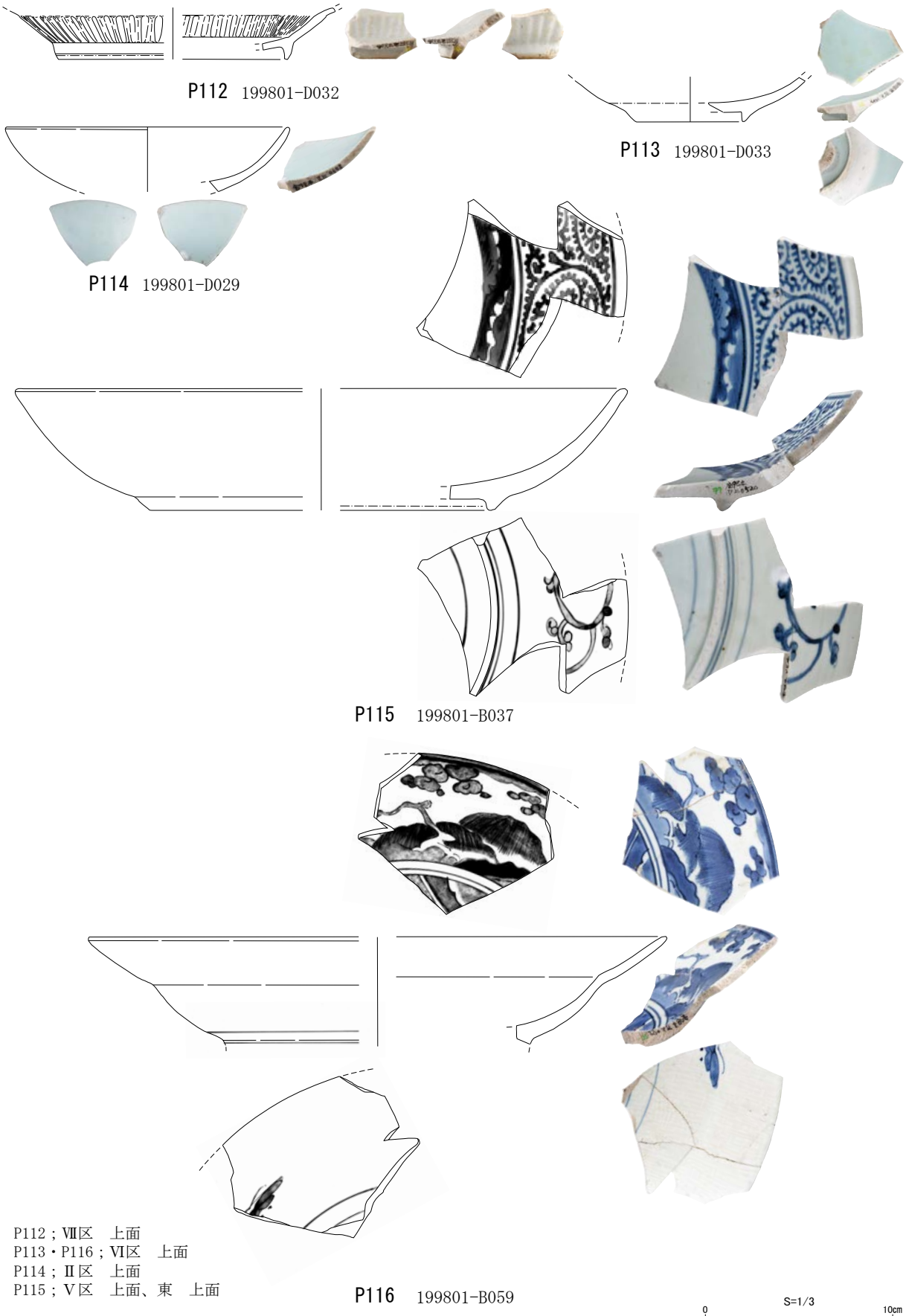


P111　199801-B062

P105・P110；Ⅶ区　上面
P106・P111；Ⅵ区　上面
P107；Ⅴ～Ⅶ区
P108；Ⅱ区　上面
P109；Ⅴ区　東　上面

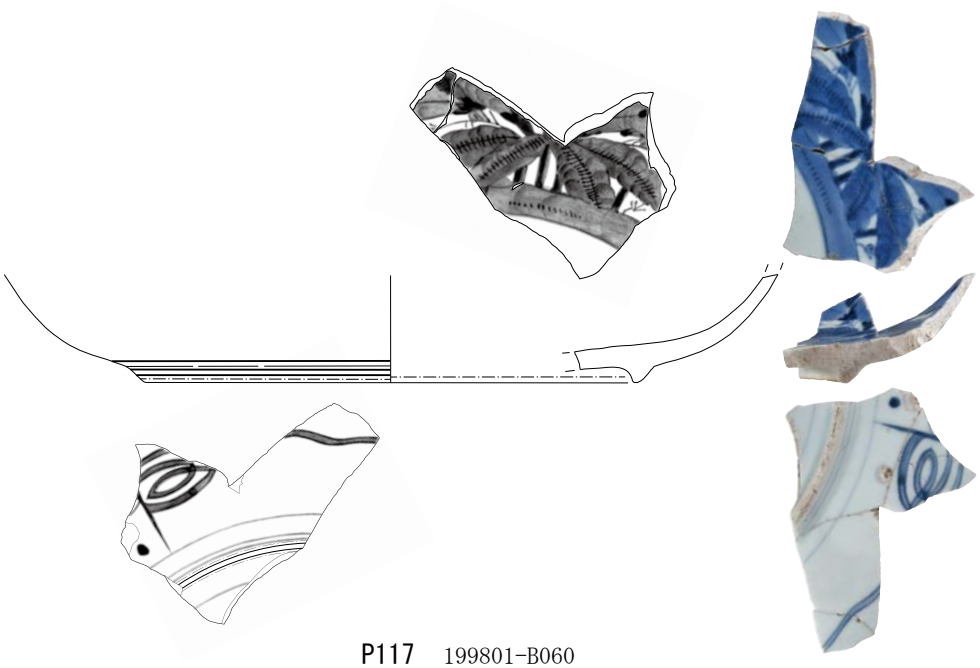
S=1/3
0　10cm

第55図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器24

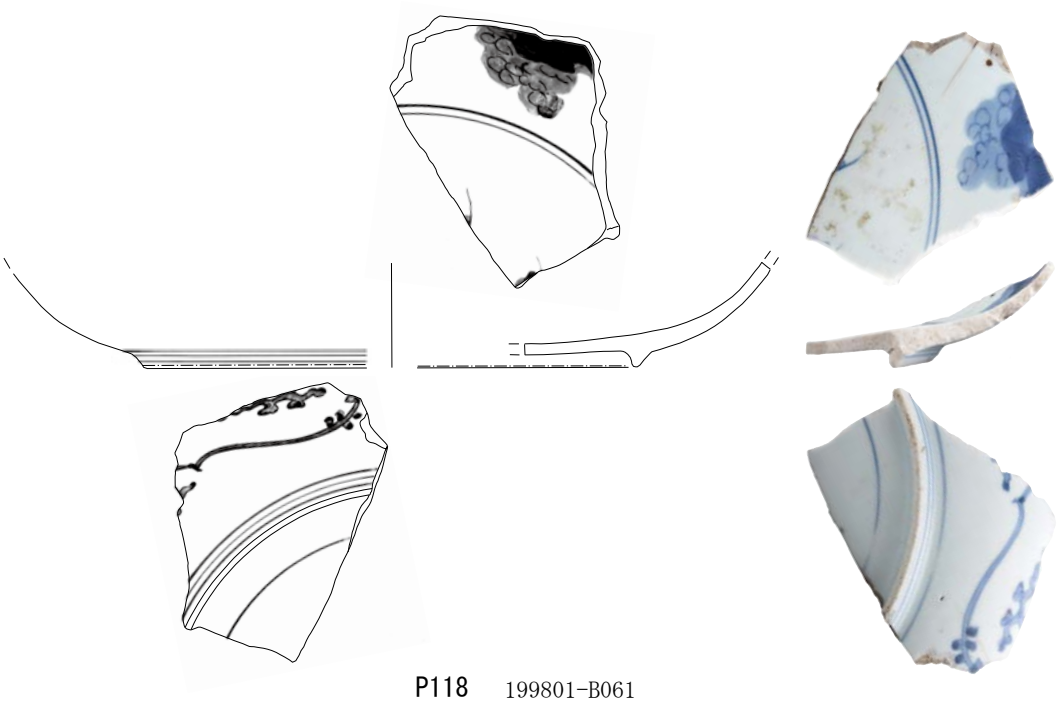


P112；Ⅶ区　上面
P113・P116；Ⅵ区　上面
P114；Ⅱ区　上面
P115；Ⅴ区　上面、東　上面

第56図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器25



P117　199801-B060



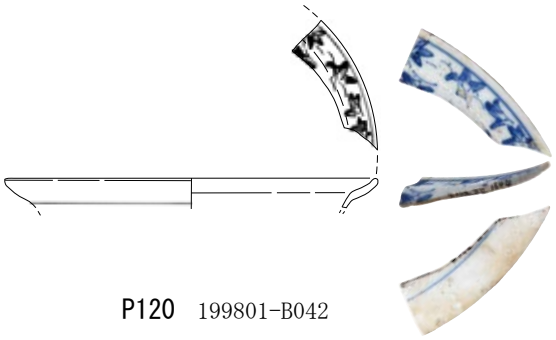
P118　199801-B061

P117；Ⅳ・Ⅵ区　上面
P118；Ⅵ区　上面

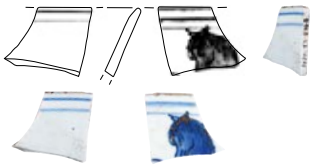
S=1/3
0　10cm

第57図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器26

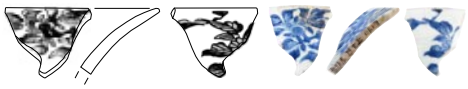
第58図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器27



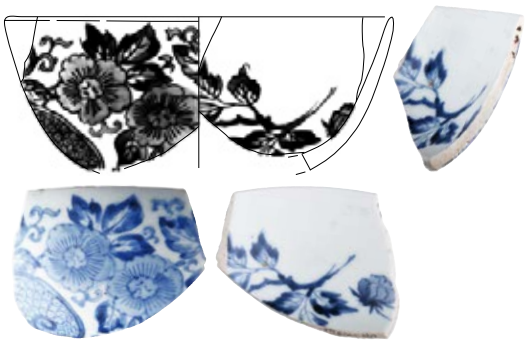
P120　199801-B042



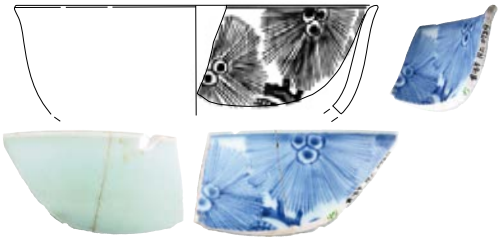
P121　199801-B047



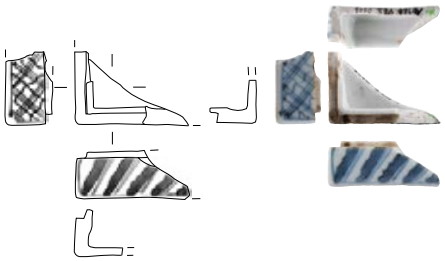
P122　199801-B043



P123　199801-B021

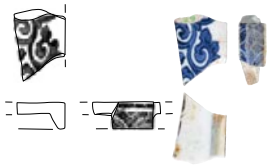


P124　199801-B045

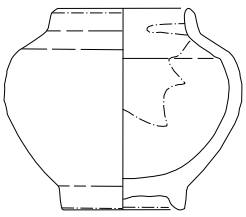


P126　199801-B036

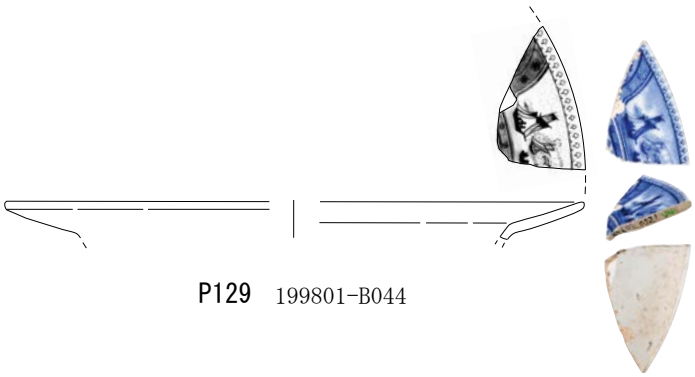
P125　199801-D031



P127　199801-B063



P128　199801-D030



P129　199801-B044

P120；Ⅱ区　上面
P121；Ⅴ区　上面
P122；Ⅲ区　東　上面
P123；Ⅰ区　西　上面
P124・P129；Ⅳ区　上面
P125・P127；Ⅶ区　上面
P126；Ⅴ区　東　上面
P128；Ⅲ区　東　上面、Ⅴ～Ⅶ区　上面

S=1/3
0　10cm

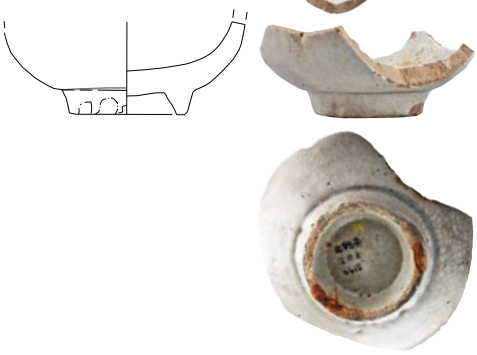
第59図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器28

P130　199801-B067

P131　199801-B069

P132　199801-B083

P134　199801-B068



P133　199801-D034

P135　199801-B071

P136　199801-D046

P137　199801-D099

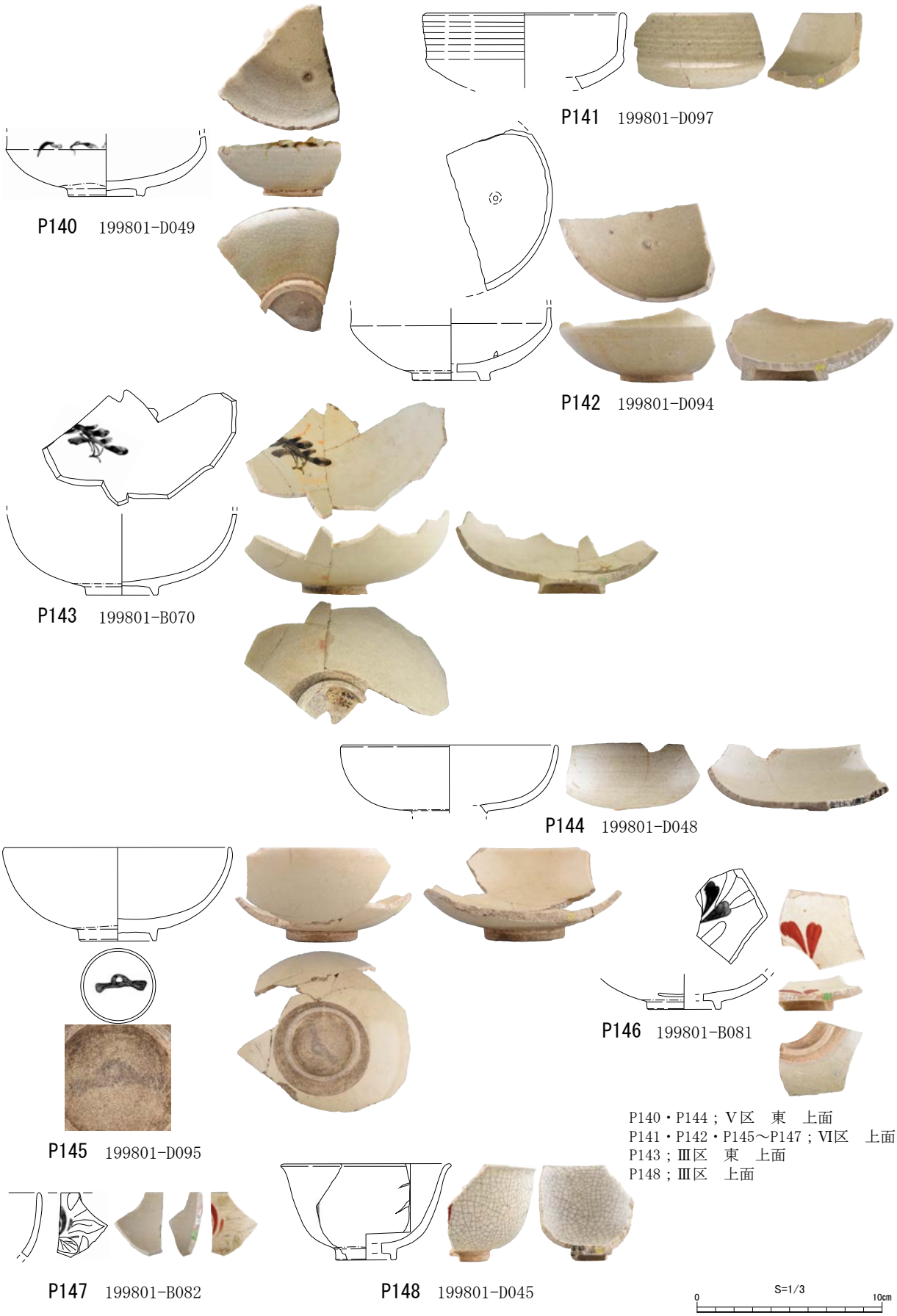
P138　199801-D047

P139　199801-D100

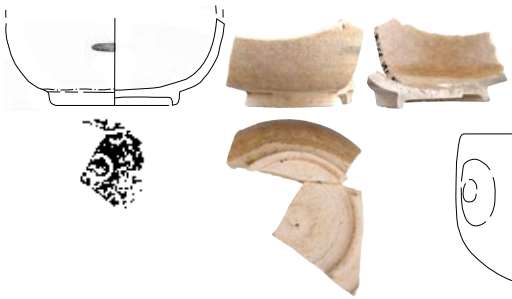
P130；Ⅲ区　東　上面、Ⅴ区　西　上面アゼ
P131；Ⅰ区　東　上面、Ⅴ区　西　上面
P132・P137；Ⅵ区　上面
P133；Ⅰ区　東　上面
P134・P136；Ⅱ区　上面
P135・P138；Ⅲ区　東　上面
P139；Ⅵ～Ⅶ区　上面

S=1/3
0　10cm

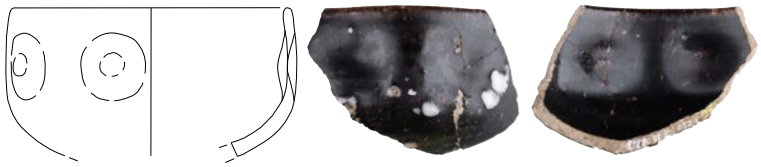
第60図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器29



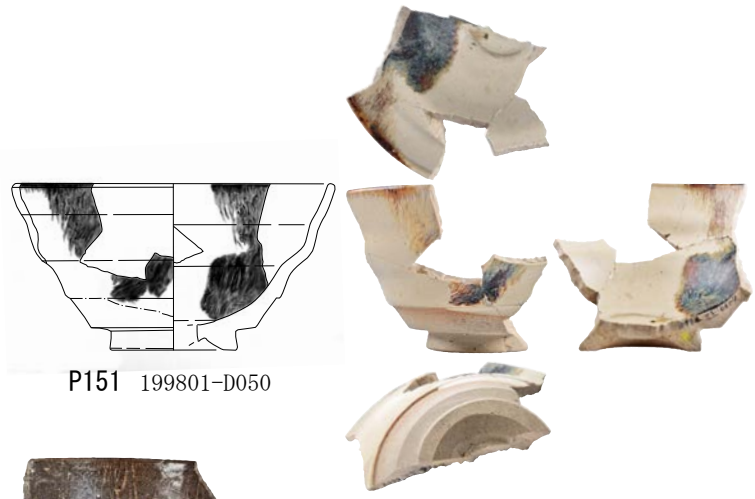
第61図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器30



P149　199801-D096

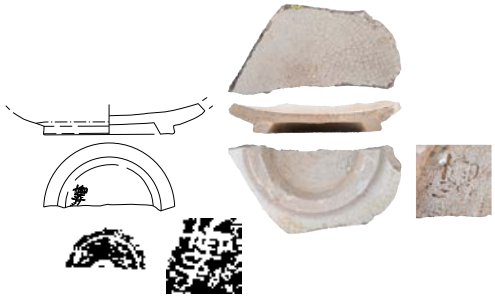


P150　199801-D093



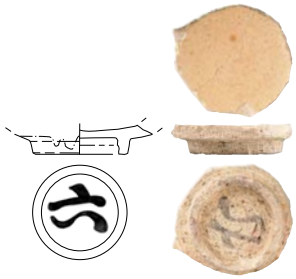
P151　199801-D050

P152　199801-B072



P154　199801-D090

P153　199801-B073

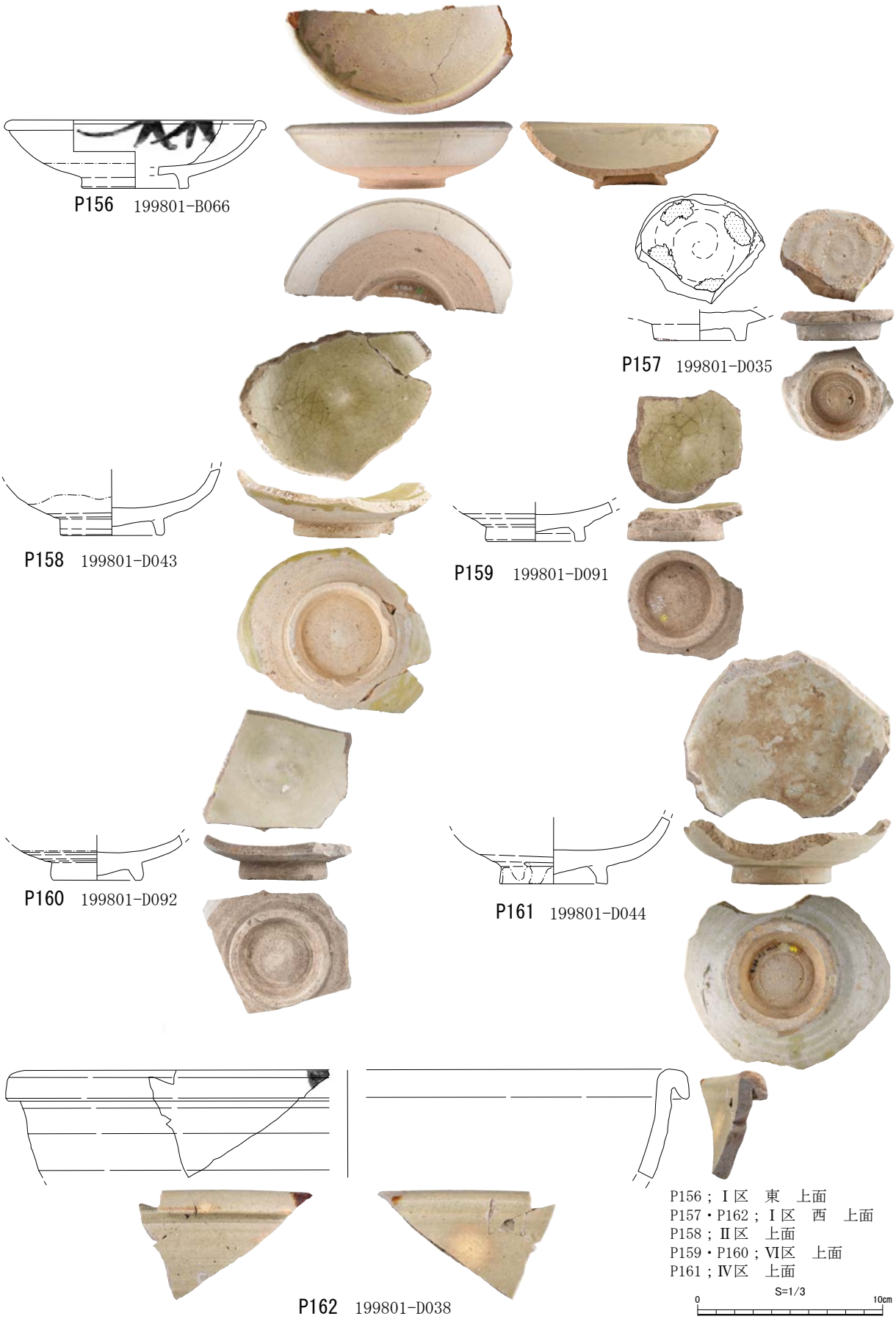


P155　199801-D098

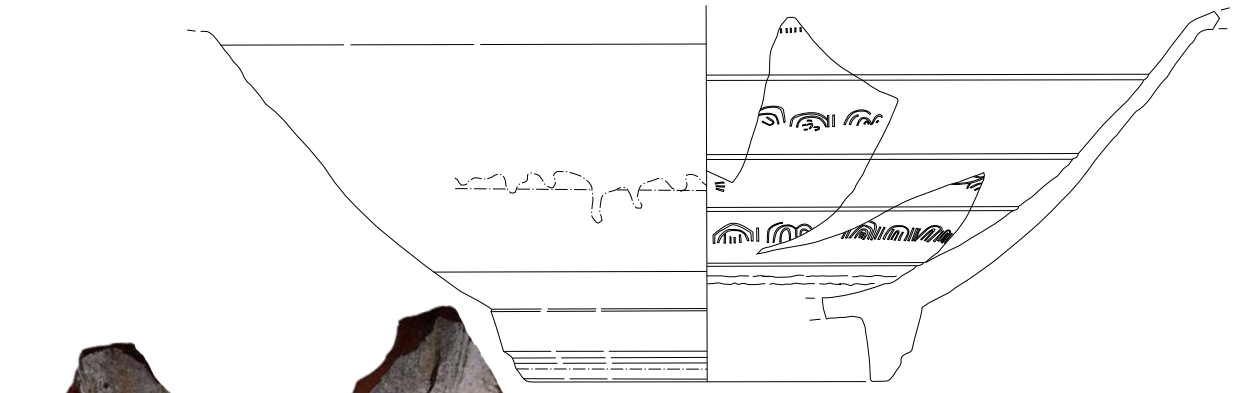
P149・P150・P155；Ⅵ区　上面
P151～P153；Ⅱ区　上面
P154；Ⅶ区　上面

S=1/3
0　10cm

第62図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器31



第63図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器32

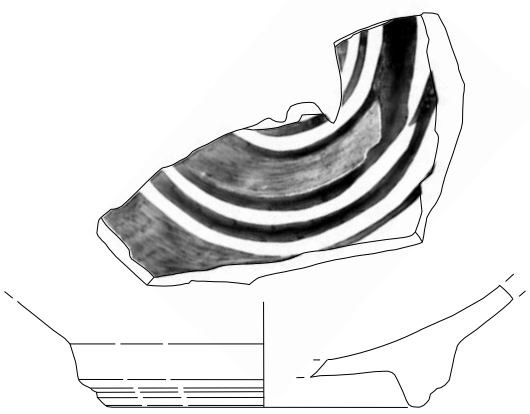


P163　199801-B080

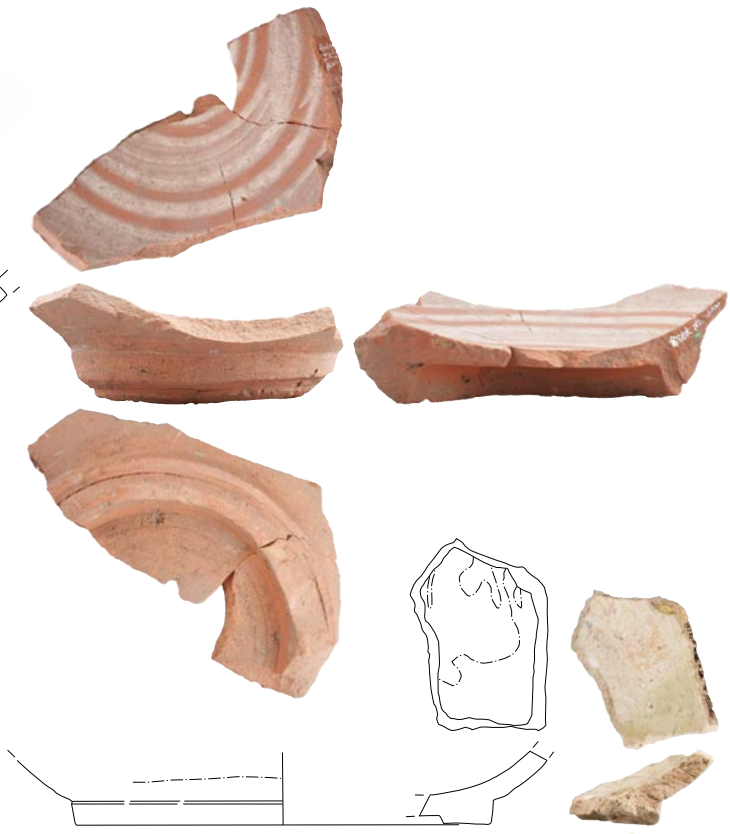
P163；VI区　上面

S=1/3
0　10cm

第64図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器33



P164　199801-B079



P165　199801-D101

P166　199801-D056

P167　199801-D051

P168　199801-D052

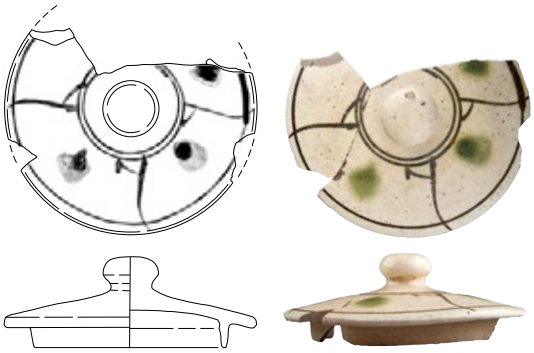
P169　199801-D037

P164；Ⅶ区　上面
P165；Ⅵ～Ⅶ区　上面
P166；Ⅳ区　上面
P167・P168；Ⅲ区　東　上面
P169；Ⅰ区　西　上面

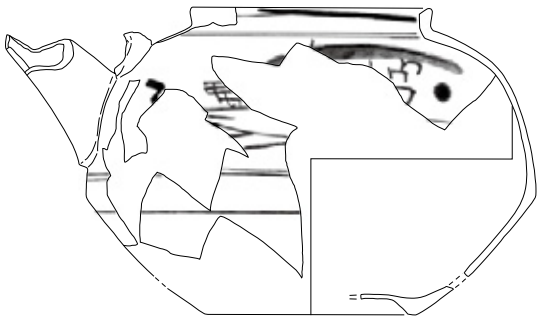
S=1/3
0　10cm

第65図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器34

P170　199801-D102



P171　199801-B075



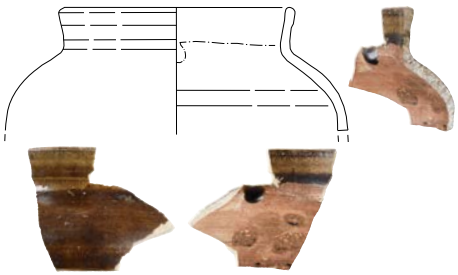
P172　199801-B076

P170；Ⅵ区　上面
P171；Ⅰ区　西　上面
P172；Ⅰ・Ⅴ区　西　上面、Ⅱ・Ⅳ区　上面

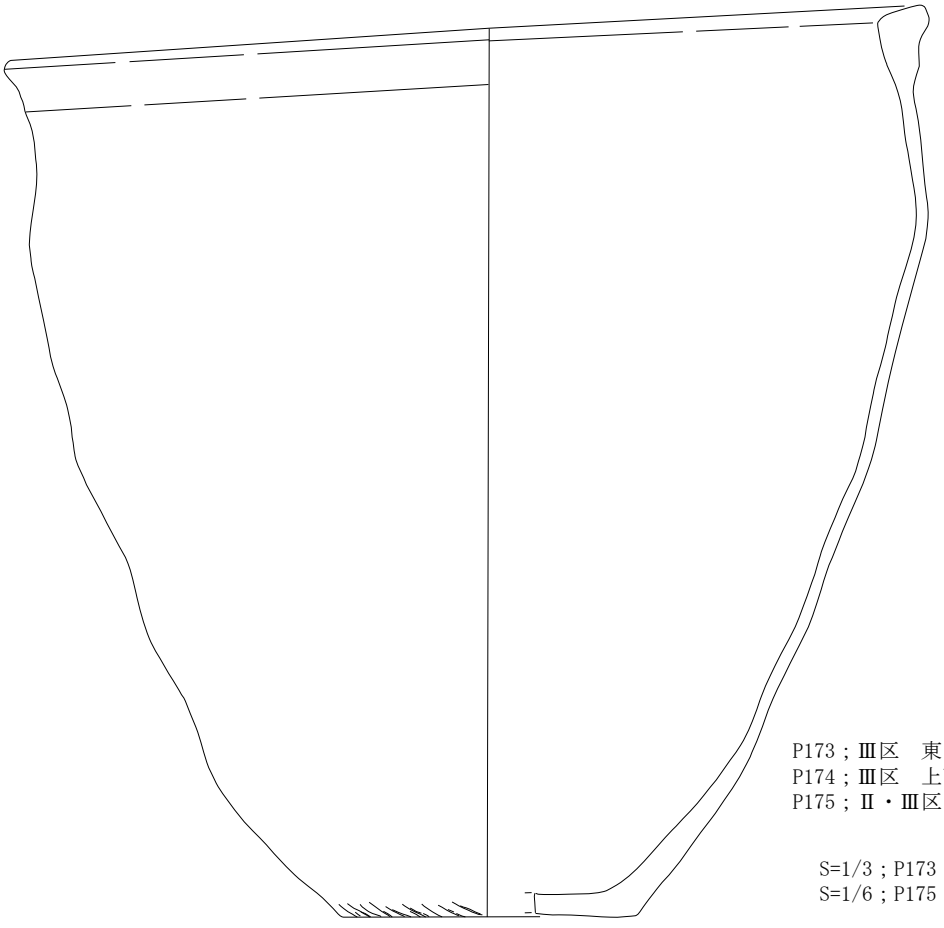
S=1/3
0　10cm

第66図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器35

P173 199801-D053



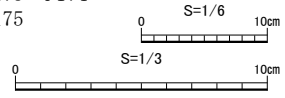
P174 199801-D054



P175 199801-D131

P173；Ⅲ区　東　上面
P174；Ⅲ区　上面
P175；Ⅱ・Ⅲ区　上面、Ⅲ区　東　上面

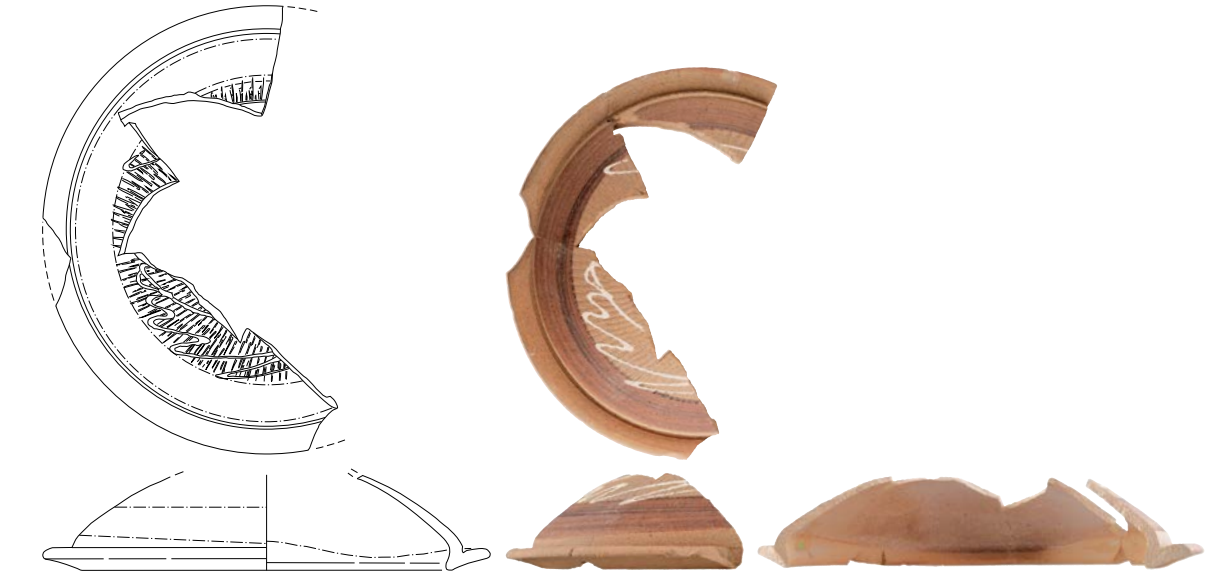
S=1/3；P173・P174
S=1/6；P175



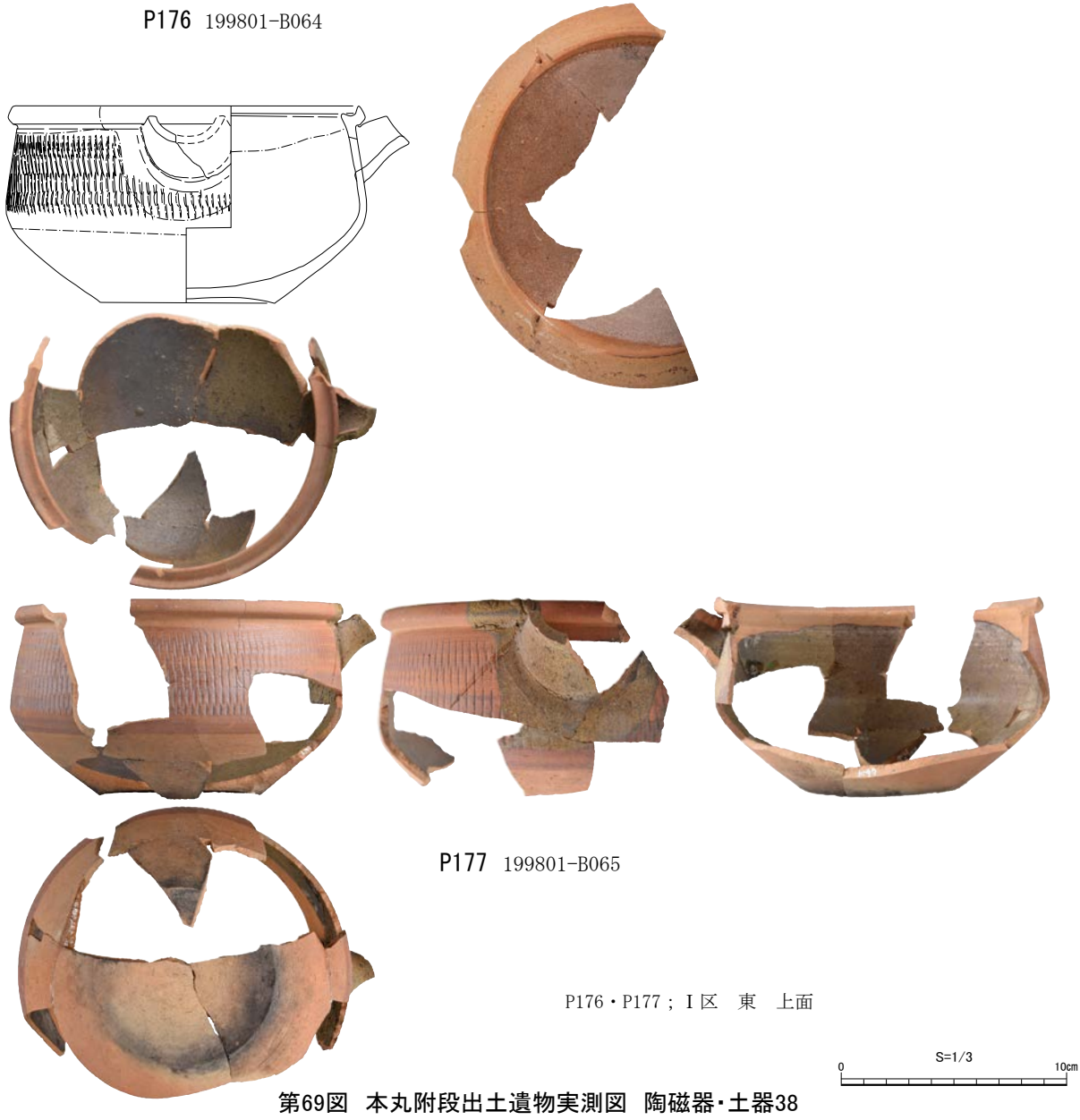
第67図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器36

P175　199801-D131

第68図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器37



P176　199801-B064

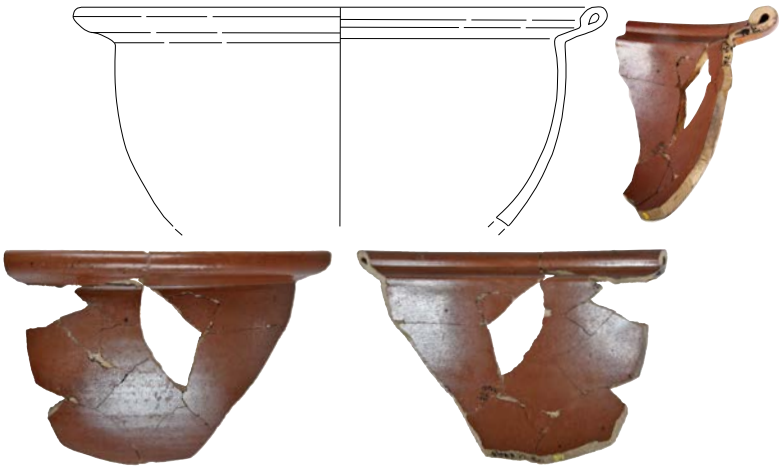


P177　199801-B065

P176・P177；Ⅰ区　東　上面

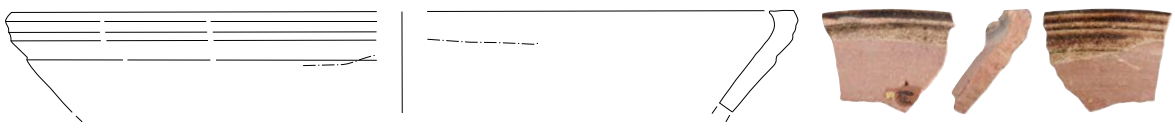
S=1/3
0　10cm

第69図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器38



P178　199801-D057

P179　199801-D067



P180　199801-D059

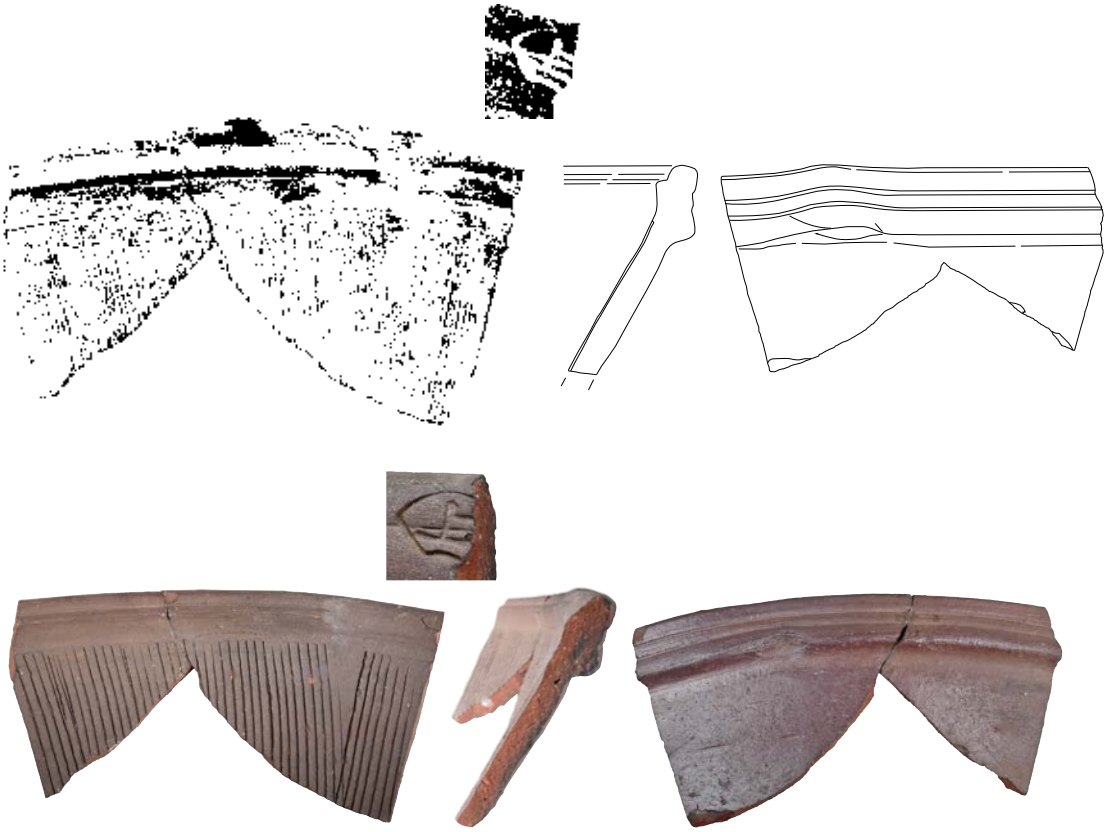
P178・P180；Ⅳ区　上面
P179；Ⅲ区　西　上面

S=1/3
0　10cm

第70図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器39

P181　199801-D066

P182　199801-D108



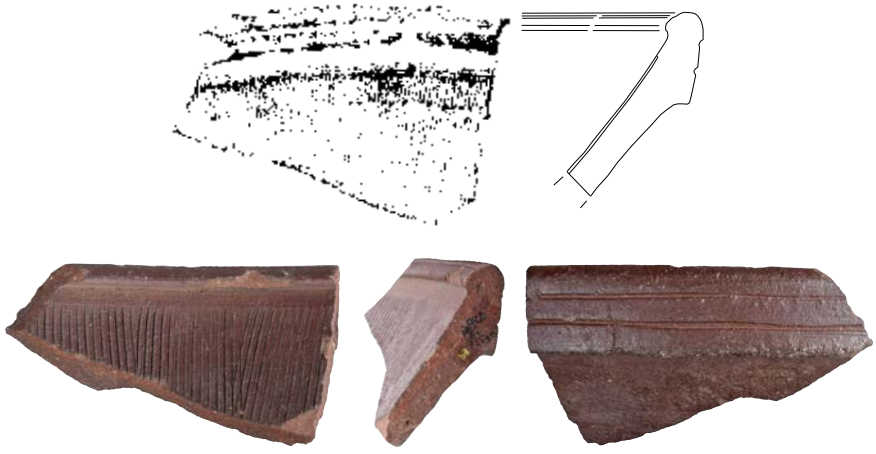
P183　199801-D061

P181；Ⅴ区　上面
P182；Ⅵ区　上面
P183；Ⅳ区　上面

S=1/3
0　10cm

第71図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器40

P184　199801-D062



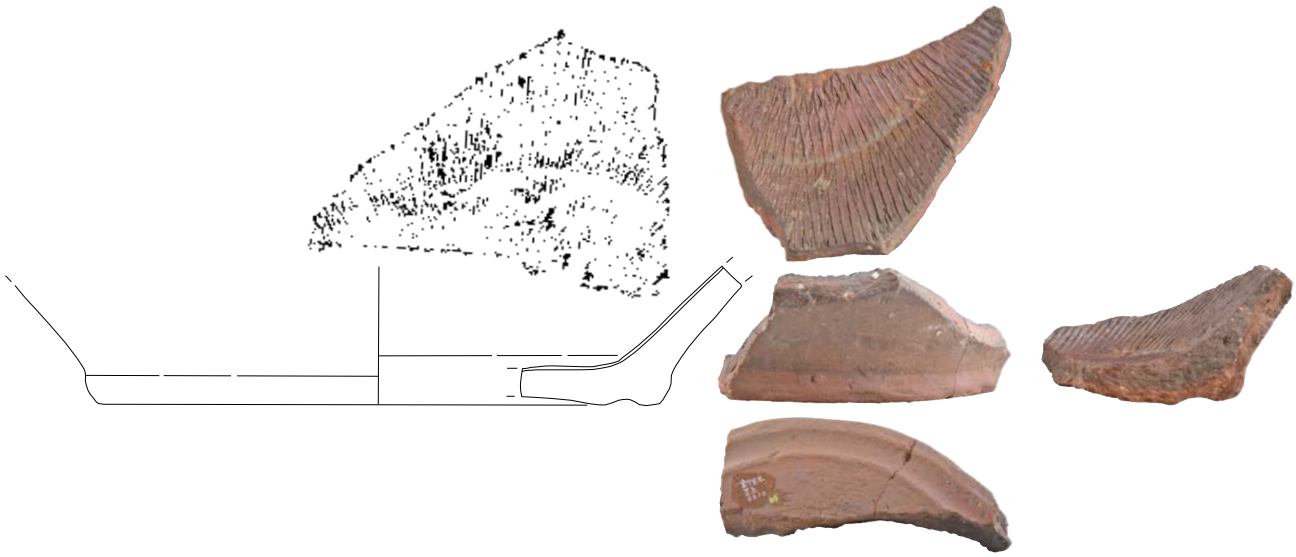
P185　199801-D063

P186　199801-D064

P184；Ⅴ区　上面
P185；Ⅳ区　上面
P186；Ⅲ区　東　上面

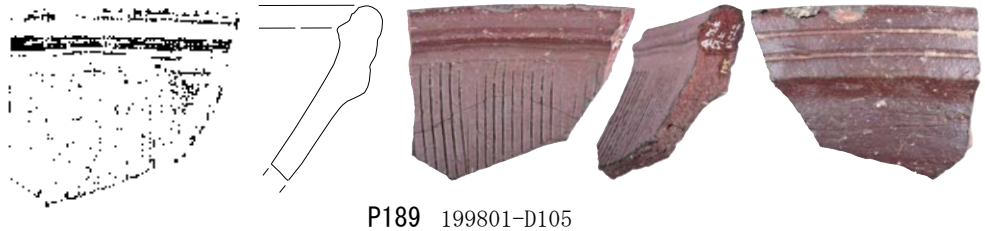
S=1/3
0　10cm

第72図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器41

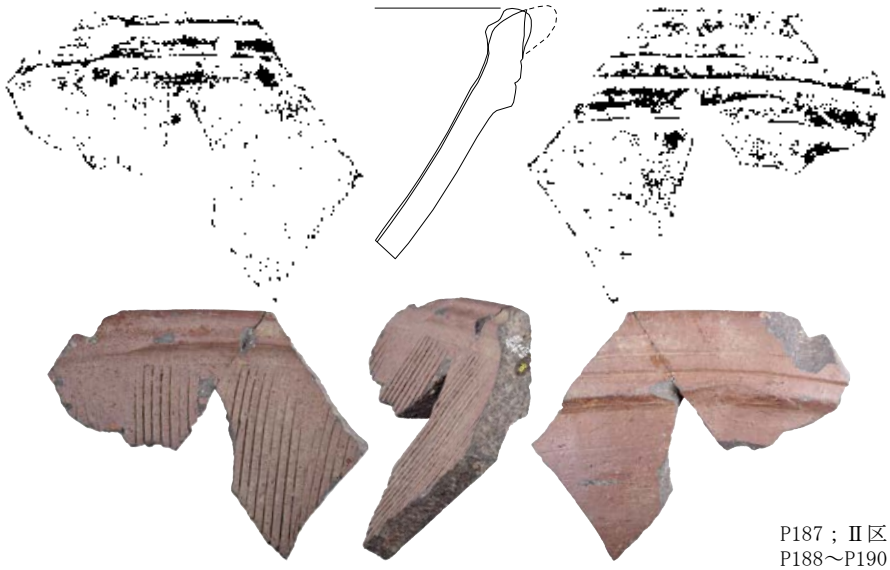


P187　199801-D065

P188　199801-D104



P189　199801-D105

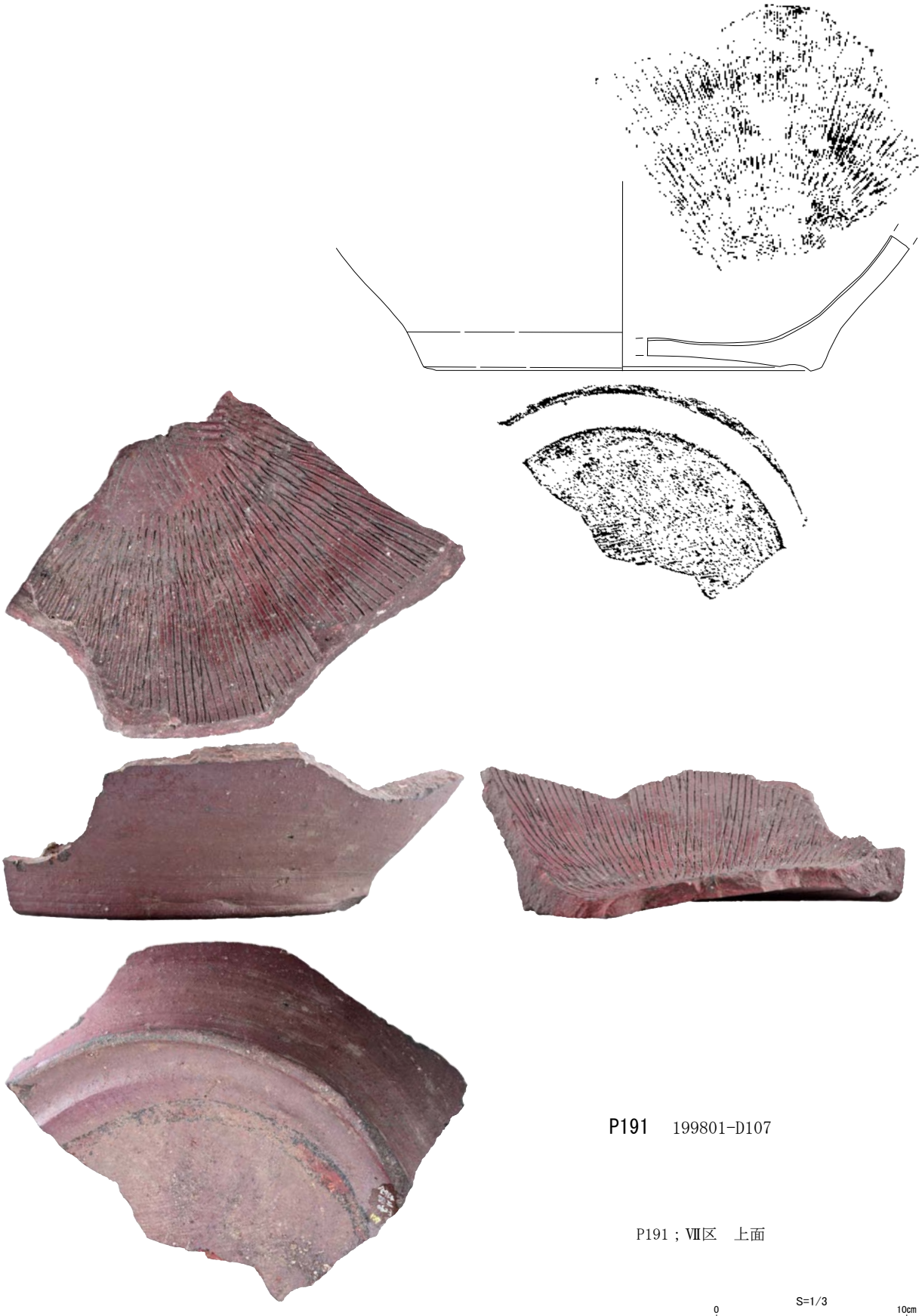


P190　199801-D106

P187；Ⅱ区　上面
P188～P190；Ⅵ区　上面

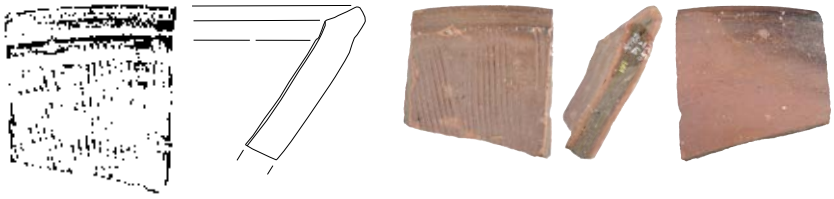
S=1/3
0　10cm

第73図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器42



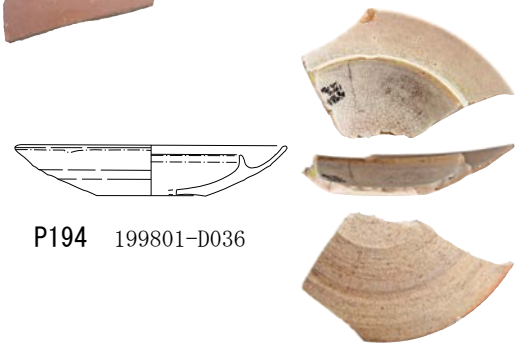
第74図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器43

P192　199801-D068

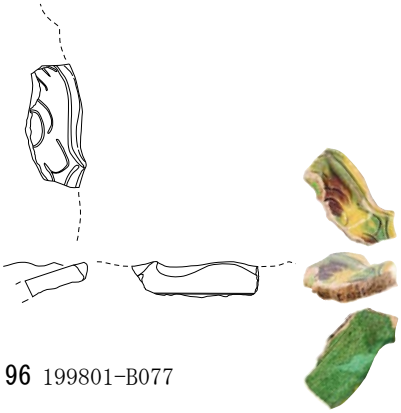


P193　199801-D109

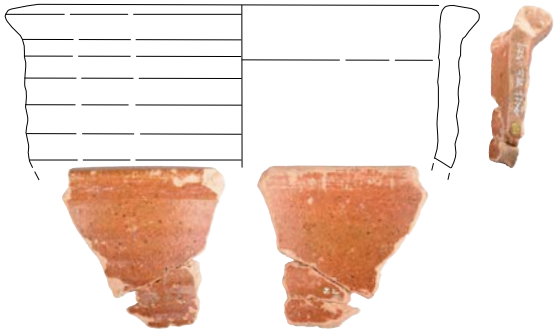
P195 199801-D089



P194　199801-D036

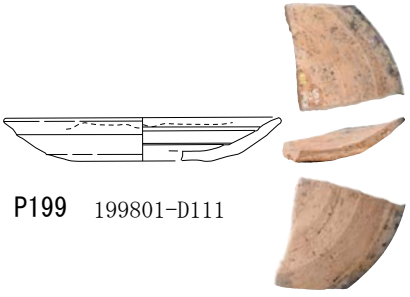


P196 199801-B077



P197　199801-D103

P198 199801-D110

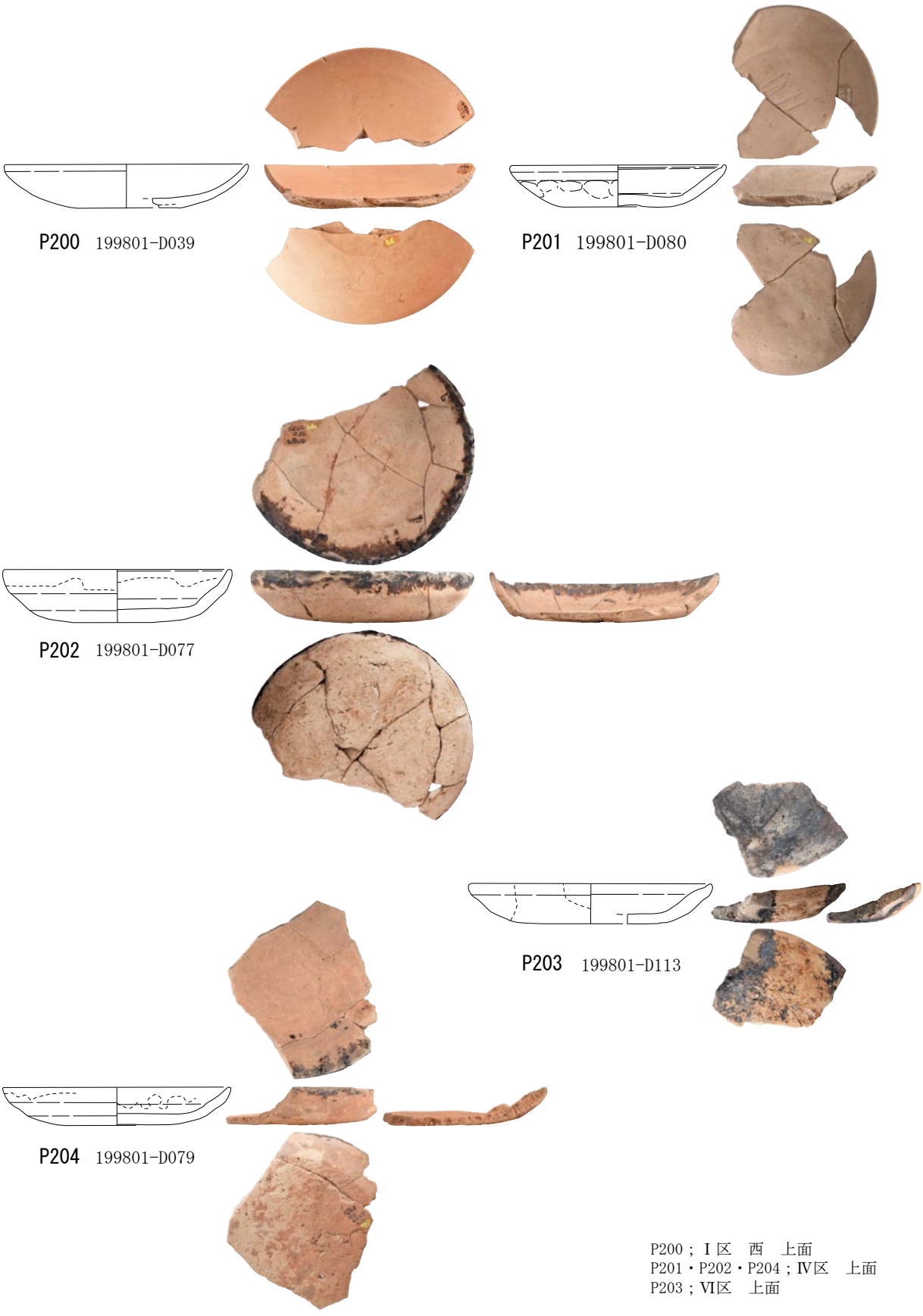


P199　199801-D111

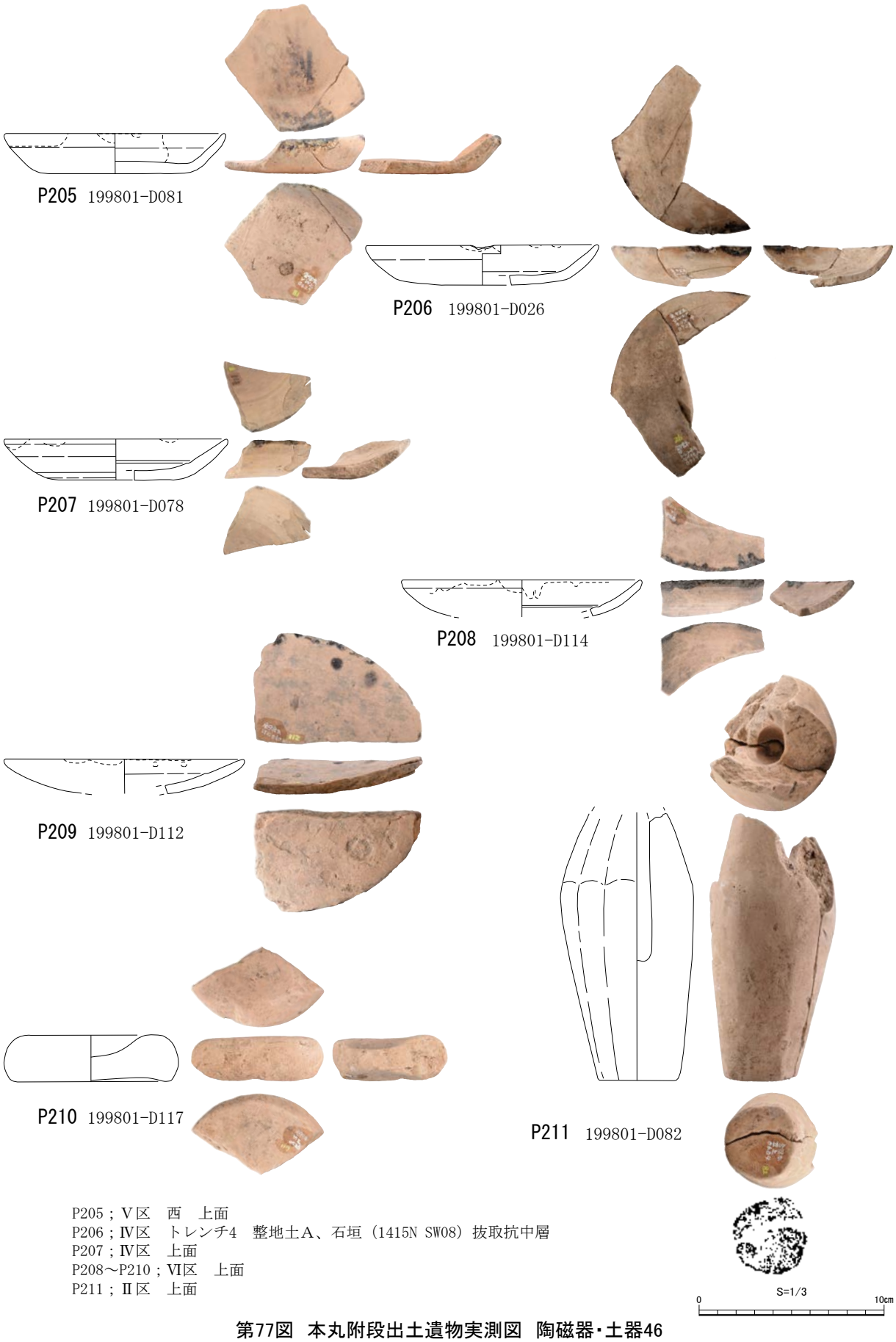
P192；Ⅲ区　東　上面
P193・P197～P199；Ⅵ区　上面
P194；Ⅰ区　西　上面
P195；Ⅱ区　上面
P196；Ⅳ区　上面

S=1/3
0　10cm

第75図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器44



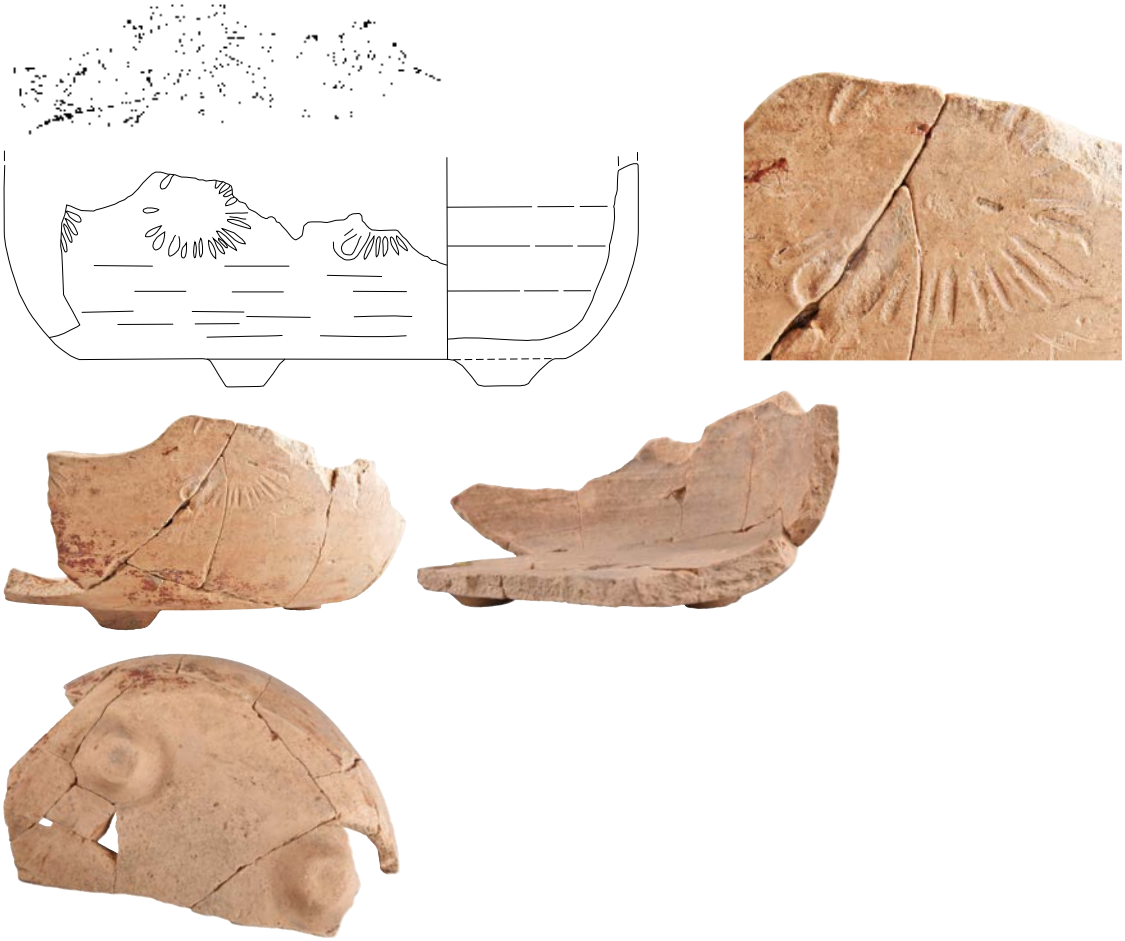
第76図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器45



P205；Ⅴ区　西　上面
P206；Ⅳ区　トレンチ4　整地土A、石垣（1415N SW08）抜取抗中層
P207；Ⅳ区　上面
P208～P210；Ⅵ区　上面
P211；Ⅱ区　上面

第77図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器46

P212　199801-B078

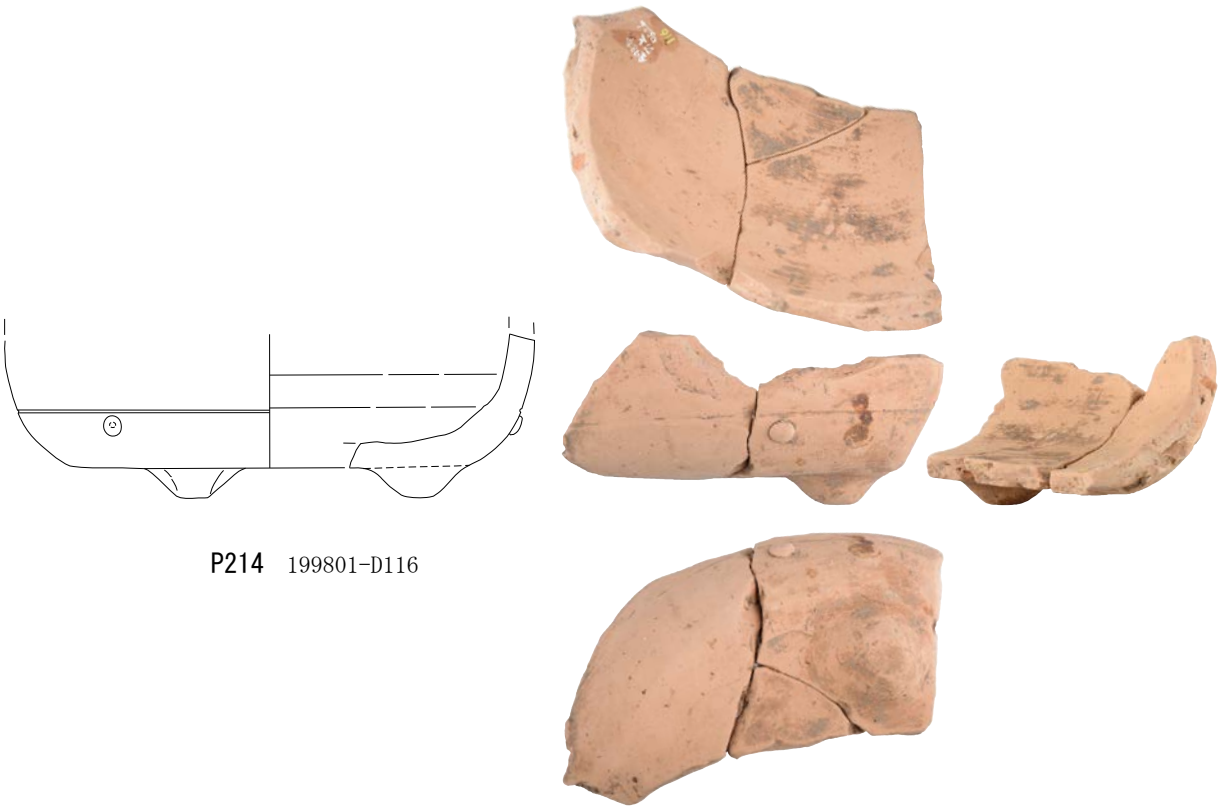


P213　199801-D083

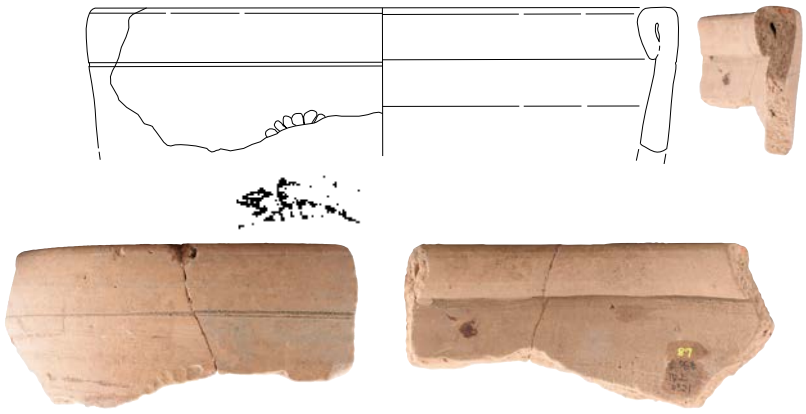
P212；Ⅵ区　上面
P213；Ⅲ区　東　上面

S=1/3
0　10cm

第78図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器47



P214　199801-D116

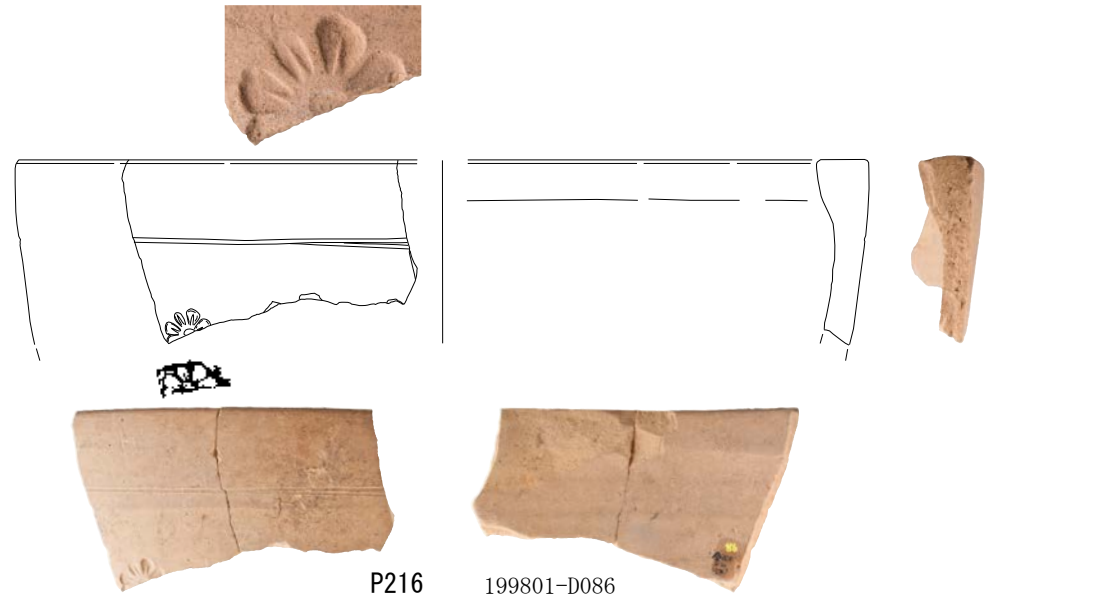


P215　199801-D087

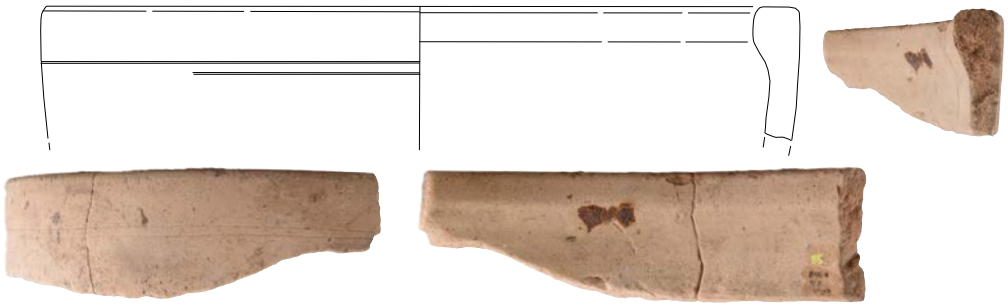
P214；Ⅵ区　上面
P215；Ⅳ区　上面

S=1/3
0　10cm

第79図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器48

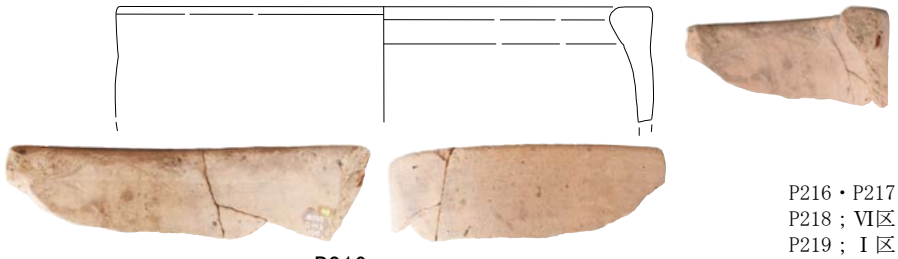


P216　199801-D086



P217　199801-D085

P218　199801-D115



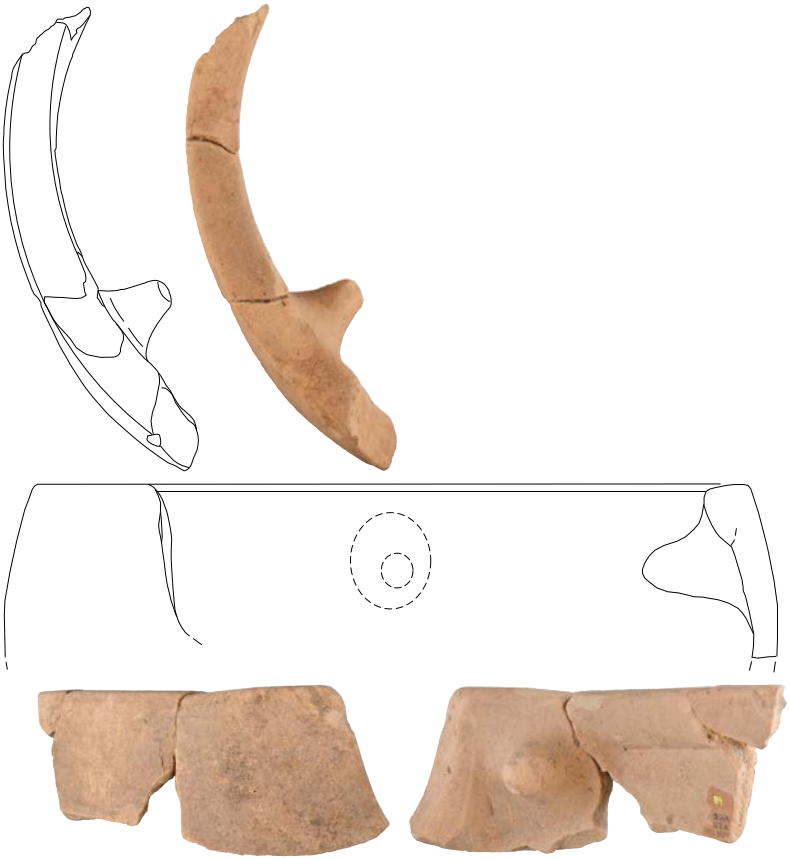
P219　199801-D040

P216・P217；Ⅳ区　上面
P218；Ⅵ区　上面
P219；Ⅰ区　西　上面

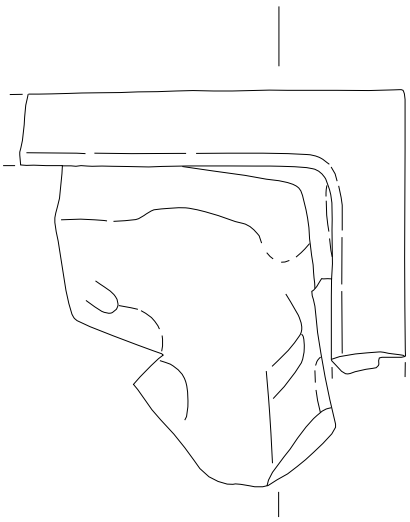
S=1/3

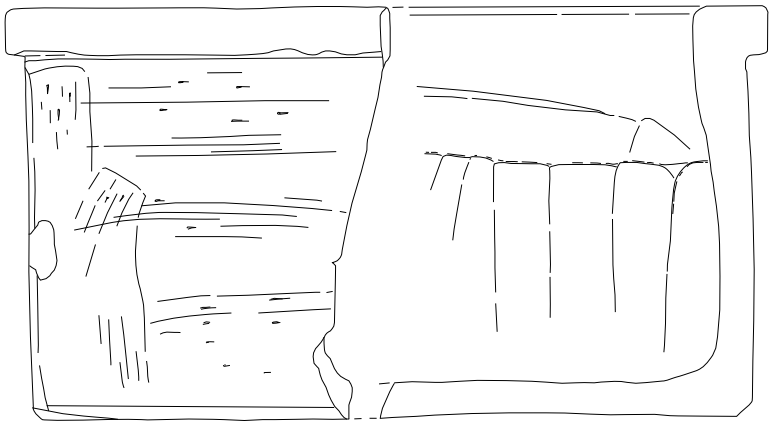
0　10cm

第80図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器49



P220　199801-D084





P220；Ⅲ区　東　上面
P221；Ⅰ区　東　上面

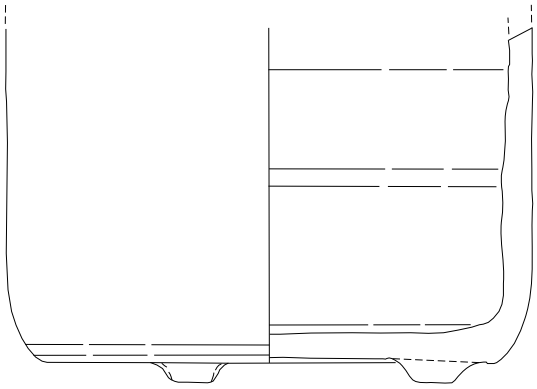
P221　199801-D041

S=1/3
0　10cm

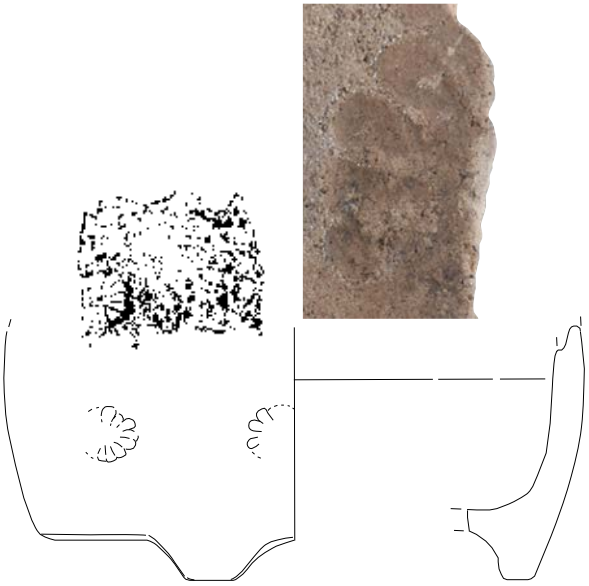
第81図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器50

P221　199801-D041

第82図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器51



P222　199801-D042



P223　199801-D088

P222；Ⅰ区　西　上面
P223；Ⅱ区　上面

S=1/3
0　10cm

第83図　本丸附段出土遺物実測図　陶磁器・土器52

燻瓦

Ａ１　199801-D124

Ｂ１　200003-D105

Ｃ１　201006-D046

Ａ２　200003-D100

Ｂ２　200003-D085

Ｃ２　200003-D130

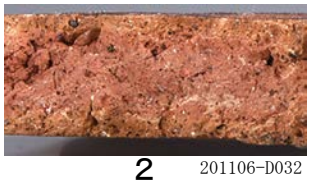
Ａ１：硬質、緻密。断面縞状。
Ａ２：硬質、緻密。断面縞状でない。

Ｂ１：軟質、空隙多。断面縞状。
Ｂ２：軟質、空隙多。断面縞状でない。

Ｃ１：軟質、緻密。断面縞状。
Ｃ２：軟質、緻密。断面縞状でない。

釉薬瓦

１　199801-D151



２　201106-D032

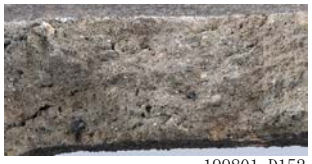
３　199801-D150

４　201204-t114

５Ⅰ　199801-D133

５Ⅱ　201204-t022

６　201106-D055



７　199801-D152

越前　200003-D138

１：橙色系で、白色粒・細砂を含み、細かい空隙が多い。軟質と硬質緻密なものがある。
２：橙色系で１と似るが、砂粒の含みや空隙はやや少なく、細い白い縞が入る。
３：にぶい橙色系で、黒色粒が目立ち、白色粒・礫も含む。細かい空隙が多く、ザックリしている。
４：にぶい褐色系で、白色粒・粗砂を多く含み、硬質。器厚が厚く、断面はにぶい褐色と暗灰色のサンドイッチ状を呈する。
５：橙色・灰褐色で、黒色・白色の縞が多く入る。白色粒を多く含み、黒色粒・礫・粘土塊も含む。全体が縞状を呈し比較的緻密なもの（５Ⅰ）と、大きめの空隙を含み縞状が強くないもの（５Ⅱ）がある。
６：黄橙色系で、砂粒の含み少なく緻密。白色または黒色の細い縞がわずかに入る。
７：灰色で白色粒・細砂を含む砂っぽい胎土。光沢の無い暗灰色の釉が薄く掛かる。

越前：白色粒・粗砂を多く含み、硬質で、焼き締まっている。縞状が強い部分と弱い部分がある。

第 84 図　瓦　胎土分類

巴文Ⅰ

200603-D097

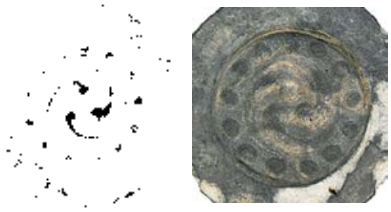
・珠文なし
・巴　左回り

巴文Ⅱ-1a

200703-D003

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が次の巴頭部まで

巴文Ⅱ-1b



200703-D016

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が次の尾部の中程まで

巴文Ⅱ-1c

200003-D081

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が２つ目の巴頭部まで

巴文Ⅱ-2a

199801-D122

・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が次の巴頭部まで

巴文Ⅱ-2b

200703-D011

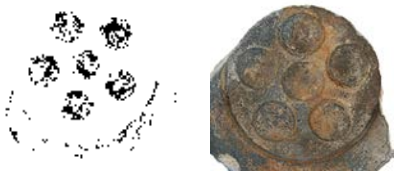
・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が次の尾部の中程まで

巴文Ⅱ-2c

200703-D010

・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が２つ目の巴頭部まで

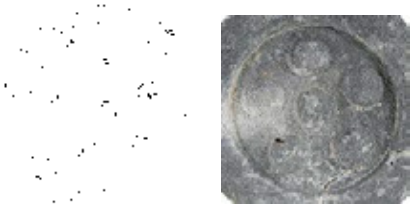
梅鉢文Ⅰ-1a



200703-D018

・軸なし
・花弁と花芯が同じ大きさ
・花弁から花芯までの距離短い

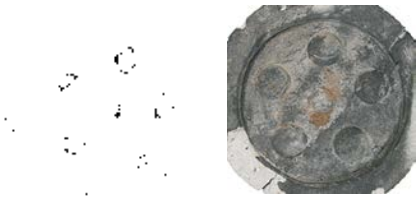
梅鉢文Ⅰ-1b



200703-D013

・軸なし
・花弁と花芯が同じ大きさ
・花弁から花芯までの距離長い

梅鉢文Ⅰ-2



200703-D019

・軸なし
・花弁より花芯が小さい

梅鉢文Ⅱ-1

200703-D001

・軸あり
・花弁と花芯が同じ大きさ

梅鉢文Ⅱ-2

200703-D017

・軸あり
・花弁より花芯が小さい

梅鉢文Ⅲ

201204-T011

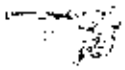
・軸あり
・花芯側軸間に突起（剣）あり

石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所 2010 の分類を基に作成

第 85 図　軒丸瓦　瓦当文様分類

三葉文Ⅰ

199801-D149



200704-D215

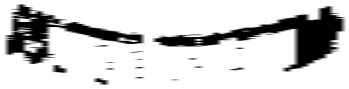
中心飾りの三葉文の横に、下向きに２本、唐草が巻く。その外側下向きの唐草の巻きは繋がっていて、上方先端は枝毛状。

三葉文Ⅱ

200704-D216

中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は１本。その外側は唐草が「川」の字状に伸びる。上方先端は枝毛状。

三葉文Ⅲ



200704-D217

中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は１本。先端まで数本の唐草で構成されている。三葉間はあまり開かない。

三葉文Ⅳ

200704-D218

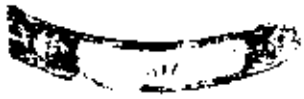
中心飾りの三葉文の間が開き、唐草は繋がっていない。全体的に簡略化される。

三葉文Ⅴ

200201-D052

中心飾りの三葉文が花弁のように幅を持ち、唐草は全て下向きに巻く。

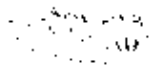
三葉文Ⅵ



200301-D057

中心飾りの三葉文の間は開き、唐草は１本ずつ独立して、上下交互に巻いている。

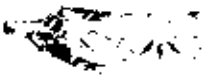
三葉文Ⅶ



200201-D053

中心飾りの三葉文は開き、横の下向き唐草は１本で巻きが浅い。その外側の唐草は、２本が交差して延び、下向きに浅く巻いている。その外側にも下向きの唐草がある。

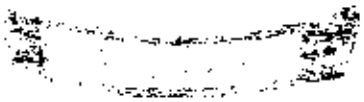
垂下型三葉文



201204-T029

中心飾りの三葉文が下を向き、上に小さな葉が２枚つく。第１唐草が下向きに深く巻き、途中から上向きの唐草が枝分かれしている。第２唐草も第１唐草から枝分かれして、先端は上下に分かれて巻き、間に蕾状のものがある。

半葉文



200201-D140

中心飾りは輪郭線で描かれた葉の上半分。外側に、下向きに巻く葉と上向きに巻く唐草がある。

（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基に作成）

第 86 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類１

梅鉢文Ⅰ

200703-D024

中心飾りは梅鉢文。第１唐草が第２唐草に添って上下に巻く。第２唐草は末端が上向きに巻く。

梅鉢文Ⅱ

200703-D025

中心飾りは梅鉢文。唐草は中心飾りに近い側で３本。第１唐草は上が下より開く。第２唐草は末端の巻きが大きく、下向きに巻く。

梅鉢文Ⅲ－１

200503-D011

中心飾りは梅鉢文。第１唐草の開きは上下同幅。下が上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文Ⅲ－２

200503-D013

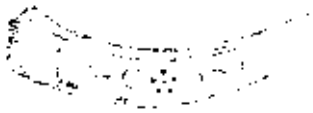
中心飾りは梅鉢文。第１唐草は下が上より開き、上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文Ⅳ

199801-D156

中心飾りは梅鉢文。唐草は菊文Ⅲ－３と類似して、中心飾りを包むような第１唐草と屈曲の深い第２唐草からなる。

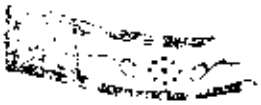
桜文



200603-D049

中心飾りは桜文。 第１唐草から第２唐草へは途切れずに続いている。

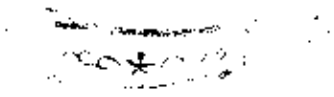
九曜文



200003-D147

中心飾りは九曜文。唐草は簡略化され、第１唐草から第２唐草へは途切れずに続いている。菊文Ⅲが変化したものかもしれない。

星文



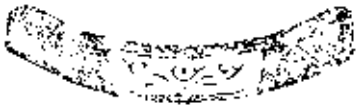
200003-D148

中心飾りは星文。唐草は巻きが浅く、第１唐草が下に巻き、第２唐草が上に巻いて枝分かれしていて、他の唐草文とは逆になっている。

（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基に作成）

第 87 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類２

玉文Ⅰ



201106-t368

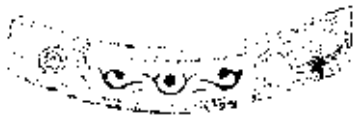
中心飾りは第1唐草が玉を抱えるように配され、第2唐草は一つなぎになっている。玉の下には縦の軸が第2唐草の下までである。

玉文Ⅱ－1

199904-D056

玉は少し大きくなり、唐草も太くなるが、稜を持つため拓本では細く表現される。第2唐草が左右に独立する。玉は第1唐草の下まで続く軸を持つ。

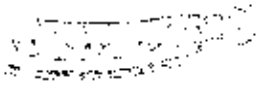
玉文Ⅱ－2



201106-t367

玉は軸を持たず、玉・唐草ともに扁平になるため拓本では太く表現される。

玉文Ⅱ－3



199904-D030

玉は軸を持たず、第2唐草は外側に離れ、巻きが浅くなって、子葉が大きくなる。

玉文Ⅲ

201106-t089

玉が大きくなり、第1唐草は玉を抱くように上に延びる。第2唐草は下向きに深く巻き、上向きに枝分かれしている。

玉文Ⅳ

200003-D149

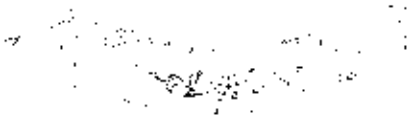
中心飾りの玉は横長になり、上下に軸がある。第2唐草は上向きに渦を巻く。

玉文Ⅴ

199801-D150

中心飾りは軸を持つ玉文であるが、唐草は葉のようになっている。

五弁花文



201204-t077

中心飾りは五弁花文。輪郭線で描かれた葉状の唐草がある。

宝文

199801-D155

中心飾りは宝袋。袋の口を縛った房付きの紐が横に延びる。

（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基に作成）

第 88 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類３

菊文Ⅰ

201106-D071

中心飾りの菊は花弁 10 枚。線は華奢で、稜がはっきりしている。唐草は上向きに巻く。

菊文Ⅱ

200802-D001

中心飾りは 10 弁の菊花文。唐草は巻きが浅く、第 2 唐草は末端が下を向く。

菊文Ⅲ－１

200603-D050

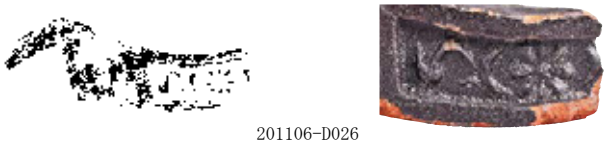
中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は幅があり、輪花状になっている。第１唐草は中心飾りの菊花文を包むように上に延びて、第２唐草は下向きに巻いて、先端で枝分かれしている。

菊文Ⅲ－２

200603-D052

中心飾りはⅢ－１より丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化され、先端で枝分かれしなくなる。

菊文Ⅲ-3



201106-D026

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化されて輪花状ではなくなり、第２唐草の屈曲が深い。

菊文Ⅲ－４

201204-T014

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。第２唐草は第１唐草の途中から出て、横へ延びた後、上に延びる。

菊文Ⅳ－１

200802-D003

中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。第１・第２唐草とも枝分かれせず、第２唐草は曲がりながら上へ延びる。

菊文Ⅳ－２

200802-D005

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は菊文Ⅳ－１と同じ。

菊文Ⅴ

200802-D004

中心飾りは 8(?) 弁の菊花文。第１唐草は上下に緩く巻き、第２唐草は、枝分かれしたものが上に強く巻いている。

菊文Ⅵ

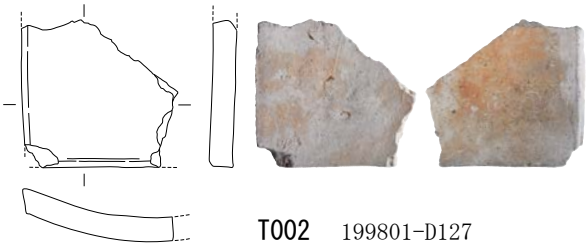
199904-D295

中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。唐草は、梅鉢文Ⅲ－１と同じく、第１唐草の開きが上下同幅で、下が上に比べ潰れ、末端の巻は上を向く。

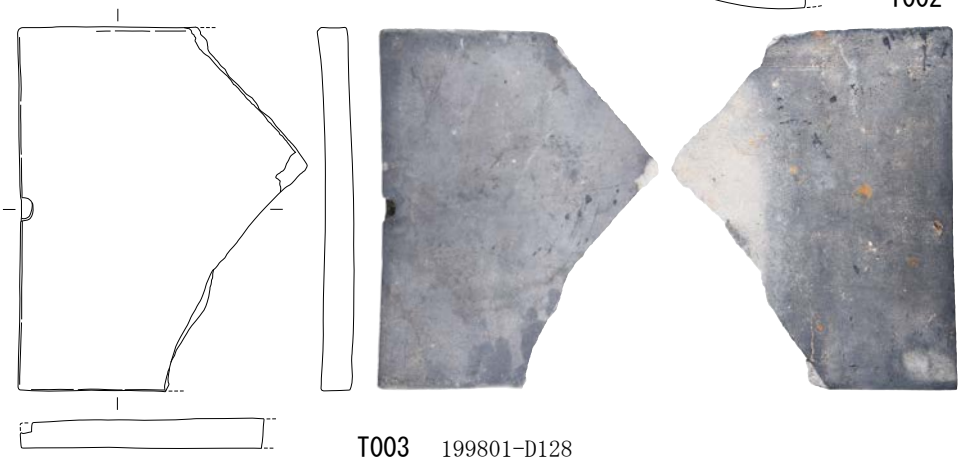
（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基に作成）

第 89 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類４

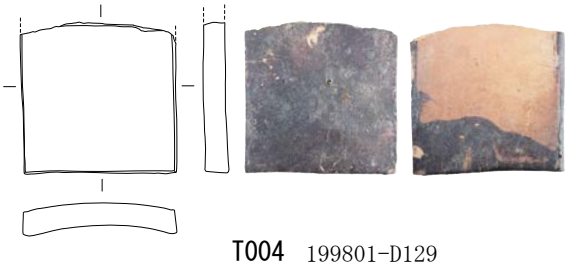
T001　199801-D126



T002　199801-D127

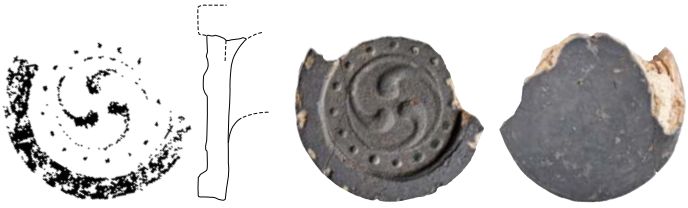


T003　199801-D128



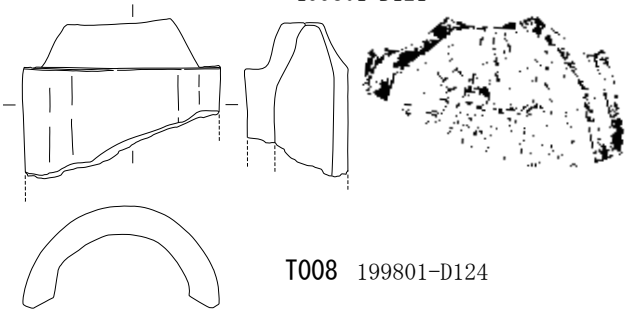
T004　199801-D129

T005　199801-D122



T006　199801-D121

T007　199801-D123

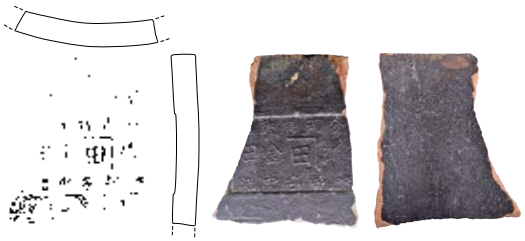


T008　199801-D124

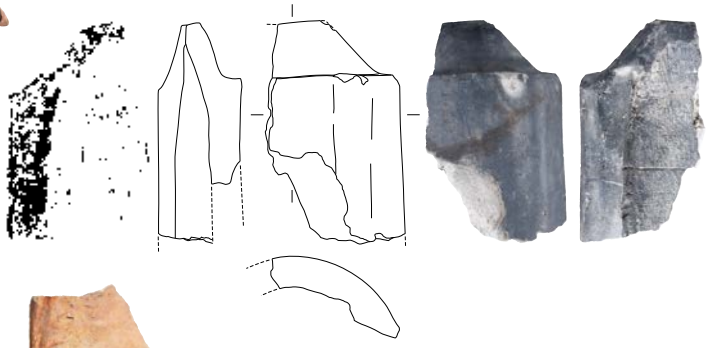
T001・T002；Ⅳ区　トレンチ4　整地土A
T003；Ⅶ区　整地土B
T004；Ⅶ区　整地土B　西
T005～T007；Ⅴ区　SK04
T008；Ⅴ区　SK04　9層

S=1/6
0　10cm

第90図　本丸附段出土遺物実測図　瓦1



T009 199801-D151



T010 199801-D118

T011 199801-D119

T012 199801-D120

T009；Ⅵ区　SK01
T010～T012；Ⅳ区　SK03
T013；Ⅴ区　トレンチ3　SK05
T014；Ⅰ区　上面　アゼ、西　上面
T015；Ⅱ区　上面

T013 199801-D125

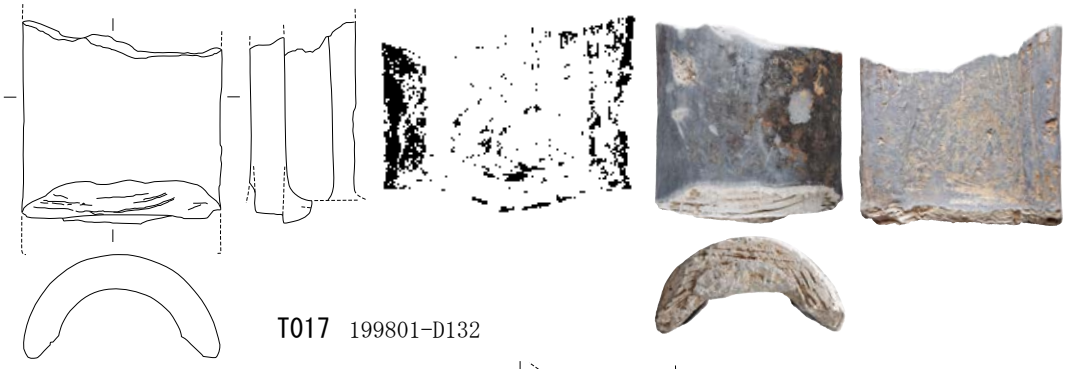
T014 199801-D134

T015 199801-D140

S=1/6
0　10cm

第91図　本丸附段出土遺物実測図　瓦2

T016 199801-D139



T017 199801-D132

T018 199801-D143

T020 199801-D149

T019 199801-D144

T021 199801-D145

T022 199801-D135

T023 199801-D136

T024 199801-D152

T016；Ⅳ区　上面
T017；Ⅶ区　上面
T018；Ⅴ区　西　上面
T019；Ⅴ区　上面
T020；Ⅵ区　上面
T021；不明
T022・T023；Ⅰ区　東　上面
T024；Ⅱ区　西

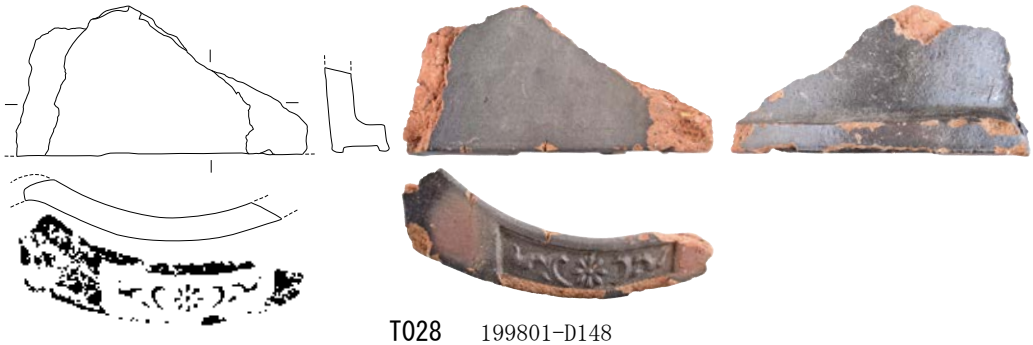
第92図　本丸附段出土遺物実測図　瓦3

S=1/6
0　10cm

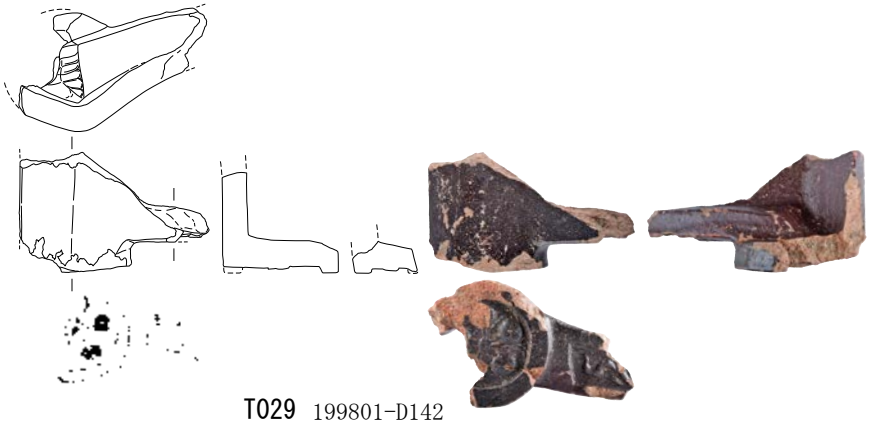
T025　199801-D146

T026　199801-D150

T027　199801-D156



T028　199801-D148

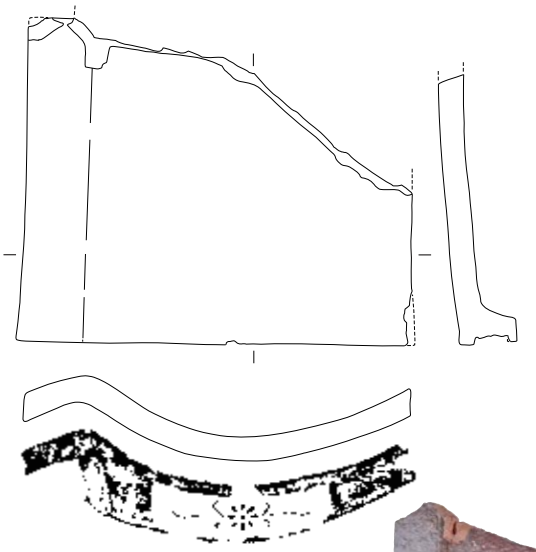


T029　199801-D142

T025；Ⅲ区　東　上面
T026；Ⅵ区　上面
T027；Ⅲ区　上面　アゼ
T028；Ⅱ区　上面
T029；Ⅴ区　上面

S=1/6
0　10cm

第93図　本丸附段出土遺物実測図　瓦4



T030　199801-D147

T031　199801-D157

T032　199801-D155

T033　199801-D141

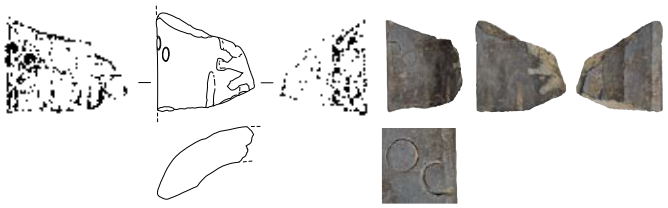
T034　199801-D133

T030；Ⅲ区　東　上面
T031；Ⅴ区　西　上面
T032；Ⅱ区　上面
T033；Ⅳ区　上面
T034；Ⅲ区　西　上面

S=1/6
0　10cm

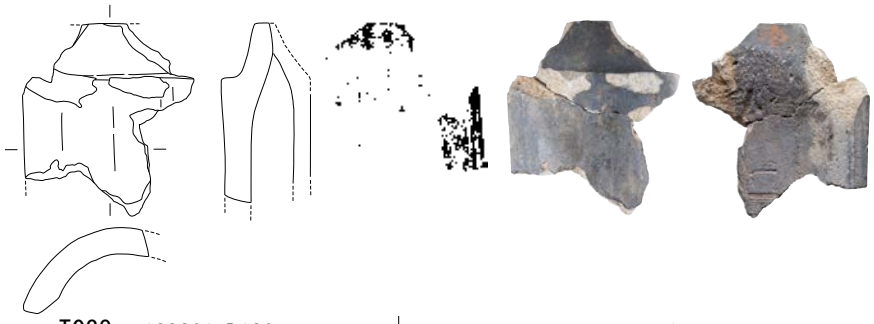
第94図　本丸附段出土遺物実測図　瓦5

T035　199801-D158

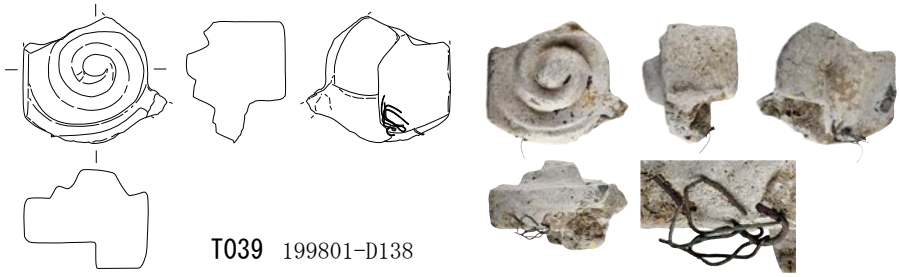


T036　199801-D154

T037　199801-D153



T038　199801-D130



T039　199801-D138

T040　199801-D137

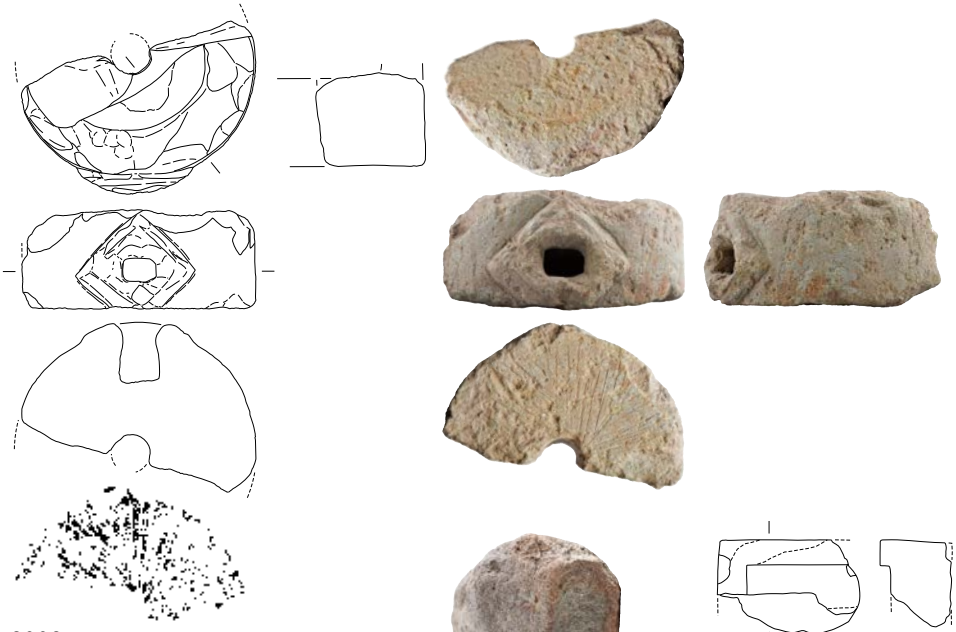
T035～T037；Ⅵ区　上面
T038；Ⅳ区　トレンチ4　東
T039；Ⅲ区　東　上面
T040；Ⅲ区　西　上面

S=1/6
0　10cm

第95図　本丸附段出土遺物実測図　瓦6

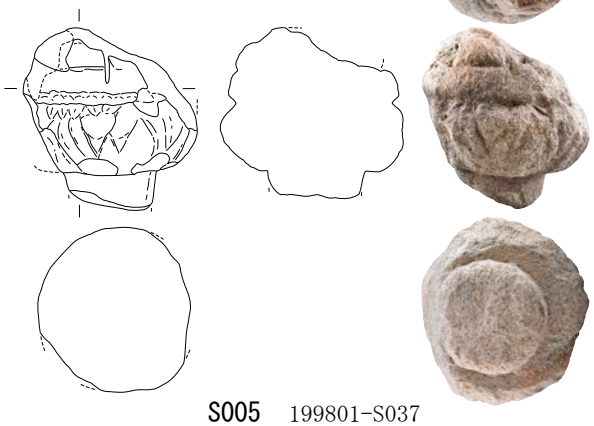
S001　199801-S039

S002　199801-S040



S003　199801-S036

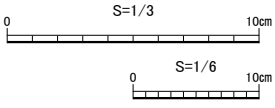
S004　199801-S038



S005　199801-S037

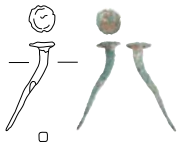
S001；Ⅳ区　上面
S002；上面
S003；Ⅰ区　西　上面
S004；Ⅵ区　上面
S005；Ⅲ区　東　上面

S=1/3；S001、S002
S=1/6；S003～S005

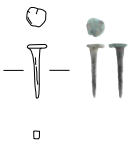


第96図　本丸附段出土遺物実測図　石製品

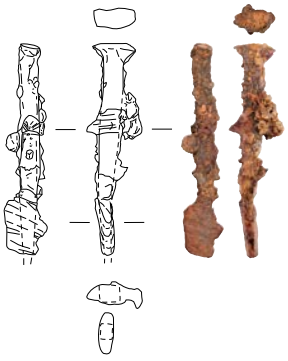
M001 199801-M031



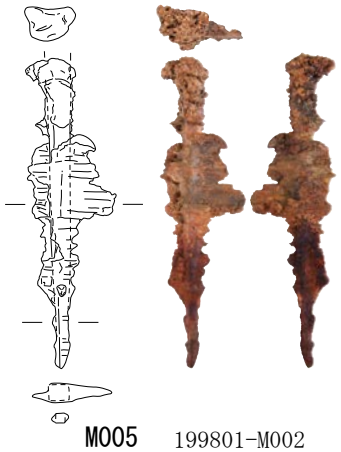
M002 199801-M033



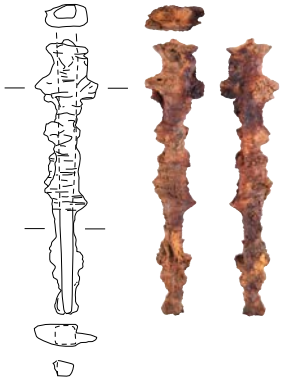
M003 199801-M032



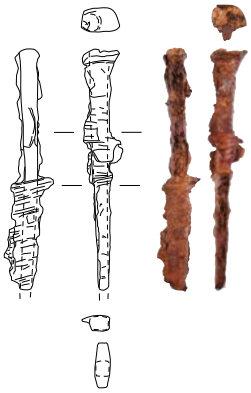
M004 199801-M001



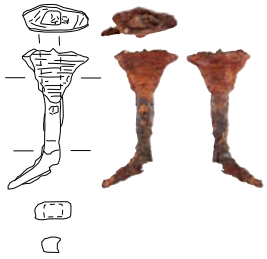
M005 199801-M002



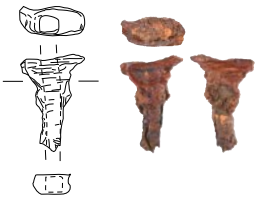
M006 199801-M003



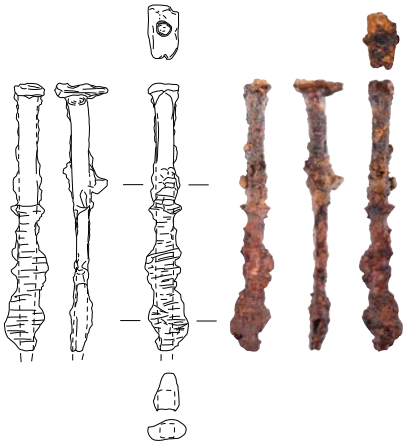
M007 199801-M004



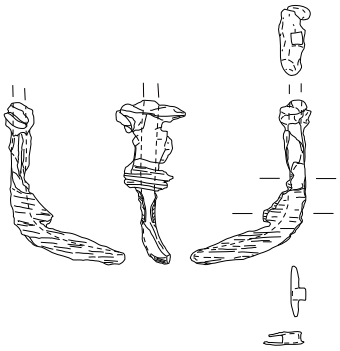
M008 199801-M005



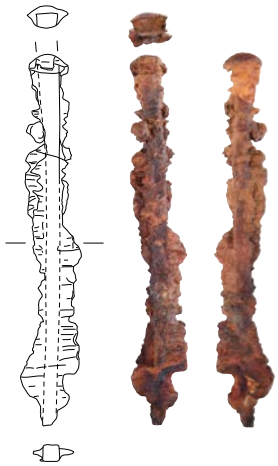
M009 199801-M006



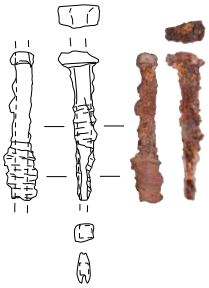
M010 199801-M007



M011 199801-M008



M012 199801-M009

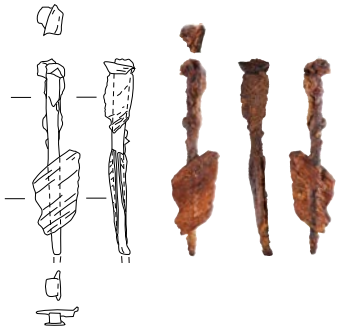


M013 199801-M010

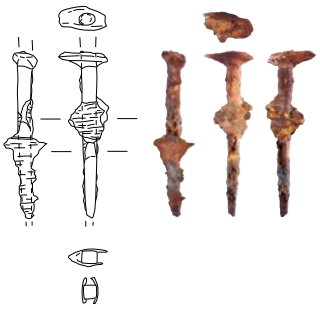
M001；Ⅲ区　第8段東延石背後
M002・M003；Ⅳ区　石垣（1415N SW08）抜取坑中層
M004～M013；Ⅰ区　SD02

S=1/3
0　10cm

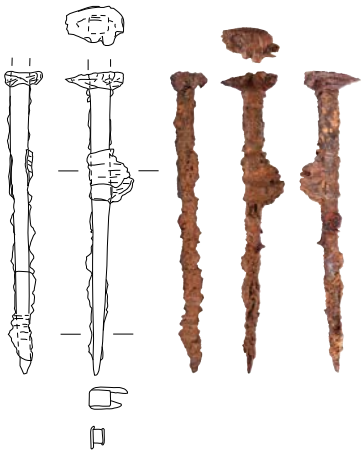
第97図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品1



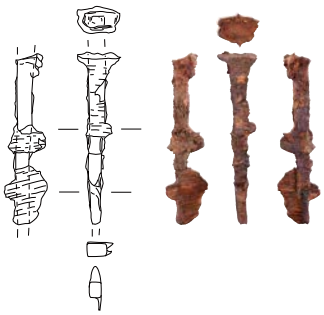
M014　199801-M011



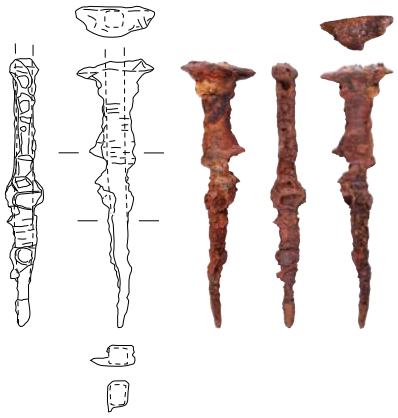
M015　199801-M012



M016　199801-M013

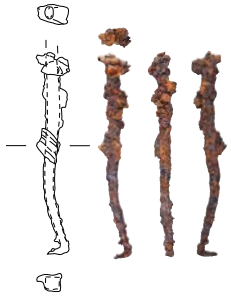


M017　199801-M014

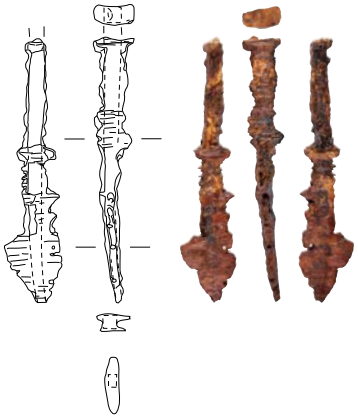


M018　199801-M015

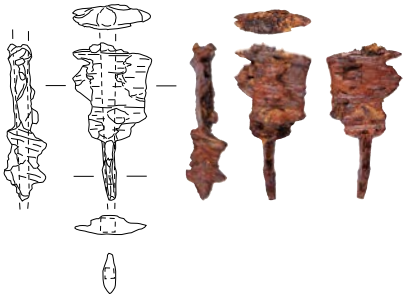
M019　199801-M016



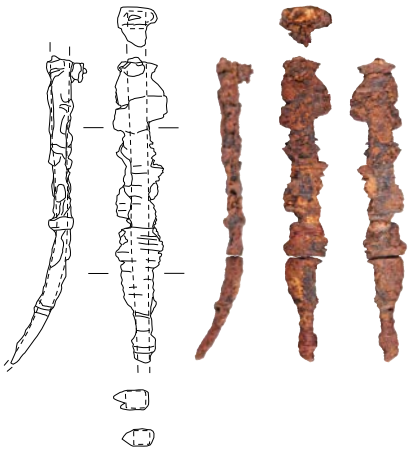
M020　199801-M017



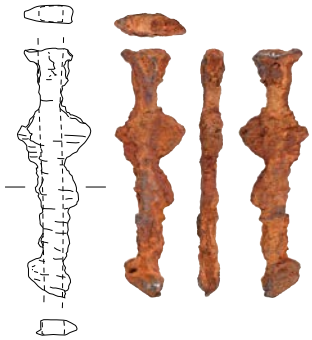
M021　199801-M018



M022　199801-M019



M023　199801-M020



M024　199801-M021

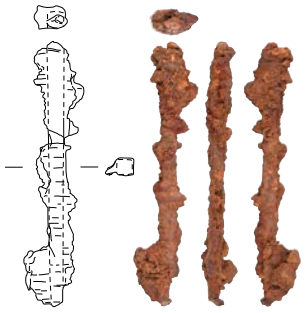
M025　199801-M022

M014～M025；Ⅰ区　SD02

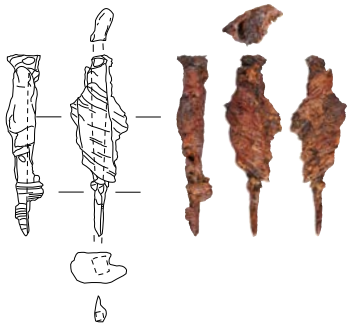
第98図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品2

S=1/3

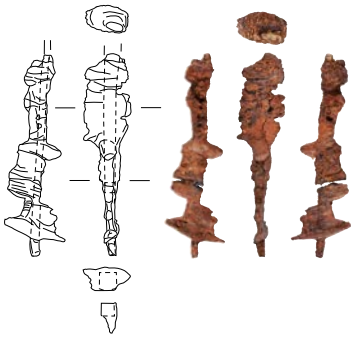
0　10cm



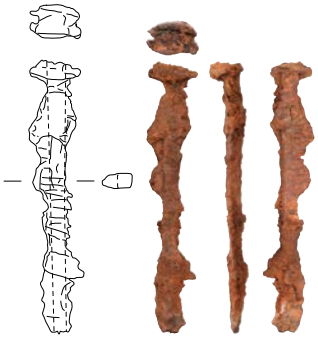
M026 199801-M023



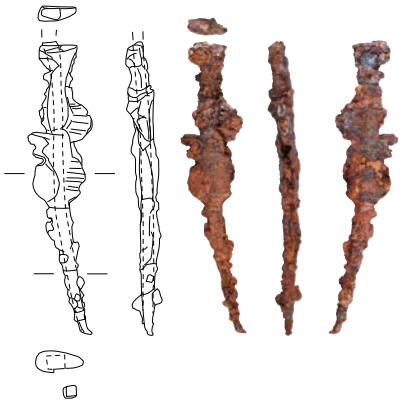
M027 199801-M024



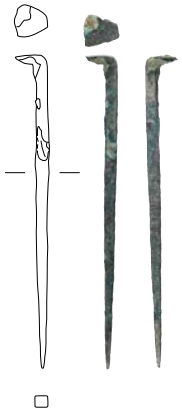
M028 199801-M025



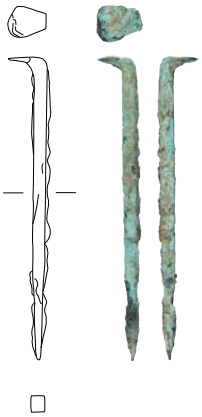
M029 199801-M026



M030 199801-M027



M031 199801-M029



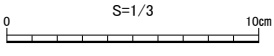
M032 199801-M030

M033 199801-M028

M034 199801-M034

M035 199801-M035

M026～M030；Ⅰ区　SD02
M031・M032；Ⅴ区　SK04
M033；Ⅵ区　SK03
M034；Ⅴ区　西　上面
M035；Ⅵ区　上面



第99図　本丸附段出土遺物実測図　金属製品3

第７表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
32	P001	磁器	小杯	Ⅴ	石垣 (1415N SW08) 掘方下部 (裏込)	「6.0」	2.5	2.85	口13/36 底18/36	型作り	白磁	2Ba	白	端反形	中国徳化窯系？		畳付目跡？2個	199801-D022
	P002	土器	土師器皿	Ⅳ	石垣 (1415N SW08) 掘方北	「12.3」		1.9	口5/36 底7/36	手づくね		E2	浅黄橙		在地	17C前半		199801-D023
	P003	陶器	碗		石垣 (1415N SW08) 抜取坑中層	—	3.4	(2.9)	底32/36	ロクロ	灰釉、色絵、刻印	Ⅰ2Aa	灰黄		万古		高台内刻印あり「萬古」	199801-B011
	P004	陶器	鉢	Ⅳ	石垣 (1415N SW08) 抜取坑上面		10.8	(4.5)	29/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰黄		須佐		見込胎土目跡８個、高台内削り痕	199801-D055
	P005	土器	土師器皿	Ⅳ	トレンチ4 整地土Ａ	13.5	9.7	2.6	口20/36 底23/36	手づくね		E2	浅黄橙　細砂少、精良		在地	17C前半	油煙痕	199801-D025
33	P006	土器	土師器皿	Ⅶ	整地土Ａ下	「12.4」	9.1	2.2	口13/36 底18/36	手づくね		E1	浅黄橙　細砂・粗砂多、礫少	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D024
	P007	土器	火鉢	Ⅴ Ⅱ・Ⅲ	東　整地土Ｂ 東　上面	「23.4」	19.2	12.5	口14/36 底完	ヨコナデ ミガキ	赤漆？、印花文、沈線	E2	浅黄橙　赤色粒・粗砂含	丸形、円形脚	在地			199801-D027
34	P008	土器	火鉢	Ⅴ	整地土Ｂ 上面	「24.8」	「18.6」	12.2	口8/36 底7/36	ヨコナデ ミガキ	赤漆、黒漆？、印花文、沈線	E2	にぶい黄橙　粗砂少	丸形	在地		印花文2種類（直径4.6cmと1.6cmの花文）	199801-D028
35	P009	磁器	碗	Ⅴ	西　SK04　11～14層 SK04	「6.7」		(3.9)	口8/36	ロクロ	青花	1Ba	白		中国景徳鎮系			199801-B010
	P010	陶器	鉢	Ⅴ	西　SK04			(3.3)	小片	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	淡橙褐　細砂少		肥前			199801-D017
	P011	陶器	擂鉢	Ⅴ	西　SK04 9層			(6.2)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Aa	橙褐　細砂少		肥前	17C前半		199801-D015
	P012	陶器	擂鉢	Ⅴ	西　SK04　11～14層			(7.2)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Aa	橙褐　細砂少		肥前	17C前半		199801-D016
	P013	土器	土師器皿	Ⅴ	西　SK04　9層	「12.6」		2.65	口2/36 底5/36	手づくね		D	浅黄橙　焼土塊含		在地	17C前半		199801-D020
	P014	土器	土師器皿	Ⅴ	西　SK04　11～14層	「11.5」		2.5	口1/36 底7/36	手づくね		B	浅黄橙　粗砂少		在地	17C前半		199801-D018
36	P015	土器	土師器皿	Ⅴ	SK04	「13.5」		2.0	口8/36 底9/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂多	板目状圧痕	在地	17C前半	口縁に油煙痕	199801-D019
	P016	土器	土師器皿	Ⅴ	東　SX01	「9.1」		2.1	口8/36 底15/36	手づくね		E2	橙　赤色粒含		在地		口縁に油煙痕	199801-D021
	P017	陶器	擂鉢	Ⅶ	E層上　炭層			(5.2)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Aa	暗赤褐		肥前	17C前半		199801-D060
	P018	土器	土師器皿		石垣 (1415E SW06) 前面　E層上 炭層	「13.5」	「9.9」	1.7	口4/36 底4/36	手づくね		E1	浅黄橙　細砂多	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D071
	P019	土器	土師器皿	Ⅶ	E層上　炭層	「14.4」	「11.8」	2.2	口10/36 底10/36	手づくね		E1	浅黄橙　細砂・粗砂・礫少	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D069
	P020	磁器	皿？	Ⅴ	トレンチ３ E層？			(1.15)	小片	ロクロ、形押し	白磁、口銹	2Ba	白		中国？			199801-D058
	P021	土器	土師器皿	Ⅴ	トレンチ３ E層	「13.0」		1.8	口8/36 底10/36	手づくね		E1	浅黄橙　細砂・粗砂多、礫少	板目状圧痕	在地	17C前半		199801-D070
	P022	土器	土師器皿	Ⅴ	トレンチ２ E層	「13.4」		2.2	口8/36 底8/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂多、礫少	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D072

第８表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
37	P023	土器	土師器皿	V	トレンチ２ E層	「12.3」		2.1	口4/3 底7/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂多、礫少		在地	17C前半	油煙痕	199801-D073
	P024	土器	土師器皿	V・Ⅶ	トレンチ３ E層	「13.3」		2.0	口7/36 底9/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂多、礫少	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D075
	P025	土器	土師器皿	V・Ⅶ	トレンチ３ E層	「13.9」		1.9	口4/36 底4/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂多、礫少	板目状圧痕	在地	17C前半	油煙痕	199801-D074
	P026	土器	土師器皿	V	トレンチ３ E層			(1.7)		手づくね		C	浅黄橙　粗砂少		在地	17C前半		199801-D076
	P027	磁器	碗	VI	SK01	—	「4.1」	(2.1)	底13/36	ロクロ	染付	2Ba	灰白		再興九谷 (若杉)	19C	やや軟質	199801-B004
	P028	磁器	碗	VI	SK01	8.8	3.6	5.9	口3/36 底30/36	ロクロ	染付、コンニャク印判	2Ba	白		肥前	18C		199801-B001
	P029	磁器	碗	VI	SK01	8.5	—	(5.1)	口7/36	ロクロ	染付	2Ba	白	腰張半球形	肥前	18C		199801-B002
	P030	磁器	碗	VI	SK01	「6.8」	—	(4.2)	口12/36	ロクロ	染付	2Ba	白	筒形	肥前	18C		199801-B003
	P031	磁器	皿	VI	SK01	—	—	2.8	底2/36	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系			199801-B005
38	P032	磁器	鉢	VI Ⅶ	SK01 上面 上面	「25.6」	「14.6」	9.2	口4/36 底8/36	ロクロ	染付	2Ba	灰白	輪花、蛇の目凹型高台	肥前	18C末～19C前葉		199801-B009
	P033	磁器	鉢	VI	SK01	「22.0」		「7.6」	口4/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	18C ？		199801-B007
	P034	磁器	蓋	VI	SK01	11.3		(1.6)	口22/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	18C		199801-B008
39	P035	陶器	碗	VI	SK01 上面	「9.7」	4.8	「6.5」	口7/36 底12/36	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ3Ca	明紫灰　細砂多、気泡含		肥前？			199801-B006
	P036	陶器	碗	VI	SK01	「10.2」	4.4	5.6	口1/36 底23/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰白	腰折形	京・信楽		見込ハリ目跡2個残る	199801-D001
	P037	陶器	碗	VI	SK01	「8.6」		(5.0)	口2/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰黄	端反形	京・信楽			199801-D002
	P038	陶器	甕	VI	SK01	「17.0」		(10.1)	口4/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	暗灰　白色粗砂少		不明			199801-D009
	P039	陶器	擂鉢	VI	SK01			(5.2)	小片	ロクロ	無釉	Ⅰ2Ca	赤褐　白色粗砂多		堺			199801-D008
40	P040	陶器	擂鉢	VI	SK01		「20.6」	(7.0)	底15/36	ロクロ	無釉	Ⅰ3Ca	暗赤褐　白色粗砂多		堺		卸目幅4.2cm、11本	199801-D007
	P041	施釉土器	灯明受皿	VI	SK01	「11.3」 かえり径 「8.2」	「4.8」	1.8	口7/36 底7/36	ロクロ	鉛釉	E2	浅黄橙　精良		在地			199801-D003
	P042	土器	土師器皿	VI	SK01	「11.6」	「5.8」	2.4	口10/36 底12/36	回転ケズリヨコナデ		C	にぶい黄橙　細砂少		在地		油煙痕付着	199801-D010
	P043	土器	蓋	VI	SK01	「7.0」 かえり径 「5.6」		(0.7)	口8/36 かえり2/36		刻印 赤彩？	E2	淡橙褐　細砂少	焼塩壺蓋	在地	18C末？	上面に刻印	199801-D013
41	P044	土器	焼塩壺	VI	SK01	4.0	4.0	16.4	ほぼ完	手づくね、ミガキ		B	淡黄　精良	瓶形	在地		ほぼ完形	199801-D004
	P045	土器	火鉢	VI	SK01			(3.0)	小片		線刻	E2	淡橙灰　細砂少		在地	18C末？	口唇部に線刻「寛政」か	199801-D011
	P046	土器	火鉢	VI	SK01			(3.8)	小片		赤彩、線刻	E2	橙褐　粗砂少		在地		口縁外面に線刻「役所」	199801-D012
	P047	土器	火鉢	VI	SK01			(5.5)	小片			E2	にぶい黄橙　細砂少		在地			199801-D005
	P048	土器	火鉢	VI	SK01		「18.4」	(5.3)	底7/36			E2	にぶい黄橙　細砂・粗砂少	丸形、円形脚	在地			199801-D006

第９表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器３

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
42	P049	土器	土師器皿	VI	SK03	「14.5」		2.75	口10/36 底10/36	手づくね		C	浅黄橙　粗砂少	板目状圧痕	在地	17C後葉		199801-D014
	P050	磁器	碗	I	西　上面	11.0	4.65	5.8	口26/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	端反形 輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」	199801-B084
	P051	磁器	碗	II	上面	「10.8」	3.8	6.05	口12/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	灰白	端反形 輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」	199801-B085
43	P052	磁器	碗	V IV I	上面 上面 西　上面	「10.8」	4.8	5.75	口17/36 底24/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形 輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「１」	199801-B096
	P053	磁器	碗	II I	上面 西　上面	「11.2」	5.0	5.85	口12/36 底18/36	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	端反形 輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「４」	199801-B103
	P054	磁器	碗	I	東　上面	「11.3」		(4.4)	口8/36	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	端反形	再興九谷？	19C末～20C初	アラビア数字「２」	199801-B104
	P055	磁器	皿	III	東　上面	14.1	7.0	3.8	口35/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	黄白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	完形、縦線３本１組、アラビア数字「４」	199801-B097
44	P056	磁器	皿	I	西　上面	14.0	6.4	3.75	口23/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」、見込鳥文	199801-B087
	P057	磁器	皿	I	西　上面	「13.55」	6.4	4.05	口16/36 底34/36	ロクロ	染付	2Ba	灰白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」	199801-B086
45	P058	磁器	皿	IV I	上面 西　上面	「14.2」	6.8	4.0	口9/36 底ほぼ完	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線２本1組、アラビア数字「２」	199801-B101
	P059	磁器	皿	V I	上面 西　上面	「14.4」	6.7	4.0	口5/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	淡黄白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「２」	199801-B102
46	P060	磁器	碗	I	西　上面	10.8	4.0	5.9	口23/36 底完	ロクロ	上絵（青）	2Ba	灰白	端反形 輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」	199801-B088
	P061	磁器	碗	I	西　上面	「10.25」	「4.0」	5.0	口14/36 底10/36	ロクロ	上絵（青）	2Ba	淡黄白	端反形、玉縁、輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「１」	199801-B089
	P062	磁器	皿	I II	西　上面 上面	「14.5」	7.8	3.9	口11/36 底28/36	ロクロ	上絵（青）	2Ba	淡黄白	幅広輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３？」、ハリ目跡	199801-B090
47	P063	磁器	皿	I	西　上面	13.9	7.45	3.7	口22/36 底32/36	ロクロ	上絵（青）	2Ba	灰白	輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」、畳付目跡4個残る	199801-B091
	P064	磁器	皿	I	西　上面	「14.0」	7.4	3.8	口9/36 底29/36	ロクロ	上絵（青）	2Ba	淡黄白	輪高台	再興九谷？	19C末～20C初	縦線３本１組、アラビア数字「３」、見込ハリ目跡5個	199801-B105
48	P065	磁器	碗	I	西　上面	「10.4」	4.0	5.35	口13/36 底31/36	ロクロ	染付、上絵(赤)	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃		縦線２本1組、アラビア数字「１」	199801-B092
	P066	磁器	碗	I	東　上面	「10.8」	「4.0」	5.2	口17/36 底11/36	ロクロ	染付、上絵(赤)	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃		縦線２本1組、アラビア数字「１」	199801-B093
	P067	磁器	碗	IV	上面	「10.5」	4.0	5.7	口4/36 底29/36	ロクロ	染付、上絵(赤)	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃		縦線３本１組、アラビア数字「１？」	199801-B094
49	P068	磁器	皿	I	東　上面	「13.8」	6.25	3.5	口5/36 底完	ロクロ	染付、上絵(赤)、印花、口錆	2Ba	白	蛇の目凹型高台	瀬戸・美濃		縦線３本１組、アラビア数字「３」	199801-B095
	P069	磁器	皿	V I IV	上面 西　上面 上面	「13.6」	6.0	3.5	口7/36 底完	ロクロ	染付、上絵(赤)、銘	2Ba	白	蛇の目凹型高台	瀬戸・美濃		縦線１本１組、アラビア数字「４」、高台内に赤で銘あり。	199801-B098
50	P070	磁器	碗	I	西　上面	10.6	3.5	5.9	口ほぼ完 底27/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C後葉	ほぼ完形。酸化コバルト	199801-B016
	P071	磁器	碗	II I	上面 西　上面	「10.8」	「2.8」	5.7	口9/36 底2/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B013

第10表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器４

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
50	P072	磁器	碗	Ⅰ	西　上面	「9.2」	3.2	4.7	口6/36 底20/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B014
	P073	磁器	碗	Ⅱ・Ⅲ	東　上面	「9.0」	3.5	5.2	口10/36 底18/36	ロクロ	染付	2Aa	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B032
	P074	磁器	碗	Ⅲ	東　上面	「9.1」	3.0	4.7	口10/36 底27/36	ロクロ	染付、口錆	2Aa	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B033
	P075	磁器	碗	Ⅰ	西　上面	「13.1」	「5.3」	7.3	口12/36 底15/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	肥前	19C？		199801-B019
51	P076	磁器	碗	Ⅱ～Ⅴ	上面	「10.15」	3.7	5.4	口13/36 底完	ロクロ	色絵（赤・青・緑・黄・黒）	2Ba	灰白	端反形	再興九谷？	19C末？		199801-B099
	P077	磁器	碗	Ⅲ	東　上面	10.2	4.0	5.7	口29/36 底完	ロクロ	色絵（赤・青・緑・黄・黒）	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃？			199801-B100
	P078	磁器	碗	Ⅵ Ⅲ	上面 東　上面	10.4	3.6	5.1	口22/36 底26/36	ロクロ	染付	2Ba	白	小広東形	肥前			199801-B054
	P079	磁器	碗	Ⅲ	東　上面	「10.1」	「3.7」	5.0	口14/36 底16/36	ロクロ	染付	2Ba	白	小広東形	肥前			199801-B029
	P080	磁器	碗	Ⅵ	上面	「9.2」	3.4	5.1	口11/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	白	小広東形	肥前	18C後葉		199801-B052
52	P081	磁器	碗	Ⅴ	東　上面	「9.0」		(4.7)	口16/36	ロクロ	染付	2Ba	灰白	腰張半球形	肥前	18C後半		199801-B025
	P082	磁器	碗	Ⅴ	東　上面	「7.9」	「3.0」	4.7	口9/36 底14/36	ロクロ	染付	2Ba	白	腰張半球形	肥前	18C後半～19C初		199801-B026
	P083	磁器	碗	Ⅱ・Ⅲ	東　上面	「8.6」		(4.9)	口9/36	ロクロ	染付	2Ba	白	腰張半球形	肥前	18C後半～19C初		199801-B028
	P084	磁器	碗	Ⅶ	上面	「9.7」	3.3	5.4	口9/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	白	腰張半球形	肥前	18C後半～19C初	被熱	199801-B050
	P085	磁器	碗	Ⅵ	上面	「9.2」	3.4	5.9	口7/36 底21/36	ロクロ	染付	2Ba	白	腰張半球形	肥前	18C後半～19C初		199801-B051
	P086	磁器	碗	Ⅲ Ⅳ	東　上面 上面	「7.5」		(5.6)	口9/36	ロクロ	染付	2Ba	白	筒形	肥前	18C後半～19C初	被熱	199801-B027
	P087	磁器	碗	Ⅰ	西　上面	「7.2」		(5.5)	口3/36	ロクロ	青磁染付	2Ba	白	筒形	肥前	18C後半		199801-B017
	P088	磁器	碗	Ⅰ	東　上面	「10.2」	4.0	4.9	口14/36 底20/36	ロクロ	染付	2Ba	白	浅半球形	肥前	18C前半		199801-B012
	P089	磁器	碗	Ⅶ	上面	「10.1」	3.8	4.7	口2/36 底完	ロクロ	染付	2Ba	白	浅半球形	肥前	18C前半		199801-B049
53	P090	磁器	碗	Ⅱ・Ⅲ	東　上面		「3.8」	(3.4)	底5/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	17C末～18C初		199801-B022
	P091	磁器	碗	Ⅲ	東　上面	「8.7」	「3.1」	6.1	口8/36 底24/36	ロクロ	染付、コンニャク印判	3Ba	灰白		肥前	17C末～18C		199801-B024
	P092	磁器	碗	Ⅲ Ⅴ	東　上面	「8.4」	3.4	6.3	口18/36 底完	ロクロ	染付、コンニャク印判	3Ba	白		肥前？	17C末～18C		199801-B023
	P093	磁器	碗	Ⅴ	東　上面		「6.0」	(2.6)	底7/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	17C後半	被熱	199801-B046
	P094	磁器	碗	Ⅵ	上面	「8.5」	「3.8」	6.4	口5/36 底9/36	ロクロ	染付	2Ba	白	向付	肥前			199801-B048
	P095	磁器	小碗	Ⅴ	東　上面	「8.2」	「3.1」	4.1	口14/36 底8/36	ロクロ	染付、口錆	2Aa	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B034
	P096	磁器	小碗	Ⅰ	西　上面	「8.3」	「3.0」	4.1	口11/36 底7/36	ロクロ	染付、口錆	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C		199801-B015
	P097	磁器	猪口	Ⅴ	上面		「5.0」	(2.6)	底14/36	ロクロ	染付	2Ba	白	向付	肥前	17C後半～18C	裏銘「□珠ヵ玩珍」	199801-B030

第11表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器５

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
53	P098	磁器	蓋	Ⅲ	東　上面	「4.9」	摘み径「3.2」	2.6	口13/36 摘み　13/36	ロクロ	染付	2Aa？	白	碗蓋	瀬戸・美濃？	19C		199801-B035
	P099	磁器	蓋	Ⅰ	西　上面	「8.6」	「3.0」	3.3	口4/36 底10/36	ロクロ	青磁染付	2Ba	灰白	碗蓋	肥前	18C後半		199801-B018
54	P100	磁器	皿	Ⅰ	東　上面	「15.9」	「8.2」	2.4	口10/36 底15/36	ロクロ、型押し	青白磁染付、色絵	2Ba	白			20C?		199801-B020
	P101	磁器	皿	Ⅲ Ⅰ	東　上面	「13.2」	6.1	2.9	口9/36 底17/36	ロクロ	染付、蛇の目釉剥ぎ	2Ba	灰　緻密					199801-B074
	P102	磁器	皿	Ⅵ	上面				小片	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前			199801-B031
	P103	磁器	皿	Ⅳ	上面	「13.4」	「9.0」	2.7	口4/36 底5/36	ロクロ	染付	2Ba	白	蛇の目凹型高台	肥前	18C中葉～19C		199801-B039
	P104	磁器	皿	Ⅱ	上面	「15.2」	「8.0」	4.8	口9/36 底8/36	ロクロ	染付、口銹	2Ba	灰白	輪花	肥前	17C後半	裏銘「金」	199801-B038
55	P105	磁器	皿	Ⅶ	上面	「10.1」	「5.8」	2.7	口12/36 底14/36	ロクロ	染付	2Ba	白	小皿	肥前	17C末～18C		199801-B055
	P106	磁器	皿	Ⅵ	上面	「13.9」	「7.9」	3.8	口4/36 底9/36	ロクロ	染付	2Ba	白	輪花	肥前	17C末～18C前葉		199801-B056
	P107	磁器	皿	Ⅴ～Ⅶ		「13.2」	「8.5」	3.6	口2/36 底8/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	17C末～18C前半		199801-B057
	P108	磁器	皿	Ⅱ	上面		5.9	(1.7)	底完	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	17C中葉		199801-B041
	P109	磁器	皿	Ⅴ	東　上面		「6.6」	(0.7)	底5/36	ロクロ	青花	1Ba	白		中国景徳鎮系		外底面砂付着	199801-B040
	P110	磁器	皿	Ⅶ	上面			(2.2)	不明	型作り	染付、色絵、口銹	2Ba	白	方形？	肥前		被熱	199801-B053
	P111	磁器	皿	Ⅵ	上面			(2.0)	不明	ロクロ	染付、色絵	2Ba	白		肥前	19C?		199801-B062
56	P112	磁器	皿	Ⅶ	上面			(2.8)	底8/36	型作り	白磁	2Ba	白		中国？			199801-D032
	P113	磁器	皿	Ⅵ	上面		「5.8」	(2.4)	10/36	ロクロ	青磁	2Ba	白		肥前			199801-D033
	P114	磁器	皿	Ⅱ	上面	「15.0」		(3.4)	口5/36	ロクロ	青磁	2Ba	白		肥前			199801-D029
	P115	磁器	皿	Ⅴ	上面 東　上面			6.5	口1/36 底5/36	ロクロ	染付	1Ba	白	大皿	肥前	18C？		199801-B037
	P116	磁器	皿	Ⅵ	上面			(5.8)	口4/36	ロクロ	染付	2Ba	白	大皿	肥前	17C後半		199801-B059
57	P117	磁器	皿	Ⅵ Ⅳ	上面			(4.3)	不明	ロクロ	染付	2Ba	白	大皿	肥前			199801-B060
	P118	磁器	皿	Ⅵ	上面		「19.4」	(4.1)	底5/36	ロクロ	染付	2Ba	白	大皿	肥前	17C末～18C前半？		199801-B061
58	P119	磁器	皿	Ⅵ Ⅴ	上面	「46.2」	「24.0」	10.6	底4/36	ロクロ	染付	2Ba	白	大皿	肥前			199801-B058
59	P120	磁器	鉢？	Ⅱ	上面	「14.6」		(1.2)	口4/36	ロクロ	青花	2Aa？	白		中国景徳鎮系		被熱	199801-B042
	P121	磁器	鉢？	Ⅴ	上面				小片	ロクロ	青花	1Ba	灰白		中国景徳鎮系		被熱	199801-B047
	P122	磁器	鉢？	Ⅲ	東　上面			(2.7)	小片	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前		被熱	199801-B043
	P123	磁器	鉢	Ⅰ	西　上面	「15.2」		(6.1)	口5/36	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前			199801-B021
	P124	磁器	鉢	Ⅳ	上面	「14.2」		(4.3)	口6/36	ロクロ	青磁染付	2Ba	白		肥前			199801-B045
	P125	磁器	鉢	Ⅶ	上面		3.7	推定4.9	底19/36	型作り	白磁	1Ba	白	輪花	中国徳化窯？			199801-D031

第12表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器６

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
59	P126	磁器	合子	Ⅴ	東　上面	最大長(4.5)	最大幅(2.9)	1.9	不明	タタラ作り	染付	2Aa ？	白	方形	肥前			199801-B036
	P127	磁器	蓋？	Ⅶ	上面	最大長(2.9)	最大幅(2.05)	1.05	不明		青花	１Ba	灰白	方形？合子蓋	中国景徳鎮系		被熱	199801-B063
	P128	磁器	壺	Ⅶ Ⅵ Ⅴ Ⅲ	上面 上面 上面 東　上面	「5.3」	4.8	8.0	口1/36 底33/36	ロクロ	白磁	２Ba	白		肥前			199801-D030
	P129	硬質陶器	皿	Ⅳ	上面			(1.5)	小片		染付、銅版転写	Ⅱ2Aa	灰白	折縁皿	ヨーロッパ	19C後半～20C		199801-B044
60	P130	陶器	碗	Ⅴ Ⅲ	西　上面アゼ 東　上面	「10.7」	5.0	7.3	口4/36 底18/36	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ2Bb	灰		肥前	18C		199801-B067
	P131	陶器	碗	Ⅴ Ⅰ	西　上面 東　上面	「10.4」	「4.5」	6.1	口11/36 底13/36	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ1Aa	褐灰　緻密		肥前？	18C	被熱	199801-B069
	P132	陶器	碗	Ⅵ	上面		「4.6」	(5.1)	底15/36	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ2Ba	灰		肥前	18C		199801-B083
	P133	陶器	碗	Ⅰ	東　上面		4.7	(3.7)	底完	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ2Aa	灰黄		肥前？	18C		199801-D034
	P134	陶器	碗	Ⅱ	上面	「9.8」		(5.1)	底14/36	ロクロ	陶胎染付	Ⅰ2Ba	にぶい赤褐		肥前			199801-B068
	P135	陶器	碗	Ⅲ	東　上面	「9.4」	「3.8」	5.5	口8/36 底8/36	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅱ2Ba	淡黄	杉形	京	18C		199801-B071
	P136	陶器	碗	Ⅱ	上面	「8.4」	「4.1」	5.4	口1/36 底10/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰白	杉形	信楽	18～19C		199801-D046
	P137	陶器	碗	Ⅵ	上面	「8.4」		(4.6)	口6/36	ロクロ	灰釉	Ⅱ2Ba	灰白	杉形	信楽	18～19C		199801-D099
	P138	陶器	碗	Ⅲ	東　上面		4.5	(3.2)	底32/36	ロクロ	灰釉、鉄絵、染付	Ⅱ2Ba	淡黄	筒形	京・信楽	18C		199801-D047
	P139	陶器	碗？	Ⅵ～Ⅶ Ⅵ	上面	「9.2」		(5.8)	口4/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰白	筒形	京・信楽			199801-D100
61	P140	陶器	碗	Ⅴ	東　上面		「4.0」	(3.2)	底11/36	ロクロ	灰釉、鉄絵、白泥	Ⅱ2Ba	灰白	腰折形	京・信楽	18C	被熱？　見込にハリ目跡１個、高台内墨付着	199801-D049
	P141	陶器	碗	Ⅵ	上面	「10.6」		(4.1)	口6/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	浅黄	腰折形	京・信楽	18C		199801-D097
	P142	陶器	碗	Ⅵ	上面		「4.2」	(3.9)	底14/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	浅黄	腰折形	京・信楽	18C	見込にハリ目跡１個	199801-D094
	P143	陶器	碗	Ⅲ	東　上面		「3.9」	(4.4)	底9/36	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅰ2Ba	淡黄	平形	京・信楽	18～19C？		199801-B070
	P144	陶器	碗	Ⅴ	東　上面	「11.6」		(3.6)	口5/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰白	平形	京・信楽	18～19C？		199801-D048
	P145	陶器	碗	Ⅵ	上面	「12.2」	4.1	5.1	口7/36 底完	ロクロ	白釉？	Ⅱ2Ba	淡黄	平形	京・信楽	18～19C	高台内に墨書	199801-D095
	P146	陶器	碗	Ⅵ	上面		「4.0」	(1.6)	底9/36	ロクロ	灰釉、色絵	Ⅰ2Ba	灰白	平形	京・信楽	18C？		199801-B081
	P147	陶器	碗	Ⅵ	上面			(3.6)	小片	ロクロ	灰釉、色絵	Ⅰ2Ba	浅黄	丸形	京・信楽	18C？		199801-B082
	P148	陶器	碗	Ⅲ	上面	「9.2」	「3.2」	5.2	口5/36 底5/36	ロクロ	白釉、色絵	Ⅰ2Aa	灰白	端反形	京・信楽			199801-D045
62	P149	陶器	碗	Ⅵ	上面		5.0	(3.2)	底18/36	ロクロ	灰釉、染付	Ⅱ1Aa	灰白	丸形	肥前京焼風	17～18C	高台内に円圏文	199801-D096
	P150	陶器	碗	Ⅵ	上面	「10.8」		(5.9)	口8/36	ロクロ	鉄釉	Ⅱ3Cb	灰黄	拳骨茶碗	瀬戸・美濃			199801-D093
	P151	陶器	碗	Ⅱ	上面	「12.6」	「5.0」	6.6	口4/36 底13/36	ロクロ	藁灰釉、鉄釉	Ⅰ1Aa	淡黄白	輪幅形	萩			199801-D050
	P152	陶器	碗	Ⅱ	上面	「10.2」	「4.6」	6.7	口9/36 底10/36	ロクロ	灰釉、白泥掻き落とし・打刷毛目	Ⅰ2Ba	暗灰　均質・堅緻		肥前			199801-B072

第13表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器７

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
62	P153	陶器	碗	Ⅱ	上面	「12.8」	4.0	6.0	口16/36 底完	ロクロ	灰釉、白泥刷毛目	Ⅰ2Bb	淡黄　白色礫少		瀬戸・美濃			199801-B073
	P154	陶器	碗	Ⅶ	上面		「5.1」	(1.2)	底17/36	ロクロ	灰釉、刻印	Ⅰ2Aa	灰黄		京		高台内に刻印「御菩薩」か	199801-D090
	P155	陶器	碗？	Ⅵ	上面		4.8	(0.7)	底完	ロクロ	灰釉	Ⅱ2Ba	淡黄		瀬戸？		高台内に墨書「六」	199801-D098
63	P156	陶器	皿	Ⅰ	東　上面	「13.4」	「5.6」	3.7	口13/36 底14/36	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅰ3Ba	橙　粗砂多				被熱？	199801-B066
	P157	陶器	皿	Ⅰ	西　上面		5.0	(4.7)	底完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰黄褐		肥前？	17C	見込砂目跡4個	199801-D035
	P158	陶器	鉢	Ⅱ	上面		5.5	(3.6)	底28/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ3Cb	にぶい黄橙	貼付高台	瀬戸			199801-D043
	P159	陶器	鉢？	Ⅵ	上面		5.3	(1.6)	底完	ロクロ	灰釉	Ⅰ3Cb	浅黄	貼付高台？	瀬戸			199801-D091
	P160	陶器	鉢？	Ⅵ	上面		4.8	(1.9)	底完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰白	貼付高台？	瀬戸			199801-D092
	P161	陶器	鉢	Ⅳ	上面		5.8	(3.6)	底完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	黄灰	貼付高台？	瀬戸		被熱？	199801-D044
	P162	陶器	鉢	Ⅰ	西　上面			(5.9)	小片	ロクロ	灰釉、鉄釉流し	Ⅰ2Aa	明灰		再興九谷	19C中葉		199801-D038
64	P163	陶器	鉢	Ⅵ	上面		「14.2」	(14.7)	底17/36	ロクロ	灰釉、鉄釉、白泥象嵌	Ⅰ2Ba	赤褐　白色細砂・粗砂含		肥前	18C前半		199801-B080
65	P164	陶器	鉢	Ⅶ	上面		「12.4」	(4.2)	底13/36	ロクロ	白泥刷毛目	Ⅰ2Ba	赤橙		肥前	18C前半		199801-B079
	P165	陶器	鉢	Ⅵ～Ⅶ	上面		「16.5」	(2.6)	底3/36	ロクロ	灰釉	Ⅱ3Cb	淡黄		瀬戸			199801-D101
	P166	陶器	鉢	Ⅳ	上面			(4.8)	不明	ロクロ	灰釉	Ⅰ1Aa	淡黄		須佐			199801-D056
	P167	陶器	合子	Ⅲ	東　上面	「6.5」	「4.0」	2.8	口10/36 底14/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰		信楽			199801-D051
	P168	陶器	蓋	Ⅲ	東　上面	5.0		0.7	完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰	合子蓋	信楽		完形	199801-D052
	P169	陶器	蓋	Ⅰ	西　上面	7.1 かえり径 5.8		1.2	ほぼ完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰	合子蓋	信楽			199801-D037
66	P170	陶器	蓋	Ⅵ	上面	7.4 かえり径 5.8		1.05	18/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	灰白　堅緻	合子蓋	信楽			199801-D102
	P171	陶器	蓋	Ⅰ	西　上面	10.0 かえり径 7.5	摘み径 2.2	3.6	かえり 24/36	ロクロ	灰釉、白泥、緑釉、鉄絵	Ⅰ1Aa	灰黄	土瓶蓋				199801-B075
	P172	陶器	土瓶	Ⅰ Ⅱ Ⅳ Ⅴ	西　上面 上面 上面 西　上面	9.4	「8.4」	12.2	口18/36 底8/36	ロクロ	灰釉、白泥、緑釉、鉄絵	Ⅰ1Aa	灰黄					199801-B076
67	P173	陶器	甕	Ⅲ	東　上面			(7.0)	小片	ロクロ	鉄釉、貼花	Ⅰ2Ba	灰赤		肥前？			199801-D053
	P174	陶器	壺	Ⅲ	上面	「8.9」		(4.9)	口3/36	ロクロ	外;鉄釉、内;鉄漿	Ⅰ2Aa	褐灰		信楽			199801-D054
67 68	P175	陶器	甕	Ⅱ・Ⅲ Ⅲ	上面 東　上面	72.0	23.5	71.4	口30/36 底9/36		底部外面以外、鉄漿刷毛塗り	Ⅰ2Ba	黄灰褐　粗砂少		越前			199801-D131

第14表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器８

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
69	P176	陶器	蓋	Ⅰ	東　上面	14.4		(3.8)	口21/36	ロクロ	灰釉？、鉄漿、飛鉋、白泥筒描き	Ⅰ2Ba	にぶい黄橙　細砂多、緻密	行平蓋				199801-B064
	P177	陶器	行平	Ⅰ	東　上面	「15.3」	「7.7」	8.7	口17/36 底22/36	ロクロ	鉄釉、飛鉋	Ⅰ2Ba	橙褐				被熱	199801-B065
70	P178	陶器	土鍋	Ⅳ	上面	「20.6」		(8.7)	口8/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Aa	褐灰		信楽			199801-D057
	P179	陶器	擂鉢	Ⅲ	西　上面			(12.0)	不明	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Ba	赤橙褐		再興九谷	19C	卸目幅3.1cm、16本以上	199801-D067
	P180	陶器	擂鉢	Ⅳ	上面			(4.0)	不明	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	赤褐		肥前	17C前半		199801-D059
71	P181	陶器	擂鉢	Ⅴ	上面			(8.6)	不明	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	赤褐		肥前	18C後半～19C前半	卸目幅4.3cm、15本以上。幅6.8cm、24本かもしれない	199801-D066
	P182	陶器	擂鉢	Ⅵ	上面			(5.0)	不明	ロクロ	鉄釉	Ⅱ2Ba	橙褐		越中瀬戸？			199801-D108
	P183	陶器	擂鉢	Ⅳ	上面			(8.3)	不明	ロクロ	刻印	Ⅰ2Ca	赤褐		堺	18C前半	口縁内面に刻印「扇形の中に上」。卸目幅3.5cm、９本	199801-D061
72	P184	陶器	擂鉢	Ⅴ	上面			(15.0)	小片	ロクロ	凹線	Ⅰ2Ca	赤褐		堺		卸目幅3.8cm、９本	199801-D062
	P185	陶器	擂鉢	Ⅳ	上面			(7.25)	小片	ロクロ	沈線	Ⅰ2Ca	赤褐		堺		卸目幅4.2cm、14本	199801-D063
	P186	陶器	擂鉢	Ⅲ	東　上面			(5.9)	小片	ロクロ	沈線	Ⅰ2Ca	暗灰		堺		卸目幅3.1cm、６本以上	199801-D064
73	P187	陶器	擂鉢	Ⅱ	上面		「22.3」	(4.7)	底7/36	ロクロ		Ⅰ2Ca	暗灰～赤褐		堺		卸目幅4.2cm、11本か。	199801-D065
	P188	陶器	擂鉢	Ⅵ	上面			(5.65)	小片	ロクロ	沈線	Ⅰ2Ca	暗赤～暗灰		堺？		卸目幅3.6cm、10本	199801-D104
	P189	陶器	擂鉢	Ⅵ	上面			(6.95)	小片	ロクロ	沈線	Ⅰ2Ca	暗赤褐		堺？		卸目幅4.1cm、11本	199801-D105
	P190	陶器	擂鉢	Ⅵ	上面			(9.95)	小片	ロクロ	沈線	Ⅰ3Ca	暗灰		堺		卸目幅4.1cm、11本。	199801-D106
74	P191	陶器	擂鉢	Ⅶ	上面		「20.9」	(6.45)	底10/36	ロクロ		Ⅰ3Ca	暗赤褐～暗紫灰		堺		卸目幅2.8cm、８本以上	199801-D107
75	P192	陶器	擂鉢	Ⅲ	東　上面			(10.0)	小片	ロクロ		Ⅰ3Ca	橙褐		越前	17C中頃～17C後半	卸目幅2.5cm、12本以上	199801-D068
	P193	陶器	擂鉢	Ⅵ	上面			(6.1)	小片	ロクロ		Ⅰ2Ba	橙褐～暗灰黄		越前	17C前半？	卸目幅３cm、11本	199801-D109
	P194	陶器	灯明受皿	Ⅰ	西　上面	「10.8」かえり径「7.0」	「4.4」	2.0	口7/36 底9/36	ロクロ	白釉	Ⅰ2Aa	灰黄		信楽			199801-D036
	P195		灰器	Ⅱ	上面				小片	ヨコナデ	沈線文	E1	灰褐　粗砂・空隙多				被熱	199801-D089
	P196	陶器	皿？	Ⅳ	上面			(1.4)	小片	ロクロ	鉛釉（緑・黄・紫）	C	淡黄	輪花、陰刻	中国華南			199801-B077
	P197	施釉土器	鉢	Ⅵ	上面	「16.2」		(6.5)	口3/36	ロクロ	鉛釉	C	黄橙　細砂・赤色粒少		在地			199801-D103
	P198	施釉土器	灯明受皿	Ⅵ	上面	「11.3」かえり径「8.8」		(1.5)	口5/36	ロクロ	鉛釉	C	浅黄橙　粗砂少		在地		煤付着	199801-D110
	P199	施釉土器	灯明皿	Ⅵ	上面	「10.9」		1.7	口4/36 底6/36	ロクロ	鉛釉、圏線	C	浅黄橙　粗砂少		在地		油煙痕	199801-D111
76	P200	土器	土師器皿	Ⅰ	西　上面	「12.7」	「5.4」	2.3	口12/36 底14/36	ロクロ、ミガキ		C	橙　細砂微		在地？		精製品	199801-D039
	P201	土器	土師器皿	Ⅳ	上面	「11.2」		2.2	口12/36 底12/36	手づくね		C	浅黄橙　粗砂・礫少		在地	17C前葉		199801-D080

第15表　出土遺物観察表　本丸附段　陶磁器・土器９

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
76	P202	土器	土師器皿	Ⅳ	上面	11.8		2.8	口20/36 底23/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂少	板目状圧痕	在地	17C前葉	油煙痕（口縁全周？）	199801-D077
	P203	土器	土師器皿	Ⅵ	上面	「12.7」		(2.1)	口5/36 底8/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂・礫少		在地		内外面油煙痕多い	199801-D113
	P204	土器	土師器皿	Ⅳ	上面	「11.8」		2.0	口4/36 底12/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂・礫少	板目状圧痕	在地	17C前葉	油煙痕	199801-D079
77	P205	土器	土師器皿	Ⅴ	西　上面	「11.8」		2.2	口5/36 底12/36	手づくね		C	浅黄橙　粗砂・礫少	板目状圧痕	在地	17C前葉	油煙痕	199801-D081
	P206	土器	土師器皿	Ⅳ	トレンチ４ 整地土Ａ 石垣（1415N SW08）抜取坑中層	「12.5」	「9.2」	2.2	口11/36 底9/36	手づくね		E2	浅黄橙　細砂少		在地	17C前半	油煙痕	199801-D026
	P207	土器	土師器皿	Ⅳ	上面	「12.0」		2.2	口4/36	ロクロ 回転ケズリ	沈線	E2	浅黄橙　精良		在地		油煙痕	199801-D078
	P208	土器	土師器皿	Ⅵ	上面	「12.8」		(1.95)	5/36	ロクロ 回転ケズリ	沈線	C	浅黄橙　粗砂少		在地		油煙痕	199801-D114
	P209	土器	土師器皿	Ⅵ	上面	「12.9」		(1.85)	6/36	手づくね		E2	浅黄橙　粗砂少		在地	18C前半？		199801-D112
	P210	土器	焼塩壺	Ⅵ	上面	最大径 「9.4」	「8.5」	2.5	9/36	型作り		E2	浅黄橙　細砂・赤色粒含	鉢形	在地			199801-D117
	P211	土器	焼塩壺	Ⅱ	上面		4.2	(14.45)	底完	回転糸切り、ミガキ		E2	浅黄橙　細砂・赤色粒含	瓶形	在地			199801-D082
78	P212	土器	蓋	Ⅵ	上面	7.9	8.0	1.7	口20/36	布圧痕	刻印	D	橙　白色細砂・粗砂・礫多	焼塩壺蓋			上面陰刻「鷲坂」か	199801-B078
	P213	土器	火鉢	Ⅲ	東　上面		「19.3」	(9.2)	底15/36	ヨコナデ ミガキ	赤漆、印花文	E1	浅黄橙　粗砂・赤色粒少	丸形、円形脚	在地			199801-D083
79	P214	土器	火鉢	Ⅵ	上面		「15.9」	(6.3)	底9/36	ヨコナデ ミガキ	沈線、円形浮文	B	黄橙　粗砂・赤色粒少	丸形、円形脚	在地			199801-D116
	P215	土器	火鉢	Ⅳ	上面	「23.0」		(5.7)	口6/36	ヨコナデ ミガキ	赤彩、印花文、沈線	E2	にぶい黄橙　粗砂少、海綿骨針含	丸形	在地			199801-D087
80	P216	土器	火鉢	Ⅳ	上面			(7.3)	小片	ヨコナデ ミガキ	印花文、沈線	E2	にぶい黄橙　粗砂多、海綿骨針含	丸形	在地			199801-D086
	P217	土器	火鉢	Ⅳ	上面	「29.7」		(5.3)	口7/36	ヨコナデ ミガキ	印花文、沈線	E1	浅黄橙　粗砂多、赤色粒少	丸形	在地			199801-D085
	P218	土器	火鉢	Ⅵ	上面			(5.0)	小片	ヨコナデ ミガキ	赤彩？、沈線	E1	にぶい黄橙　細砂・粗砂多、赤色粒含		在地			199801-D115
	P219	土器	火鉢	Ⅰ	西　上面	「21.0」		(4.5)	口12/36	ヨコナデ ミガキ		E2	にぶい橙　細砂・赤色粒含	円筒形	在地			199801-D040
81	P220	土器	風炉	Ⅲ	東　上面	「28.3」		(6.9)	口7/36	ヨコナデ		E1	にぶい黄橙　粗砂多、赤色粒含		在地			199801-D084
81 82	P221	土器	火鉢	Ⅰ	東　上面	最大幅 15.3	最大奥行 15.8	最大高 16.4	不明	ケズリ、ミガキ、ナデ		D	浅黄橙　細砂多・赤色粒含	角形	在地			199801-D041
83	P222	土器	火鉢	Ⅰ	西　上面		18.1	(14.1)	底30/36	ヨコナデ ミガキ	墨塗	D	にぶい黄橙　細砂・赤色粒含	円筒形、円形脚	在地			199801-D042
	P223	土器	火鉢	Ⅱ	上面		「20.3」	(9.9)	口4/36	ヨコナデ ミガキ	印花文	E1	灰黄　粗砂多、礫少	丸形、板状脚	在地			199801-D088

第16表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（瓦当）（cm）										寸法（体部）（cm）									胎土		特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	珠文径他	a	b	c	d	e	f	g	h	i				
90	T001	丸	Ⅳ	トレンチ４整地土Ａ	燻													(13.1)	(11.4)	5.0	(9.0)	6.8	3.1	3.8			B2	灰白　細砂多、空隙多、軟質	コビキＢ	199801-D126
	T002	平	Ⅳ	トレンチ４整地土Ａ	燻													(11.7)	(12.0)			1.9					B2	灰　細砂多、礫少、空隙多、やや硬質		199801-D127
	T003	腰	Ⅶ	整地土Ｂ	燻													29.1	(23.0)			2.3					A1	灰白　細砂少、一部空隙あり、縞あり、硬質	円形凹Ａ	199801-D128
	T004	熨斗	Ⅶ	整地土Ｂ西	釉	濃紫												(10.0)	12.2			1.8					６？	浅黄橙　細砂並、空隙少、硬質		199801-D129
	T005	軒丸	Ⅴ	西　SK04	燻		巴Ⅱ-2a	(15.6)	11.5		2.5						珠文径0.8巴頭部幅2.0										C2	灰白　細砂少、赤色粒（粘土塊？）多、軟質		199801-D122
	T006	軒丸	Ⅴ	西　SK04	燻		巴Ⅱ-2c	15.2	10.7	7.7	2.4						珠文径0.6巴頭部幅1.6										A1	浅黄橙　細砂・赤色粒多、縞あり、硬質		199801-D121
	T007	軒丸	Ⅴ	西　SK04	燻		巴Ⅱ-2b	(17.0)	(12.2)	9.1	2.6						珠文径0.8巴頭部幅2.3										B2	灰白　細砂多、空隙多、やや硬質		199801-D123
	T008	丸	Ⅴ	西　SK04 9層	燻													(11.6)	15.8	3.6	12.6	8.1	2.3	5.2			A1	灰白　細砂多、空隙少、硬質、わずかに縞あり		199801-D124
91	T009	平？	Ⅵ	SK01	釉	濃紫（茶）光沢												(13.8)	(11.9)			1.8					1	赤橙　細砂少礫少、緻密、硬質	中央に商標「□分式特許□　商標田┐金田　□咋郡字中沼」	199801-D151
	T010	丸	Ⅳ	SK03	燻													(17.0)	(10.7)	43.0	(8.6)	6.6	2.5	3.3			B2	灰白　細砂多、空隙多、やや硬質		199801-D118
	T011	熨斗？	Ⅳ	SK03	釉	鉄漿												(26.1)	(16.6)			2.0					越前	浅黄橙・淡赤橙　細砂少、空隙少、硬質縞あり		199801-D119
	T012	熨斗	Ⅳ	SK03	釉	鉄漿												(22.4)	13.6			2.0					越前	浅黄橙　細砂少、空隙少、硬質		199801-D120
	T013	軒丸	Ⅴ	トレンチ３SK05	燻		巴Ⅱ-2b	(17.0)	(12.2)	(8.8)	(2.9)						珠文径0.8巴頭部幅2.3										B2	灰白　細砂多、礫少、空隙多、軟質		199801-D125
	T014	軒丸	Ⅰ	上面　アゼ西　上面	釉	黒褐	梅鉢ⅢかⅡ	(15.4)	(11.2)		2.8						花弁径3.4										6	浅黄橙　細砂並、空隙少		199801-D134
	T015	軒丸	Ⅱ	上面	釉	灰釉	巴Ⅱ-2b											「14.6」	「11.6」		2.3						越前	灰　細砂少、緻密、硬質		199801-D140
92	T016	軒丸	Ⅳ	上面	燻		巴Ⅱ-2b	「16.0」	「11.7」	8.0	2.6																C2	灰白　細砂少、空隙少		199801-D139

第17表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（瓦当）（cm）										寸法（体部）（cm）									胎土		特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	珠文径他	a	b	c	d	e	f	g	h	i				
92	T017	軒丸	Ⅶ	上面	燻													(16.2)	15.8			8.5	2.8				C2	灰白　細砂少、空隙少	コビキA、布目痕	199801-D132
	T018	軒平	Ⅴ	西　上面	燻		垂下型三葉		(9.2)			(3.7)	3.0	2.7	3.3	1.7											C2	灰白　細砂少、空隙少、海綿骨針		199801-D143
	T019	軒平	Ⅴ	上面	燻		三葉Ⅰ		(11.0)			(9.3)	2.7	(3.7)	3.3	2.1											C2	浅黄橙　細砂多、空隙少、やや硬質、海綿骨針		199801-D144
	T020	軒平（隅瓦？）	Ⅵ	上面	燻		三葉Ⅰ	(10.0)	(11.0)			(10.0)	2.7	4.8	1.3	2.1		(9.8)									B2	浅黄橙　細砂多、礫少、空隙多、やや硬質		199801-D149
	T021	軒平	不明	不明	燻		三葉Ⅲ	(16.0)	(17.5)		4.0	(13.5)	2.8	4.9	2.8	2.1											B1	灰白　細砂多、空隙多、縞あり		199801-D145
	T022	軒桟	Ⅰ	東　上面	釉	暗灰	五弁花梅鉢Ⅲ（小丸）	(13.0)	(8.0)			(5.0)	(2.4)	(4.3)	(2.6)	(2.6)										1.8	7	灰　白色粒・細砂多、空隙多		199801-D135
	T023	軒桟	Ⅰ	東　上面	釉	暗灰	五弁花	(15.6)	(15.7)		(7.5)	8.0	2.7	4.4	2.9	3.8										1.9	7	灰　白色粒・細砂多、空隙多		199801-D136
	T024	軒桟	Ⅱ	西	釉	暗灰	五弁花			2.4			2.8	4.5	2.9	2.2		(12.9)								1.6	7	灰　白色粒・細砂多、空隙多		199801-D152
93	T025	軒桟	Ⅲ	東　上面	釉	濃紫（茶）光沢	玉Ⅱ-3	(21.5)	(19.0)		8.2	14.0	2.0	4.3	2.5	2.3		(12.2)								1.8	5Ⅱ	にぶい橙　細砂多、空隙多、弱い縞状、硬質		199801-D146
	T026	軒桟	Ⅵ	上面	釉	濃紫（茶）光沢	玉Ⅴ	(12.0)	(14.8)	5.2		(9.3)	2.6	4.7	2.9	1.9		(8.6)								1.9	3	赤橙　白色粒・細砂多、空隙少、硬質		199801-D150
	T027	軒桟	Ⅲ	上面　アゼ	釉	濃紫（茶）	梅鉢Ⅳ	(20.10)	(17.30)	－	－	(1082)	2.83	4.76	2.90	1.94		(17.90)	(17.40)							1.95	3	明赤褐　白色粒・細砂多、礫少、空隙多		199801-D156
	T028	軒桟	Ⅱ	上面	釉	濃紫（茶）	菊Ⅲ-2	(16.0)	(21.7)	6.5	(2.5)	13.5	2.7	4.5	2.6	2.1		(11.7)								2.0	1	橙　白色粒・細砂多	粘土が層状に重ねられ、接合部に小さな空隙あり	199801-D148
	T029	軒桟	Ⅴ	上面	釉	濃紫（茶）光沢	菊Ⅲ-3梅鉢Ⅲ（小丸）	小丸「9.1」	小丸「6.4」	小丸「6.1」	小丸2		文様区厚2.8	瓦当厚5.0	顎高3.1	顎下部厚2.1											3	赤橙　白色粒・細砂多、空隙少、硬質		199801-D142
94	T030	軒桟	Ⅲ	東　上面	釉	濃紫（茶）光沢	菊Ⅵ	(25.0)	(26.5)	5.5	(6.0)	8.1	2.5	4.6	2.9	1.9		(25.8)						2.2	4.4	1.8	1	赤橙　細砂多、礫少、空隙少。硬質		199801-D147
	T031	軒桟	Ⅴ	西　上面	釉	濃紫（茶）	桜	－	(14.55)	－	－	－	3.1	5.1	－	－										2.4	5Ⅰ	橙　白色粒・細砂並、白色の縞多		199801-D157
	T032	軒桟	Ⅱ	上面	釉	黒褐	宝	(11.18)	(14.14)	－	(6.77)	(7.64)	2.8	4.5	2.50	2.1											2	橙　白色粒・細砂少、礫少、緻密	文様区隅に溶着あり	199801-D155
	T033	軒桟	Ⅳ	上面	釉	黒褐光沢	梅鉢Ⅲ（小丸）	小丸「11.0」	小丸「7.2」																		2	赤橙　白色粒・細砂多、粘土塊少、白色縞あり	軒平部欠損	199801-D141

第18表　出土遺物観察表　本丸附段　瓦３・石製品

瓦

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（瓦当）（cm）										寸法（体部）（cm）									胎土		特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	珠文径他	a	b	c	d	e	f	g	h	i				
94	T034	丸	Ⅲ	西　上面	釉	濃紫（茶）												(20.4)	15.3	3.6	13.0	6.9	2.4	5.5			5I	にぶい橙　白色粒・黒色粒少、空隙少、縞あり、硬質	コビキＢ、棒状圧痕「○」？	199801-D133
95	T035	丸	Ⅵ	上面	釉（越前）													(13.4)	(13.8)	3.6	10.9	6.9	2.0	4.5			越前	灰、淡橙　細砂少、硬質緻密、縞あり	コビキＢ、刺縫痕、釘穴、体部上面に刻印「○」？	199801-D158
	T036	丸	Ⅵ	上面	燻													(7.9)	(7.7)				2.7				A2	灰　細砂・粗砂少、空隙少	コビキＢ「○」　２個	199801-D154
	T037	平？	Ⅵ	上面	燻													(4.75)	(7.8)			1.8					A2	灰白　細砂少、空隙少	「[上]」	199801-D153
	T038	丸	Ⅳ	トレンチ4東	燻													(15.3)	(13.7)	4.5	(9.5)	(7.1)	2.1	4.4			C2	灰　細砂多、空隙少、やや硬質	コビキＢ　布目痕	199801-D130
	T039	鬼	Ⅲ	東　上面	燻？																							灰白　細砂多、繊維質含む	銅線埋込み	199801-D138
	T040	鬼	Ⅲ	西　上面	燻？																							灰白　細砂多、繊維質含む		199801-D137

石製品

図版	番号	器種	地区	出土地点	全長（cm）	全幅（cm）	厚（cm）	重さ（g）	石質	特記事項	ID（実測番号）
96	S001	硯	Ⅳ	上面	(3.7)	5.8	(2.7)	(80.2)		陰刻「－大大」	199801-S039
	S002	硯	不明	上面	(7.65)	(5.15)	3.25	(116.9)			199801-S040
	S003	石臼	Ⅰ	西　上面	底径「19.0」	—	(7.8)	(2020)		挽き手孔1.9cm×2.65cm、深さ4.6cm	199801-S036
	S004	火鉢	Ⅵ	上面	(11.3)	(7.5)	(5.7)	(311.6)	凝灰岩	角形	199801-S038
	S005	相輪	Ⅲ	東　上面	(14.6)	14.8	—	(2280)		被熱、溶融鉛？付着	199801-S037

第19表　出土遺物観察表　本丸附段　金属製品

（ ）は遺存値　「 」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	特記事項	ID（実測番号）
97	M001	銅	釘	Ⅲ	第８段東延石背後	3.15	0.7×0.2	0.7×0.2	1.1		199801-M031
	M002	銅	釘	Ⅳ	石垣（1415N SW08）抜取坑中層	3.5	1.05×0.3	1.05×0.4	2.5		199801-M033
	M003	銅	釘	Ⅳ	石垣（1415N SW08）抜取坑中層	2.1	0.75×0.2	0.75×0.3	1.1		199801-M032
	M004	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.1	(8.47)	頭 1.69　軸 0.81	頭 0.82　軸 0.76	17.8	倒立 木質片上下交差（上部が溝に並行か）	199801-M001
	M005	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.2	(12.40)	軸 0.72	軸 0.56	22.5	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M002
	M006	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.3	(12.60)	頭 1.83　軸 0.83	頭 0.85　軸 0.70	22.5	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M003
	M007	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.4	(9.65)	頭（1.52）　軸 0.73	頭 0.97　軸 0.65	17.1	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M004
	M008	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.5	(5.54)	軸 0.73	軸 0.71	9.8	倒立 木質片方向不明	199801-M005
	M009	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.6	(3.90)	軸 0.82	軸 0.77	8.8	倒立 木質片方向不明	199801-M006
	M010	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.7	10.72	頭 2.07　軸 0.73	頭 1.08　軸 0.70	20.6	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M007
	M011	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.8	—	軸（0.46）	軸（0.54）	12.6	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M008
	M012	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.9	(14.76)	軸 0.77	軸 0.61	31.7	直立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M009
	M013	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.11	(5.90)	頭 1.66　軸 0.64	頭 0.78　軸 0.58	8.5	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M010
98	M014	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.13	(7.69)	頭 1.20　軸 0.55	頭（0.49）　軸 0.53	8.8	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M011
	M015	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.14	(6.62)	頭（2.05）　軸 0.57	頭 0.96　軸 0.54	7.9	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M012
	M016	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.15	12.16	頭（2.31）　軸 0.82	頭 1.34　軸 0.71	21.4	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M013
	M017	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.16	(6.87)	軸 6.17	軸 6.28	9.6	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M014
	M018	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.17	(10.66)	軸 0.71	軸 0.65	21.6	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M015
	M019	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.18	(3.59)	—	—	8.5	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M016
	M020	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.19	(8.06)	軸 0.55	軸 0.41	7.1	倒立 木質片方向不明	199801-M017
	M021	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.20	(10.10)	頭 1.57　軸 8.49	頭 8.03　軸 5.87	18.0	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M018
	M022	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.21	(6.27)	—	—	11.5	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M019
	M023	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.22	(11.77) 屈曲時 (12.26) 伸長時	—	—	23.4	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M020
	M024	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.23	9.99	—	—	20.9	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M021
	M025	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.24	(12.74)	—	—	19.7	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M022
99	M026	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.26	(10.42) (10.57) 付着物含	—	—	21.0	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M023
	M027	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.27	7.16	頭 1.44	頭 0.74	12.9	直立 木質片上下交差（下部が溝に並行）	199801-M024
	M028	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.28	(8.07)	軸（0.52）	軸（0.46）	12.4	倒立 木質片上下交差（上部が溝に並行か）	199801-M025
	M029	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.29	(10.98)	—	—	20.7	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M026
	M030	鉄＋木	釘	Ⅰ	ＳＤ02　№.30	(11.77)	—	—	22.6	倒立 木質片上下並行（溝に並行）	199801-M027
	M031	銅	釘	Ⅴ	ＳＫ04	12.45	1.3×0.5	1.25×0.45	19.0		199801-M029
	M032	銅	釘	Ⅴ	ＳＫ04	12.05	1.5×0.5	1.2×0.65	23.3		199801-M030
	M033	銅	釘	Ⅵ	ＳＫ03	2.65	1.1×0.2	0.9×0.25	1.5		199801-M028
	M034	銅	匙	Ⅴ	西上面	5.75	1.5×0.4	0.3×0.2	2.3		199801-M034
	M035	鉛	鉛板	Ⅵ	上面	11.85	4.5	0.2	81.8		199801-M035

第４節　小結

１．階段（雁木坂）と周辺施設について　（第100図）

本丸附段北部の階段（雁木坂）は、近代以降幅5.5ｍの規模となっていたが、発掘の結果、本来は幅18.8ｍ、最下段から最上段前端までの長さ12.7ｍに及ぶものであったことが確認された。段の延石は大部分が抜き取られていたが、構造が規格的で、抜き取り痕や根固の状況から、各段を復元することは可能であった。また階段周囲の石垣も、大部分が改変を受け、露呈部分は限られていたが、根石・抜取痕が検出され、位置・平面形状が判明した。

ただし、近世後期の絵図には、階段北部（Ⅰ区）・南西部（Ⅳ・Ⅵ区）に壇状・櫓台状の施設が表現されているが、これについては、基礎遺構が部分的にみられるのみで、遺構のみから全体形状を推定するのは困難である。

階段（雁木坂）を描く近世の絵図は比較的多く、とくに後期の代表的な絵図には詳細な表現がみられ、1830年以前の景観年代が推定される「金沢城本丸・東丸之図」（Ａ、第100図下段右）、嘉永３年（1850）作成の「御城分間御絵図」（Ｂ、同左）には、主要部に寸法が記載されている。概してＡ図の方が詳細であるが、段の位置や数については、よりＢ図に合致するところが多い。第100図や第16～21図等では、検出遺構をベースとしつつ、不明な部分について、Ｂ図の寸法記載値を優先し、Ａ図で補足したものを合成し、階段（雁木坂）及び周辺施設の推定復元ラインを示した。

近世後期の絵図においては、詳細な表現があるにも関わらず、上記Ａ・Ｂ図のように微妙な相違も認められる。近世後期における改修を反映しているのかも知れないが、描写・表現の違い（誤認・誤り）の可能性も否定できない。一方で、近世前期絵図と後期絵図（第６・７図）との描写の違いはかなり大きい。まず前者では、階段南部（上方）に門を表現する事例が多いが、後者では描かれていない。発掘調査では門柱基礎２箇所が検出されているが、これは近世前期に伴う遺構と考えられる。

２．階段（雁木坂）付近の変遷　（第101図）

階段（雁木坂）は、その下部で検出された土層や遺構の出土遺物や、一体的に作られた石垣基礎部の特徴等から、寛永８年（1631）の大火後に整備されたと判断される。

階段（雁木坂）に先行する遺構には、通路（坂道）の一部と目される地山掘削面、その東西に斜面をベースに掘削された掘り込み（SK04・SX01）、上手側の盛土等がある。

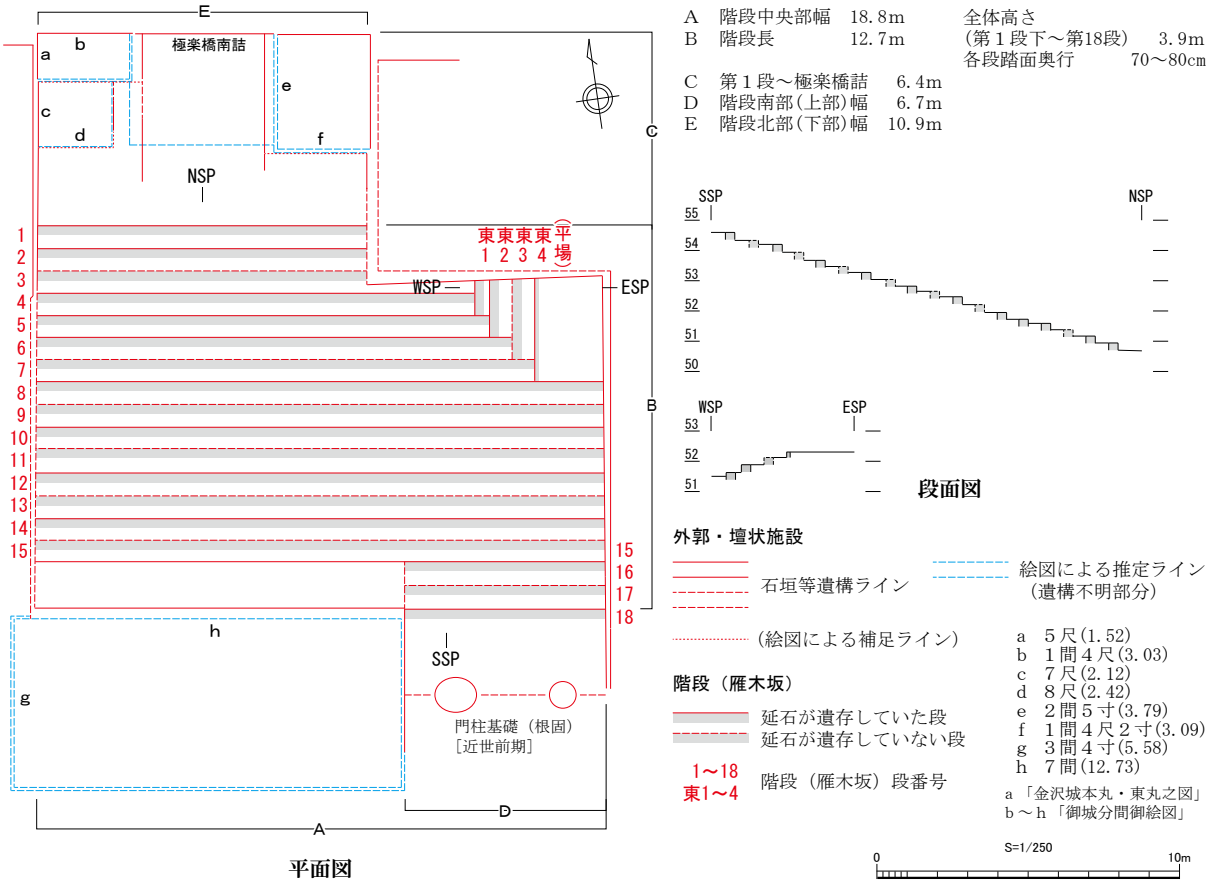
SK04は西側が明確ではないが、斜面をコの字状に掘り取ったとみられる土坑で、検出された東壁・南壁はともに垂直に近い傾斜を呈する。通路推定部分に近接しており、通路を挟んだ向かい側のSX01とも連動した機能の可能性が考慮されるもので、既刊の報告書[石川県金沢城調査研究所2014d]等では切岸状の遺構と表現した。ただし垂直気味とは言え壁面の高さは約1.5ｍ、幅も推定４ｍ程度であり、性格の確定には至っていない。

上手側の盛土も断割（トレンチ１）で確認されたもので、平面形状ははっきりしないが、一帯に面的に広がる可能性は小さいようであり、低い土居状の施設を想定している。

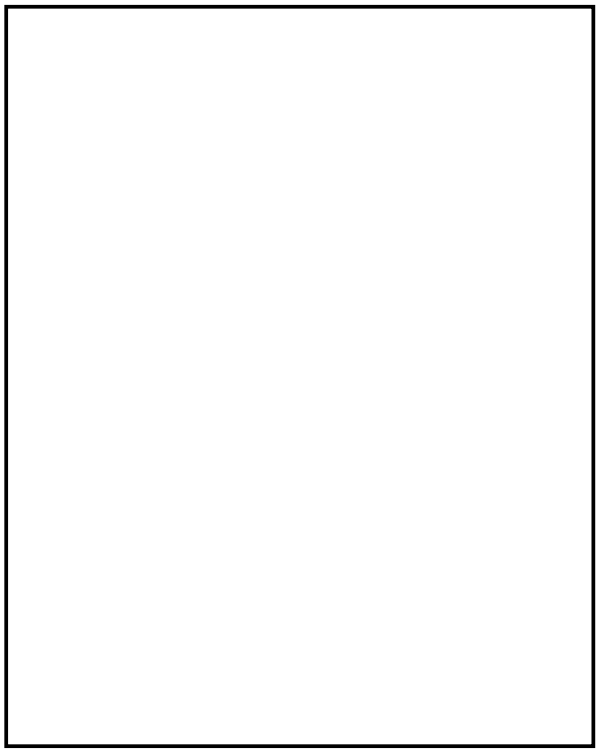
いずれも全容は明確ではないが、二ノ丸から空堀に架かる橋を渡り、本丸附段平坦面に至る連絡ルートに関わる遺構と推定しておきたい。

1610～31年頃の本丸附段は、南部を中心に、地下室状遺構、廃棄土坑、塀、金属加工関連遺構が展開し、本丸への出入口としては、大手である東ノ丸附段・東ノ丸唐門前に対し、御殿奥側に位置づけられる区域であった（初期遺構面Ⅰ（古・新））[石川県金沢城調査研究所2008d]。

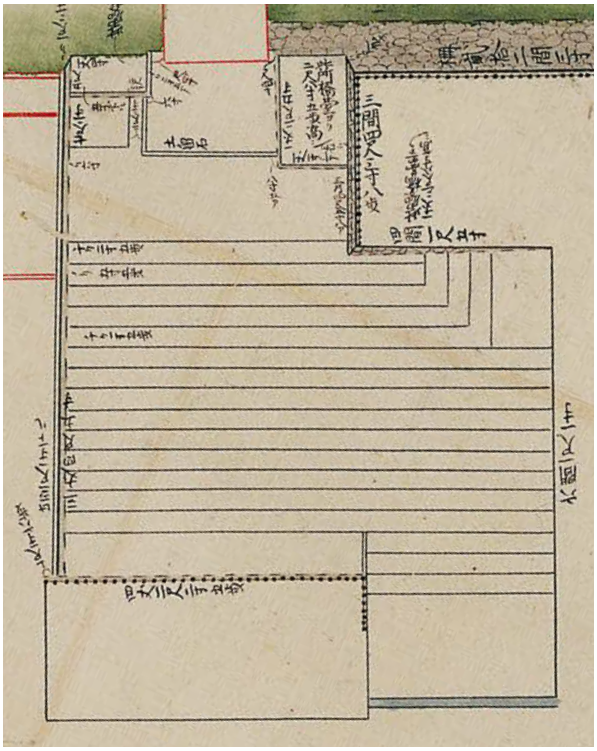
ただし郭北部には廃棄土坑等の遺構は展開しておらず、本丸西堀と同じ頃まで南側より一段低い落ち込み（2004-1SX02）があったが埋め立てられた後、広場のような空間となっていたようで、本丸区



階段（雁木坂）・周辺施設遺構概略図



「御城分間御絵図」（(公財)前田育徳会蔵） 嘉永３年(1850)



「金沢城本丸・東丸之図」（金沢市立玉川図書館蔵）
文化３年～天保元年頃(1806～1830)

絵図に描かれた階段（雁木坂）

第100図 階段(雁木坂)とその周辺施設

域出入口部分外側としての体裁は保っていたとも思われる。なお、2004-1SX02埋立土上面の高さは54.82～84mで、今回調査区の地山削平面上段（標高53.68m）から1.14～1.16m、土居状と推定した盛土上面（標高54.2m）より62～64cm高い。

寛永８年（1631）の大火以降、城郭の中枢機能は二ノ丸に移ったが、本丸には「御広間」等と絵図に記載された、御殿の儀礼的な機能を一部留めたとみられる建物が再建されている。この段階になって、二ノ丸御殿との連絡が考慮され、本丸附段が本丸の正面（大手）として、改めて位置づけられることとなった。郭北部においても、それまでの施設は廃絶されるとともに、象徴的・儀礼的空間としての性質を強めた本丸の正面にふさわしい格式ある施設として、形式化された桝形状を呈し、実用以上の規模を備えた大規模階段（雁木坂）が構築されたと推定される。

ただし第２節で触れた通り、階段直下の造成土（Ｅ層）の出土土師器皿は、1630年前後の年代を目安としつつも、多少下る可能性も含んでおり、大火直後か数年後といった階段整備の詳細時期については検討の余地を残している。

成立した階段（雁木坂）は、大きく形状を変えることなく近世を通じて存続したが、調査では、段の裏込土、石垣の形状、門柱基礎、一帯の整地状況等から、改修が行われていることが確認された。

その時期については、17世紀後半頃、18世紀後半頃、藩末期頃等が想定される。近代における改変については、本章第２節でも記した通り、明治末頃と推定される排水路設営に伴うと考えられる。

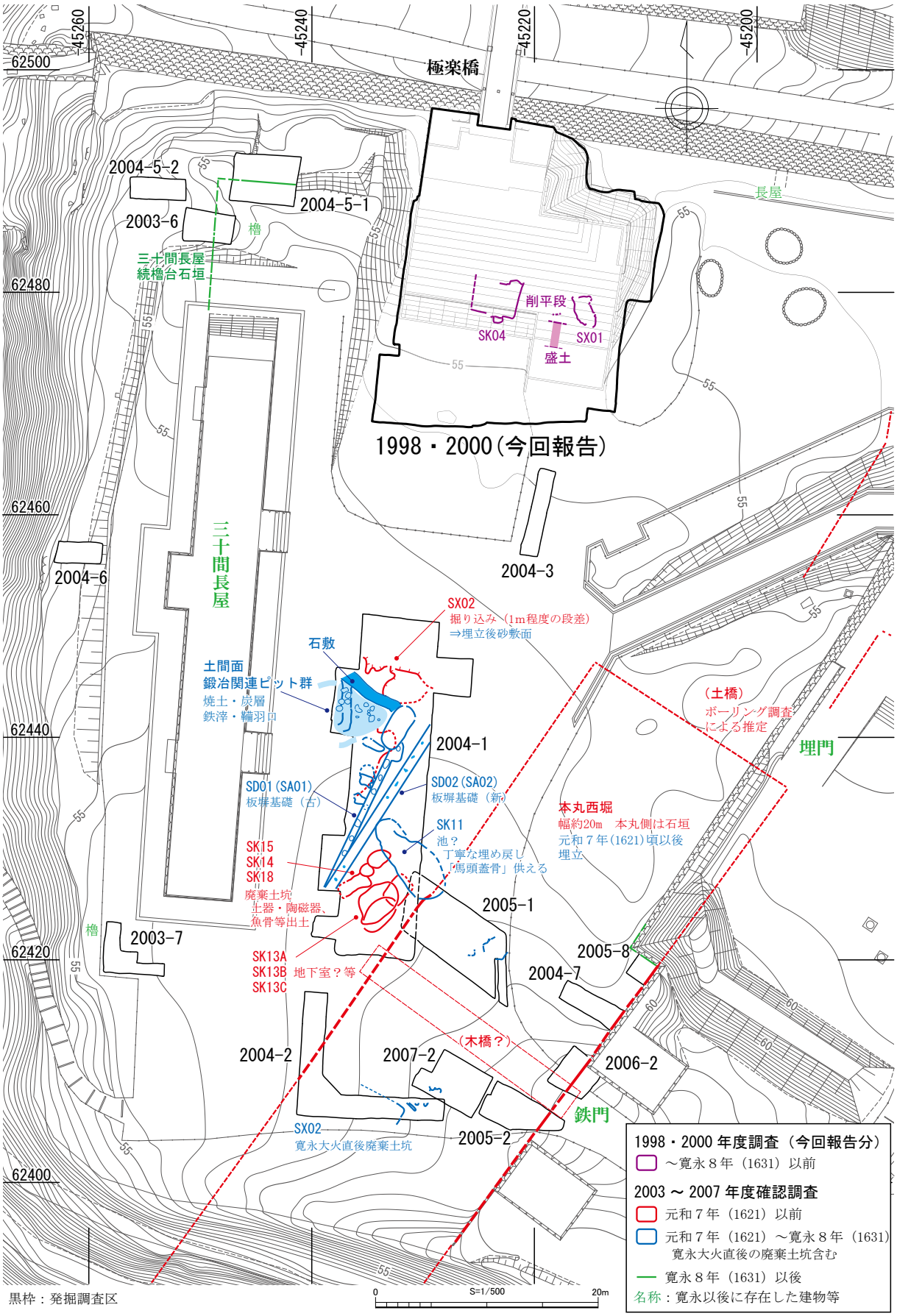
なお石垣のうち、調査区南部の1415E（SW06）・1415N（SW08）については、掘方内外の土層や出土遺物から、遺存する根石は創建当初（石垣編年４期・寛永年間）に据えられた状態を保持していることが明確になった。一方調査区北部の1413S（SW02）については、根石は４期の石材であるが、上部は５期（寛文～元禄年間）の切石積となっている。当該一帯は寛文２年（1662）に地震の被害にあったこともあり（「加州金沢城絵図」（(公財）前田育徳会蔵）等）、根石が創建時のままであるかどうか特定できていない。根石の詳細は明らかではないが、対面する1412E（SW01）も同様の問題を有する。また1412W（SW03）については、南端部が近世後期に改修されている。

３．出土遺物について

前項の記述の通り、今回調査区では、階段（雁木坂）造成以前に遡る17世紀前半の土師器皿を中心とした一群や、階段存続末期の改修に伴うもの、その他遺構出土資料があるが、大半は廃絶後の二次的な流入によるもの（上面出土遺物）である。上面出土遺物は、①ごく少数として、下層出土遺物と同時期の一群、②宝暦９年（1759）大火で被災した一群、③18世紀末～19世紀前半の流行年代を示す一群、④近代階段への改修後、明治期に生産された一群に大別される。

このうち②には鉛瓦が溶解し、釉薬状に付着した資料がみられる。また口径30cmを超える肥前磁器大皿なども含まれ、これらは大火で焼失した三十間長屋が、絵図において「御台所方預り」（「金沢城薪丸絵図」（金沢市立玉川図書館蔵））等と記載されていることからも、ここに保管されていた什器類であったことを示唆している。なお擂鉢はほぼ堺産の製品で占められており、肥前陶器擂鉢が主体的な金沢地域にあって、特徴的な状況を示している。

③については、SK01・整地土Ｂの主要出土遺物等と同時期であり、火鉢類や肥前磁器Ⅴ期等の碗類、京・信楽系の小型碗類等が相当する。これらが本来どこに保管されていたのか明確ではないが、天保期以後の絵図には､階段東側に「御座敷方物置」(第13図等）が描写されている。例えば安政５年(1858)の地震等の災害により、物置保管出土遺物の廃棄と階段の補修が行われたとすれば、調査の知見と整合するが、憶測の域を出ない。



第101図　本丸附段　初期主要遺構位置図

調査区遠景（空撮）（北東から）

調査区遠景（空撮）（北西から）

写真図版1　本丸附段遺構写真1

調査区着手前状況（南から）

調査区着手前状況（北から）

調査区着手前状況（東から）

調査区着手前状況（北から）

調査区全景（空撮）（北西から）

写真図版2　本丸附段遺構写真2

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

調査区全景　（北東から）

調査区全景　（南東から）

調査区全景（北西から）

写真図版3　本丸附段遺構写真3

階段（雁木坂）上部（南東から）

階段（雁木坂）下部（東から）

階段（雁木坂）下部西（南東から）

階段（雁木坂）上部（西から）

階段（雁木坂）下部（西から）

写真図版4　本丸附段遺構写真4

階段（雁木坂）下部東（南西から）

階段（雁木坂）下部東（西から）

写真図版5　本丸附段遺構写真5

階段（雁木坂）下部東（西から）

階段（雁木坂）下部東（平場付近）（北から）

写真図版6　本丸附段遺構写真6

階段（雁木坂）下部東（北から）

階段（雁木坂）第４～５段・東第１～２段（北から）

階段（雁木坂）第４～５段・東第１～２段（南西から）

階段（雁木坂）第４～５段・東第１～２段（南から）

階段（雁木坂）第４～５段・東第１～２段（東から）

写真図版7　本丸附段遺構写真7

階段（雁木坂）南北軸断面（第16～18段）（北東から）

階段（雁木坂）南北軸断面（第16～18段）（南東から）

階段（雁木坂）南北軸断面（第14～16段）（東から）

階段（雁木坂）南北軸断面（第５～６段）（東から）

階段（雁木坂）南北軸断面（第１段以下）（西から）

階段（雁木坂）第１段西（北東から）

階段（雁木坂）第１段西断面（東から）

階段（雁木坂）第２段東（西から）

写真図版8　本丸附段遺構写真8

階段（雁木坂）第４段西（北から）

階段（雁木坂）第６段中央（東から）

階段（雁木坂）第８段東（南西から）

階段（雁木坂）第８段東断面（西から）

階段（雁木坂）第10段中央（東から）

階段（雁木坂）第14段東（西から）

階段（雁木坂）第16段東（西から）

階段（雁木坂）第18段東（西から）

写真図版９　本丸附段遺構写真９

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（南東から）

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（北東から）

写真図版10　本丸附段遺構写真10

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（南西から）

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（北から）

写真図版11　本丸附段遺構写真11

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（東から）

階段（雁木坂）第12～13段西断面（北東から）

階段（雁木坂）第12～14段西（東から）

階段（雁木坂）第11～13段西（東から）

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（北東から）

階段（雁木坂）上部（第２次調査）（西から）

階段（雁木坂）第14～15段西（西から）

階段（雁木坂）第10～12段西（西から）

写真図版12　本丸附段遺構写真12

石垣1412E（SW01）・1414S（SW04）（東から）

石垣1411W（SW02）・1413S（SW05）（西から）

写真図版13　本丸附段遺構写真13

石垣1412W（SW03）南部（西から）

石垣1412W（SW03）南部（北西から）

石垣1412W（SW03）南部断面（南から）

石垣1415E（SW06）（南東から）

石垣1415E（SW06）（北東から）

写真図版14　本丸附段遺構写真14

石垣1415E（SW06）前面断面(北から)

石垣1415N（SW08）（西から）

石垣1415N（SW08）（東から）

石垣1415N（SW08）東部根石(西から)

石垣1415N（SW08）東部根石(北西から)

写真図版15　本丸附段遺構写真15

石垣1415N（SW08）東部断面(西から)

石垣1415N（SW08）東部根石根固(西から)

石垣1415N（SW08）東部根石(北から)

石垣1415N（SW08）東部根石(北から)

石垣1415N（SW08）西部断面(東から)

写真図版16　本丸附段遺構写真16

階段（雁木坂）上部　門柱西側基礎（根固）（東から）

階段（雁木坂）上部　門柱東側基礎（根固）（南西から）

排水溝SD01・SD02（北から）

排水溝SD01（南から）

排水溝SD01（北から）

排水溝SD01北部断面（北から）

排水溝SD01南部断面（北から）

排水溝SD02（北西から）

写真図版17　本丸附段遺構写真17

排水溝SD02（北から）

排水溝SD02（南から）

排水溝SD02　釘検出状況（南西から）

排水溝SD02断面（北西から）

壇状施設（北東）石列根石（南から）

トレンチ４　下層造成土（E層）（東から）

下層遺構SK04（北西から）

下層遺構SK04断面　（東から）

写真図版18　本丸附段遺構写真18

下層遺構SK04（北から）

下層遺構SX01断面（北東から）

写真図版19　本丸附段遺構写真19

調査区南西部（南西から）

P01（北西から）

トレンチ３　SK05（南から）

SK05断面（西から）

SK01・SK02（北東から）

SK03（南東から）

発掘作業風景（北から）

測量作業風景（南西から）

写真図版20　本丸附段遺構写真20

第４章　御宮

第１節　調査の概要

１．調査区の位置と調査の概要　（第102 ～ 104図）

御宮地区は、小立野台地先端につくられた金沢城の北西部に位置し、北端の藤右衛門丸とともに「北ノ丸」と呼ばれるが、寛永20年(1643)に前田家四代藩主光高がこの地に東照宮を勧進したことから、「御宮」と呼ばれるようになった。明治期から昭和20年までの旧陸軍期に病院や被服庫、将校集会所がつくられ、金沢大学期にも基本的な建物は踏襲されていったようである。

本調査は、金沢城公園整備事業に伴う排水溝の敷設に伴うものである。郭の縁辺部に沿うように調査区が設定されており、現在、郭中央を南北に縦貫する道路が境となって、東側はSE区、西側をSW区とした。調査区の屈曲ごとに一つの小区として設定した。

SE区は郭の東辺と北辺にあたる。SE3区においては、東照宮の北東端にあった宝蔵や、本地堂が重複する時期もあるが、大部分が近代以降の造成や金沢大学の理学部実験室等による改変を受けていたようで、金沢大学期の最後には理学部の実験棟や付属の施設がつくられている。

西側のSW区は、郭の西辺と西半の北辺に沿うように設定した。近世の整地土や郭の西端において南北に延びる石垣を確認した。絵図と照合すると、SW5・6区において甚右衛門坂門の一部と参道の一部と重複するが、旧陸軍期以降の建物とも重なっている。

また、両調査区の北辺の一部が藤右衛門丸側に延びているが、それぞれNS1区（SW区）とNS2区（SE区）とした。郭北辺の石垣や御宮造成以前の空堀跡を確認したほか、NS2区では東照宮の建物に関連すると思われる石瓦が出土した。

本調査の原因は、郭内に排水溝を敷設するためで、その影響範囲内での掘り下げに留めていた。基本的には近代以降の堆積層のレベルでの施工が可能であったことから、近世段階の遺構や整地土の大部分は現状のまま保存されることとなった。従って遺構は基本的に検出のみに留めている場合が多く、同一レベルで検出されたものが、遺構か整地土の層境かといった点も十分に追及できたとはいえない。大型の撹乱や、遺構が希薄な箇所において、調査区壁面にかかるように一部深掘りを行い整地土や地山の状況を確認した。

２．基本層序

御宮地区の層序は、NS2区の土層をベースにⅤ層に大別した。

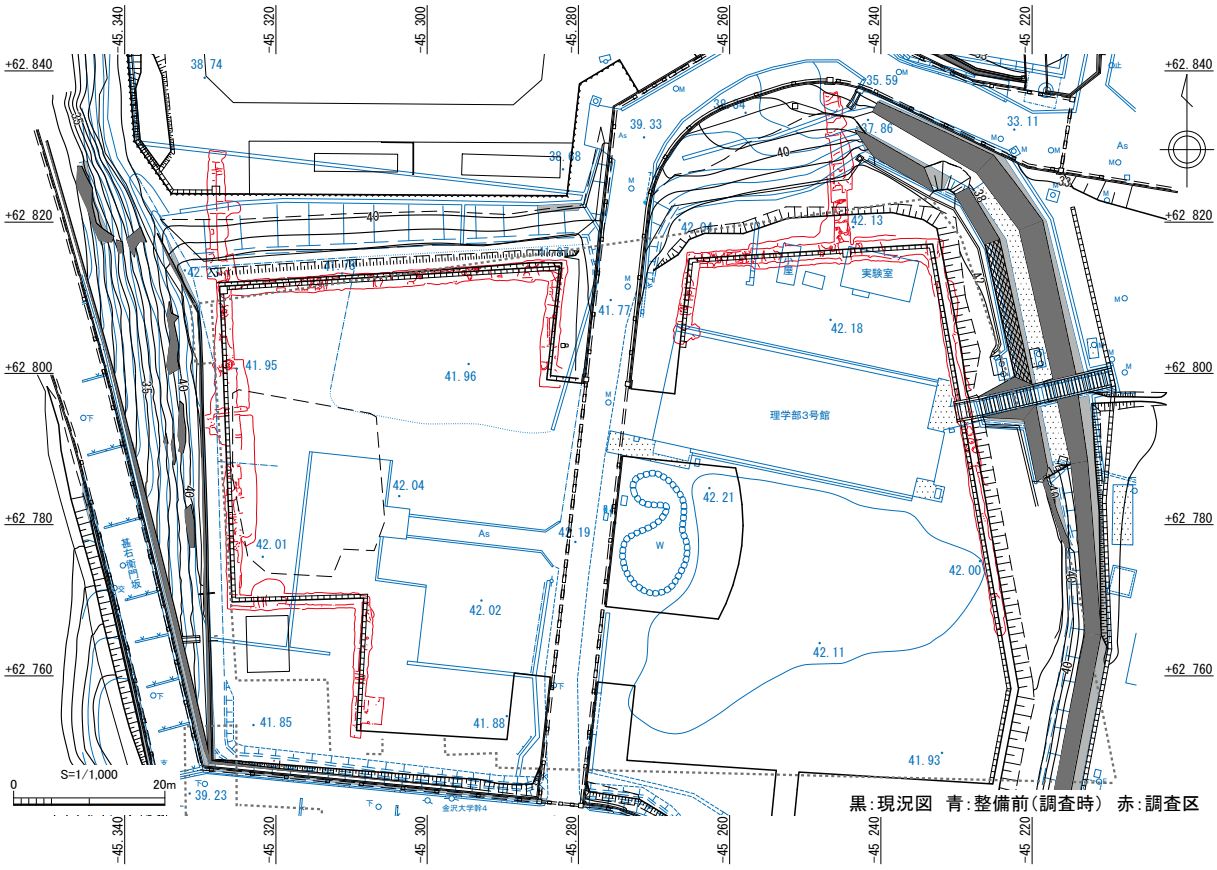
Ⅰ層は、近代から現代層で、標高41.8m前後で確認した。地点によって若干の差があり、近代の建物基礎等により、標高41.4m前後とやや深くまで及んでいる地点もある。

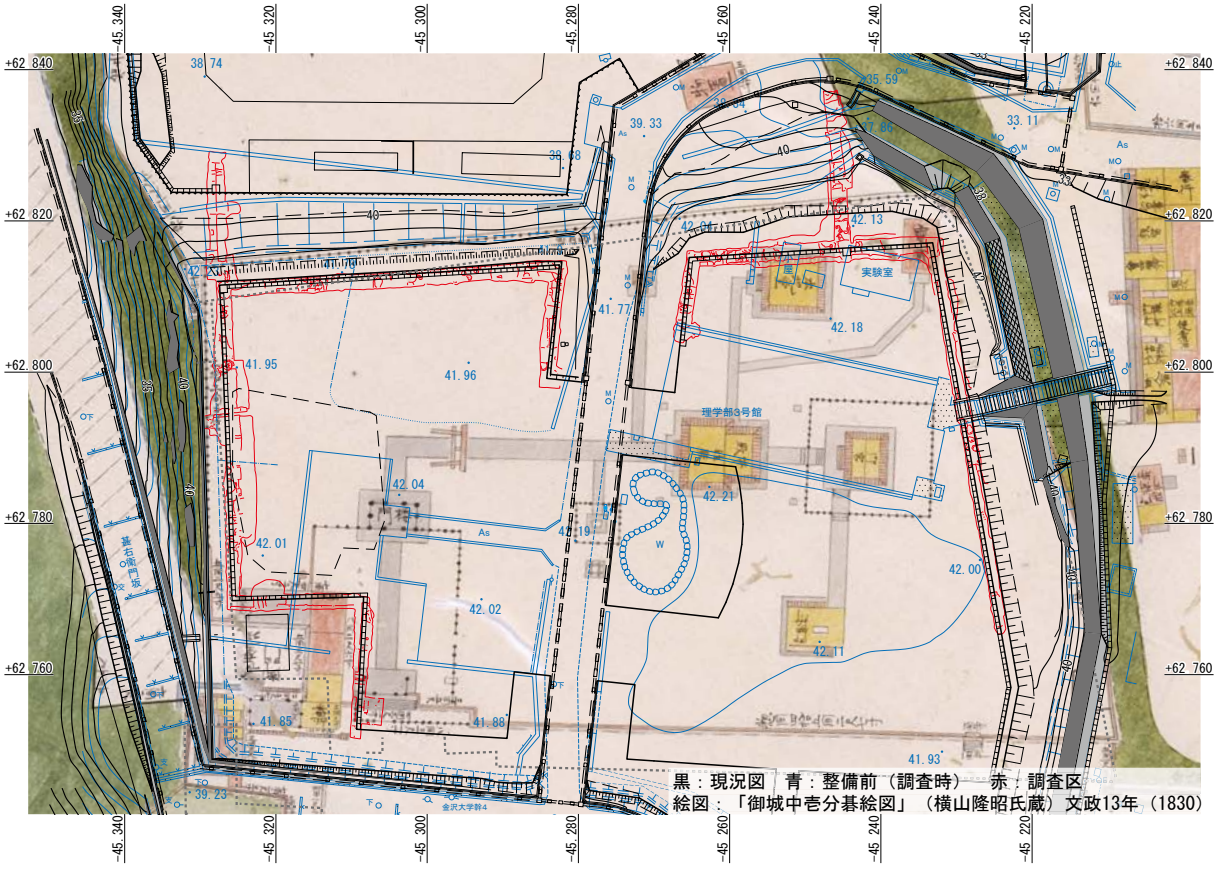
Ⅱ層は、近世段階の整地土及び遺構で、NS2区の斜面流土層が該当する、標高41.0 ～ 41.4mのレベルで黄灰褐色系の砂質土の面もⅡ層の可能性がある。

Ⅲ層は、北辺の空堀埋立て、平坦面の造成、棟石転用石段の埋没までの層が該当する。更に遺物の出土状況から細分可能である。他の調査区ではⅡ層とⅢ層の区別は難しい。

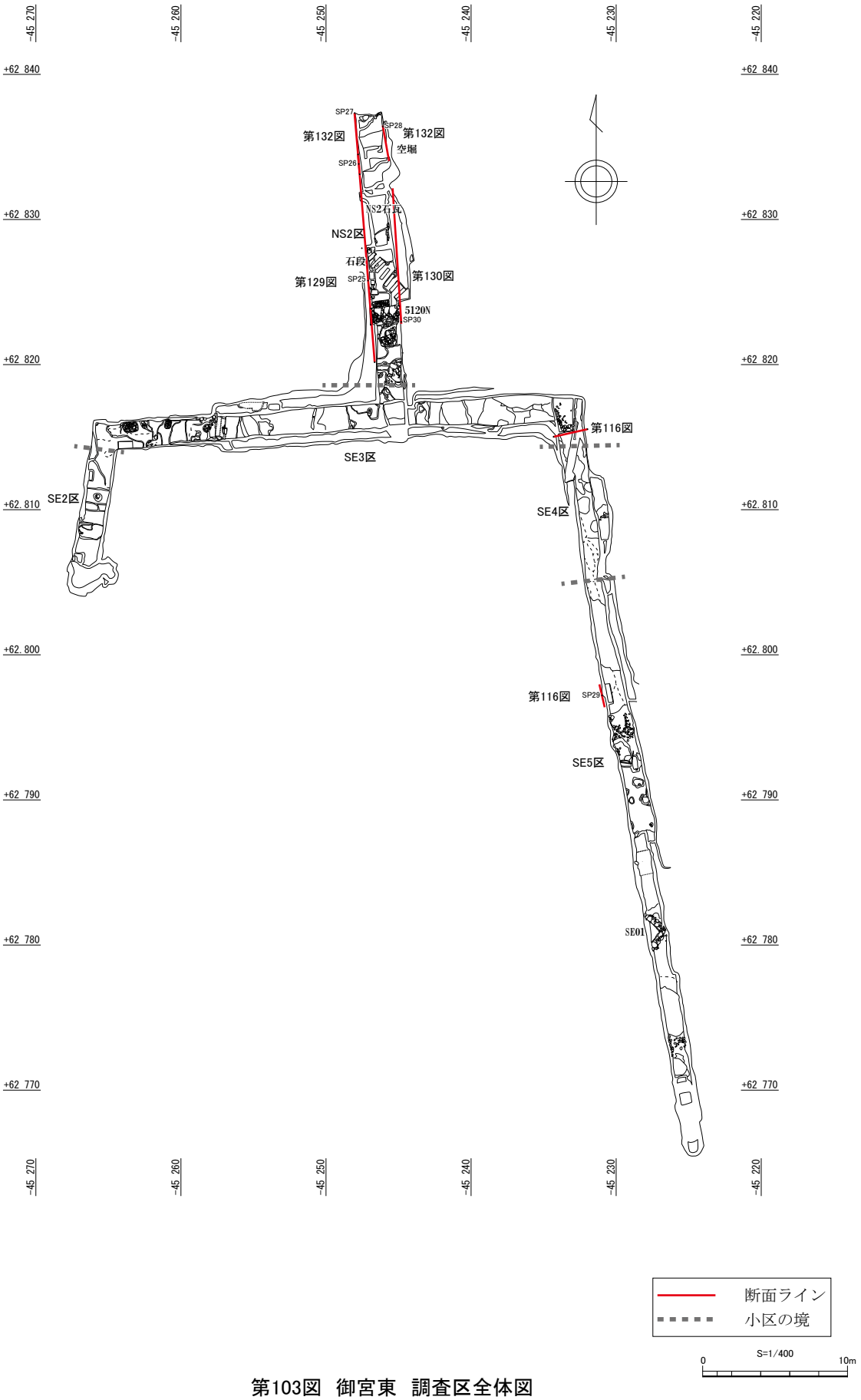
Ⅳ層は、近世段階の整地土及び遺構であるが、東照宮創建以前の層とした。NS1・2区において確認した空堀の基盤層が該当する。

地山を確認できた地点は少なく、NS2区において確認したにとどまった。地山は標高41.6m前後で確認したが、その他の地点では、それ以下の標高まで掘り下げているが、いずれも整地土であった。

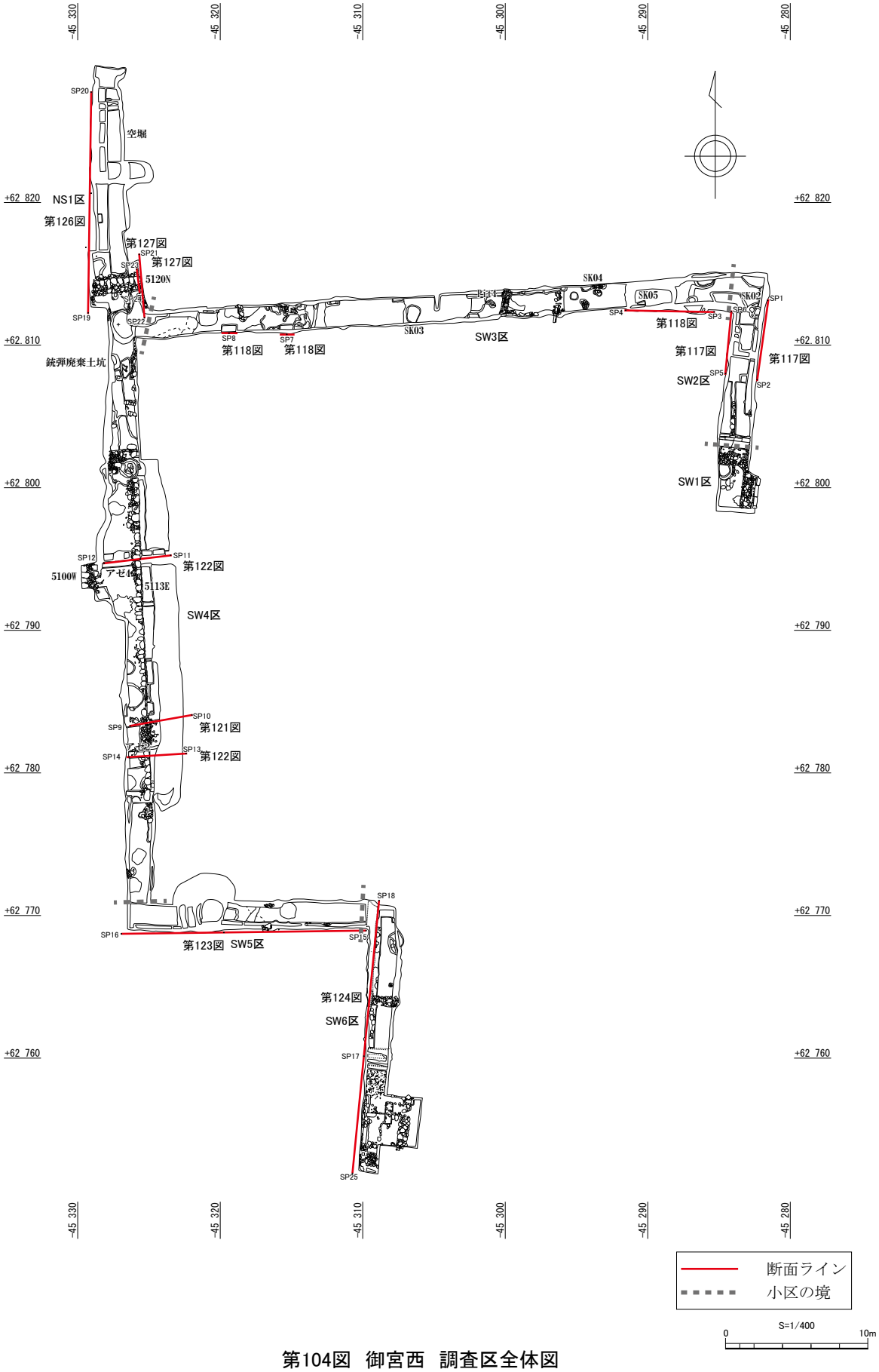




第102図　御宮　調査区位置図・絵図照合図



第103図　御宮東　調査区全体図



第104図　御宮西　調査区全体図

第２節　遺構

１．東調査区　（第105 ～ 109図）

東調査区は、郭の東辺と東半部の北辺に位置する。幅約２ｍ（最大3.5ｍ）で、調査区の総延長が約94ｍを測る東辺を長軸とする逆Ｌ字形の調査区で、北側にNS2区が延びており幅2.5ｍ、長さ24ｍを測る。全体として遺構密度は希薄で、SE3区からNS2区南半にかけてやや密度が高くなるが、近代以降の地下埋設物や建物の基礎部分や、整地土境か遺構なのか判別できないものが多い。

SE2区　（写真図版21）

遺構及び整地土検出面まではⅠ層の黒色土が堆積する。調査区南側は撹乱が大きく入るが、北側のSE3区との境では、少なくとも２段階の整地土の切り合いを確認した。南北方向の調査区を横断する溝を２条検出した。

SD01　調査区南側で検出。黒褐色土（Ⅰ層）から切り込んでおり、近代以降の溝である。幅１ｍで南側が浅く北側に向かって段掘り状に深くなっている。

SD02　調査区中央部で検出。幅50㎝を測る。東から西に向かって一段低くなっていく。

SE3区　（第116図）

東西方向に長い調査区。金沢大学期の建物基礎等により撹乱された箇所もあり、遺構の遺存状態も良好ではないが、Ⅱ～Ⅲ層に対応すると思われる整地土を確認した。西半には、江戸期には「本地堂」があった地点だが（第102図）、旧陸軍期の溝や、大学期の建物基礎等により江戸期の遺構を特定することはできなかった。

SE4区との境となる調査区北東コーナー部分については、文政13年（1830）の「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）では宝蔵が建っていた地点とほぼ一致する。コーナー部にはコンクリート基礎が南北方向に入っており、大きく撹乱を受けていたが、部分的に深掘りを行っており、30㎝ほど検出面より掘り下げたところで河原石が集中した遺構を確認した。河原石は石敷き状に検出したが、深掘り部分の一部で確認したのみで、その広がりや石敷きの性格、周辺の整地土等との関係は不明である。

SK01　調査区の西側で検出。短辺（東西）1.3ｍ、長辺は南北とも調査区外に延びており、全体形状・規模は不明。北から南に向かって徐々に深くなっており、南端で検出面から約10㎝で、北端は浅く５㎝程度である。出土遺物から近代以降の遺構である。

SE4区　（第116図）

御宮の東辺を南北方向に延びる調査区である。遺構と整地土の土質境を複数検出したが、いずれも検出で留めており、詳細な遺構形状や規模、時期等は不明である。

SE5区　（写真図版22）

SE4区と同じく南北に延びる調査区である。近代以降の建物基礎などの撹乱をうける箇所も多くあるが、北半部では遺構や整地土の土質境を検出した。南半部ではやや希薄となる。

SE01　一辺約２ｍ、深さが約70㎝を測る。正方形もしくは長方形の平面形状と推測する。南北方向に細長い調査区に対して、軸が45°ずれた状態で、そのうちコーナー部を含む２辺を検出した。

壁面は河原を使用した石積みがされており、ほぼ垂直に立ち上がる。石積みは布積みで、現状では３段を確認しており、天端部分は既に欠落したとみられる。やや不整形な長楕円形の川原石の短辺を打割り、小面として仕上げている。平滑な面をもつ川原石の場合は野面のままで積まれる。おおむね面の幅や高さは30㎝前後で、控えもほぼ同様か若干長い程度である。石材間の詰石は少ない。石積み背後には一部だが掘方のラインを確認した。内部は石尻付近に少量ではあるが円礫を主体とした栗石が入るが、大部分は土で埋め戻されている。規模・形状から一乗谷朝倉氏遺跡などで検出されているような便所遺構の可能性もあるが、年代等は不明で、戦国期に該当するような遺構はその他には確認

されていない。近世から近代についても、絵図を見る限り、この地点に井戸や便所は描かれていない。

２．西調査区　（第110 ～ 115図）

西調査区は郭の西辺と西半部の北辺に調査区が位置する。幅約２ｍ（最大４ｍ）、総延長は約135mを測る。北西端から北側に向けてNS1区が延びており、幅約2.5m、長さ約17ｍを測る。

土坑やピットといった遺構はあまり良好には確認できなかったが、石垣や近世段階の生活面と推測される整地土を確認した。

SW1区　（写真図版23）

西側調査区でも東寄りの位置にあり、SW2区とはコンクリート基礎構造物を境とした、ごく小規模な範囲が該当する。SW2区との境とした東西方向に軸をもつコンクリート基礎に沿って幅２ｍの礫が充填された溝状遺構を検出した。更にこの溝状遺構は調査区東壁の付近で南側に折れ、南に延びていていくような状況であったことから、調査区を東側に１ｍ拡張した。礫は表土直下から検出されている。また、礫を含んでいる溝状遺構に囲まれた中では、Ⅱ層とみられる整地土を確認しているが、その土を掘り込んでいる。旧陸軍期の絵図と重ね合わせると、建物の北東角部がほぼこの位置にきており、礫の充填された溝状遺構のＬ字形の折れが建物の角とほぼ一致すること、遺構の切り合いから近代以降であることなどから、旧陸軍の建物基礎の可能性がたかい。

SW2区　（第117図）

SW1区との境としたコンクリート基礎構造物から調査区が直角に西に折れる手前までの範囲をSW2区とした。調査区の北側において東壁と西壁で土層の堆積状況を観察した。

調査区東壁・西壁ともに地表面から約50㎝の厚さでⅠ層（１・２層）がほぼ水平に堆積している。その下にⅡ層と思われる整地層が50㎝程の厚さで、こちらもほぼ水平に堆積する（西壁３～６層）。このⅡ層の下にある整地土層は、堆積状況がやや異なっており、遺構か一連の整地土層か、又はⅢ層に該当するのかは判断できなかった。西壁では、北から南側に向かって斜めに堆積する状況が見て取れた。地表面から約２ｍ掘り下げてもなお地山面まで到達しておらず､近世の整地層が厚く堆積する。

遺構は希薄で､北側の東壁際でSK02（東壁12･13層）を確認した。南半部においてSW1区のコンクリート基礎に直交するように伸びる近現代の河原石列を確認した。

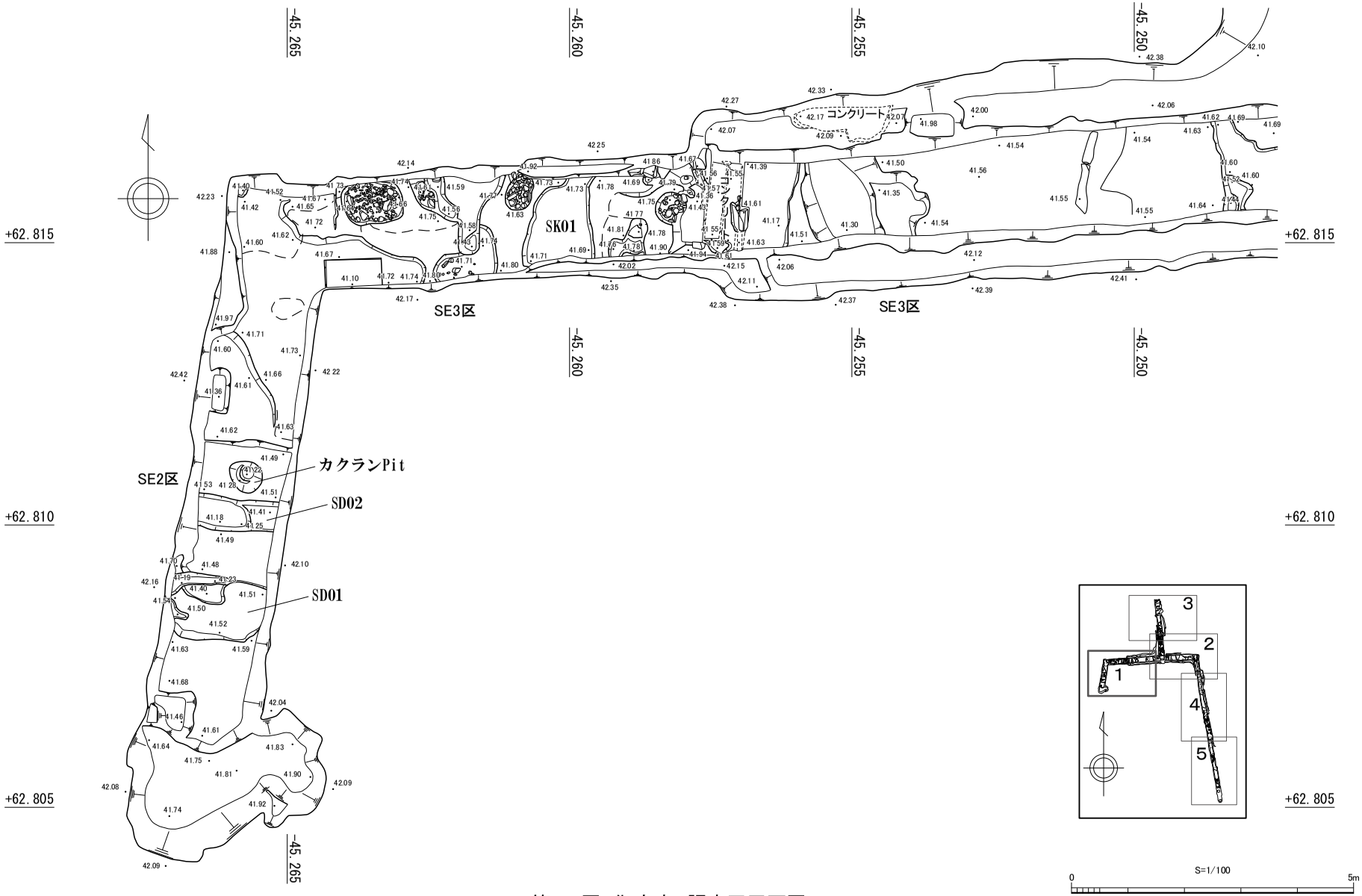
SK02　調査区の北東部で検出した土坑である。東壁断面の12・13層が該当するが、壁面の立ち上がりや、底面も未完掘のため詳細は不明である。西側の立ち上がりは確認したが、東側が調査区壁の下に入り込んでいるため、東西方向の規模も不明である。

SW3区　（第118図）

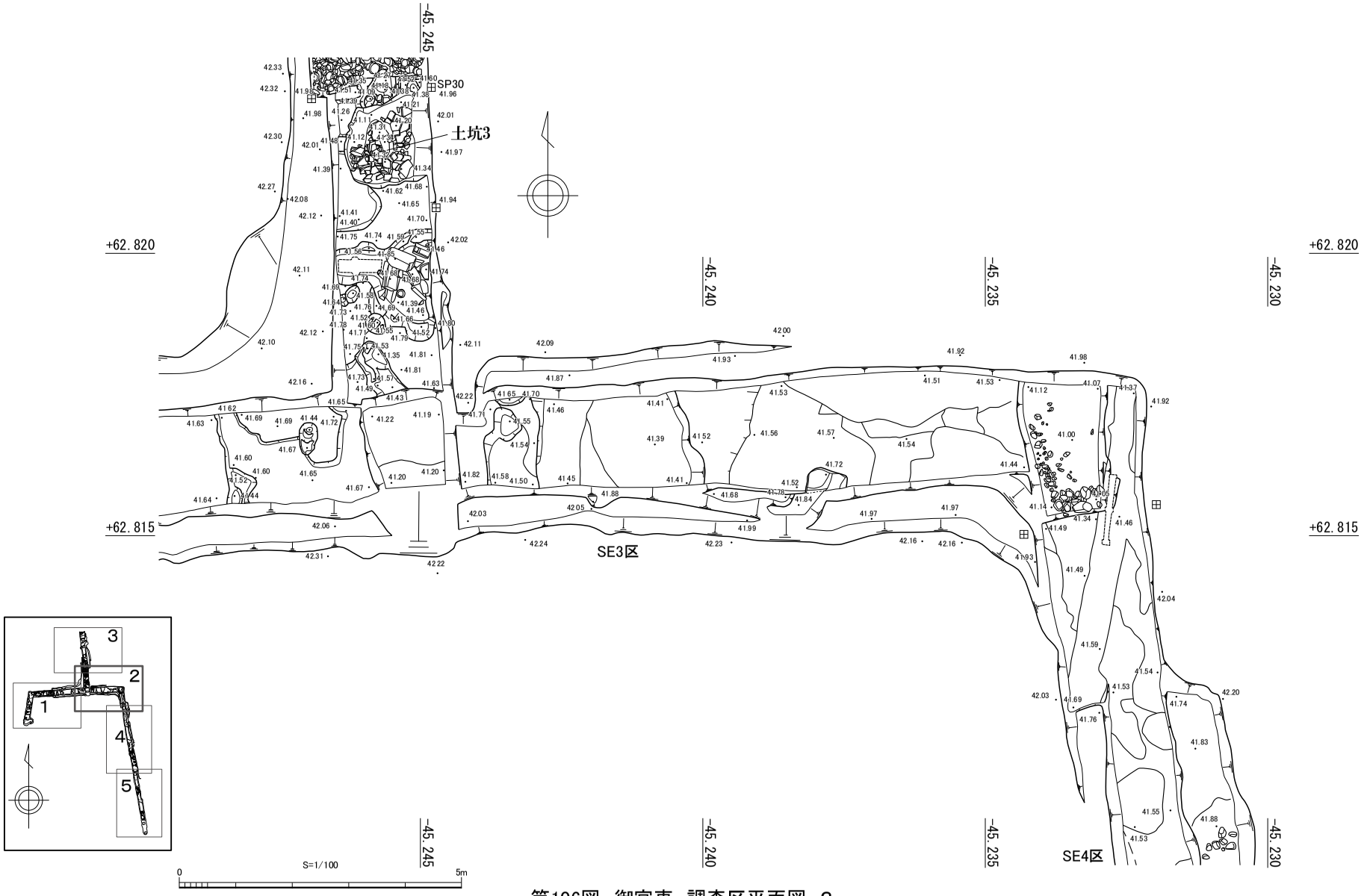
郭の北縁にあたる、東西方向の調査区。Ⅰ層は東側で標高41.9m、西側で41.6 ～ 7ｍと、若干西に向かって深くなる。Ⅰ層の直下には､東側で緑色凝灰岩と戸室石の石屑が踏み固められ薄い層状となった層を確認した。この層は調査区の西側では確認できなかった。断面図上では、面的な広がりがあるように見えるが､隣接したSW2区の西壁には同様の層は確認できないことから､局所的な層とみられる。調査区西側の南壁SP7・SP8の柱状図では、標高41.5ｍと41.7m付近でⅠ層直下の整地層を確認している。SP8は41.2mで更にもう一面整地層を確認しているが時期等は不明である。

遺構はSK01、SK03 ～ 05、Pit01 ～ 04を検出した。いずれも東側で検出した。SK01、03はいずれも近代以降であった。Pitは調査区の比較的密集して検出し、いずれも径20 ～ 30㎝前後の不整円形を呈している。半裁して断面を確認したが、いずれも明確な柱穴とは認められなかった。掘り下げに伴って小礫が出土したように見えたが、周辺の整地土中に含まれる礫と考えられる。

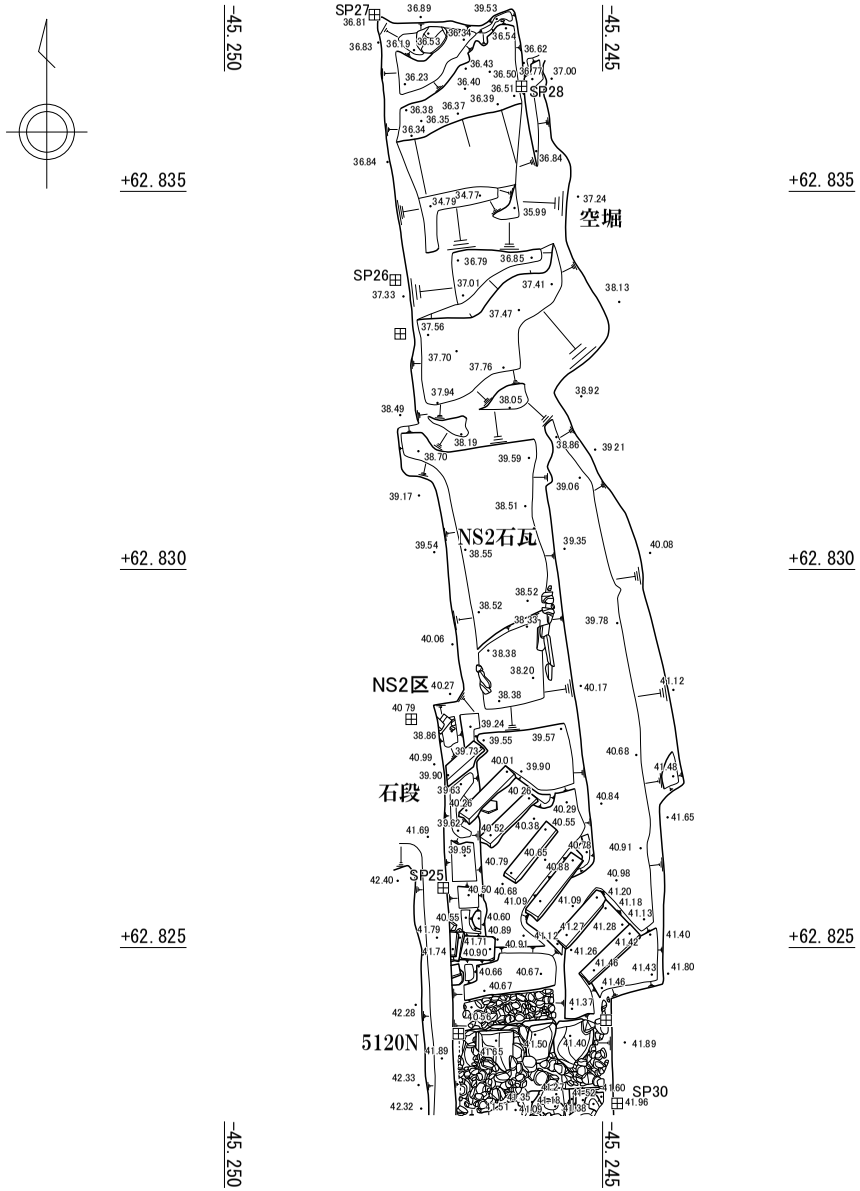
SK05　近代以降の撹乱が切り合う面を掘り下げていったところ、平面では確認できず、調査区南側壁を精査する際に断面で確認した（南壁15 ～ 17層）。壁面で確認した規模は、幅1.6m、深さ１ｍであっ

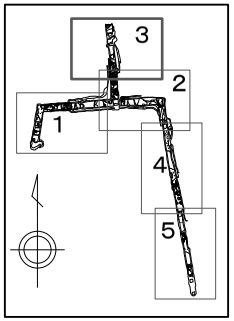


第105図 御宮東 調査区平面図 1



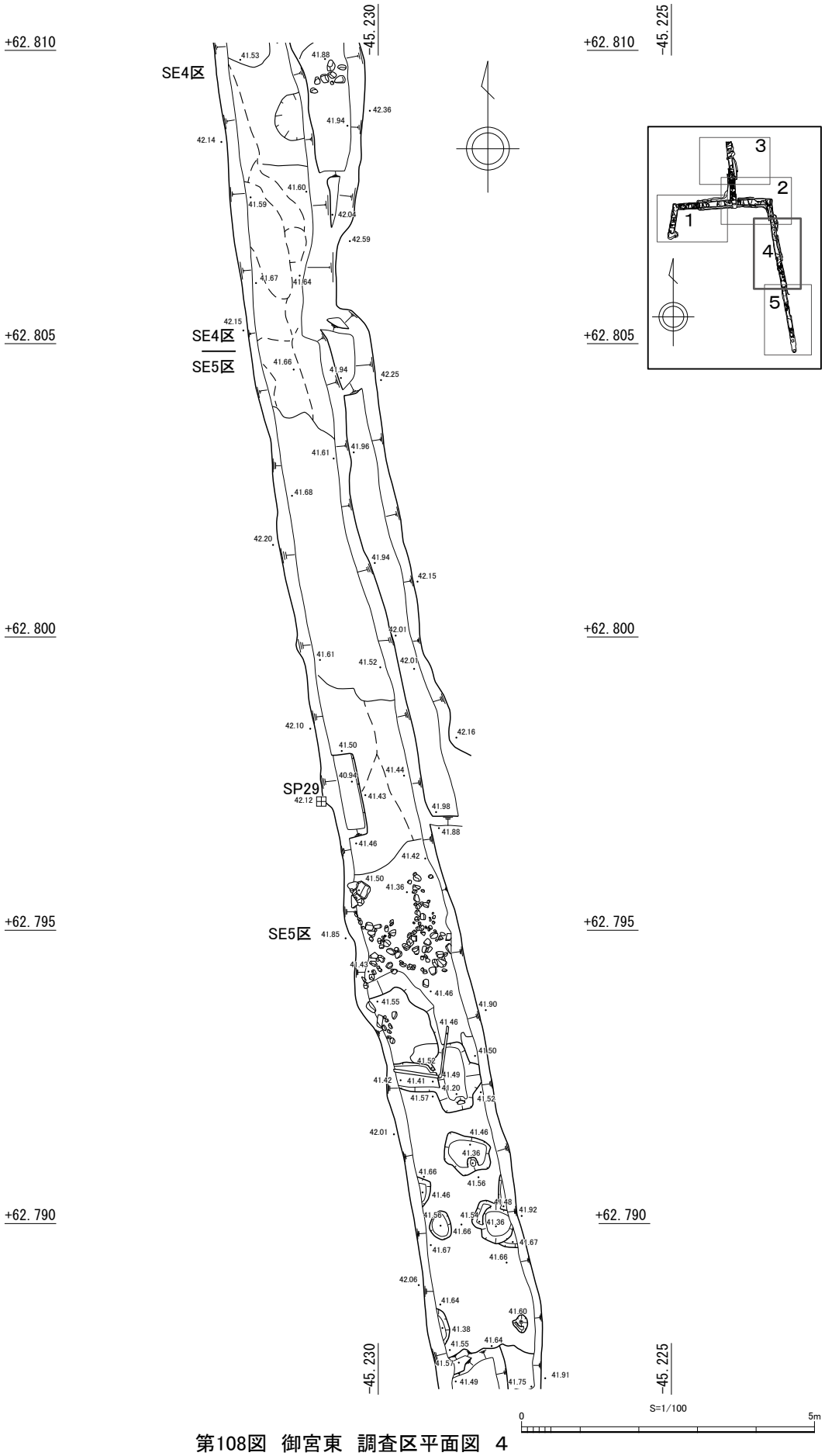
第106図　御宮東　調査区平面図　2





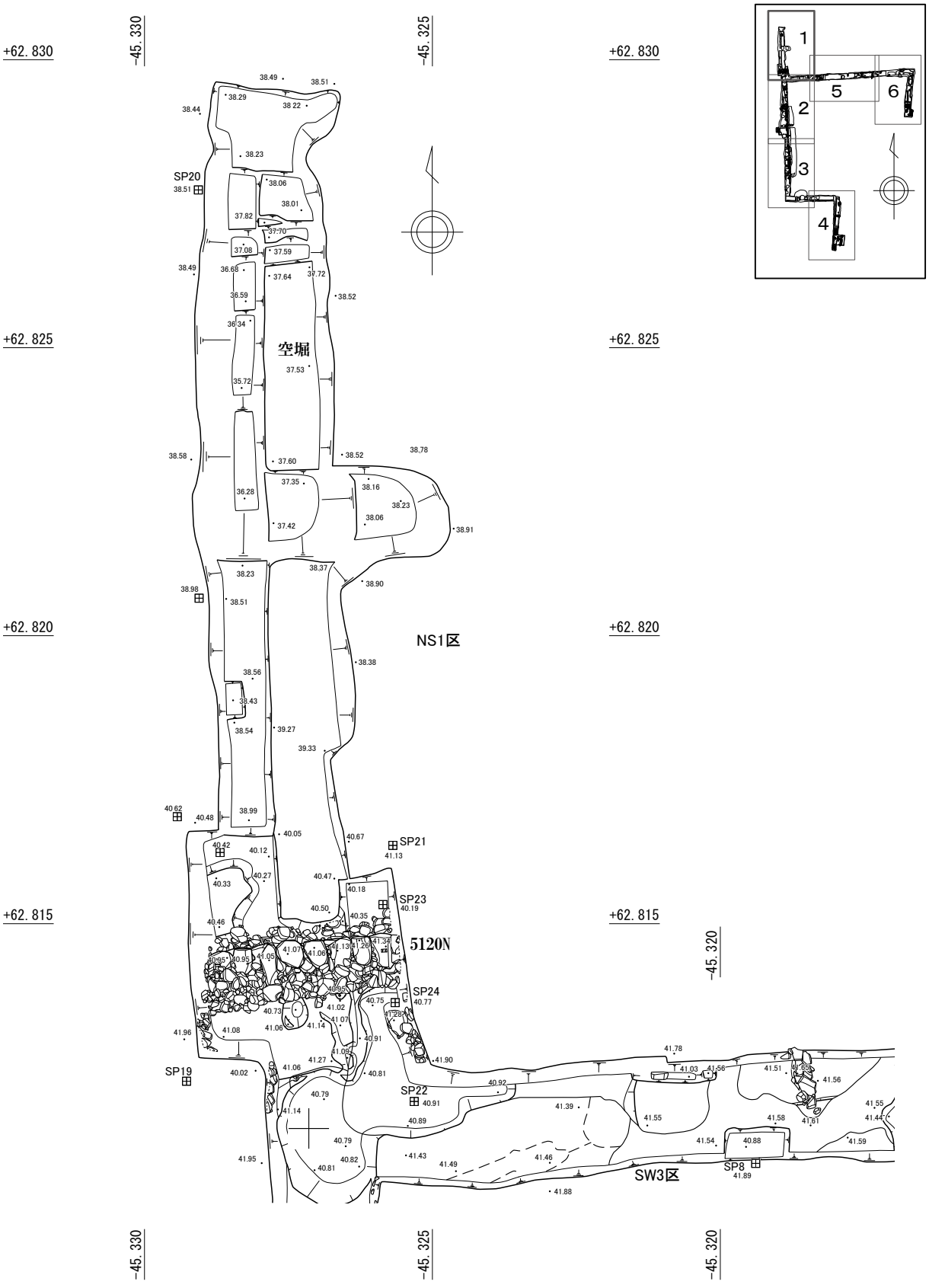
S=1/100
0
5m

第107図 御宮東 調査区平面図 3

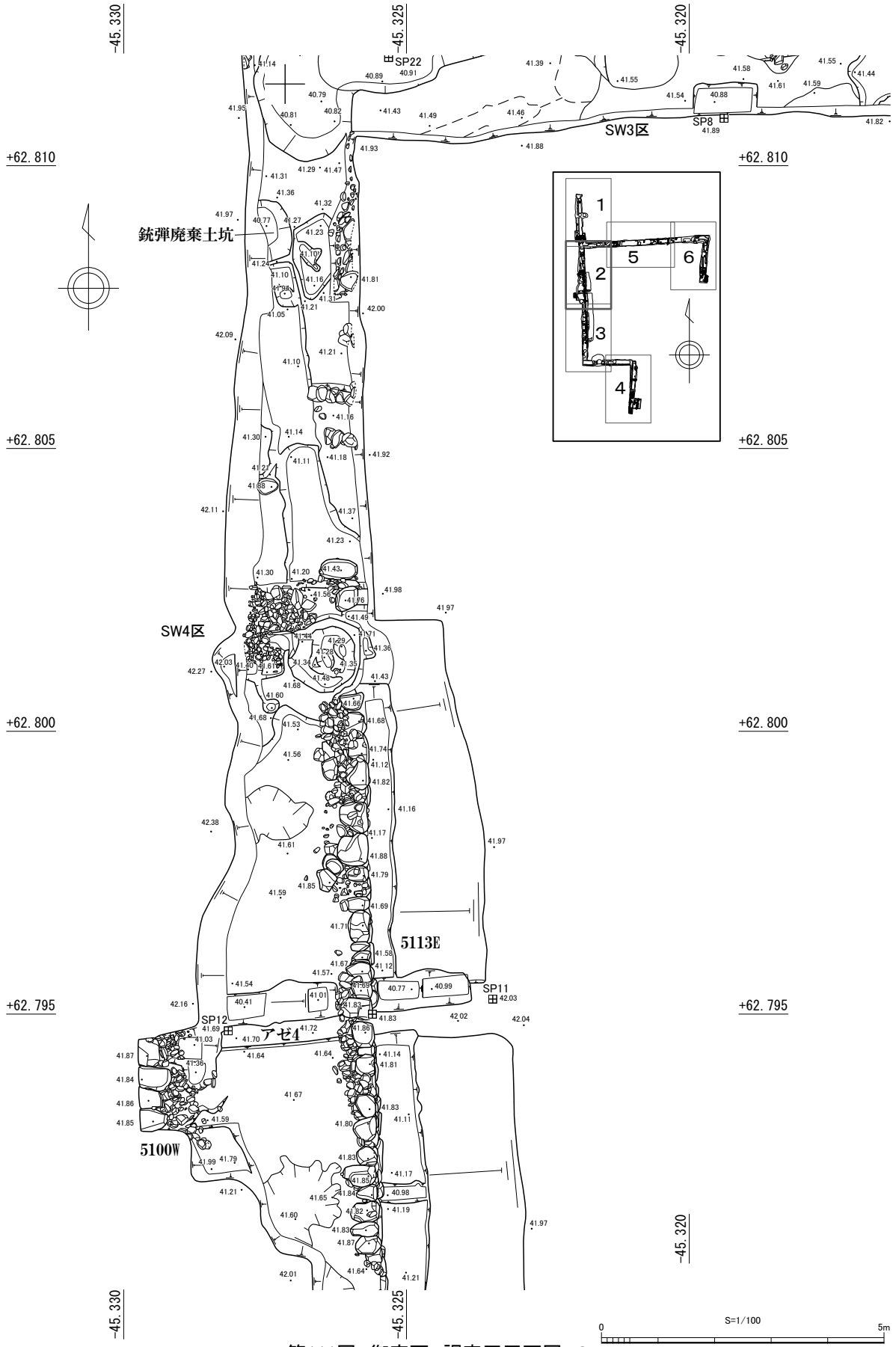


第108図　御宮東　調査区平面図　4

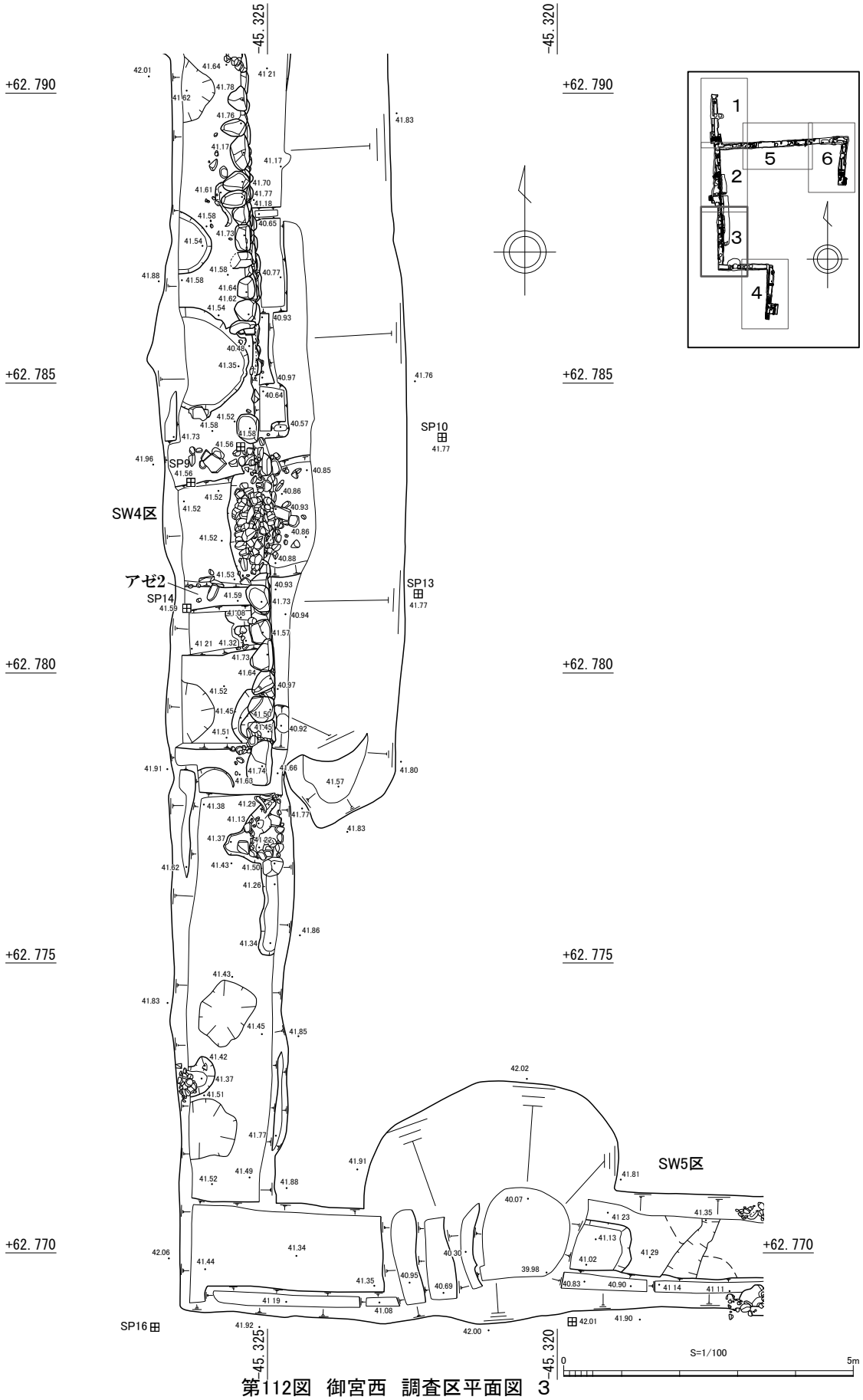
第109図 御宮東 調査区平面図 5



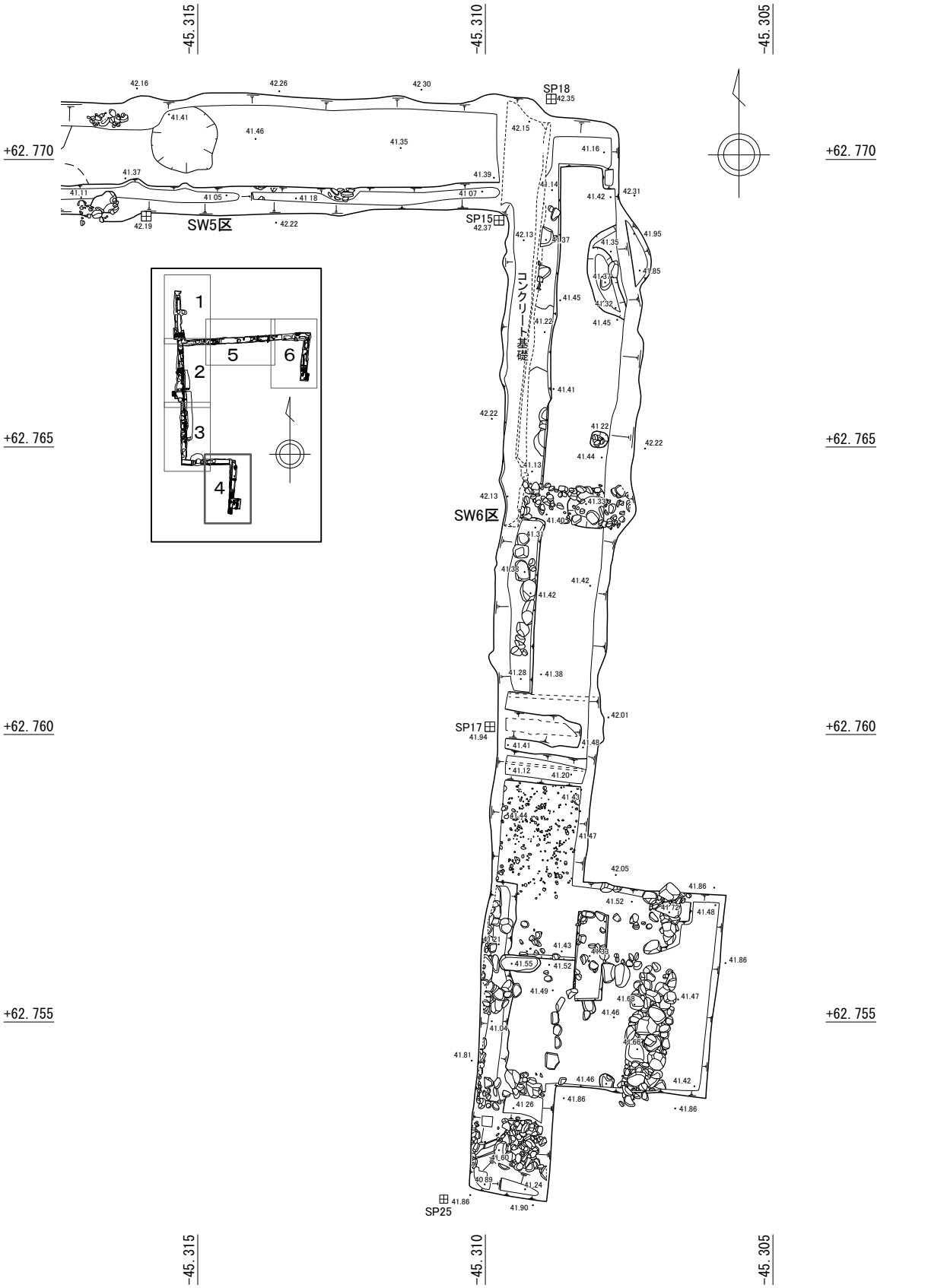
第110図 御宮西 調査区平面図 1



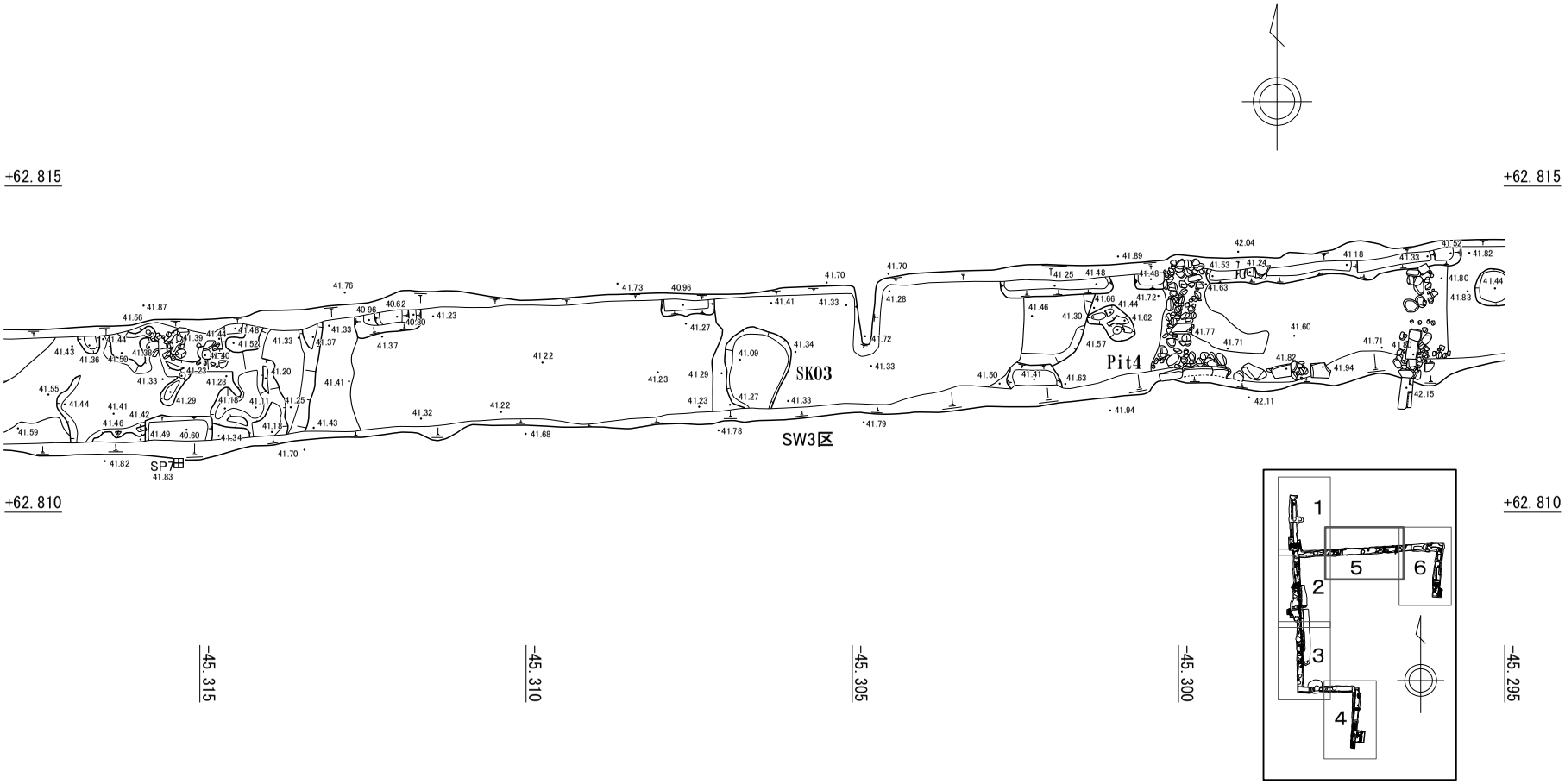
第111図 御宮西 調査区平面図 2



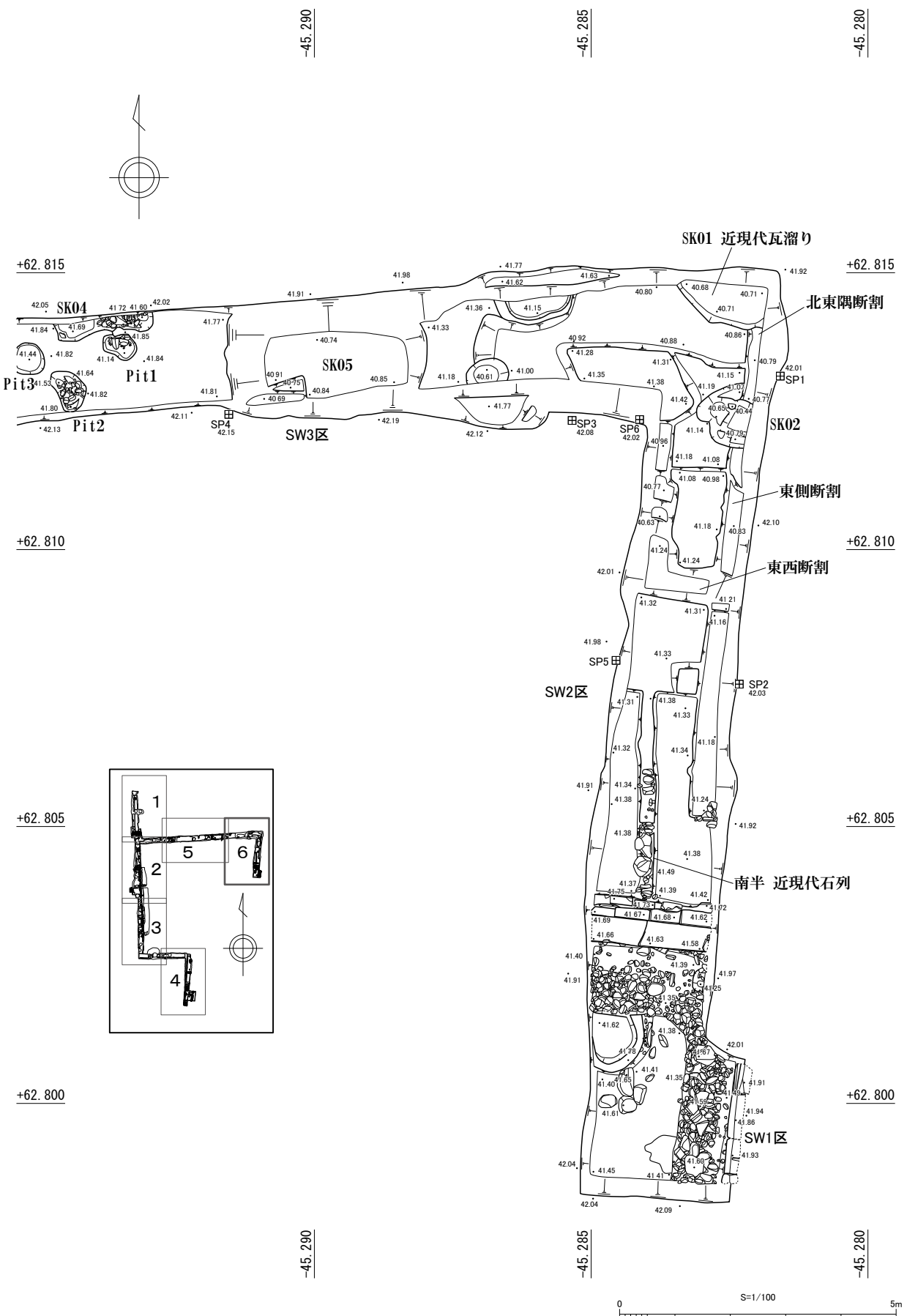
第112図　御宮西　調査区平面図　3



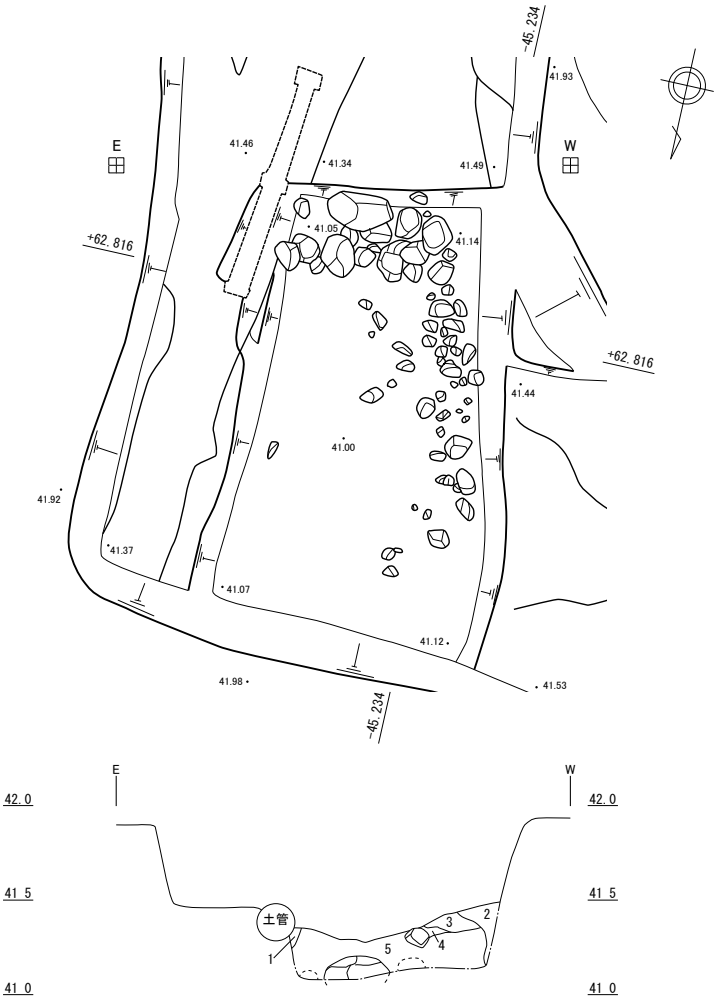
第113図 御宮西 調査区平面図 4



第114図 御宮西 調査区平面図 5

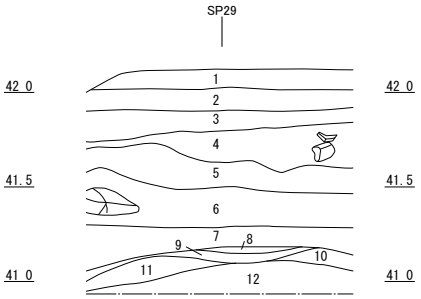


第115図 御宮西 調査区平面図 6



1　褐色土（小礫・粗砂含む）
2　淡黄褐色土（小礫・褐色土ブロック・橙色土粘土ブロック含む）
3　暗褐色土（小礫・黄褐色土ブロック含む）
4　黄褐色土
5　暗褐橙色土（黄褐色粘土ブロック（径約３㎝以内）・小礫・橙褐色ブロック（径約５㎜以内）・10 ～ 30 ㎝位の円礫含む）

河原石敷集中部石敷集中部平面・断面図

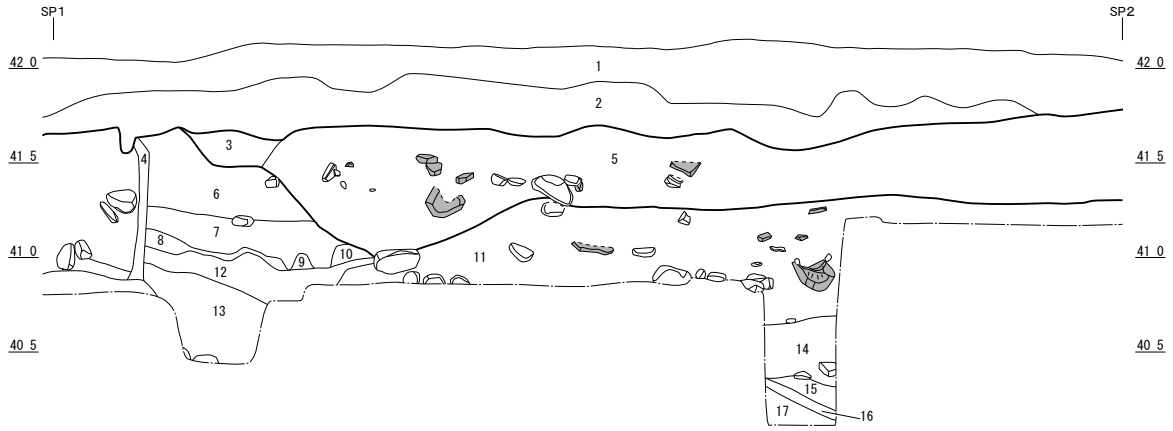


1　灰褐色土（砂質土、コンクリ片、砂利含む）
2　褐橙黄色土（小礫～約５㎝の石・黄褐色粘質土ブロック（径約５㎝以内）含む）
3　淡黄褐色土（砂質土・小礫・褐灰色土ブロック（径１㎝以内）含む）
4　暗褐色土（小礫～５㎝以内の石・炭化物・土器含む）
5　褐黄橙色土（粘質土、小礫少し含む、黄褐色土ブロック（径５㎝以内）・炭化物含む）
6　暗褐灰色土（粘質土、シルト、黄褐色及び黒褐色土がブロック状又は層状に入る）
7　暗黒褐色土（粘質土、シルト）
8　褐黄色土
9　黄橙褐色土（粘質土、シルト）
10　暗黄褐色土（礫混じり、しまりなし）
11　明黄橙色土（粘質土、シルト（地山質））
12　黄橙灰褐色土（小礫～ 10 ㎝以内の石が多く入る、粗砂）

SP29柱状図

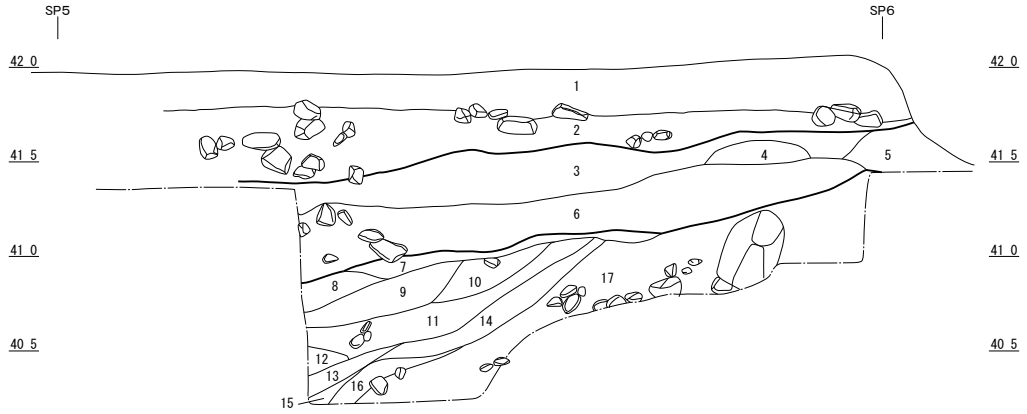
S=1/40
0　1m

第116図　SE3・4区　断面図



1　暗褐黄色土（小礫～ 10 cm以内の礫多く入る）
2　暗黒褐色土（小礫・炭化物含む）
※1・2 近代以降
3　やや暗い褐色土（小礫・炭化物含む）
4　暗褐色土（小礫・粗砂含む）木の根か
5　褐黄灰色土（小礫～ 25 cm以内の礫・炭化物・いぶし瓦片・土師器皿片含む）
6　淡褐灰色土（小礫～ 10 cm位の礫・炭化物含む）
7　やや暗い褐灰色土（小礫含む、炭化物非常に多く含む、黄褐色土ブロック（約 10 cm）点々と含む）
8　黄灰褐色土（小礫多く含む）
9　明黄褐色土（シルト・粗砂・炭化物含む、粘質土）
10　褐黄色土（シルト・粗砂・炭化物含む）
11　やや暗い褐黄灰色土（小礫・炭化物・いぶし瓦片・かわらけ含む）
12　暗褐橙色土（小礫含む・炭化物多く含む）
13　褐黄橙色土（小礫・炭化物含む）
14　褐橙色土（黄色土ブロック（径約 1 cm）少し含む）
15　明橙褐色土（小礫～ 10 cm以内の礫含む）
16　黒褐橙色土（小礫含む）
17　褐色土（小礫含む）

東壁（南北面）断面図

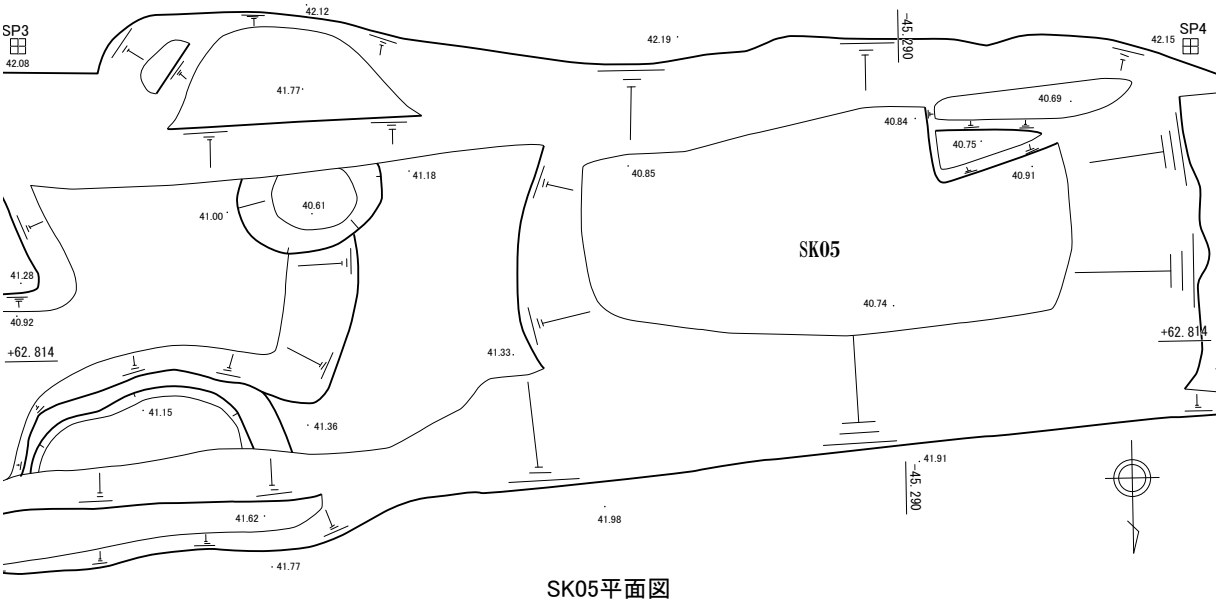


1　褐色土（砂利・小礫～ 10 cm以内の礫・コンクリ片含む）
2　暗褐色土（小礫～ 25 cm以内の礫・黄褐色土ブロック（径約 1 cm以内含む））
※1・2 近代以降
3　暗褐橙色土（小礫・黄褐色土ブロック（径約 1 cm以内）・粗砂含む）
4　黄橙褐色土（小礫含む）
5　明黄褐色土（小礫～ 5 cm位の礫含む、粗砂含む）
6　暗褐橙色土（小礫～ 25 cm位の礫・粗砂・黄褐色粘土ブロック（径 3 cm以内）含む）
7　黄灰褐色土（小礫・粗砂・炭化物含む）
8　暗橙褐色土（小礫・炭化物・黄褐色粘土ブロック（径約 3 cm以内）含む）
9　褐灰色土（小礫・炭化物・黄褐色粘土ブロック（径約 3 cm以内）含む）
10　淡黄橙褐色土（小礫～ 5 cm以内の礫・黄褐色土ブロック（径約 1 cm以内）褐灰色土ブロック（径約 1 cm以内）含む）
11　暗橙褐色土（黄褐色ブロック（径約 5 ～ 10 cm位）・小礫～ 10 cm以内の礫含む）
12　明黄褐色土（小礫～ 3 cm以内の礫・粗砂含む）
13　暗褐色土（小礫・黄褐色土ブロック（径 5 cm以内）含む）
14　褐灰黄色土（褐灰色粘土と褐黄色粘土が主体で構成、シルト・礫混じり）
15　やや明るい黄褐色土（粗砂含む）
16　暗褐橙色土（小礫・粗砂・褐灰色粘土・褐黄色土含む）
17　黄橙褐色土（小礫～ 30 cm以内の礫が多く入る、粗砂）

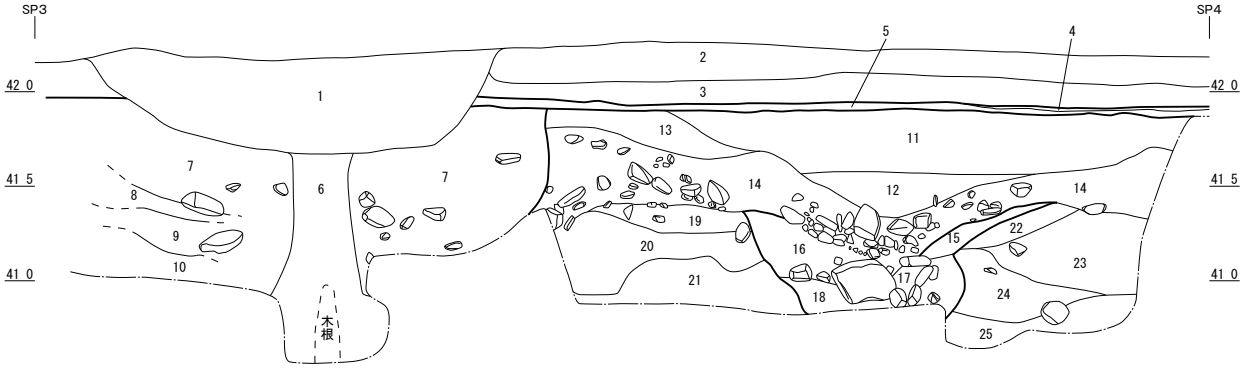
西壁（南北面）断面図

S=1/40
0　1m

第117図　SW2区　断面図

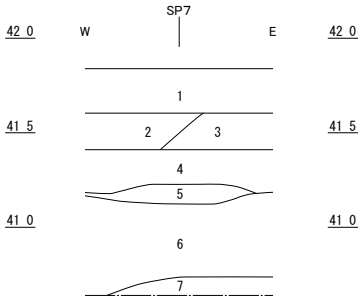


SK05平面図



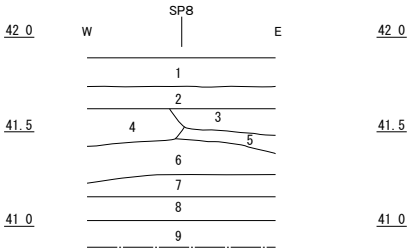
1　褐色土（コンクリート基礎、河原石・小礫入る）撹乱
2　褐色土（コンクリート一面に入る）
3　暗褐灰色土（小礫・戸室片含む、上層に炭化物層入る）
※1 ～ 3 近代以降
4　緑白色凝灰岩粒層（踏み固められ層状になっている）
5　赤色戸室石粒層（踏み固められ層状になっている）
6　暗褐色土（砂質土、しまりなし、炭化物多く含む、木の根）
7　淡黄褐色土（小礫多く含む）
8　暗褐橙色土（小礫含む）
9　黄褐色土（小礫～ 30 ㎝位の礫含む）
10　淡褐黄色土（小礫～ 5 ㎝位の礫含む）
11　褐橙黄色土（小礫～ 10 ㎝以内礫含む、炭化物・明黄褐色土ブロック（径 1 ～ 5 ㎝）含む）
12　やや暗い褐黄橙色土（小礫含む）
13　やや暗い褐灰色土（小礫含む）
14　淡黄灰色土（小礫～ 25 ㎝位の礫が非常に多く入る、同寸法の石が集中して集まる）
15　暗褐灰橙色土（小礫少し含む、明黄橙色土ブロック（約 1 ～ 5 ㎝）含む）
16　黄灰色土（小礫～約 1 ㎝位の礫が主体になって構成）
17　灰黄褐色土（小礫・20 ㎝位の礫を含む）
※15 ～ 17 SK05 覆土
18　黄灰褐色土（小礫～約 1 ㎝位の礫が主体になって構成）
19　灰橙色土（小礫～ 5 ㎝位の礫含む）
20　橙灰褐色土（小礫～ 10 ㎝位の礫含む）
21　明黄褐色土（小礫・褐色土ブロック（径約 5 ㎝）含む）
22　褐橙色土（小礫含む）
23　褐灰色土（小礫・黄色土ブロック（径約 5 ㎝）含む）
24　明黄灰色土（小礫含む）
25　灰黄色土（小礫～ 3 ㎝位の礫が主体）

南壁（東西面）断面図



1　褐色土（小礫含む）
2　やや暗い褐黄色土（小礫含む）
※1・2 近代以降
3　黄褐色土（粘質土、シルト、細かい褐色土ブロック含む）**整地土か**
4　明黄褐色土（粘質土、シルト、褐色土）
5　極暗褐橙色土（明黄色粘土ブロック（径約 5 ㎝）、シルト、粘質土含む）
6　極明黄褐色土（褐色土ブロック（径約 5 ㎝以内）、シルト、粘質土含む）
7　極暗褐色土（粘質土、シルト、黄褐色土ブロック含む）

南壁SP7柱状図



1　褐色土（小礫含む）**近代以降**
2　やや暗い褐黄色土（小礫含む）**整地土か**
3　黄褐色土（粘質土、シルト、細かい褐色土ブロック含む）
4　褐灰橙色土（小礫～ 3 ㎝以内の礫含む）
5　褐橙灰色土（粘質土、シルト）
6　黄橙褐色土（粘質土、シルト）
7　極暗褐橙色土（シルト、黄褐色土層状に入る、粘質土）
8　黄灰褐色土（シルト、褐色土層状に入る、粘質土）ほぼ水平堆積　**整地土か**
9　黒褐色土（シルト、粘質土、黄褐色土ブロック（径約 1 ㎝）含む）

南壁SP8柱状図

S=1/40
0　1m

第118図　SW3区　断面図

た。覆土中には小礫を中心とし20㎝程度までの礫を多く含んでいる。時期や性格等は不明である。

SW4区 （第119 ～ 122図）

郭の西辺で南北に延びる調査区である。調査区と同一方向に延びる、郭の内側を向いた石垣5113Eを検出し、標高41.0 ～ 41.2ｍのレベルで整地層を確認した。この整地層は、石垣5113Eの根石部分を覆っており、この整地層下から16世紀代の土器片が出土していることから、Ⅲ層もしくはⅣ層の可能性がある。その他に、近代以降ではあるが、旧陸軍が所持していた銃器に関連する器具を廃棄した土坑を確認した。

銃弾廃棄土坑 SW4区の北端部において南北約１ｍ、深さ約0.5ｍを測る土坑を検出した。調査区の西壁にかかっており全体形状は確認できなかったが、隅丸長方形を呈するとみられる。覆土中からは、機関銃の演習用銃弾や、それらに関連する革製品の一部、金具等が出土した（詳細は本章第３節を参照）。硬質陶器の小皿や国民食器の皿等も出土しており、旧陸軍が駐在していた昭和20年までに、一括廃棄されたとみられる。

石垣5113E （第119､122図） 郭の西縁辺部にある内向きの石垣である。長さ約22ｍ､高さ70㎝を測る。現状で根石を含め４段の石積みを確認した。石垣の南端を０ｍとして、北に約４ｍから６ｍの範囲は石積みが切れて、かわりに円礫が集中する。７ｍから8.4ｍにかけて石積みは再び現れるが、根石の高さが一段分高くなっている。石垣構築以前の遺構や地形の影響を受けているようにもみえる。また、23ｍ付近の石垣背後にも1.5ｍ四方に円礫が集中するが、その脇に石垣を寸断して直径約80㎝、深さ約40㎝の土坑が掘り込まれている。円礫の集中はこの土坑が掘削された際に裏込めとして入っていた栗石がよけられて、残置された可能性がある。土坑の時期・性格は不明である。

石垣に使用される石材は、河川転石を主体としており、石質も多様である。戸室石系の河川転石も使用され、その使用率は全体の約４割弱である。

石材の寸法は高さが20 ～ 40㎝、横幅は30 ～ 60㎝と、やや横長形状の石材が中心となる。高さは比較的均一だが､横幅はややまとまりに欠ける。また､高さ､幅ともに60㎝を越える大型の河原石が点々と配置されている点が特徴的である。石積みの西端から４ｍまでは石材の寸法が高さ30 ～ 40㎝、横幅40 ～ 50㎝とほぼまとまっている。石材の控えの長さは、35 ～ 60㎝となり、面が横長傾向にある石材は控えの長さが１：１に近い比率となっている。

石積みは、上述の西端から４ｍ地点までは、石材の寸法がまとまっているので、面を横長に置いた布積みである。残りの石積みは、石材の寸法がややばらつくため乱積みとなる。大多数が小口部分を面としているが、１ｍ程度の間隔で、石材を横置きして積んでいる。13ｍ地点では幅80㎝もある大型の石材の平らな面を見せるように据えられている。

石材加工は、戸室石系石材では面整形もごく一部にとどまり、割石としての意識が認められるものは、赤戸室石と青戸室石とも２点ずつ、矢割り痕を残すものは１石にとどまる。戸室石として石切り丁場から選択されてきたというより、石垣石材として手頃な寸法・形状・強度のものを河川周辺から採集した可能性が高い。青戸室に関しては表面風化が著しく、淡黄～淡緑色となる。非戸室系の円礫(河原石)は、正面(前面)をはつりとるものもある。但し、間詰石は破片が多い。

石垣の背後は大部分が礫混じり土で、石尻を中心として部分的に円礫が集中して入る状況で、背後の掘方内が基本的に栗石層である5120Nや5100Wとは異なる。

石垣背後の盛土は、西縁辺に築かれた石垣5100Wの掘方により一部削平される。９～ 25層は10 ～ 20㎝の厚さでほぼ水平に堆積しているが、この一群は東から西側に向かって約50㎝の厚さで斜めに堆積している盛土層上に盛られている。この斜めの層は5113Eの石積み背後の礫混じり層と互層状に堆積していることから、5113E構築時の土と考えられる。石垣前方では、最下段の石材にむかって下がる掘方状の40層がみられ、背後の28･29層と同じ石垣構築時の土と考えている。石垣前面においては、

標高約41.1ｍで掘方状の40層と5113Eの根石を覆うように面的に広がる整地層（35 ～ 38層）を確認している。この整地層の下から16世紀代の土器片が出土している。30層は東側から西側に向かって斜めに下がる堆積にみえる土だが、近代以降に東側から削平を受けたためこのような堆積状況となっていると思われる。

石垣5100W（第119、120図） 石垣5110Wは郭西縁辺に現存する鉢巻石垣で、本調査では裏込め層の一部を検出し、その構造を確認した。長さ約59m、高さ2.9ｍを測る。北側は現状で1段分しか石材は見えていないが、南西隅角部に向かって徐々に石積みが見えるようになり最大で６段までが地表面より確認できる。石材は戸室石を使用し、正方形又はやや横長の長方形の粗加工石材を布積みする。石垣の北端を０ｍとして南に向かって38m地点から石材に自然石が混じり、規格も不揃いとなり、乱積みとなる範囲がある（38 ～ 42m付近）。42m付近からは、再び布積み石垣となるが、これより南側は近世段階では甚右衛門坂門があった範囲となるため、近代以降に付け足した石垣である。粗加工石を中心とするが、切石材が混入する点が発掘調査地点周辺の石積みと異なる。また、宝暦３年（1753） ９月に東照宮西側の柵下土留石垣、修復完了するという記事があるが（第２章第４表参照）、5100Wの可能性もあり、38m付近の自然石混じりの乱積み石垣がそれ以前の姿を残している可能性もある。

裏込め層の上面を検出した位置は13mから14.5mにかけての４石分の範囲である。表土層を取り除くと、石材の上面及び背面の栗石層が顔をだす。石材上面はノミによりやや粗く均されている。石垣の掘方は石積み１段目の背後で約80㎝を測るが、それ以下では50㎝以下となり、急激に狭くなる。掘方内は握り拳大から人頭大の河原石が入る。

5100Wの掘方は現状の石垣が築かれる以前の整地土層（Ⅱb層）を掘り込んでいる。

SW5区 （第123図）

東西方向に延びる調査区である。Ⅰ層は東側で42.1m、西側で41.6ｍと西側で深くなる。標高41.4ｍで均一な砂層が広がるが、この砂層は下の遺構の窪みに合わせて落ち込む場合もあり、下の遺構が埋め戻されたと同時に面的に整地したため、埋戻し土の沈下と同じ形状で整地層も落ち込んだ可能性がある。東側では厚さ10㎝程度で均一に残るが、西側にいくにつれて同層はみえなくなる。近世、近代以降においても、砂層が切れるあたりで建物などの上部が変化することとも関係があるのかもしれない。また、砂層にパックされている層序にあたる38層が一段高くなっている。郭の西辺にむかって高くなるのは石垣背後に土塁状の高まりがあった可能性がある。

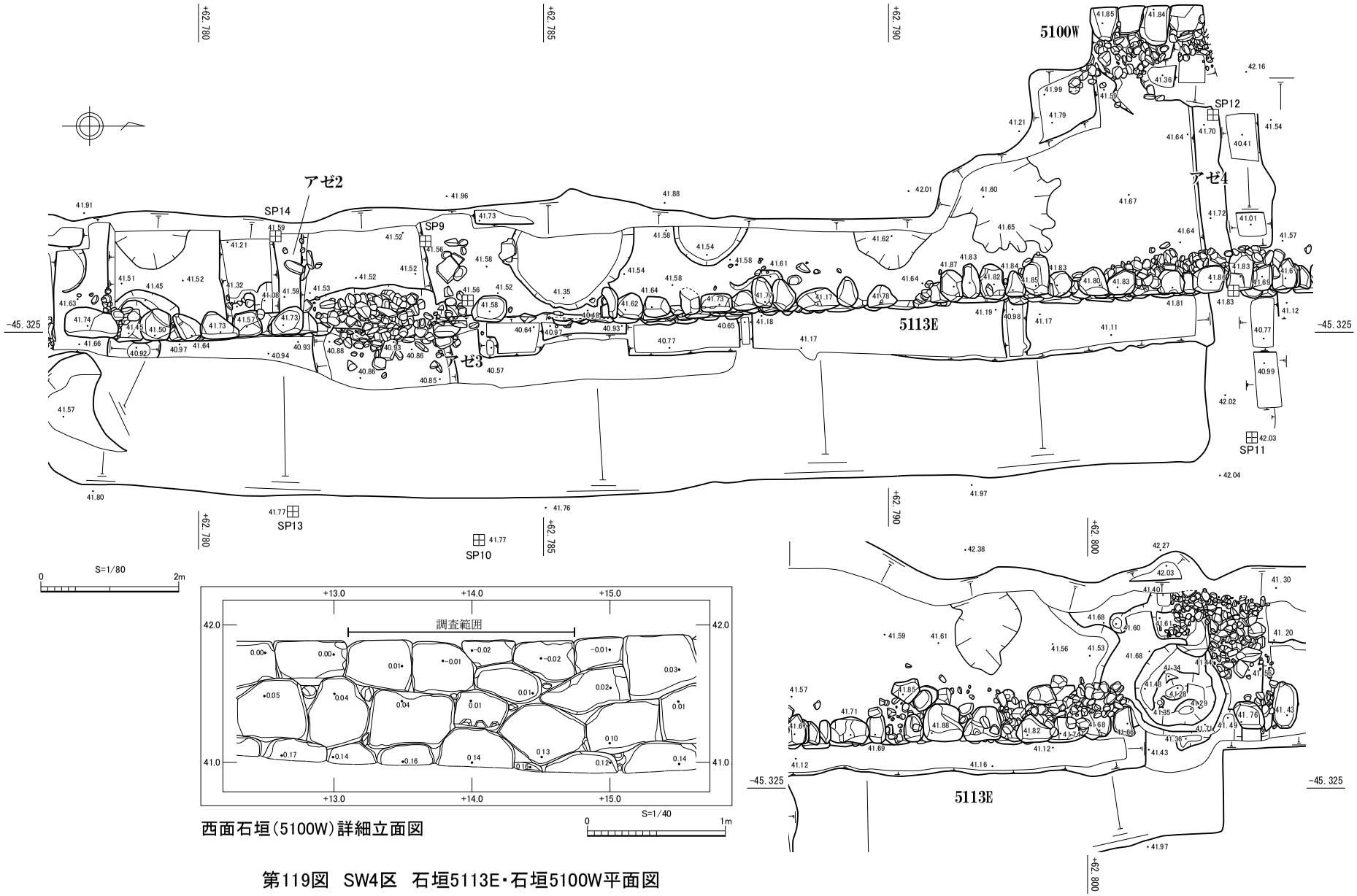
この周辺では、地表面から約２m掘り下げを行ったが、地山面は確認できなかった。

SW6区 （第124図）

北側で地下埋設物や建物基礎によりⅠ層は標高41.4m付近まで下がっているが、南側では標高41.6 ～ 41.9ｍである。コンクリート管や鉄管の掘方をパックしており、建物のコンクリート基礎やその直下の河原石層に伴った盛土層とみられる。

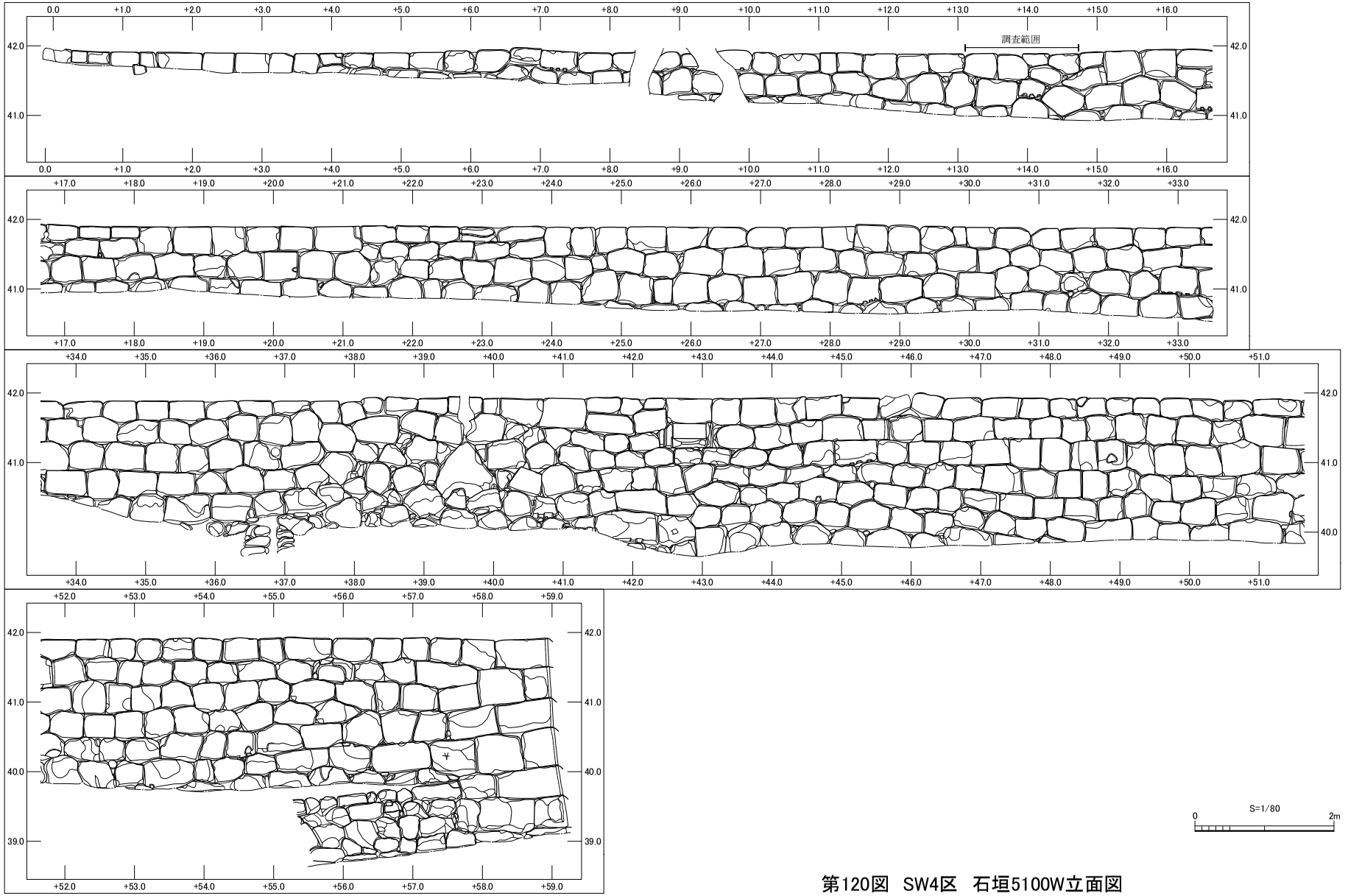
調査区の南側では標高41.4ｍで明黄褐色砂質土の整地層（32層）を確認した。SW5区において確認した砂層24層と同一の層である。SW6区南端から約５ｍの地点において、東西1.5m、南北２ｍの範囲で32層直下に砂利敷きの硬化面が広がっていることを確認した。調査区の南側では32層も砂利面も見られなくなる。32面よってパックされる整地層や遺構とみられる掘り込みも確認された。それら規模や性格は不明であるが、17世紀初頭の土師器皿が出土している。

調査区南端部にある栗石が密に詰まった掘り込みは、Ⅰ層にパックされるが、その他の層を掘り込んでおり、19世紀代の遺物が出土している。明治32年（1899）の「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」では、御宮に病院がつくられており、ちょうどその厠付近であることがわかる。近世段階では御宮への入口となる門がつくられていたが、これだけの規模の掘り込みを持つとすれば、厠の下部施設の抜き取りの可能性が高い。

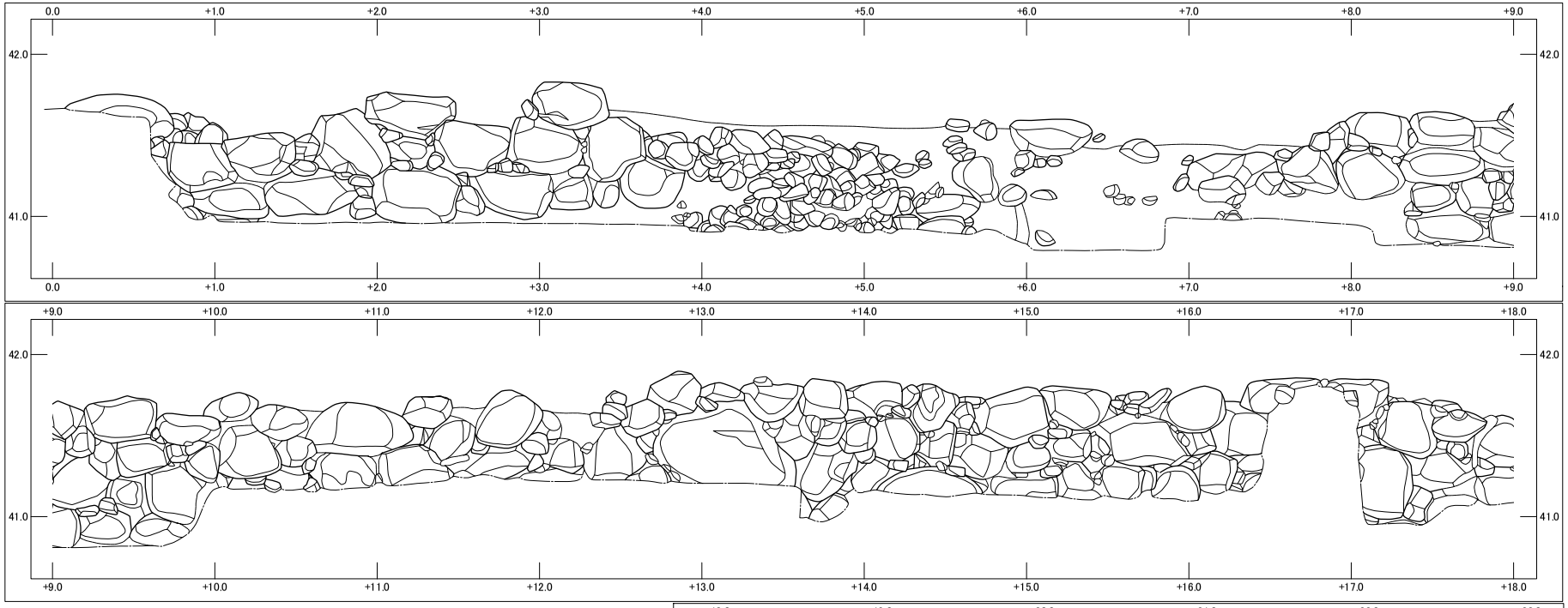


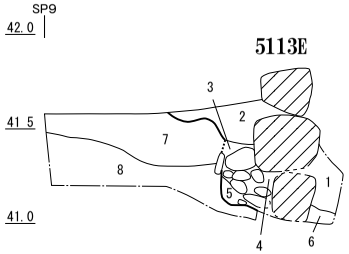
西面石垣(5100W)詳細立面図

第119図　SW4区　石垣5113E・石垣5100W平面図



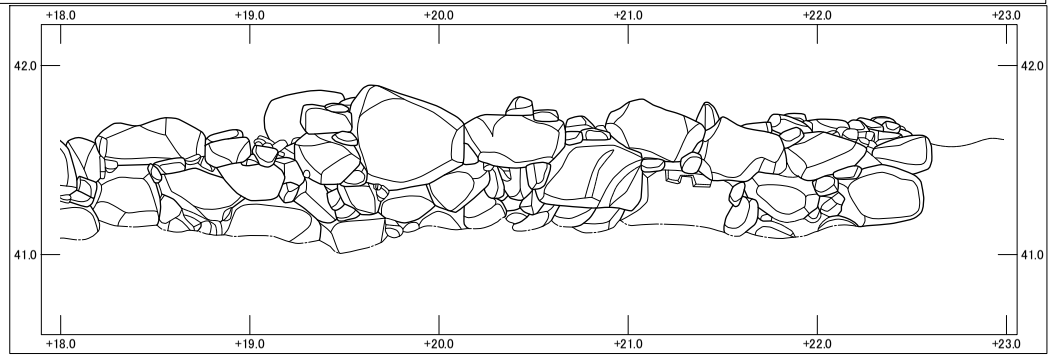
第120図　SW4区　石垣5100W立面図





アゼ2南壁断面図

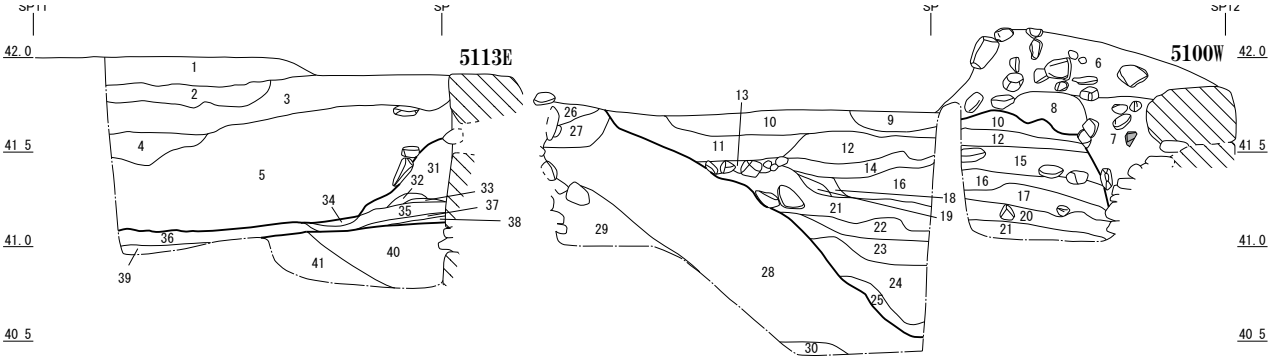
1　暗褐色砂質土　撹乱土
2　暗褐色粘砂質土（暗い色調、黄褐色粘土ブロック混じる）　撹乱の可能性あり
3　暗褐色砂質土（しまり悪い、粒子状の小ブロック混じる）
4　暗灰褐色砂質土（栗石間に混入した砂質土か、しまり悪い）
5　暗灰黄褐色粘砂質土（7より暗い色調、粘性あり）
3～5石垣5113E掘方内埋土
6　黄褐色粘砂質土（7に類似するが別層、黄褐色粘質土ブロック目立つ、石垣石の下部を埋めている）
7　暗黄褐色砂質土（黄褐色土ブロック（1㎝大）・黄褐色小粒子混じる）
8　黄褐色粘砂質土（黄褐色砂質土・黄褐色粘土ブロック・小礫等で構成される）



石垣5113E立面図

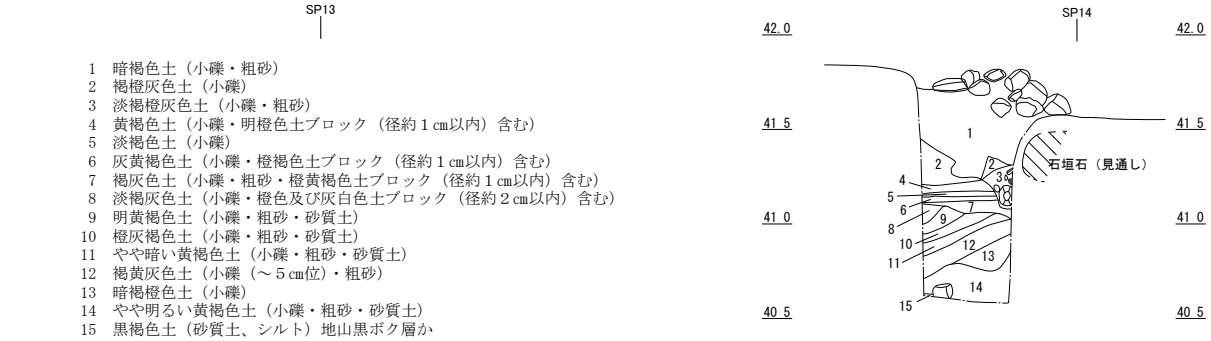
S=1/40
0　1m

第121図　SW4区　石垣5113E立面図・アゼ断面図



1　暗褐灰色土（小礫・根が多く入る）
2　暗褐橙色土（小礫・橙黄色粘土ブロック（径約５cm以内）含む）
3　橙褐色土（小礫・粗砂・橙色土ブロック（径約１cm以内）含む）
4　暗橙褐色土（小礫～小石・粗砂）
5　暗褐色土（小礫～小石・粗砂）
※1 ～ 5 近代以降
6　淡褐色土（小礫・粗砂・釉薬瓦・約 20 cm以内の河原石含む）
7　灰褐色土（小礫・粗砂・いぶし瓦・約 10 cmの河原石含む）
8　淡褐灰色土（小礫・小石・戸室石片含む）
※6 ～ 8 石垣 5100W 掘方
9　明黄褐色土（小礫・小石・黄色及び橙色粘土ブロック（径約１cm）含む）
10　淡褐色土（小礫）
11　やや暗い褐灰色土（小礫）
12　淡黄橙褐色土（小礫・黄色土ブロック（径約２cm以内）含む）
13　やや暗い褐灰色土（小礫・約 10 cm以内の河原石含む）
14　やや暗い褐橙色土（小礫･黄褐色土及び橙褐色土ブロック（径約１cm以内）含む）
15　灰橙褐色土（小礫・粗砂・約 10 cmの河原石含む）
16　淡灰橙褐色土（小礫）
17　やや明るい褐橙色土（粘質土、シルト、小礫）
18　暗橙褐色土（小礫）
19　橙褐色土（小礫）
20　やや明るい黄灰褐色土（小礫、10 cm以内の河原石）
21　淡橙褐色土（小礫、粗砂）
22　暗褐橙灰色土（小礫）
23　淡橙灰色土（小礫）
24　暗灰褐橙色土（小礫･黄褐色土及び橙褐色土ブロック（径約１cm以内）含む）
25　暗灰黄褐色土（小礫・黄褐色土ブロック（径約１cm）含む）
26　褐灰色土（小礫）
27　やや明るい橙褐色土（小礫・橙色粘土ブロック（径約１cm以内）含む）
28　暗褐灰色土（小礫・黄褐色土及び橙褐色土ブロック（径約１cm）含む）
29　黄褐色土（小礫・褐色土ブロック（径約１cm）含む）
30　暗褐色土（小礫・約 10 cm以内の河原石含む）
31　明黄褐色土（小礫・粗砂・褐色土が層状に東上から西下に帯状に入る）
32　淡黄灰色土（小礫・粗砂）
33　明黄褐色土（シルト）
34　淡灰褐色土（砂質土、粗砂、小礫）
35　明黄灰色土（小礫・橙黄色土（径約 0.5 mm以内）含む）
36　淡灰褐色土（小礫・粗砂・橙褐色土ブロック（径 5.0 mm以内）含む）
37　淡灰橙褐色土（砂質土、粗砂、小礫）
38　明灰黄褐色土（砂質土、粗砂、小礫）
39　橙灰褐色土（小礫、粗砂）
40　やや暗い褐灰橙色土（小礫）
41　やや明るい明灰褐色土（小礫・橙褐色土ブロック（径約５cm以内）含む）
※26 ～ 29, 40 石垣 5113E 構築に伴う埋土、35 ～ 37 石垣 5113E 前面整地土

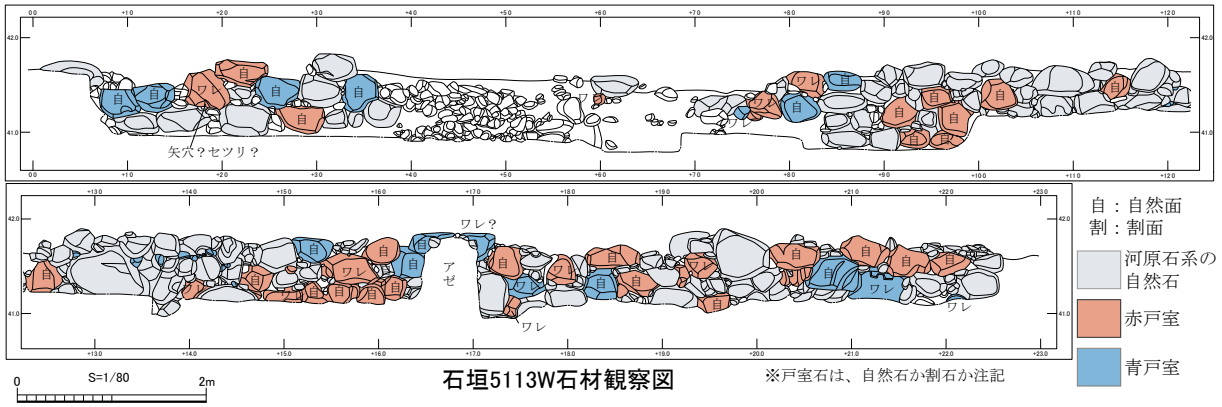
アゼ4南壁（東西面）断面図



1　暗褐色土（小礫・粗砂）
2　褐橙灰色土（小礫）
3　淡褐橙灰色土（小礫・粗砂）
4　黄褐色土（小礫・明橙色土ブロック（径約１cm以内）含む）
5　淡褐色土（小礫）
6　灰黄褐色土（小礫・橙褐色土ブロック（径約１cm以内）含む）
7　褐灰色土（小礫・粗砂・橙黄褐色土ブロック（径約１cm以内）含む）
8　淡褐灰色土（小礫・橙色及び灰白色土ブロック（径約２cm以内）含む）
9　明黄褐色土（小礫・粗砂・砂質土）
10　橙灰褐色土（小礫・粗砂・砂質土）
11　やや暗い黄褐色土（小礫・粗砂・砂質土）
12　褐黄灰色土（小礫（～５cm位）・粗砂）
13　暗褐橙色土（小礫）
14　やや明るい黄褐色土（小礫・粗砂・砂質土）
15　黒褐色土（砂質土、シルト）地山黒ボク層か

アゼ3北壁（東西面）断面図

S=1/40
0　1m

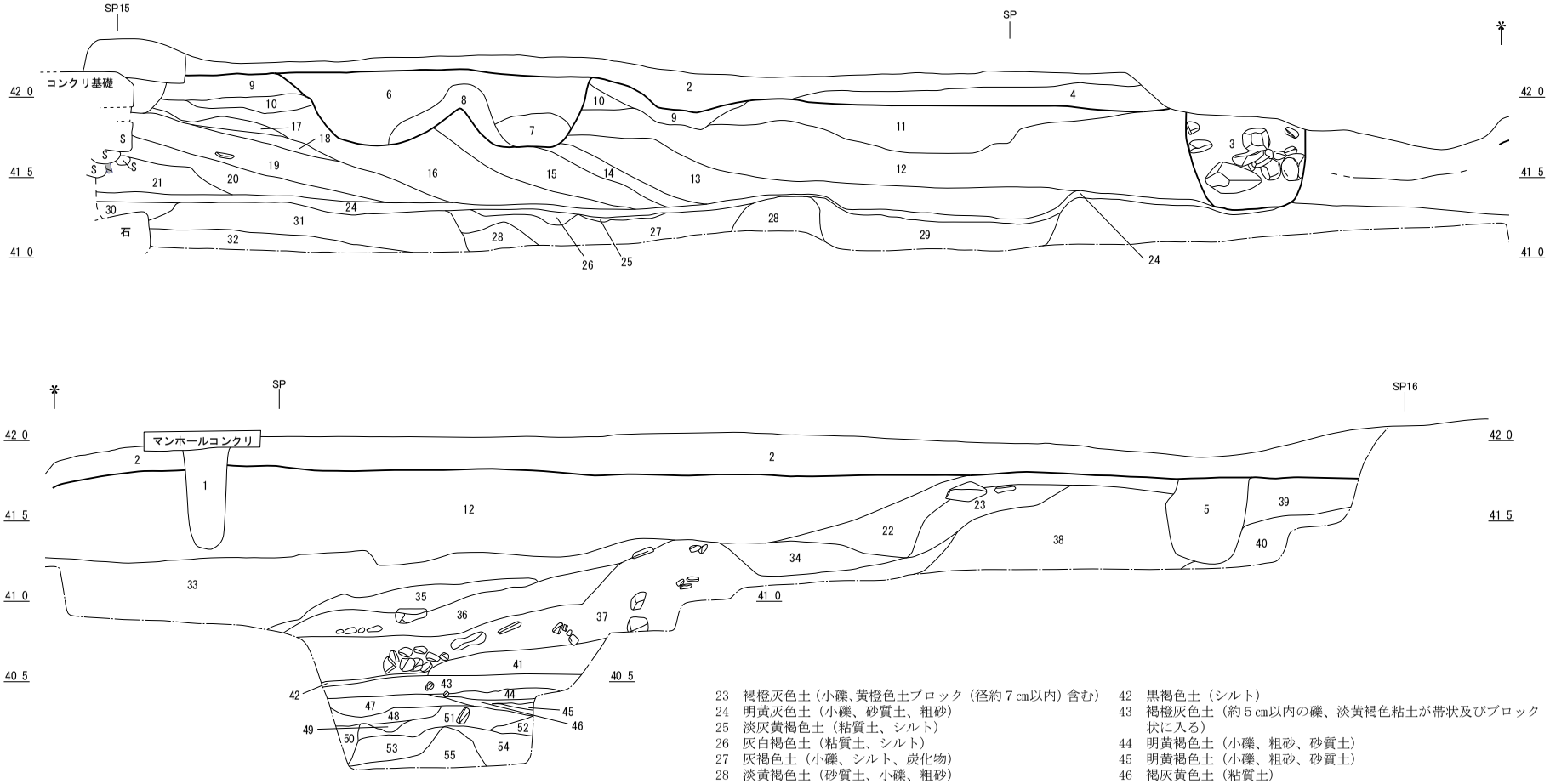


0　S=1/80　2m

石垣5113W石材観察図

※戸室石は、自然石か割石か注記

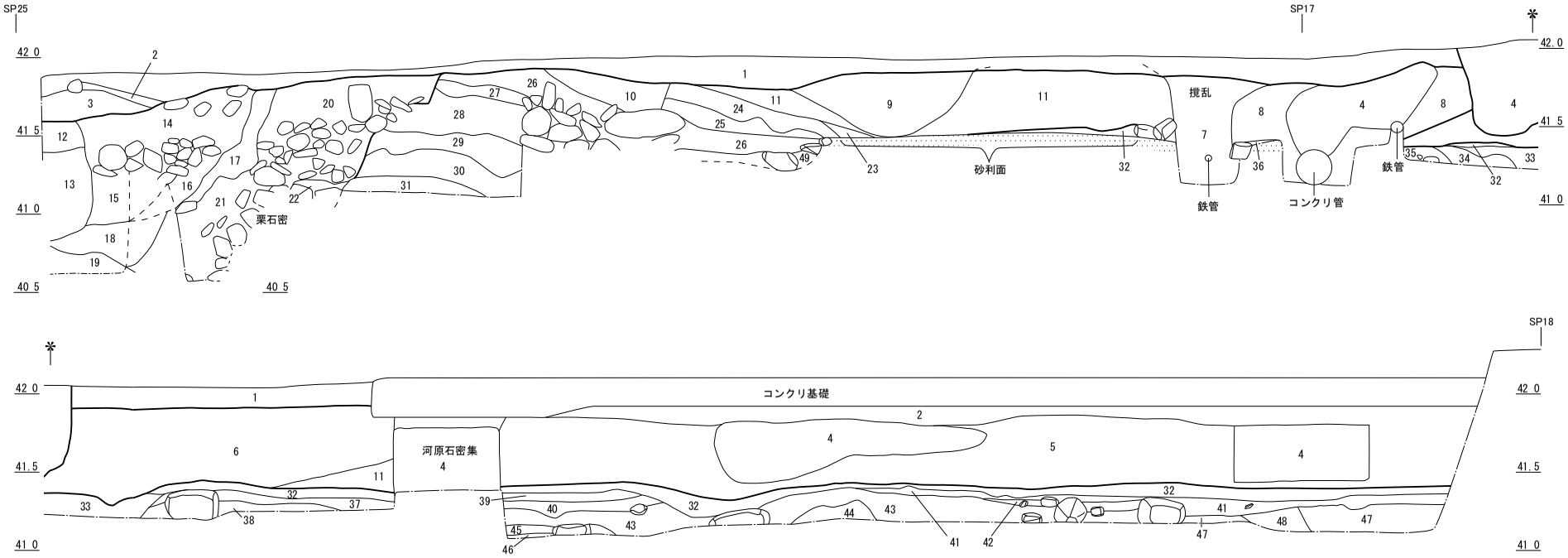
第122図　SW4区　石垣5113Eアゼ断面図・石材観察図



1 褐色土（礫・プラスチック含む）
2 淡褐色土（小礫・河原石・コンクリート含む）
3 淡黄色土（河原石多く含む、コンクリート基礎の下部）
4 褐黄色土（小礫・炭化物含む）
5 褐色土（礫・炭化物・釉薬瓦含む、しなりなし）
6 橙灰褐色土（小礫）
7 黒灰褐色土（シルト、粘質土）
8 黄褐灰色土（小礫）
9 暗褐橙灰色土（小礫）
10 淡黄橙褐色土（小礫）
11 暗褐色土（シルト、褐黄色土を帯状に含む）
12 極暗褐色土（小礫～ 10 cm以内の河原石）
13 やや暗い褐色土（小礫～ 5 cm以内の礫、粗砂）
14 淡黄褐色土（砂質土、小礫、粗砂）
15 暗灰褐色土（小礫）
16 淡灰褐色土（小礫～ 20 cm以内の礫）
17 暗褐黄色土（小礫、粗砂）
18 淡褐黄色土（小礫、粗砂）
19 暗灰褐色土（小礫・粗砂・陶磁器含む）
20 暗灰橙褐色土（小礫、粗砂）
21 やや淡い暗褐色土（小礫）
22 暗褐灰色土（小礫～ 30 cm以内の河原石含む）
23 褐橙灰色土（小礫､黄橙色土ブロック（径約７cm以内）含む）
24 明黄灰色土（小礫、砂質土、粗砂）
25 淡灰黄褐色土（粘質土、シルト）
26 灰白褐色土（粘質土、シルト）
27 灰褐色土（小礫、シルト、炭化物）
28 淡黄褐色土（砂質土、小礫、粗砂）
29 やや暗い褐灰色土（小礫、粗砂、炭化物）
30 明灰白色土（粘質土、シルト）
31 褐灰白色土（小礫、粘質土）
32 淡褐色土（小礫）
33 黄橙褐色土（小礫～約５cmの河原石、粗砂）
34 淡黄灰褐色土（小礫、小石、炭化物含む）
35 淡灰褐色土（小礫～ 20 cm以内の河原石、粗砂）
36 暗橙褐色土（小礫～ 10 cm以内の河原石）
37 褐橙色土（小礫～ 15 cm位の河原石含む）
38 暗褐橙灰色土（小礫）
39 明黄褐色土（礫、砂質土）
40 明黄橙褐色土（小礫、砂質土）
41 橙褐色土（炭化物）
42 黒褐色土（シルト）
43 褐橙灰色土（約５cm以内の礫、淡黄褐色粘土が帯状及びブロック状に入る）
44 明黄褐色土（小礫、粗砂、砂質土）
45 明黄褐色土（小礫、粗砂、砂質土）
46 褐灰黄色土（粘質土）
47 褐黄灰色土（黄褐土ブロック（径約５cm以内）含む）
48 灰褐黄色土(粘質土､シルト､橙褐色土ブロック（径１cm以内）含む)
49 淡橙褐色土（粘質土、シルト）
50 黄褐灰色土（粘質土、シルト、黄褐色ブロック全体的に含む）
51 橙黄褐色土（橙色土ブロック（直径約５cm以内）含む）
52 暗褐灰色土（粘質土、シルト）
53 極暗褐色土（粘質土､シルト､橙色土ブロック（径１cm以内）含む）
54 暗褐橙色土（粘質土､シルト､橙色土ブロック（径１cm以内）含む）
55 暗灰橙褐色土（粘質土、シルト、橙色土ブロック（径約５cm以内）含む）

S=1/40
0 1m

第123図 SW5区 南壁土層断面図



1 褐灰色土（小礫、粗砂）
2 明黄褐色砂質土
3 黄褐灰色砂質土
4 河原石層（径 20 ㎝以内、コンクリート基礎直下、一部断面に現れている）
5 黒褐色土（小礫）
6 褐色土（礫、河原石、粗砂）
7 やや淡い褐色土（撹乱）
8 灰橙褐色土（小礫、黄褐色粘土ブロック（径３㎝以内））
9 黒褐色土（シルト、小礫）
10 暗褐色土（小礫）
11 黒褐色土（小礫）
12 暗褐色粘砂質土（13 層に比べやや黄褐色味が強い）
13 暗褐色粘砂質土（黒褐色粘質土ブロック混じる）
14 褐灰色砂質土（もろい、礫含む）
15 暗黄褐灰色粘砂質土（21 層に類似するが、やや明るい）
16 暗褐色粘砂質土（黒褐色粘質土ブロック混じる）
17 黄灰褐色砂質土（黄褐色岩盤小粒子混じる）
18 黄灰褐色砂質土（黄褐色岩盤小粒子及び小礫を顕著に含まない）
19 暗褐灰色粘質土（粘性やや強く、小礫あまり混じらない）
20 褐灰色砂質土（もろい、礫含む（栗石間につまっている））
21 暗灰褐色砂質土（16 層に比べやや灰褐色味強い）
22 暗褐色粘砂質土（黄褐色岩盤小粒子含む）
23 明黄褐色土（小礫、粗砂）
24 暗黄褐色土（小礫・灰褐色土所々含む）
25 黄褐色土（小礫、粘質土）
26 淡黄灰色砂質土（北側、褐灰色味強くもろい）
27 暗黄褐色粘砂質土（黄褐色粘質土ブロック主体、黒褐色粘質土ブロックやや混じる）
28 暗灰褐色粘砂質土（黄褐色粘質土ブロック、黄褐色岩盤小礫マーブル状に混じる）
29 暗褐色粘砂質土（黒褐色粘質土ブロック多く混じる、黄褐色粘質土ブロックやや混じる）
30 黒褐色粘質土（灰黄褐色粘質土ブロックやや混じる、黒ボク系の土質主体）
31 黄褐色粘砂質土（黒褐色土縞状に混じる）
32 明黄橙褐色土（小礫、粗砂、砂質土）
33 黄灰白色土（粗砂、褐色土ブロック（径約５㎝）小礫）
34 明黄灰色土（粗砂、小礫）
35 暗褐灰色土（小礫、粗砂）
36 やや暗い黄灰褐色土
37 灰白褐色土（シルト、粘質土）
38 褐橙色土（小礫）
39 淡灰白褐色土（小礫、炭化物）
40 淡黄褐色土（小礫、炭化物）
41 淡褐色土（小礫）
42 淡褐橙色土（小礫）
43 淡灰褐色土（小礫、炭化物、５㎝以内の石）
44 灰白褐色土（小礫、橙褐色粘土ブロック（径約５㎝以内））
45 褐灰橙色土（小礫）
46 極暗褐色土（小礫・黄橙色粘土ブロック（径３㎝位）含む）
47 灰橙白色土（粘質土、シルト）
48 灰褐色土（小礫）
49 灰褐色土（20 ㎝以内の礫、粗砂）

S=1/40
0 1m

第124図　SW6区　西壁(南北面)断面図

NS1・NS2区 （第125 ～ 134図）

両調査区とも、北側の藤右衛門丸との境にある斜面上に延びる調査区である。地表面から約50㎝までがⅠ層とした近現代層で、標高にして約41.8ｍを測る。主な遺構として、両調査区の南側で石垣5120N、藤右衛門丸側に下った北側では空堀を確認した。NS2区の斜面地では、空堀の埋め立て後から斜面地になるまでの変遷が確認できた。

まず、東照宮造営を契機とした造成が行われた。北側の空堀は埋め立てられ平坦面の造成がそれにあたる。その後は徐々に南側（御宮側）からの流土等により傾斜地となっていくが、堀の埋立てから平坦面の造成、流土による平坦面の埋没と石段の設置に至るまでは大別のⅢ層に該当する。遺物の出土状況から更に３段階に細分可能で、Ⅲ-a ～ c層とした。石段の廃絶以降、旧陸軍期までの斜面への流土層は大別のⅡ層に該当する。

平坦面

御宮の北辺に築かれた石垣5120Nの前面には、幅２ｍほどの犬走状の平坦面が設けられるが、更に藤右衛門丸に向かって一段下がった､藤右衛門丸と同じレベル（約38.5m）でも平坦面が造成される。この平坦面はそれ以前にあった空堀を埋立てし、造成されたものである。NS1区では、石垣前面の犬走上の平坦面がやや不明瞭だが、NS2区では明瞭に確認できる。NS2区では藤右衛門丸と同一レベルの平坦面から緑色凝灰岩製の石瓦が出土している（第131図)。緑色凝灰岩は笏谷石と呼ばれる現在の福井県福井市足羽山周辺で採掘された石材とみられる。鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦・丸瓦・平瓦等で構成されており本瓦葺の屋根を構成すると推測できる（本章第３節参照)。鬼瓦には三葉葵文が刻まれていることや、出土地点からみても、東照宮に関連する屋根瓦と考えられる。

ほぼ完形品の丸瓦や平瓦の一部の出土状況は、現地に集積状態であったものが崩れたかのような状態であった。この層は17世紀中葉の遺物を含んでおり､東照宮造営の寛永20年（1643）からあまり経っていないタイミングで埋まったものとみられる。Ⅲ-c層（27・28層）とした。

その後徐々に斜面からの流土によって平坦面が埋まっていくが、燻瓦が石瓦を面的に覆うように広がる。23 ～ 25層をⅢ-b層とした。Ⅲ-b層からは17世紀後半の遺物が含まれており、特にⅢ-c層との間に17世紀後半の土師器皿が正位で重なった状態で出土している。

石段（第134図） NS2区においては、Ⅲ-b層の上位に、緑色凝灰岩製の棟石を雁木として転用した簡易な石段がつくられ、御宮と藤右衛門丸をつなぐ通路として利用されていた。石段を据えた基盤である21・22層をⅢ-a層とした。この層中からは、廃棄されたとみられる大量の燻瓦が出土しており、少量ではあるが、越前赤瓦が含まれている。

石段は８段を確認しており、南東から北西に向かって斜めに下っていくように配置され、棟石の上面を踏面としている。踏面は斜面とほぼ同じような角度で斜めに傾いた状態となっている。設置に際して棟石の下に燻瓦が敷き込まれたようになっているものもある。各段は棟石を段の手前に置いて、土留めした状態になっており、一段毎の奥行きは55㎝前後で、蹴上の高さは概ね30㎝前後である。御宮の平坦面付近となる１・２段目の蹴上は、20㎝程度と、やや低くなり、奥行きも60㎝を越える。

近世後期に描かれた「金沢御城内外建物絵図」（(公財）前田育徳会蔵）には、郭北辺に柵列と石垣が直線的に描かれ、その東側に木戸状の出入り口があり、出入り口から藤右衛門丸にむかって一定幅で色塗りされておらず、簡易な通路を表現したものと考えられ（第207図参照)、石段の表現はないが位置的には合致する。

石段の廃絶年代は定かではないが、石段自体は斜面上方からの流土とみられる、砂礫混じりのシルト質土によっておおわれている（Ⅱ層)。また、石垣5120N前面も同様に埋没していく。

Ⅱ層の出土遺物には石瓦の桟瓦が含まれるが、Ⅲ-c層出土に比べ少量かつ散布的なあり方から、廃棄に伴うものと考えられる。

空堀（第126、132図） NS1・2区両調査区の北端部において、空堀を確認した。空堀は、それ以前の郭造成と考えられる整地土層（46 ～ 50層）を掘り込んでおり、幅は4.6m、深さについては最深部を未確認だが、1.6m以上を測り、断面はU字状の形状と考えられる。埋土の堆積状況から、埋め立ては北側（藤右衛門丸側）から行われており、暗褐色土と地山由来の黄褐色土が互層状に入れられている。NS1区では、埋土中に円礫が極めて多い層がほぼ中央に何層か入っている。堀の埋土からは16世紀末から17世紀前半の遺物が出土している。

空堀の基盤層となる郭造成土は大別Ⅳ層に該当する。Ⅲ層に含まれる遺物の年代や内容から、空堀は寛永20年（1643）に東照宮が造営される以前には埋め立てられていたと推測する。

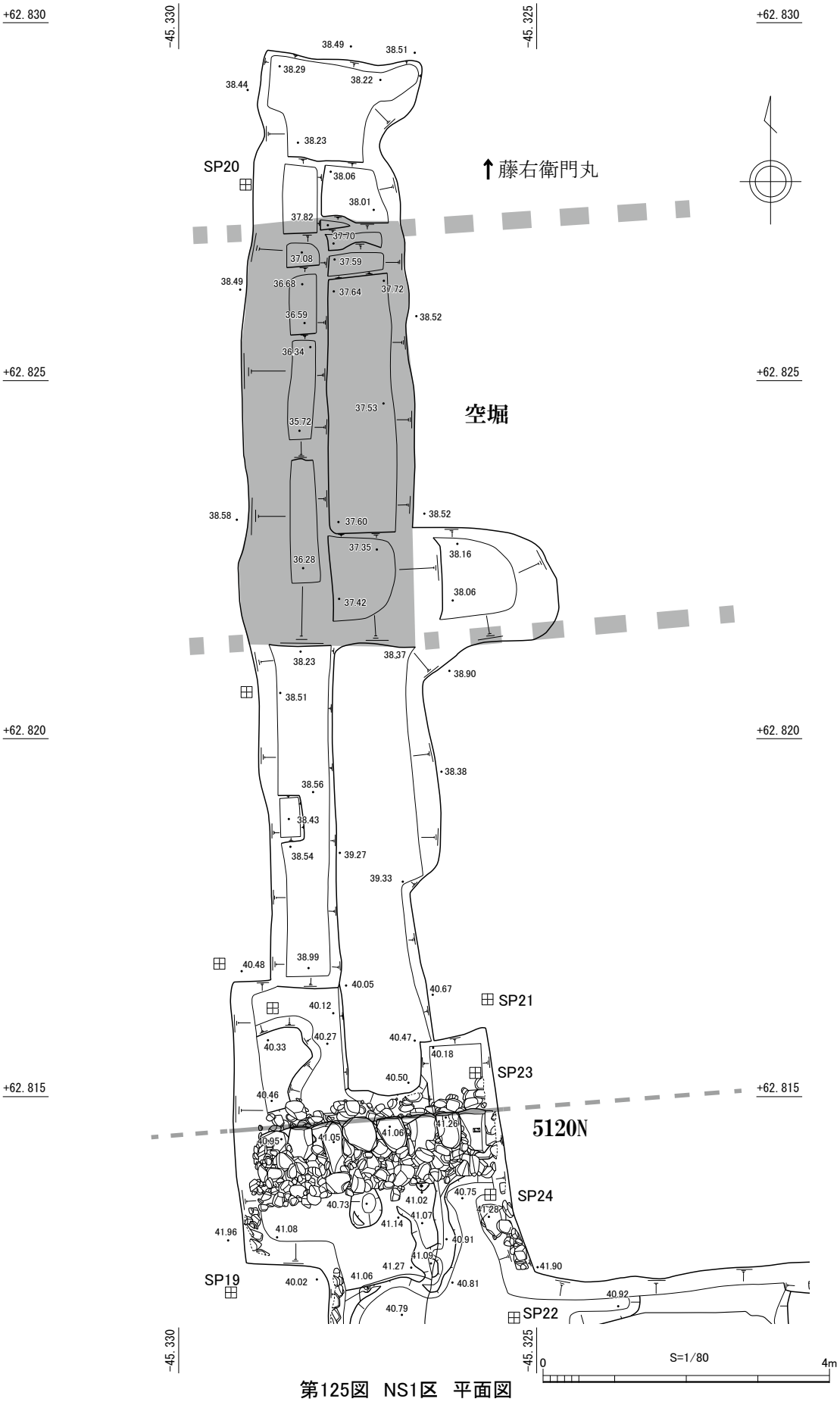
御宮北石垣5120N（第127、133図） NS1区とNS2区で確認した石垣である。現在の御宮から藤右衛門丸へとむかう通路は、近代以降につくられたもので、近世の絵図をみると、御宮の北辺には直線的な石垣が築かれ、藤右衛門丸とは基本的に仕切られた状態であった。本調査で確認したのはその一部と考えられる。

石垣はNS1区で長さ3.2m、高さ1.1mを測り、NS2区では長さ1.8m、高さ1.1mを測る。二カ所の石垣を単純に繋ぐと延長約84mを測る。東西方向に延びるが､NS2区に向かって約5.4° 北に振っている。いずれも３段の石積みを確認した。築石は自然の平坦面をもち角が丸みを帯びた河川転石を使用し、戸室石系の石材も約半数含まれる。戸室石系の石材は一部に面割りが確認されるが、基本は自然石積みである。石材形状は長楕円で、正面は小口方向をむけ、石面に比べて控えが長くなるように据えられる。石材の寸法は正面の高さが25 ～ 35cmと揃うが、横幅は20 ～ 50cm前後とややばらつく。控えについても45 ～ 70cmとばらつくが、概ね面に対して1.5倍以上の長さを維持している。ただし、横幅が50cm前後あるものは最下段にあるため、その控えが同様に1.5倍の長さを有しているかは不明である。正面は自然面だが、平らな形状が多く、意識的に石材の選択が行われたと考えられる。側面などの他の築石との接点を打ち欠くような合端調整は未確認である。石積みは石材の規格が不揃いなため乱積みとなるが、石材形状が揃う部分では布積み傾向にもみえる。築石間の隙間は裏込めに使用されている円礫と類似する石材を間詰石としている。

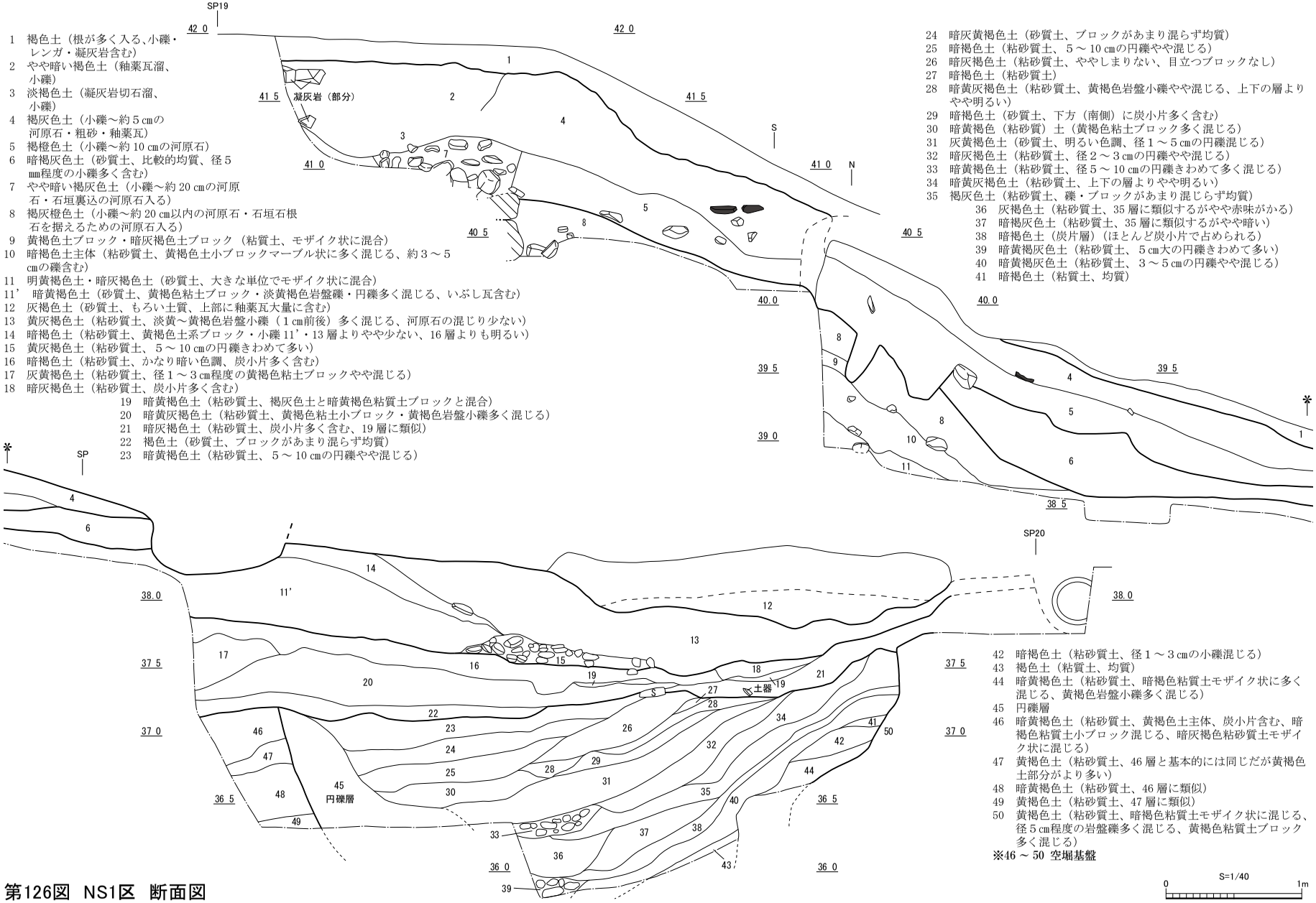
背後の裏込め掘方は幅が約40cmで、掘方内はやや扁平な円礫を充填した栗石層となっている。円礫は径30cm程から10cm程度まで粒径の差はみられるが、割栗材はみられない。

掘方は基盤層を掘り込んで根石を据えており、根石前面には前込めとして円礫が充填される。NS2区においては、石垣背後の掘方は地山を掘り込んでいる。ただし、掘り込み面は上部がⅠ層により削平されているため把握できていない。石垣前面も地山を掘り込んでいるが、石垣の背後と前面とで遺存する地山の最高所のレベルが約80cm異なり、石垣前面が低くなっている。地山部分を深掘りしたところ、黄橙色粘質土から、黄白色のシルト質土、細砂の層へと漸移的に変化しているが、南から北に向かって傾斜しているような状況は見られないことから、旧地形によるレベル差とみるより、石垣築造にあたり、地山を削り込んで犬走り状の平坦面を造り出したと考えられる。NS1区では、地山は確認できず、斜面側の堆積状況からも整地層を掘り込んで掘方としている。

NS2区では、石垣を据えた際の前込め層から17世紀初頭かと考えられる遺物が出土している。



第125図　NS1区　平面図

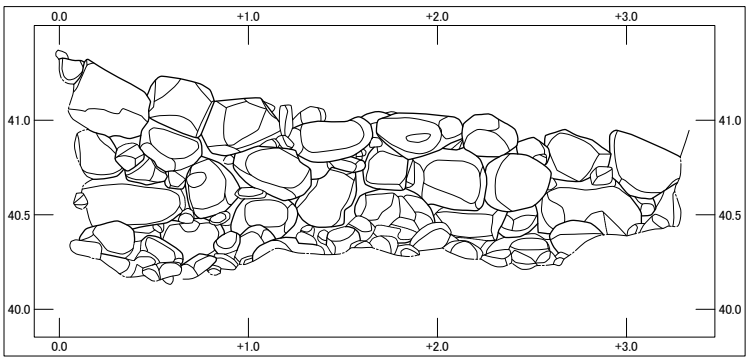


1 褐色土（根が多く入る、小礫・レンガ・凝灰岩含む）
2 やや暗い褐色土（釉薬瓦溜、小礫）
3 淡褐色土（凝灰岩切石溜、小礫）
4 褐灰色土（小礫～約５㎝の河原石・粗砂・釉薬瓦）
5 褐橙色土（小礫～約 10 ㎝の河原石）
6 暗褐灰色土（砂質土、比較的均質、径５㎜程度の小礫多く含む）
7 やや暗い褐灰色土（小礫～約 20 ㎝の河原石・石垣裏込の河原石入る）
8 褐灰橙色土（小礫～約 20 ㎝以内の河原石・石垣石根石を据えるための河原石入る）
9 黄褐色土ブロック・暗灰褐色土ブロック（粘質土、モザイク状に混合）
10 暗褐色土主体（粘砂質土、黄褐色土小ブロックマーブル状に多く混じる、約３～５㎝の礫含む）
11 明黄褐色土・暗灰褐色土（砂質土、大きな単位でモザイク状に混合）
11’ 暗黄褐色土（砂質土、黄褐色粘土ブロック・淡黄褐色岩盤礫・円礫多く混じる、いぶし瓦含む）
12 灰褐色土（砂質土、もろい土質、上部に釉薬瓦大量に含む）
13 黄灰褐色土（粘砂質土、淡黄～黄褐色岩盤小礫（１㎝前後）多く混じる、河原石の混じり少ない）
14 暗褐色土（粘砂質土、黄褐色土系ブロック・小礫 11’・13 層よりやや少ない、16 層よりも明るい）
15 黄灰褐色土（粘砂質土、５～ 10 ㎝の円礫きわめて多い）
16 暗褐色土（粘砂質土、かなり暗い色調、炭小片多く含む）
17 灰黄褐色土（粘砂質土、径１～３㎝程度の黄褐色粘土ブロックやや混じる）
18 暗灰褐色土（粘砂質土、炭小片多く含む）
19 暗黄褐色土（粘砂質土、褐灰色土と暗黄褐色粘質土ブロックと混合）
20 暗黄灰褐色土（粘砂質土、黄褐色粘土小ブロック・黄褐色岩盤小礫多く混じる）
21 暗灰褐色土（粘砂質土、炭小片多く含む、19 層に類似）
22 褐色土（砂質土、ブロックがあまり混らず均質）
23 暗黄褐色土（粘砂質土、５～ 10 ㎝の円礫やや混じる）
24 暗灰黄褐色土（砂質土、ブロックがあまり混らず均質）
25 暗褐色土（粘砂質土、５～ 10 ㎝の円礫やや混じる）
26 暗灰褐色土（粘砂質土、ややしまりない、目立つブロックなし）
27 暗褐色土（粘砂質土）
28 暗黄灰褐色土（粘砂質土、黄褐色岩盤小礫やや混じる、上下の層よりやや明るい）
29 暗褐色土（砂質土、下方（南側）に炭小片多く含む）
30 暗黄褐色（粘砂質）土（黄褐色粘土ブロック多く混じる）
31 灰黄褐色土（砂質土、明るい色調、径１～５㎝の円礫混じる）
32 暗灰褐色土（粘砂質土、径２～３㎝の円礫やや混じる）
33 暗黄褐色土（粘砂質土、径５～ 10 ㎝の円礫きわめて多く混じる）
34 暗黄灰褐色土（粘砂質土、上下の層よりやや明るい）
35 褐灰色土（粘砂質土、礫・ブロックがあまり混じらず均質）
36 灰褐色土（粘砂質土、35 層に類似するがやや赤味がかる）
37 暗褐灰色土（粘砂質土、35 層に類似するがやや暗い）
38 暗褐色土（炭片層）（ほとんど炭小片で占められる）
39 暗黄褐灰色土（粘砂質土、５㎝大の円礫きわめて多い）
40 暗黄褐灰色土（粘砂質土、３～５㎝の円礫やや混じる）
41 暗褐色土（粘質土、均質）
42 暗褐色土（粘砂質土、径１～３㎝の小礫混じる）
43 褐色土（粘質土、均質）
44 暗黄褐色土（粘砂質土、暗褐色粘質土モザイク状に多く混じる、黄褐色岩盤小礫多く混じる）
45 円礫層
46 暗黄褐色土（粘砂質土、黄褐色土主体、炭小片含む、暗褐色粘質土小ブロック混じる、暗灰褐色粘砂質土モザイク状に混じる）
47 黄褐色土（粘砂質土、46 層と基本的には同じだが黄褐色土部分がより多い）
48 暗黄褐色土（粘砂質土、46 層に類似）
49 黄褐色土（粘砂質土、47 層に類似）
50 黄褐色土（粘砂質土、暗褐色粘質土モザイク状に混じる、径５㎝程度の岩盤礫多く混じる、黄褐色粘質土ブロック多く混じる）

※46 ～ 50 空堀基盤

第126図 NS1区 断面図

北面石垣(5120N)平面図



北面石垣(5120N)立面図

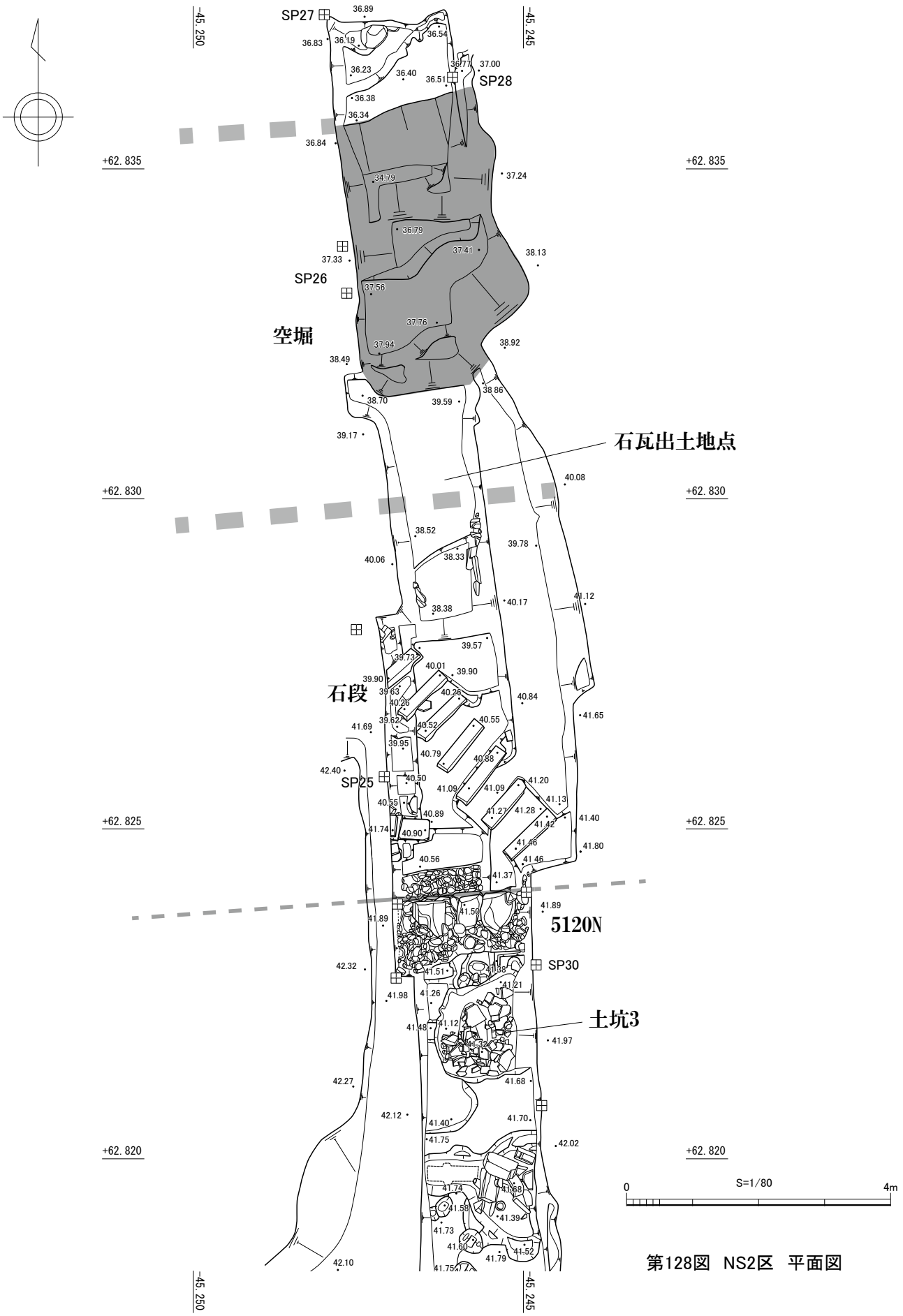
北面石垣(5120N)断面図

東壁断面図

1　河原石、凝灰岩溜
2　暗茶灰褐色（砂質土、もろい）**撹乱土**
3　やや暗い褐灰色土
（小礫～約 20 ㎝以内の河原石・石垣裏込の河原石入る、西壁 7 層と対応）
4　黄橙褐色砂質土
（白色小粒子多含む、暗灰褐色砂質土をモザイク状に含む）**掘方埋土**
5　黄褐色粘土ブロック＋暗褐色粘砂質土　**近世整地土**
6　黄褐色粘砂質土ブロック主体　**近世整地土**

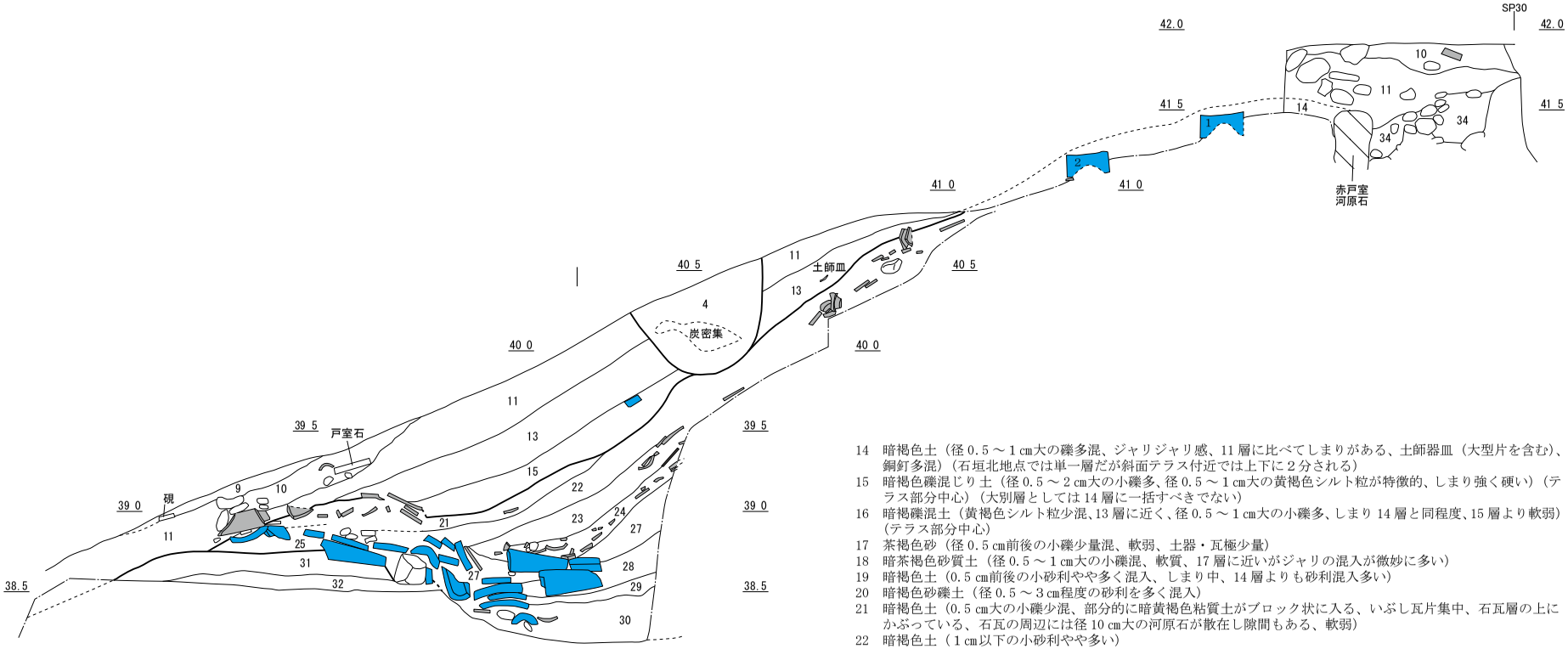
S=1/40
0　1m

第127図　NS1区　石垣5120N平面図・立面図・断面図



第128図　NS2区　平面図

第129図　NS2区　調査区西壁断面図



西壁・東壁共通土層注記

1　褐色土（軟質でわずかに緑色がかっているが全体に白っぽい、最近数年間のものか）
2　黄褐細砂（漆喰壁片多混）
3　黒褐色土（黄褐ブロック混、漆喰ブロック多混、軟弱、ガラス、灰皿、径１cm以下の砂礫目立つ）
4　暗褐色土（軟弱、炭多、ガラス片）
5　暗褐色粘質土（地山ブロック・暗褐ブロック混、釉薬瓦混入ピットと同様の土層）
6　黄褐シルト（地山ブロック混）
7　暗褐色土（軟、炭少）
8　暗褐色土（炭微粒少混、砂礫少なくサラサラ）

※1 ～ 8 近代以降

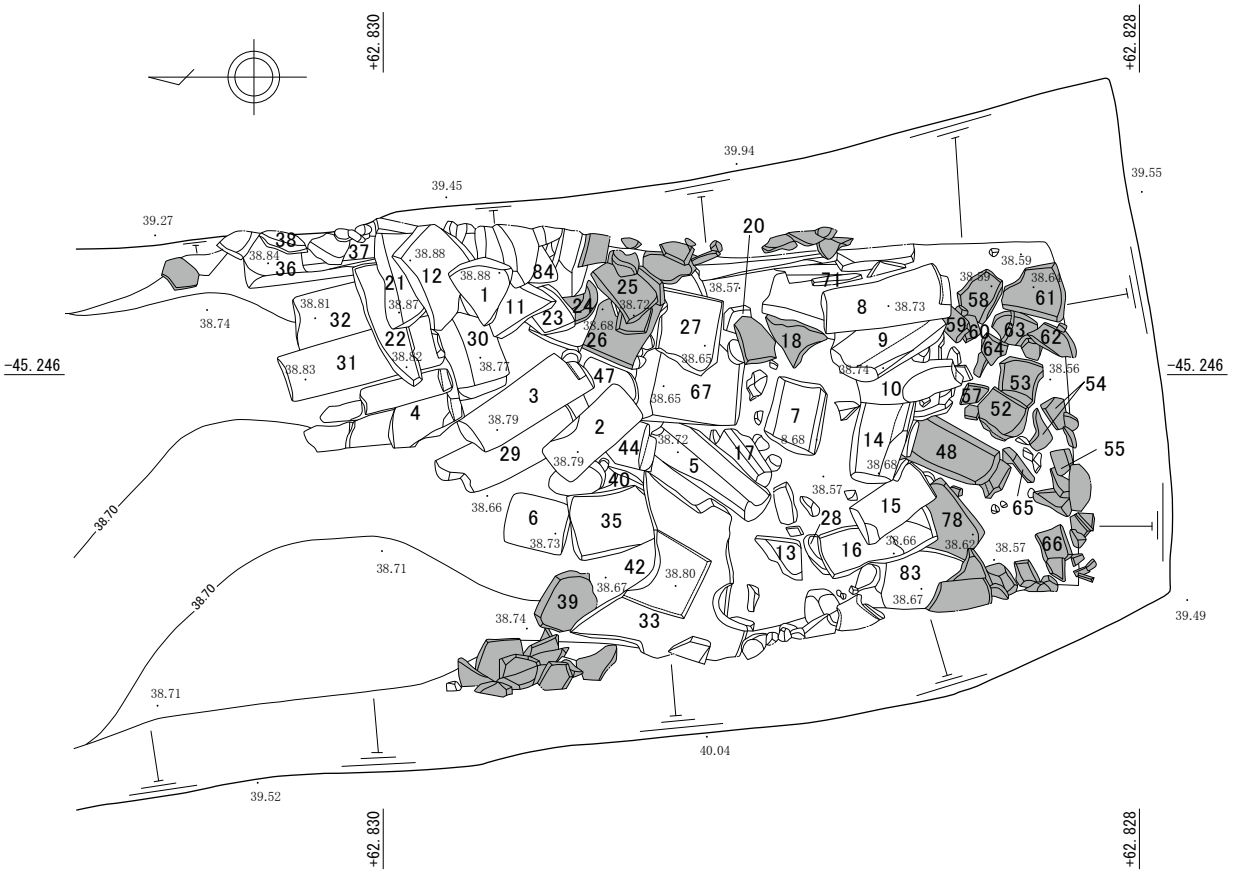
9　暗褐色土（0.5 ～ 1 cm大の炭粒多、軟弱ボソボソ、径 0.5 cm前後の砂礫多混、土師器皿混）
10　暗褐色土（炭・砂礫の混入少なくサラサラした印象、軟弱だが 9 層よりはしまりがある、下層には径３～ 10 cmの円礫が多く混在しているが（自然流土）細分しなかった）
11　暗褐色土（炭粒･砂礫混入やや多くジャリジャリしている､10 層より軟弱（9 層に近い）いぶし瓦･土師器皿片少々混入、径５～ 10 cmの大粒礫少混在）
12　黄褐色土（シルト、いぶし瓦片多量集中（ただし小片主体））
13　暗褐色土（灰褐シルトブロック混、鉄分沈着、２～３cm大の礫多、15 層に比べると軟弱だが 11 層よりしまりがある、16 層に類似）
14　暗褐色土（径 0.5 ～１cm大の礫多混、ジャリジャリ感、11 層に比べてしまりがある、土師器皿（大型片を含む）、銅釘多混）（石垣北地点では単一層だが斜面テラス付近では上下に２分される）
15　暗褐色礫混じり土（径 0.5 ～２cm大の小礫多、径 0.5 ～１cm大の黄褐色シルト粒が特徴的、しまり強く硬い）（テラス部分中心）（大別層としては 14 層に一括すべきでない）
16　暗褐礫混土（黄褐色シルト粒少混､13 層に近く、径 0.5 ～１cm大の小礫多、しまり 14 層と同程度､15 層より軟弱）（テラス部分中心）
17　茶褐色砂（径 0.5 cm前後の小礫少量混、軟弱、土器・瓦極少量）
18　暗茶褐色砂質土（径 0.5 ～１cm大の小礫混、軟質、17 層に近いがジャリの混入が微妙に多い）
19　暗褐色土（0.5 cm前後の小砂利やや多く混入、しまり中、14 層よりも砂利混入多い）
20　暗褐色砂礫土（径 0.5 ～３cm程度の砂利を多く混入）
21　暗褐色土（0.5 cm大の小礫少混、部分的に暗黄褐色粘質土がブロック状に入る、いぶし瓦片集中、石瓦層の上にかぶっている、石瓦の周辺には径 10 cm大の河原石が散在し隙間もある、軟弱）
22　暗褐色土（１cm以下の小砂利やや多い）
23　暗褐色土（0.5 ～ 1.0 cm大の小礫多、炭小粒中混、３～５cm大の小円礫散石）
24　暗黄褐粘質土（トレンチ東半では黄白色粘土ブロック集中、５～ 10 cm大の小円礫若干とともにいぶし瓦客集部分あり、土師器皿混、内側を上にむけて重なって出土している石丸瓦の上にかぶる）
25　暗褐色礫混土（粘土ブロックなし、軟弱、石瓦混）
26　暗褐色土（径２cm以下の砂礫多、軟弱で密度弱い）**石瓦集積部が南側へ崩れた後の土**
27　茶褐色砂質土（炭微粒、0.5 cm大の小円礫少混じる）
28　茶褐色砂質土（黄灰色砂の小ブロックを混在、土師皿・いぶし瓦が一部に集中するブロックあり）

※27・28 造成後初期段階の流土層

29　暗黄褐粗砂（１cm以下の小礫ごく少混、軟弱）
30　暗褐砂礫層（径 10 cm以下の小円礫を多混、軟弱でグズグズしている、伊万里出土、炭小粒少混）**テラス際の落ち込み覆土**
31　暗褐色礫混土（石瓦最下部混、径２cm前後の小礫多、32 層よりはややしまり弱い）流土
32　暗褐色礫混土（黄褐色粘質土の小ブロック混、径２cm前後の小礫多、炭粒なし、しまり中、遺物少混、テラスの落ち込みは 32 層上面から掘り込まれている？）**造成土**
33　暗茶褐色礫混土（黄褐砂質層地山のブロック混､径２～４cm大の炭ブロック混、径５～ 10 cmの円礫多､しまり強）
34　（グリ石は８～ 15 cm程度の円礫を密に詰め込む、グリ石層上面は暗褐色粘質土、地山粘土小ブロック混でパックされている、この土質は石垣裏のグリ石の状況に共通）**石垣の掘方内**
36　暗褐色粘質土（地山粘土ブロック混、石垣裏込めグリ石間層）
37　（地山最上面が自然に同化撹乱された土層、黄褐砂質土ブロックと暗褐砂質土ブロックの混合層、地山の変化に対応して下方では礫混じり粘質土層に変化している）

S=1/40
0　1m

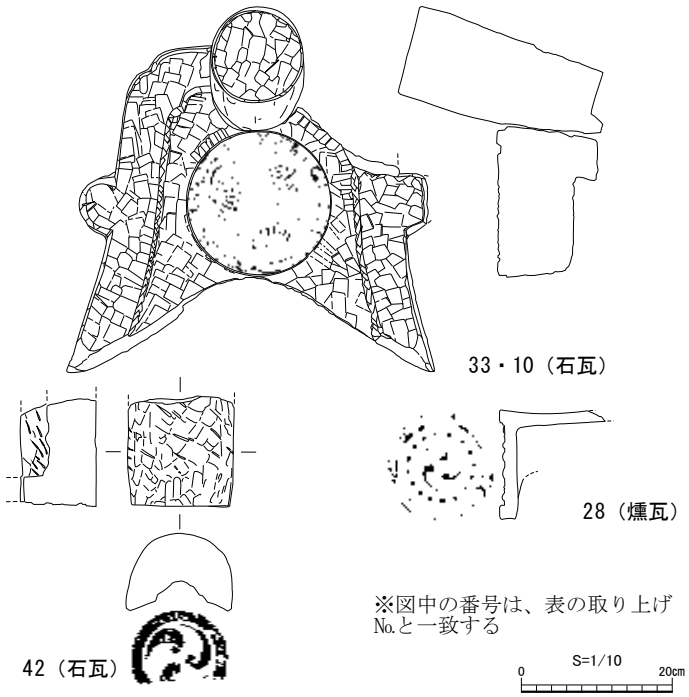
第130図　NS2区　調査区東壁断面図



石瓦出土状況

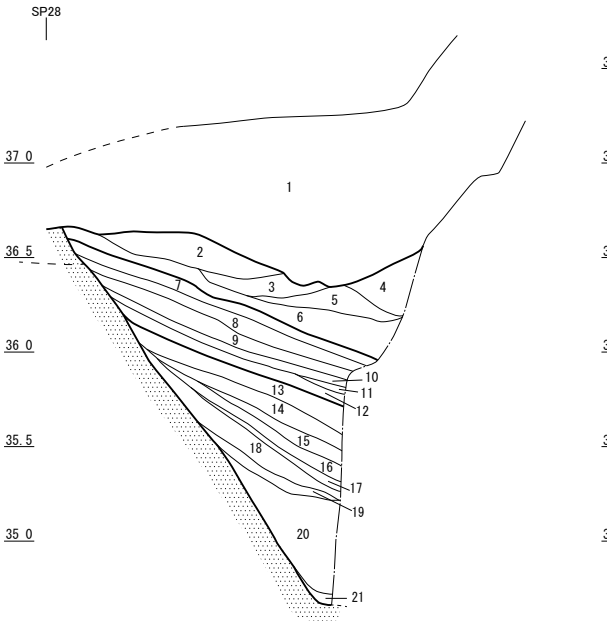
第20表　主な瓦の取上げ番号と器種

取上げNo.	器種	ID（実測番号）
3	丸瓦	200003-S022
4	丸瓦	200003-S060
5	丸瓦	200003-S023
6	丸瓦	200003-S056
8	丸瓦	200003-S028
9	丸瓦	200003-S035
10	鳥衾	200003-S063
12	平瓦	200003-S034
14 17	丸瓦	200003-S011
22	平瓦	200003-S007
23	平瓦	200003-S061
26	平瓦	200003-D117
28	軒丸	200003-D081
29	丸瓦	200003-S014
30	丸瓦	200003-S039
31	丸瓦	200003-S005
32	丸瓦	200003-S038
33	鬼瓦	200003-S001
36	軒丸瓦	200003-S002
37	丸瓦	200003-S071
37	平瓦	200003-S010
42	軒丸瓦	200003-S079
47	平瓦	200003-S012
67	平瓦	200003-S050
78	平瓦	200003-S019
83	平瓦	200003-S055



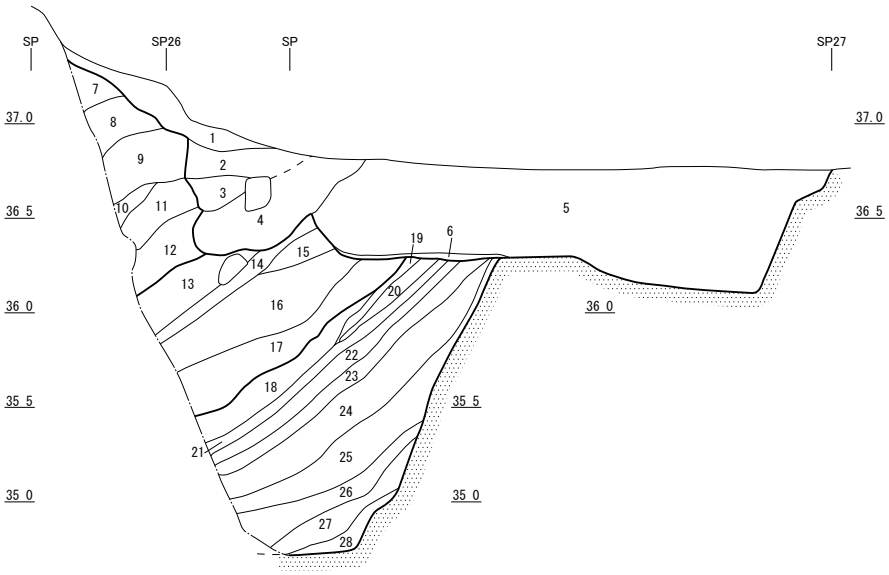
出土瓦の一部

第131図　NS2区　石瓦出土状況



1　撹乱土
2　暗灰褐色土
3　暗黄褐色土
4　褐色砂質土（水平指向ないし南側からの堆積）西壁7層対応
5　暗灰褐色土
6　黄褐色粘砂質土（小礫混じり1㎝以下）西壁9層対応
※1～6 造成土
7　黄灰色砂質土（小礫を多く含む）
8　黄灰色砂質土（砂を多く含む）
9　黄灰色砂質土（小礫を多く含む）
10　黄灰色砂質土（砂を多く含む）
11　黄灰色砂質土　7～11層 西壁13層と対応
12　小礫層（1㎝以下）
13　黄色砂質土
14　暗褐色砂質土
15　暗灰褐色砂質土（14・16層に比べ暗い）
16　暗褐色砂質土
17　黄灰褐色砂質土
18　暗褐色砂質土
19　黄色砂質土
20　暗褐色砂質土
21　黄橙色砂質土（地山起源の初期流入土の堆積）
※7～21 堀埋土

北端部東壁断面図

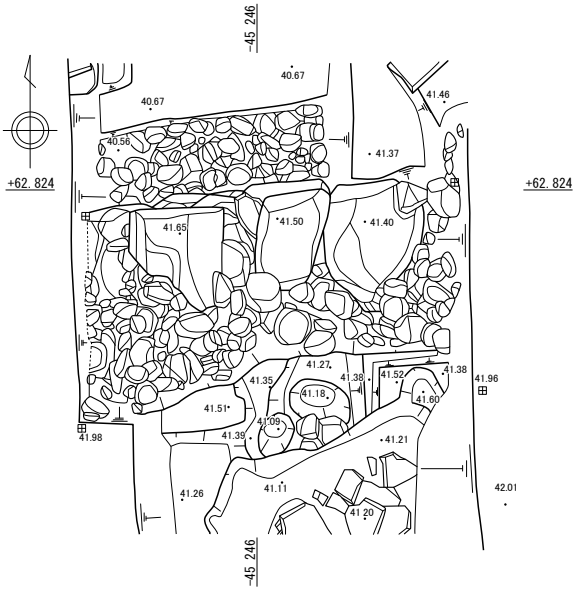


1　褐灰色砂質土
2　灰褐色粘砂質土
3　暗褐色粘砂質土
4　褐色粘砂質土
5　暗褐色粘砂質土（黄褐色土ブロック定量混じる）
※1～5 表土・撹乱土
6　明黄褐色砂質土（岩盤小礫混じる）撹乱時の土か
7　褐色砂質土（径1㎝前後・2㎝以上の礫多く混じる）東壁4層対応
8　暗褐色砂質土（径2㎝以上の礫定量混じる、7よりやや暗い）
9　黄褐色粘砂質土（径1～2㎝小礫定量混じる、下部粘性あり）東壁6層対応
10　暗黄灰褐色砂質土（小礫混じり少なく均質）
11　灰褐色砂質土（12より礫の混じり少ない）
12　暗褐色砂質土（径1～2㎝小礫定量混じる）10～12 東壁には見当たらない
6～12 造成土か
13　明灰黄褐色砂質土（小礫混じり少なく均質、粒子も細かい）東壁7～11層対応
14　暗黄褐色砂質土（1㎝以下・0.5㎝前後小礫混じる）
15　暗灰褐色砂質土（1㎝以下の小礫定量混じる）
16　灰褐色砂質土（径1㎝程度の小礫（多）・5～10㎝河原石（少）混じる）
17　暗灰褐色砂質土（径1～2㎝の小礫多く混じる（小礫の最も多い土層））
18　褐色砂質土（径1～2㎝の小礫定量混じる）
19　灰黄褐色砂質土（径1㎝以下の小礫定量混じる）
20　褐色砂質土（18層に類似）
21　灰黄褐色砂質土（径1㎝以下の小礫定量混じる（黄色味の目立つ層））
22　褐色砂質土（小礫やや混じるが上部より目立たない、炭小片定量含む）
23　黄灰褐色砂質土（径1㎝以下の小礫定量混じる、21層より黄色味弱いが比較的明るい）
24　褐色砂質土（22層に類似）
25　暗褐色砂質土（小礫の混じり少なく均質、炭小片定量含む、土器出土）
26　暗灰褐色砂質土（小礫の混じり少なく均質、上下の層よりやや明るい）
27　暗褐色砂質土（小礫の混じり少なく均質（炭片含まない））
28　暗黄褐色砂質土（岩盤礫混じる、初期流入土、地山起源）
（地山　黄橙褐色礫混じり土）
※13～28 堀埋土

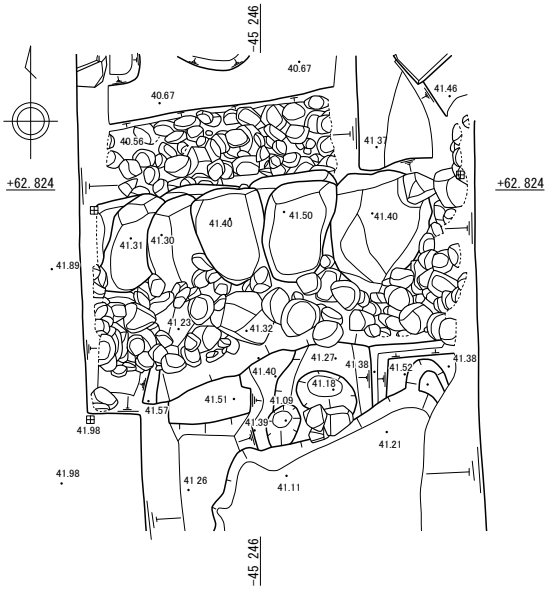
北端部西壁断面図

S=1/40
0　1m

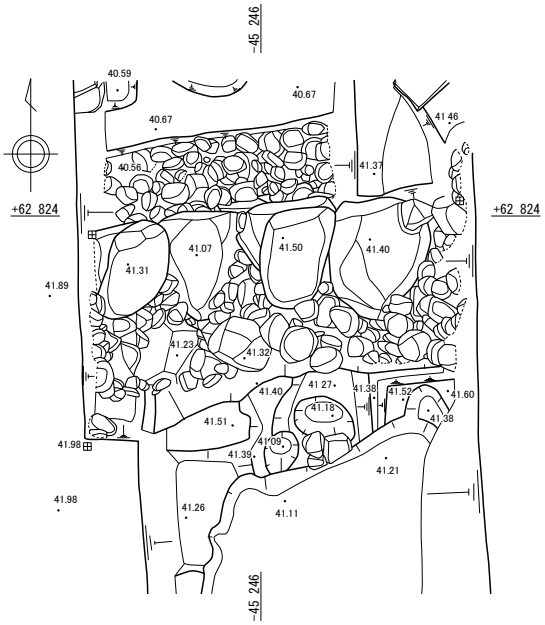
第132図　NS2区　調査区北端部断面図



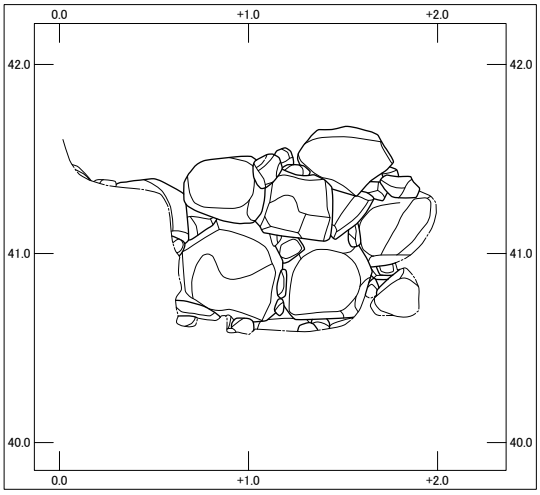
北面石垣(5120N)上段



北面石垣(5120N)中段



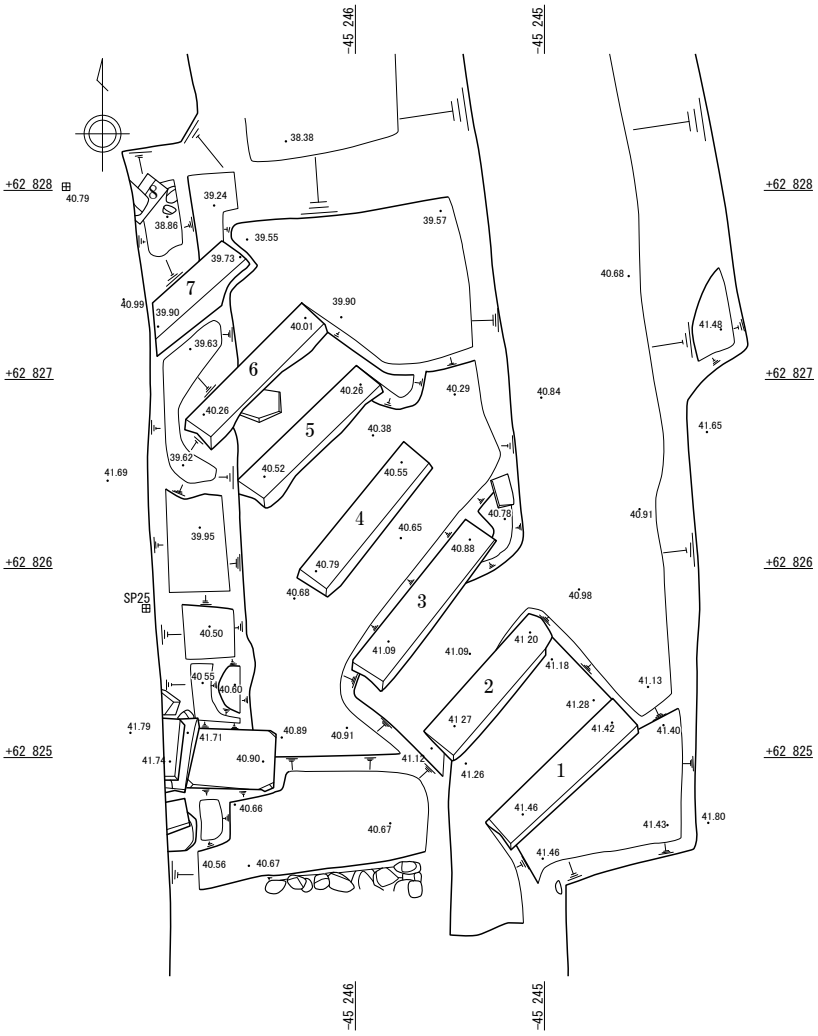
北面石垣(5120N)下段



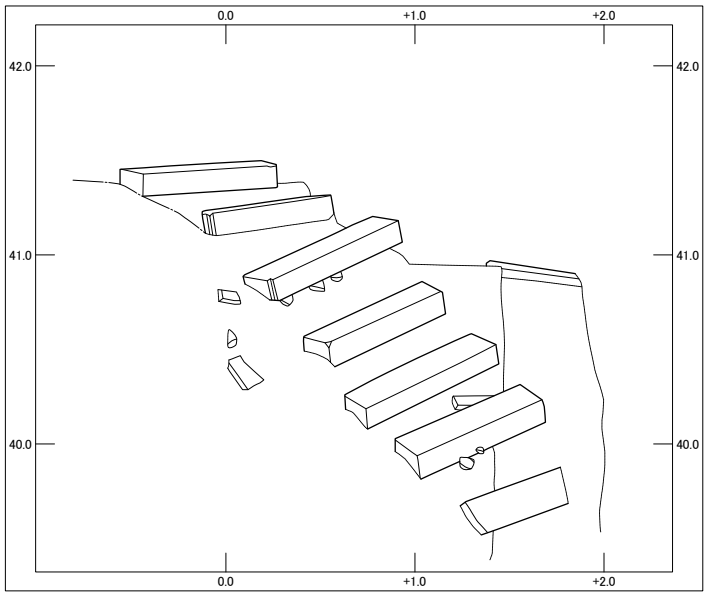
北面石垣(5120N)立面図

S=1/40

第133図　NS2区　石垣5120N平面図・立面図



石段平面図



石段立面図

S=1/40
0 1m

第134図　NS2区　石段平面図・立面図

第３節　遺物

１．概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品が出土し、図示していないが、近代以降のガラス製品も見られる。以下に材質ごとに記述していくが、器種・胎土などの分類、年代観などは、本丸附段調査区に準じている。

２．陶磁器・土器　（第135 ～ 159図、第21 ～ 25表）

本調査区から出土している陶磁器は、近代に入って旧陸軍が使用したと思われるものを除けば、16世紀末から17世紀の中国製品、国内産陶器が主体で、肥前磁器染付はほとんど見られない。また、SW2区・NS2区からは17世紀の土師器皿がまとまって出土している。

SW2区　（第135図～第137図P238）

図示した遺物はほとんどが近世整地土からの出土である。近世整地土からは中国磁器青花碗・肥前陶器絵唐津皿などのほかに、17世紀前葉から中葉の土師器皿が多数出土している。

P224 ～ P226は中国の磁器青花碗・小碗である。P224は端反り碗の口縁片で景徳鎮窯系の製品であろうか。P225は碗底部で、見込に二重圏線と花文がある。高台はやや内傾し、釉剥ぎした畳付に砂が付着している。16世紀の景徳鎮窯系の製品である。P226は景徳鎮窯系磁器青花小碗の口縁片で、16世紀の製品である。P227は17世紀の漳州窯の大振りの碗と思われる口縁片で、陶胎に白泥を塗った上に文様を描いている。P228は肥前陶器絵唐津皿で、口縁は欠損している。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P229は肥前陶器鉄釉袋物底部である。内面には渦巻状の強いナデが残り、透明感のない鉄釉が掛かっている。外底面はケズリによってわずかに高台状にしているが、糸切り痕が残っている。16世紀末から17世紀初頭の製品であろうか。P230は織部焼の持ち手である。上面には格子状の刻みがある。P231は肥前陶器擂鉢底部片で、内面は卸目（2.6㎝、９本以上）が密に入り、胎土目跡が２か所見られる。外面は立ち上がり部に卸目と同じ櫛状具の圧痕があり、盛り上がっていた粘土に重ね焼き時に下の擂鉢の卸目がついたものかと思われる。外底面にうっすらと見える櫛状具の痕は、櫛状具で撫でた後、回転ケズリで消している。

P232 ～ P236は17世紀前葉から中葉の土師器皿で、P233が大型である以外は中型である。P232は平底からあまり開かずに立ち上がり、内底面と体部の境は凹線状のナデが内底のナデを切るように巡っている。外面の口縁と体部の境には明瞭な稜線が入り、口縁の摘み上げは殆ど見られない。遺存部分は全部に油煙痕がある。P233は大型で平底から体部が短く立ち上がり、外底面には板目状圧痕が見られる。内底面は不定方向ナデと思われ、体部との境の稜線は体部側にある。口縁外面は強くナデて、体部との境に明瞭な稜を持つ。口縁は内弯しておらず、遺存部分では口縁全部に油煙痕がある。P234はわずかに板目状圧痕が残る平底から体部が短く立ち上がり、内底面と体部の境の稜線は体部側にある。口縁は端部に面を作り、外面は強くナデて体部との境に明瞭な稜を持っている。口縁には油煙痕がある。P235は平底で、体部は緩やかな「く」の字状に開き、口縁端部はわずかに内弯するように摘み上げている。摩耗のため内底面の調整は不明であるが、体部のヨコナデが底面の調整を切っている。胎土は砂粒を多く含んでいる。P236は中央部がやや上がった平底で、外底面は指押えである。体部は緩やかな「く」の字状を呈し、口縁は内弯するように摘み上げている。内面は底面の調整を体部のヨコナデが切っている。胎土には海綿骨針をわずかに含んでいる。

P237・P238は出土層位が不明であるが20世紀の製品である。P237は白磁筒丸碗である。胎土に気泡を多く含んでいるためか、小さな凸凹が多く見られる。P238は硬質陶器の小皿で、内面に青と赤の圏線が11本描かれ、外底面に緑色のプリントで「日本硬陶」の銘がある。金沢市長町にあった日本硬質

陶器会社（現在の『ニッコー株式会社』）の製品である。

SW3区　（第137図P239 ～ P241）

P239は北東隅断割から出土した中国景徳鎮窯系かと思われる磁器青花鉢の口縁片である。P240・P241は表土から出土した磁器徳利で、P240は頸部と肩部に暗緑色の帯状の圏線を巡らせて、掻き落とし技法で簡略な松竹梅の文様を描いている。外底には戦時統制番号「岐730」が陰刻されている。P241は外側面に平行沈線が巡り、口縁と底部付近に暗緑色の圏線が施され、外底面には戦時統制番号「岐792」が青でプリントされている。どちらも戦時統制番号から、1940年代の美濃の製品と分かる。

SW4区　（第138図～第144図P258）

SW3区とSW4区の境にある撹乱および現代土坑からは19世紀末から20世紀の陶磁器が多く出土している。P242 ～ P244は磁器である。P242は染付端反碗で、高台脇には草文、外側面は花文と棕櫚の葉のような文様が交互に描かれている。被熱しているのか煤が断面にも付着している。明治前半の瀬戸・美濃の製品であろうか。P243は色絵金彩の湯呑碗である。白濁した釉の上に、赤・緑・黒・金と白泥の斑点でつる草のような文様を描いている。高台内に朱書きで「加賀九谷」の銘があり、20世紀の再興九谷の製品である。P244は染付小碗で、丸文の中に「福」・「寿」の文字が書かれている。

P245はSK07から出土した磁器筒丸碗で、口縁付近に緑色の二重圏線が巡る国民食器と呼ばれるものである。高台内に緑色のプリントで「岐413」の戦時統制番号があるので、美濃の製品と分かる。

P246はSD01から出土した陶器通い徳利で、鉄絵で文字が書かれている。「京□」「百□□　二升入」ともう一列ある。図示していないが同様の通い徳利が出土していて、それに「電話」の文字があることから電話番号が書かれていたと思われる。

SW4区北撹乱からは主に19世紀後葉の陶磁器・土器が多数出土している。P247 ～ P250は磁器染付端反碗で、見込みは寿字文である。酸化コバルトを用いているので、19世紀後葉以降の瀬戸・美濃の製品であろう。P251も瀬戸・美濃の磁器染付端反碗であるが、見込み文は異なる。焼成不良のためか、胎土は灰白色で染付の発色も悪い。19世紀後葉以降の製品である。P252は瀬戸・美濃の磁器染付飯碗である。酸化コバルトで花と葉を描いている。高台内には手描き染付で、角福のような銘がある。P253は磁器染付端反り形小碗で、外側面には隷書文を描き、見込み文もある。再興九谷の若杉窯の製品であろう。P254･P255は施釉土器鉢で、小型の火鉢であろうか。外底面から立ち上がり部はケズリ、ほかはヨコナデで、全面に鉛釉が施されている。P255の胎土はP254より砂粒を多く含み、赤色粒も含んでいる。この撹乱からは、ほかにも同様の火鉢が４個体出土している。P256は陶器蘭引の上半部のみである。白泥と鉄絵で梅花文が描かれている。内面は口唇部から頸部までは露胎だが、それ以下は透明釉が掛かっていて、一部砂が付着している。

P257は中央の表土・撹乱から出土したもので、肥前磁器染付筒碗の体部片である。被熱により内外面とも釉が沸いている。P258は撹乱から出土した国民食器と呼ばれる口縁に緑色の２本線が巡る蓋で、形状から丼の蓋と思われる。上面摘み内に青色の上絵付で「将集」の銘がある。第207図ではSW区にあたる地点に将校集会所がある。そこで使用されたものであろうか。北表土にも、同様の蓋が出土している。

SW5区　（第144図P259 ～第145図）

P259は19層から出土した瀬戸陶器灰釉内ハゲ皿である。被熱により釉は沸き、内外面全体に煤が付着している。16世紀後半の製品である。P260は肥前陶器皿で、16世紀末の製品である。見込みに胎土目跡が４か所ある。口縁端部に油煙痕があるので、灯明皿に転用していたと思われる。P261 ～ P263は土師器皿である。P261は厚手で、見込みと体部の境に強い凹線状のナデが入っている。P262は大型で、胎土は灰白色だが、表面は内外面全体が暗褐色になっている。平底で体部はあまり開かず、外面は丸く立ち上がるが内面は底部との境が明瞭である。P263は平底で外底面には板目状圧痕があり、口縁外面は強いナデにより体部との境に強い稜がある。内底面はナデられているが指押えによる凸凹が

残っている。口縁端部は丸く収められている。P262は17世紀前葉の、P263は17世紀中葉の製品であろう。３点とも遺存部分には全部、口縁内外面ともに厚い油煙痕がある。

SW6区（第146・147図）

P264は撹乱から出土した瀬戸・美濃磁器染付端反小碗である。内外面に捻り文が描かれ、輪高台で畳付は釉剥ぎされている。P265は陶器折縁皿である。小型品で、内面中央を除き全体にオリーブ色の灰釉が掛けられている。16世紀後半の瀬戸・美濃の製品である。P266 ～ P270は32層より下部から出土している。P266は陶器擂鉢の口縁小片である。焼成不良で外側は黄色味を帯びた灰白色、中は灰色に近い灰白色のサンドイッチ状になっている。卸目は幅３㎝で、11本ある。越前の製品であろうか。P267 ～ P269は土師器皿である。大型で平底、あまり開かずに立ち上がり、口縁は内面に凹線が巡るように摘み上げている。見込みには櫛描き状の一方向条線があり、それを切るように体部のヨコナデが入っている。P270も土師器皿である。中型で、底部中央が上がるへそ皿風になっていて、板目状圧痕がわずかに残っている。口縁は内面が沈線状になるように摘み上げ、外面には口縁と体部の境に稜線が入っている。いずれも17世紀初頭の製品である。

NS1区（第148 ～ 151図）

P271は表土から出土した磁器皿で、胎土は陶器質に近い。外面は染付がなく、赤の上絵付で２本の圏線と３つに区画する２本１組の縦線、アラビア数字の「２」が描かれている。見込みにはわずかに降灰が見られる。19世紀後葉の瀬戸・美濃の製品であろう。P272は石垣（5120N）裏込めの栗石中から出土した磁器染付鉢である。内面上方に酸化コバルトの銅版転写で旧陸軍の星章がプリントされている。外底面には製造会社である名古屋製陶所の「名陶」の染付銘がある。P273・P274は土師器皿である。P273は小型で、平底だが体部との境に稜は持っていない。外面は指頭圧痕が残るが、内面は不定方向のナデできれいに調整されている。口縁端部には端面が形成されているが、伸長は顕著ではなく、口縁部に油煙痕がある。17世紀中葉の製品であろう。P274は小型土師器皿である。平底であまり開かずに立ち上がり、口縁端部は内弯している。内面は底部と体部の境に凹線状のヨコナデが巡っている。17世紀前葉の製品であろう。

P275 ～ P290は空堀覆土からの出土である。P275は中国景徳鎮窯系磁器青花鉢である。薄手で呉須の発色も良い。P276は中国磁器青花碗の体部小片である。呉須の発色は悪い。P277 ～ P279は陶器碗である。P277は口径に対し器高が高く筒丸形に近い鉄釉丸碗で、高台は丸味を帯びていて、高台内側の底部が厚くなっているため、高台は外側では高く、内側では低くなっている。1610年代後半の美濃の製品である。P278は肥前の鉄釉碗である。口縁部が欠損しているので明確ではないが、体部下半に丸味を帯びる天目形であろうか。被熱により釉は内外面とも白濁している。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P279は肥前の鉄釉碗口縁片である。口縁はほぼ直立し､端部の稜がはっきりしている。P280 ～ P282は陶器皿である。P280は肥前灰釉皿で、内面は体部と底部の境にはっきりした稜を持つ段があり、口縁端部は摘み上げている。見込みには胎土目跡が２か所残っている。P281は越中瀬戸の印花文皿の底部である。見込みは使用により平滑になっていて、菊花の印花文が１個ある。口縁部には釉が掛かっていると思われるが、欠損しているために釉は不明である。P282は灰釉丸皿である。高台は小さく、内外面とも被熱により釉が白濁している。P280は17世紀前半の、P281・P282は16世紀末から17世紀初頭の製品である。P283は美濃陶器御深井釉鉢の口縁である。口縁は逆「く」の字状を呈し、口縁帯には細い圏線と縦の沈線、その下には、縦の凹線が施されている。P284は越中瀬戸の陶器擂鉢口縁片で、内外面に薄い鉄釉が掛かっている。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P285は肥前陶器鉄釉擂鉢の口縁片である。小型の擂鉢であろうか。鉄釉は内面の口縁端部と外面上半に掛かり、外面下半には強いケズリが入っている。卸目は幅2.8㎝、8本以上である。

P286～P290は土師器皿である。P286は小型の土師器皿で丸底である。内面と口縁外面はヨコナデで、

口縁端部の摘み上げは明瞭である。外面には指頭圧痕が残っている。P287 ～ P290は中型土師器皿である。P287は平底で、外底面には板目状圧痕があり、見込みのナデは体部のヨコナデを切っている。口縁端部は内弯するように摘み上げている。17世紀前半の製品である。P288は内面底部と体部の境に凹線状のナデが巡り、体部のヨコナデへと続いている。外面には掌圧痕がある。口縁端部はわずかに摘み上げている。油煙痕が２か所ある。P289は見込みの一方向条痕ははっきりせず、内面底部と体部の境の凹線状のナデは弱く、体部のヨコナデに続いている。底部外面は指頭圧痕が残り、口縁部に油煙痕が３か所ある。歪みが著しい。P290は内面の一方向条痕は不明だが、外面は指押えである。口縁に１か所油煙痕がある。P288 ～ P290は17世紀前葉の製品である。

NS2区　（第152 ～ 159図）

NS2区ではⅠ層からは近代の陶磁器が多く出土しているが、Ⅱ層以下では土師器皿が主体であり、陶磁器は多くない。P291は表土から出土した瀬戸・美濃の磁器染付皿である。蛇の目凹型高台で、旧陸軍が使用したと思われる皿に使用されるものと同タイプである。P292は８層から出土した硬質陶器の丼である。口縁外面に青と赤の圏線が17本描かれている。外底面に緑色のプリントで「日本硬陶」の銘があり、日本硬質陶器会社の製品である。

P293 ～ P316はⅡ層から出土している。P293は15層から出土した中国景徳鎮窯系磁器青花皿の底部片である。高台は断面三角形で、端部は釉剥ぎしているが砂が付着している。P294は9 ～ 11層から出土した肥前陶器三島手皿底部片である。釉は透明感があるが、被熱により一部白濁している。P295は12層から出土した陶器灰釉皿の底部片である。釉は透明感があり、細かい貫入が入っていて、畳付にも掛かっている。

P296 ～ P319は土師器皿である。P296・P297は９層から出土した薄手大型土師器皿である。平底で体部は緩やかな「く」の字状で外に開いている。P296は見込み「の」の字状ナデ、P297は見込み一方向ナデで、口縁端部の摘み上げはほとんど無く、口縁に油煙痕がある。17世紀中葉の製品である。P298は11層出土から出土している。丸味を持った底面から上へ立ち上がった後、外へ開き、口縁内部の端面の形成は明瞭ではなく、口縁外側に稜を持っている。見込みは一方向ナデで、体部のヨコナデがそれを一部消すように入っている。口縁部には遺存部分全周に油煙痕があり、内外面全体に黒色の付着物（煤であろうか）がある。P299・P300は９～ 14層出土で、17世紀後葉の製品である。P299は薄手で、精良な胎土で丁寧な作りである。底部は平らにはなっていないが、体部との境に稜を持ち、体部は外反している。口縁端部の摘み上げは明瞭ではないが名残を残している。見込みは「の」の字状ナデで、体部のヨコナデがそれを切っている。P300はやや平底で、体部はわずかに「く」の字状に外へ開き、口縁端部の摘み上げも認められる。見込みは「の」の字状ナデで、体部との境に浅い凹線状のナデがある。P301は11 ～ 13層出土である。薄手大型で、底部は丸底に近くなるが、体部との境は比較的明瞭で、体部は外反するように開き、口縁で端面を形成している。P302は13層から出土している。丸底で、底部と体部の境ははっきりしない。体部は外反するようにして大きく開き、口縁端部の摘み上げは見られない。見込は「の」の字状ナデで、外面のナデは口縁端部付近のみになる。遺存部分には油煙痕は見られない。

P303 ～ P310は14層から出土している。14層からは17世紀中葉から後葉の土師器皿が大量に出土している。P303が17世紀後葉、ほかは17世紀中葉の製品である。P303は平底に近く、体部との境は比較的明瞭で、体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁端部の摘み上げは、わずかに名残がある程度である。口縁部には油煙痕があり、そのうち１か所は幅5.5㎝にわたって墨を塗ったようになっている。P304・P305は一括して出土したもので、ほぼ完形である。やや丸底で体部は真っ直ぐ開き、見込み凹線状のナデ、口縁の摘み上げはない。P304は口縁の2/3に、P305は口縁の3/4に油煙痕がある。P306は体部が外反し、口縁端部はわずかに摘み上げている。P307と同じだが、やや丸底に近い。内面

は一方向ナデである。口縁の1/3程度に油煙痕がある。P307は平底で、体部との境は比較的明瞭、体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁は内弯するように端部を摘み上げている。P308は体部がやや開いている。P307と同じだが、やや薄手で、体部の外への開きはP307より少ない。口縁には油煙痕がある。P309はP307と同じだが、体部はP308より立っている。口縁端部の摘み上げは見られず、口縁に油煙痕がある。P310は灰白色で精良な胎土を持っている。薄手で丸味のある平底で、体部との境は比較的明瞭であり、底面には板目状圧痕がわずかに認められる。体部はP307～P309ほどには開かず、緩やかな「く」の字状に外へ開いた後、口縁は内弯するようにして摘み上げている。見込みは一方向ナデが施され、口縁に油煙痕がある。

P311～P314は15層から出土して、P312が17世紀中葉かと思われるほかは17世紀後葉の製品である。P311は、体部が緩やかに立ち上がり外に開くが、口縁内面の端面は明瞭ではない。内外面ともヨコナデしている。P312は大型土師器皿である。立ち上がりは緩やかで丸底に近いが、板目状圧痕があり、底部中央がやや厚くなっている。底部と体部の境ははっきりしないが、体部はヨコナデされている。体部は外反するように大きく開き、口縁には端面がわずかに作られている。口縁には油煙痕がある。P313は中型土師器皿である。底部は丸味を帯びた平底で、体部との境は明瞭な稜は持たないものの明確である。内面も底部と体部の境には弱い圏線状の凹みがある。体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁はわずかに摘み上げの名残を残している。口縁部に1か所油煙痕がある。P314は、底部は丸底化し、体部との境は不明瞭になる。内面も底部と体部の境にはわずかな凹みが見られるだけである。体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁の摘み上げは認められない。口縁端部に油煙痕がある。P315・P316は18層から出土していて、どちらも薄手で平底である。P315は底部と体部の境は比較的明瞭で、内面は体部側に稜を持ち、口縁端部は内弯するように摘み上げている。胎土は精良でナデも丁寧、わずかに雲母を含んでいる。P316は底部と体部の境がはっきりしてきて、体部は大きく開かず、口縁端部は内弯するように摘み上げている。胎土は精良である。どちらも17世紀中葉の製品である。

P317は15層～21層上層から出土した16世紀の中国景徳鎮窯系磁器青花碗、いわゆる「蓮子碗」の体部片で、釉は白濁している。漆継の痕跡がある。P318は瓦溜から出土した肥前陶器灰釉碗である。口縁は欠損しているが、径が小さく細長い形の碗で、内底面と体部の境には段を持っている。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P319は瓦溜から出土している薄手大型土師器皿である。やや平底で、体部は外へ開いている。見込みは一方向ナデで、口縁端部には摘み上げがわずかにある。

P320～P329はⅢ層から出土している。P320は24層から出土した中国景徳鎮窯系磁器青花の輪花皿の口縁小片である。内面には蓮弁文と思われる文様がある。P321・P322は34層から出土している。P321は肥前磁器染付碗の底部である。体部径に対してあまり大きくない高台は、畳付のみ釉剥ぎされ平らになっていて、砂が付着している。文様は網目文であろうか。P322は肥前陶器鉄絵皿の口縁片である。16世紀末から17世紀前半の製品であろう。P323～P329は土師器皿で、P328は31層、P329は29～32層、それ以外は24層から出土している。P323は体部が外反し、やや平底で、体部との境は明瞭ではない。外底面には板目状圧痕のようなものが見られる。口縁に油煙痕が１か所ある。P323・P326は17世紀後葉の製品であろう。P324は薄手で、平底から体部は直線的に外に開いている。胎土は精良で粉質である。17世紀中葉の製品である。P325は小型土師器皿である。小さめの平底で、内面は底部と体部の境に凹線状のナデが入る。体部は緩やかな「く」の字状に開き、口縁端部はわずかに摘み上げている。胎土は精良でナデも丁寧である。P326は薄手で、外面は底部と体部の境が不明瞭になり、板目状圧痕かと思われるものがわずかにみられる。内面は底部と体部の境に凹線状のナデがわずかにあり、口縁は内外面ともきれいにナデられているが、摘み上げは見られず、油煙痕がある。P327はやや平底から丸く屈曲して立ち上がり、口縁は外反するが、端部を少し摘み上げている。内面から口縁外面はヨコナデを施しているが、特に口縁外面は強くナデられているので、体部との境に明瞭な稜を

持つ。胎土は硬質で、砂粒を多く含んでいる。17世紀前葉の製品である。P328は薄い中型土師器皿である。平底で体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁は摘み上げている。内底面は一方向ナデが施されている。精良な粉質胎土で、口縁に油煙痕がある。17世紀中葉の製品である。P329は小型土師器皿である。口縁端部の摘み上げは無く、器厚９㎜と厚手で、胎土は粉質である。17世紀初頭の製品であろうか。

P330・P331はⅣ層から出土している。P330は瀬戸・美濃の陶器灰釉皿底部片である。内外面に透明感のあるオリーブ灰色の釉が掛かっている。P331は土師器皿である。凸凹した平底で、そのまま丸く立ち上がるため体部との境は明瞭ではない。外面は口縁部のみ強くナデられているので、体部との境に強い稜を持つ。内面は底部と体部の境に、弱い凹線状のナデが入っている。口縁端部は内弯するように摘み上げている。胎土は砂粒を多く含み、海綿骨針・雲母も含んでいる。17世紀初頭の能登の製品であろうか。

P332は空堀覆土上層出土の中国景徳鎮窯系磁器青花皿の底部片である。高台内には染付の二重圏線があり、平行線状の擦痕が多くある。

３．瓦　（第160 ～ 174図、第26 ～ 28表）

本調査区からは粘土瓦･石瓦が多数出土している。石瓦については石製品の項で述べることとして、ここでは燻瓦が主体を占め、若干の釉薬瓦･越前赤瓦を含む粘土瓦について地点ごとに記述していく。なお、胎土および瓦当文様の分類は第84 ～ 89図に依っている。

SE3区　（第160図T041）

T041は両面に光沢のある黒褐色の釉が掛かる袖軒平瓦で、瓦当文様は九曜文である。

SW2区　（第160図T042 ～ T046）

図示したものは全て燻瓦である。T042は東側断割の近世整地土出土の軒平瓦である。胎土はA2で、厚手である。瓦当文様は三葉文Ｉと思われ、唐草文は左右で異なっている。T043は東側断割出土で、凸面側をきれいに調整し、凹面側はナデのみであるので、棟瓦か熨斗瓦と思われる。T044も東側断割出土で、器種は不明だが隅巴であろうか。胎土は砂粒を多く含み、細かい空隙も多く、厚手である。T045は11層出土の丸瓦である。胎土はB1であろうか。厚手で、内面調整はコビキＢと刺縫痕に棒状圧痕がわずかに見られる。T046は５層出土の熨斗瓦である。使用時には下になる凹面側は丁寧に調整されているが、上になる凸面側は未調整のままになっていて、側面に切断痕があるので、平瓦を半分に切っていると思われる。

SW4区　（第161図T047 ～ T049）

図示したものは全て光沢のある釉が掛かった釉薬瓦で胎土は１であり､近代以降のものと思われる。T047は銃弾廃棄土坑から出土した鬼瓦の一部で､胎土は赤橙色､両面に光沢のある黒褐色の釉が掛かっている。T048・T049は、表土・撹乱層から出土した軒桟瓦である。T048は、両面に光沢のある濃紫色の釉が掛かり、胎土は橙色である。瓦当文様は星文で、同タイプのものが石川門附属太鼓塀の平成19年からの解体修理時に、少数ではあるが屋根に葺かれていた[金沢城調査研究所2014c]。T049は光沢のある黒褐釉が両面に掛かり、胎土は暗赤褐色、瓦当文様は玉文Ⅳ類である。

NS2区　（第161図T050 ～ 174図）

NS2区からは石瓦と共に大量の粘土瓦が出土している。

T050・T051は越前赤瓦の軒平瓦で、T050は土坑１から、T051は土坑３から出土している。瓦当文様は半葉文である。胎土は硬質緻密で縞状を呈し、瓦当面と上面・側面に鉄漿が掛かっている。T050はT051より厚手である。T052は土坑３から出土した桟瓦で、ほぼ完形である。光沢のある黒褐釉が全面に掛かり、胎土は橙色で５Ｉであろうか。山部尻側に釘穴が1個ある。

T053 ～ T060は軒丸瓦で、T053はⅡ層、T054はⅡ・Ⅲ層、T055 ～ T058はⅢ層、T059は斜面下造成土、T060は斜面瓦溜から出土している。T053は梅鉢文Ⅱ類かⅢ類の燻瓦で、花弁は丸く盛り上がっている。T054 ～ T059は巴文の燻瓦で、同笵と思われる。瓦当文様は巴文Ⅱ-1c類で、珠文は16個、巴の尾は細く稜を持っている。瓦当面に木型の木目が強く残り、T055・T057・T058は木型を当て直したのか、少しずれている。内面調整はコビキＢと布圧痕が見られ、一部縫合せ痕のようなものもある。胎土がT054・T056・T059はA2、T055・T057・T058はC2と異なっているのは、焼成の違いであろうか。T060は越前赤瓦で、遺存部分は全部鉄漿が塗られている。瓦当文様は巴文Ⅱ-2a類で、盛り上がった珠文とやや扁平な巴文からなっている。瓦当面と体部内面には自然釉が掛かっている。

T061 ～ T065は燻軒平瓦である。瓦当文様は中心飾りの無いものもあるが、三葉文Ⅵ類と思われる。左右の唐草の形が異なり、三葉文の向かって右上に短い縦線があるなど、全て同笵と思われる。瓦当面の後ろの屈曲部に櫛目が残るなど成形技法も同じであるが、胎土はT061 ～ T063がC2、T064・T065がA2と異なっている。T061・T062がⅡ層から、ほかはⅢ層から出土している。T066は光沢のある黒褐釉が掛かった軒桟瓦の小丸部で、表土から出土している。瓦当文様は「卍」で、胎土は灰褐色の５Ｉであろうか。

T067 ～ T087は丸瓦で、T067が越前赤瓦である以外は全て燻瓦である。T069がⅠ～Ⅱ層、T067・T070 ～ T076がⅡ層、T068・T078 ～ T081が斜面瓦溜、T082 ～ T086がⅢ層、T087が斜面瓦溜下から出土している。T067は被熱のためか外面が灰色を呈し、一部に自然釉が付いている。胎土は硬質緻密で縞状を呈し、内面調整はコビキＢと刺縫痕で、体部上面に径2.3㎝の釘穴が縦に２個あけられている。T068 ～ T087は、胎土はT074・T084・T085がC2、T080がB1、T081 ～ T083とT086・T087がA2である以外はB2であり、内面調整はコビキＢと布目痕・刺縫痕があり、棒状圧痕が見られるものもある。T071は体部上面中央に「○」の陰刻のようなものがある。そのほかに「○」の墨書のようなものが見られるものがあり、T075は側面に２個、T078は内側面割れ口近くに、T081・T083は外側に１個ある。T083は玉縁の先端を斜めのヘラケズリを入れて細くしている。T085は外面に煤が付着していて、一部平坦になっている。

T088 ～ T102は平瓦である。T088は越前赤瓦の尻部で、撹乱１から出土している。胎土は硬質緻密だが縞状を呈し、所々に空隙がある。鉄漿を上面と側面に刷毛塗りしている。T089 ～ T099・T102は燻瓦で、T100・T101は越前赤瓦である。T089 ～ T092がⅡ層から、T093・T094・T101・T102がⅢ層から、T095 ～ T100が斜面瓦溜から出土している。T095はほぼ完形で、凹面は丁寧にナデて銀色を呈しているが、凸面は未調整でザラザラしている。正面に四角い焼台の痕跡があり、側面には「○」の墨書がある。T096は凹面にはナデの横方向の線状痕が残り、凸面には縦の刷毛目状の調整痕がわずかに見える。T100は胎土は硬質で白い縞が入り、凹面と正面のみに薄い鉄漿が塗られている。T101は胎土は硬質緻密だが強い縞状を呈し、わずかに空隙がある。鉄漿を凹面と側面に刷毛塗りしている。

T103・T104はⅡ～Ⅲ層から出土している越前赤瓦の熨斗瓦である。T103の胎土は硬質で縞状を呈する。側面は両側ともきれいに調整され、凸面の1/3程度と一方の側面にだけ鉄漿が塗られている。凹面には櫛状具による平行沈線が引かれている。T104は切り口が波状を呈していて､平滑になっている。胎土は硬質緻密で大きな空隙がある。T105は燻瓦の右谷丸瓦で、ほぼ完形である。Ⅱ層から出土していて、胎土はB1、内面調整はコビキＢと刺縫痕がある。玉縁部近くには径1.7㎝の釘穴が１個ある。T106はⅢ層から出土している燻瓦の左谷丸瓦で、内面調整はコビキＢと布目痕が見られる。体部の玉縁側に焼成前に開けられた径1.4㎝程度の釘穴があるが、両面とも縁が割れている。T107はⅡ層から出土した燻瓦で、隅平瓦であろうか。T108も燻瓦で、掛瓦であろうか。水返しが付いていて、上面は丁寧にナデが施されている。斜面瓦溜から出土している。T109・T110は燻瓦の棟込瓦で、菊丸瓦の体部と瓦当面であろうか。T109は斜面瓦溜とⅡ層から、T110は斜面瓦溜から出土している。T110は、瓦

当文様は菊花文で、手前に８弁、奥に８弁の16弁の菊花であろうか。

４．石製品　（第175 ～ 198図、第29 ～ 31表）

本調査区では、NS2区から石製の瓦がまとまって出土している。笏谷石と思われる緑色凝灰岩をツル・チョウナなどの工具を用いて加工しており、福井県丸岡城の天守閣に葺かれている石瓦と似ているが、丸岡城のものはコタタキでチョウナ痕を丁寧に消しているが、金沢城のものはチョウナ痕が残るなど、やや粗い作りに見える。以下に、器種ごとに述べていく。なお、図版において実測図中に工具痕を描き入れたものと拓本を添付したものがあるが、遺存度の高いものなど一部にのみ工具痕を描き入れたものであり、工具痕の強弱ではない。また、写真の色調にはバラつきがあり、必ずしも遺物の色を正確に表現しているものではないことをお詫びしておきたい。

鬼瓦・鳥衾　（第175図）

S006は鬼瓦、S007は鳥衾で、Ⅲ層から出土している。鬼瓦は両側面に突起がある形で、上面が丸く刳り込まれていてそこに鳥衾が乗ると思われる。中央には三つ葉葵の紋が陽刻されているが、茎が長い古い形であり、本来葉脈が描かれているところに丁子のようなものが陽刻されている。背面には、上端幅16.4㎝、深さ2.8㎝のわずかに下広がりの台形の窪みがある。良質の石材を使い、非常に丁寧に作られている。

掛瓦　（第176・177図）

S008は軒桟瓦のようではあるが、ほかの桟瓦が左桟瓦であるのに対して山部の位置が逆であり、長さが短いので掛瓦（箕甲瓦とも呼ばれる）と思われる。Ⅲ層から出土している。軒平部は文様区がS011・S012のように四角ではなく木瓜形であり、文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませている。中心飾りが欠損しているが唐草文はそれぞれが独立した形であり、S012と似ている。小丸部は扁平な左回りの巴文Ⅰ類で、軒丸瓦と同じである。

軒丸瓦・軒平瓦　（第178図）

S009･S010は軒丸瓦で、巴文が陽刻されている。２点とも左回りの巴文で、珠文が無いⅠ類である。巴は扁平で頭部が小さく尾が幅広い、粘土瓦には見られないタイプである。福井県丸岡城の天守閣に葺かれている石瓦の軒丸瓦は巴文であるが、陰刻で巴の形は粘土瓦のものと似ている。

軒平瓦には、文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませているS011と、文様区全体を窪ませて、中心飾りと唐草文を浮き彫りにしているS012がある。S011は中心飾りが欠損しているので分類不明である。S012は唐草が１本ずつ独立していて、粘土瓦の三葉文Ⅵ類に似ているが、中心飾りは四葉である。軒丸瓦・軒平瓦ともⅢ層から出土している。

丸瓦　（第179 ～ 185図）

S013 ～ S039は丸瓦である。図示したものは全てⅢ層から出土している。完形であれば長さ47㎝、幅15㎝、厚さ11㎝程度になり、上面はチョウナによってきれいに調整されているがチョウナ痕が残り、下面はＶ字状に抉られていて斜め方向のツル痕が強く残っている。体部は玉縁側が厚く、正面側が薄いが、玉縁側の断面形で分類すると、厚く、側面が垂直に近く、下面の抉りはＶ字状で深い１類と、厚さがやや薄くなり、側面は横に開き、下面の抉りが浅くなる２類がある。玉縁部は直線的で稜を持つ山型のものをＡ類、緩やかなカーブの山型のものをＢ類、Ａ類とＢ類の中間で、直線的だが中央に稜を持たないものをＣ類とした。S013 ～ S016は体部形状が1類で、玉縁はS016がＣ類であるほかはＢ類である。S017 ～ S033・S037は体部形状が２類で、玉縁はS020 ～ S022・S026 ～ S029がＡ類、S017 ～ S019・S025・S031・S032がＢ類、S023・S024がＣ類である。S038・S039は玉縁部が無く両端が平らに調整されている。棟込み瓦に似た形状であるが、断面形などが丸瓦の正面側と同様であるので、棟瓦に接する部分の丸瓦と考えた。長さは24.8㎝と16.2㎝と異なるが、幅は共に14.3㎝でほかの丸瓦よりやや細い。

平瓦（第186 ～ 191図）

S040 ～ S059は平瓦である。S040 ～ S042がⅡ層、それ以外はⅢ層から出土している。上面と正面・側面はきれいに調整され、下面は頭部側1/3程度を平滑に調整し、残りはツル痕が強く残っている。S040は尻部側、S041は頭部側である。S042・S043は完形に近く、S042は全長54.8cm、広端遺存幅31.0cm、S043は全長55.35cm、広端幅30.7cmを測る。S046は上面尻部側1/2程度が湾曲せず水平になり厚くなっているので、面戸付平瓦と思われる。S047・S048は長さが31.2cmと23.2cmと短いので、棟瓦に接する部分と思われる。どちらも尻部側端面が斜めに調整されている。

桟瓦（第192図～第195図S070）

S060 ～ S070は全て左桟瓦である。上面と正面・側面は平滑に調整されているが、下面は頭部側10 ～ 15cm程度と山部は比較的きれいに調整されているが、それ以外はツル痕が強く残っている。平部側縁は３cmほど肥厚し上面側に段を持ち、正面も３cm程度肥厚し下面側に段を持っている。完形であれば長さ55cm、幅40cm程度になると思われる。S065には下面に「△」の中に「・」の陰刻のようなものがある。ほかの石瓦が殆どⅢ層から出土しているのに対して、桟瓦はⅡ層や斜面上部流土から出土している。

棟瓦（第195図S071 ～第198図S078）

S071 ～ S077は石段の雁木石に転用されている。四角い棒状で、側面は平滑に調整されているが、上面にはツル痕が残り、下面は深いＶ字形に抉られていてツル痕も強く残っている。片方の端部に幅19cm程度、長さ１～２cmの突起があるもの（S071･S072）と、突起のないもの（S073 ～ S077）がある。長さはS072が86cmと最も短く、S071が102cmと最も長い。ほかは92 ～ 94cmである。幅は22cm程度、高さは12.5cm程度である。上面の中央部分は、角などが少し摩耗していて、石段として使用された痕跡と思われる。S078は正面と側面付近は平滑に調整されていて、ほかの部分にはツル痕が残っている。

その他（第198図S079 ～ S084）

S079は平らな板状の石製品で片側が厚くなっている。S080 ～ S082・S084は平瓦のようなカーブがなく平らな石製品で、上面と側面は平滑に調整されているが、下面にはツル痕が強く残っている。S083は四角い穴が開けられた石製品で、石瓦の尻部付近に開けられた穴の周辺かとも思えるが、穴の位置が角に近すぎるので、明確ではない。

SW3区（第198図S085）

S085はSW3区西の旧陸軍施設側溝出土で、最大厚が11.7cmと厚く、形はややカーブしていて、凸面側は平滑に調整され、凹面側はチョウナ痕が残っている。

５．金属・革製品（第199 ～ 206図、第32・33表）

本調査区ではSW4区の銃弾廃棄土坑から大量の金属製品・革製品が出土していて、ベルトとバックルのように一体化している製品も多いので、一括して記述していく。

M036 ～ M070は、銃弾廃棄土坑から出土したものである。M036 ～ M047は銃弾であるが、薬莢に２本の筋が入れられていることから、演習用で実際には発火しない擬製弾（演習弾）である。M036 ～ M038は九九式小銃用か九二式重機関銃用の擬製弾である。M039は擬製弾が５発、ひとつの挿弾子に載った状態で、M040は４発、載った状態である。M041 ～ M045はM036 ～ M038より弾頭が尖っているので、三十八年式小銃の擬製弾である。M044は５発、M045は３発がひとつの挿弾子に載った状態である。M046･M047は、先端が丸く、その下に横に２本沈線が巡っている。三十年式小銃の擬製弾である。九九式小銃は昭和14年（1939）皇紀2599年に、九二式重機関銃は昭和７年（1932）皇紀2592年に制定された。三十八年式小銃は、明治38年（1905）に制定になり、翌年より生産開始、昭和16年（1941）まで生産された。常設師団への配備が完了したのは大正３年（1914）頃である。三十年式小銃は、明

治30年（1897）に制定され、主に日露戦争に使用された。７年間しか作られていないが、三十八年式が登場すると、第１次世界大戦にかけて中古兵器として輸出されたり、国内では各種学校の教練に使われた[須川薫雄1995]。M048・M049は機関銃へ送る銃弾を載せた真鍮製の保弾板である。九二式重機関銃、または大正３年（1914）に制式化された三年式機関銃の保弾板と思われる。M048は幅6.55㎝の薄い真鍮製の板に３列に連続して穴を開けて片側に折り込んでいる。平らな側には一部布が付着している。M049も同様のもので、平らな面には漆喰のようなものが付着している。銃弾廃棄土坑からはほかにも多数出土している。

M050・M051は革製ベルトのバックル付近であろうか。バックルは鉄製である。M051はM055のベルトより細く、２枚縫い合わせていないように思われる。M052は鉄製品で、ベルト等の長さを調節するための部品であろうか。M053・M054は革製品である。M053は拳銃の、M054はライフル銃のケースであろうか。袋状に縫い合わされている。M055は革のベルトの先端部分。２枚の皮を糸で縫い付けて、先端近くに銅製（一部鉄製）のスナップボタンが付いている。同様のものが大量に出土している。M056は革製品に銅製かと思われるのスナップボタンが付いている。M055のベルトと同様のものであろう。M057は革製品で、馬具であろうか。留め穴の開いたベルト状の革を縫い合わせてある。M058はハトメであろうか。M059は先端がＵ字状になり、何かに引掛けるような金具である。背面に今は外れているが布状のものが付着していた。騎兵銃用の負革の先端の金具であろうか。M060は鉄製品で、輪状のものに直径の位置に真っ直ぐな棒状と、それと直交する位置に跨ぐように曲げられた棒状のものがついていて、更にＳ字状のものが輪状の部分に引掛けるように付いている。馬具の一部であろうか。M061はＴ字状の鉄製品である。断面は円形で、縦棒の下端には小さい突起が２か所付く。スコップなどの持ち手部分であろうか。M062・M063は木製の瓢箪型の握り部分に、板状で先端が細くなっている鉄製品が付けられている。工具であろうか。M064・M065は、下部は鉤状になり、上部は薄い板を三角形の袋状に折って、鋲で留めている。M066は鉄製品で、輪状の部分に通っているＵ字状の部品は断面形が逆Ｕ字状になっているので、木・皮などにつけてフックが掛かる形になっていたのであろうか。M067は鉄製のチェーンで、三角形のものが繋がっている。現在は錆のために曲がったままであるが、図は伸ばした形に復元した。M068は四角い輪にバックルが付いたような鉄製品である。

M069は立方体の缶である。上面には一つの隅にネジ式の蓋が付くと思われる口がある。裏面には、×形の沈線があり、正面には、×形の沈線の中央に、おそらく商品名等が書かれた紙が貼られていたのであろう方形の凹みを作っている。凹みの下には、墨で「内容液ハ上ノ線以上　ニ収カ容カスヘカラス」と２行で書かれている。凹みの上部にも２文字の墨書があるように思われるが判読できない。M070は直径9.3㎝、高さ３㎝の円筒形の合子である。蓋には梅の木と鳥（鳳凰か）が陰刻されている。陰刻部分に一部赤い色が見えるので、赤彩されていたのであろう。包んでいたと思われる薄い布が一部残っている。蓋と身が接着した状態で、開けることはできないが、重いので、内容物が入っていると考えられる。

SE3区とNS1区の表土から出土した銅銭を図示した。M071は寛永通宝である。裏面には孔の対角線方向に線が入る。鋳キズであろうか。M072は1/2遺存しているが、表面の文字は読めない。M073 ～ M085はNS2区から出土したものである。M073は、腕時計のベルトのバックルであろうか。裏面に「PATENT」と陰刻されている。M074 ～ M076は銅釘である。体部断面は方形ないしは不整四角形で、頭部は略円形である。M077・M078は鉄釘で、頭巻き釘かもしれない。体部断面は四角形である。M079 ～ M082も鉄釘である。M081には木質部が残っている。M083は目釜か。錆びているためにはっきりしないが、鉄製具折れ釘が付いていると思われる。M084は鉄製品の持ち手部分であろうか。断面が扁平な隅丸方形の棒状のものの一方の隅に穴が開いている。錆のために石が付着している。M085は鉱滓である。磁石にわずかに反応するので、鉄分が含まれていると思われる。

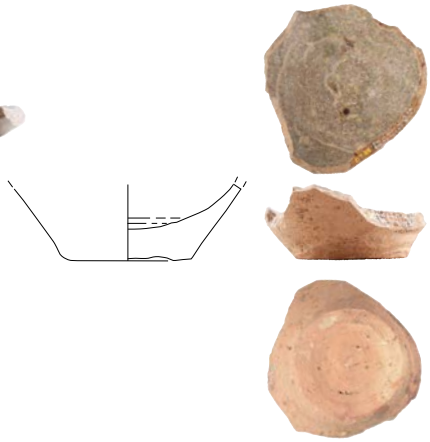
P224　200003-B015

P226　200003-B013

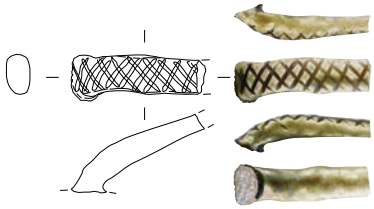
P227　200003-B012

P225　200003-B011

P228　200003-B014



P229　200003-D069



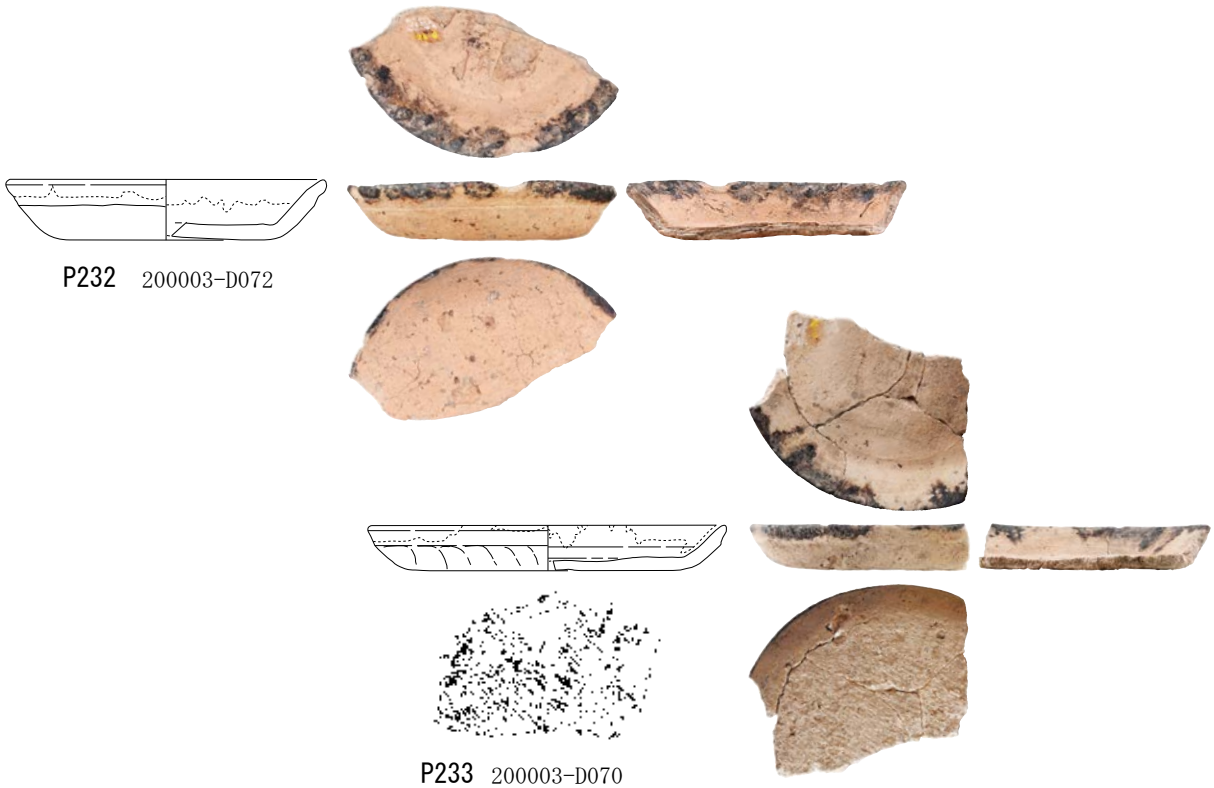
P230　200003-B016

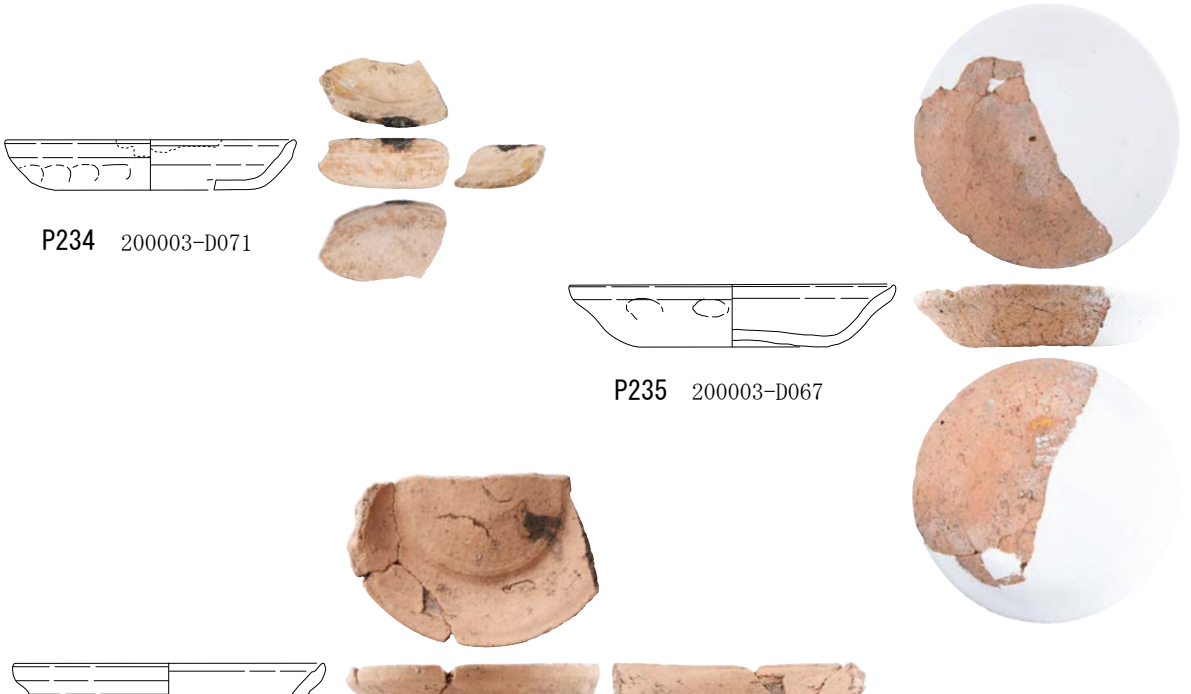
P231　200003-D073

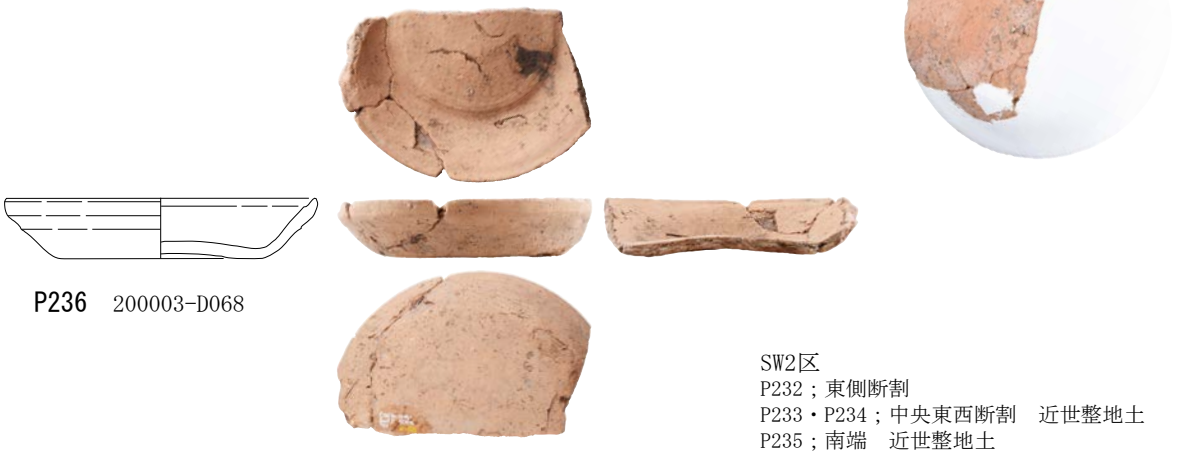
SW2区
P224；南　整地土検出面
P225；東側断割
P226・P227・P229；中央東西断割　近世整地土
P228；整地土
P230；南端東西断割
P231；東側断割北　整地土

S=1/3
0　10cm

第135図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器1







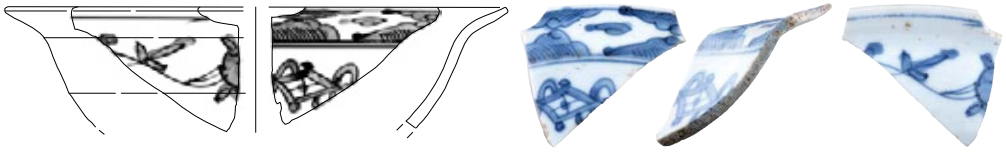
SW2区
P232；東側断割
P233・P234；中央東西断割　近世整地土
P235；南端　近世整地土
P236；整地土

S=1/3
0　10cm

第136図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器2

P237 200003-B023

P238 200003-B022



P239 200003-B021

P240 200003-B020

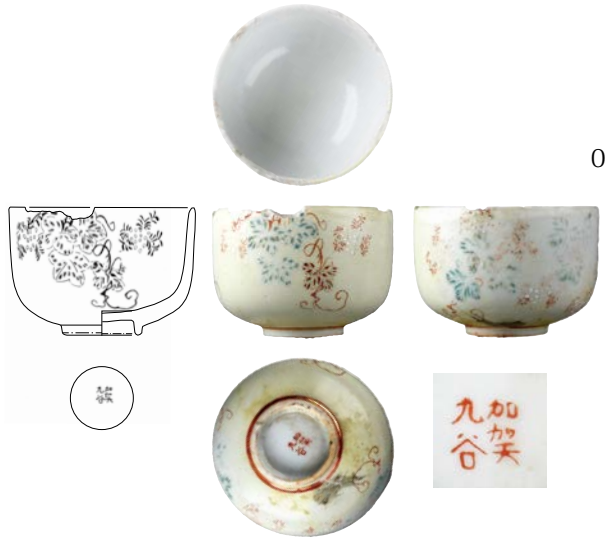
P241 200003-B019

SW2区
P237・P238
SW3区
P239；北東隅　断割
P240・P241；西　表土

S=1/3
0　10cm

第137図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器3

P242　200003-B028



P243　200003-B035

P244　200003-B034

SW3-4区
P242；境　撹乱、SW4区　北　撹乱、NS1区　表土
P243・P244；現代土坑

S=1/3
0　10cm

第138図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器4

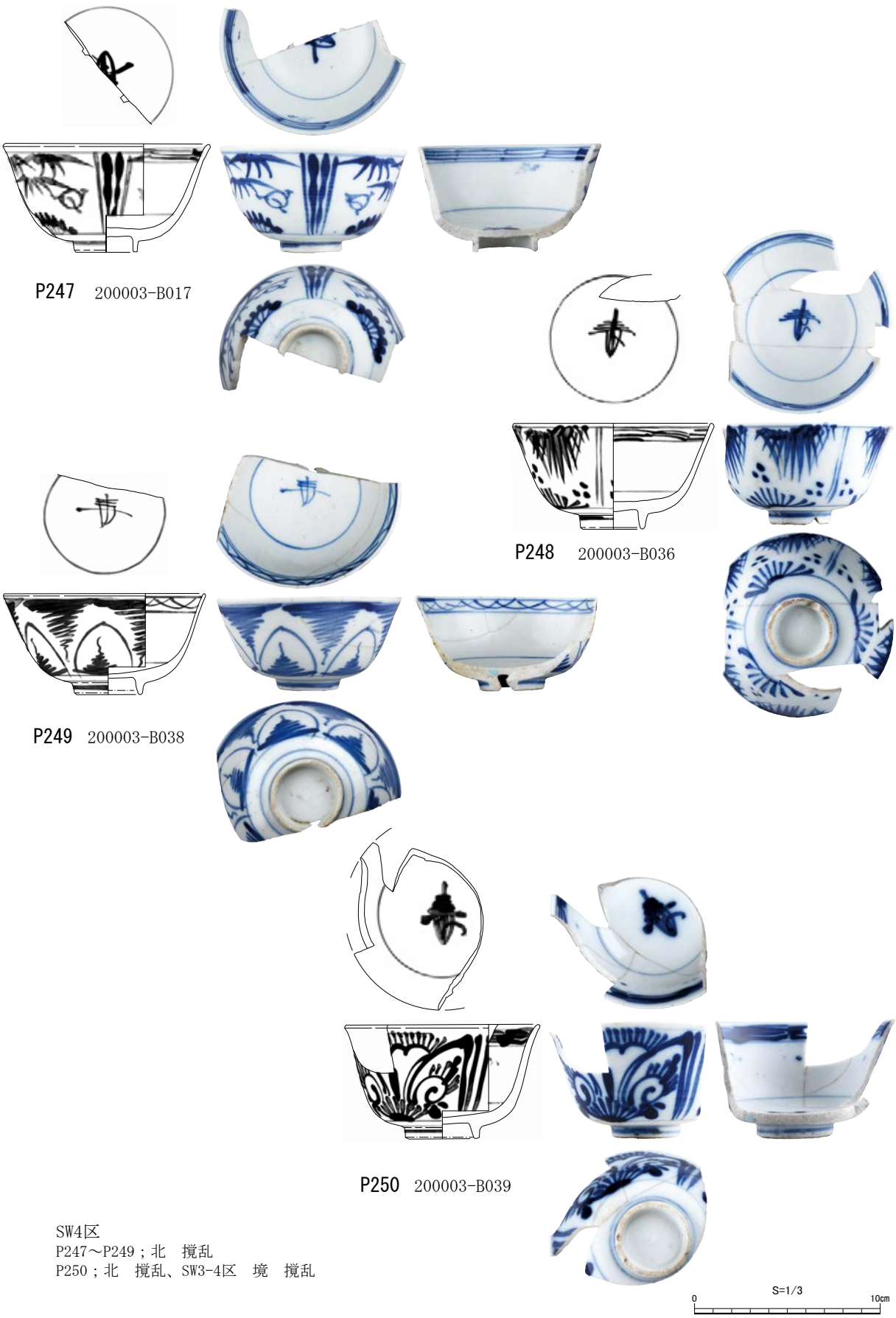
P245　200003-B027

P246　200003-B024

SW4区
P245；SK07、北　表土、撹乱
P246；SD01

S=1/3：P245
S=1/4：P246

第139図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器5



第140図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器6

P251　200003-B037

P252　200003-B040

P253　200003-B018

SW4区
P251～P253；北　撹乱

S=1/3
0　10cm

第141図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器7

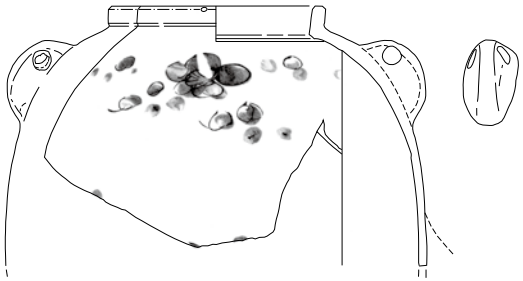
P254　200003-D074

P255　200003-D075

SW4区
P254；北　撹乱、SW3-4区　境　撹乱
P255；北　撹乱

S=1/3
0　10cm

第142図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器8



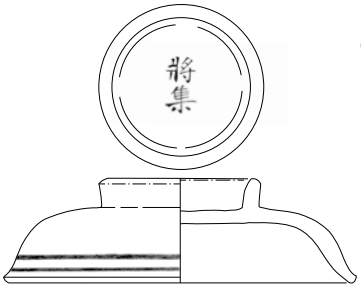
P256　200003-B041

SW4区
P256；北　撹乱

S=1/3
0　10cm

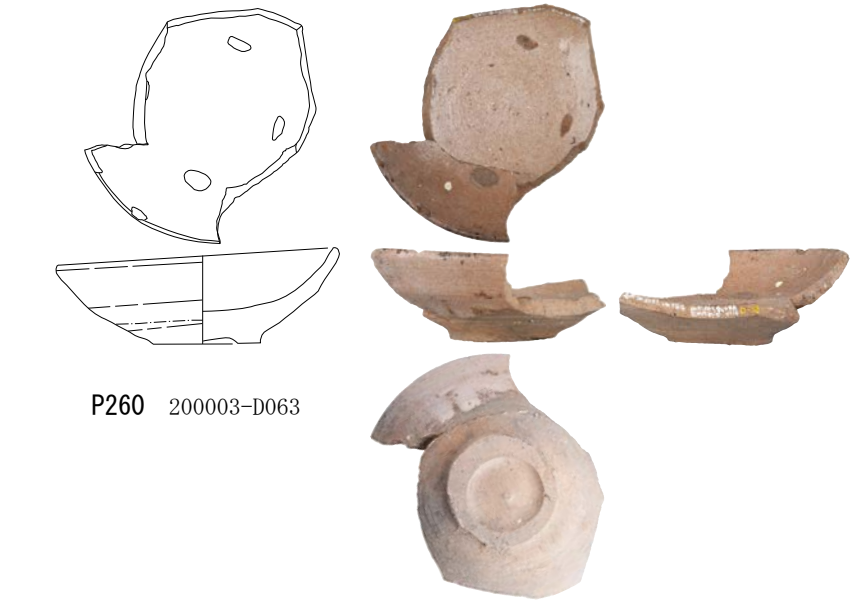
第143図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器9

P257　200003-B026



P258　200003-B048

P259　200003-D062

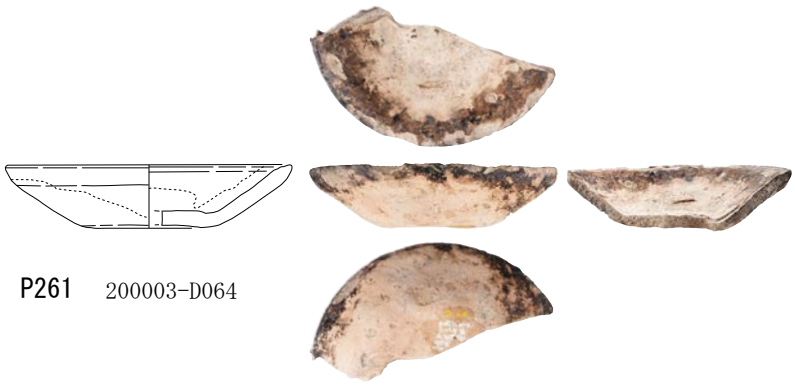


P260　200003-D063

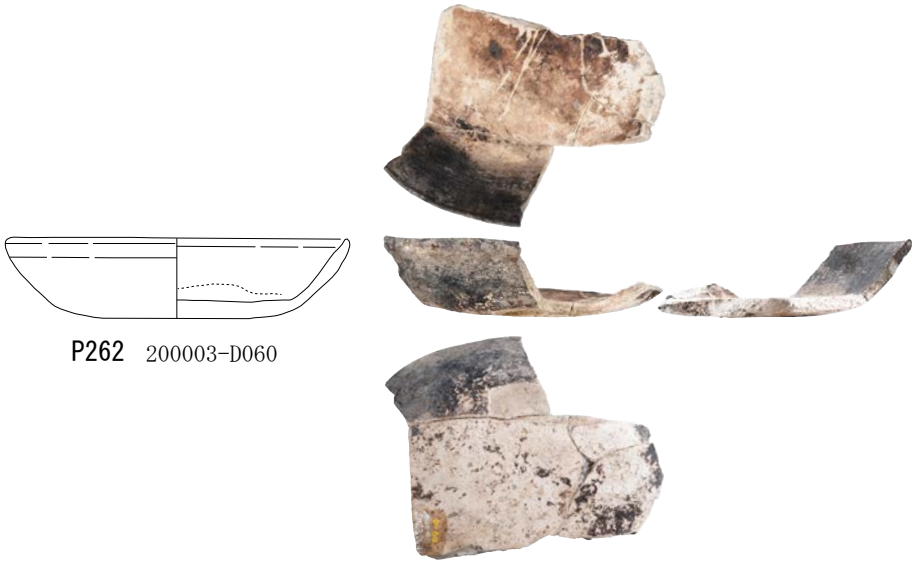
SW4区
P257；中央　表土・撹乱
P258；撹乱
SW5区
P259；南壁（栗石面）19層
P260；東　南側断割中央

S=1/3
0　10cm

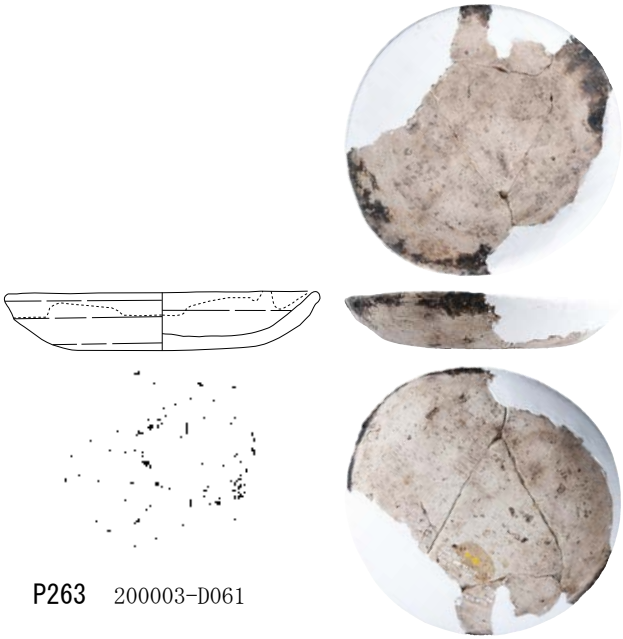
第144図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器10



P261　200003-D064



P262　200003-D060

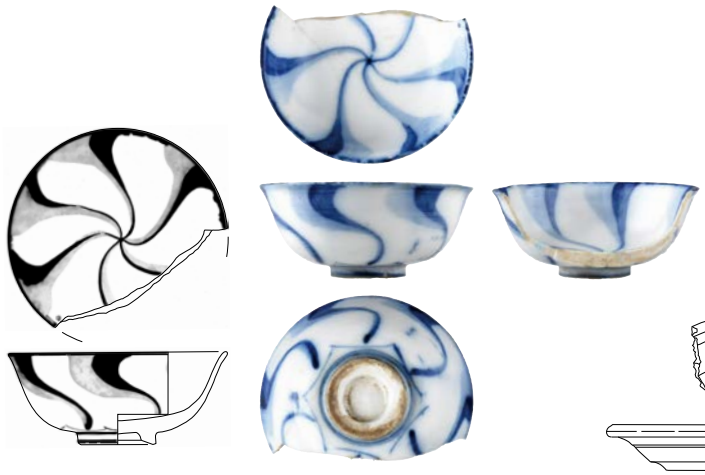


P263　200003-D061

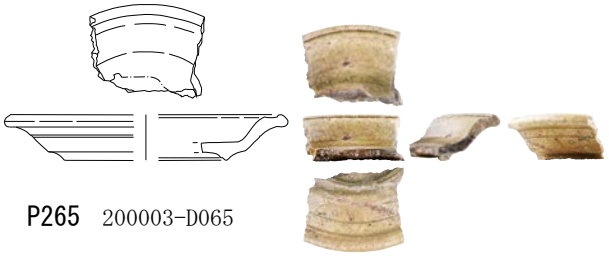
SW5区
P261；東　南側断割
P262・P263；中央　撹乱

S=1/3
0　10cm

第145図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器11

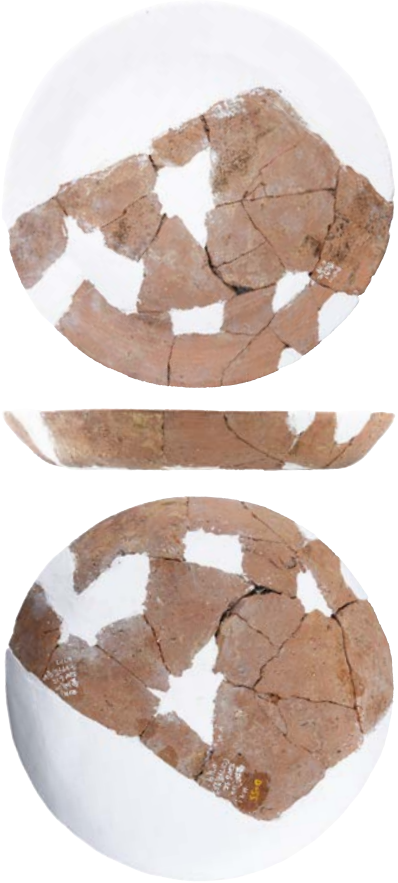


P264　200003-B031



P265　200003-D065

P266　200003-D059

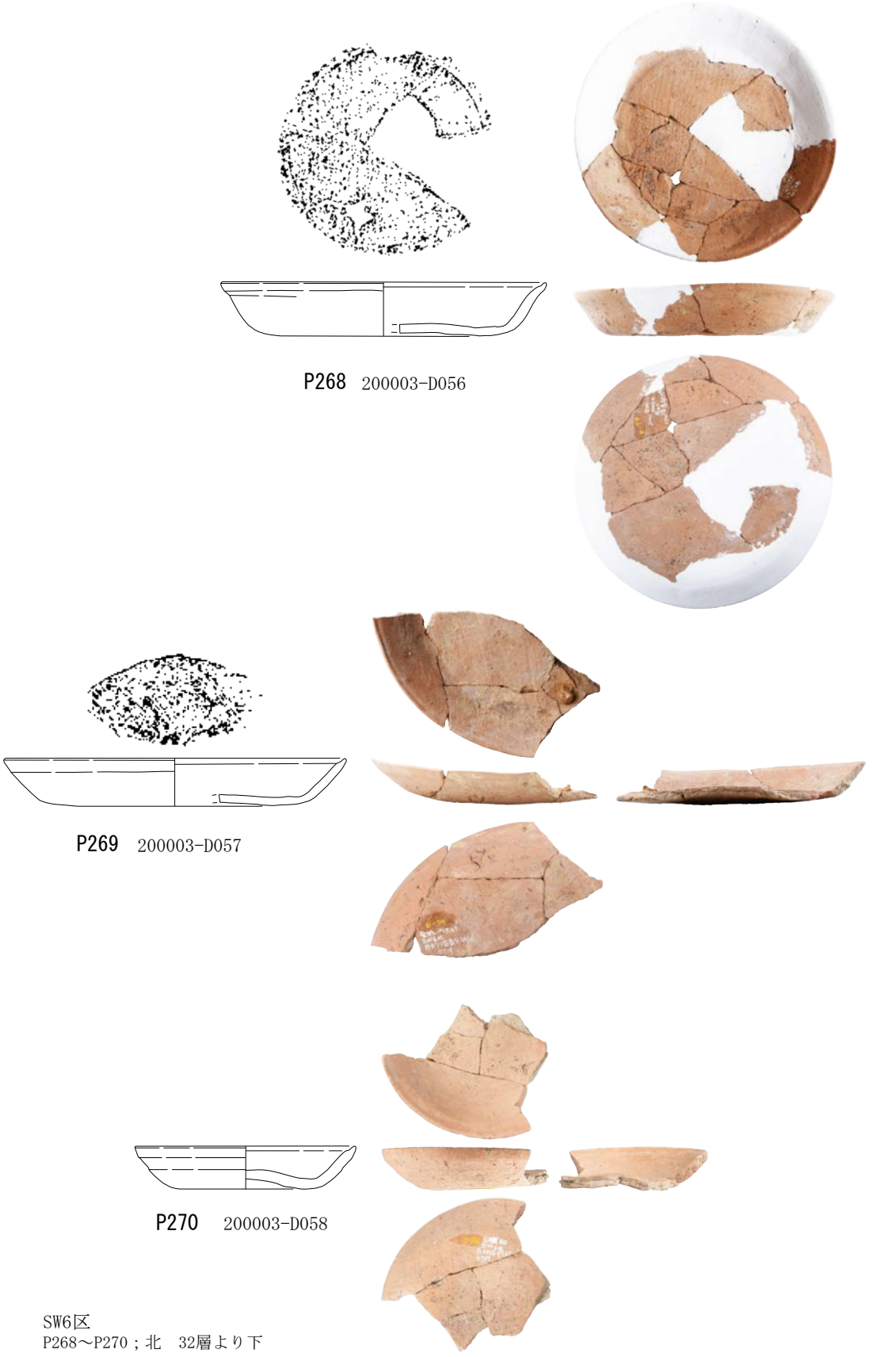


P267　200003-D055

SW6区
P264；撹乱
P265；地点不明
P266；北　32層より下
P267；北　32層より下、北

S=1/3
0　10cm

第146図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器12

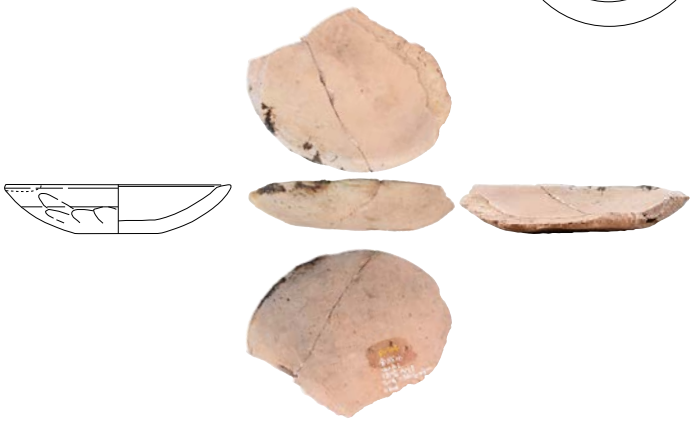


第147図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器13

P271　200003-B029

P272　200003-B033

NS1区
P271；表土
P272；5120N　裏込栗石中
P273；5120N　北斜面　断割



P273　200003-D034

S=1/3
0　10cm

第148図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器14

NS1区
P274；斜面下端
P275・P277；斜面下端　断割　堀覆土
P276・P278・P280；斜面下　堀覆土
P279；斜面下端　堀覆土

第149図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器15

P281 200003-D049

P282 200003-D041

P283 200003-D039

P284 200003-D038

P285 200003-D042

NS1区
P281・P282・P285；斜面下　堀覆土
P283・P284；斜面下端　断割　堀覆土

S=1/3
0　10cm

第150図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器16

P286　200003-D046

P287　200003-D035

P288　200003-D043

P289　200003-D044

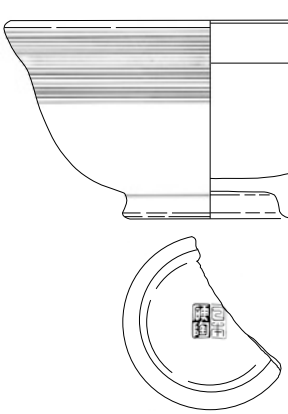
P290　200003-D045

NS1区
P286・P288～P290；斜面下　堀覆土
P287；斜面下端　堀覆土

S=1/3
0　10cm

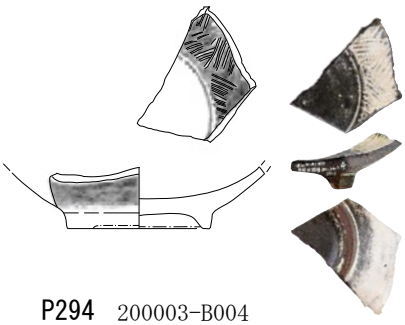
第151図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器17

P291　200003-B032



P292　200003-B042

P293　200003-B005



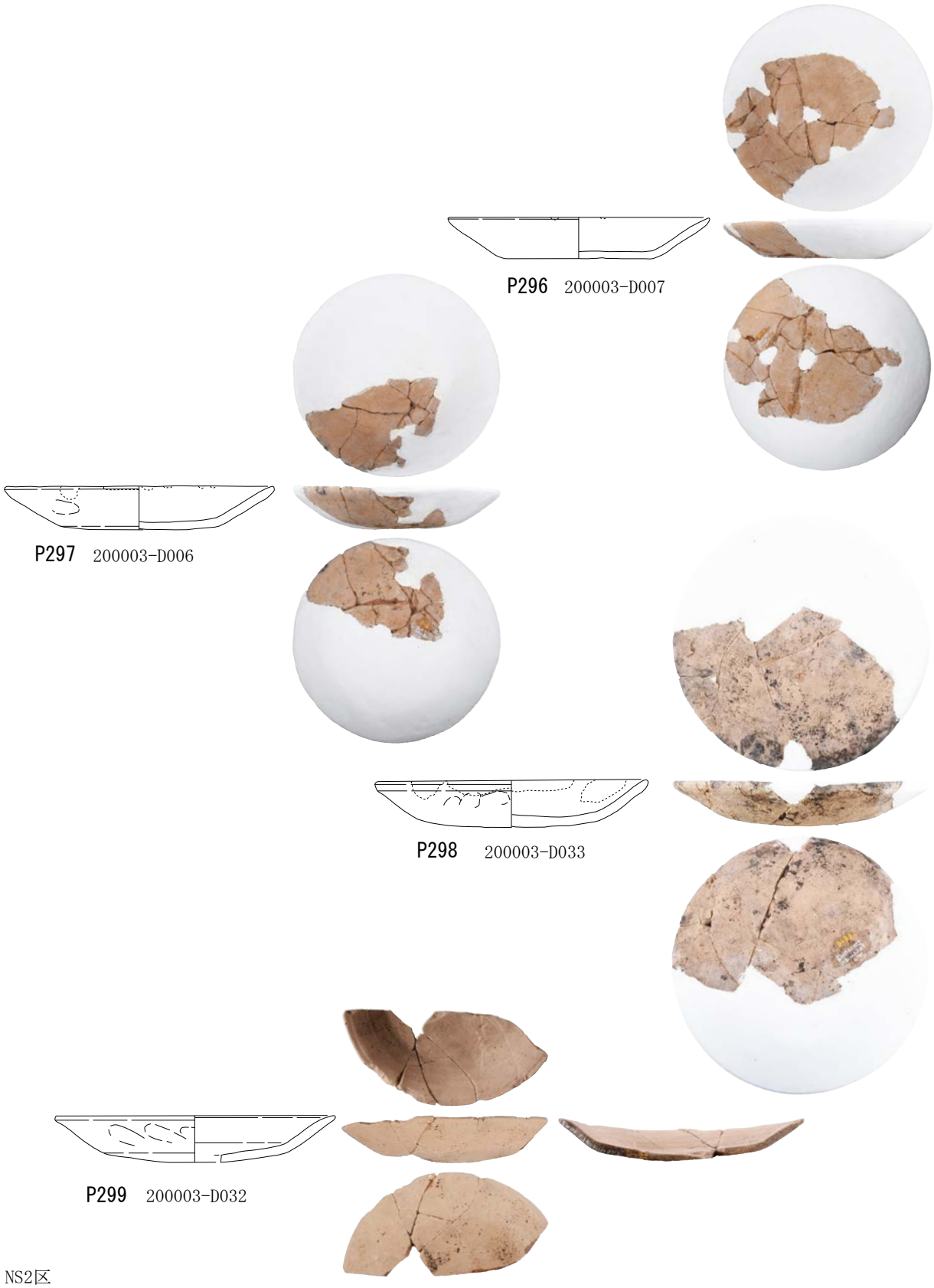
P294　200003-B004

P295　200003-D018

NS2区
P291；表土
P292；5120N　北拡張　8層（Ⅰ層）
P293；斜面　15層（Ⅱ層）
P294；5120N　北拡張　9～11層（Ⅱ層）
P295；5120N　北　12層（Ⅱ層）

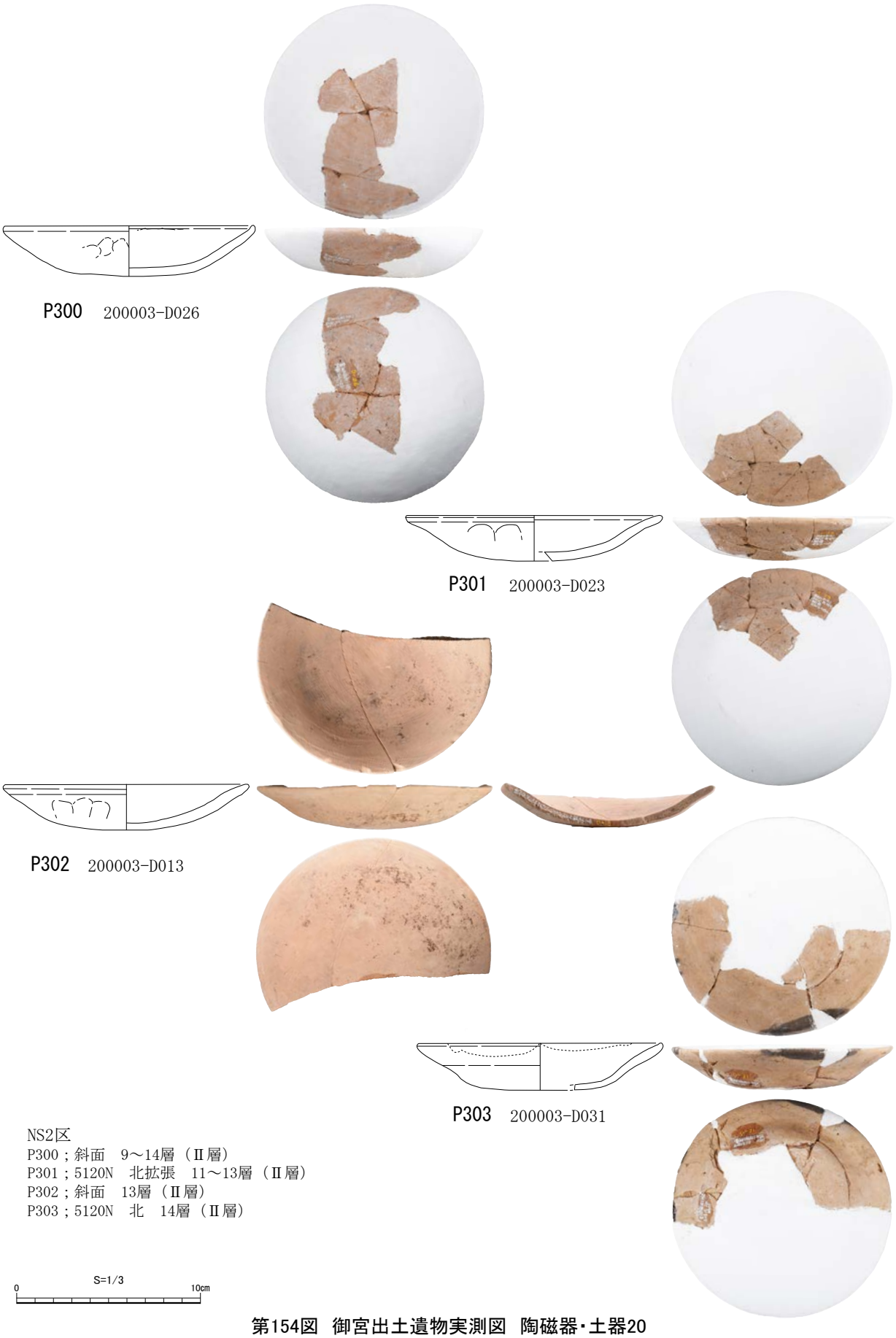
S=1/3
0　10cm

第152図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器18



NS2区
P296・P297；5120N　北　流土　9層（Ⅱ層）
P298；斜面　流土　11層（Ⅱ層）
P299；斜面　9～14層（Ⅱ層）

第153図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器19

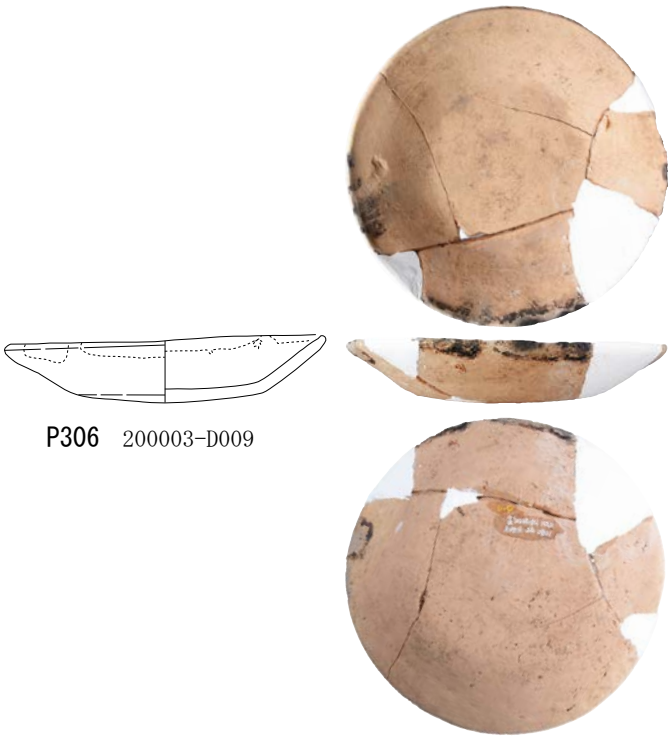


NS2区
P300；斜面　9～14層（Ⅱ層）
P301；5120N　北拡張　11～13層（Ⅱ層）
P302；斜面　13層（Ⅱ層）
P303；5120N　北　14層（Ⅱ層）

第154図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器20

P304　200003-D002

P305　200003-D003

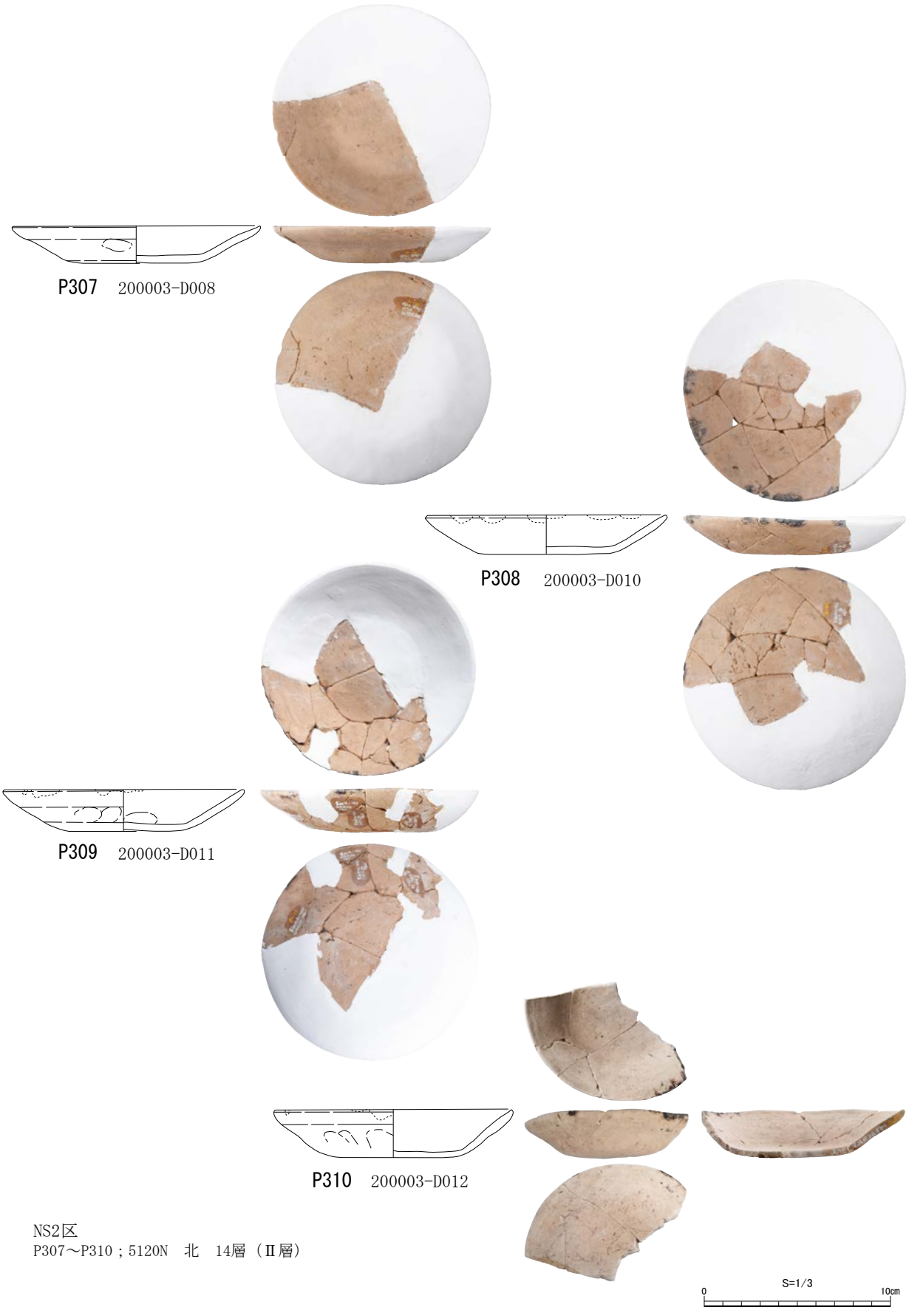


P306　200003-D009

NS2区
P304・P305；5120N　北　流土　14層一括（Ⅱ層）
P306；5120N　北　14層（Ⅱ層）

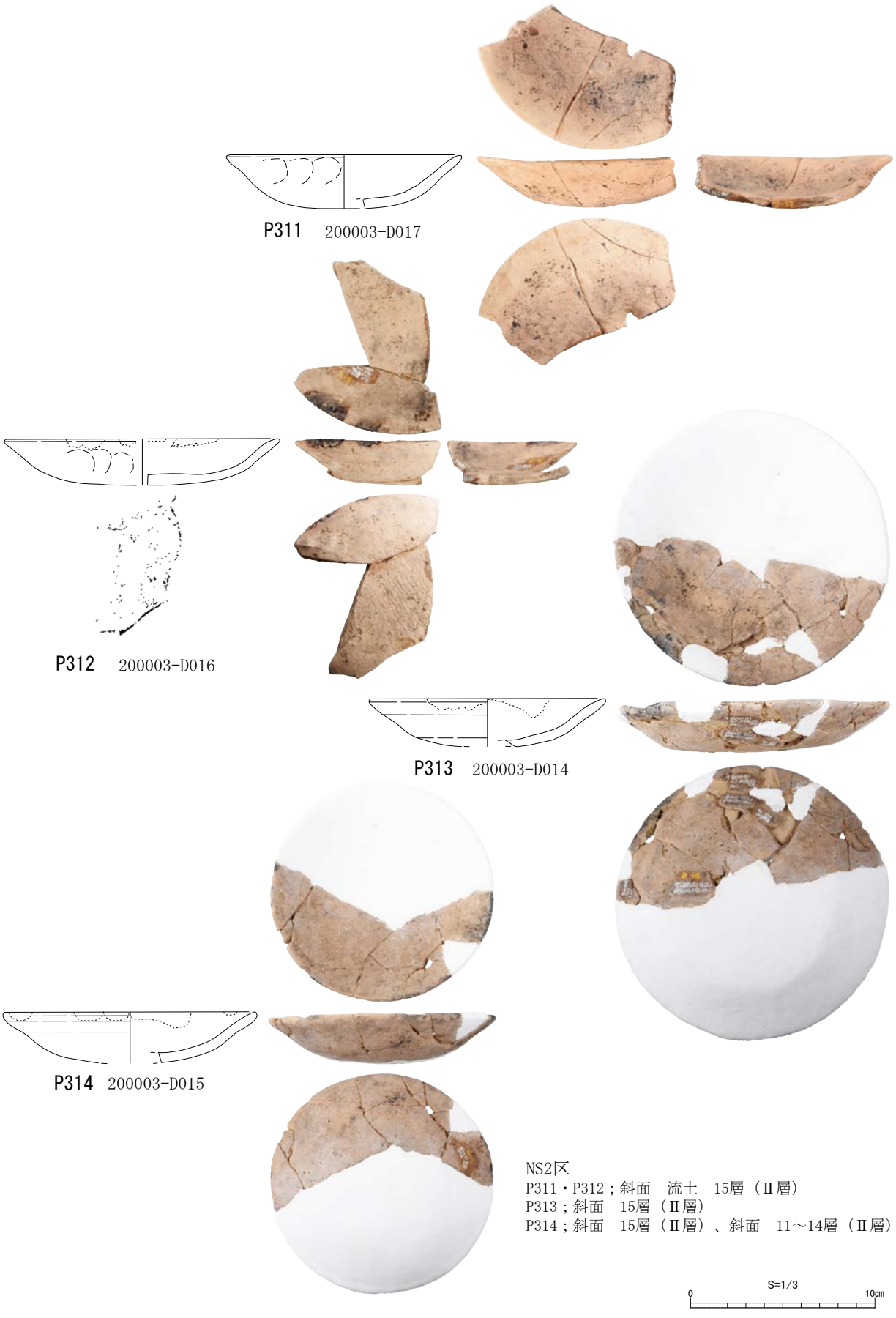
S=1/3
0　10cm

第155図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器21



NS2区
P307～P310；5120N　北　14層（Ⅱ層）

第156図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器22

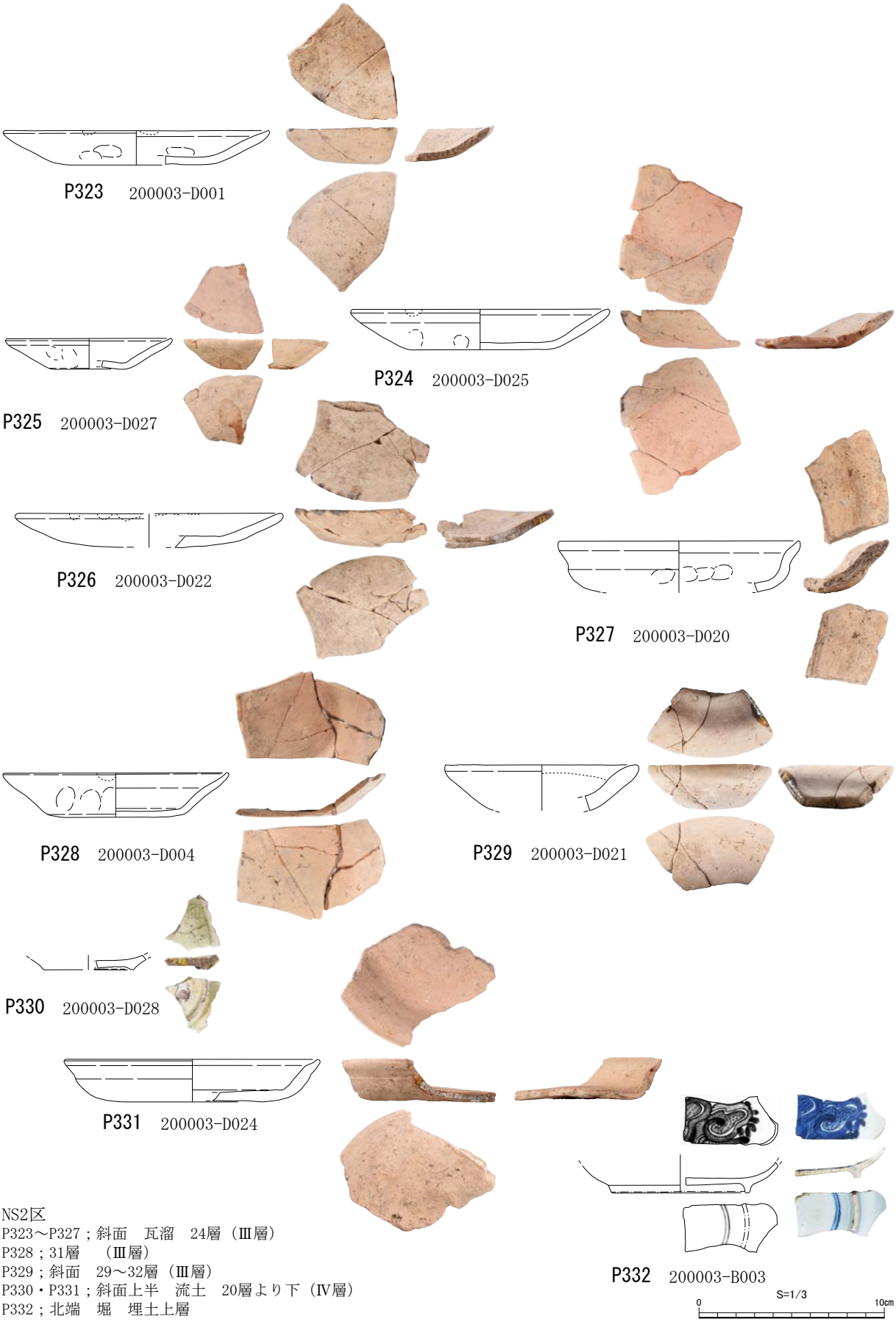


第157図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器23

NS2区
P315・P316；5120N　北　流土　18層（Ⅱ層）
P317；斜面　流土　15～21上層（Ⅱ～Ⅲ層）
P318・P319；斜面　瓦溜
P320；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
P321・P322；斜面　31層（Ⅲ層）

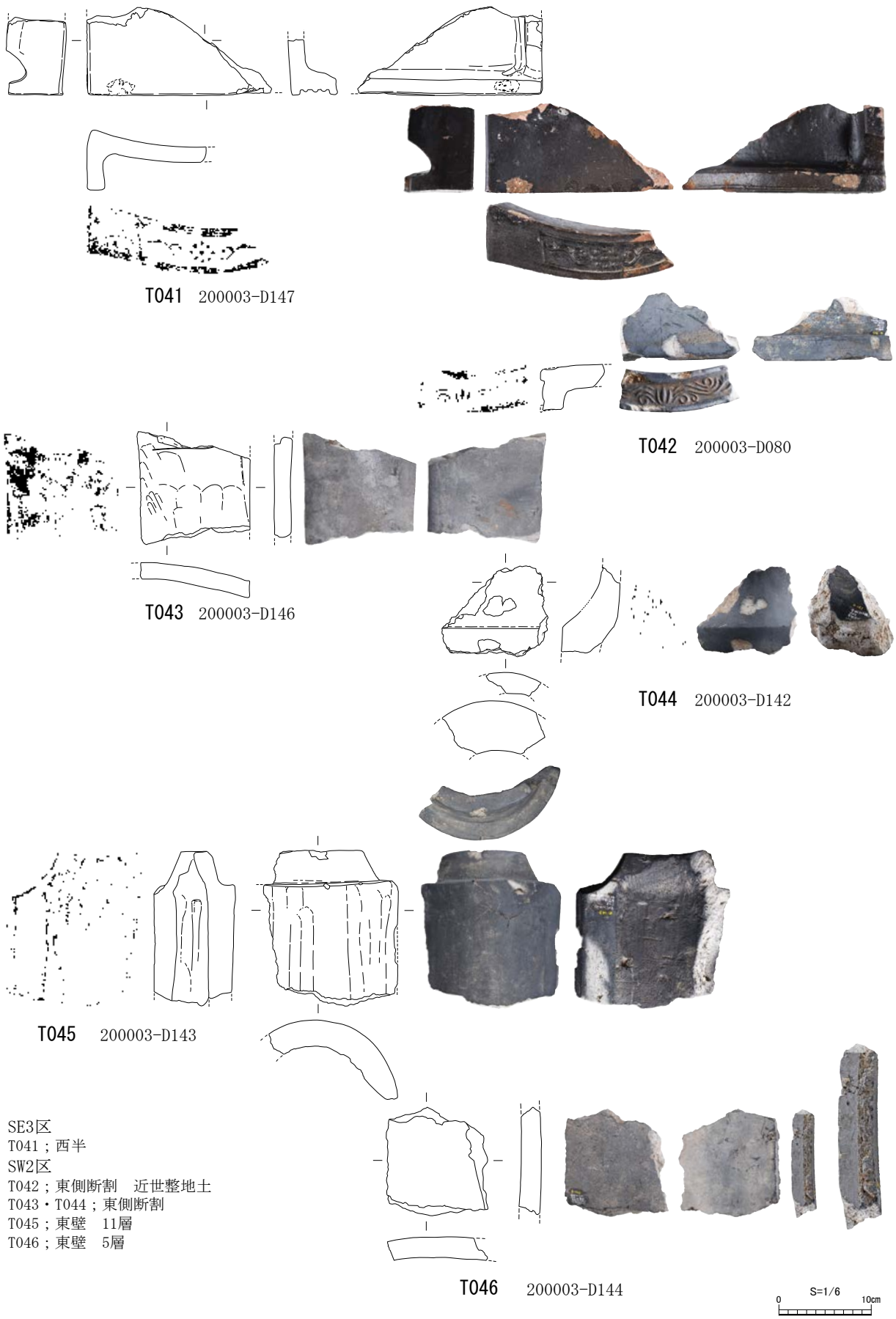
S=1/3
0　10cm

第158図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器24



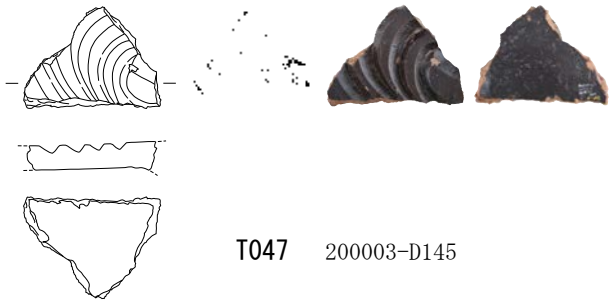
NS2区
P323～P327；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
P328；31層　（Ⅲ層）
P329；斜面　29～32層（Ⅲ層）
P330・P331；斜面上半　流土　20層より下（Ⅳ層）
P332；北端　堀　埋土上層

第159図　御宮出土遺物実測図　陶磁器・土器25



SE3区
T041；西半
SW2区
T042；東側断割　近世整地土
T043・T044；東側断割
T045；東壁　11層
T046；東壁　5層

第160図　御宮出土遺物実測図　瓦1



T047　200003-D145

T048　200003-D148

T049　200003-D149

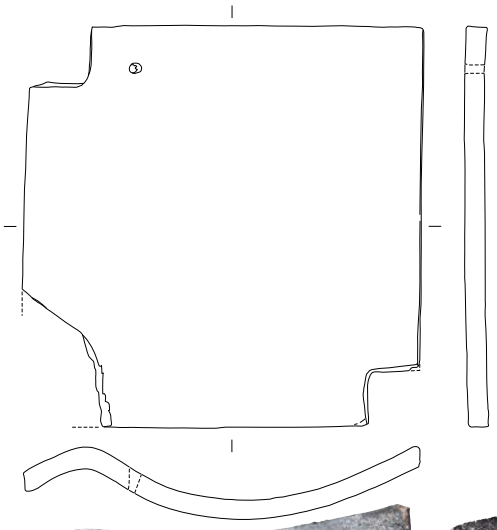
T050　200003-D110

T051　200003-D109

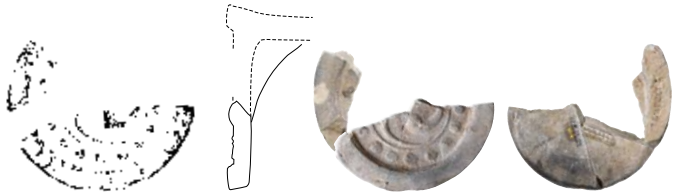
SW4区
T047；銃弾廃棄土坑
T048；北　表土・撹乱
T049；表土
NS2区
T050；5120N　南　土坑１
T051；5120N　裏込　土坑３、斜面　瓦溜

S=1/6
0　10cm

第161図　御宮出土遺物実測図　瓦2



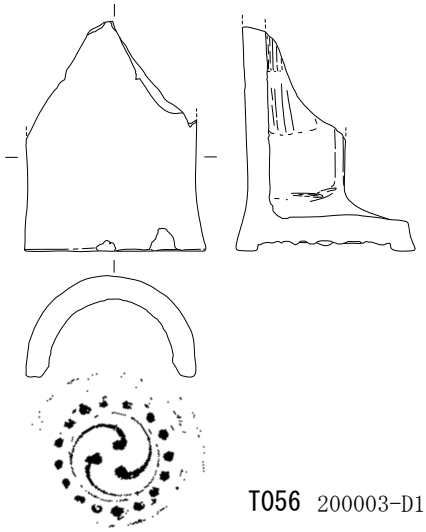
T053 200003-D086



T054 200003-D139

T052 200003-D111

T055 200003-D101



T056 200003-D100

NS2区
T052；土坑3
T053；5120N　北　12層（Ⅱ層）
T054；斜面　流土　9層（Ⅱ層）、斜面　瓦溜、
　　斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
T055；斜面　瓦溜　25層（Ⅲ層）
T056；斜面　28層　石鬼北（Ⅲ層）

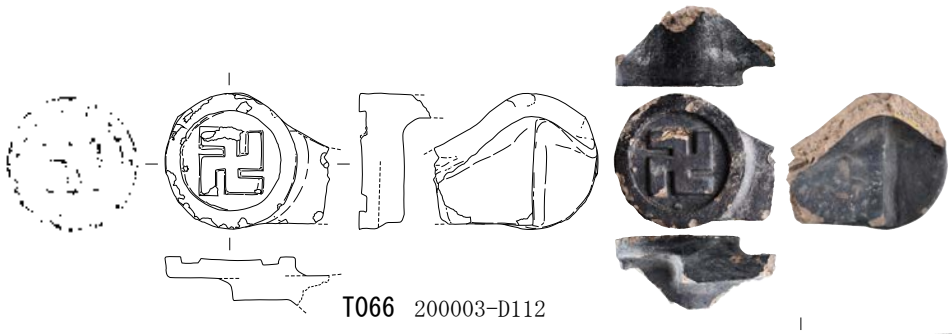
S=1/6
0　10cm

第162図　御宮出土遺物実測図　瓦3

NS2区
T057；斜面　瓦溜№28（Ⅲ層）、斜面　29層（Ⅲ層）
T058；31層（Ⅲ層）
T059；斜面下　造成土
T060；斜面　瓦溜
T061；斜面　流土　9層（Ⅱ層）
T062；5120N　北　流土　14層（Ⅱ層）
T063・T064；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
T065；斜面　25層（Ⅲ層）

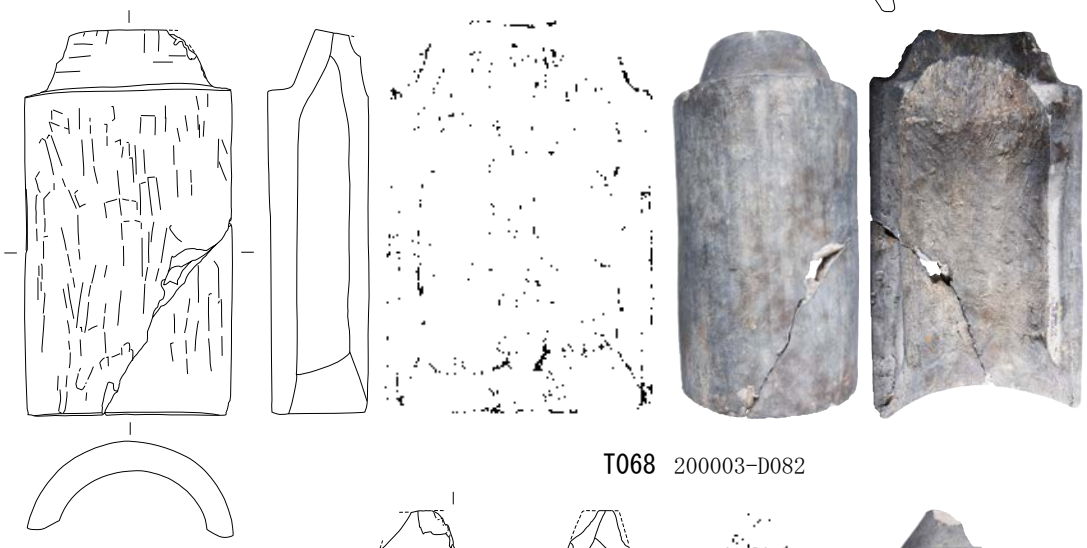
S=1/6
0　10cm

第163図　御宮出土遺物実測図　瓦4

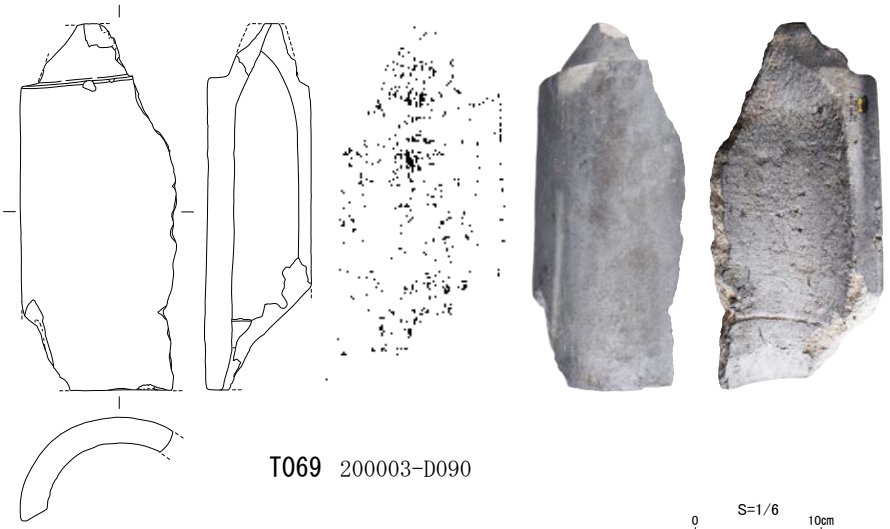


T066　200003-D112

T067　200003-D094



T068　200003-D082



T069　200003-D090

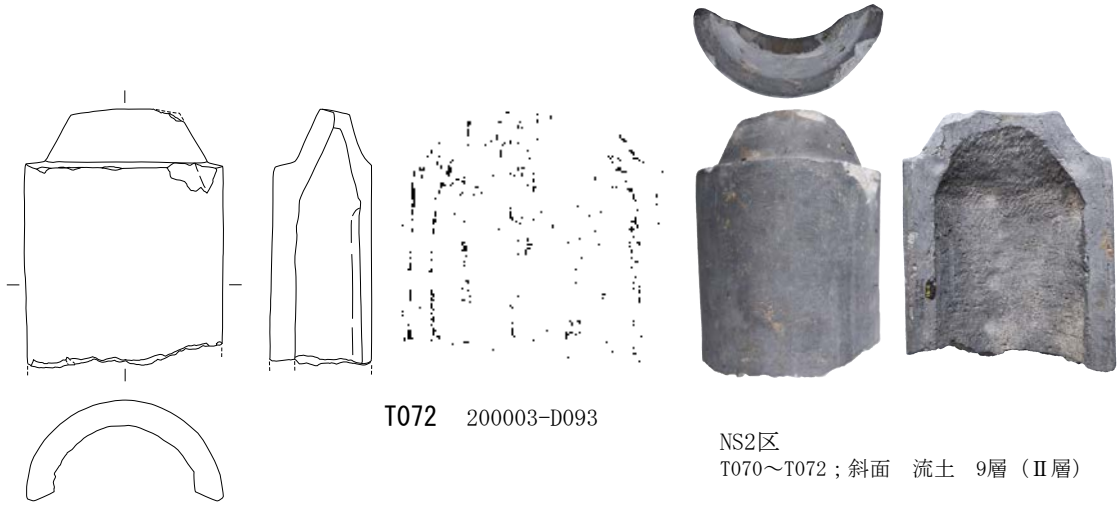
NS2区
T066；表土
T067；5120N　北　9～11層（Ⅱ層）
T068；斜面　瓦溜
T069；8～9層（Ⅰ～Ⅱ層）

S=1/6
0　10cm

第164図　御宮出土遺物実測図　瓦5

T070　200003-D091

T071　200003-D092



T072　200003-D093

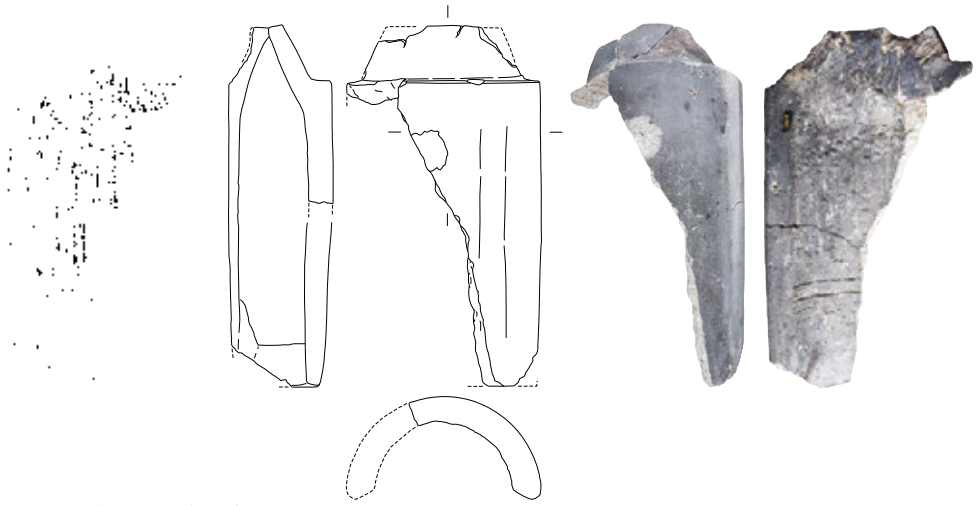
NS2区
T070～T072；斜面　流土　9層（Ⅱ層）

S=1/6
0　10cm

第165図　御宮出土遺物実測図　瓦6

T073　200003-D088

T074　200003-D089

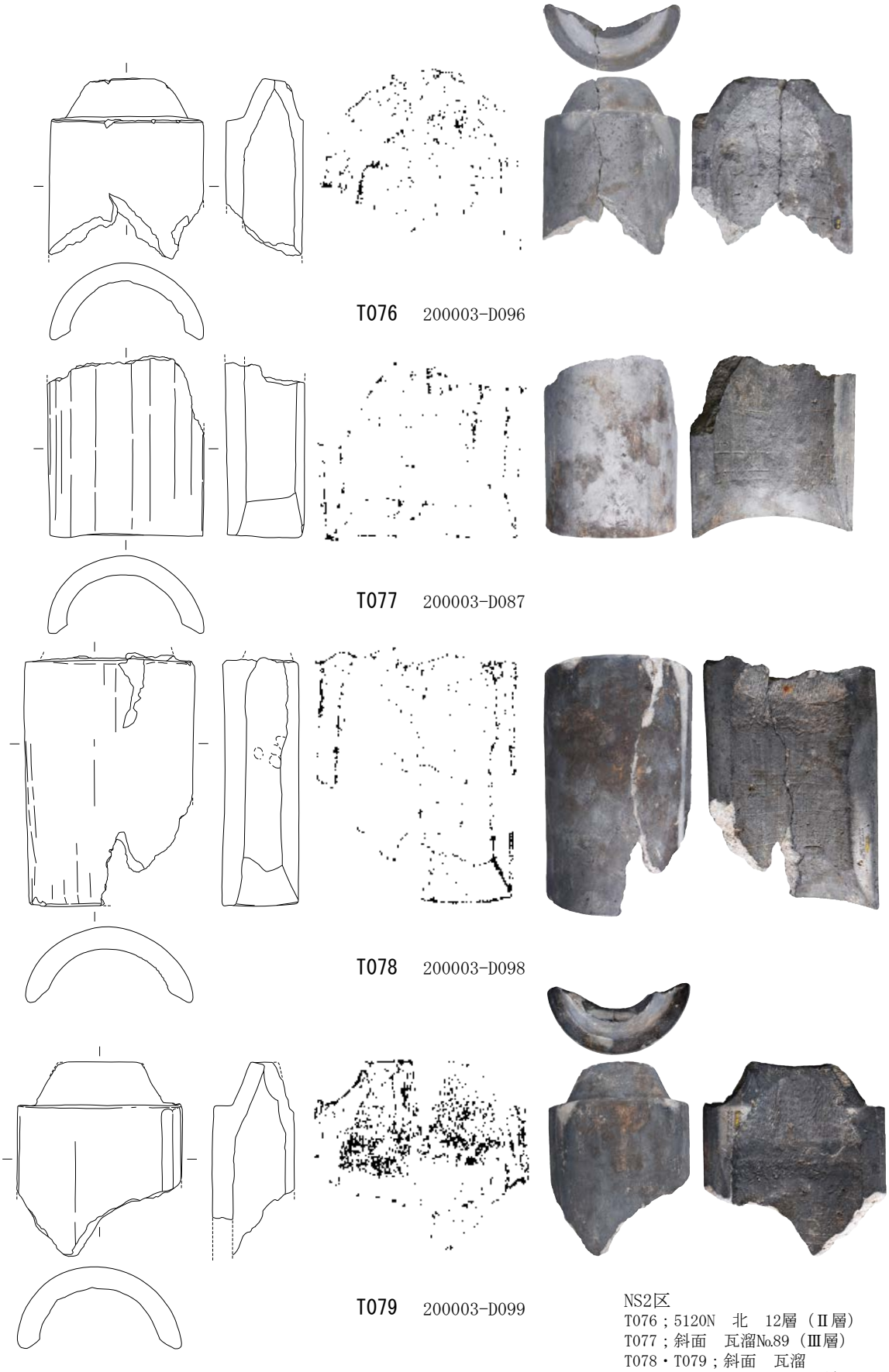


NS2区
T073・T074；5120N　北　11層（Ⅱ層）
T075；5120N　北　12層（Ⅱ層）

T075　200003-D085

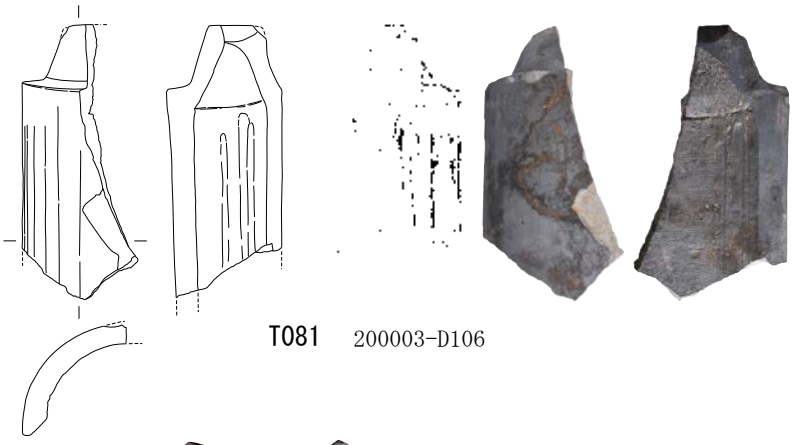
S=1/6
0　10cm

第166図　御宮出土遺物実測図　瓦7



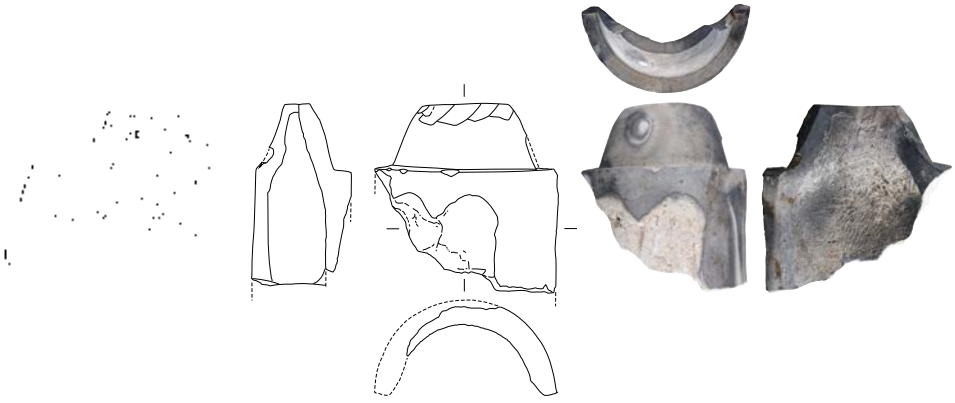
第167図 御宮出土遺物実測図 瓦8

T080　200003-D105



T081　200003-D106

T082　200003-D102



T083　200003-D107

NS2区
T080・T081；斜面　瓦溜
T082；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
T083；斜面　瓦溜　25層（Ⅲ層）

S=1/6
0　10cm

第168図　御宮出土遺物実測図　瓦9

T084　200003-D108

T085　200003-D095

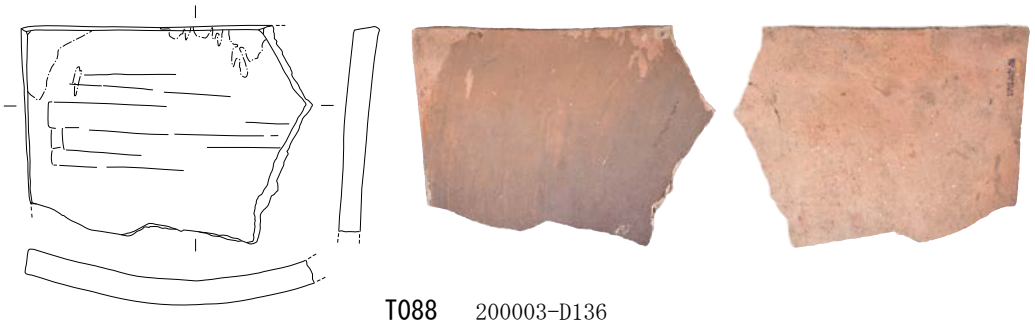
T086　200003-D104

T087　200003-D097

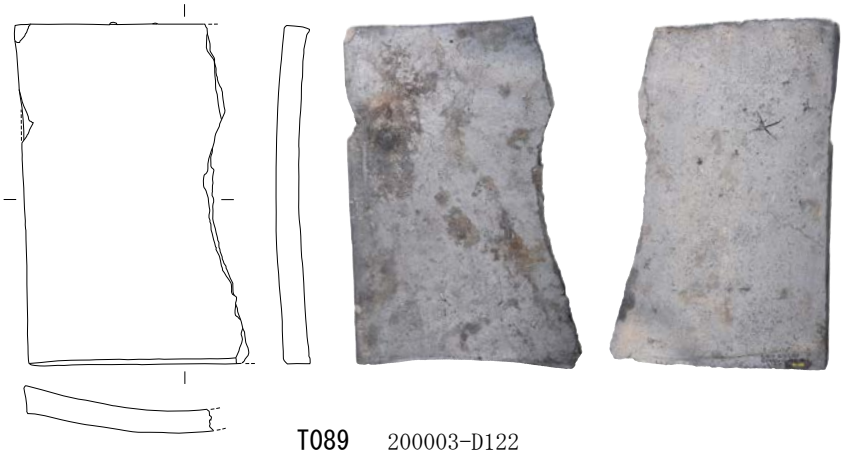
NS2区
T084；斜面　25層（Ⅲ層）
T085；斜面　28層　石鬼下面（Ⅲ層）、斜面　瓦溜№76（Ⅲ層）
T086；斜面　29層（Ⅲ層）
T087；斜面　瓦溜下

S=1/6
0　10cm

第169図　御宮出土遺物実測図　瓦10



T088　200003-D136



T089　200003-D122

T090　200003-D127

T091　200003-D128

NS2区
T088；5120N　南　撹乱1
T089；5120N　北　11～13層（Ⅱ層）
T090・T091；5120N　北　12層（Ⅱ層）

S=1/6
0　10cm

第170図　御宮出土遺物実測図　瓦11

T092　200003-D123

T093　200003-D117

T094　200003-D121

T095　200003-D129

NS2区
T092；斜面　15層（Ⅱ層）
T093；斜面　瓦溜№26（Ⅲ層）
T094；斜面　瓦溜№89（Ⅲ層）
T095；斜面　瓦溜一括

S=1/6
0　10cm

第171図　御宮出土遺物実測図　瓦12

T096　200003-D113

T097　200003-D114

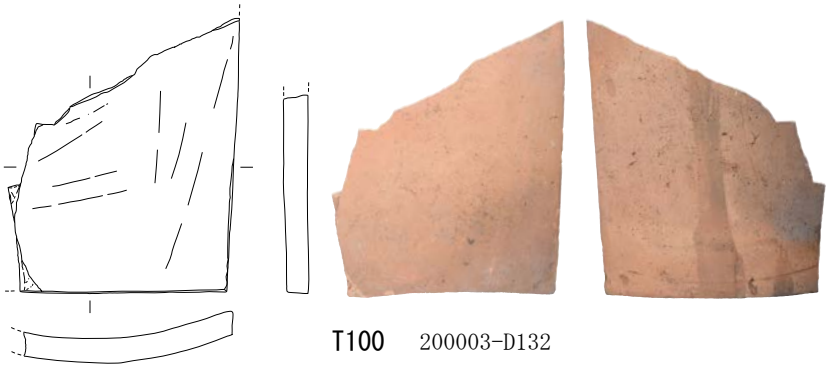
T098　200003-D115

T099　200003-D116

NS2区
T096～T099；斜面　瓦溜

S=1/6
0　10cm

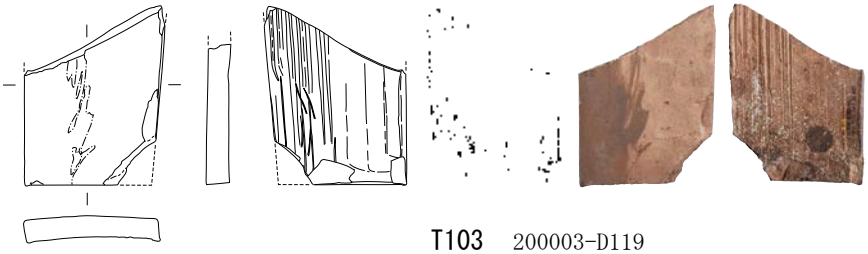
第172図　御宮出土遺物実測図　瓦13



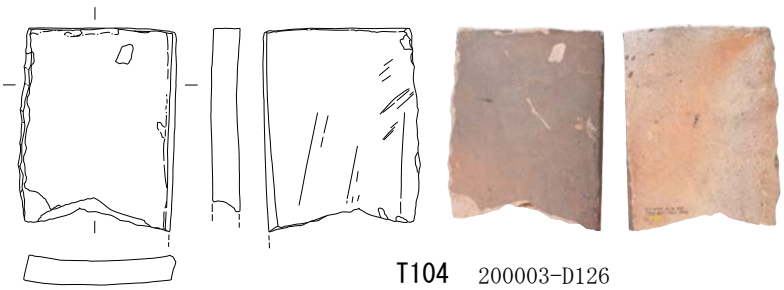
T100　200003-D132

T101　200003-D135

T102　200003-D133



T103　200003-D119

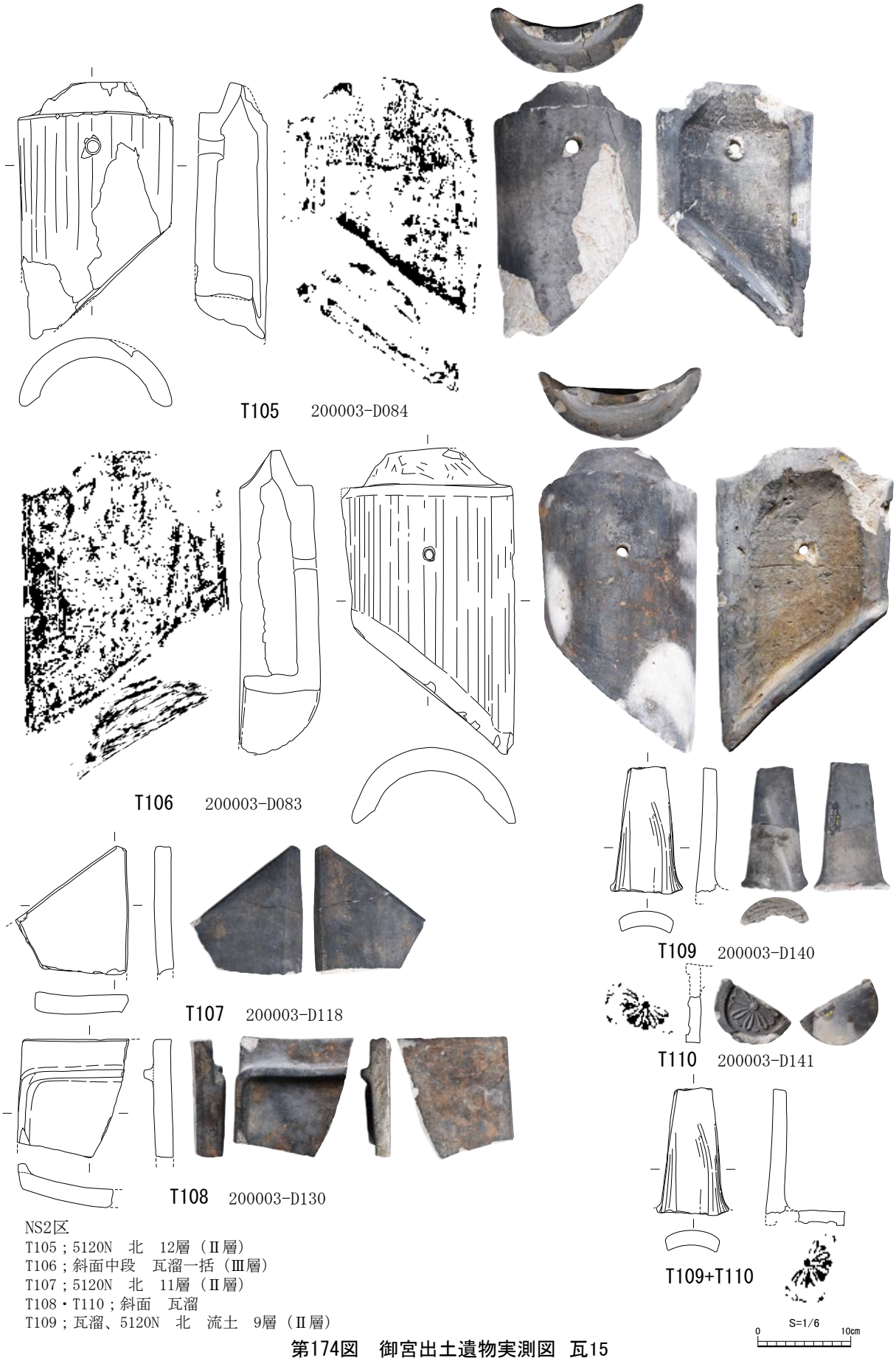


T104　200003-D126

NS2区
T100；斜面　瓦溜
T101；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
T102；斜面　26層（Ⅲ層）
T103；斜面　11層（Ⅱ層）or 21層（Ⅲ層）
T104；斜面　15～21上層（Ⅱ～Ⅲ層）

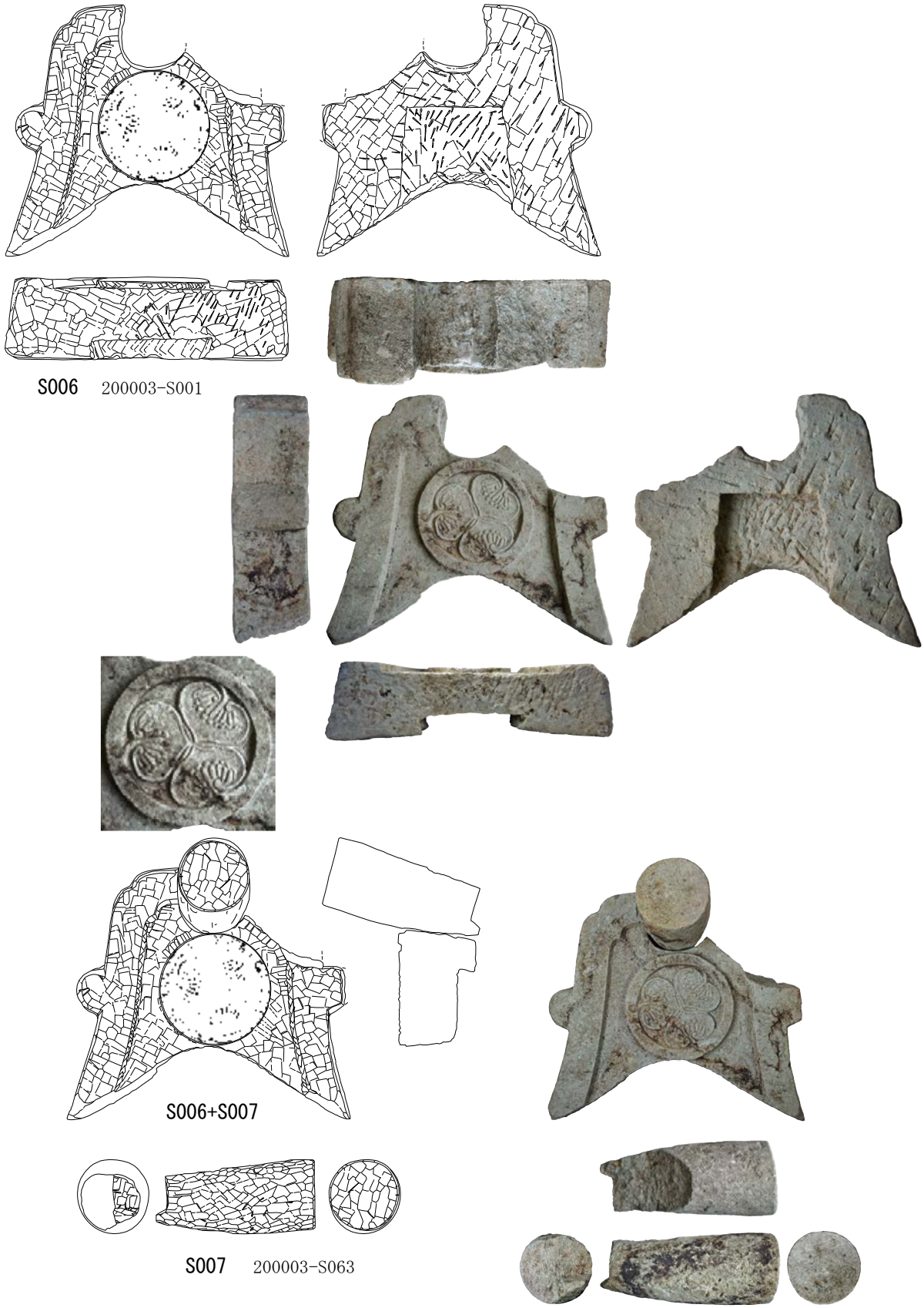
S=1/6
0　10cm

第173図　御宮出土遺物実測図　瓦14



NS2区
T105；5120N　北　12層（Ⅱ層）
T106；斜面中段　瓦溜一括（Ⅲ層）
T107；5120N　北　11層（Ⅱ層）
T108・T110；斜面　瓦溜
T109；瓦溜、5120N　北　流土　9層（Ⅱ層）

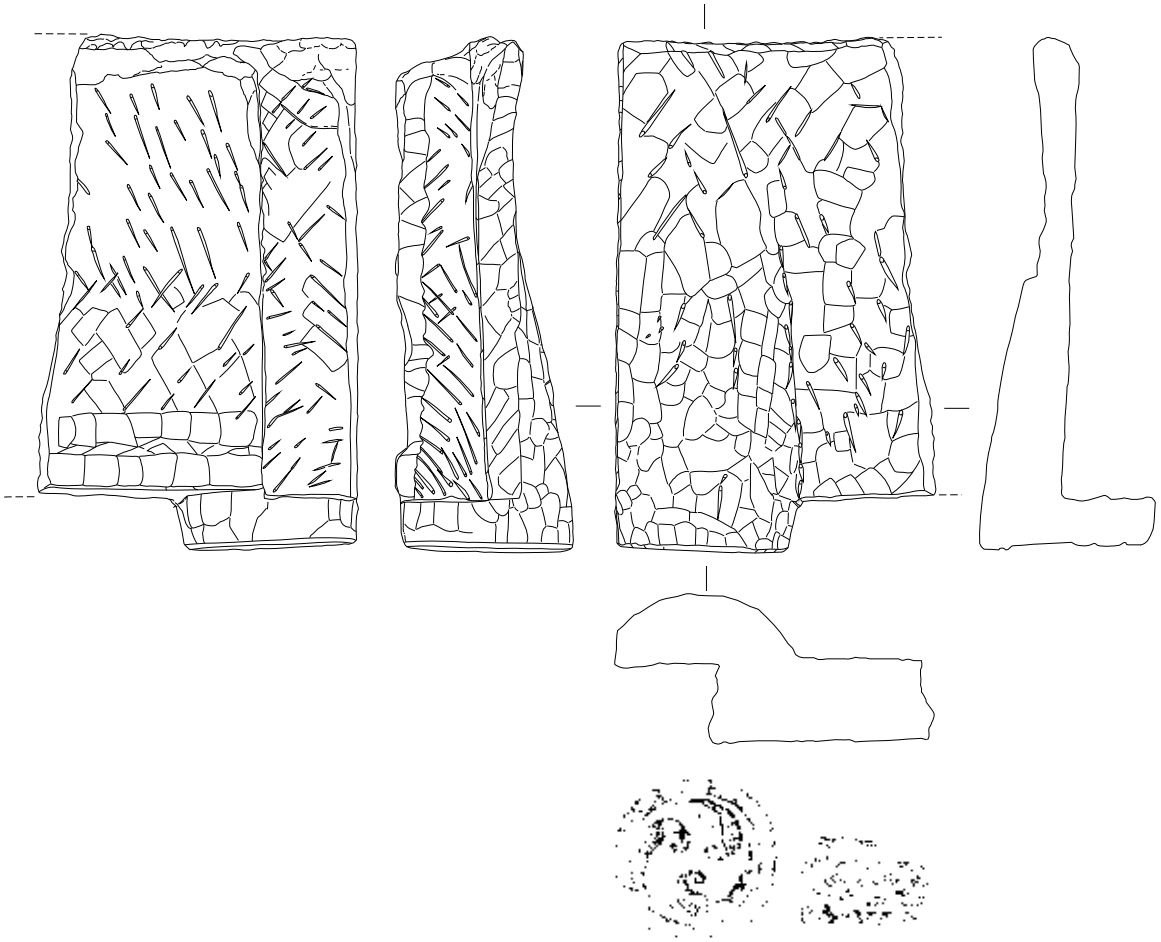
第174図　御宮出土遺物実測図　瓦15



NS2区
S006；斜面　瓦溜№33（Ⅲ層）
S007；斜面　瓦溜№10（Ⅲ層）

S=1/10
0 20cm

第175図　御宮出土遺物実測図　石製品1



S008 200003-S041

NS2区
S008；斜面　瓦溜№98（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

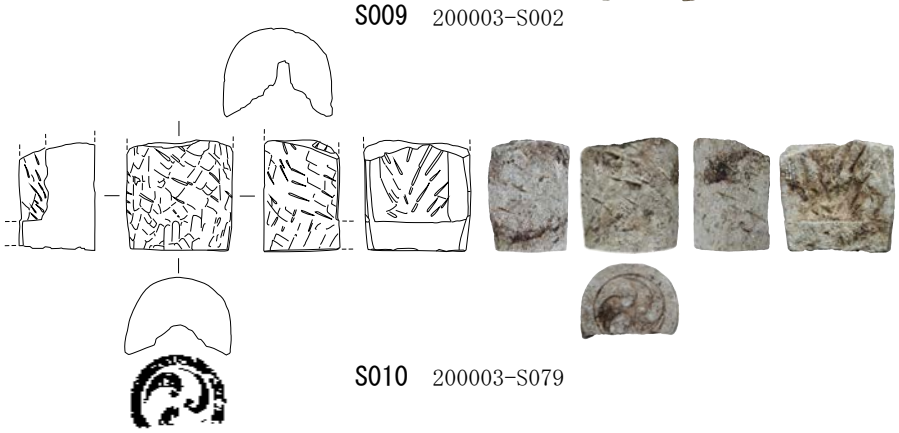
第176図　御宮出土遺物実測図　石製品2

S008　200003-S041

NS2区
S008；斜面　瓦溜№98（Ⅲ層）

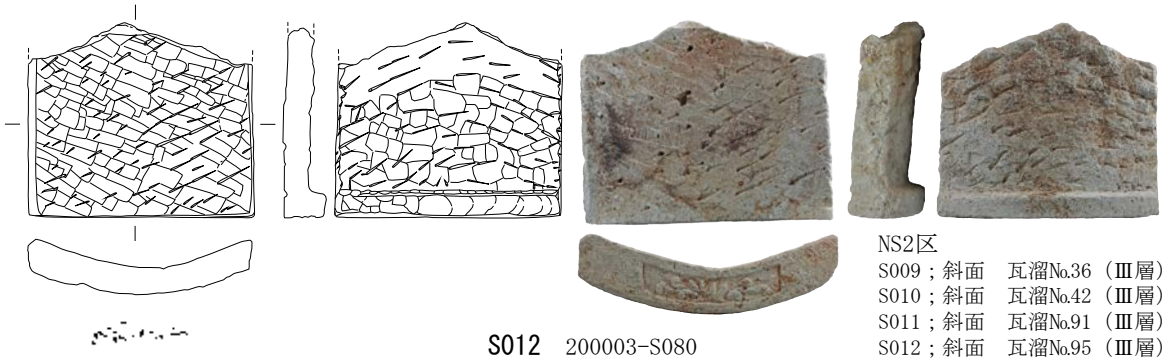
第177図　御宮出土遺物実測図　石製品3

S009　200003-S002



S010　200003-S079

S011　200003-S006

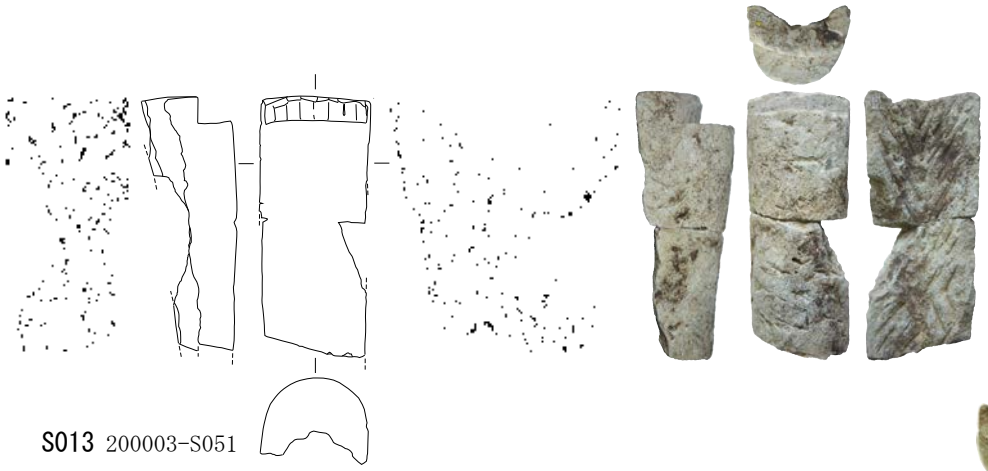


S012　200003-S080

NS2区
S009；斜面　瓦溜№36（Ⅲ層）
S010；斜面　瓦溜№42（Ⅲ層）
S011；斜面　瓦溜№91（Ⅲ層）
S012；斜面　瓦溜№95（Ⅲ層）

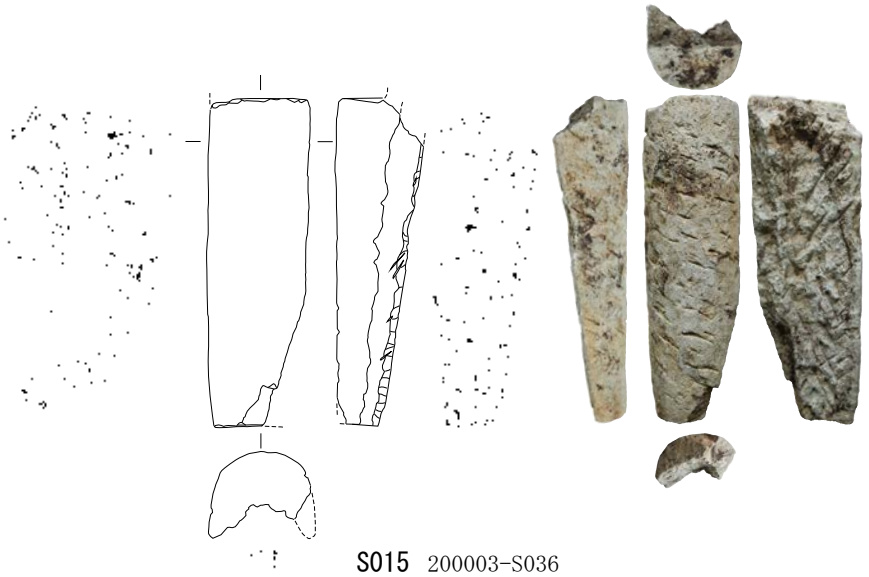
S=1/10
0　20cm

第178図　御宮出土遺物実測図　石製品4

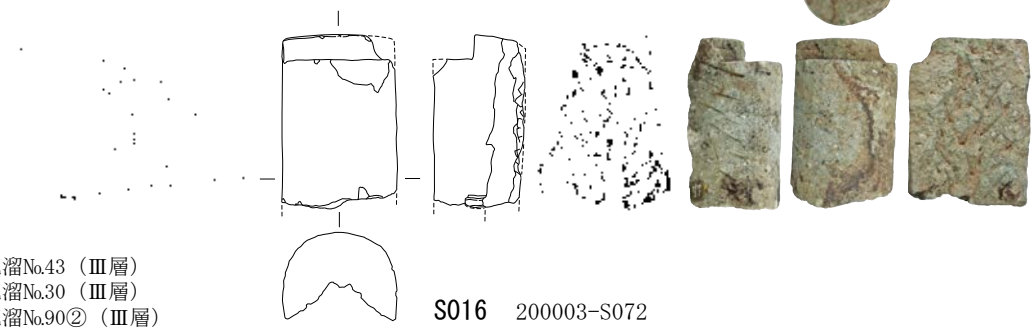


S013 200003-S051

S014 200003-S039



S015 200003-S036



S016 200003-S072

NS2区
S013；斜面　瓦溜№43（Ⅲ層）
S014；斜面　瓦溜№30（Ⅲ層）
S015；斜面　瓦溜№90②（Ⅲ層）
S016；斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第179図　御宮出土遺物実測図　石製品5

S017　200003-S023

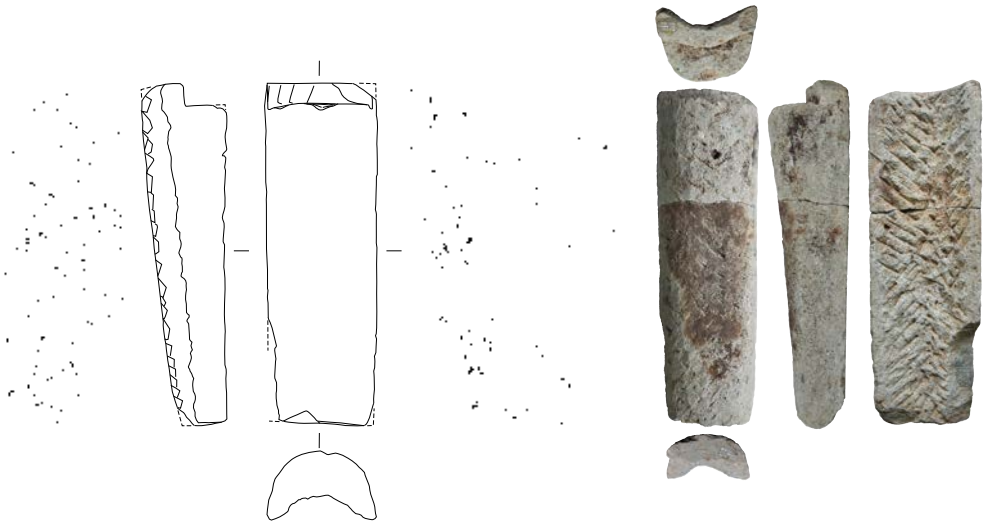
S018　200003-S005

S019　200003-S017

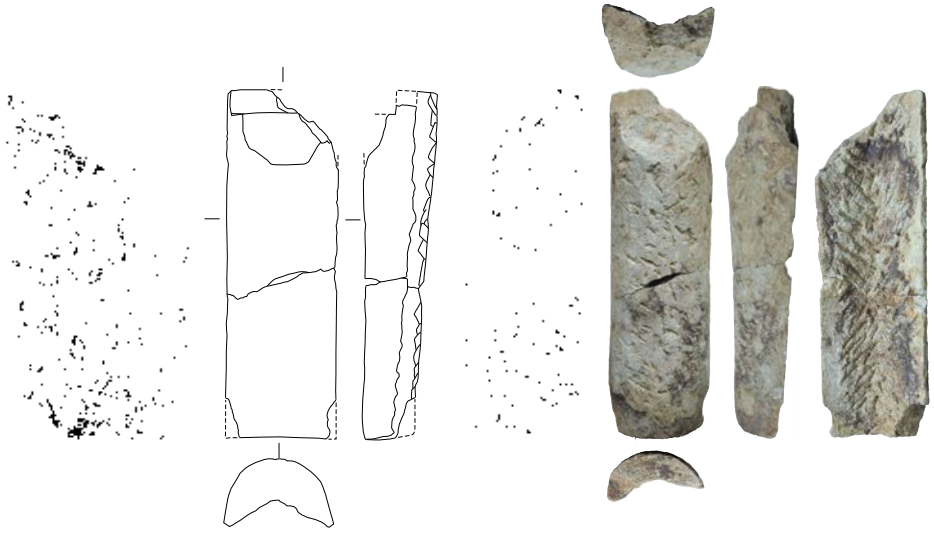
NS2区
S017；斜面　瓦溜№5（Ⅲ層）、斜面　28層（Ⅲ層）
S018；斜面　瓦溜№31（Ⅲ層）
S019；斜面　瓦溜№101（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第180図　御宮出土遺物実測図　石製品6



S020　200003-S011



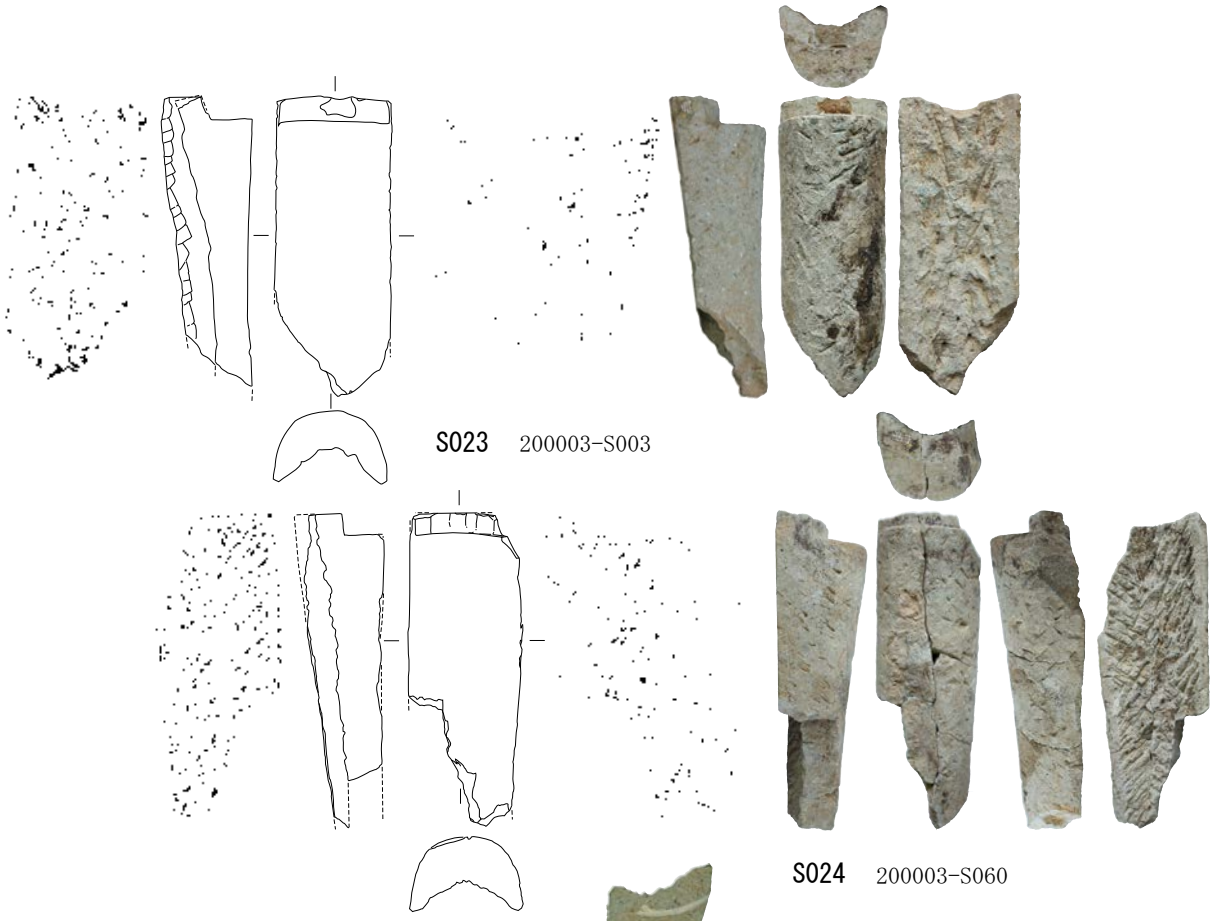
S021　200003-S004

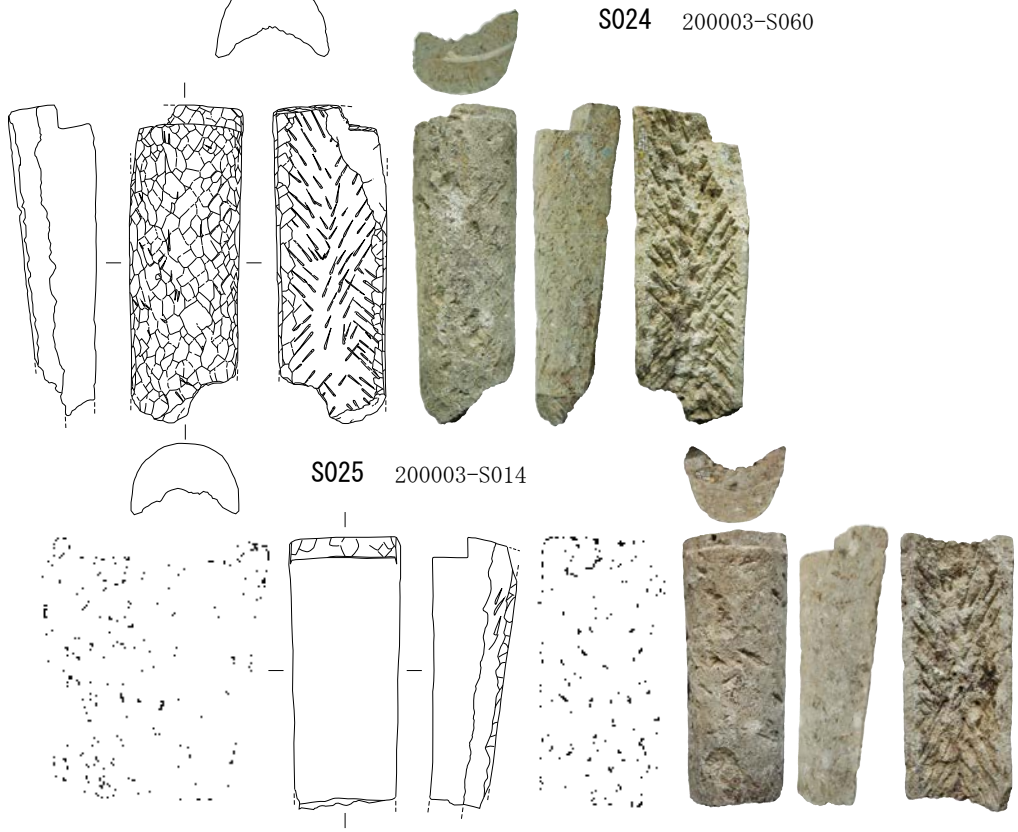
S022　200003-S025

NS2区
S020；斜面　瓦溜№14、№17（Ⅲ層）
S021；斜面　瓦溜№92（Ⅲ層）
S022；斜面　瓦溜№86（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第181図　御宮出土遺物実測図　石製品7



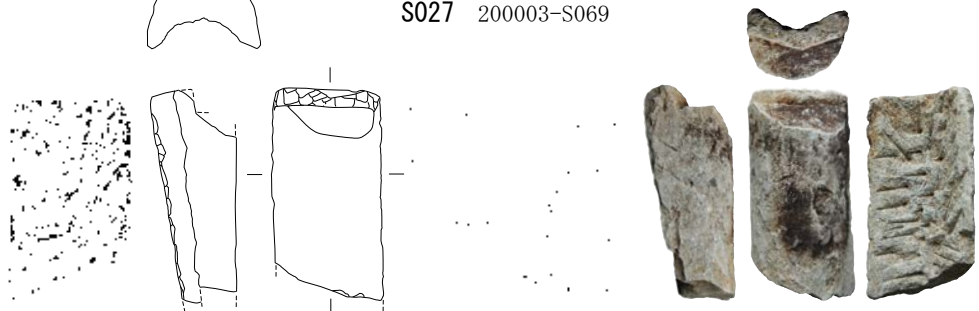


NS2区
S023；斜面　瓦溜№.93（Ⅲ層）
S024；斜面　瓦溜№.4（Ⅲ層）
S025；斜面　瓦溜№.29（Ⅲ層）
S026；斜面　瓦溜№.3（Ⅲ層）

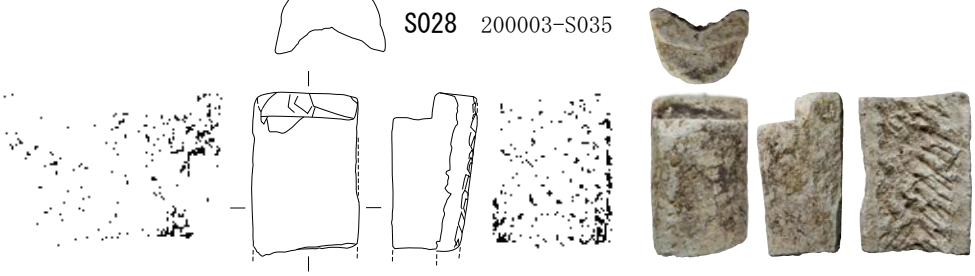
S=1/10
0　20cm

第182図　御宮出土遺物実測図　石製品8

S027　200003-S069

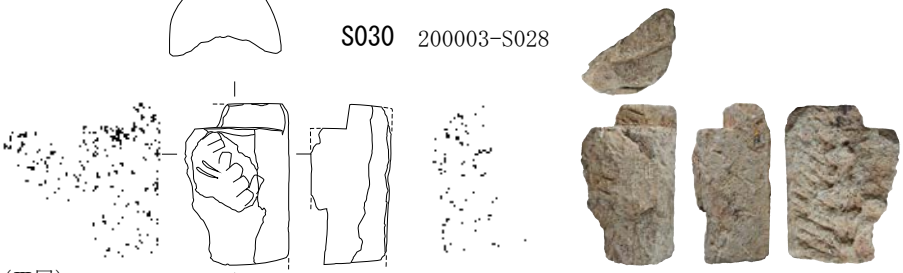


S028　200003-S035

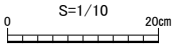


S029　200003-S075

S030　200003-S028

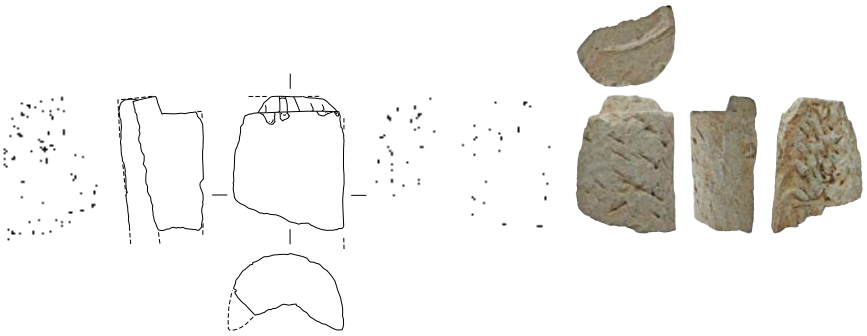


S031　200003-S071

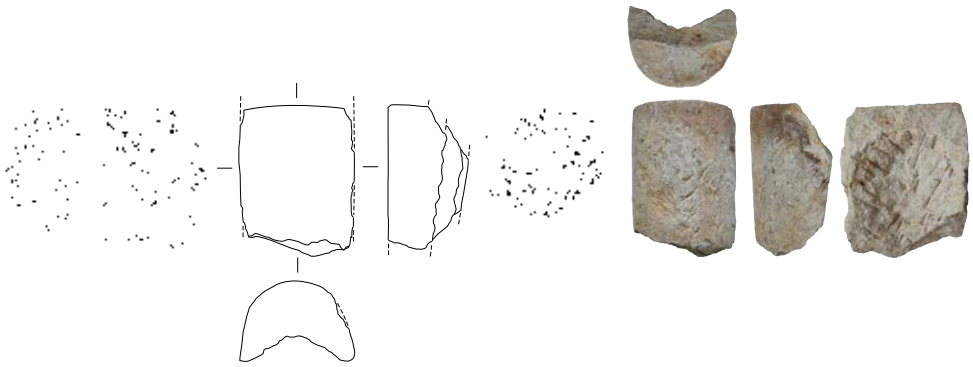


NS2区
S027；斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）
S028；斜面　瓦溜№9（Ⅲ層）
S029；斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）
S030；斜面　瓦溜№8（Ⅲ層）
S031；斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）、斜面　瓦溜№37（Ⅲ層）

第183図　御宮出土遺物実測図　石製品9

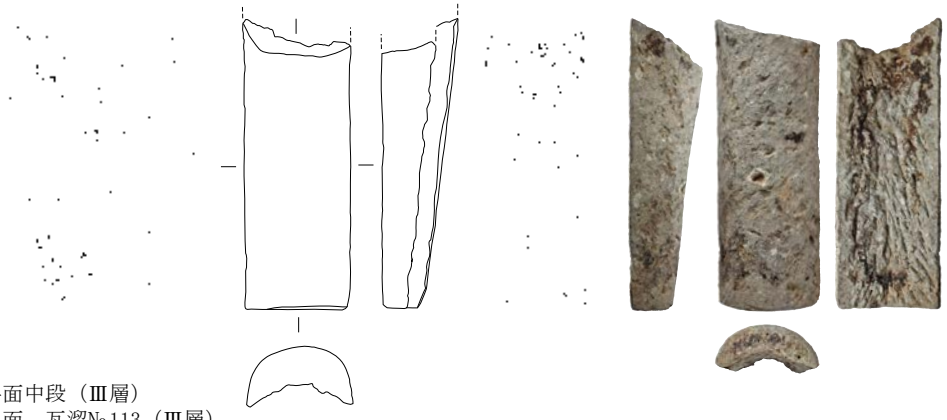


S032　200003-S077



S033　200003-S073

S034　200003-S040

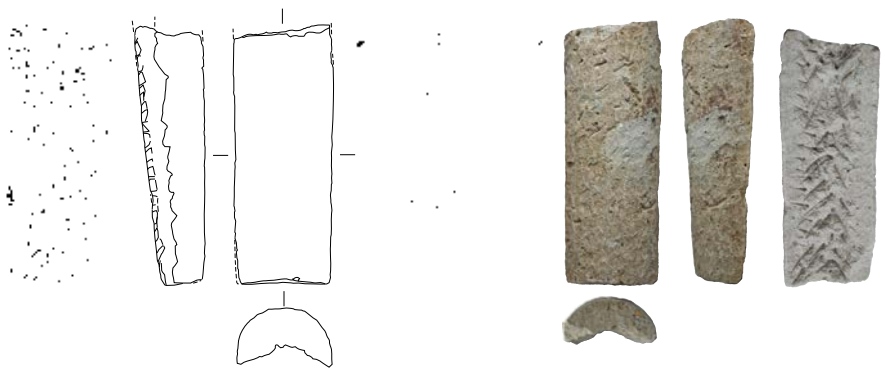


S035　200003-S067

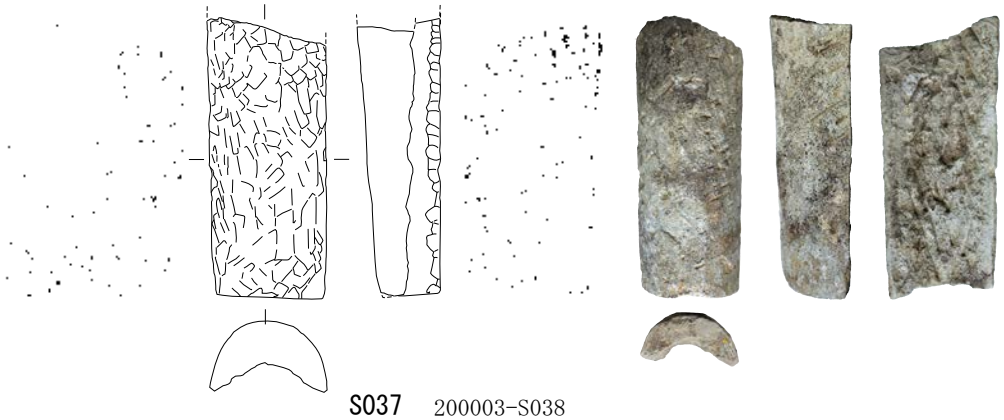
NS2区
S032；斜面中段（Ⅲ層）
S033；斜面　瓦溜№113（Ⅲ層）
S034；斜面　瓦溜№99（Ⅲ層）
S035；斜面　瓦溜№90③（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第184図　御宮出土遺物実測図　石製品10

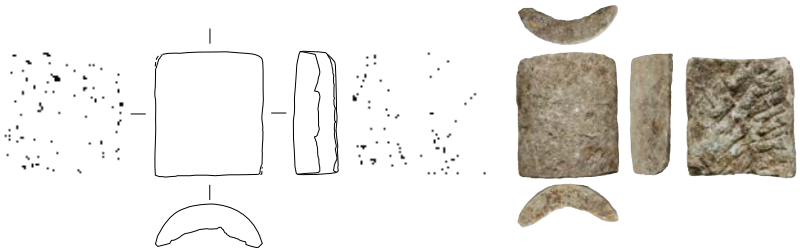


S036　200003-S068



S037　200003-S038

S038　200003-S049



S039　200003-S056

NS2区
S036；斜面　瓦溜№72（Ⅲ層）
S037；斜面　瓦溜№32（Ⅲ層）
S038；斜面　瓦溜№103（Ⅲ層）
S039；斜面　瓦溜№6（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第185図　御宮出土遺物実測図　石製品11

S040　200003-S064

S041　200003-S026

S042　200003-S013

NS2区
S040；5120N　北　流土 9層（Ⅱ層）
S041；斜面　11層（Ⅱ層）
S042；5120N　北　18層下部（Ⅱ層）

S=1/10
0　20cm

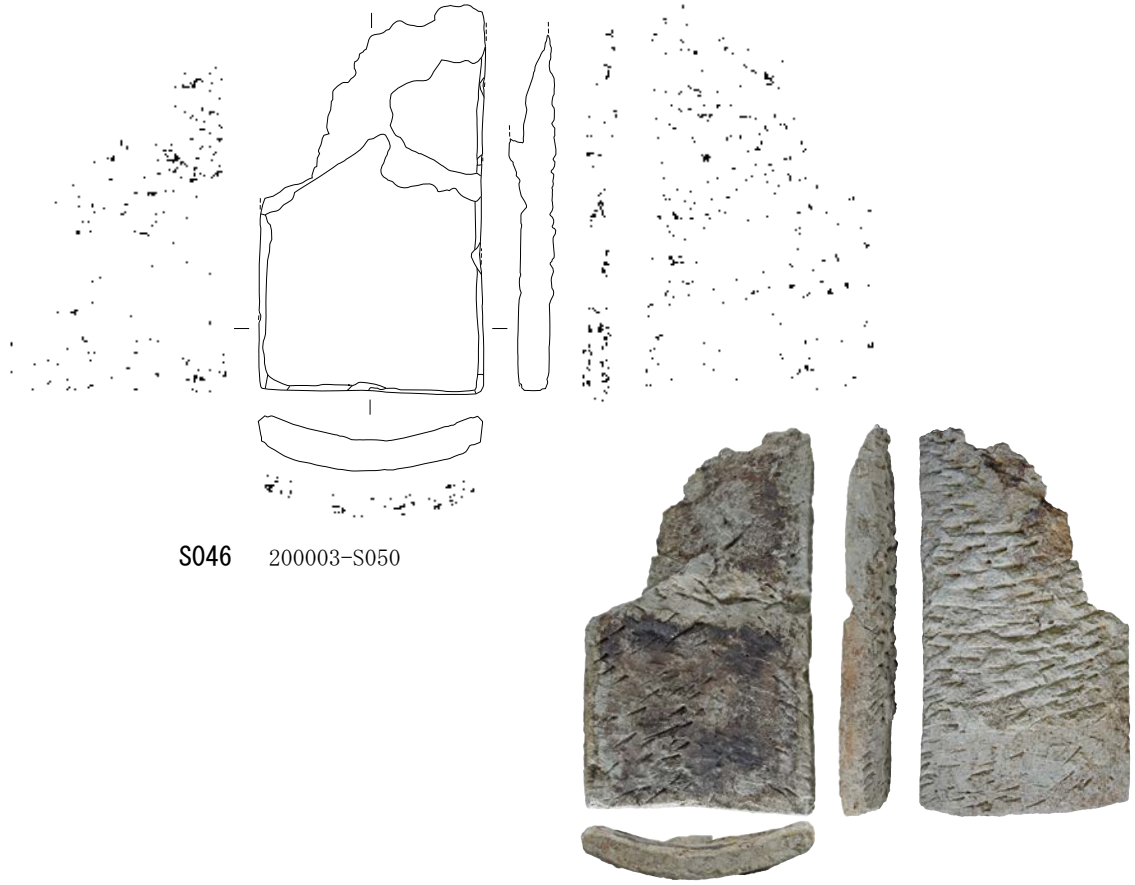
第186図　御宮出土遺物実測図　石製品12

NS2区
S043；斜面　瓦溜№.37（Ⅲ層）、斜面　瓦溜№.90①、№.90②（Ⅲ層）
S044；斜面　瓦溜№.96（Ⅲ層）、斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）

S=1/10
0 20cm

第187図　御宮出土遺物実測図　石製品13

S045　200003-S007



S046　200003-S050

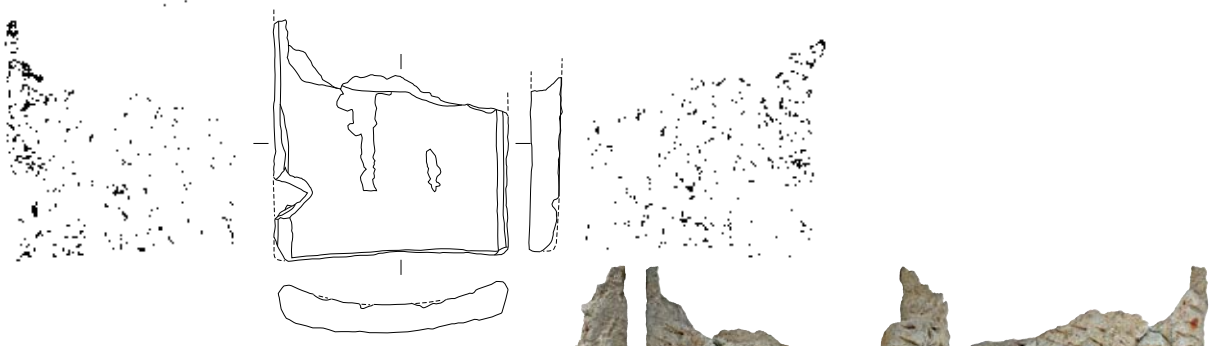
NS2区
S045；斜面中段　瓦溜下層（Ⅲ層）、斜面　瓦溜№.22（Ⅲ層）
S046；斜面　瓦溜№.67、№.68（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第188図　御宮出土遺物実測図　石製品14

S047　200003-S055

S048　200003-S019



S049　200003-S034

S050　200003-S061

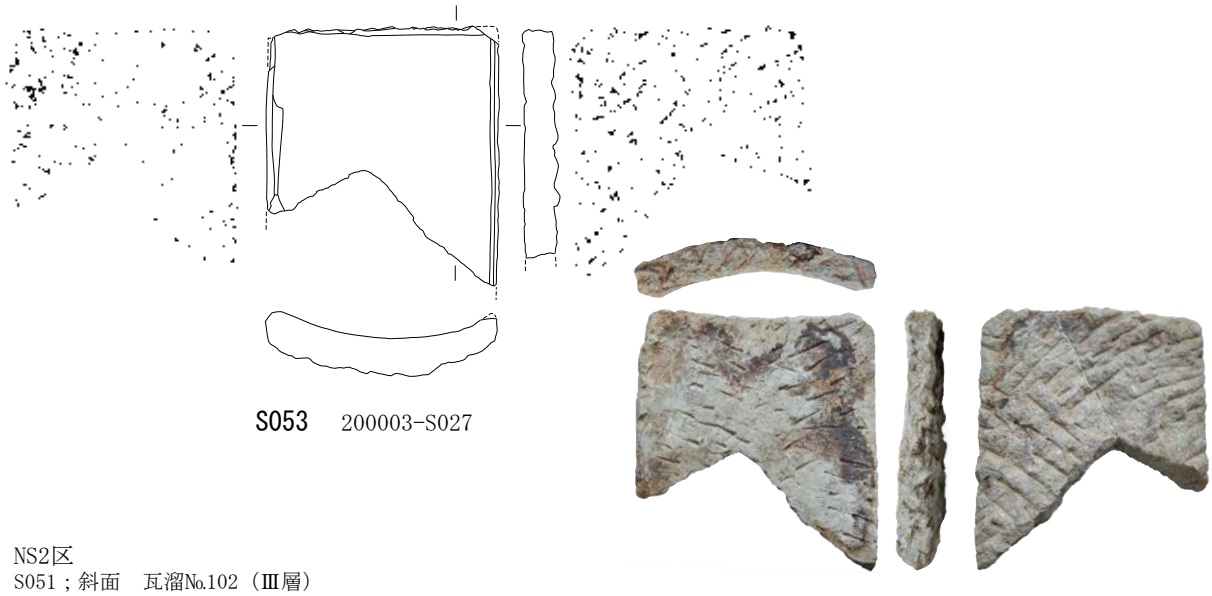
NS2区
S047；斜面　瓦溜№83（Ⅲ層）、西壁　№110（Ⅲ層）
S048；斜面　瓦溜№78（Ⅲ層）
S049；瓦溜、斜面中段　瓦溜下層（Ⅲ層）、瓦溜№12（Ⅲ層）
S050；斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）、斜面中段　瓦溜　24層（Ⅲ層）、斜面　瓦溜№23（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第189図　御宮出土遺物実測図　石製品15

S051　200003-S029

S052　200003-S024

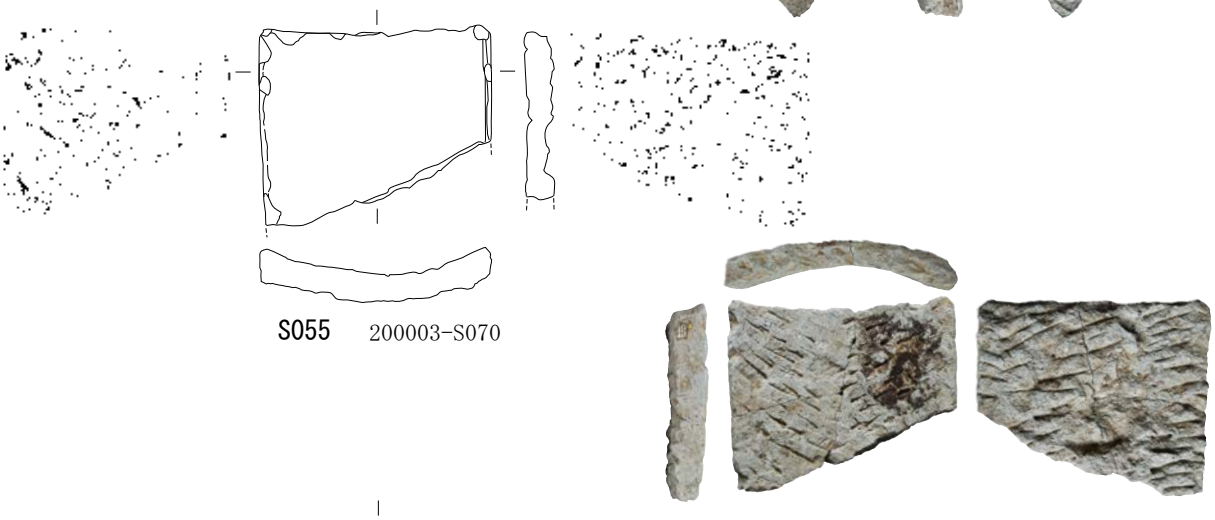


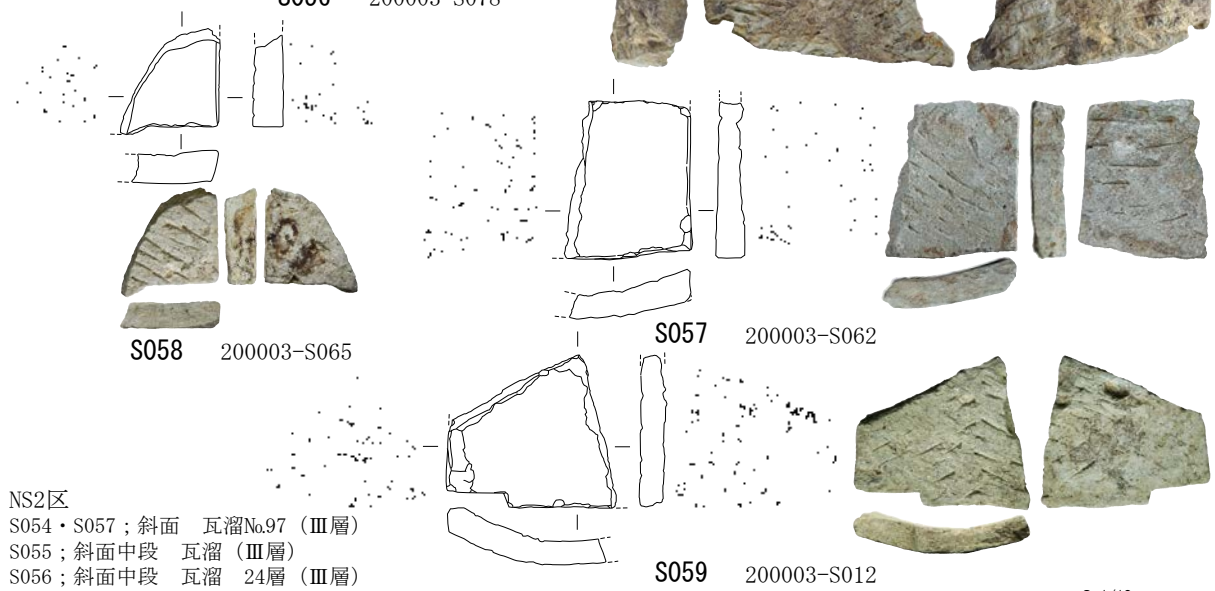
S053　200003-S027

NS2区
S051；斜面　瓦溜№102（Ⅲ層）
S052；斜面　瓦溜№91②（Ⅲ層）、斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）、斜面　24層（Ⅲ層）
S053；斜面　瓦溜№94（Ⅲ層）、東壁№95の奥（Ⅲ層）

S=1/10
0　20cm

第190図　御宮出土遺物実測図　石製品16





NS2区
S054・S057；斜面　瓦溜№97（Ⅲ層）
S055；斜面中段　瓦溜（Ⅲ層）
S056；斜面中段　瓦溜　24層（Ⅲ層）
S058；斜面　瓦溜№90①（Ⅲ層）
S059；斜面　瓦溜№47（Ⅲ層）

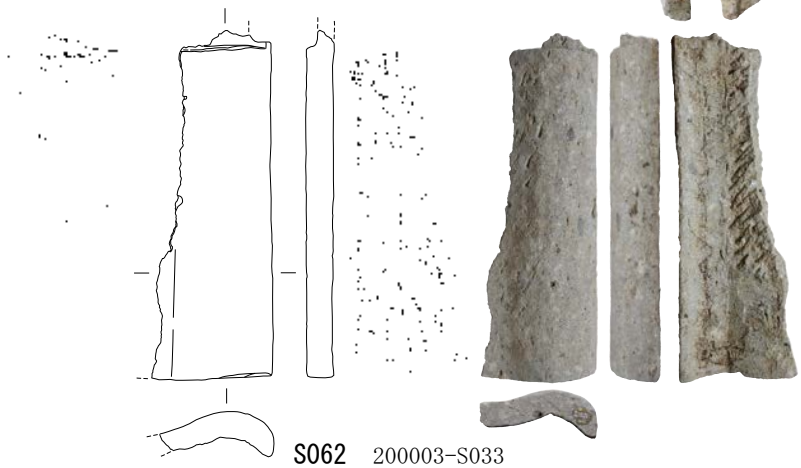
S=1/10
0 20cm

第191図　御宮出土遺物実測図　石製品17

S060　200003-S031

S061　200003-S052

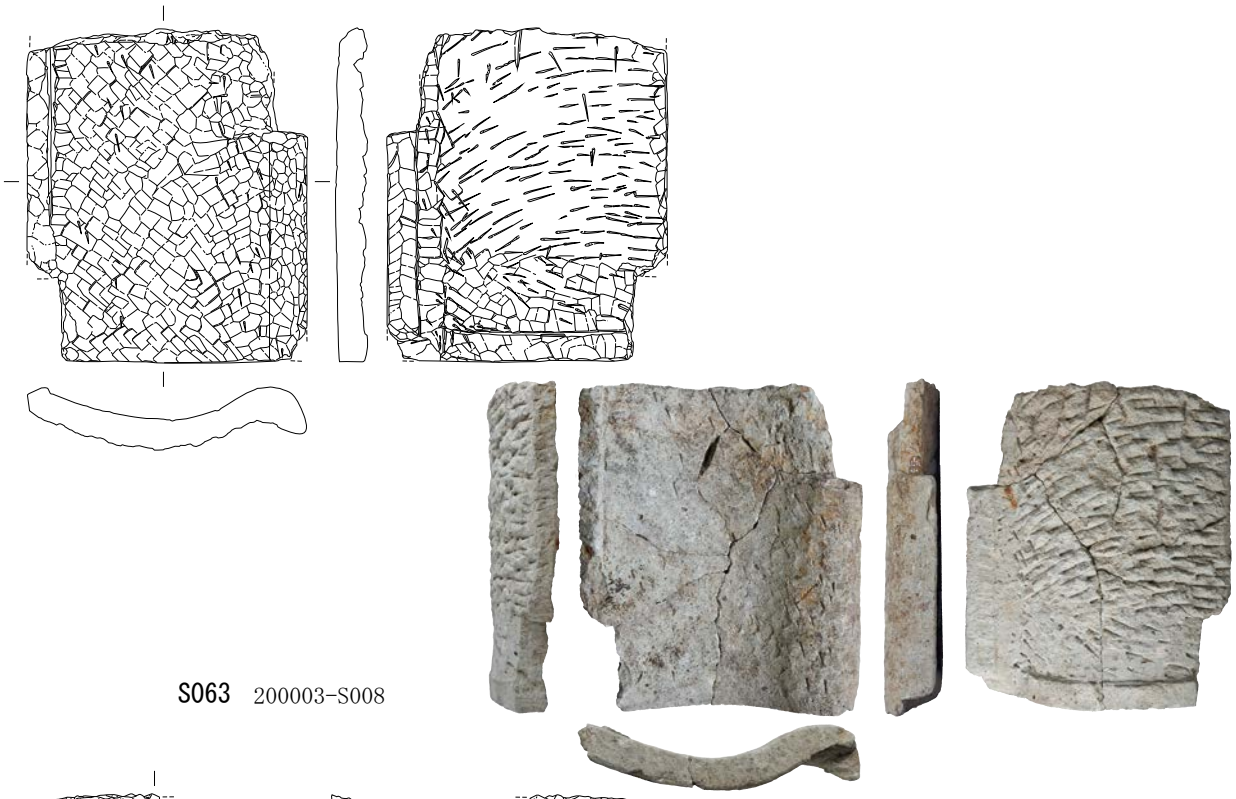
NS2区
S060；斜面　流土　9層（Ⅱ層）、斜面上部　流土、
　　斜面　石段検出前流土（Ⅱ層）
S061；斜面　流土　9層（Ⅱ層）
S062；9層（Ⅱ層）



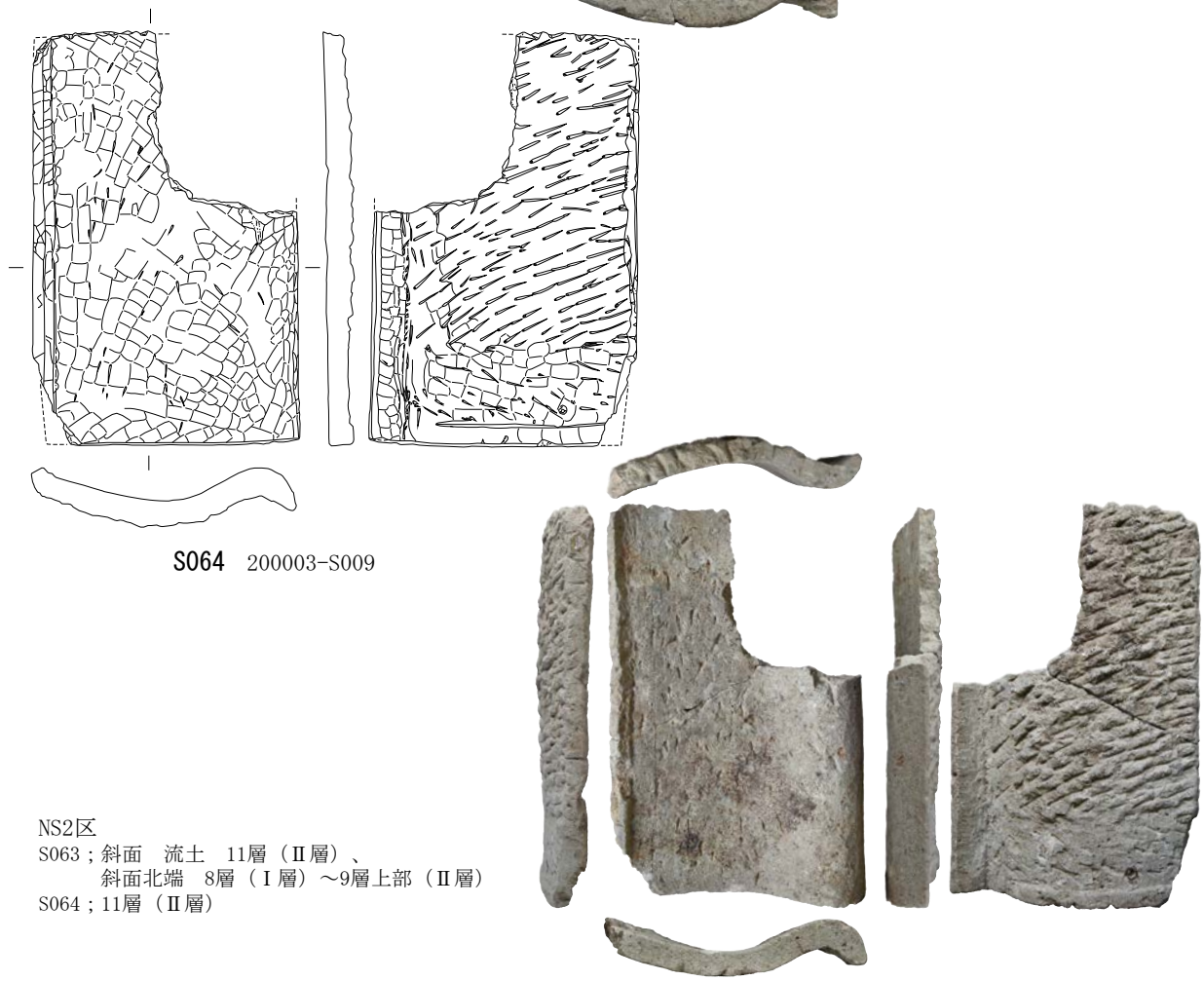
S062　200003-S033

第192図　御宮出土遺物実測図　石製品18

S=1/10
0　20cm



S063　200003-S008

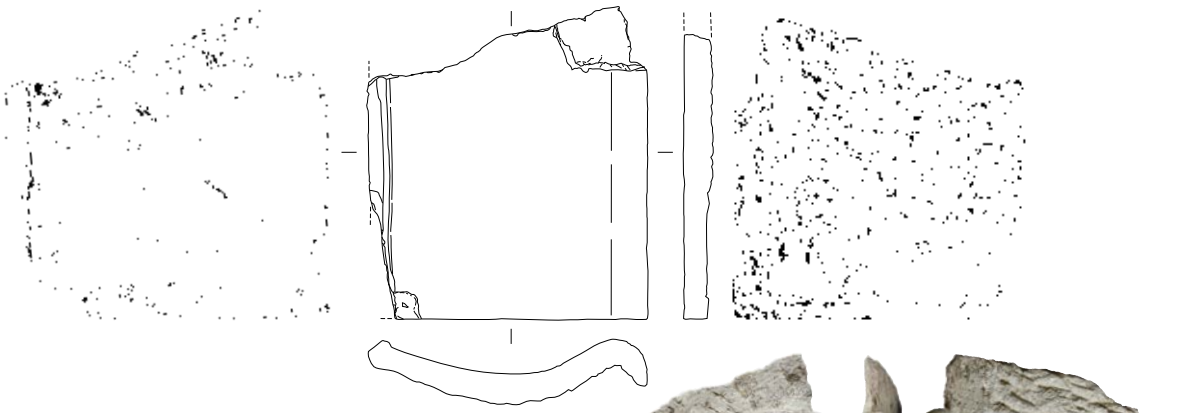


S064　200003-S009

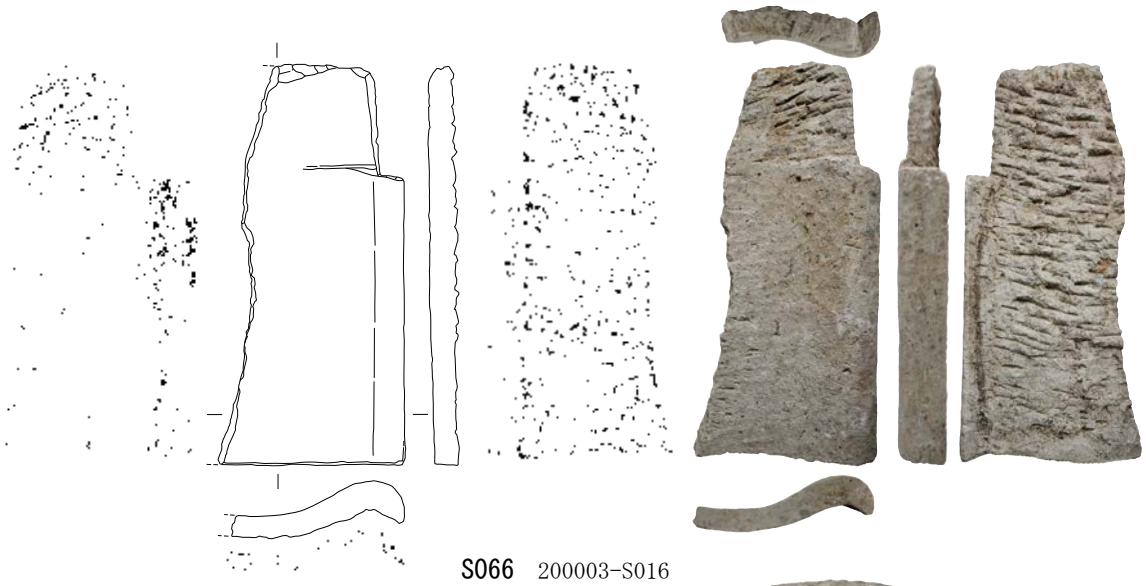
NS2区
S063；斜面　流土　11層（Ⅱ層）、
　　斜面北端　8層（Ⅰ層）～9層上部（Ⅱ層）
S064；11層（Ⅱ層）

S=1/10
0　20cm

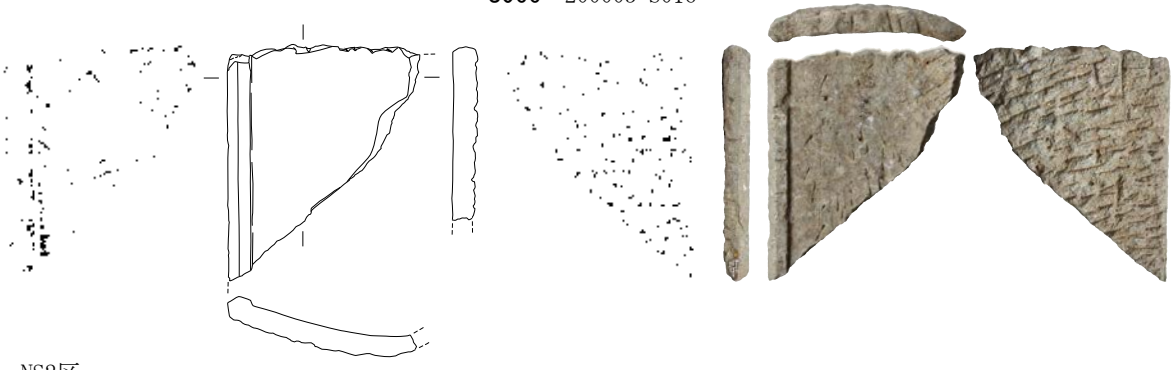
第193図　御宮出土遺物実測図　石製品19



S065　200003-S015



S066　200003-S016

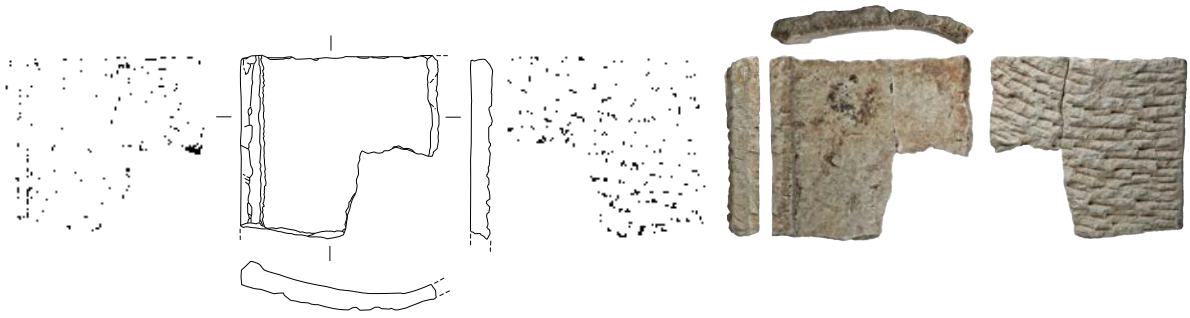


S067　200003-S076

NS2区
S065；11層（Ⅱ層）
S066・S067；斜面上部　流土

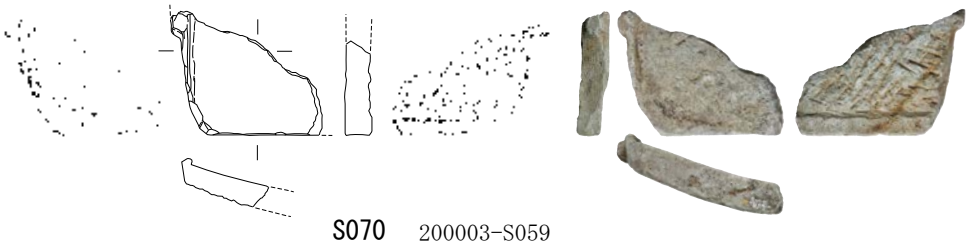
S=1/10
0　20cm

第194図　御宮出土遺物実測図　石製品20



S068　200003-S018

S069　200003-S030



S070　200003-S059

S071　200003-S043

NS2区
S068～S070；斜面上部　流土
S071；石段1

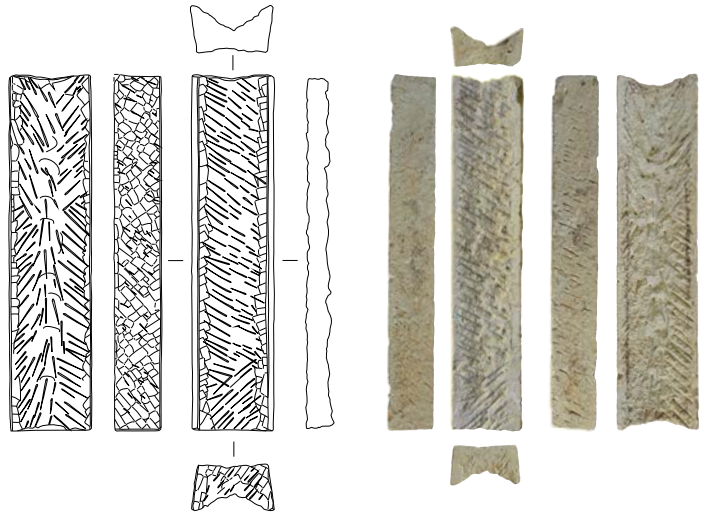
S068～S070：S=1/10
S071：S=1/20

S=1/20
0　40cm

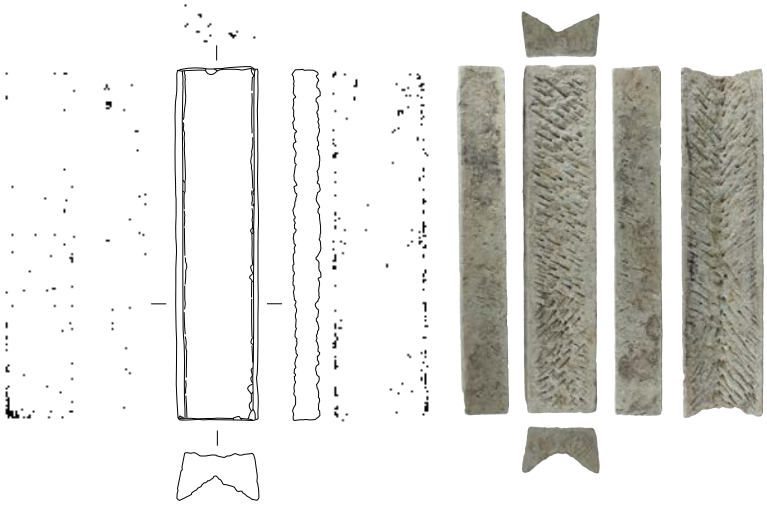
S=1/10
0　20cm

第195図　御宮出土遺物実測図　石製品21

S072　200003-S042



S073　200003-S045

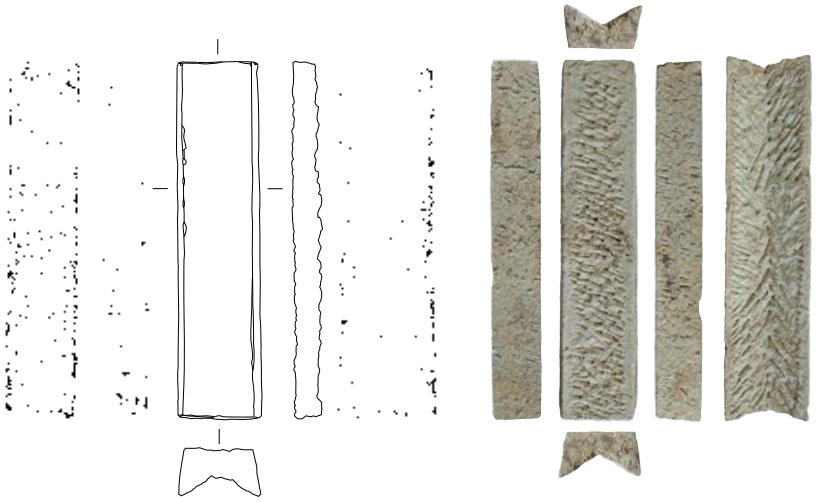


S074　200003-S046

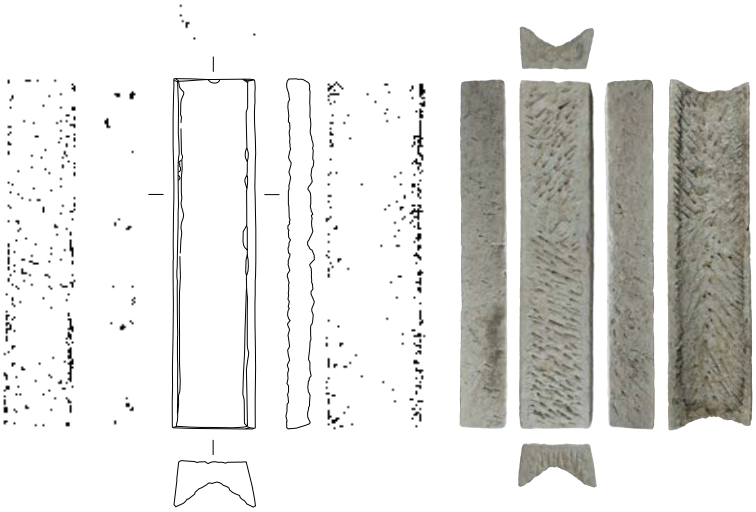
NS2区
S072；石段2
S073；石段3
S074；石段4

S=1/20
0　40cm

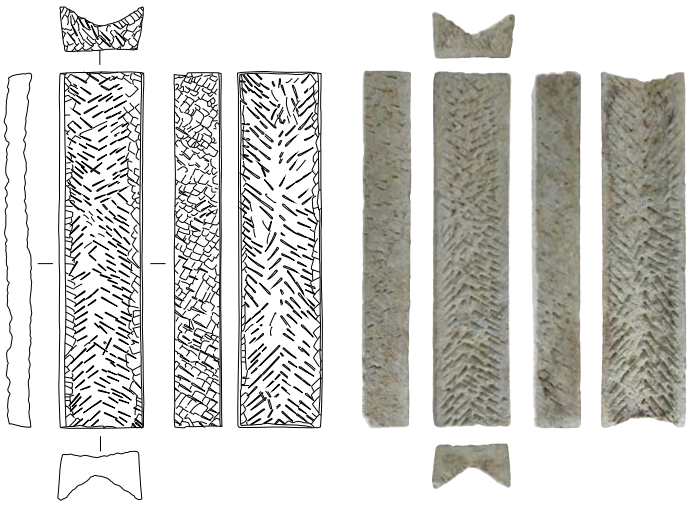
第196図　御宮出土遺物実測図　石製品22



S075　200003-S047



S076　200003-S048

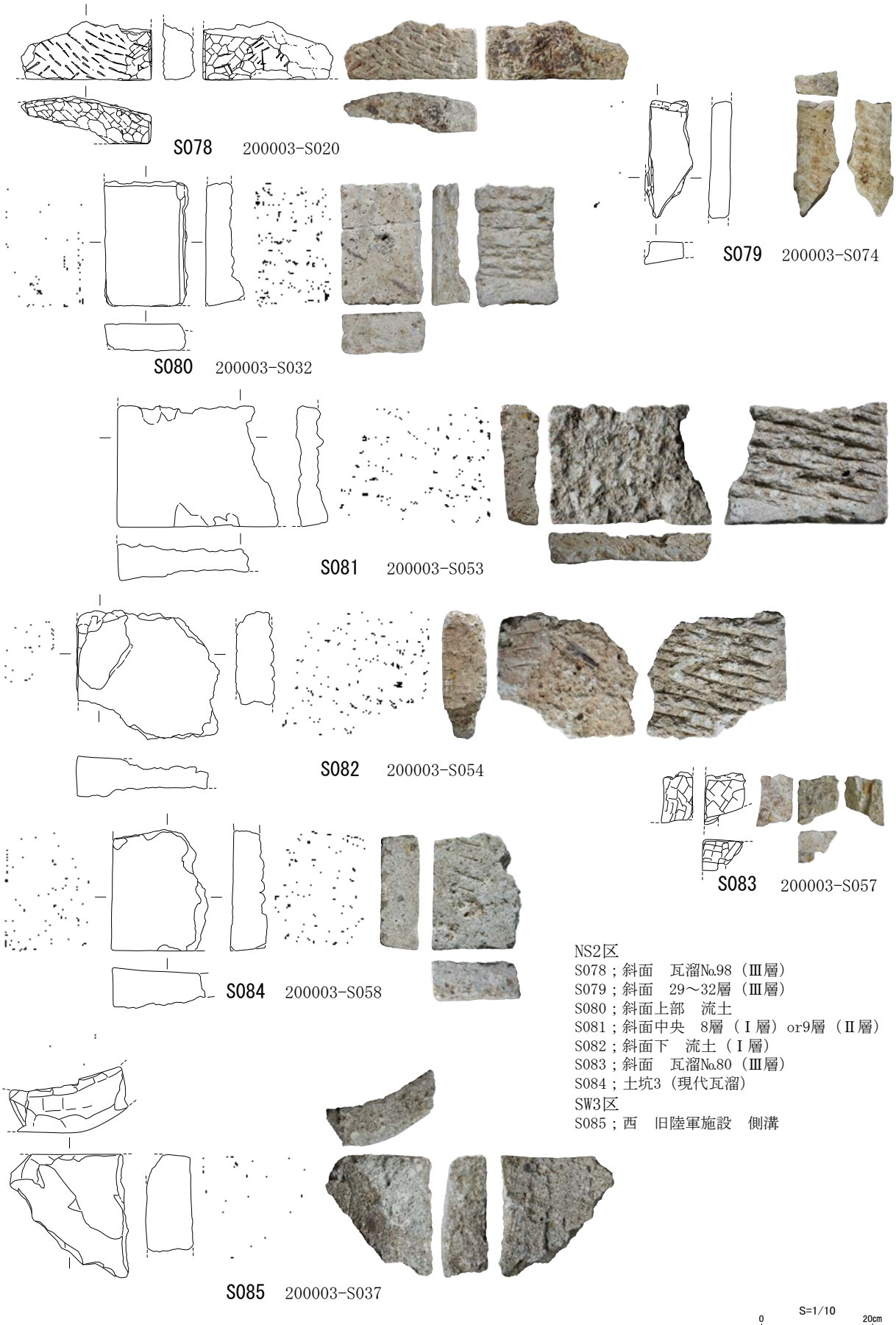


S077　200003-S044

NS2区
S075；石段5
S076；石段6
S077；石段7

S=1/20
0　40cm

第197図　御宮出土遺物実測図　石製品23

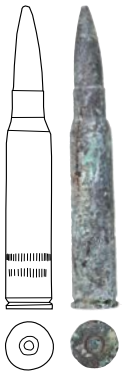


NS2区
S078；斜面　瓦溜№98（Ⅲ層）
S079；斜面　29～32層（Ⅲ層）
S080；斜面上部　流土
S081；斜面中央　8層（Ⅰ層）or9層（Ⅱ層）
S082；斜面下　流土（Ⅰ層）
S083；斜面　瓦溜№80（Ⅲ層）
S084；土坑3（現代瓦溜）
SW3区
S085；西　旧陸軍施設　側溝

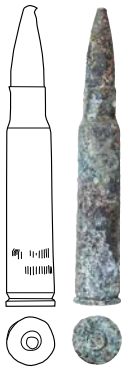
S=1/10
0　20cm

第198図　御宮出土遺物実測図　石製品24

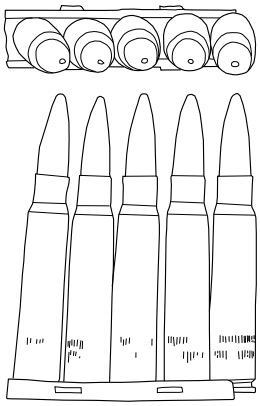
200003-M004
M036



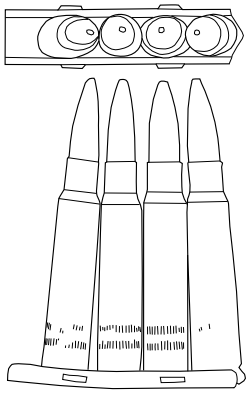
200003-M005
M037



200003-M027
M038



200003-M001
M039

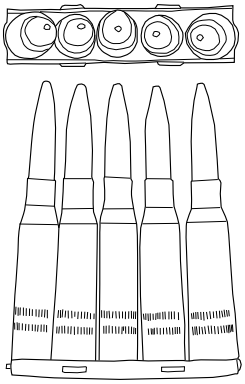


200003-M031
M040

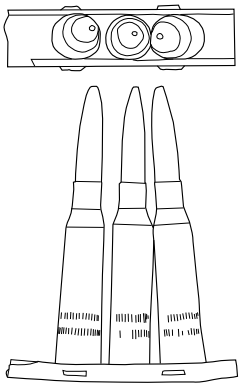
200003-M006
M041

200003-M007
M042

200003-M026
M043



200003-M002
M044

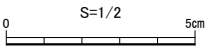


200003-M028
M045

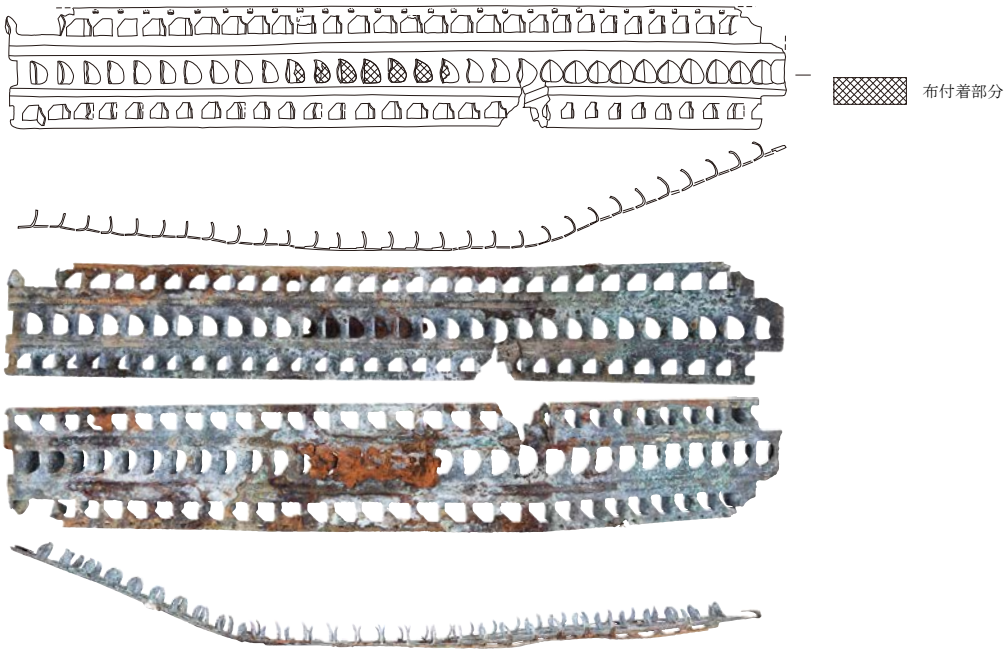
200003-M003
M046

200003-M029
M047

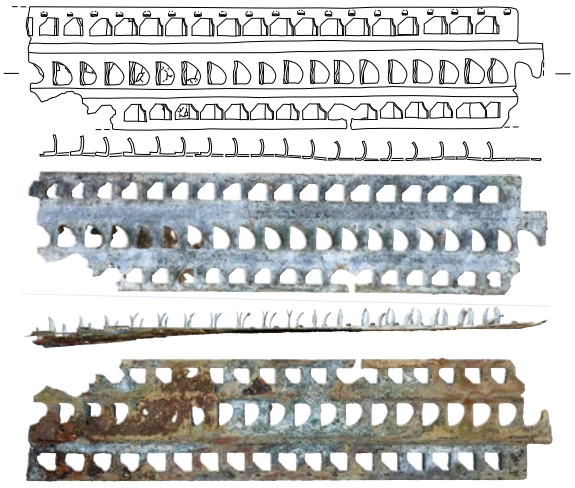
SW4区
M036～M047；銃弾廃棄土坑



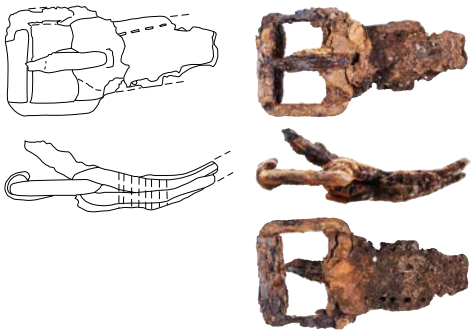
第199図　御宮出土遺物実測図　金属製品1



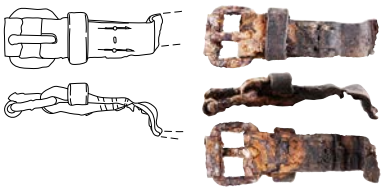
M048 200003-M008



M049 200003-M030



M050 200003-M009



M051 200003-M014

M052 200003-M035

S=1/3：M050～M052
S-1/4：M048、M049

SW4区
M048～M052；銃弾廃棄土坑

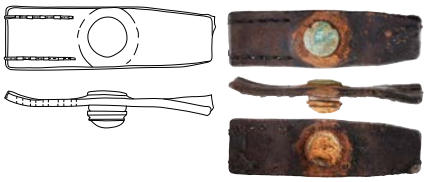
S=1/3
0 10cm

S=1/4
0 10cm

第200図 御宮出土遺物実測図 金属製品2

M053　200003-M015

M054　200003-M016



M055　200003-M020

M056　200003-M019

S=1/3:M055、M056
S=1/4:M053、M054

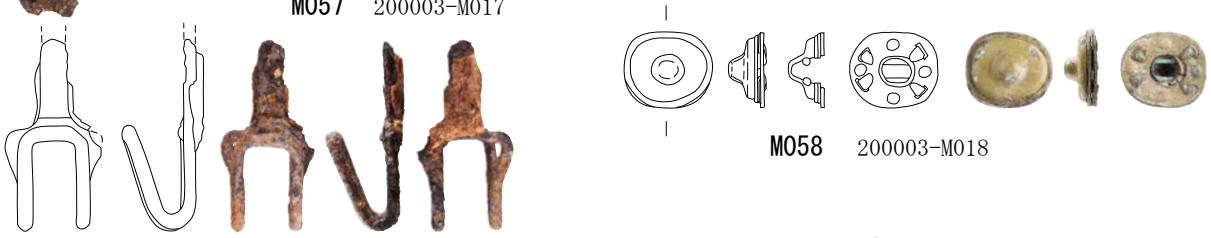
SW4区
M053～M056；銃弾廃棄土坑

S=1/3
0　10cm
S=1/4
0　10cm

第201図　御宮出土遺物実測図　金属製品3

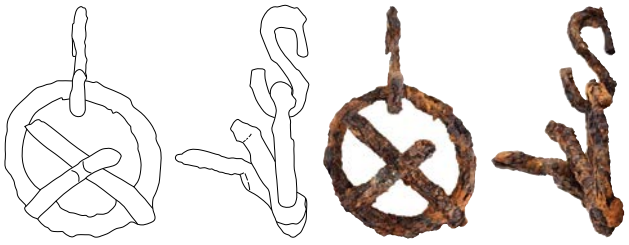
S=1/2:M058
S=1/3:M059～M061
S=1/4:M057

M057 200003-M017

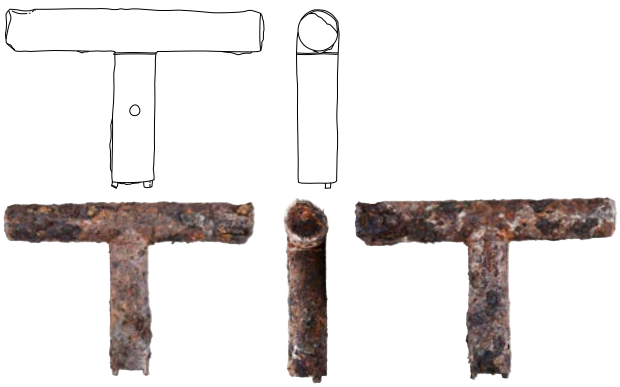


M058 200003-M018

M059 200003-M021



M060 200003-M010



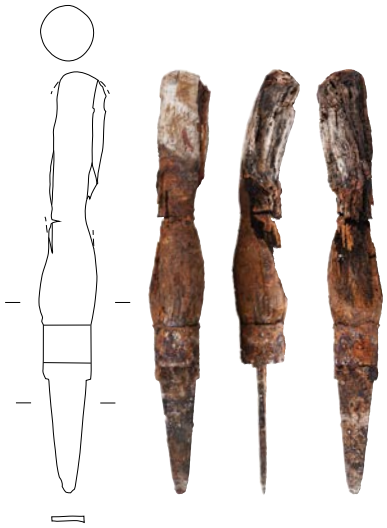
M061 200003-M011

SW4区
M057～M061；銃弾廃棄土坑

S=1/2
0 5cm
S=1/3
0 10cm
S=1/4
0 10cm

第202図　御宮出土遺物実測図　金属製品4

M062 200003-M023



M063 200003-M024

M064 200003-M032

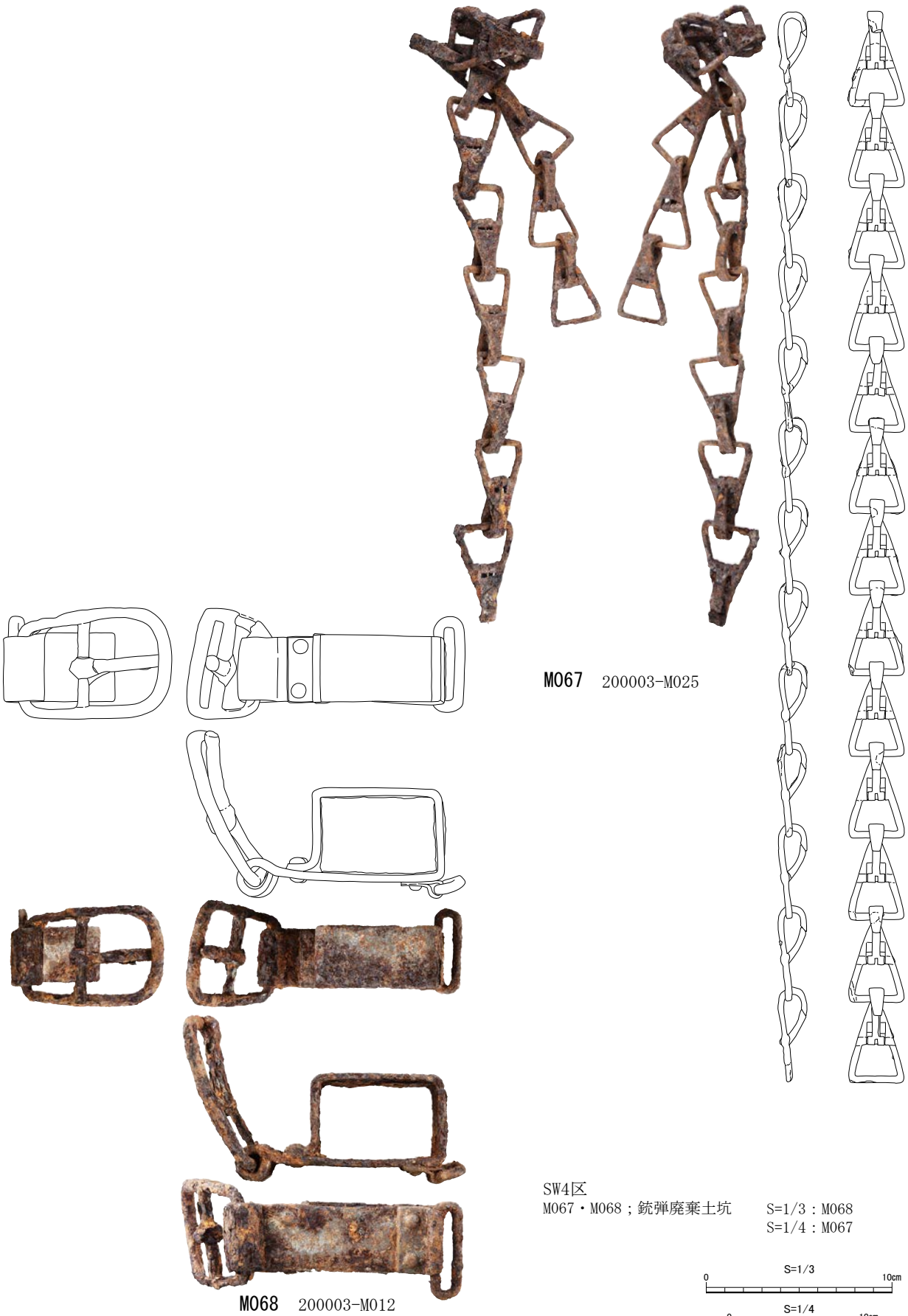
M065 200003-M033

M066 200003-M034

SW4区
M062～M066；銃弾廃棄土坑

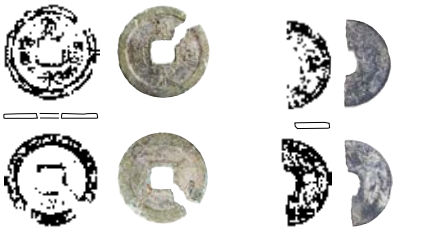
S=1/3
0 10cm

第203図　御宮出土遺物実測図　金属製品5

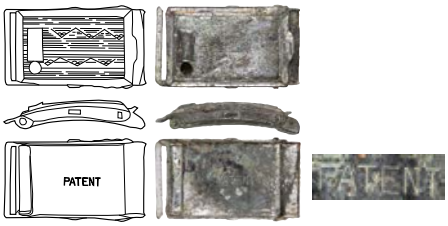


第204図 御宮出土遺物実測図 金属製品6

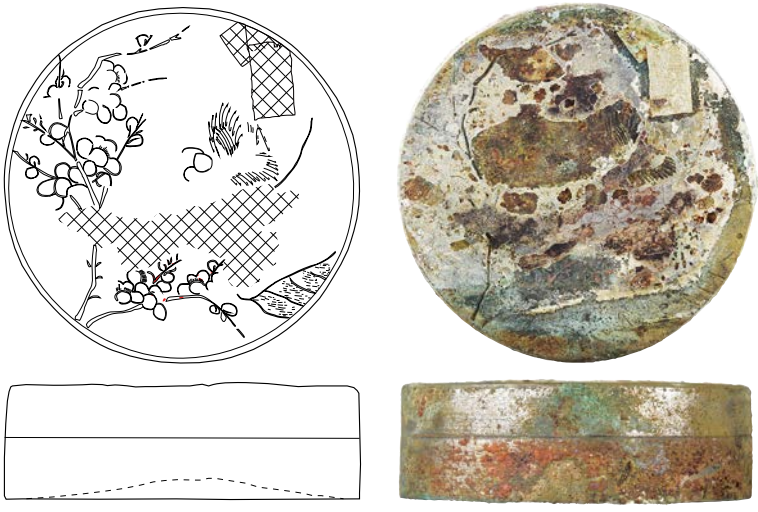
M069 200003-M013



M071 200003-M041　**M072** 200003-M038



M073 200003-M042



M070 200003-M022

M074 200003-M037

M075 200003-M044

M076 200003-M036

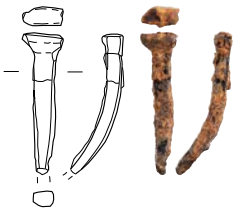
SW4区
M069・M070；銃弾廃棄土坑
SE3区
M071；表土
NS1区
M072；表土
NS2区
M073；5120N　北拡張　流土　9層（Ⅱ層）
M074；斜面　流土　13層（Ⅱ層）
M075；斜面　流土　11～14層（Ⅱ層）
M076；斜面　流土　28層（Ⅲ層）

布付着部分

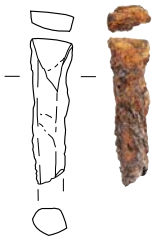
S=1/2：M071～M076
S=1/3：M069、M070

S=1/2
0　5cm
S=1/3
0　10cm

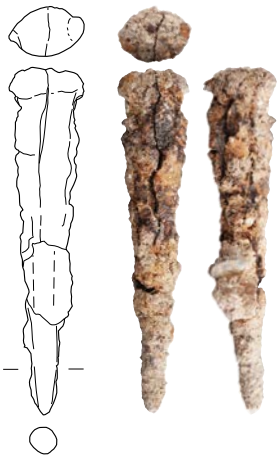
第205図　御宮出土遺物実測図　金属製品7



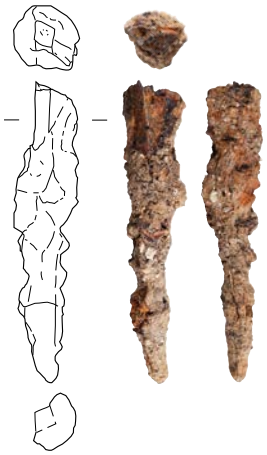
M077　200003-M048



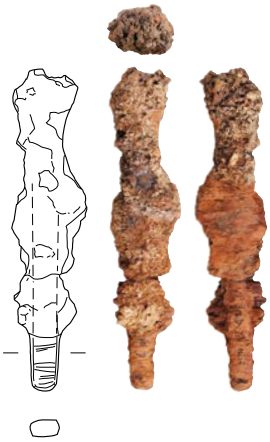
M078　200003-M049



M079　200003-M040



M080　200003-M047



M081　200003-M050

M082　200003-M039

M083　200003-M046

M084　200003-M043

M085　200003-M045

NS2区
M077・M078；斜面下半　流土　断割サブトレ　9～13層（Ⅱ層）
M079；斜面　12層（Ⅱ層）
M080；斜面　流土　15層（Ⅱ層）
M081；5120N　北　流土　18層（Ⅱ層）
M082；斜面　瓦溜№98（Ⅲ層）
M083；5120N　北拡張　流土　10層（Ⅱ層）
M084；斜面中段　瓦溜一括（Ⅲ層）
M085；斜面　流土

S=1/2：M077、M078
S=1/3：M079～M085

第206図　御宮出土遺物実測図　金属製品8

第21表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
135	P224	磁器	碗	SW2	南　整地土検出面	—	—	—	口小片	ロクロ	青花	2Ba	白	端反形	中国景徳鎮系？			200003-B015
	P225	磁器	碗	SW2	東側断割	—	4.60	(2.60)	底27/36	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系	16C		200003-B011
	P226	磁器	小碗	SW2	中央東西断割　近世整地土	6.80	—	(3.40)	口4/36	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系？	16C		200003-B013
	P227	陶器	碗	SW2	中央東西断割　近世整地土	—	—	—	口小片	ロクロ	青花	Ⅱ2Aa	白		中国漳州窯	17C		200003-B012
	P228	陶器	皿	SW2	整地土	—	4.90	(1.95)	底12/36	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅰ2Ba	浅黄橙		肥前	16C末～17C初		200003-B014
	P229	陶器	袋物	SW2	中央東西断割　近世整地土	—	5.00	(3.05)	底36/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ca	明黄橙　細砂	回転糸切り痕	肥前	16C末～17C初？		200003-D069
	P230	陶器		SW2	南端東西断割	—	—	—	不明	手づくね	織部釉	Ⅰ2Aa		持ち手	美濃			200003-B016
	P231	陶器	擂鉢	SW2	東側断割北　整地土	—	(10.80)	(3.55)	底16/36	ロクロ		Ⅰ2Cb	灰	平底	肥前	17C前半？		200003-D073
136	P232	土器	土師器皿	SW2	東側断割	12.60	8.80	2.40	口13/36 底16/36	手づくね		E1	にぶい橙　礫・粗砂多		在地	17C前葉		200003-D072
	P233	土器	土師器皿	SW2	中央東西断割　近世整地土	14.00	11.80	1.80	口9/36 底10/36	手づくね		E1	にぶい黄橙　粗砂少	板目状圧痕	在地	17C前葉		200003-D070
	P234	土器	土師器皿	SW2	中央東西断割　近世整地土	11.40	7.60	2.00	口4/36 底9/36	手づくね		E2	浅黄橙　細砂多	板目状圧痕	在地	17C前葉		200003-D071
	P235	土器	土師器皿	SW2	南端　近世整地土	12.90	7.40	2.45	12/36	手づくね		E1	橙　砂粒･微砂粒･礫多		在地	17C中葉		200003-D067
	P236	土器	土師器皿	SW2	整地土	(12.30)	(7.80)	2.40	口12/36 底22/36	手づくね		E1	にぶい橙　粗砂・礫・海綿骨針含		在地	17C中葉		200003-D068
137	P237	磁器	碗	SW2		6.80	4.80	7.35	完	型作り？	白磁		白　気泡多	筒丸形		20C		200003-B023
	P238	硬質陶器	皿	SW2		10.00	6.20	1.80	ほぼ完	型作り	染付（青･赤）	Ⅱ2Aa	白		在地	20C	外底にプリント（緑）で銘「日本硬陶」、外側面に目跡3か所、同タイプの皿が他に4点	200003-B022
	P239	磁器	鉢	SW3	北東隅　断割	「19.8」	—	(4.80)	口3/36	ロクロ	青花	2Ba	白	折縁形	中国景徳鎮系？			200003-B021
	P240	磁器	徳利	SW3	西　表土	2.60	4.20	14.00	口18/36 底　完	ロクロ？	緑（釉下） 掻き落とし	2Ba	白		美濃	20C	外底に陰刻で戦時統制番号「岐730」	200003-B020
	P241	磁器	徳利	SW3	西　表土	2.00	4.30	12.60	口14/36 底　完	ロクロ	緑（釉下） 平行沈線	2Ba	白		美濃	20C	外底に染付（プリント）で戦時統制番号「岐792」、同タイプ他に1点	200003-B019
138	P242	磁器	碗	SW3-4 SW4 NS1	境　撹乱 北　撹乱 表土	10.40	3.90	5.20	口6/36 底　完	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃？	19C後葉	被熱？煤付着	200003-B028
	P243	磁器	碗	SW3-4	現代土坑	7.20	3.10	5.10	口27/36 底　完	ロクロ	色絵、白泥、金彩	2Ba	白		再興九谷	20C	外底に朱書き銘「加賀九谷」	200003-B035
	P244	磁器	小碗	SW3-4	現代土坑	8.20	3.40	5.20	口32/36 底24/36	ロクロ	染付	2Ba	白		瀬戸・美濃？		酸化コバルト？	200003-B034
139	P245	磁器	碗	SW4	SK07 撹乱 北　表土	5.30	4.35	7.00	口19/36 底28/36	ロクロ？	染付（緑）	2Ba	白	筒丸形	美濃	20C	外底にプリント（緑）で戦時統制番号「岐413」	200003-B027

第22表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
139	P246	陶器	瓶	SW4	SD01	3.25	13.30	33.80	口　完 体18/36 底　完	ロクロ	透明釉、鉄絵	Ⅰ2Ba	灰白	通い徳利		20C	鉄絵「京□」 「百□□二升入」	200003-B024
140	P247	磁器	碗	SW4	北　撹乱	11.00	3.50	5.85	口18/36 底18/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C後葉	酸化コバルト	200003-B017
	P248	磁器	碗	SW4	北　撹乱	10.60	3.50	5.70	口23/36 底33/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C後葉～	酸化コバルト	200003-B036
	P249	磁器	碗	SW4	北　撹乱	10.80	3.70	5.45	口14/36 底32/36	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃	19C後葉～	酸化コバルト？	200003-B038
	P250	磁器	碗	SW4 SW3-4	北　撹乱 境　撹乱	10.40	4.00	6.20	口7/36 底　完	ロクロ	染付	2Ba	白	端反形	瀬戸・美濃？	19C後葉～	酸化コバルト	200003-B039
141	P251	磁器	碗	SW4	北　撹乱	10.30	4.20	5.50	口17/36 底　完	ロクロ	染付	2Ba	灰白	端反形	瀬戸・美濃	19C後葉～	酸化コバルト	200003-B037
	P252	磁器	碗	SW4	北　撹乱	10.50	4.20	4.80	口21/36 底27/36	ロクロ	染付、銘	2Ba	白		瀬戸・美濃	19C後葉～	酸化コバルト	200003-B040
	P253	磁器	小碗	SW4	北　撹乱	8.50	2.70	3.95	口33/36 底　完	ロクロ	染付、口錆	2Ba	白	端反形	再興九谷(若杉)	19C後半		200003-B018
142	P254	施釉土器	鉢	SW4 SW3-4	北　撹乱 境　撹乱	15.00	10.00	7.50	口20/36 底29/36	ロクロ	鉛釉	E2	にぶい橙		在地		内面下半煤付着	200003-D074
	P255	施釉土器	鉢	SW4	北　撹乱	(19.80)	(9.00)	10.25	口8/36 底26/36	ロクロ	鉛釉	E1	にぶい橙		在地			200003-D075
143	P256	陶器	蘭引	SW4	北　撹乱	8.40	—	(10.30)	口28/36	ロクロ	透明釉、鉄絵、白泥	Ⅰ2Aa	にぶい黄橙					200003-B041
144	P257	磁器	碗	SW4	中央　表土・撹乱	—	—	(4.50)	不明	ロクロ	染付	2Ba	白	筒形	肥前	18C後半	被熱	200003-B026
	P258	磁器	蓋	SW4	撹乱	13.60	摘み径 6.40	4.15	口9/36 摘み完	ロクロ	染付（緑） 銘	1Ba	白	丼蓋		20C	上面摘み内に青の上絵で「将集」の銘	200003-B048
	P259	陶器	皿	SW5	南壁（栗石面）19層	13.40	5.25	3.20	口27/36 底36/36	ロクロ	灰釉	Ⅱ3Bb	浅黄	貼付高台、内ハゲ皿	瀬戸・美濃	16C後半	被熱	200003-D062
	P260	陶器	皿	SW5	東　南側断割中央	11.00	4.30	3.80	口７/36 底　完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Aa	にぶい黄橙		肥前	16C末	見込胎土目跡	200003-D063
145	P261	土器	土師器皿	SW5	東　南側断割	11.20	5.40	2.50	口14/36 底14/36	手づくね		B	灰白　粗砂多		在地		口縁全周に油煙痕	200003-D064
	P262	土器	土師器皿	SW5	中央　撹乱	(13.50)	(6.00)	3.20	口５/36 底16/36	手づくね		B	灰白　細砂少		在地	17C前葉		200003-D060
	P263	土器	土師器皿	SW5	中央　撹乱	最大径 12.30	8.80	2.35	口13/36	手づくね		E1	灰白　粗砂・礫	板目状圧痕	在地	17C中葉		200003-D061
146	P264	磁器	小碗	SW6	撹乱	8.60	3.10	3.70	口24/36 底　完	ロクロ	染付	1Ba	白	端反形、輪高台	瀬戸・美濃			200003-B031
	P265	陶器	皿	SW6		「10.7」	「6.4」	1.80	5/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰黄	折縁皿	瀬戸・美濃	16C後半	見込釉剥ぎ、被熱	200003-D065
	P266	陶器	擂鉢	SW6	北　32層より下	—	—	(5.40)	小片	ロクロ	無釉	Ⅰ2Ca	灰白　粗砂多		越前？		卸目は幅３㎝、11本。	200003-D059
	P267	土器	土師器皿	SW6	北　32層より下 北	17.20	14.40	2.40	口17/36 底21/36	手づくね		E2	にぶい橙　礫・粗砂少		在地	17C初	見込櫛描き状の一方向条線	200003-D055
147	P268	土器	土師器皿	SW6	北　32層より下	16.20	10.40	2.70	20/36	手づくね		E2	にぶい橙　礫・粗砂少		在地	17C初	見込櫛描き状の一方向条線	200003-D056
	P269	土器	土師器皿	SW6	北　32層より下	16.90	13.60	2.40	8/36	手づくね		E2	にぶい橙　粗砂含		在地	17C初	見込櫛描き状の一方向条線	200003-D057

第23表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器３

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
147	P270	土器	土師器皿	SW6	北　32層より下	11.00	7.50	2.00	口10/36 底16/36	手づくね		E1	にぶい橙　粗砂多、礫少、海綿骨針		在地	17C初		200003-D058
148	P271	磁器	皿	NS1	表土	13.40	5.60	4.10	口19/36 底28/36	ロクロ	染付＋色絵(赤)	2Ba	灰白		瀬戸・美濃か再興九谷	19C後葉	アラビア数字「２」	200003-B029
	P272	磁器	鉢	NS1	石垣（5120N）裏込栗石中	11.70	7.80	7.10	完形	ロクロ？	染付		白			20C	内面に旧陸軍の星章、外底に「名陶」の銘	200003-B033
	P273	土器	土師器皿	NS1	石垣（5120N）北斜面　断割	(9.00)	(3.20)	1.95	口12/36	手づくね		B	にぶい橙　細砂・粗砂少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D034
149	P274	土器	土師器皿	NS1	斜面下端	(10.40)	(7.40)	2.10	口４/36 底７/36	手づくね		E1	にぶい黄橙　粗砂・雲母		在地	17C前葉		200003-D036
	P275	磁器	鉢	NS1	斜面下端　断割　堀覆土	14.50	—	(3.80)	口5/36	ロクロ、型押し	青花	1Ba	白	輪花	中国景徳鎮系			200003-B009
	P276	磁器	碗	NS1	斜面下　堀覆土	—	—	—	体 小片	ロクロ	青花	2Ba	灰白		中国			200003-B008
	P277	陶器	碗	NS1	斜面下端　断割　堀覆土	10.10	4.60	7.50	口21/36 底　完	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	灰白　粗砂少　気泡少	貼付高台	美濃	17C前葉		200003-D040
	P278	陶器	碗	NS1	斜面下　堀覆土	—	4.60	(4.60)	底　完	ロクロ	鉄釉、ピンホールあり	Ⅰ2Ba	灰黄	天目形？	肥前	16C末～17C初？	被熱	200003-D047
	P279	陶器	碗	NS1	斜面下端　堀覆土	(9.60)	—	(3.15)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	にぶい褐	筒形？	肥前			200003-D037
	P280	陶器	皿	NS1	斜面下　堀覆土	11.70	3.80	5.20	口18/36 底20/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	にぶい黄褐色		肥前	17C前半	見込胎土目跡	200003-D048
150	P281	陶器	皿	NS1	斜面下　堀覆土	—	4.90	(1.60)	底27/36	ロクロ	印花	Ⅱ2Ca	灰白		越中瀬戸	16C末～17C初		200003-D049
	P282	陶器	皿	NS1	斜面下　堀覆土	10.80	4.40	3.80	口18/36 底　完	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰　礫含む			16C末～17C初	被熱	200003-D041
	P283	陶器	鉢	NS1	斜面下端　断割　堀覆土	—	—	(6.50)	口６/36	ロクロ	御深井釉	Ⅰ3Bb	灰白	輪花	美濃(窯ヶ根窯)	17C		200003-D039
	P284	陶器	擂鉢	NS1	斜面下端　断割　堀覆土	—	—	(4.50)	口　小片	ロクロ	鉄釉	Ⅱ3Ca	にぶい黄橙　細砂・粗砂・礫少		越中瀬戸	16C末～17C初		200003-D038
	P285	陶器	擂鉢	NS1	斜面下　堀覆土	—	—	(6.60)	口　小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Ba	にぶい橙　微砂粒少		肥前			200003-D042
151	P286	土器	土師器皿	NS1	斜面下　堀覆土	8.80	—	2.20	26/36	手づくね		B	にぶい橙　細砂少		在地			200003-D046
	P287	土器	土師器皿	NS1	斜面下端　堀覆土	(11.40)	(7.40)	2.10	口9/36 底13/36	手づくね		E1	にぶい黄橙　粗砂	板目状圧痕	在地	17C前半		200003-D035
	P288	土器	土師器皿	NS1	斜面下　堀覆土	11.00	6.90	2.80	口29/36 底　完	手づくね		B	にぶい黄橙　細砂少、赤色粒		在地	17C前葉	口縁に油煙痕	200003-D043
	P289	土器	土師器皿	NS1	斜面下　堀覆土	11.60	7.55	3.40	口33/36 底　完	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒少		在地	17C前葉	口縁に油煙痕	200003-D044
	P290	土器	土師器皿	NS1	斜面下　堀覆土	10.90	7.80	2.45	ほぼ完	手づくね		E1	浅黄橙　粗砂・礫・黒雲母		在地	17C前葉	口縁に油煙痕	200003-D045
152	P291	磁器	皿	NS2	表土	14.20	6.00	3.70	口23/36 底　完	ロクロ	染付	2Ba	白	蛇の目凹型高台	瀬戸・美濃？	19C後葉		200003-B032

第24表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器４

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
152	P292	硬質陶器	鉢	NS2	石垣（5120N）北拡張　8層（Ⅰ層）	15.80	6.90	7.90	口10/36 底20/36	型作り	染付（青・赤）	Ⅱ2Aa	白	丼	在地	20C	外底にプリント（緑）で銘「日本硬陶」	200003-B042
	P293	磁器	皿	NS2	斜面　15層（Ⅱ層）	—	—	(0.80)	底　小片	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系			200003-B005
	P294	陶器	皿	NS2	石垣（5120N）北拡張　9～11層（Ⅱ層）	—	(5.70)	(2.50)	底6/36	ロクロ	透明釉、白泥象嵌	Ⅰ2Aa	黒褐		肥前	17C後葉？	被熱	200003-B004
	P295	陶器	皿	NS2	石垣（5120N）北　12層（Ⅱ層）	—	5.80	(1.80)	底3/36	ロクロ	灰釉、貫入あり	Ⅰ2Aa	灰黄		肥前？		畳付にも施釉	200003-D018
153	P296	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　流土　9層（Ⅱ層）	13.50	7.60	2.15	口４/36 底31/36	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒・赤色粒少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D007
	P297	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　流土　9層（Ⅱ層）	13.80	8.20	2.25	口６/36 底７/36	手づくね		D	にぶい橙　微砂粒少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D006
	P298	土器	土師器皿	NS2	斜面　流土　11層（Ⅱ層）	13.90	9.00	2.45	口14/36 底19/36	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D033
	P299	土器	土師器皿	NS2	斜面　9～14層（Ⅱ層）	14.40	9.60	2.50	13/36	手づくね		C	にぶい黄橙　細砂		在地	17C後葉		200003-D032
154	P300	土器	土師器皿	NS2	斜面　9～14層（Ⅱ層）	(13.5)	(7.00)	2.75	口2/36 底6/36	手づくね		B	橙色　微砂粒少		在地	17C後葉		200003-D026
	P301	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北拡張　11～13層（Ⅱ層）	(13.90)	—	2.50	口8/36	手づくね		B	にぶい黄橙　細砂		在地	17C中葉		200003-D023
	P302	土器	土師器皿	NS2	斜面　13層（Ⅱ層）	13.20	—	2.50	口22/36	手づくね		C	浅黄橙　細砂粒少		在地	17C後葉		200003-D013
	P303	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	13.20	7.80	2.55	19/36	手づくね		B	浅黄橙　細砂少		在地	17C後葉	口縁に油煙痕	200003-D031
155	P304	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　流土　14層一括（Ⅱ層）	13.20	8.10	2.40	完	手づくね		B	浅黄橙　細砂少		在地	17C中葉	ほぼ完形。口縁に油煙痕	200003-D002
	P305	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　流土　14層一括（Ⅱ層）	13.20	8.20	2.30	完	手づくね		B	にぶい黄橙　粗砂少		在地	17C中葉	ほぼ完形。口縁に油煙痕	200003-D003
	P306	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	12.50	7.00	2.70	口29/36 底　完	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒少、赤色粒		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D009
156	P307	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	13.20	7.50	2.00	口12/36 底14/36	手づくね		E2	にぶい黄橙　砂粒・微砂粒・礫少		在地	17C中葉		200003-D008
	P308	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	12.80	7.10	2.10	口13/36 底13/36	手づくね		C	にぶい橙　粗砂少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D010
	P309	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	12.90	6.40	2.25	口11/36 底10/36	手づくね		C	にぶい黄橙　微砂粒少		在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D011
	P310	土器	土師器皿	NS2	石垣（5120N）北　14層（Ⅱ層）	(12.70)	—	2.55	口13/36	手づくね		C	淡黄　粗砂・礫少	板目状圧痕	在地	17C中葉	口縁に油煙痕	200003-D012
157	P311	土器	土師器皿	NS2	斜面　流土　15層（Ⅱ層）	12.40	7.80	2.90	11/36	手づくね		B	にぶい黄橙　細砂		在地	17C後葉		200003-D017
	P312	土器	土師器皿	NS2	斜面　流土　15層（Ⅱ層）	14.80	9.20	2.50	6/36	手づくね		C	にぶい黄橙　粗砂少	板目状圧痕	在地	17C中葉？	口縁に油煙痕	200003-D016
	P313	土器	土師器皿	NS2	斜面　15層（Ⅱ層）	12.80	7.70	2.60	口15/36 底18/36	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒		在地	17C後葉	口縁に油煙痕	200003-D014
	P314	土器	土師器皿	NS2	斜面　15層（Ⅱ層） 斜面　11～14層（Ⅱ層）	13.60	9.20	2.80	口20/36 底20/36	手づくね		B	にぶい黄橙　粗砂少		在地	17C後葉	口縁に油煙痕	200003-D015

第25表　出土遺物観察表　御宮　陶磁器・土器５

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
158	P315	土器	土師器皿	NS2	石垣(5120N)北　流土18層（Ⅱ層）	「14.00」	「9.30」	2.00	口７/３６ 底7/36	手づくね		B	浅黄橙　粗砂少雲母		在地	17Ｃ中葉		200003-D029
	P316	土器	土師器皿	NS2	石垣(5120N)北　流土18層（Ⅱ層）	「12.40」	「7.20」	2.50	口4/36 底11/36	手づくね		B	浅黄　細砂少		在地	17Ｃ中葉		200003-D030
	P317	磁器	碗	NS2	斜面　流土　15～21上層（Ⅱ～Ⅲ層）	—	—	(3.50)	体　小片	ロクロ	青花	2Ba	白	染付碗Ｃ群（蓮子碗）	中国景徳鎮系	16C	漆継	200003-B006
	P318	陶器	碗	NS2	斜面　瓦溜	—	3.40	(4.80)	底6/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	にぶい黄橙		肥前	16Ｃ末～17Ｃ初	畳付に砂付着	200003-D019
	P319	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜	13.00	7.80	2.20	10/36	手づくね		B	にぶい黄橙　細砂少		在地	17Ｃ中葉？		200003-D005
	P320	磁器	皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	—	—	(1.30)	口　小片	ロクロ	青花	2Ba	灰白		中国景徳鎮系			200003-B007
	P321	磁器	碗	NS2	斜面　31層（Ⅲ層）	—	4.70	(3.50)	底　完	ロクロ	染付	2Ba	白		肥前	17Ｃ前半	畳付釉剥ぎ砂付着	200003-B001
	P322	陶器	皿	NS2	斜面　31層（Ⅲ層）	—	—	(3.50)	口　小片	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅰ2Ba	明褐灰		肥前	16Ｃ末～17Ｃ前半		200003-B002
159	P323	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	14.20	8.80	1.85	口６/36 底８/36	手づくね		B	にぶい橙　微砂粒少		在地	17Ｃ後葉		200003-D001
	P324	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	(13.80)	(8.70)	2.20	口4/36 底10/36	手づくね		C	橙　粗砂・礫少		在地	17Ｃ中葉		200003-D025
	P325	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	8.80	4.30	1.70	？/36	手づくね		B	にぶい橙　粗砂多		在地	17Ｃ中葉		200003-D027
	P326	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	14.20	—	1.80	口6/36	手づくね		B	にぶい黄橙　微砂粒少	板目状圧痕？	在地	17Ｃ後葉		200003-D022
	P327	土器	土師器皿	NS2	斜面　瓦溜　24層（Ⅲ層）	13.00	—	(2.75)	口3/36	手づくね		E1	橙　細砂・粗砂多		在地	17C前葉		200003-D020
	P328	土器	土師器皿	NS2	31層（Ⅲ層）	12.10	7.50	2.40	口２/36 底８/36	手づくね		C	橙　粗砂微		在地	17Ｃ中葉	口縁に油煙痕	200003-D004
	P329	土器	土師器皿	NS2	斜面　29～32層（Ⅲ層）	(10.40)	—	(2.45)	口8/36	手づくね		D	にぶい黄橙　細砂多、焼土塊		在地	17C初？		200003-D021
	P330	陶器	皿	NS2	斜面上半　流土　20層より下（Ⅳ層）	—	「4.8」	(0.80)	底4/36	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰白		瀬戸・美濃	17C初？		200003-D028
	P331	土器	土師器皿	NS2	斜面上半　流土　20層より下（Ⅳ層）	(13.60)	11.20	2.30	口3/36	手づくね		A	浅黄橙　細砂・粗砂多　海綿骨針		在地	17C初？		200003-D024
	P332	磁器	皿	NS2	北端　堀　埋土上層	—	7.50	(1.60)	底3/36	ロクロ	青花	1Ba	白		中国景徳鎮系		高台内染付二重圏線。高台内に線状の擦痕多数あり	200003-B003

第26表　出土遺物観察表　御宮　瓦１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（cm）										珠文径他	胎土		内面調整	特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
160	T041	袖軒平	SE3	西半	釉	黒褐光沢	九曜	(16.50)	(19.80)	5.70	—	2.90	3.35	5.00	3.20	3.00			1	橙　白色粒･細砂多、礫少			200003-D147
	T042	軒平	SW2	東側断割 近世整地土	燻		三葉Ⅰ？	—	—	—	—	—	2.80	4.70	2.20	2.90			A2	灰白　細砂少、空隙少			200003-D080
	T043	棟か熨斗	SW2	東側断割	燻			(12.20)	—	—	—	(1.90)							A2	灰白　粗砂少		凸面に沈線文	200003-D146
	T044	隅巴？	SW2	東側断割	燻			(9.90)	(11.50)			(6.30)	1.80～5.60						B?2	灰白　細砂・粗砂・礫少、空隙多			200003-D142
	T045	丸	SW2	東壁 11層	燻			(16.90)	(14.70)	3.50	(11.50)	8.80	2.70	7.30					B?1	灰白　礫・粗砂少、細砂多	コビキB 刺縫痕 棒状圧痕		200003-D143
	T046	熨斗？	SW2	東壁 5層	燻			(11.80)	(11.00)	2.30									B1	灰　細砂・粗砂・空隙多			200003-D144
161	T047	鬼瓦	SW4	銃弾廃棄土坑	釉	黒褐光沢		最大長(7.80)	最大幅(10.09)	最大厚(2.40)									1	赤橙　白色粒・細砂多、礫少			200003-D145
	T048	軒桟	SW4	北表土・撹乱	釉	濃紫光沢	星Ⅰ	—	—	7.20	—	14.20	2.70	4.50	2.90	2.70			1	橙　白色粒・細砂・粗砂多			200003-D148
	T049	軒桟	SW4	表土	釉	黒褐光沢	玉Ⅳ	(23.50)	(24.40)	(6.80)	(6.30)	2.50	3.05	4.80	2.80	3.35			1	暗赤褐　細砂･粗砂･空隙多、礫少			200003-D149
	T050	軒平	NS2	石垣（5120N）南 土坑1	釉	鉄漿	半葉	—	—	—	3.70	—	2.70	4.30	1.90	2.30			越前	橙　粗砂少			200003-D110
	T051	軒平	NS2	石垣（5120N）裏込 土坑3 斜面 瓦溜	釉	鉄漿？	半葉	27.00	25.80	4.50	4.30	18.40	2.60	3.80	1.90	2.60			越前	橙、灰白　粗砂少			200003-D109
162	T052	桟	NS2	土坑3	釉	黒褐		32.10	(31.80)	4.10	4.50	5.00	4.40	1.75	4.25				5Ⅰ？	橙　白色粒・粗砂多		ほぼ完、釘穴1個	200003-D111
	T053	軒丸	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻		梅鉢Ⅱか Ⅲ	(19.60)	(14.70)	—	2.10							花弁2.7	B2	灰白　細砂多			200003-D086
	T054	軒丸	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層） 斜面 瓦溜 斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	燻		巴Ⅱ-1c	(14.80)	(10.60)	(7.70)	1.80							珠文1.1 巴幅1.55	A2	灰白　粗砂微		瓦当面型の木目残る。T054～T059同笵か	200003-D139
	T055	軒丸	NS2	斜面 瓦溜 25層（Ⅲ層）	燻		巴Ⅱ-1c	(14.45)	(9.90)	(7.10)	(2.50)							珠文1 巴幅1.6	C2	灰白　粗砂少	コビキB	笵ワレ・笵キズあり　瓦当面型の木目強く残る。T054～T059同笵か	200003-D101
	T056	軒丸	NS2	斜面 28層 石鬼北（Ⅲ層）	燻		巴Ⅱ-1c	14.40	10.60	7.30	2.50							珠文1 巴幅1.5	A2	灰白　細砂少	布目痕 縫合せ痕?	瓦当面型の木目強く残る。T054～T059同笵か	200003-D100
163	T057	軒丸	NS2	斜面 瓦溜 №28（Ⅲ層） 斜面 29層（Ⅲ層）	燻		巴Ⅱ-1c	14.50	11.10	7.90	1.60							珠文１ 巴幅1.5	C2	灰白　粗砂・礫含む	コビキB 布目痕	瓦当面型の木目強く残る。ズレあり T054～T059同笵か	200003-D081
	T058	軒丸	NS2	31層（Ⅲ層）	燻		巴Ⅱ-1c	14.30	10.50	7.40	2.00							珠文1 巴幅1.55	C2	灰白　細砂少	コビキB 布目痕 縫合せ痕?	瓦当面型の木目強く残る。笵ワレ・笵キズあり　T054～T059同笵か	200003-D103
	T059	軒丸	NS2	斜面下 造成土	燻		巴Ⅱ-1c	「15.0」	「11.4」	「8.2」	1.70							珠文１ 巴幅1.6	A2	灰白　礫・砂粒微		笵ワレ・笵キズあり　瓦当面型の木目強く残る　T054～T059同笵か　最大長9.05cm	200003-D137
	T060	軒丸	NS2	斜面 瓦溜	釉	鉄漿	巴Ⅱ-2a	(14.40)	(10.80)	(7.20)	2.60							珠文1.1 巴幅1.7	越前	にぶい橙、灰白 細砂少	コビキB		200003-D138
	T061	軒平	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層）	燻		三葉Ⅵ？						2.40	(4.30)	1.80	1.60			C2	灰白　粗砂少		瓦当面後の屈曲部に櫛目残る　T061～T065同笵	200003-D120
	T062	軒平	NS2	石垣(5120N)北 流土 14層(Ⅱ層)	燻		三葉Ⅵ？	—	—	—	—	—	—	(2.40)	—	1.70			C2	灰白　きめ細かいが空気層含む		T061～T065同笵	200003-D124
	T063	軒平	NS2	斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	燻		三葉Ⅵ	25.30	24.60	5.00	6.10	14.20	2.40	3.90	1.40	1.40			C2	灰白　細砂少		瓦当面後の屈曲部に櫛目残る　T061～T065同笵	200003-D131
	T064	軒平	NS2	斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	燻		三葉Ⅵ	—	—	—	—	—	2.40	3.90	1.40	1.80			A2	灰白 硬質緻密、空隙少		瓦当面後の屈曲部に櫛目残る　T061～T065同笵	200003-D125
	T065	軒平	NS2	斜面 25層（Ⅲ層）	燻		三葉Ⅵ	—	—	—	—	—	2.20～2.30	3.90～4.00	2.50	1.90			A2	灰白　粗砂少		瓦当面後の屈曲部に櫛目残る　T061～T065同笵	200003-D134

第27表　出土遺物観察表　御宮　瓦２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（cm）											胎土		内面調整	特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	珠文径他					
164	T066	軒桟	NS2	表土	釉	黒褐光沢	卍（小丸部）	(6.00)	(13.50)	—	—	—	—	—	—				5Ⅰ?	にぶい黄褐　粗砂・細砂少、礫微			200003-D112
	T067	丸	NS2	石垣（5120N）北 9～11層（Ⅱ層）	釉	鉄漿		(29.30)	(9.65)	3.20	(6.75)	(7.70)	1.85	5.00					越前	灰、淡橙　細砂・粗砂少、縞状	コビキB 刺縫痕	被熱	200003-D094
	T068	丸	NS2	斜面 瓦溜	燻			29.70	16.60	4.90	13.50	8.10	2.10	4.30					B2?	灰白　砂粒・礫少	コビキB 布目痕 縫合せ痕? 刺縫痕	完形	200003-D082
	T069	丸	NS2	8～9層（Ⅰ～Ⅱ層）	燻			29.30	—	4.30	—	8.30	2.10	6.60					B2	灰　白色粒・粗砂多	コビキB 刺縫痕		200003-D090
165	T070	丸	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層）	燻			29.80	16.80	4.10	13.50	8.30	2.00	6.10					B2	灰　白色粒・粗砂多	コビキB 刺縫痕 棒状圧痕		200003-D091
	T071	丸	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層）	燻			30.15	(16.60)	5.50	13.40	8.15	2.50	4.20					B2	暗灰　砂粒・礫多	コビキB 刺縫痕	体部上面「○」陰刻？	200003-D092
	T072	丸	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層）	燻			(20.60)	(15.80)	4.70	12.85	(8.10)	2.00	6.10					B2	灰　粗砂・礫含む	コビキB 刺縫痕		200003-D093
166	T073	丸	NS2	石垣（5120N）北 11層（Ⅱ層）	燻			30.40	16.80	4.10	13.00	8.50	2.00	6.20					B2	灰　白色粒・粗砂多	コビキB 刺縫痕 布目痕		200003-D088
	T074	丸	NS2	石垣（5120N）北 11層（Ⅱ層）	燻			(20.10)	15.70	—	—	7.60	2.00	—					C2	灰白　粗砂・礫少	コビキB 布目痕		200003-D089
	T075	丸	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻			28.80	15.40	4.40	13.00	8.30	2.00	6.50					B2	灰白　細砂・粗砂多、礫少	コビキB 刺縫痕	側面に「○」の墨書２個	200003-D085
167	T076	丸	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻			—	—	4.40	12.60	(7.95)	1.85	4.15					B2	灰白　礫・砂粒含む	コビキB 刺縫痕		200003-D096
	T077	丸	NS2	斜面 瓦溜 No.89（Ⅲ層）	燻			(18.75)	(16.10)	—	—	(8.15)	(2.00)	—					B2	灰　粗砂・礫多	コビキB 刺縫痕? 棒状圧痕		200003-D087
	T078	丸	NS2	斜面 瓦溜	燻			(26.20)	17.50	(0.90)	14.30	7.90	2.30	5.90					B2	灰白　礫少　粗砂・細砂少	コビキB 刺縫痕 布目痕	指頭圧痕残る　内側端「○」墨書？	200003-D098
	T079	丸	NS2	斜面 瓦溜	燻			20.00	17.00	4.50	13.20	6.50	0.90	2.10					B2	灰白　白色粒・粗砂多、空隙多	コビキB 刺縫痕		200003-D099
168	T080	丸	NS2	斜面 瓦溜	燻			(51.40)	(16.70)	(5.65)	14.00	(8.15)	2.10	6.50					B1	灰白　粗砂・細砂少、縞状	コビキB 布目痕		200003-D105
	T081	丸	NS2	斜面 瓦溜	燻			(21.95)	(9.20)	5.10	(3.80)	—	1.80	—					A2	灰 粗砂少、礫微	刺縫痕 布目痕 棒状圧痕	外側に「○」墨書？	200003-D106
	T082	丸	NS2	斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	燻			20.00	14.70	3.70	11.80	7.30	1.80	5.90					A2	灰白 細砂少	コビキB 刺縫痕 布目痕		200003-D102
	T083	丸	NS2	斜面 瓦溜 25層（Ⅲ層）	燻			—	14.50	5.50	11.70	7.60	2.00	6.30					A2	灰白 細砂少	コビキB 刺縫痕 布目痕	玉縁の先端に斜めにヘラケズリが入る 外側に「○」墨書？	200003-D107
169	T084	丸	NS2	斜面 25層（Ⅲ層）	燻			28.40	—	—	—	—	1.70	—					C2	灰白　粗砂・細砂少	コビキB 刺縫痕 布目痕		200003-D108
	T085	丸	NS2	斜面 28層 石鬼下面（Ⅲ層） 斜面瓦溜 No.76（Ⅲ層）	燻			(14.10)	13.30	(0.60)	(10.20)	8.00	1.80	6.50					C2	灰白　粗砂少	コビキB 布目痕	指頭圧痕残る	200003-D095
	T086	丸	NS2	斜面 29層（Ⅲ層）	燻			—	—	3.70	(12.30)	8.10	1.90	4.70					A2	灰白　細砂・粗砂少	コビキB 刺縫痕 布目痕 縫合せ痕?	最大長24.35cm　最大幅11.55cm	200003-D104
	T087	丸	NS2	斜面 瓦溜下	燻			—	14.80	4.00	12.10	7.10	1.50	4.90					A2	灰白　細砂少、空隙あり	コビキB 刺縫痕 布目痕	指おさえ	200003-D097

第28表　出土遺物観察表　御宮　瓦３

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法（cm）											胎土		内面調整	特記事項	ID（実測番号）
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	珠文径他					
170	T088	平	NS2	石垣（5120N）南 撹乱１	釉	鉄漿		(17.40)	(23.25)	—	—	(2.00)							越前	にぶい橙　細砂多、粗砂・礫微、空隙あり			200003-D136
	T089	平	NS2	石垣(5120N)北 11 ～ 13層(Ⅱ層)	燻			27.30	(15.15)	(16.90)	2.00	1.70							B2	灰　細砂・粗砂多、礫少			200003-D122
	T090	平	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻			30.10	(15.30)	(14.40)	(1.20)	1.70							A1?	灰　細砂並、礫少			200003-D127
	T091	平	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻			(27.50)	—	(11.65)	—	(2.25)							B1	灰白　礫微、粗砂少			200003-D128
171	T092	平	NS2	斜面 15層（Ⅱ層）	燻			16.35	—	24.60	2.60	2.05							B2	灰　細砂・粗砂多			200003-D123
	T093	平	NS2	斜面 瓦溜 No.26（Ⅲ層）	燻			29.00	(12.80)	(20.20)	—	2.10							A2	灰白　粗砂少、空隙少			200003-D117
	T094	平	NS2	斜面 瓦溜 No.89（Ⅲ層）	燻			52.50	—	—	(2.60)	(2.20)							B2	灰　細砂・粗砂多、礫少			200003-D121
	T095	平	NS2	斜面 瓦溜一括	燻			27.20	26.20	24.50	2.20	1.90							B2	灰　細砂・粗砂多		側面「○」墨書	200003-D129
172	T096	平	NS2	斜面 瓦溜	燻			28.90	—	—	(30.50)	1.50							C2	暗灰　細砂少		最大幅19.85cm	200003-D113
	T097	平	NS2	斜面 瓦溜	燻			27.80	(13.70)	(12.40)	(1.50)	1.50							B2	灰　細砂・粗砂多、礫少			200003-D114
	T098	平	NS2	斜面 瓦溜	燻			(25.50)	(13.40)	—	—	1.70							C2	灰白　粗砂少　礫微			200003-D115
	T099	平	NS2	斜面 瓦溜	燻			—	—	—	2.45	2.25							B2	灰　礫微、細砂多		最大長21.60cm　最大幅25.25cm	200003-D116
173	T100	平	NS2	斜面 瓦溜	釉	鉄漿		(22.00)	—	(18.45)	—	2.00							越前	にぶい橙　礫・粗砂少			200003-D132
	T101	平	NS2	斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	釉	鉄漿		(16.30)	(17.70)	(13.20)		2.00							越前	浅黄橙・橙 細砂多、礫少、空隙少			200003-D135
	T102	平	NS2	斜面 26層（Ⅲ層）	燻			29.05	—	25.00	3.20	1.60							A2	灰白　細砂・粗砂少		最大幅25.45cm	200003-D133
	T103	熨斗	NS2	斜面テラス北 11層（Ⅱ層）or 21層（Ⅲ層）	釉	鉄漿		(14.30)	(11.20)	(1.80)									越前	橙　細砂・粗砂多、礫微、縞状		凹面に平行沈線文	200003-D119
	T104	熨斗	NS2	斜面 15 ～ 21上層（Ⅱ～Ⅲ層）	釉	鉄漿		—	—	2.00									越前	淡橙　細砂少　大きな空隙あり		最大長16.15cm　最大幅12.25cm	200003-D126
174	T105	谷丸（右）	NS2	石垣（5120N）北 12層（Ⅱ層）	燻			(27.70)	16.80	3.30	(12.65)	7.80	2.00	5.80					B1	灰白　軟質,細砂多、縞あり	コビキB 刺縫痕		200003-D084
	T106	谷丸（左）	NS2	斜面中段 瓦溜一括（Ⅲ層）	燻			長33.00 短29.30	18.80	4.00	14.50	8.90	2.50	6.20					A2	灰白 細砂少	コビキB ナデ	ほぼ完、釘穴1個	200003-D083
	T107	隅平？	NS2	石垣（5120N）北 11層（Ⅱ層）	燻			—	—	—	—	1.90							C2	灰白　粗砂少			200003-D118
	T108	掛	NS2	斜面 瓦溜	燻			(12.80)	—	(12.10)	—	(2.00)							C2	灰白　粗砂少		水返し付き	200003-D130
	T109	棟込	NS2	瓦溜 石垣（5120N）北流土 9層（Ⅱ層）	燻			—	—	—	—								A2	灰白　細砂少		先端に陽刻「○」？	200003-D140
	T110	棟込	NS2	斜面 瓦溜	燻		菊	8.60	6.60	—	1.50								B2	灰　細砂多			200003-D141

第29表　出土遺物観察表　御宮　石製品１

鬼瓦・軒瓦

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	瓦当文様	寸法（瓦当）（cm）									寸法（体部）（cm）								重さ（kg）	特記事項	ID（実測番号）
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	a	b	c	d	e	f	g	h	i			
175	S006	鬼瓦	NS2	斜面 瓦溜 №33（Ⅲ層）	三つ葉葵										48.30						43.80			(24.35)		200003-S001
	S007	鳥衾	NS2	斜面 瓦溜 №10（Ⅲ層）											27.10	12.50								(4.35)		200003-S063
176 177	S008	掛瓦	NS2	斜面 瓦溜 №98（Ⅲ層）	小丸部：巴Ⅰ 平部：四葉？	小丸部 13.70	10.10		3.80		4.50	7.40		2.86	小丸部含む（41.00） 含まない（36.80）	(25.60)					6.40	5.30	6.60	(12.40)		200003-S041
178	S009	軒丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №36（Ⅲ層）	巴Ⅰ	(11.55)									47.65	14.30	2.85		11.60	7.20	6.60			(9.60)		200003-S002
	S010	軒丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №42（Ⅲ層）	巴Ⅰ	12.50	9.50		(9.50)						(14.50)	14.00				(9.5)				(2.59)		200003-S079
	S011	軒平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №91（Ⅲ層）		(17.00)	(16.80)	7.50	—	—	4.10	7.40	1.20	3.20	(34.3)	(17.00)			5.15					(4.27)		200003-S006
	S012	軒平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №95（Ⅲ層）	四葉	29.60	28.70	6.50	7.30	15.80	3.10	5.50	2.50	3.80	(25.6)	29.8								(4.86)		200003-S080

丸瓦

図版	番号	器種	地区	出土地点	寸法（体部）（cm）									重さ（kg）	特記事項	ID（実測番号）
					a	b	c	d	e	f	g	h	i			
179	S013	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №43（Ⅲ層）	(33.40)	14.50	3.40	(13.20)	12.60	7.10	7.50			(4.80)	１B類	200003-S051
	S014	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №30（Ⅲ層）	(30.35)	(14.40)	1.90	(12.50)	11.70		(5.65)			(5.27)	１B類	200003-S039
	S015	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №90②（Ⅲ層）	(43.30)	(13.50)	—	(12.60)	(11.60)	7.10	—			(5.25)	１B類？	200003-S036
	S016	丸瓦	NS2	斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）	(22.85)	(15.20)	(3.20)	—	—	7.30	(6.80)			(4.42)	１C類	200003-S072
180	S017	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №5（Ⅲ層） 斜面 28層石鬼下面（Ⅲ層）	47.20	14.50	3.10	13.30	11.20	4.40	5.30			(5.02)	２B類？	200003-S023
	S018	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №31（Ⅲ層）	43.40	14.90	3.20	(8.30)	10.30	4.70	5.50				２B類	200003-S005
	S019	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №101（Ⅲ層）	(37.30)	14.70	(2.50)	13.70	11.40	9.20	5.50			(5.56)	２B類	200003-S017
181	S020	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №14（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №17（Ⅲ層）	45.00	14.70	2.90	13.70	(11.20)	5.90	5.90			(6.71)	２A類	200003-S011
	S021	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №92（Ⅲ層）	45.70	14.80	3.00	(6.30)	10.10	5.40	5.70			(5.76)	２A類	200003-S004
	S022	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №86（Ⅲ層）	(36.00)	15.10	3.20	(12.20)	11.50	(6.10)	6.10			(5.45)	２A類	200003-S025
182	S023	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №93（Ⅲ層）	(39.30)	15.30	(2.80)	14.50	12.00	5.20	6.60			(5.48)	２C類	200003-S003
	S024	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №4（Ⅲ層）	(41.20)	(15.00)	(2.75)		(11.85)	5.60	(6.55)			(5.47)	２C類	200003-S060
	S025	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №29（Ⅲ層）	(41.90)	(15.00)	2.50	—	11.60	6.20	6.10			(5.73)	２B類	200003-S014
	S026	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №3（Ⅲ層）	(35.10)	14.80	2.70	9.10	11.20	6.20	6.60			(5.51)	２A類	200003-S022
183	S027	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）	(26.50)	(15.30)	2.60	14.00	11.70	6.0	(6.00)			(4.10)	２A類	200003-S069
	S028	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №9（Ⅲ層）	(26.50)	14.70	(3.00)	(13.10)	11.40	6.70	6.00			(3.94)	２A類	200003-S035
	S029	丸瓦	NS2	斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）	(21.50)	13.10	3.20	12.20	11.30	(6.80)	6.00			(3.42)	２A類	200003-S075
	S030	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №8（Ⅲ層）	(35.70)	15.00	2.80	14.20	12.00	7.10	7.00			(6.22)	２C類	200003-S028
	S031	丸瓦	NS2	斜面中段 瓦溜（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №37（Ⅲ層）	(21.10)	(13.70)	3.20	(9.00)	10.60	7.60	5.40			(2.30)	２B類　外面：剥離多い	200003-S071
184	S032	丸瓦	NS2	瓦溜中段（Ⅲ層）	—	—	2.00	—	10.90	6.70	5.50			(2.66)	２B類	200003-S077
	S033	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №113（Ⅲ層）	(19.50)	15.20	—	—	(10.70)	7.30	—			(3.13)	２類	200003-S073
	S034	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №99（Ⅲ層）	(37.50)	14.90	—	—	9.10	4.80	—			(4.20)	玉縁欠損	200003-S040
	S035	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №90③（Ⅲ層）	(38.10)	(14.10)	—	—	10.50	5.20	—			(4.87)	玉縁欠損	200003-S067

第30表　出土遺物観察表　御宮　石製品２

丸瓦

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	寸法（体部）（cm）									重さ（kg）	特記事項	ID（実測番号）
					a	b	c	d	e	f	g	h	i			
185	S036	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №72（Ⅲ層）	(34.10)	(13.15)	—	—	—	4.95	—			(3.89)	玉縁欠損	200003-S068
	S037	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №32（Ⅲ層）	36.90	15.70	—	—	11.00	5.60	—			(5.21)	２類	200003-S038
	S038	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №103（Ⅲ層）	24.80	14.30	—	—	6.50	3.90	—			(2.40)	完形	200003-S049
	S039	丸瓦	NS2	斜面 瓦溜 №6（Ⅲ層）	16.20	14.30	—	—	—	3.30	5.80			1.38	完形	200003-S056

平瓦

図版	番号	器種	地区	出土地点	寸法（体部）（cm）									重さ（kg）	特記事項	ID（実測番号）
					a	b	c	d	e	f	g	h	i			
186	S040	平瓦	NS2	石垣（5120N）北　流土　9層（Ⅱ層）石段１直上近く	(26.10)	29.8	—	2.55	5.00					(5.24)		200003-S064
	S041	平瓦	NS2	斜面 11層（Ⅱ層）	(35.50)	—	29.70	2.70	3.50					(4.87)		200003-S026
	S042	平瓦	NS2	石垣（5120N）北　18層下部（Ⅱ層）	54.80	(31.00)	30.50	3.20	3.70 （～4.20）					(12.0)		200003-S013
187	S043	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №37（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №90①（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №90②（Ⅲ層）	55.35	30.70	30.70	3.00	(3.40)					(12.2)	最大幅31.10cm	200003-S010
	S044	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №96（Ⅲ層） 斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）	56.80	31.00		3.75	3.25					(4.01)		200003-S021
188	S045	平瓦	NS2	斜面中段 瓦溜下層（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №22（Ⅲ層）	53.40	31.10	30.40	2.70	2.50～6.10					(11.05)	面戸付平瓦	200003-S007
	S046	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №67（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №68（Ⅲ層）	(51.20)	29.70	—	3.10	4.10					(9.0)	面戸付平瓦	200003-S050
189	S047	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №83（Ⅲ層） 西壁 №110（Ⅲ層）	31.20	30.80	30.30	3.10	4.10					(6.66)		200003-S055
	S048	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №78（Ⅲ層）	19.90～ 23.20	30.6	30.60	3.00	3.60					(4.20)		200003-S019
	S049	平瓦	NS2	瓦溜 斜面中段 瓦溜下層（ａｂ）（Ⅲ層） 瓦溜 №12（Ⅲ層）	—	—	30.80	2.80	3.70 ～4.20					(4.52)		200003-S034
	S050	平瓦	NS2	斜面中段 瓦溜（Ⅲ層） 斜面中段 瓦溜 24層（Ⅲ層） 斜面 瓦溜 №23（Ⅲ層）	(23.10)	—	30.50	4.00	3.6					(3.43)		200003-S061
190	S051	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №102（Ⅲ層）	(25.55)	31.10	—	3.50	(3.00)					(4.48)		200003-S029
	S052	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №91②（Ⅲ層） 斜面中段 瓦溜（Ⅲ層） 斜面 24層（Ⅲ層）	(33.50)	30.40	—	4.00	4.20					(6.35)		200003-S024
	S053	平瓦	NS2	斜面　瓦溜 №94（Ⅲ層） 東壁 №95の奥、同一レベル（Ⅲ層）	—	30.40		3.40	3.60～5.00					(5.81)		200003-S027
191	S054	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №97（Ⅲ層）	(24.50)	—	30.50	3.15	(3.30)					(3.65)		200003-S066
	S055	平瓦	NS2	斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）	(26.20)	30.50	—	3.40	3.60					(3.96)		200003-S070
	S056	平瓦	NS2	斜面中段 瓦溜 24層（Ⅲ層）	(15.50)	(30.60)	—	(3.70)	4.20					(2.68)	針穴（1.40cm）２個	200003-S078
	S057	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №97（Ⅲ層）	—	—	—	—	3.20					(1.87)	最大長20.85cm　最大幅16.85cm	200003-S062
	S058	平瓦？	NS2	斜面 瓦溜 №90①（Ⅲ層）	(13.00)	(14.00)	(4.50)		4.0					(0.78)		200003-S065
	S059	平瓦	NS2	斜面 瓦溜 №47（Ⅲ層）	(20.10)	(22.40)	8.30	2.30	3.10					(1.95)	厚み3.10（～3.70～）cm	200003-S012

第31表　出土遺物観察表　御宮　石製品３

桟瓦

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	器種	地区	出土地点	寸法（体部）(cm)									重さ (kg)	特記事項	ID（実測番号）
					a	b	c	d	e	f	g	h	i			
192	S060	桟瓦	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層） 斜面上部 流土 斜面 石段検出前流土（Ⅱ層）	55.00	(31.3)	12.60	5.4	—	—	—	4.60	3.5	(5.84)		200003-S031
	S061	桟瓦	NS2	斜面 流土 9層（Ⅱ層）	(46.9)	(30.15)	—	—	—	—	(4.25)	—	3.6	(5.54)		200003-S052
	S062	桟瓦	NS2	9層（Ⅱ層）	(46.0)	(15.8)	—	—	—	2.80	—	—	—	(3.80)		200003-S033
193	S063	桟瓦	NS2	斜面 流土 11層（Ⅱ層） 斜面北端 8層（Ⅰ層）～9層上部（Ⅱ層）	(43.80)	37.00	11.10	4.50	?	4.50	4.00 /2.50	4.20	4.10	(10.06)		200003-S008
	S064	桟瓦	NS2	11層（Ⅱ層）	55.80	35.80	11.00	—	—	—	2.60	4.50	3.4	(9.22)	釘穴あり	200003-S009
194	S065	桟瓦	NS2	11層（Ⅱ層）	(41.1)	41.90	3.30	14.40	2.80	—	3.20	4.50	3.95	(8.22)	「△」の刻印？	200003-S015
	S066	桟瓦	NS2	斜面上部 流土	52.70	(24.5)	—	—	15.10	4.50	(3.80)	(4.70)	3.0	(6.98)		200003-S016
	S067	桟瓦	NS2	斜面上部 流土	最大長 (30.9)	最大幅 (25.1)	—	—	—	—	—	5.20	2.75	(2.76)		200003-S076
195	S068	桟瓦	NS2	斜面上部 流土	(24.00)	(26.10)	—	—	—	—	—	—	(2.70)	(2.10)		200003-S018
	S069	桟瓦	NS2	斜面上部 流土	(41.50)	(18.40)	—	—	—	—	—	—	—	(3.15)		200003-S030
	S070	桟瓦	NS2	斜面上部 流土	最大長 (16.20)	最大幅 (19.90)	—	—	—	—	—	—	—	(1.14)		200003-S059

棟瓦・他

図版	番号	器種	地区	出土地点	寸法（体部）(cm)									重さ (kg)	特記事項	ID（実測番号）
					a	b	c	d	e	f	g	h	i			
195	S071	棟瓦	NS2	石段1	102.30	22.20	12.60	6.60	4.60	2.00	19.00			33.4	石段に転用	200003-S043
196	S072	棟瓦	NS2	石段2	86.10	21.60	12.60	5.70	6.10	1.10	(17.40)			(28.5)	石段に転用	200003-S042
	S073	棟瓦	NS2	石段3	93.90	21.60	12.30	6.25	5.00					28.8	石段に転用	200003-S045
	S074	棟瓦	NS2	石段4	93.00	21.80		6.40	5.20					31.0	石段に転用	200003-S046
197	S075	棟瓦	NS2	石段5	94.00	22.30		5.00	7.00					32.4	石段に転用	200003-S047
	S076	棟瓦	NS2	石段6	92.20	21.80		5.20	(6.00)					29.6	石段に転用	200003-S048
	S077	棟瓦	NS2	石段7	93.80	22.40	12.60	6.40	4.80					31.5	石段に転用	200003-S044
198	S078	棟瓦	NS2	斜面 瓦溜 №98（Ⅲ層）	(10.50)	(23.30)	—	—	5.50					(1.79)		200003-S020
	S079	平瓦？	NS2	斜面 29～32層（Ⅲ層）	(21.10)	(8.40)	4.00		4.0					(0.61)		200003-S074
	S080	石瓦？	NS2	斜面上部 流土	(22.25)	(15.05)	4.8				6.95	2.25	2.35	(2.30)		200003-S032
	S081	石瓦？	NS2	斜面中央 8層（Ⅰ層）or 9層（Ⅱ層）	(21.70)	—	(3.80)							(3.01)	表面全面剥離	200003-S053
	S082	石瓦？	NS2	斜面下 流土（Ⅰ層）	(21.90)	(25.55)	—							(2.93)		200003-S054
	S083	石瓦？	NS2	斜面 瓦溜 №80（Ⅲ層）	(9.40)	(7.20)	(5.70)							(0.33)		200003-S057
	S084	石瓦？	NS2	土坑3（現代瓦溜）	(21.60)	—	(5.70)							(2.68)		200003-S058
	S085	側溝部材	SW3	西 旧陸軍施設 側溝	(22.00)	(21.20)	(11.70)							(3.59)		200003-S037

第32表　出土遺物観察表　御宮　金属製品１

（ ）は遺存値 「 」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	特記事項	ID（実測番号）
199	M036	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.98	1.27	―	25.7	擬製弾	200003-M004
	M037	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.99	1.27	―	26.3	擬製弾	200003-M005
	M038	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.97	1.28	―	25.9	擬製弾	200003-M027
	M039	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	8.20	6.65	1.70	11.1	擬製弾	200003-M001
	M040	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	8.20	6.30	1.70	114.9	擬製弾	200003-M031
	M041	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.58	1.21	―	20.8	擬製弾	200003-M006
	M042	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.60	1.20	―	21.1	擬製弾	200003-M007
	M043	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.53	1.20	―	20.0	擬製弾	200003-M026
	M044	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.90	6.20	1.65	112.1	擬製弾	200003-M002
	M045	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.85	6.10	1.60	71.0	擬製弾	200003-M028
	M046	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.61	1.21	―	13.9	擬製弾	200003-M003
	M047	銅	銃弾	SW4	銃弾廃棄土坑	7.54	1.20	―	12.9	擬製弾	200003-M029
200	M048	真鍮	保弾板	SW4	銃弾廃棄土坑	41.00	6.55	―	126.0		200003-M008
	M049	真鍮	保弾板	SW4	銃弾廃棄土坑	27.10	6.50	0.95	80.5		200003-M030
	M050	鉄＋革	革ベルトのバックル	SW4	銃弾廃棄土坑	(8.40)	4.60	(2.80)	バックル26.1 革ベルト6.8		200003-M009
	M051	鉄＋革	革ベルトのバックル	SW4	銃弾廃棄土坑	(6.20)	2.40	(2.10)			200003-M014
	M052	鉄	ベルトのバックル？	SW4	銃弾廃棄土坑	3.90	4.60	0.90	23.2		200003-M035
201	M053	革	拳銃のケース？	SW4	銃弾廃棄土坑	23.10	14.40	―	73.2		200003-M015
	M054	革	ライフル銃のケース？	SW4	銃弾廃棄土坑	(43.20)	(15.80)	―	18.6		200003-M016
	M055	革＋銅？＋鉄？	ベルト	SW4	銃弾廃棄土坑	(8.30)	2.50	1.46	―	縫い目あり	200003-M020
	M056	革+銅？	革製品とスナップボタン	SW4	銃弾廃棄土坑	2.70	3.10	1.10	―		200003-M019
202	M057	革	馬具？	SW4	銃弾廃棄土坑	(46.65) 伸ばした時 (60.50)	―	(0.40) 重なった所 (0.80)	126.0		200003-M017
	M058	銅+？	スナップボタン orホック	SW4	銃弾廃棄土坑		2.30	1.00	5.4		200003-M018
	M059	鉄	銃の負革の先端金具？	SW4	銃弾廃棄土坑	(7.65)	(3.90)	(3.30)	34.1	布状の物付着	200003-M021
	M060	鉄	馬具の一部？	SW4	銃弾廃棄土坑	9.20	6.20	(5.30)	68.4		200003-M010
	M061	鉄	？	SW4	銃弾廃棄土坑	7.20	10.25	1.70	217.6		200003-M011
203	M062	鉄＋木	？	SW4	銃弾廃棄土坑	(17.00)	3.60	2.00	53.6	柄木製	200003-M023
	M063	鉄＋木	？	SW4	銃弾廃棄土坑	16.80	(2.70)	2.20	40.8	柄木製	200003-M024
	M064	鉄	フック	SW4	銃弾廃棄土坑	14.75	6.50	4.40	134.9		200003-M032
	M065	鉄	フック	SW4	銃弾廃棄土坑	14.80	6.30	4.35	130.8		200003-M033
	M066	鉄	フック？	SW4	銃弾廃棄土坑	(14.20)	(6.10)	(5.70)	225.0		200003-M034
204	M067	鉄	チェーン	SW4	銃弾廃棄土坑	最大長 77.10	最大幅 3.95	最大厚 2.00	486.0		200003-M025
	M068	鉄	？	SW4	銃弾廃棄土坑	15.00	6.00	9.05	411.0		200003-M012

第33表　出土遺物観察表　御宮　金属製品２

（ ）は遺存値 「 」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	特記事項	ID（実測番号）
205	M069		缶	SW4	銃弾廃棄土坑	16.70	11.90	6.00	387.7	墨書「内容液ハ上ノ線以上ニ収ヵ容ヵスヘカラズ」	200003-M013
	M070	真鍮？	合子	SW4	銃弾廃棄土坑	9.40	—	3.00	407.0	陰刻、赤彩、布付着	200003-M022
	M071	銅	銭	SE3	表土	2.45	2.45	0.11	1.9	寛永通宝	200003-M041
	M072	銅	銭	NS1	表土	2.31	1.20	0.11	1.4		200003-M038
	M073		腕時計ベルトバックル	NS2	石垣（5120N）北拡張 流土 9層（Ⅱ層）	3.70	2.00	0.80	9.1	裏面に陰刻「PATENT」	200003-M042
	M074	銅	釘	NS2	斜面 流土 13層（Ⅱ層）	2.40	0.85	0.80	1.0		200003-M037
	M075	銅	釘	NS2	斜面 流土 11～14層（Ⅱ層）	(2.55)	0.95	0.75	1.1		200003-M044
	M076	銅	釘	NS2	斜面 流土 28層（Ⅲ層）	(2.15)	1.00	0.90	1.9		200003-M036
206	M077	鉄	釘	NS2	斜面下半 流土 断割サブトレ 9～13層（Ⅱ層）	(3.70)	1.05	(0.50)	1.9		200003-M048
	M078	鉄	釘？	NS2	斜面下半 流土 断割サブトレ 9～13層（Ⅱ層）	(3.85)	1.15	(0.55)	4.4		200003-M049
	M079	鉄	釘？	NS2	斜面 12層（Ⅱ層）	9.20	2.00	1.50	25.0		200003-M040
	M080	鉄	釘	NS2	斜面 流土 15層（Ⅱ層）	(7.95)	1.70	1.50	13.3		200003-M047
	M081	鉄	釘？	NS2	石垣（5120N）北 流土 18層（Ⅱ層）	8.50	サビ付 1.95 釘 0.80	サビ付 1.20 釘 0.45	14.8		200003-M050
	M082	鉄	釘	NS2	斜面 瓦溜 №98（Ⅲ層）	(7.15)	サビ付 1.35 釘 0.65	サビ付 1.10 釘 0.60	11.1		200003-M039
	M083	鉄	目鑿？	NS2	石垣（5120N）北拡張 流土 10層（Ⅱ層）	6.20	9.60	3.90	77.0		200003-M046
	M084	鉄	釘？	NS2	斜面中段 瓦溜一括（Ⅲ層）	(9.60)	2.60	—	—		200003-M043
	M085	鉄？	鉱滓	NS2	斜面 流土	7.60	5.10	3.50	175.0		200003-M045

第４節　小結

１．金沢東照宮の遺構について

今回の発掘調査では、調査区の制約等もあり、東照宮に関連する建物遺構は確認できなかったが、周辺部分の石垣の位置や形状等が明らかとなった。また、絵図でも通路の表現がされている郭北東部の斜面上で、石瓦の棟石を転用した簡易な階段を確認している。郭北東部の斜面部で鬼瓦を含む凝灰岩製の石瓦が出土したことにより、東照宮の建物の一部に石瓦が葺かれていた可能性が高くなった。

本節では大別層ごとに遺構の様相を振り返っていきたい。

Ⅰ層　近代から現代層で、近代以降の建物基礎や、地下埋設物などが調査区ほぼ全域で確認された。明治以降の旧陸軍建物の絵図をみると、明治40年頃には病院が建てられ、その後、将校集会所となる。基本的な建物の配置や規模は変化しておらず、金沢大学となった昭和50年頃まで続く（第207図）。航空写真を比べても、屋根の形状等は変化しておらず、同じ建物を使用し続けたとみられる。

Ⅱ層　近世層であるが、NS2区以外ではⅠ層やⅢ層との境が不明確なままである。SW5からSW6区にかけて、標高約41m、黄褐色系の砂質土の整地面が該当する可能性がある。この地点は、近世段階では東照宮創建以降一貫して門が建てられている。近代以降では、旧陸軍関係の建物が建っており、その範囲は整地面の広がりと重複している。ただ、整地面の南端の掘り込みが旧陸軍の病院に付属していた厠の位置とも重なっているが、この厠は将校集会所の平面図には残っておらず、ある時期撤去されており、それに伴う地下構造物の抜き取り痕と想定している。また、整地面下からは近世初頭の遺物が出土しており、黄褐色土の整地面を東照宮と関連付けることに大きな矛盾はない。

郭の呼称である「御宮」だが、近世初期の絵図では、「村井出雲」や「北ノ丸」と記されており、それが東照宮造営以降「御宮」（「権現堂」の記述もある）となる。絵図では、延宝年間に描かれた「加賀国金沢之図」（金沢市立玉川図書館蔵）が東照宮を描いた初期のものとしてあげられる。それ以降、明治11年（1878）に移転するまで主要な建物は大きく変化しないが、唯一変化があるのが宝蔵（経蔵）である。前述の延宝年間の絵図にはなく、天和２～貞享４年（1682 ～ 1687）頃とされる「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）に登場する。「御城中壱分碁絵図」（文政13年（1830）横山隆昭氏蔵）に描かれて以降の絵図にはみられない。『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』［金沢城研究調査室2006］では、文化年間から天保元年に限って描かれているとしており、従来考えられていたよりも、宝蔵が存続していた期間は長くなる。しかし、「金沢古城図」については、17世紀末の景観を描いたものとされるが、その年代観と一致する郭と、やや新しい要素を含む可能性をもつ郭があると指摘されており、今後年代観が変わる可能性もあるが、現時点の評価として17世紀末の景観とし、今後文献資料等での裏付けを待ちたい。なお、第２節でもふれたように、今回の調査では宝蔵に関係する遺構は確認できなかった。

Ⅲ層　主にNS2区で確認された、①空堀の埋め立てと東照宮建立、②石瓦の廃棄、③棟石を転用した階段の廃棄までが該当する。この段階の造成により、空堀の埋め立てが行われ、東照宮が建てられる。この埋立ての際に隣接する藤右衛門丸との間に平坦面が造成されるが、仕切りとしての石垣5120Nも築かれたと考えられる。東照宮は寛永19年（1642）に造営が開始、翌20年（1643）に竣工する。その後藤右衛門丸との間にある平坦面が斜面上（御宮側）からの流土で埋没し始め、その初期段階で平坦面に集積状態であったものを含む石瓦が、燻瓦や17世紀中葉の遺物とともに廃棄されている。石瓦は鬼瓦に三つ葉葵が刻まれており、東照宮関連の建物の屋根瓦と考えてよいだろう。出土した石瓦の構成から本瓦葺の屋根と考えられるが、どの建物で使用されていたかは不明である。この上層の流土層からは17世紀後半の遺物が出土しており、東照宮創建からそう時間を置かず、廃棄されたとみられる。棟石を転用した石段はこの流土を基盤として設置しており、御宮と藤右衛門丸との簡易的な通路であったと考えられる。江戸後期の絵図では、土羽部分に通路とみられる描写や、御宮北辺に巡る柵

の一部に出入り口が描かれており、検出した石段の位置ともほぼ一致する（第207図）。この石段を埋める斜面流土中からは、石製の桟瓦も出土しているが、具体的な年代は不明である。

これら一連の廃棄や埋没については、東照宮の修理等と関連している可能性が高く、記録では延宝５年（1677）、宝暦３～５年（1753～55）、文化12年（1815）に修理されたとあるが（第２章第４表参照）。石瓦の廃棄は出土遺物の年代から延宝５年（1677）の修理と関連する可能性もある。

Ⅳ層　NS1区とNS2区で確認した空堀の基盤層が該当する。後述する藤右衛門丸における、金沢城初期の段階の整地土の存在を勘案すると、Ⅳ層もそれらと連動している可能性もある。

２．西辺の内向き石垣5113Eについて

本調査では、SW4区より絵図等にも描かれない郭の内向きの石垣を確認した。この石垣は、城内ではほとんど見られない、自然石を使用（河川転石）した石垣であった。金沢城石垣編年１期の自然石積みでは、河川転石も混じるが、戸室石切丁場で採取して城内へ持ち込んだとみられる戸室石の自然石や割石を主体としている。5113Eは戸室石が４割程度含まれるが、石切丁場から持ち込んだとは考えにくく、河川より手頃な石材を選び、搬入した中に一定量の戸室石と同質の石材が含まれていたと推測している。石積みについては、一部石材の規格が揃い、布積みとなる部分もあるが、大部分は河川転石の小口部分を面として、やや大型の石材は大面を見せるように横置きして点々と置いている。そして、ごくまれに、大型の石材を立石状に配置する。

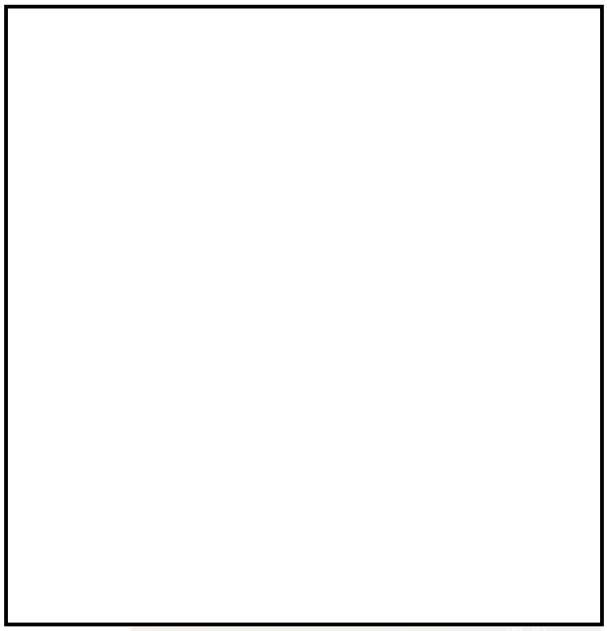
この石垣の時期を特定するような出土遺物はなく、先述した通りこういった石垣は城内では比較可能な事例もない。また、本調査では隅角部も確認しておらず、検討が難しいが、石積みや石材からは古い様相を示しているようにもみえることから、金沢城石垣よりも、やや先行する事例である白山市鳥越城跡や同舟岡山城跡の石垣を参考にみてみたい。

両者の石垣の特徴については、それぞれの報告書において整理されており、金沢城１期の石垣とも比較検討されているのでそちらを参照していただきたい（白山市2017、白山市2018）。鳥越城跡の石垣は１から３類に、舟岡山城跡では２類に分類されており、石積みの特徴は以下の通りである。

これをみると、金沢城１期石垣と近似するとされる舟岡山城二類石垣以外は、基本的に石材を小口積し、横置きした石材が混在するようである。また、大型石材の大面を立てて配置する点も共通している。鳥越城石垣にみられる、１類の石面の凹凸については、5113Eは面の平らなものを選択しているようにみえる。一方で２類の石面を水平に置く点については、横長材は水平を意識して置かれており、鳥越城２類石垣に、より共通点を見いだすことができる。

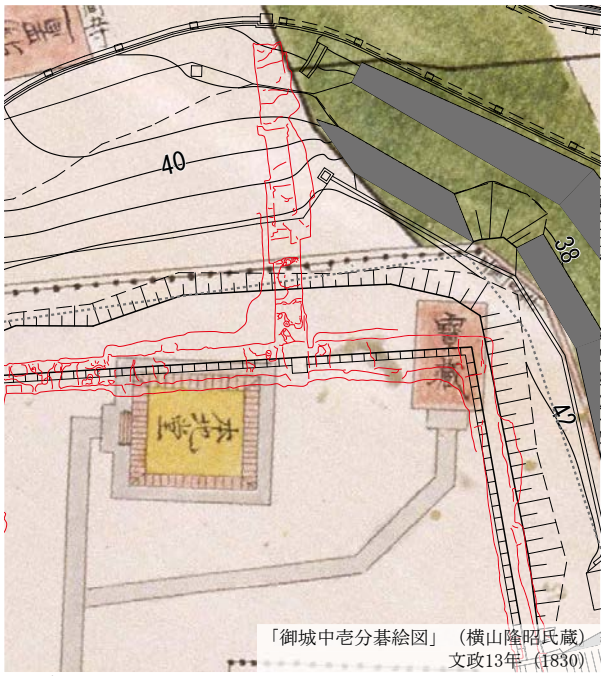
十分に現地で石垣を観察し検討を行ったわけではないが、以上の点は御宮の石垣5113Eが金沢城石垣編年の１期（文禄期）石垣よりも、先行する要素をもっていることを示している。ただし、郭の内向きの石垣であるという、場による違いといった可能性も含めて、今後の類例を待ちたい。

	鳥越城			舟岡山城		金沢城（御宮）
	1類	2類	3類	1類	2類	5113E
積み	小口積、 横置き（60～100㎝大） 凹凸の目立つ壁面	小口積、横置き混在（多） 石面を水平に置く 60～80㎝大面数石ごと配置	小口積、横置き混在 大型材縦置き 「鏡石」組み込む	小口積 一部に横積み 平石の大面立てる	小口積	小口積、横置き 60㎝～大型材一定間隔で縦置き
隅角部	—	算木状	—	重ね積	算木積	—
詰石		あり		あり	あり	あり
勾配	50～60度	60度前後	60度	50度後半	一類より急	ほぼ垂直（根石付近）
裏込め	なし	あり	裏込め僅か　介石程度か	土砂の混じり少　栗石層	あり	石尻付近　部分的
矢穴				あり	あり	あり
年代等	中世集落遺構の石積みに近い	船岡山一類と親和性 天正11年（1583）		鳥越城2類と親和性 天正11年（1583）矛盾ない	金沢城1期と近似 文禄元年（1592）に近い	



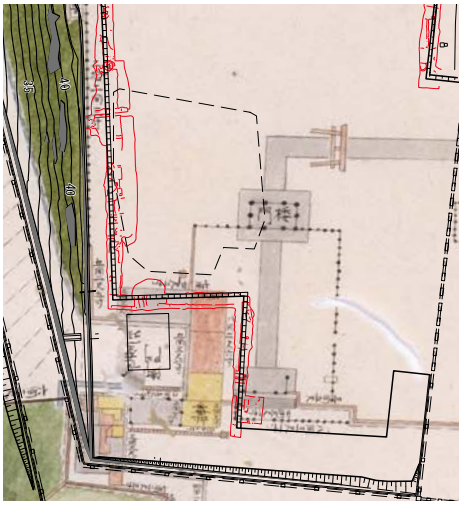
「金沢御城内外御建物絵図」（（公財）前田育徳会蔵）
天保４～９年（1833～1838）

黒：現況図　赤：調査区

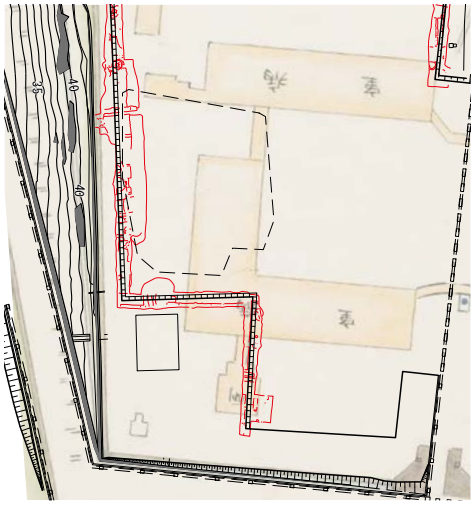


「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）
文政13年（1830）

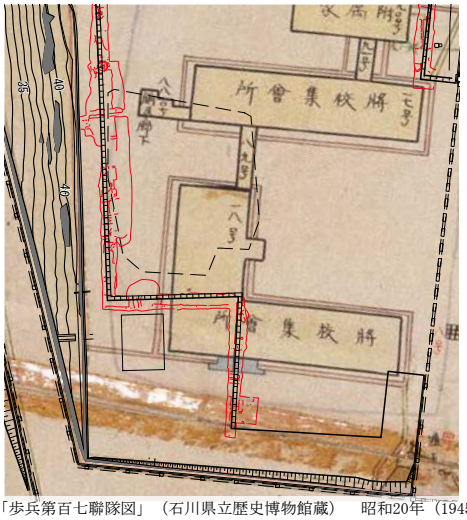
NS2区絵図照合図



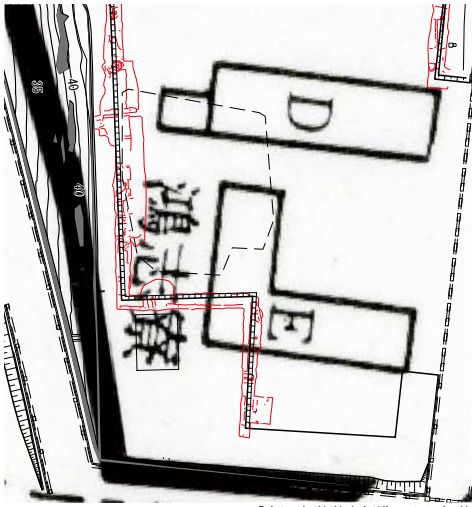
「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年（1830）



「歩兵第七連隊構外木柵解除之図」（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵）
明治32年（1899）



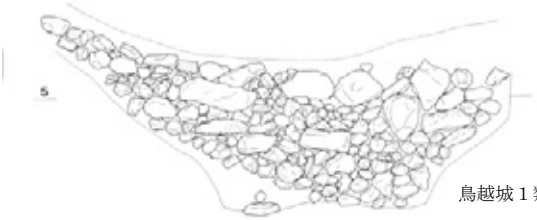
「歩兵第百七聯隊図」（石川県立歴史博物館蔵）　昭和20年（1945）



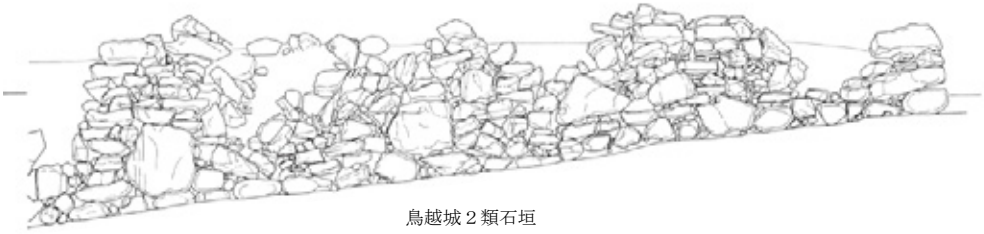
「金沢大学学生便覧」より転載

NS2区絵図照合図

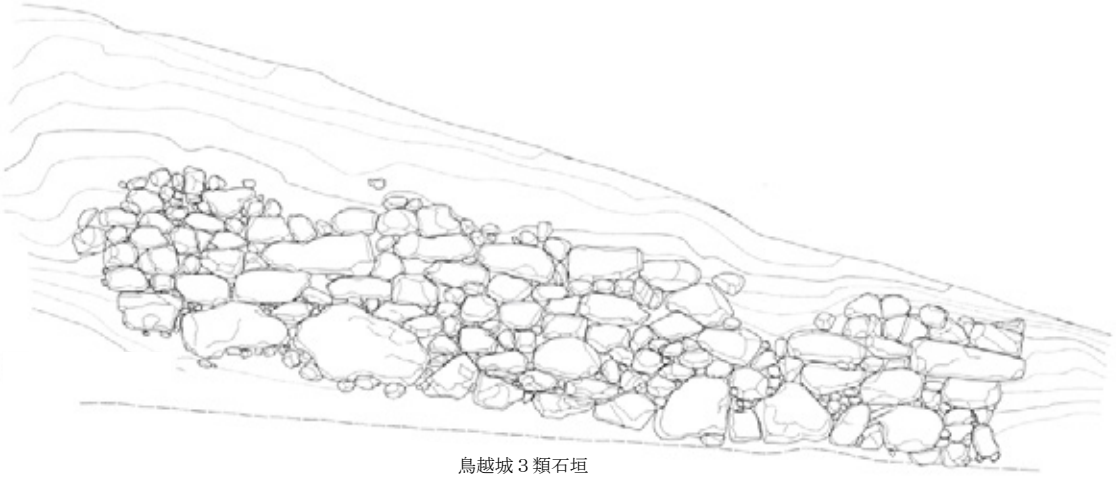
第207図　御宮　調査区内の建物変遷



鳥越城１類石垣



鳥越城２類石垣

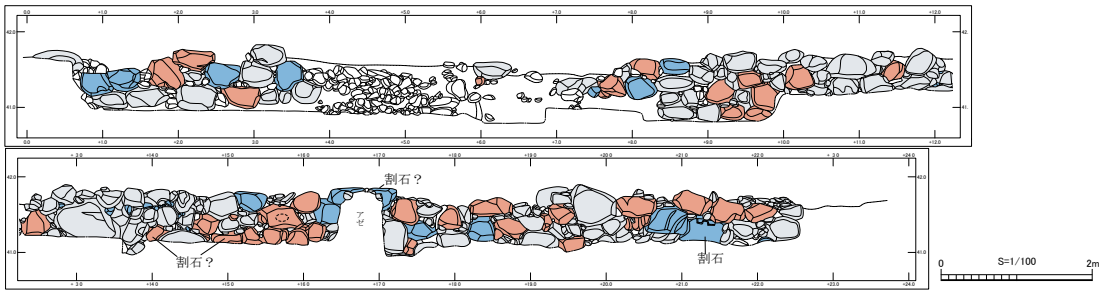


鳥越城３類石垣

『鳥越城跡発掘調査報告書』2016白山市教育委員会より転載

舟岡山城１類石垣

舟岡山城２類石垣



第208図　鳥越城・舟岡山城・御宮石垣(5113W)

SE2区 遺構確認状況（南から）

SE2区 遺構確認状況（南から）

SE2区 調査区南壁西端（北から）

SE2区 調査区西壁（東から）

SE3区 遺構確認状況（東から）

SE3区 遺構確認状況（南から）

SE3区 遺構確認状況（南から）

SE3区 遺構確認状況（南から）

写真図版21 御宮遺構写真1

SE4区 遺構確認状況（南から）

SE5区 遺構確認状況（南から）

SE5区 ピット半裁状況（西から）

SE5区 SE01（西から）

SE5区 SE01（北西から）

SE5区 SE01東壁石積（南西から）

SE5区 SE01南壁石積（北西から）

SE5区 深掘部西壁（東から）

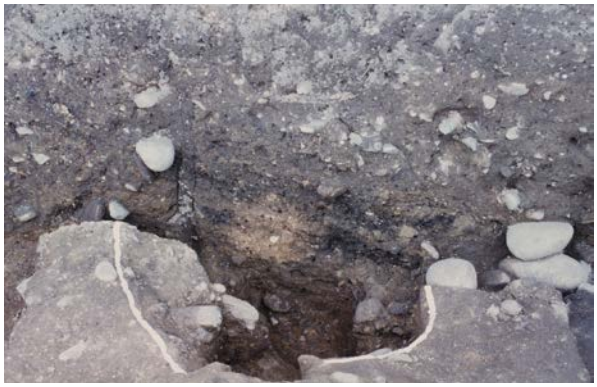
写真図版22 御宮遺構写真2

SW1区 南端 整地土検出状況（東から）

SW1区 遺構確認状況（北から）

SW2区 遺構確認状況（北から）

SW2区 南半 近現代石列（南から）



SW2区 SK02（南西から）

SW3区 東側 SK05（北から）

SW3区 東側 コンクリ基礎間 近現代落ち込み断面（南から）

SW4区 南北石垣 5113E（北東から）

写真図版23 御宮遺構写真3

SW4区 御宮西石垣　5113E（南東から）

SW4区 御宮西石垣　5113E
根石レベルが異なる部分（東から）

SW4区 アゼ4北壁（石垣埋土 5113E）（北から）

SW4区 アゼ4北壁（石垣内部 5113E）（北から）

SW4区 御宮西石垣 5100W　栗石検出状況（東から）

SW4区 御宮西石垣 5100W　背面盛土（南から）

SW4区 銃弾廃棄土坑検出状況（東から）

SW4区 銃弾廃棄土坑完掘状況（東から）

写真図版24 御宮遺構写真4

SW5区 遺構検出状況（北東から）

SW5区 調査区南壁（北東から）

SW5区 調査区南壁（北から）

SW5区 調査区南壁（北から）

SW5区 調査区南壁（北から）

SW5区 調査区南壁（北から）

SW5区 調査区南壁（北から）

SW5区 作業風景（東から）

写真図版25 御宮遺構写真5

SW6区 調査区西壁（南東から）

SW6区 調査区西壁（東から）

SW6区 調査区西壁（東から）

SW6区 調査区西壁（東から）

SW6区 砂利面検出状況（北から）

SW6区 石列検出状況（北から）

SW6区 調査区南端トレンチ西壁（東から）

SW6区 作業風景（北から）

写真図版26 御宮遺構写真6

NS1区 トレンチ掘下げ状況（北から）

NS1区 トレンチ北半西壁（東から）

写真図版27 御宮遺構写真7

NS1区 御宮北石垣　5120N（西から）

NS1区 御宮北石垣　5120N（東から）

NS1区 御宮北石垣　5120N前面埋土（西から）

NS1区 トレンチ北半掘下げ状況（南から）

写真図版28 御宮遺構写真8

NS2区 トレンチ掘下げ状況（北から）

NS2区 石段確認状況（北から）

NS2区 斜面テラス出土状況（北から）

NS2区 石段検出状況（西から）

写真図版29 御宮遺構写真9

NS2区 御宮北石垣　5120N（北から）

NS2区 御宮北石垣　5120Nと石段（南東から）

写真図版30　御宮遺構写真10

NS2区 西壁5120N前面埋土（東から）

NS2区 5120N前面埋土（西から）

NS2区 東壁（西から）

NS2区 西壁（東から）

NS2区 斜面作業風景（南から）

NS2区 斜面テラス部堆積状況（北から）

NS2区 旧堀埋戻し土堆積状況（東から）

NS2区 旧堀埋戻し土堆積状況（北から）

写真図版31 御宮遺構写真11

NS2区 斜面石瓦出土状況（北から）

NS2区 斜面石瓦出土状況（南から）

NS2区 斜面石瓦出土状況（西から）

写真図版32 御宮遺構写真12

NS2区　石鬼瓦

NS2区　石軒平瓦（上・中）石桟瓦（下）

NS2区　石軒丸瓦

NS2区　石掛瓦

写真図版33　御宮石瓦写真

第５章　藤右衛門丸

第１節　調査の概要

１．調査区の位置と調査の概要　（第209、210図）

藤右衛門丸は、金沢城内の北西端に位置する郭で、現地表面で標高約39ｍを測る。南側の一段高い御宮との比高差は約２ｍだが、城外となる北側の尾崎神社とは約５ｍの比高差となる。

郭の北縁部にトレンチを設定し、調査を行った。調査区は郭形状に沿っており弧状を呈し、その東端部から西へとむかって、調査区の折れを境として、N1 ～ N7区とした。郭の縁辺かつ金沢城の北端部にあたる場所であることから､遺構密度は希薄ながらも近世の整地土が良好な状態で遺存していた。また、17世紀初頭に年代を特定可能な遺構を確認した。

調査区東端では慶長期の陶磁器、土師器皿を多量に含む土坑や、郭北辺中央では、側面に木枠の痕跡のある溝を検出した。出土遺物から17世紀初頭と考えられる。また郭北辺西側では地表より約2.5ｍ下で、郭を造成する以前の火葬施設に関連すると思われる遺構や焼骨片が出土している。

２．基本層序

藤右衛門丸調査区では、調査区壁面、特にN4区において深掘りを行った地点を基準に、周辺との対応関係や堆積状況等をふまえて、大別Ⅳ層に区分した。

Ⅰ層は表土や砕石層を含む近代から現代の層で、更に金沢大学期と旧陸軍期を区分できる地点もあり、その場合は金沢大学期をⅠa層、旧陸軍期をⅠb層とした。近世段階の土層との差異が不明瞭な場合があるが、広範囲で、一気に埋め戻した場合はⅠ層に該当する可能性が高い。

Ⅱ層は近世段階の造成土及び遺構である。暗褐色、又は暗黄褐色土を主体とする。Ⅰ層と比べて層ごとの単位がやや小規模になる傾向がある。

Ⅲ層は同じく近世段階の造成土であるが、金沢城創建期にかかる造成土である。地山や旧表土由来の暗褐色土と黄褐色土が互層状に堆積する。Ⅱ層に比べて大型の礫の混入が少ない。

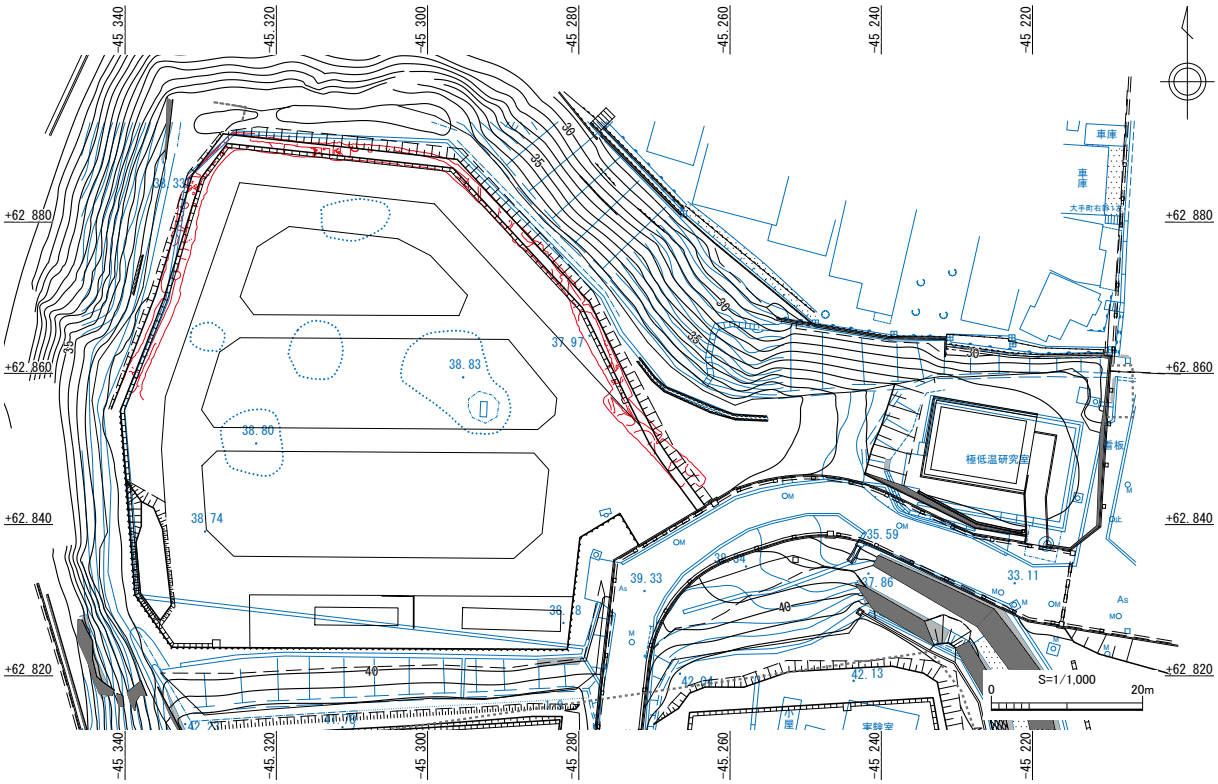
Ⅳ層は近世以前の造成土及び遺構で､N4区で確認した火葬に関連すると思われる遺構が該当するが、具体的な年代は不明である。

第２節　遺構

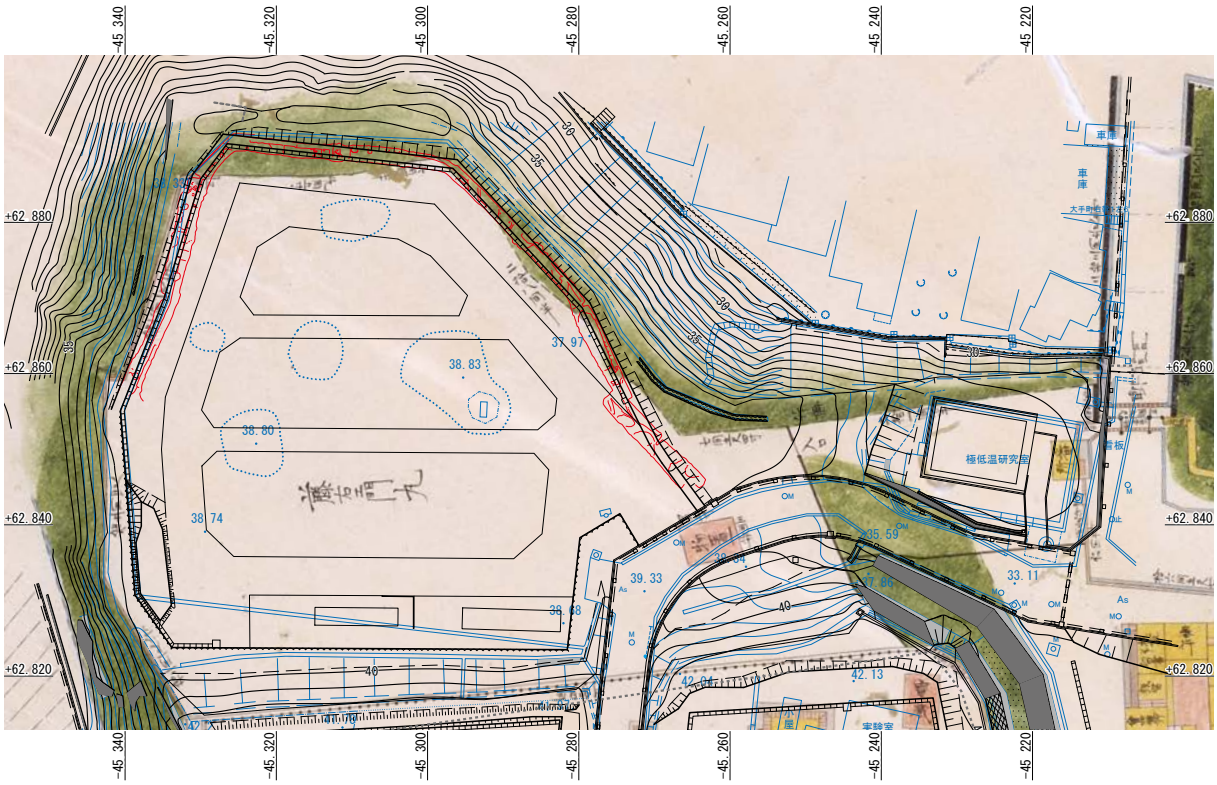
１．土坑

SK01（第216図） N1区南端で検出した土坑である。全体形状は調査区外に延びているため把握できないが、直径約２ｍを越える楕円形もしくは隅丸長方形のプランと推測され、深さは約76㎝を測る。近代以降の整地により上部を削平されており、掘り込み面は不明だが、近世の可能性のある整地土（11層）を切って、地山を垂直に掘り込んでいる。覆土は下位に茶褐色土、上位に黄褐色土がほぼ水平に堆積する。土坑の半分以上を茶褐色土で一気に埋めたのち、黄褐色土を薄く敷き均して整地を行っている。また、壁面を板によって押さえていた痕跡が北側壁では明瞭に確認できる。７層までは板がある状態で埋められており、その上の５、６層はそれを覆うように被覆されている。底面は垂直に掘り込まれたのち、遺構の中心よりもやや北側に向かって緩やかに深くなる。17世紀前葉から中葉にかけての遺物が出土した。また、須恵器甕体部の細片も確認した。

11層は、近代の整地層であるⅠ層と明瞭に土質が異なり、地山由来のSK01周辺でのみ認められる土層で、SP西から約1.0ｍ西方まで続いているが、それより西方ではⅠ層の直下は地山となる。調査区南壁もⅠ層の直下は地山となっている。11層が近世整地層の場合、その直下の地山面も近世段階の整



黒:現況図　青:整備前(調査時)　赤:調査区



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
絵図：「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年（1830）

第209図　藤右衛門丸　調査区位置図・絵図照合図

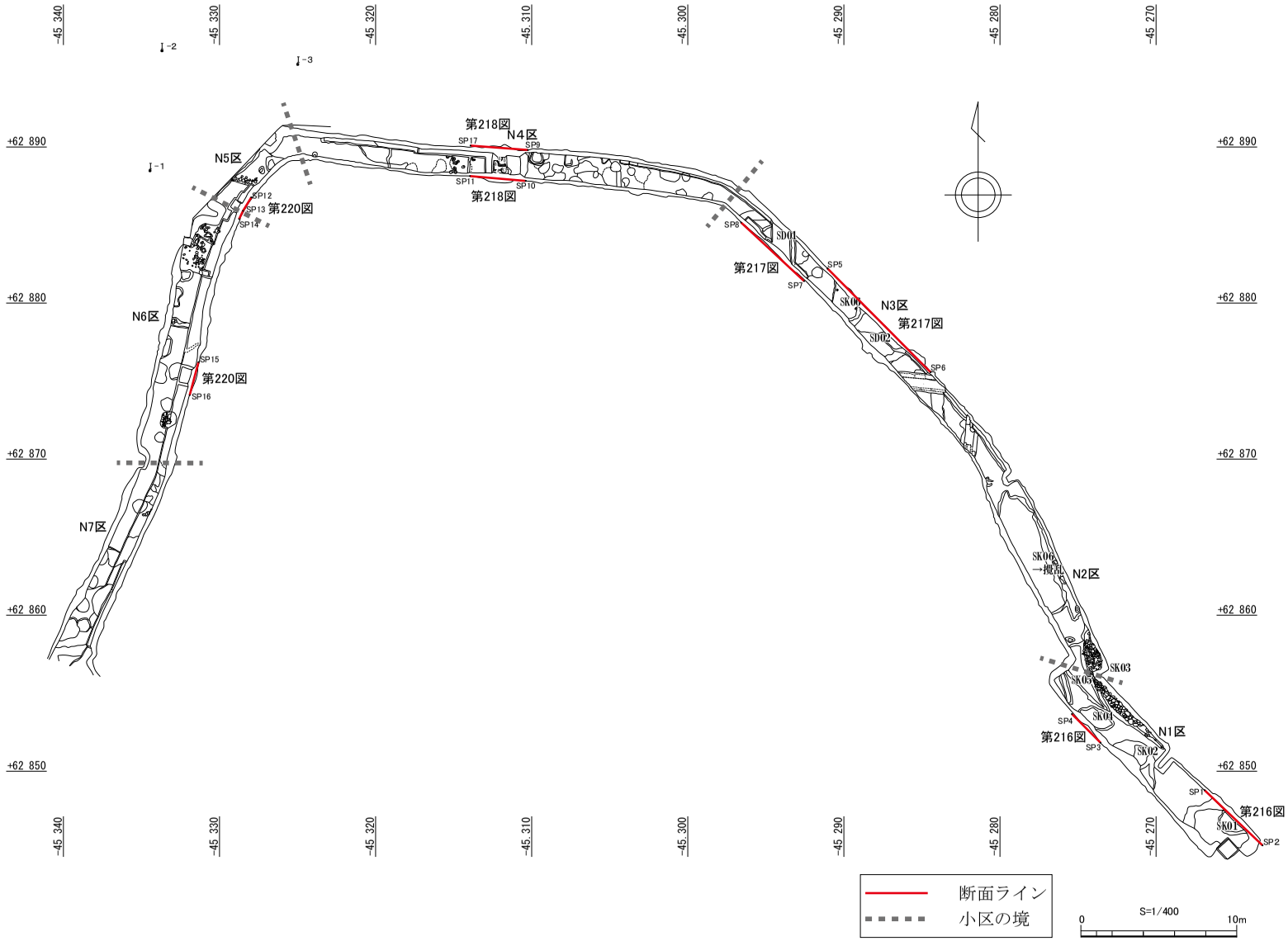
地面となるが確証は得ていない。
SK02（第211図） N1区中央部付近で検出した土坑。遺構は調査区外に延びており、ほぼ半円形で直径約４ｍを測る。壁面はオーバーハングし、袋状を呈する。覆土下層より板ガラス片や、アラビア数字で「２」と書かれた旧陸軍で使用された磁器碗が出土した。
SK03（第211図） N1区からN2区にかけての調査区東壁沿いで検出した。北端と南端で遺構の上端が収束することから大型の土坑であろう。最大長は8.7ｍを測る。壁面を川原石積と粘土で補強する。覆土には大量の円礫とともに、コンクリートブロックを含む。同じくN1区とN2区にまたがって検出したSK05を切る。
SK04（第216図） N1区で検出した。東西方向に長軸をもち、長軸約2.5m、短軸約1.3ｍの不整な長楕円形を呈する。壁面は緩やかに落ち込み、検出面からの深さは約23㎝を測る。近世と考えられるが年代は特定できない。
SK05（第211図） SK03に先行する土坑であるが全体形状等は不明で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれる。出土遺物に釉薬瓦片が含まれることから江戸後期以降と考えられる。
SK06（第212図） N3区中央部で検出した。長軸を南北にもち、その両端は調査区外に延びる。溝の可能性もあるが、東壁が弧状に回ることから土坑とした。Ｉb層を切り込んでいる。
撹乱（第212図） N2区で検出した。近代以降の土坑。南北方向に長軸をもち、長軸約8.3m、短軸約2.2ｍを測る。内部は炭化物が多く、昭和期（旧陸軍建物廃棄時か）のごみ焼却に伴う廃棄土坑と考えられる。

２．溝

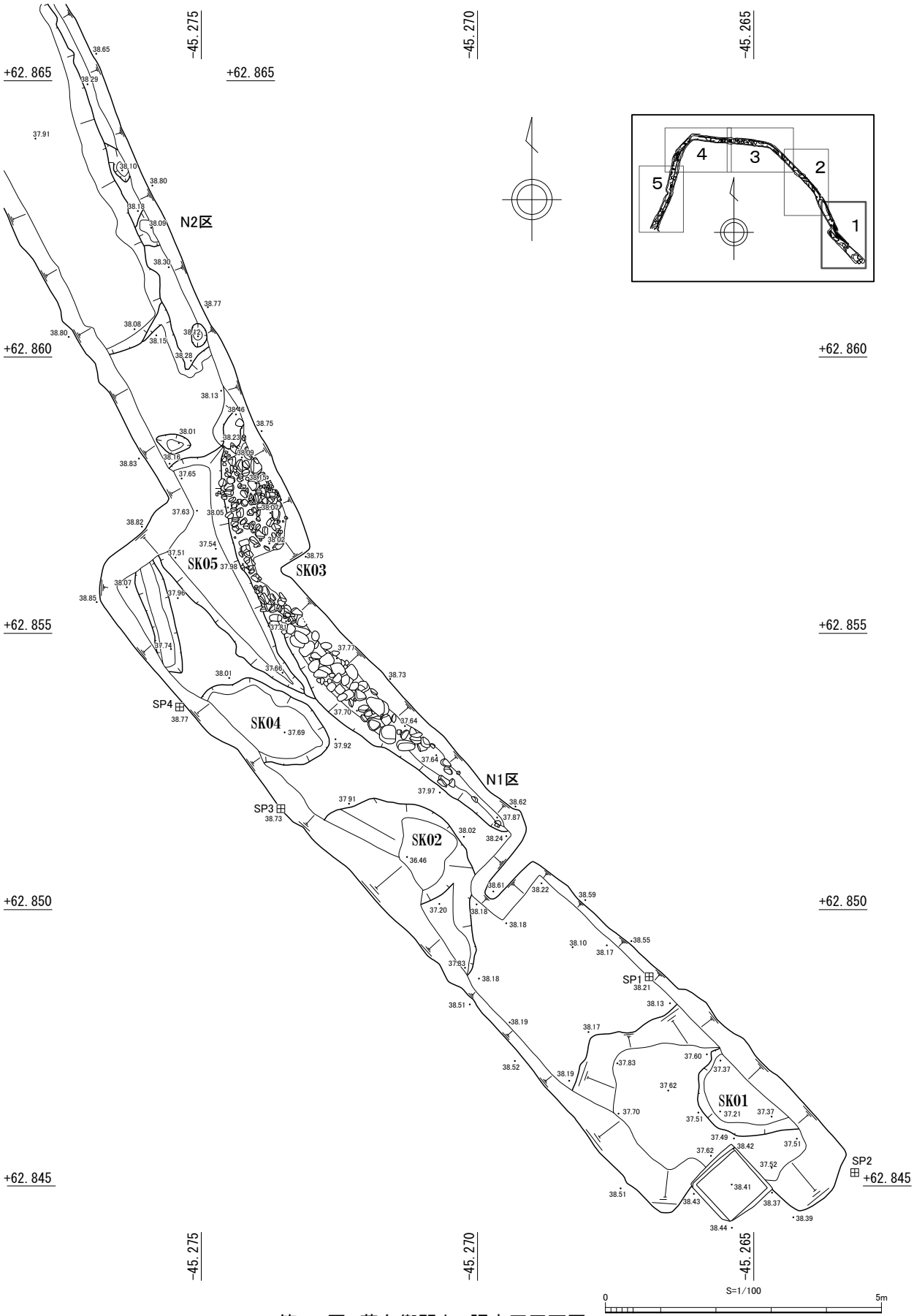
SD01（第213図） N3区北西端部で検出した、南北方向に軸をもつ溝状遺構。近世とみられる整地層・Ⅱ層に覆われている。検出面より深さ約80㎝、幅約1.3ｍを測り、断面形状は壁が垂直に近い箱型を呈する。覆土は最下層に円礫を多量に含む層が薄く堆積するが、土師器皿などの遺物や炭化物や礫を含む土でほぼ一気に埋め戻された状況である。出土遺物は越中瀬戸のすり鉢片や土師器皿が出土しており、17世紀初頭には埋め戻されたと考えられる。
西側の壁面には、板状の痕跡がみられるが、東側の壁面には確認できない。東側は標高37.8m付近から地山を掘り込んでいるが、西壁側は整地土層を掘り込んでいることから、壁面の崩落防止のために側板を使用したと考えられる。断面図では、東側の立ち上がりがやや西側壁に比べ緩くなっているが、これは溝が壁面に対して直行していないためで、平面的には両側壁ともほぼ垂直に立ち上がる。西側壁が掘り込んでいる整地層は、30層以下では暗褐～黒褐色系の土層だが、それより上部は黄褐色系砂礫土層と30層を境に明瞭に土質が異なる。30層のレベルがSD01を挟んだ地山のレベルとほぼ同じことも30層は撹乱を受けている可能性もあるが、城郭として整地される以前の地表層・Ⅳ層の可能性も含めておきたい。
SD02（第212図） N3区中央部で検出した東西方向に軸をもつ溝状遺構としたが、である。遺構の東端と西端は調査区外に延びており、幅約３ｍ、深さは約64㎝を測る。旧陸軍建物に伴うＩb層に覆われており、建物建築時には埋め戻された状態となっていたと考えられるが、時期を特定又は推定できる遺物や情報は確認できなかった。

３．サブトレンチ１ （第218、219図）

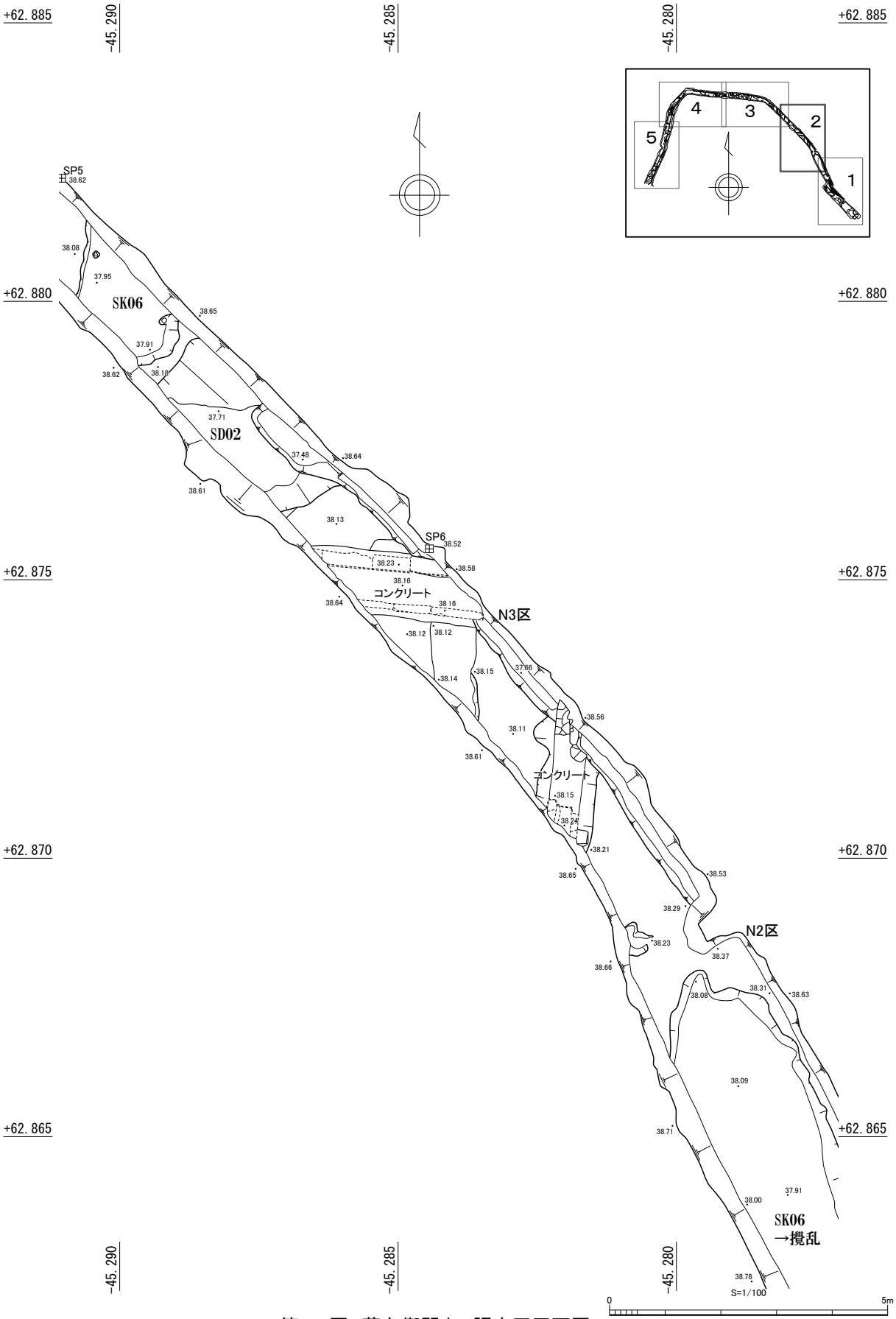
N4区は、郭縁辺部であるため、撹乱が比較的少なく、Ⅱ層にあたる近世段階の整地土が良好な状態で遺存していた。整地土や地山の状況等を確認するため、遺構が希薄な箇所において１ｍ四方のトレンチを入れたところ、金沢城以前の遺構を確認した。
近世段階とみられる整地土は約1.5ｍの厚さがあり、大別で２層（Ⅱ・Ⅲ層）を確認した。Ⅱ層は



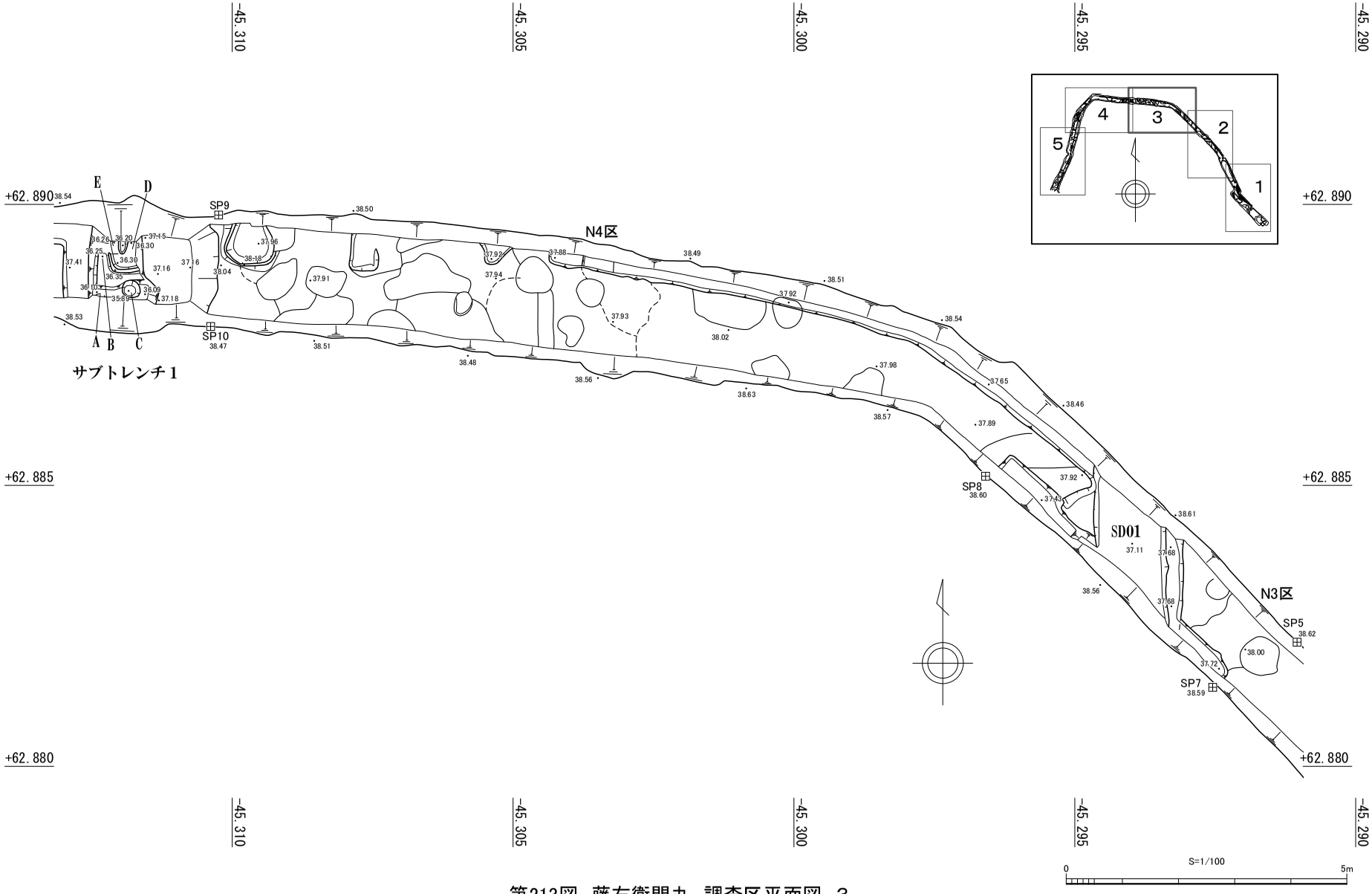
第210図　藤右衛門丸　調査区全体図



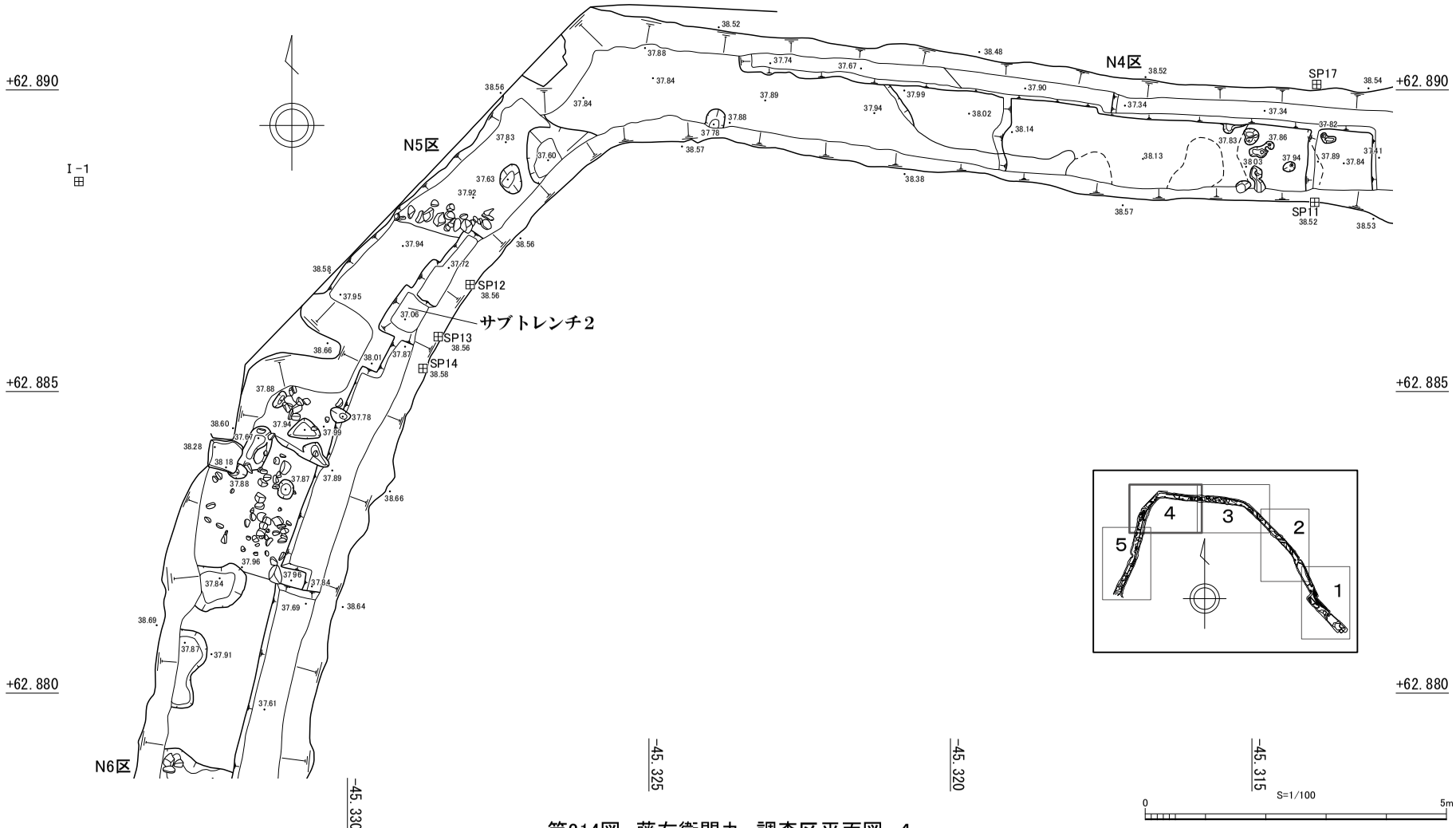
第211図　藤右衛門丸　調査区平面図　1



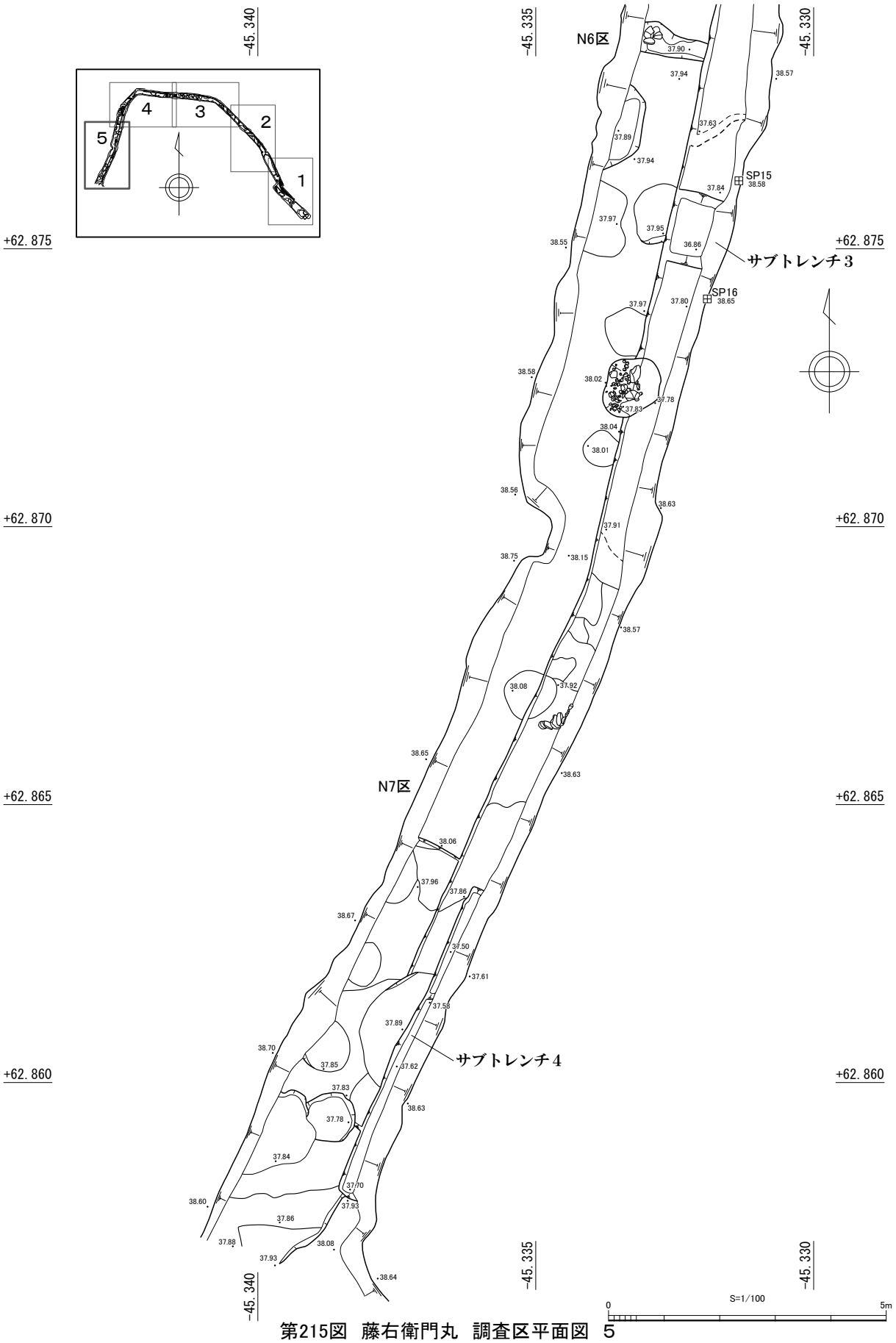
第212図　藤右衛門丸　調査区平面図　2



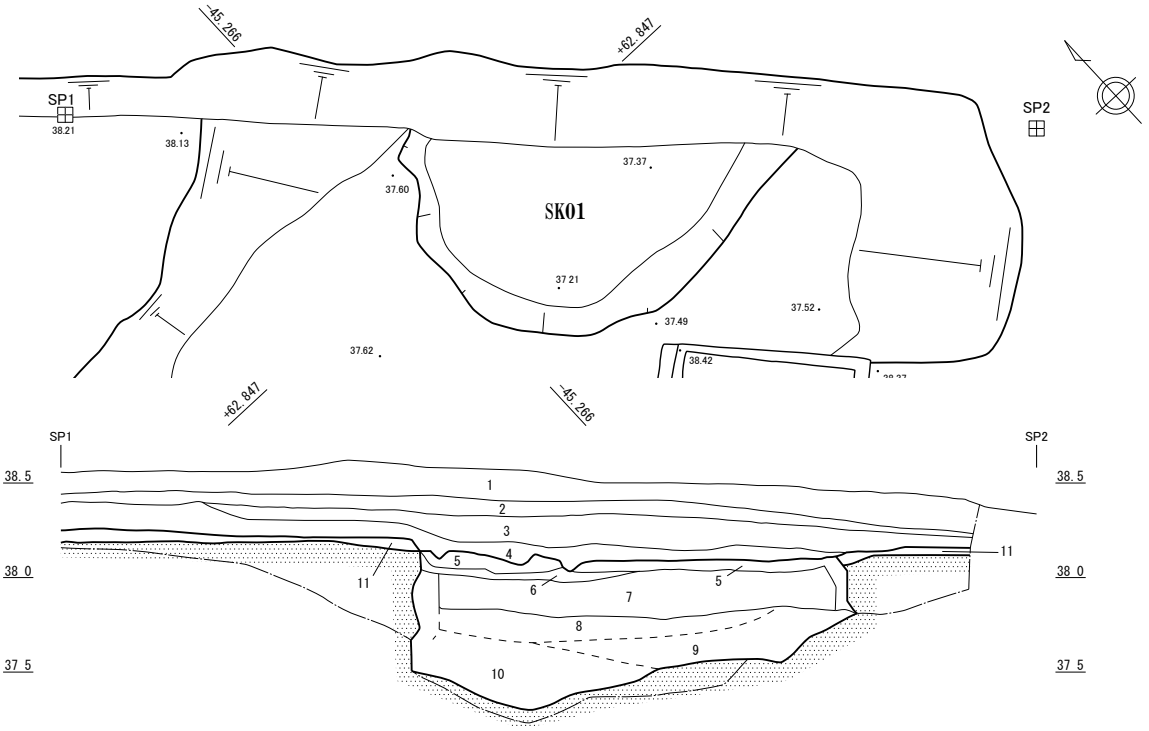
第213図　藤右衛門丸　調査区平面図　3



第214図　藤右衛門丸　調査区平面図　4

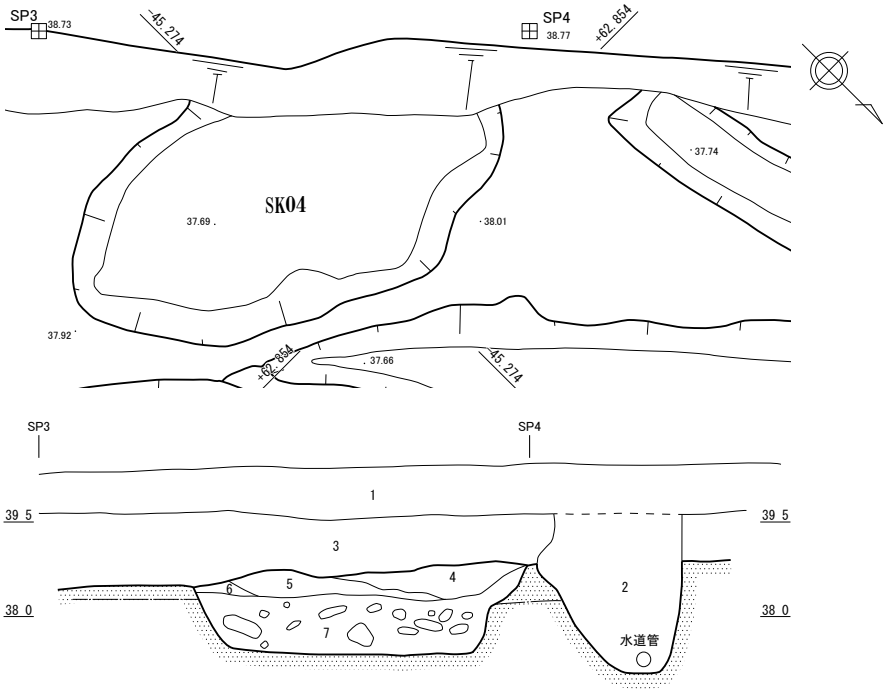


第215図　藤右衛門丸　調査区平面図　5



1　砕石層（地表面の所々にコンクリート残る）
2　暗灰色土（礫含む）
3　暗褐色土（２～５㎝の礫含む、焼土や炭の粒多く含む）
4　暗褐色土（3 層より黒く汚れたような色調）
※１～４　近現代
5　黄灰色粘質土（２～５㎝程の礫を含む）
6　淡灰褐色粘質土（２～７㎝程の礫を含む）
7　淡黄灰色砂質土（２～６㎝程の礫を含む）
8　暗褐色礫混土（１～６㎝程の礫を多く含む、炭粒含む）
9　暗褐色礫混土（8 層・10 層より暗い）
10　暗褐色礫混土（8 層より暗灰色が強い）
※5～10　SK01 覆土
11　淡黄橙色粘砂質土（２㎝以下の礫少量含む、鉄分粒わずかに含む）
（地山　濁黄白色粘砂質土１～４㎝の礫・５～20 数㎝の河原石多量に含む）

SK01平面・断面図

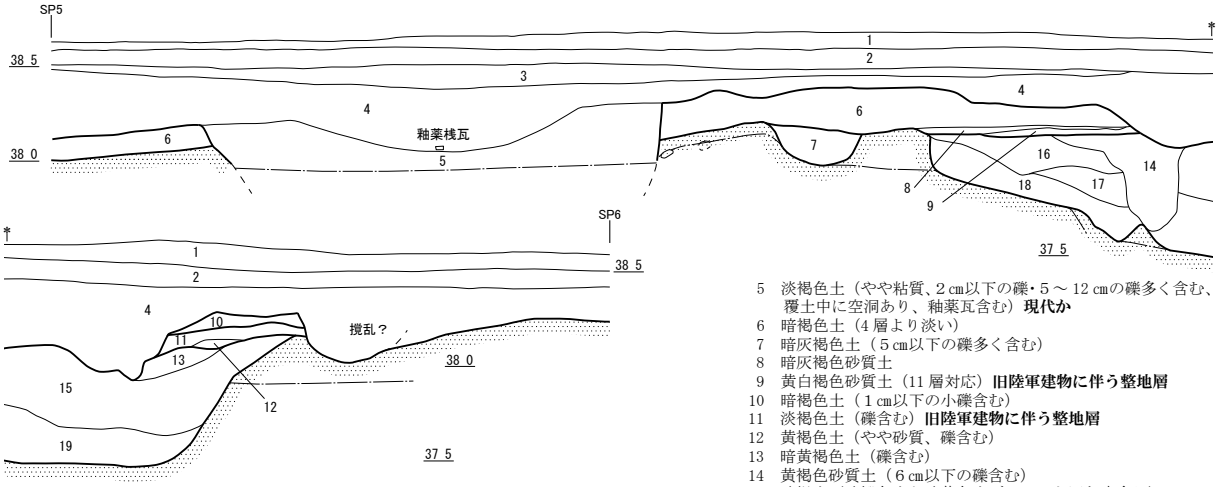


1　砕石層（地表面の所々にコンクリート残る）
2　水道管埋土
3　暗褐色土（２～５㎝の礫含む、焼土や炭の粒多く含む）
※1・3　近現代
4　暗黄色粘砂質土（５㎝以下の礫少量含む）SK04 覆土
5　暗褐色土（５㎝以下の礫少量含む）
6　暗黄灰色砂質土（５㎝以下の礫含む）
7　暗灰褐色土（２・３㎝、５～20 ㎝程の礫多く含む）
（地山　濁黄白色粘砂質土１～４㎝の礫・５～20 数㎝の河原石多量に含む）

SK04平面・断面図

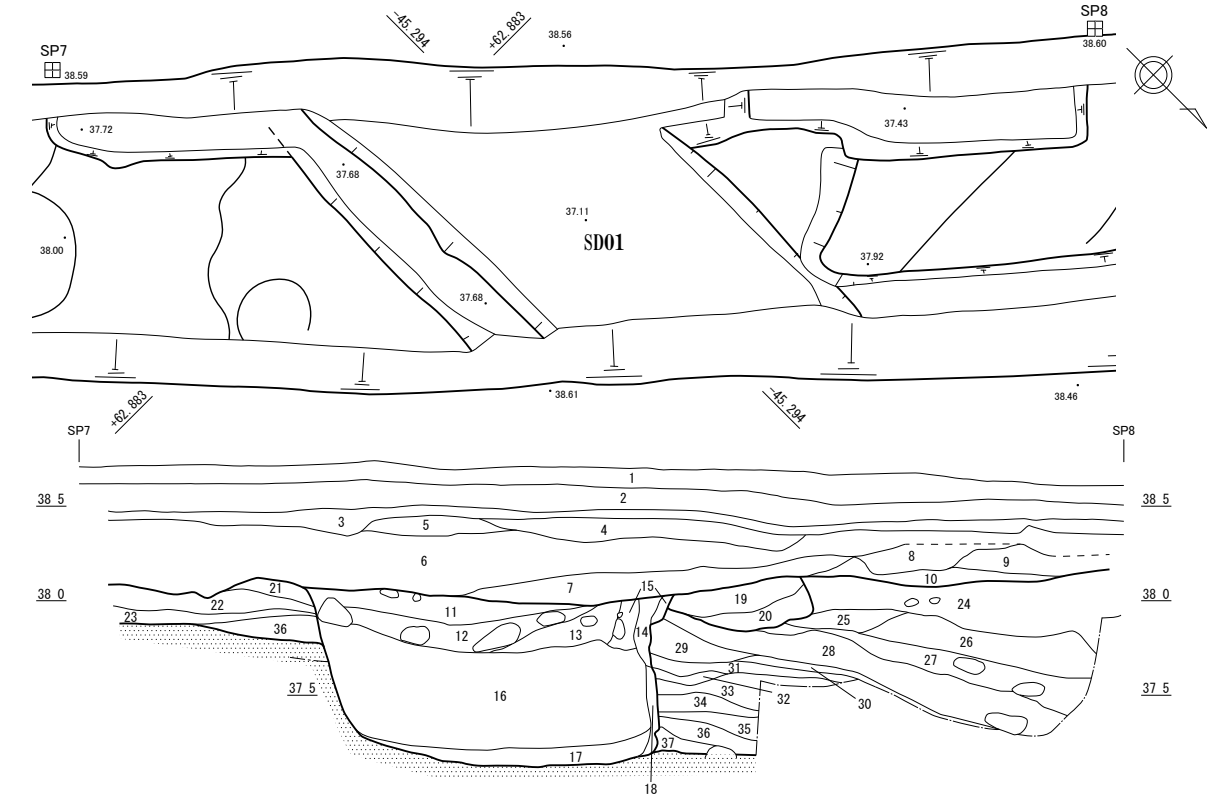
S=1/40
0　1m

第216図　N1・3区　平面図・断面図



N3区 中央 北壁断面図

1 濁黄色細砂
2 砕石層（プラスチックやナイロン混入）
3 灰褐色礫混土
4 暗褐色土（やや粘質、濁黄白色粘質土ブロック・礫・炭・10 cm以下の礫含む）
5 淡褐色土（やや粘質、2 cm以下の礫・5 ～ 12 cmの礫多く含む、覆土中に空洞あり、釉薬瓦含む）**現代か**
6 暗褐色土（4 層より淡い）
7 暗灰褐色土（5 cm以下の礫多く含む）
8 暗灰褐色砂質土
9 黄白褐色砂質土（11 層対応）**旧陸軍建物に伴う整地層**
10 暗褐色土（1 cm以下の小礫含む）
11 淡褐色土（礫含む）**旧陸軍建物に伴う整地層**
12 黄褐色土（やや砂質、礫含む）
13 暗黄褐色土（礫含む）
14 黄褐色砂質土（6 cm以下の礫含む）
15 暗褐土（暗橙色土と暗黄色土ブロックも同程度含む）
16 橙黄褐色土
17 濁褐色砂質土
18 濁灰黄褐色砂質土（3 ～ 10 cm程の礫多く含む）
19 濁黄褐色砂質土（10 cm以下の礫多く含む）

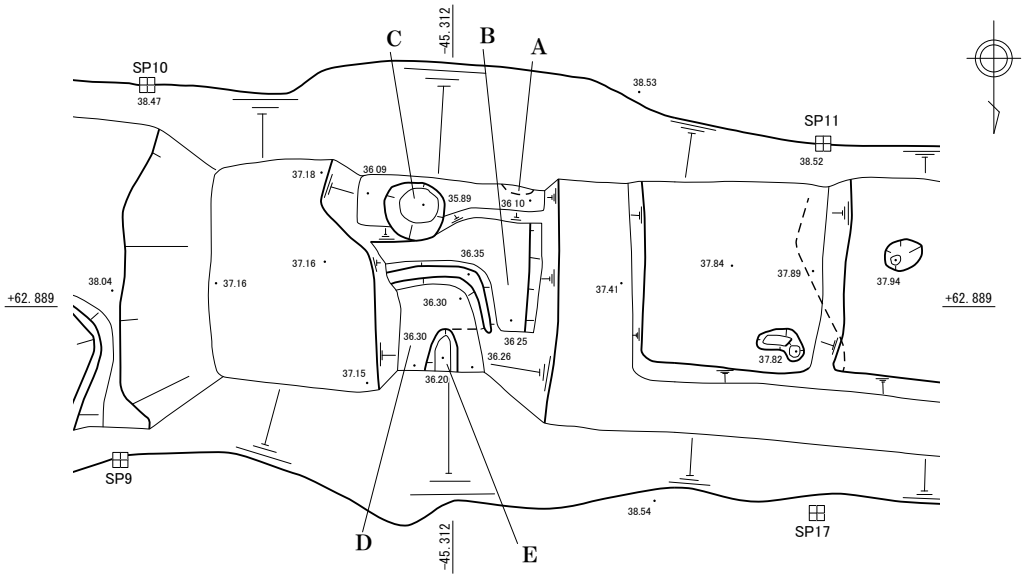


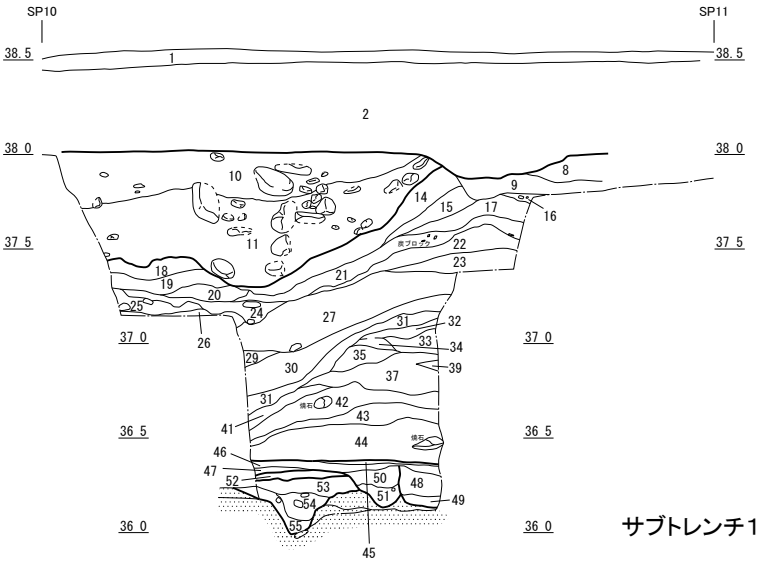
1 濁黄色細砂
2 砕石層
3 暗灰色粘質土（しまりあり、炭含む）
4 灰褐色粘質土
5 濁灰色粘質土（0.5 ～ 4 cm程の礫含む）
6 暗濁褐色粘質土（1 ～ 3 cm・5 ～ 10 cm程の礫・石含む）
7 暗濁黄褐色砂質土（濁黄色粘土小ブロック・5 ～ 10 cmの含む）
8 暗褐色砂質土
9 濁黄灰色粘質土＋濁灰色粘質土＋黒褐色粘質土ブロック（礫含む）
10 濁灰褐色砂質土（2 cm以下の礫含む）
11 暗褐色土（黄褐土粒・炭・焼土粒多）
12 16 層に黄緑色粘質土ブロック多く含む
13 濁灰褐色土
14 暗黄褐土（炭粒混、しまり弱）板痕跡
15 濁黄灰色シルト質土
16 暗濁灰褐色土（5 cm以下･10 cm程の礫含む、炭含む、カワラケ等遺物含む）
17 暗濁褐色礫混土（1 ～ 3 cmの円礫が多量につまっている）
18 暗灰褐色土（炭粒含む、しまり弱い、木板痕跡か？）
19 暗灰褐色土（やや砂質、濁黄色土粒、5 cm以下の礫少量含む）
20 暗褐色土（炭小粒混、黄土粒なし）
21 暗黄褐礫混土（3 cm以下の礫・炭小粒）整地土
22 暗褐色砂質土（黄褐色粘質土ブロック含む、暗褐土と橙褐粘土粒の混合層）整地土
23 暗灰褐色砂質土（SD01 西側の 23 層直下の土層と類似）
24 濁黄灰色砂質土（砂質強い、黒褐色粘質土ブロック含む）
25 24 層＋26 層ブロックの混合層
26 淡黒褐色粘質土＋灰褐色砂質土＋黄褐色粘質土ブロック（5 cm以下の礫多く含む）
27 黄褐色砂質土（1 cm以下の小礫・5 ～ 20 cmの礫含む）
28 暗黄褐色砂質土（1 cm以下の小礫・5 ～ 20 cmの礫含む、黒褐色橙褐粘土・暗褐色土が部分的に混在）
29 暗濁灰色砂質土（黄色粘質土ブロック・淡灰色粘質土ブロック・1 cm以下の礫・5 cm程の礫少量含む）
30 暗灰褐土（軟質、炭小粒混）
31 暗濁灰色土（炭粒少混）
32 暗黄灰色土（黄褐土粒混）
33 暗灰褐色土（黄色粘質土粒含む）
34 33 層より暗い（黄褐粘質土粒多い、黄色粘質土粒含む）
35 黒褐色土（黄褐色粘質土小ブロック含む）
36 暗灰褐色土（炭粒混、黄土粒含まない、均質な軟弱層）
37 濁黄色粘質土（暗褐色土ブロック混、地山が撹乱された状態）

SD01周辺平面図、南壁断面図

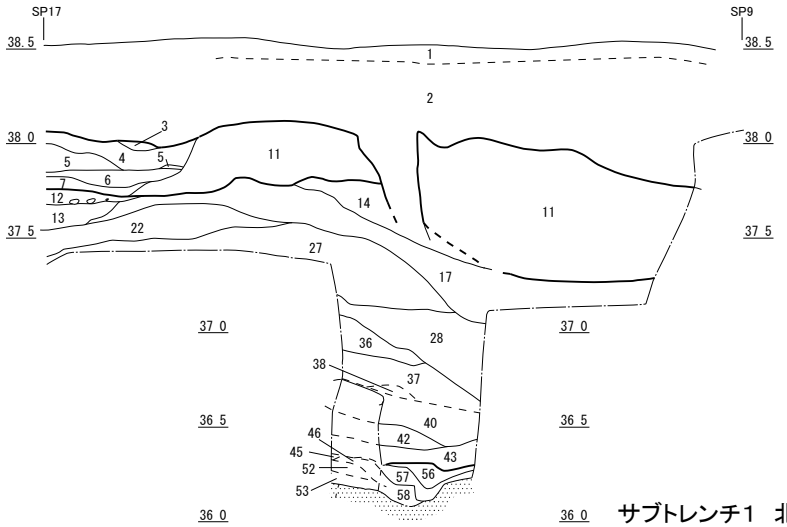
S=1/40
0 1m

第217図 N3区 平面図･断面図





サブトレンチ1　南壁断面図



サブトレンチ1　北壁断面図

S=1/40
0
1m

第218図　N4区　サブトレンチ1平面図・断面図

N4区　サブトレンチ1北壁・南壁共通土層注記

1　砕石層　**現代地表面**
2　暗褐色礫混土（煉瓦・ガラス混、コンクリートブロック）　**近現代撹乱**
3　明黄橙褐色粘質土（均質）
4　黄橙褐色粘砂質土（小礫混）
5　明黄橙褐色粘質土（均質）
6　黄橙褐色粘砂質土（礫混）
7　黄橙褐色粘砂（礫やや少ない）
8　暗褐色土（暗褐色土ブロック・風化礫混）**近世か**
9　暗褐色土（黄褐色土粒混）**近世か**
10　暗褐色砂礫層（段丘風化砂礫混入多量、11層より多、しまり弱、暗褐色粘質土ブロック混）　**近世整地層**
11　暗黄褐色砂礫層（大小の段丘礫を混在、しまり弱い、黄褐色粘質土ブロック・黒褐色土粒も混在）
12　明黄橙褐色粘砂（４㎝大の礫含む）
13　明黄橙褐色粘砂（礫やや少ない）
14　淡黄白褐色粘質土（黄白色粘土ブロック含む、炭・骨片なし）
15　暗黄橙褐色粘質土（部分的に風化小礫・炭小粒・骨片含む）
16　黄橙褐色粘質土（風化砂礫多く含む）
17　黄橙褐色粘土（炭小粒少量含む、骨片わずかに含む）
18　暗褐色粘質土（暗褐色粘質土と黄褐色粘土粒混合､径５㎝以下の礫･炭小粒含む）
19　暗黄褐色粘質土（暗褐色粘質土小粒多く含む、炭小粒少量含む）
20　暗褐色粘質土（暗褐色粘質土と黄褐色粘土粒混合､径５㎝以下の礫･炭小粒含む）
21　暗黄褐色粘質土（しまり弱、風化礫径３㎝以下少量含む、炭ブロック･骨片含む、部分的に径 10 ～ 20 ㎝の礫含む）
22　黄橙褐色粘砂（礫やや少ない、骨片未確認）
23　黄橙褐色粘質土（径５㎝以下の風化礫・粗砂少量含む、黄褐色粘土ブロック・炭ブロック・炭粒・骨片含む）
24　黄褐色砂質土（３㎝以下の風化礫・粗砂多く含む）
25　暗黄褐色粘質土（暗褐色粘質土小粒多く含む、炭小粒少量含む）
26　暗褐色粘質土（暗褐色粘質土と黄褐色粘土粒混合､径５㎝以下の礫･炭小粒含む）
27　暗黄橙褐色粘質土（炭片含）
28　暗黄橙褐色粘質土（炭片含、暗褐色土小ブロックやや含む）
29　暗褐色粘質土（暗褐色粘質土と黄褐色粘土粒混合､径５㎝以下の礫･炭小粒含む）
30　暗黄橙褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック少量含む、炭粒やや多い、骨片含む）
31　暗褐色土（黄橙褐色粘土粒・炭中小粒・骨片含む）
32　暗黄橙褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック少量含む、炭粒やや多い、骨片含む）
33　暗褐色土（黄橙褐色粘土粒・炭中小粒・骨片含む）
34　暗黄橙褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック少量含む､炭粒やや多い､骨片含む）
35　暗褐色土（黄褐色粘質土粒少量含む、炭小粒多、骨片・焼土粒少）
36　黄褐色土（黒色土ブロック多）
37　暗褐色土（黄褐色粘質土ブロック・炭中小粒多く含む、骨片・径３～５㎝の風化礫まばら、しまり弱）北壁では黄褐色ブロックはさみ不明瞭だが上下に細分可能
38　黄褐色ブロック
39　暗褐色土（黄褐色粘土粒少量含む、炭中小粒多く含む、骨片含む、しまり強）
40　暗褐色土（黄褐色粘質土ブロック混多、炭中小粒多、骨片・径３～５㎝の風化礫まばら、しまり弱）北壁では黄褐色ブロックはさみ不明瞭だが上下に細分可能
41　暗黄橙褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック少量含む､炭粒やや多い､骨片含む）
42　暗褐色土（黄褐色粘質土粒少量含む､炭小粒多く含む､骨片･焼土粒少量含む）
43　暗褐色土（黄橙褐色粘土粒・炭中小粒・骨片含む）
44　暗褐色土（黄褐色粘質土粒少量含む､炭小粒多く含む､骨片･焼土粒少量含む）
45　灰褐色粘土（灰層、炭粒多く含む、ほとんど純に近い灰層（土坑覆土上から一連で広がる）
46　黄橙褐色粘土（暗褐色土ブロック混、しまり強）**整地層**
47　暗灰褐色土（炭少量含む、灰多い感触あり、灰と土の混合層）
48　暗褐色土（黄褐色粘土小粒多く含む、炭灰粒･骨小片含む、焼土粒少量含む）
49　暗褐色土（黒褐色土ブロック、炭少量含む、黄褐色粘土ブロック含む、骨なし）**遺構Ｂ覆土**
50　黒褐色土（黄褐色粘土ブロック少量含む、軟）**遺構Ａ覆土**
51　くすんだ黄褐色砂質土（軟質）**遺構Ａ覆土**
52　暗黄橙褐色粘土（しまり強、46層より黄褐色粘土少ない）**整地土**
53　暗褐色土（黄褐色粘土小粒多く含む、炭灰粒･骨小片含む、焼土粒少量含む）
54　暗黄褐色土（黒褐色土ブロック含む、炭・骨なし）**遺構Ｃ**
55　くすんだ黄褐色砂質土（粘土粒含む、炭・骨なし）**遺構Ｃ**
56　暗黄灰色砂質土（しまりなし）**遺構Ｄ**
57　暗褐灰色土（灰層、微小炭片含む）**遺構Ｄ**
58　暗褐色土　**遺構Ｅ**

第219図　N4区　土層注記

しまりが弱く、段丘礫層を多く含む。Ⅲ層は褐色系と黄橙色系の粘質土が互層状に堆積する。北壁及び南壁をみても、西から東側へ向かって、やや斜めに堆積している。Ⅲ層中からは、焼けた骨片や炭化物が多く出土しており、特に下位の層になるほど多くなる傾向にある。これらの骨片の一部を分析鑑定したところ、人骨であることが判明している（詳細は本章第４節）。

Ⅲ層の下からは、小規模な土坑やピットと整地層といった遺構群を確認しており、Ⅳ層とした。下層の土坑群を覆うようにほぼ純粋な灰層がひろがり、その直下にはしまりの強い整地層がみられる。下層遺構は整地土層と遺構の切り合い関係から３段階の変遷を確認できる。整地層についてⅣ-1とⅣ-2層とした。遺構はいずれも地山面を掘り込んでおりＡからＥまで確認した。

遺構Ａ　調査区外に広がっており、全体形状は不明だが、半月状に検出されたことから、ピット状もしくは浅い溝状遺構の端部の可能性がある。Ⅳ-2層を掘り込んで作られている。

遺構Ｂ　深掘りの西辺で検出され、側辺が直線的に伸びるので、土坑又は溝状遺構の一部とみられる。標高36.2ｍで上面はⅣ-2層となる。

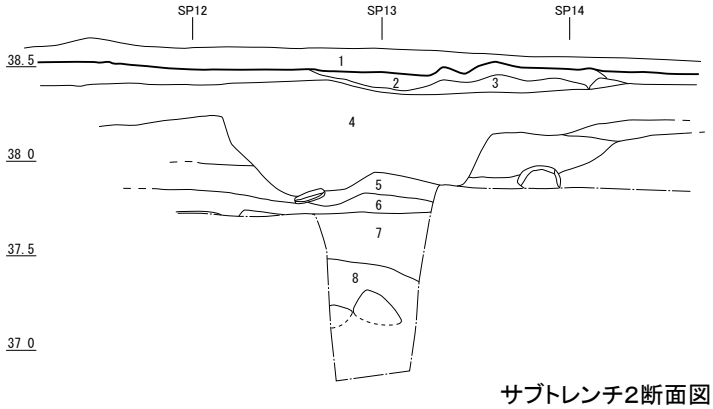
遺構Ｃ　直径約30㎝のピットである。掘方は西側がほぼ垂直、もしくはやや内湾気味に立ち上がるのに対して、東側は斜めに立ち上がる。遺構の標高36.2ｍで上面にⅣ-2層が広がっている。

遺構Ｄ　深掘りの北半で、東西45㎝、南北48㎝を測り、隅丸形状を呈する土坑とみられる。調査区外に遺構は延びているため全体形状等は不明である。土坑底面は北壁に向かって伸びる幅16㎝の溝状の遺構を検出している。覆土を掘り下げ、底面付近では、直径10㎝程度で縁に鉄分が薄く巡ったピット状に土質が異なる部分がみられた。黄白色の地山が見えるようになっても、不明瞭なシミ状になって残っており、明確な掘方をもたない杭等の痕跡の可能性も考えられる。

遺構Ｅ　遺構Ｄの溝状の部分を掘り下げた際に、検出された。北壁をみるとＤの覆土が東側にむかって広がる傾向があるのに対し、Ｅは西側にむかって広がるようにみえ、立ち上がりはすり鉢状となる。平面形状等は未確認である。

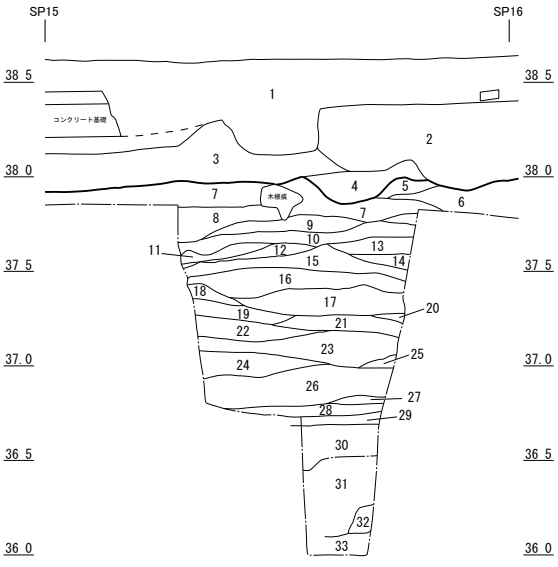
遺構Ｅは遺構Ｄによって切られているので、Ｄに先行し、遺構Ｄは整地層Ⅳ-1層を切り込んで作られている。遺構ＣとＢはいずれもⅣ-2層に覆われているが、遺構ＡはⅣ-2層及び遺構Ｂを切り込んで作られている。北壁では遺構Ｄ→Ｅ、南壁では遺構Ａ→Ｂ・Ｃの順に新しくなる。遺構Ｄについては、整地土Ⅳ-1層を切ることから、サブトレンチ１内では最も新しい段階の遺構である。

下層検出の整地土層からは炭や骨片がわずかながら出土しているが、遺構覆土中からは、炭は含まれるが、骨片はみられない。遺構に伴う遺物はほとんどなく、時期不明の土師器皿が出土する程度である。



1　濁灰褐色礫混土　**表土**
2　淡黒褐色粘質土（２㎝以下の礫・炭粒含む）
3　暗黄褐色砂質土（２㎝以下の礫・炭粒含む）
4　褐色土（２～７㎝程の石含む、焼土ブロック･炭粒含む）
5　黄灰褐色粘砂質土（２～７㎝程の礫含む）
6　暗褐色土（２～７㎝程の礫含む）
7　暗褐色土（炭粒含む、礫少ない）
8　淡黄褐色礫層（５～15㎝の礫から成る層、中間に20㎝以上の大きな礫、やや砂質土含む）

サブトレンチ2断面図



1　暗褐色土
2　暗褐色土（焼土ブロック含む）
3　暗褐色土（しまり弱、径５㎝前後の礫）
※1～3　近現代
4　暗褐色土（小礫・粗砂含む）
5　暗黄灰褐色粘質土
6　暗褐色土（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
7　暗黄灰褐色粘質土（小礫・黒褐色土含む）
8　暗褐色土（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
9　暗黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
10　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
11　暗黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
12　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
13　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
14　暗黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
15　暗黄灰褐色粘質土（粘土ブロック多、黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
16　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
17　暗褐色土　（黄褐色粘質土ブロック混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
18　黄橙褐色粘質土（暗褐色土ブロック含む）
19　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
20　黄橙褐色粘質土（暗褐色土ブロック含む）
21　暗黄褐色砂礫（径15㎝以下の風化礫含む、部分的に橙褐色粘土ブロック（地山）混在）
22　黒褐色土（暗褐色土ブロック、黄褐色土粒含む）
23　暗黄褐色砂礫（径15㎝以下の風化礫含む、部分的に橙褐色粘土ブロック（地山）混在）
24　暗黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
25　黄橙褐色粘質土（暗褐色土ブロック含む）
26　暗褐色土　（黄褐色粘質土粒混在、部分的に黒褐色土ブロック・炭小粒・風化小礫含む）
27　黄橙褐色粘質土（暗褐色土ブロック含む）
28　黒褐色土（暗褐色土ブロック、黄褐色土粒含む）
29　黄橙褐色粘質土（比較的均質な地山質土で構成）
30　黒褐色土（均質、混じり少ない、ややしまる）
31　黒褐色土（均質、混じり少ない、30層よりしまり悪い）
32　暗黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土を主に暗褐色土混合、風化砂礫含む）
33　黒褐色土（均質、混じり少ない）

サブトレンチ3断面図

S=1/40
0　1m

第220図　N6区　断面図

第３節　遺物

１．概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品・ガラス製品などが出土している。また、N4区からは火葬されたと思われる人骨が出土している。以下に陶磁器・土器、瓦について記述していくが、器種・胎土などの分類、年代観などは、本丸附段調査区に準じている。

２．陶磁器・土器　（第221 ～ 223図、第34表）

本調査区から出土している陶磁器・土器は多くないが、19世紀後葉から20世紀の旧陸軍が使用したと思われるもののほかに、中国磁器青花、肥前・瀬戸・美濃陶器、17世紀の土師器皿などが見られる。以下に地点ごとに記述していく。

N1区　（第221図～第222図P340）

SK01からは16世紀末から17世紀の陶磁器・土器が出土しているが、肥前磁器染付は見られない。P333は白磁皿の口縁片である。全体に黄色味を帯びた釉が掛かり、質が良くないものである。高台脇にはケズリが施され、口縁は強く外反している。P334は下層から出土した肥前陶器鉄絵の大型鉢の底部片である。高台はあまり高くなく、見込みに胎土目跡が２か所残っている。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P335は肥前鉄釉陶器甕の口縁片である。鉄釉は薄く、被熱によって沸いているように見える。P336は越中瀬戸の陶器鉄釉鉢と思われる口縁片である。内外面に薄い鉄釉が掛けられている。口縁は欠損後再調整したのか、釉はないが平滑にされている。一部煤が付着しているのであろうか。P337は鉄釉陶器で花瓶であろうか。図化したものは口縁から頸部と思われる破片であるが、他にも同一個体と思われる体部片が７点ある。外面と口縁内面は光沢のある鉄釉が掛かり、体部内面には薄い鉄釉が掛かっている。体部内面には､青海波の叩きが見られる。中国南部の窯の製品であろうか。P338は中型土師器皿である。底部は平らになると思われ、内面の底部と体部の境に稜を持っている。体部は緩い「く」の字状を呈し、口縁は内弯するように摘み上げている。全体が暗褐色を呈しているため分かりにくいが、口縁には油煙痕がある。

SK02からは旧陸軍が使用したと思われる19世紀後葉の陶磁器が出土している。図示したP339・P340は瀬戸・美濃の磁器染付端反碗である。どちらも染付には酸化コバルトを使用している。P339は赤の上絵付で２本の圏線とその間を３つに区切る１本の縦線を描いているが、アラビア数字は描かれていない。見込みには崩れた寿字文があり、高台内には朱描きの銘があるが、判読できない。P340は胎土が灰白色を呈し、釉の透明感も無い。染付で竹文を描いている。高台内の底面は非常に薄く削られている。このほかにSK02からは磁器染付に赤の上絵付でアラビア数字「１」・「２」、縦３本線などを描いた皿や、陶器質に近い白色胎土の磁器染付格子文見込み蛇の目釉剥ぎ皿が出土している。

N3区　（第222図P341 ～ P343）

SD01からはP341・P342が出土している。P341は越中瀬戸陶器鉢口縁片である。遺存部分に卸目は見られないが擂鉢であろう。内外面に薄い鉄釉が掛かっている。P342は中型土師器皿である。内面から口縁外面まではヨコナデされていて、外底面には指頭圧痕が残っている。体部は丸く立ち上がり、外面は底部と体部の境がはっきりせず、口縁と体部の境に稜を持っている。内面は底部と体部の境にナデが巡るが弱く、口縁は内弯するように摘み上げている。17世紀前葉の製品である。

P343は包含層から出土した中国景徳鎮窯系と思われる磁器青花皿底部片である。見込みには二重圏線の中に文様がある。

N4区　（第222図P344・P345）

P344・P345はⅢ-2層から出土しているが、この層からは火葬骨が出土している。P344は磁器青花瓶体部である。体部上半で、頸部・体部下半との接合部で割れている。頸部は蓮弁文、体部は花唐草文

と思われる。呉須が少し滲んでいるので、生掛けであろうか。15世紀以前の製品と思われる。P345は瀬戸・美濃の陶器鉄釉天目碗の体部片である。高台脇は鉄化粧が施されている。16世紀後半の製品である。

N5区　（第223図P346）

ゴミ穴からは図示していないが戦時統制番号が付けられた磁器染付碗などの20世紀の陶磁器・土器が出土している。図示したP346は土器の五徳で、ほぼ完形である。口唇部に３か所突帯が付き、口縁近くには２個１組の穴が向かい合う位置に開けられている。口縁付近は煤が付着している。胎土は硬質で、砂粒を多く含み、表面に雲母が多く見える。

N6区　（第223図P347）

P347は口縁のみの小片であるが、薄手で小型の磁器青花碗である。中国景徳鎮窯系の製品であろうか。

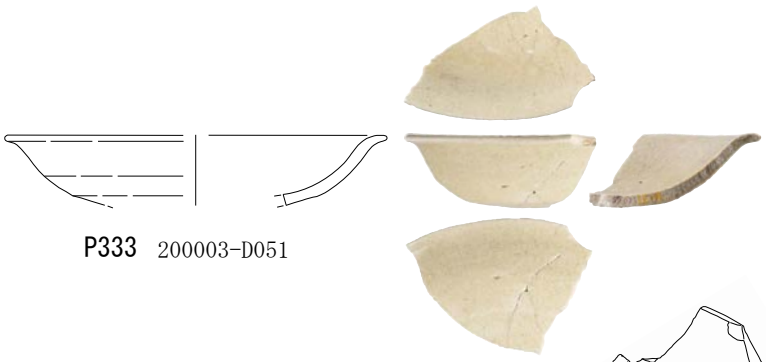
N7区　（第223図P348・P349）

P348は中国景徳鎮窯系かと思われる磁器青花碗である。高台はやや内傾している。見込みは二重圏線と花のような文様が見られる。P349は肥前磁器染付の瓶と思われる体部片で、接合部分で割れている。

３．瓦　（第224図、第34表）

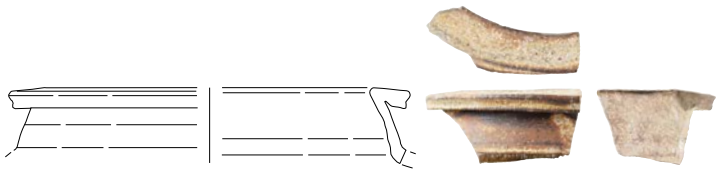
本調査区からは、瓦はほとんど出土していない。

T111はN1区のSK02から出土した釉薬瓦である。光沢のある濃紫色の釉が全面に掛かる袖桟瓦で、胎土は１である。尻部側に焼成前に上面から穿孔された釘穴が２個ある。完形に近く、長さ32.1㎝、幅34.1㎝になると思われる。T112はN5区付近で表採された燻軒丸瓦の瓦当面である。瓦当文様は巴文Ⅱ-2b類で、16個の珠文を持っている。巴文は稜を持たず丸く盛り上がり、尾は次の巴の尾の中間まで延びている。胎土はB2である。



P333　200003-D051

P334　200003-D050



P335　200003-D077

P336　200003-D078

P337　200003-D054

P338　200003-D076

N1区
P333・P335～P338；SK01
P334；SK01下層

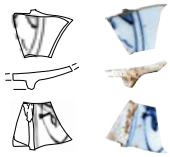
S=1/3
0　10cm

第221図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器1

P339　200003-B030

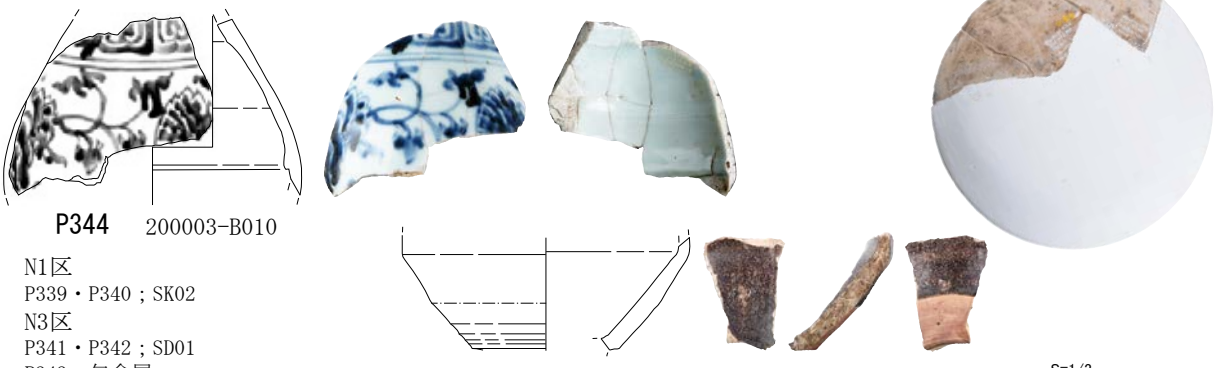
P340　200003-B045

P341　200003-D052



P343　200003-B046

P342　200003-D053



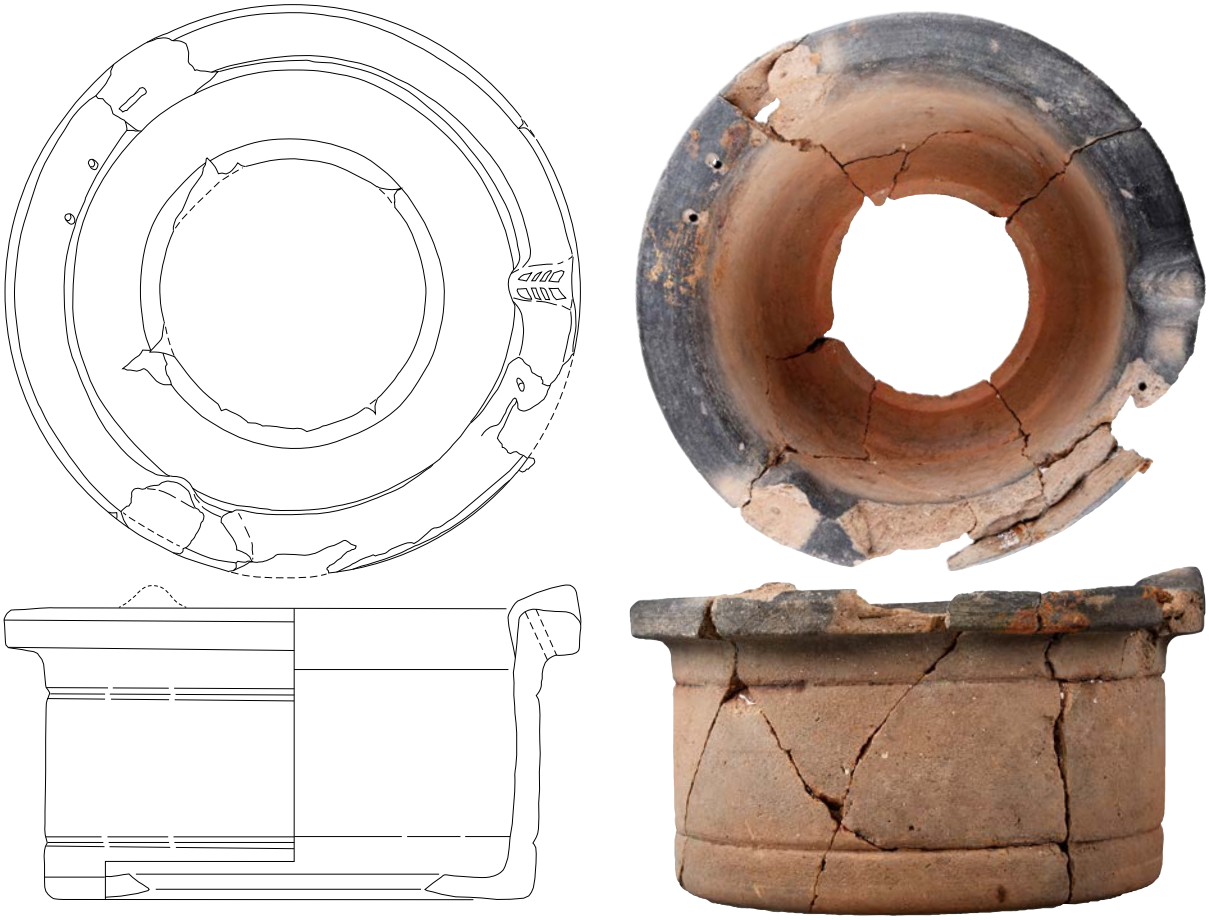
P344　200003-B010

P345　200003-D066

N1区
P339・P340；SK02
N3区
P341・P342；SD01
P343；包含層
N4区
P344・P345；Ⅲ-2層

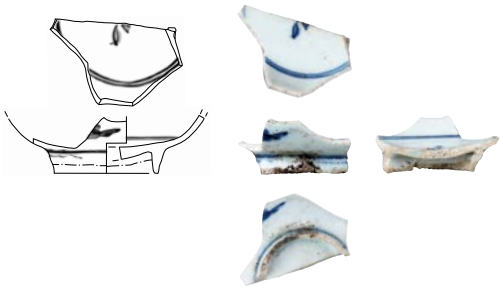
S=1/3
0　10cm

第222図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器2



P346　200003-B047

P347　200003-B044



P348　200003-B043

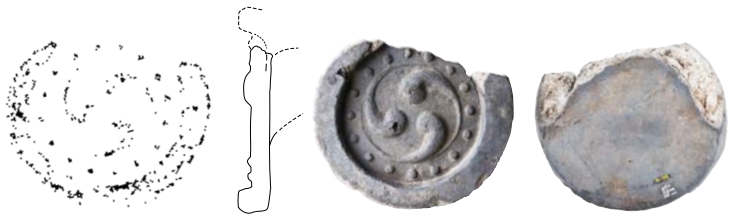
P349　200003-B025

P346；N5区　ゴミ穴
P347；N6区　サブトレンチ３
P348・P349；N7区　サブトレンチ４

S=1/3
0　10cm

第223図　藤右衛門丸出土遺物実測図　陶磁器・土器3

T111　200003-D150



N1区
T111；SK02
N5区付近
T112；表採

T112　200003-D079

S=1/6
0　10cm

第224図　藤右衛門丸遺物実測図　瓦1

第34表　出土遺物観察表　藤右衛門丸

陶磁器・土器

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		形状特徴	産地	年代	特記事項	ID(実測番号)
221	P333	磁器	皿	Ｎ１	ＳＫ０１	「15.0」		(2.8)	口4/36	ロクロ	白磁	Ⅰ2Aa	白	端反形				200003-D051
	P334	陶器	鉢	Ｎ１	ＳＫ０１　下層	—	10.9	(6.0)	底７/36弱	ロクロ	灰釉、鉄絵	Ⅰ2Ba	橙		肥前	16Ｃ末～17Ｃ初	見込胎土目跡	200003-D050
	P335	陶器	甕	Ｎ１	ＳＫ０１	「13.0」	—	(3.0)	5/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Aa	にぶい黄橙		肥前	17Ｃ前半？		200003-D077
	P336	陶器	鉢？	Ｎ１	ＳＫ０１	「13.2」	—	(6.1)	5/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Cb	灰赤		越中瀬戸？		口縁部欠損後再利用	200003-D078
	P337	陶器	花瓶？	Ｎ１	ＳＫ０１	—	—	(6.1)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ2Aa	灰		中国南部？			200003-D054
	P338	土器	土師器皿	Ｎ１	ＳＫ０１	(11.7)	—	(1.95)	口7/36	手づくね		E1	灰　粗砂・細砂少量含む		在地	17Ｃ前葉？	油煙痕	200003-D076
222	P339	磁器	碗	Ｎ１	ＳＫ０２	10.6	3.85	5.25	口20/36 底完	ロクロ	染付＋色絵(赤)	2Aa	白	端反形	瀬戸・美濃	19Ｃ後葉	酸化コバルト、裏銘あり	200003-B030
	P340	磁器	碗	Ｎ１	ＳＫ０２	「10.8」	3.85	5.5	口14/36 底18/36	ロクロ	染付	2Ba	灰白	端反形	瀬戸・美濃？	19Ｃ後葉	酸化コバルト	200003-B045
	P341	陶器	擂鉢	Ｎ３	ＳＤ０１	「30.4」	—	(2.7)	口4/36	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Ca	浅黄橙　礫含		越中瀬戸			200003-D052
	P342	土器	土師器皿	Ｎ３	ＳＤ０１	「11.7」	「8.1」	2.1	口12/36	手づくね		B	灰白　細砂多　焼土塊少　黒雲母		在地	17Ｃ前葉		200003-D053
	P343	磁器	皿	Ｎ３	包含層	—	—	(0.95)	小片	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系？			200003-B046
	P344	磁器	瓶	Ｎ４	Ⅲ－２層	—	—	(7.0)		ロクロ	青花	2Bb	白		中国	15C以前		200003-B010
	P345	陶器	碗	Ｎ４	Ⅲ－２層	—	—	(4.45)	小片	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Ba	浅黄橙　黒色細砂少	天目形	瀬戸・美濃	16Ｃ後半		200003-D066
223	P346	土器	五徳	Ｎ５	ゴミ穴	22.9	19.1	11.6	口28/36 底35/36	ロクロ？			橙　黒雲母多		在地			200003-B047
	P347	磁器	小碗？	Ｎ６	サブトレ３	—	—	(2.45)	小片	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系？			200003-B044
	P348	磁器	碗	Ｎ７	サブトレ４	—	4.2	(2.3)	底15/36	ロクロ	青花	2Ba	白		中国景徳鎮系？			200003-B043
	P349	磁器	瓶？	Ｎ７	サブトレ４	—	—	(3.1)		ロクロ、型押し	染付	2Ba	白		肥前			200003-B025

瓦

図版	番号	器種	地区	出土地点	表面処理	釉色	瓦当文様	寸法(瓦当)(cm)					寸法(体部)(cm)									胎土		特記事項	ID(実測番号)
								a	b	c	d	珠文径他	a	b	c	d	e	f	g	h	i				
224	T111	袖桟	N1	SK02	釉	濃紫光沢							32.10	(34.10)	—	—	8.30	3.80	2.7 (5.7)	3.40		1	にぶい橙 礫・細砂少	全面施釉　釘穴2個 径1.10cm	200003-D150
	T112	軒丸	N5付近	表採	燻		巴Ⅱ-2b	(13.40)	(13.00)	8.50	2.60	珠文：0.8 巴幅：2.1										B2	灰白 礫微、粗砂少、気泡多		200003-D079

第４節　出土人骨の分析

藤右衛門丸（N4区）出土人骨

梶ヶ山真理（国立科学博物館）・小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

石川県金沢市の金沢城跡の北ノ丸の藤右衛門丸地点の堀から、江戸時代以前の焼かれた人骨片が多数検出された。ここでは、それら人骨の部位同定および特徴の記載を行なう。

２．出土人骨所見

人骨の部位同定結果および特徴を第35表に示す。なお、第35表の人骨No.と図版の番号は対応する。

人骨は、寛永８（1631）年以前の初期金沢城に係る整地土中から出土している。もともと、整地土の下の層からは火葬施設（荼毘関連施設）と考えられる遺構が出土しており、それに伴う焼骨の可能性が高い。人骨は散乱して出土しており、個体数を割り出すのは非常に困難である。したがって、それぞれの出土地点ごとに人骨破片の部位と特記事項を表に示した。

人骨片は、大きくても１cm×２cm程度の大きさで、ほとんどが１cm四方、あるいはそれ以下の細かい破片である。骨体片には、横方向に筋が入る亀裂や収縮による歪みが見られる。また、ほとんどの骨片が灰白色を呈していることから、人骨は、軟部が付着した状態で、800度以上の高温で焼かれたと思われる。亀裂や収縮による歪みは、熱により急激に変化する際に起こる現象であるといわれている。遺体を晒して人骨だけにしてから火葬したものではない。例外として、C2b層の上腕骨片のみ黒色である。これは、何らかの理由で温度が低く、また、焼成時間が短時間であったのだろう。

３．まとめ

当該遺跡から検出された人骨片の総重量は156.6ｇである。一般に、成人男性（白人）の焼骨は約３kgとされ、日本人男性の場合はそれ以下の重量（２～３kg）である。今回確認できた焼骨は、１体分の重量に対して１割程度しか保存されていない。江戸時代以前の火葬関連施設の残存焼骨であるので、複数個体の可能性も当然考えられるが、人骨の保存部位としての重複はない。１体分として矛盾はないが、検出された人骨の量が非常に少なく、埋葬遺構から直接検出された状態ではないので、今回は個体数の判断は避けたい。なお、北ノ丸第１次N4区藤右衛門地点のＣ層（人骨No.3）から検出された右側頭骨乳様突起は、熱による収縮を考慮しても発達が良く大きい。したがって、男性個体のものであろう。また、同地点のＣ層人骨No.7、C2層人骨No.10-aの頭蓋骨片は、冠状縫合や矢状縫合が残っており、癒合などの加齢傾向の痕跡がないことから、熟年～老年などの高齢ではない。

第35表　藤右衛門丸出土人骨一覧

No.	出土位置	層位	人骨No.	人骨部位	備考	重量
1	縦割部	C層	1	上腕骨骨体片		93.0g
			2	大腿骨片		
			3	右乳様突起	男性の可能性	
			4	肩甲骨一部		
			5	後頭骨内板	内板横道溝部分	
			6	末節骨	手足どちらか判断できず	
			7	頭蓋骨片	縫合開離　加齢変化なし 熟年以上ではない	
			8	椎体片か	骨棘は形成なし	
			9	骨片		
2	縦割部	C2層	10-a	頭蓋骨片	冠状縫合の側頭部側　縫合開離する	29.7g
			10-b	四肢骨片		
			10-c	大腿骨片		
			10-d	舟状骨か		
			11・12	四肢骨片		
3	縦割部	C2b層	13	３点保存	上腕骨片 (上腕骨か) 骨頭一部 破片	7.4g
4	縦割部	北壁サブトレ	14	大腿骨片	４点	27.4g
			15	頭骨片	１点	
			16	脛骨片	２点	
			17	四肢骨片		

1．上腕骨骨体片（C層）、2．大腿骨片（C層）、3．右乳様突起（C層）、4．肩甲骨一部（C層）、5．後頭骨内板（C層）、6．末節骨（C層）、7．頭蓋骨片（C層）、8．椎体片か（C層）、9．骨片（C層）、10-a．頭蓋骨片（C2層）、10-b．四肢骨片（C2層）、10-c．大腿骨片（C2層）、10-d．舟状骨か（C2層）、11・12．四肢骨片（C2層）、13．３点保存（C2b層）、14．大腿骨片（北壁サブトレ）、15．頭骨片（北壁サブトレ）、16．脛骨片（北壁サブトレ）、17．四肢骨片（北壁サブトレ）

第225図　藤右衛門丸地点出土人骨

第５節　小結

火葬関連施設とみられる遺構について

藤右衛門丸の北端部のN4区において、一部深掘りを行い近世の整地層と、その下層から複数の土坑やピットといった遺構を確認した。近世の整地層については、時期の特定はできなかったものの、Ⅱ層とⅢ層として大別し、Ⅱ層は近世段階、Ⅲ層を掘り込み、Ⅱ層に覆われる溝状遺構（SD01）は、17世紀前葉までの遺物が出土しており、17世紀の早い段階で埋め戻されたものと考えている。また、Ⅲ-2層の埋土中からは16世紀後半の碗が出土していることから、Ⅲ層は金沢城の初期の段階の整地土の可能性が考えられる。

Ⅲ層中からは、焼けた人骨と炭化物が多く出土しており、造成時に周辺から入り込んだものと想定していた。

Ⅲ層の下位で検出した遺構群で最も新しい段階の遺構Ｄは、しまりのある整地土Ⅳ層を掘り込み面としているが、このⅣ層の最上面には遺構を覆うように灰層が広がっている。

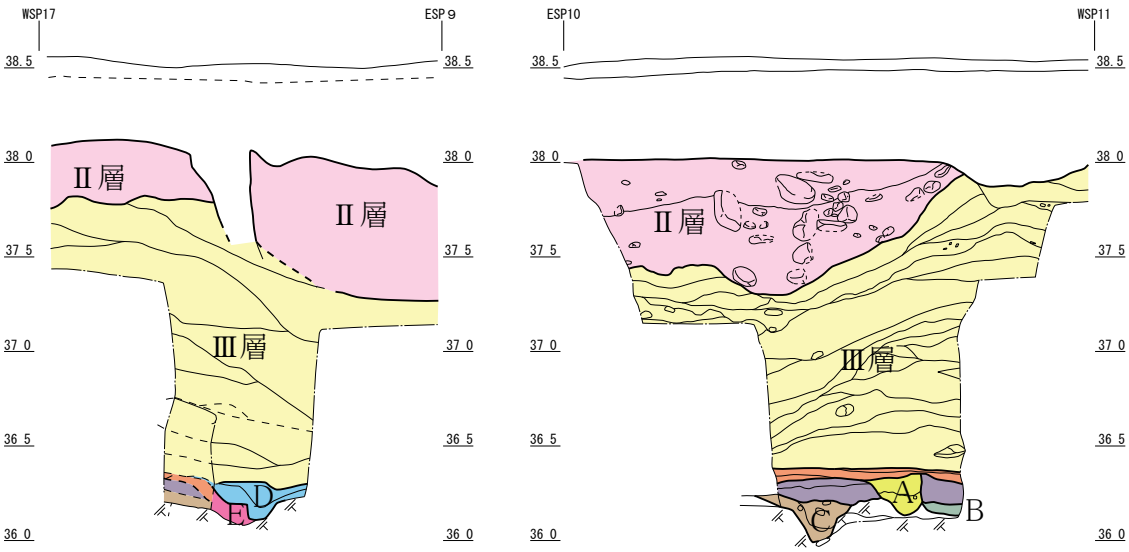
遺構Ｅについては、遺構Ｄよりも古いが、深掘りの南側で検出した遺構Ａ～Ｃとの前後関係は不明である。南側の遺構群は、遺構ＢとＣが下位にあり、この遺構を埋めた整地土を掘り込んで遺構Ａがつくられる。遺構ＡはⅣ層とした整地土に覆われていることから遺構Ｄが最も新しい遺構となる。これらの様相は、同一地点で、整地を繰り返しながら遺構を形成していたことを示している。遺構そのものの規模や形状は不明な点が多く、覆土中に炭化物や焼土、焼骨片を含む。遺構の壁面等に焼土面は確認できていないが、灰層がかぶっていることなどからも、周辺に火葬関連施設や火葬遺構（荼毘遺構）の存在を想起させるものであった。本章第４節において、Ⅲ層中から出土した焼けた人骨について、部位の同定とその特徴についての分析を掲載した。その中で、「軟部が付着した状態で、800度以上の高温で焼かれたと思われる」との所見を得たが、そのことも、荼毘遺構等の存在を示すものと考えられる。

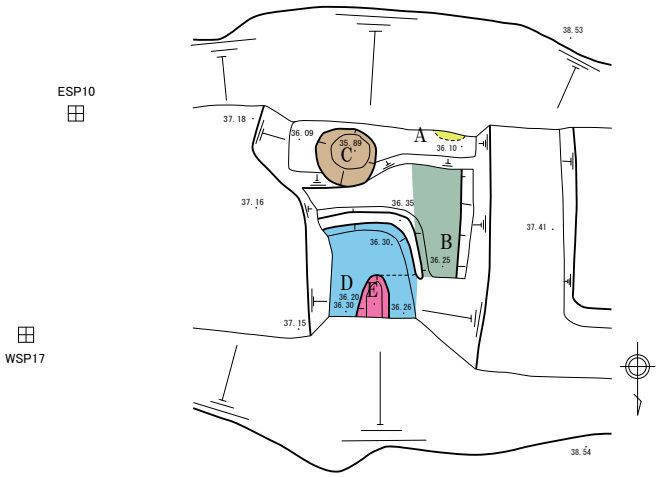
県内での火葬遺構の類例としては、白山市村井キヒダ遺跡［県立埋文センター 1991］と敷地天神山遺跡［県立埋文センター 1987］があげられる。村井キヒダ遺跡は15世紀後半から16世紀の荼毘遺構が確認されており、南北約700ｍの範囲（東西範囲は不明）に、火葬施設と考えられる土坑群を多数検出しているが、土坑間の切り合いは多くない。平面プランは、方形・長方形・楕円形・円形で、規模は全体形状が判明しているもので、長軸で２ｍ前後である。いずれも顕著な焼土面を持たない。

加賀市敷地天神山遺跡では、江戸時代後期の火葬遺構が確認されている。溝状と土坑状の遺構がみられ、土坑は複数基が切り合った状態で検出され、規模は長軸で平均120㎝と村井キヒダ遺跡に比べやや小規模である。遺構壁面は被熱し、覆土中からは焼けた礫や、人骨、棺に使用していたとみられる鉄釘などが出土する。

地面を掘り窪めた土坑状の遺構覆土中に炭化物や骨片が含まれる点や、藤右衛門丸で確認された土坑群は、全体形状が不明ではあるが、村井キヒダ遺跡の事例をみるようにそのプランが一様ではない点、焼土面があまり明瞭ではない点も共通する。一方、土坑が切り合った状態で検出され、やや小規模な点は敷地天神山遺跡とも共通する。また、遺跡の立地も、高所から低地に下がっていく縁辺に所在するなど、いずれの遺跡とも時期は大きく異なるが、火葬に関連する遺構としての共通点は見出すことはできる。

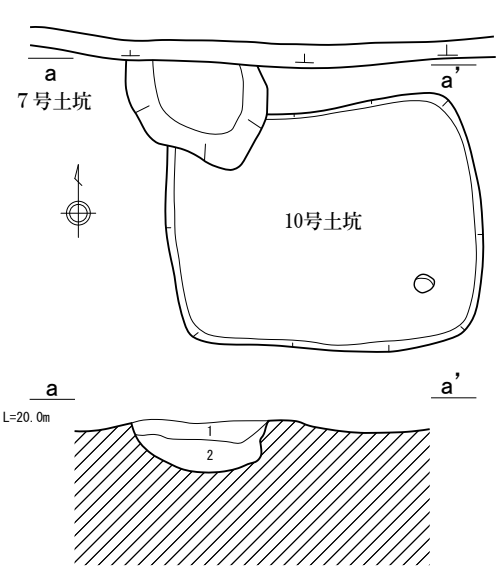
両遺跡とも火葬された対象については、単体ではなく、周辺の集落といった集団で形成した荼毘遺構の可能性を指摘している。本調査地点の火葬遺構を形成した集団についてはそれを特定するような遺物は見られなかったが、埋め戻される前段階であれば、金沢御坊もしくは、周辺の主要な集落としてあげられる山崎窪市等の墓域として利用されていた可能性も想定できる。



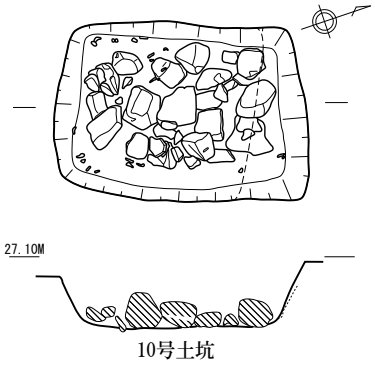


近世の整地層(Ⅱ層)
近世の整地層(Ⅲ層) 焼骨出土
整地土(Ⅳ1層)
遺構A
遺構B
整地土(Ⅳ2層)
遺構C
遺構D(整地土(D1層)切り込む))
遺構E

構築順：遺構 E → D
C→B→A



1　灰褐色シルト（細かい土器含む）
2　黒色土（ワラの燃えかすと骨片）



左：村井キヒダ遺跡（県立埋文センター 1991）
右：敷地天神山遺跡（県立埋文センター 1987）
※報告書掲載の図を再トレースして使用

S=1/20
0
1m

第226図　火葬関連遺構

N1区 遺構完掘状況（北東から）

N1区 SK01（北西から）

N3区 遺構完掘状況（南東から）

N3区 遺構完掘状況（南東から）

N3区 SD01全景（南から）

N3区 SD01南壁（北から）

N3区 SD01南壁（北から）

N3区 SD01南壁（北から）

写真図版34 藤右衛門丸遺構写真1

N3区 SD01北壁（西から）

N3区 SK06全景（南西から）

N3区 中央部大型土坑（南から）

N3区 中央部落ち込み（西から）

N3区 中央部北壁（南西から）

N3区 中央部北壁（南西から）

N3区 掘削作業風景（北西から）

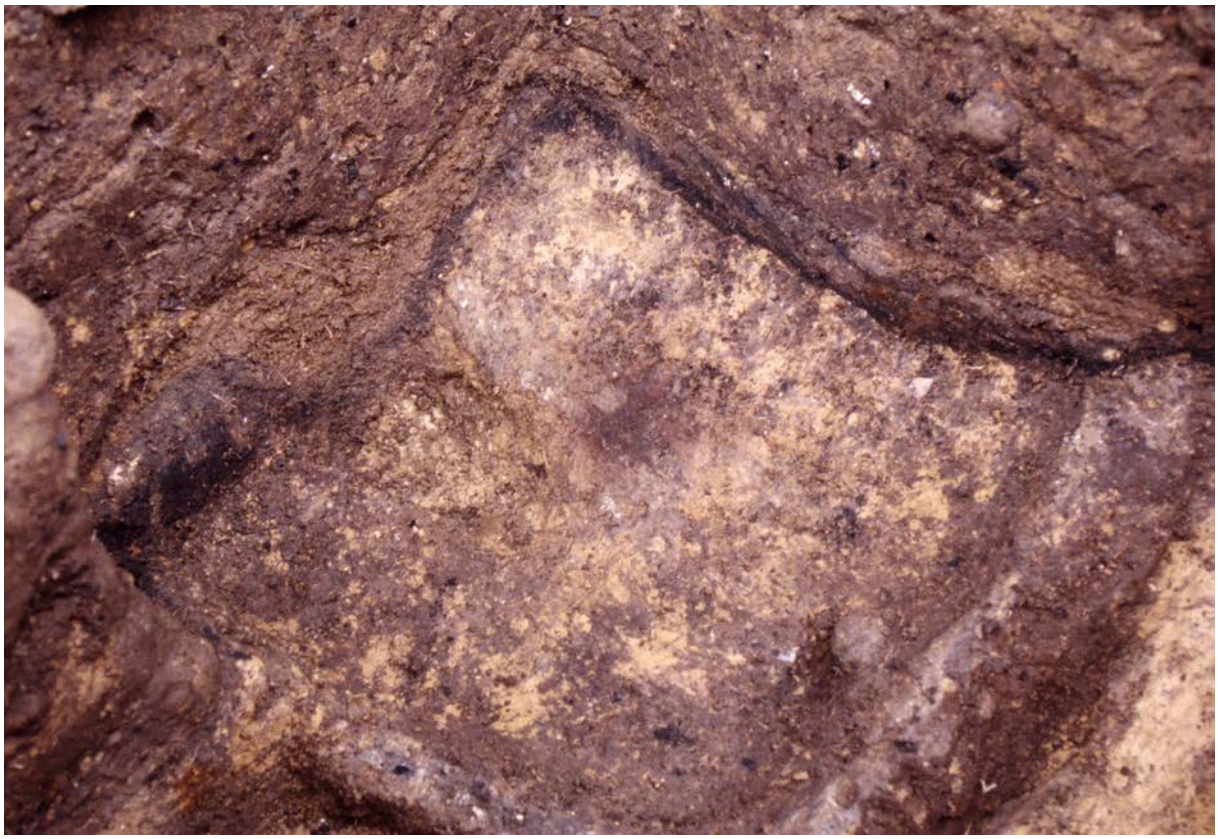
N4区 遺構完掘状況（東から）

写真図版35 藤右衛門丸遺構写真2

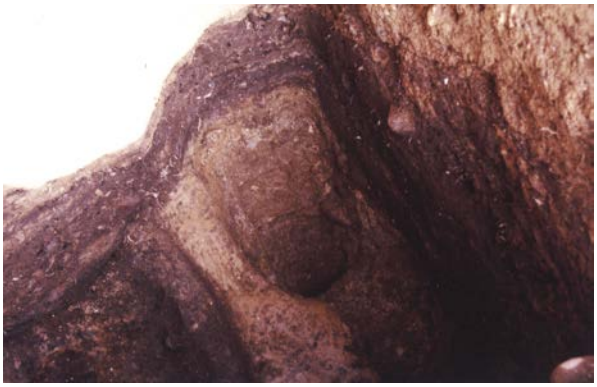
N4区 サブトレンチ１（北から）

N4区 サブトレンチ１ 完掘状況（東から）

写真図版36 藤右衛門丸遺構写真3



N4区 サブトレンチ１ 遺構D・C（南西から）



N4区 サブトレンチ１ 遺構C（西から）

N4区 サブトレンチ１ 遺構D東壁（西から）

N4区 サブトレンチ１ 遺構北壁（南から）

N4区 サブトレンチ１ 遺構D（南から）

写真図版37 藤右衛門丸遺構写真4

N4区 サブトレンチ１ 南壁 -1（北から）

N4区 サブトレンチ１ 南壁 -2（北から）

N5区～7区 遺構完掘状況（全体）（北から）

N5区 遺構完掘状況（北東から）

N6区 遺構確認状況（北から）

N6区 サブトレンチ３ 東壁 （西から）

N7区 遺構確認状況（北から）

N7区 遺構確認状況（南から）

写真図版38 藤右衛門丸遺構写真5

第６章　いもり坂脇石垣

第１節　いもり坂脇石垣の試掘調査

１．調査区の位置と調査の概要　（第227、228図）

いもり坂脇石垣は本丸附段と玉泉院丸との間にある斜面上に築かれた石垣で、石垣の背後が本丸附段、前方は通路を挟んで、坪野石を意匠的に使用した玉泉院丸東石垣である。現在石垣前方にあるいもり坂と呼ばれる園路は江戸期からあったものではなく、明治40年頃に旧陸軍によって造成されたといわれ、そのすぐ脇にあることから、いもり坂脇石垣と通称している。石垣ID番号は通路に面した西面は1500W、南面は1500S、空堀に面した北面の下段が1500N、上段は1501Nである。

本石垣は外観からの変形が著しく、平成９年度から土木部公園緑地課が実施する石垣動態観測においても、僅かずつながらも変位が累積する傾向にあるとされていた。特に平成19年３月25日に発生した能登半島地震で、金沢市内も震度４を観測したが、その影響と考えられるやや大きな変位がみられた。園路に近接していることもあり、修復等の何らかの措置についての検討をおこなうため、その基礎資料を得るという目的で、現況の観察及び試掘を実施した。

試掘は石垣の西面中央部と北西隅角部にトレンチを設定し、西面中央部を第１地点、北西隅角部を第２地点とした。

２．基本層序

いもり坂脇石垣では、Ⅰ～Ⅳ層に区分した。Ⅰ層は平成以降の公園整備に伴う造成土が該当する。Ⅱ層は現石垣に伴う掘方や整地土とした。Ⅲ層は明治40年のいもり坂造成に伴う整地層であるが、Ⅱ層とⅢ層に前後関係があるのかは不明である。Ⅳ層は旧石垣構築時、又はその時点で既にあった整地土とした。

３．石垣の現況　（第229、230図）

いもり坂脇石垣は、粗加工石と切石が混在する乱積み石垣だが、西面の1500Wでは部分的に布積みや落とし積みがみられる。各石垣面の規模や勾配等は以下の通りである。

1500W：Ｌ17.5m、H5.2m、Ａ102.4㎡、勾配73°、築石部７段
1500N：Ｌ9.6m、H5.0m、Ａ46.8㎡、勾配71°、築石部８段
1501N：Ｌ7.0m、H2.3m、Ａ12.4㎡、勾配84°、築石部６段
1500S：Ｌ6.9m、H4.5m、Ａ14.9㎡、勾配85°、築石部７段

創建は寛永期（金沢城石垣編年４期）で、寛文期（５期）に修理されたとみられる。それ以降の修理ははっきりしないが、明治40年頃に行われたいもり坂の造成の際に改修された可能性がある。

石積みの変形では、1500W（西面）の石垣全体がやや波打つように変形しており、中央部から北西隅角部にかけては前方向（西方向）に孕み出している。特に縦方向の目地が目立つ７m付近については、それを境に石垣面が前後にずれたようになっている。南西隅角部は天端から４段目までが前倒れしており、築石部との間に段差が生じている。

1500N（北面）は、石垣面の中央部付近から入隅部に向かって面がねじれたようになっているが、変形の可能性もあるが、修理時に非解体部分に面をすりつけようとしたためかもしれない。本丸附段の北面石垣と接する入隅部周辺で、石垣前面に栗石を含んだ土が堆積する。近世段階には頬当石垣があったが、撤去されており、その際に石垣内部の裏込め層の一部が残置されたものと考えられる。その石垣を撤去した範囲でも、築石の前倒れがみられる。頬当石垣撤去後に変形したのか、それ以前か

らのものか不明である。動態観測では1500N背後の孔内傾斜計や1501Nの定点観測において、累積した変位を記録している。

個別石材では、1500Wの縦方向のずれの直下にある石材２石で割れを確認したが、やや風化が進んだ石材であった。石材の割れがみられるのは孕み出し範囲の北側に集中する傾向にある。

４．トレンチの調査状況

（１）第１地点　（第231図）

石垣西面のほぼ中央付近で南北1.5m、東西2.2mのトレンチを設定した。石垣の基底部を覆うように盛土されており、いもり坂の路面よりも地表面は高い。地表面から約40㎝掘り下げたところで、前倒れ状態の石垣石を２石検出した。現状の石垣よりも約20ｃｍ前方に出ており、石材の上面部分が見える状態である。この２石は正面部分は埋没しておりみえないが、上面に合端加工された切石材で、旧石垣は切石積石垣であった考えられる。現状の石積みは、この前倒れした石材を残した状態でセットバックして上に積み直しており、変形していた旧石垣を修理したと推測できる。調査で確認した切石材の上にのる石材は現石垣の最下段で、金場取り残し石を使用し、現況で地表面より上となる部分をはつっており、粗いノミ筋が残る。

土層観察は調査区の両側の東西壁面と調査区中央の縦横断面で観察を行った。

１～５層は平成以降の公園整備に伴う造成土である。６～８層は現石垣に伴う整地土と考えられる。６・７層は栗石が少なく、第２地点南壁断面の４～６層に対応するものと考えられる。８層は小さい栗石が集中しており、これは現石垣最下段の石材下にも見られ、トレンチ南側でも石垣の前面に広がっている。また、石材加工に伴う戸室チップも含まれており、現石垣掘方埋土の可能性がある。９～13層はいもり坂造成による削平後の整地層と解釈した。10・11層には砕石も含まれることから現代の整地層の可能性もあるが、新しい遺物は出土していないが、13層からは光沢のある釉薬瓦が出土しており近代以降とみられる。14・15層は旧石垣構築時の栗石層と推測した。14層は栗石の方向が整わず乱れた様子で、土も15層のようなしまりがない。15層は栗石が偏平な面を上にしており、14層に比べ規則的に入っているようにみえ、土もしまりがある。この二つの層は上記の差異以外は同色・同質の土であるため、もともと同一層であったが、いもり坂造成時、又は石垣改修時に14層とした部分の栗石が原位置で撹乱され、現状の２層に分かれたのではないかと考えた。

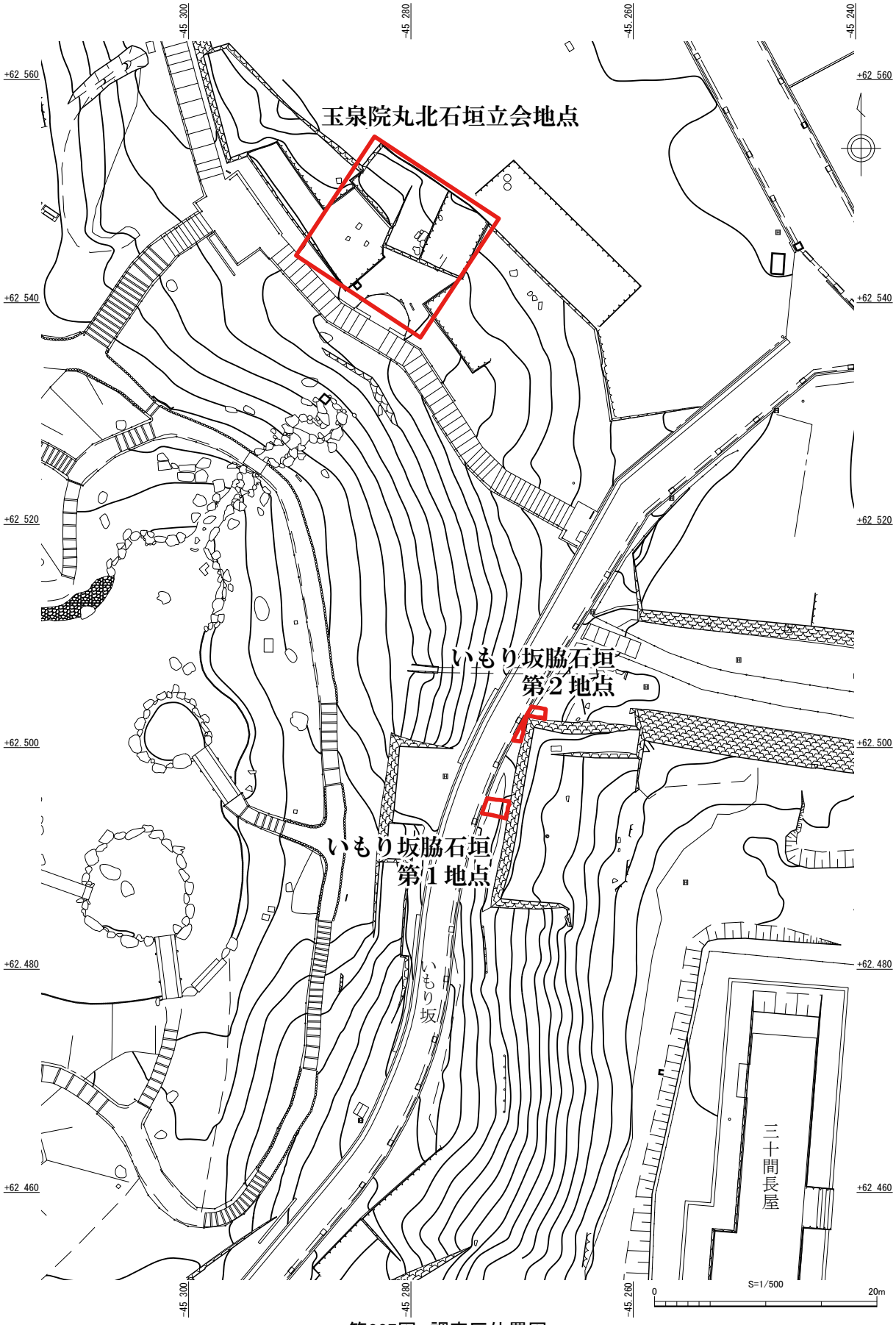
16層以下は、いずれも旧石垣の栗石層より下位に堆積しており、14・15層ほど大きめのグリ石を含んでいないが、旧石垣の構築時またはそれ以前の段階の整地土と考えている。20層は22・24・23層の黒色土層をパックしている。23層は、その周りに黄褐色粒を含んだ24層が堆積しており、その平面形状から植栽痕の可能性も考えられ、25層はその掘り込み面のようにも見える。

（２）第２地点　（第232図）

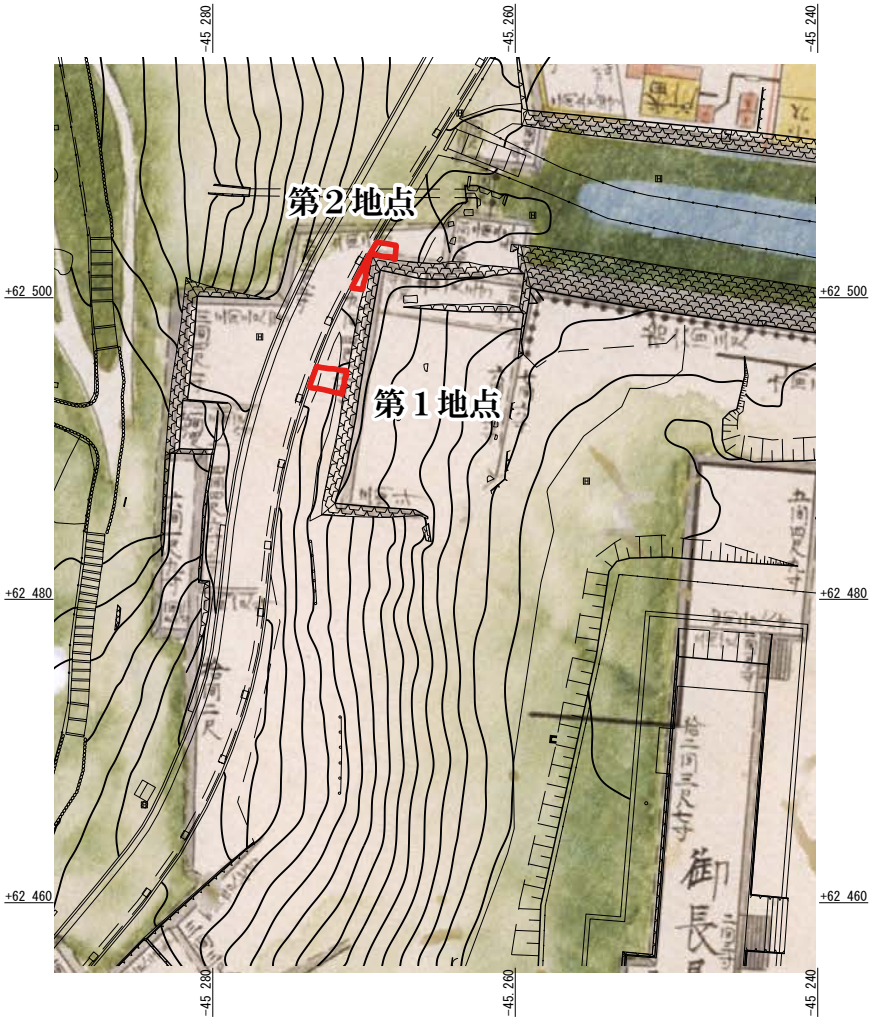
石垣の北西隅角部を取り囲むようにトレンチを設定した。西面において約45㎝掘り下げたところで、現石垣よりもやはり前に約20㎝出た石材を検出した。この石材は、上の石材と面を合わせるように上部が高さ10㎝程、はつられている。はつられた下端部で標高42.9mである。第１地点は積み直しされた現石垣の石材の下端が標高42.8mであったことから、概ねこの高さより上が修理されたものと推測できる。

隅角部を介した北側では、約１m掘り下げたが、近現代層であった。現状でも、石垣北面側は本丸附段と二ノ丸の間に入る空堀となることから、地盤が低くなっており、本来の石垣前面の基盤層自体が低い可能性がある。

断面図の第７層は、面が前に出ている石材周辺に堆積している。面が前に出ている石材は北へ連続せず、やはり７層がひろがっていることから、旧石垣の石材を抜き取った後に、整地土として入ってきたものと考えられることから、現石垣構築に伴う整地土であろう。



第227図　調査区位置図



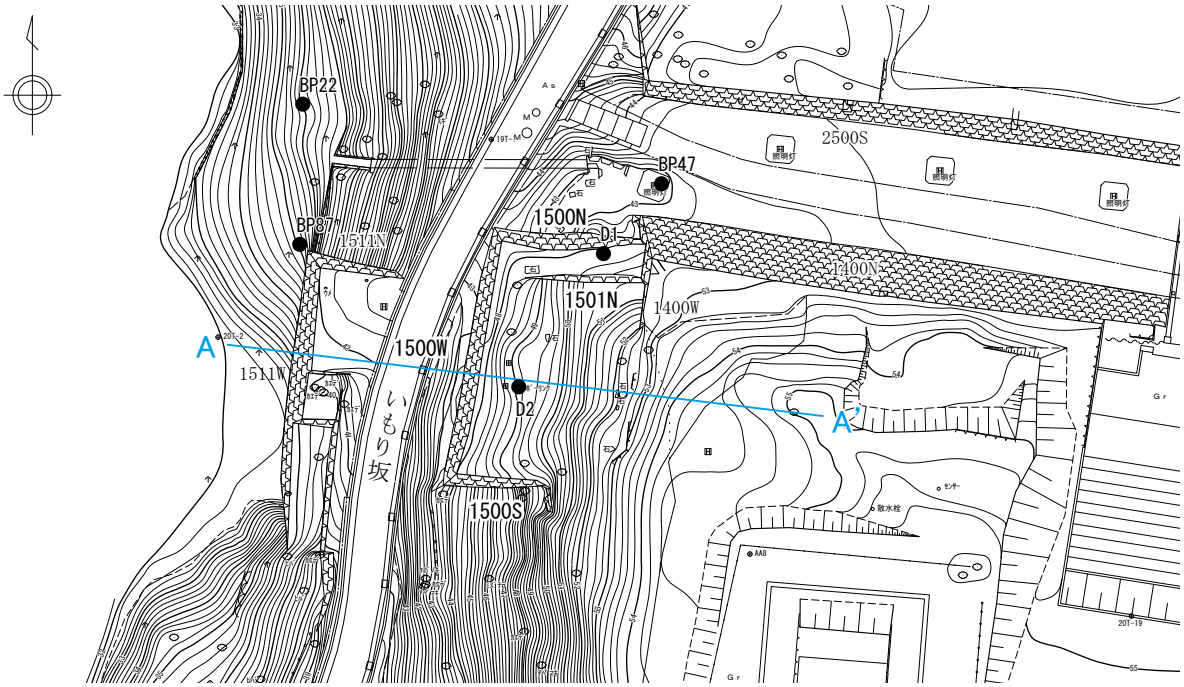
いもり坂脇石垣

玉泉院丸北石垣

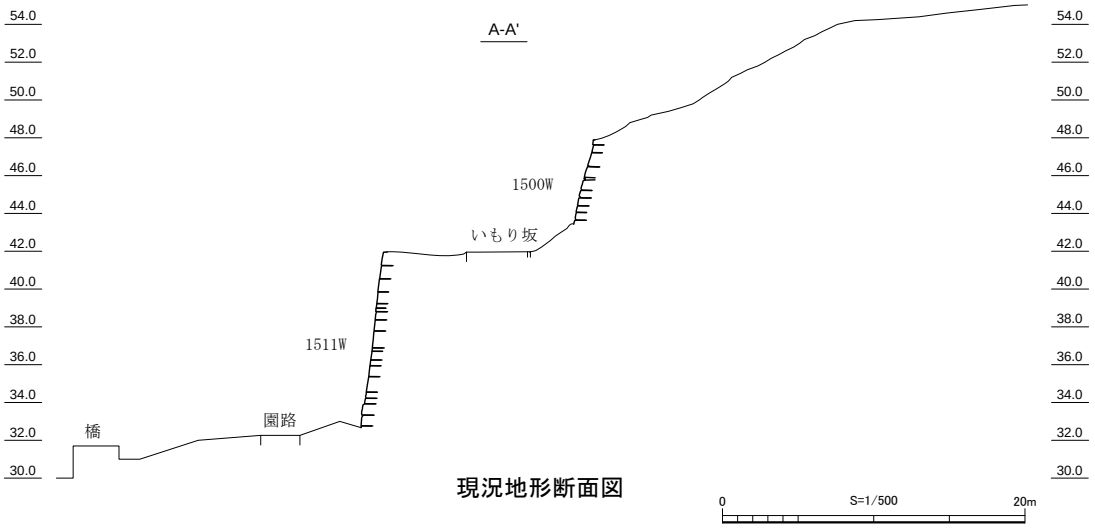
「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年（1830）

S=1/500
0
20m

第228図　調査区現況・絵図照合図



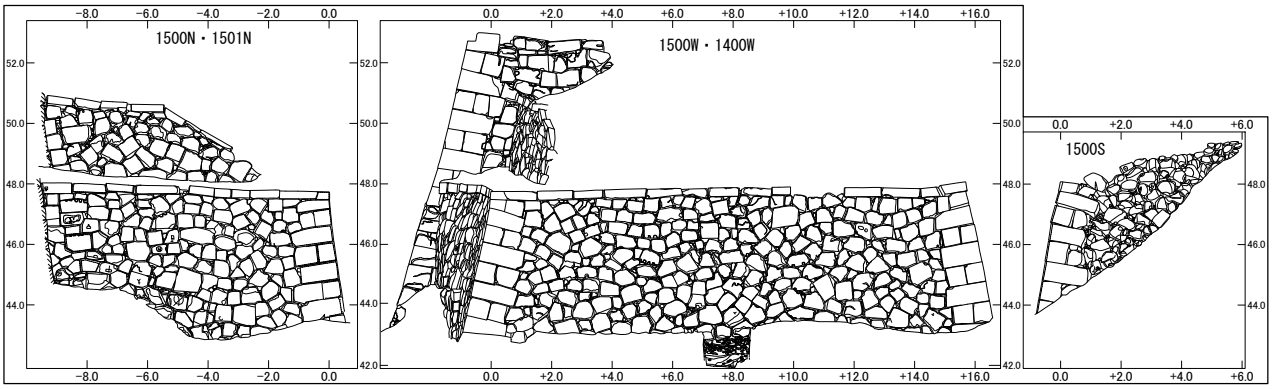
現況平面図



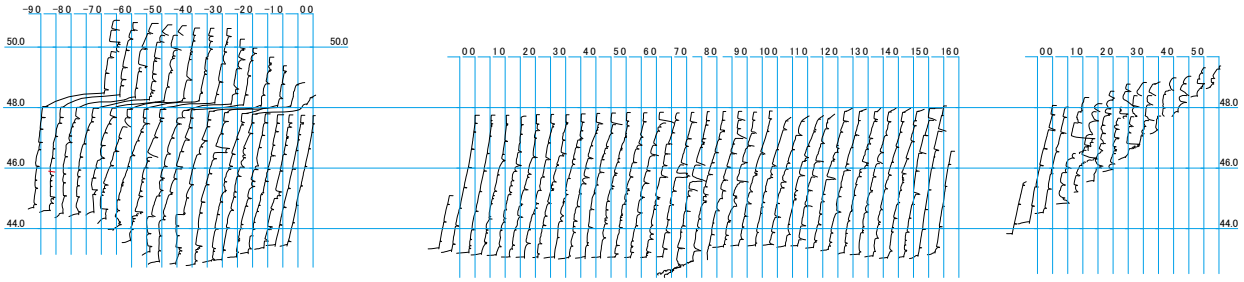
現況地形断面図

現況写真（北西から）

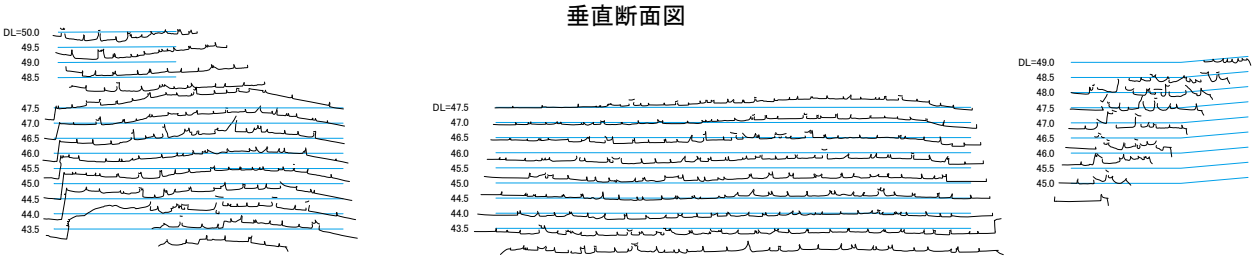
第229図　いもり坂脇石垣現況



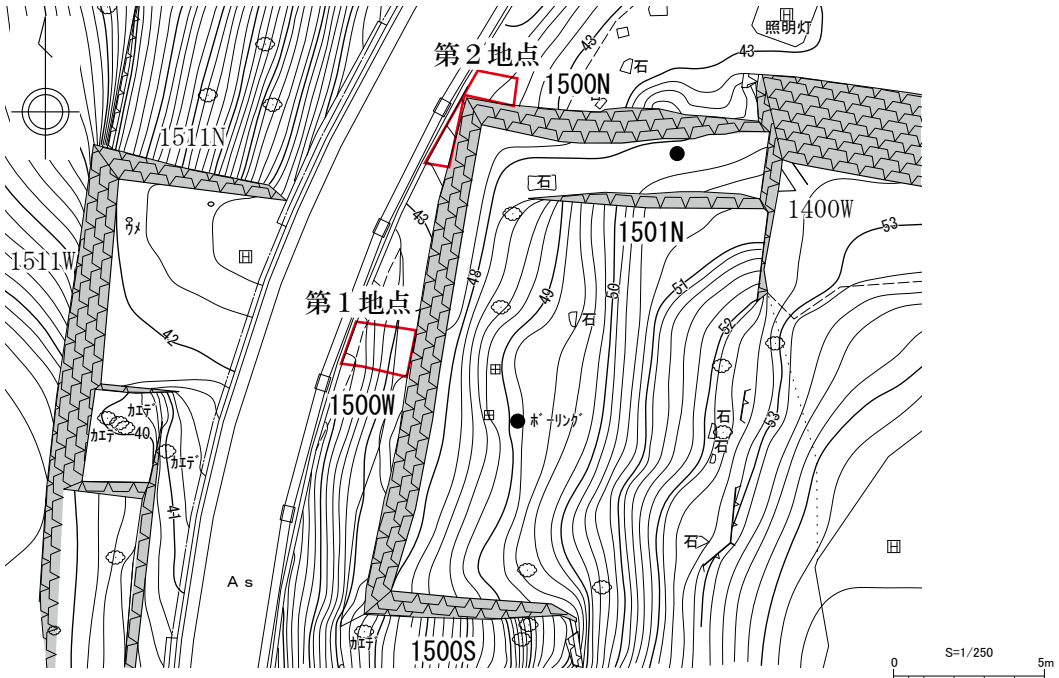
石垣立面図



垂直断面図

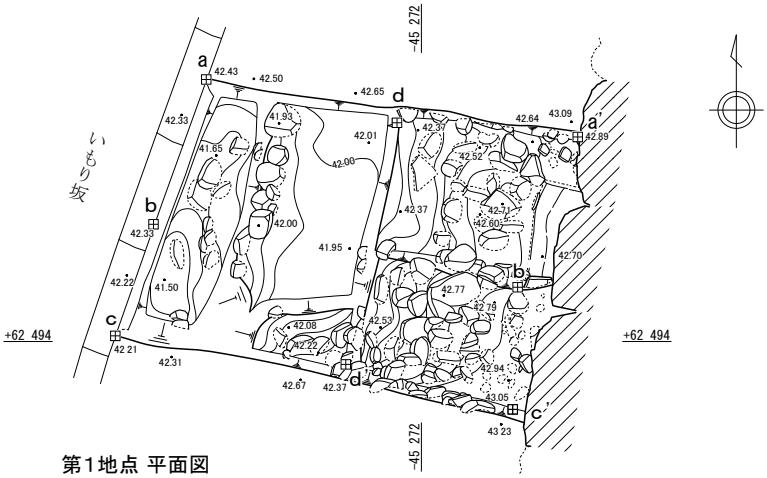


水平断面図

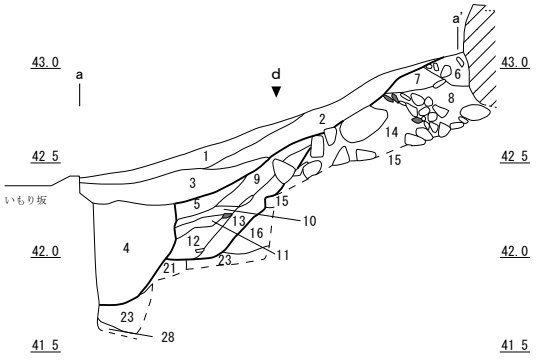


調査区位置図

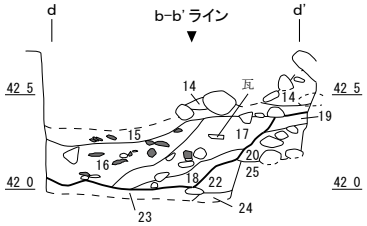
第230図　石垣立面図、断面図、調査区位置図



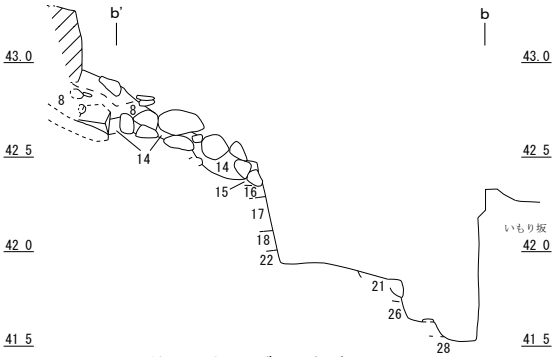
第1地点 平面図



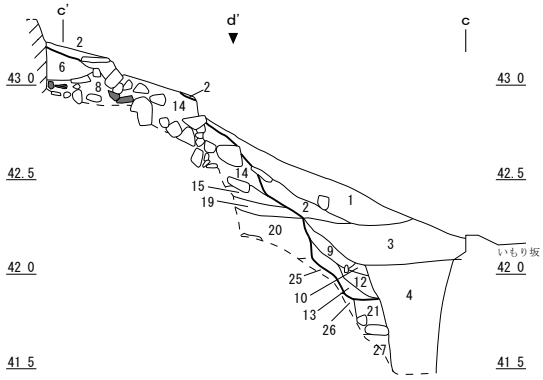
第1地点 北壁断面図



第1地点 横断断面図



第1地点 サブトレ南壁断面図



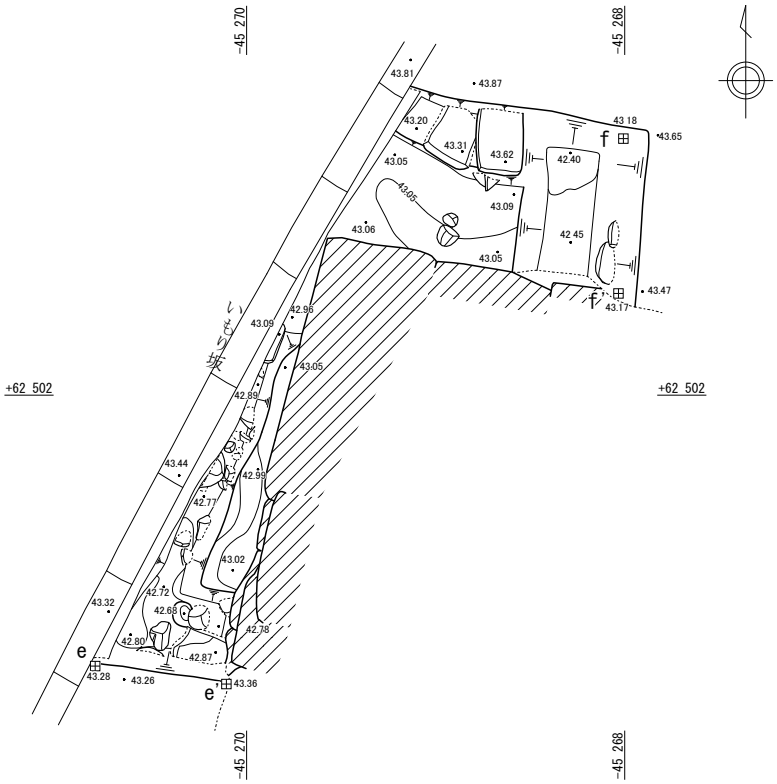
第1地点 南壁断面図

S=1/40
0 1m

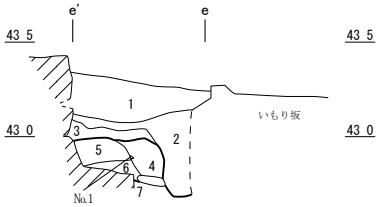
1 10YR2/3 黒褐色土（粘性なし、しまり強い）表土層
2 10YR3/3 暗褐色土（粘性なし、しまり強い）表土層
3 7.5YR5/8 明褐色土（粘性あり、しまりやや強い）クリカラ
4 10YR5/3 にぶい黄褐色（粘性なし、しまり極強い）砕石
5 10YR2/2 黒褐色土（粘性なし、しまりやや強い、径5㎜礫を多く含む、旧表土（平成））
6 10YR2/3 黒褐色土（粘性あり、しまりあり、径3～5㎜礫を含む）
7 10YR3/3 暗褐色土（粘性あり、しまり強い、径3～5㎜礫を含む、戸室チップ少い）
8 10YR2/3 黒褐色土(粘性あり、しまりやや強い、径5～8㎝の礫を多く含む、戸室チップ多い、礫は平面でもひろがる）
9 10YR3/2 黒褐色土（粘性なし、しまり強い、径5㎜礫を極多く含む）
10 10YR2/3 黒褐色土（粘性なし、しまり強い、径2㎜礫を多く含む、径0.5～1㎝礫を少量含む）
11 10YR3/2 黒褐色土（粘性なし、しまり強い、径1～2㎝礫を含む）
12 10YR3/3 暗褐色土（粘性なし、しまり強い、径2～3㎜礫を多く含む、黄褐色粗粒・粒を含む、黄色粒を少量含む、炭化物粗粒を微量含む）
13 10YR2/3 黒褐色土（粘性なし、しまり強い、径3㎜礫を含む 黄色粒を極微量含む）
14 10YR3/3 暗褐色土（粘性なし、しまりなし、径0.5～1㎝・10～20㎝礫を多く含む、黄色粒を微量含む、戸室チップあり、ポソポソした土）
15 10YR3/4 暗褐色土（粘性あり、しまり強い、径10～20㎝礫を多く含む、白色粒・黄色粗粒・粒を少量含む、戸室チップあり、やや緻密）
16 10YR3/3 暗褐色土（粘性なし、しまり強い、黄褐色粗粒を含む 10YR4/6 褐色粘質土ブロック（径1～2㎝）・径3㎝礫を少量含む 径5㎝の戸室チップ多い）
17 10YR3/4 暗褐色土（粘性やや強い、しまりやや強い、黄白色粘土粗粒を含む 7.5YR5/8 明褐色粘土ブロック（径2～3㎝）・径1㎝礫を少量含む、戸室チップあり）
18 10YR3/3 暗褐色土（粘性あり、しまりやや強い、黄白色土粒を多く含む、炭化物粗粒・粒・径3㎝礫を少量含む、10YR5/4 にぶい黄褐土ブロック（径3㎝）を微量含む、焼土粒を極微量含む、戸室チップあり）
19 10YR3/4 暗褐色土（粘性あり、しまりやや強い、黄白色粗粒・粒を多く含む、2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック（径1～2㎝）を含む、5YR5/8 明赤褐土ブロック（径1㎝）・径5㎜礫を少量含む）
20 10YR4/6 褐色土（粘性あり、しまりやや強い、2.5Y6/4 にぶい黄色粘土を斑紋状に、黄白色土粗粒・粒を非常に多く含む、径0.5～1㎝礫を多く含む、径15㎝程礫を含む、戸室チップ多い、栗石層）
21 10YR2/3 黒褐色土（粘性あり、しまりやや強い、黄褐色粗粒・粒・径10～20㎝礫を含む、白色粒・径1㎝礫を少量含む、戸室チップあり）
22 10YR2/3 黒褐色土（粘性やや強い、しまりやや強い、黄褐色粗粒・粒を多く含む、黄色粗粒を少量含む）
23 10YR2/1 黒色土（粘性やや強い、しまり強い、黄褐色粗粒、戸室チップを少量含む）
24 10YR2/2 黒褐色土（粘性やや強い、しまりやや弱い、黄褐色粒を多く含む、橙色粗粒を少量含む、戸室チップあり）
25 10YR3/4 暗褐色土（粘性やや強い、しまりやや弱い、黄白色土粗粒・粒を多く含む、径1㎝礫を少量含む、戸室チップやや多い）
26 10YR3/4 暗褐色土（粘性あり、しまりあり、黄褐色粗粒・粒を含む、径1㎝礫を少量含む、径2㎝礫を微量含む、戸室チップあり）
27 10YR3/4 暗褐色土（やや明るい）（粘性ややあり、しまり強い、10YR4/6 褐色粘土を主体的に含む、白色粗粒・粒・径3㎝礫を少量含む、戸室チップ含む）
28 10YR4/4 褐色土（やや黄色が強）（粘性強い、しまり強い、径5㎜炭化物ブロックを少量含む、径5㎜焼土ブロックを微量含む、戸室チップ少い）

※1～5 表土層 6～8 現石垣掘方・整地土 9～13 いもり坂造成後の整地層 14・15 旧石垣の栗石層 16～28 旧石垣構築時又はそれ以前の整地層 （22～24 植栽痕か 20 植栽痕をパック 25 植栽痕の掘り込み面）

第231図 第1地点 平面図、断面図

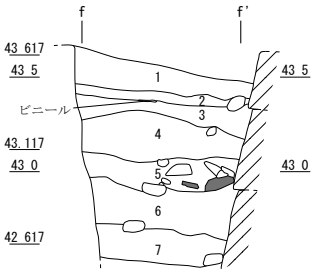


第2地点 平面図



1　7.5YR5/8　明褐色土　クリカラ
2　2.5Y5/2　暗灰黄色土　砕石
3　10YR2/2　黒褐色土（粘性なし、しまりやや弱い、径５㎜小礫を少量含む根も多くフカフカしている、腐葉土（平成か？））
4　10YR3/3　暗褐色土（粘性なし、しまり強い、黄褐色粗粒・粒を多く含む、黄白色粗粒・粒・径２㎝礫を少量含む、白色を微量含む、まじりが多い、幕末以降の磁器片出土（近代か？））
5　10YR3/4　暗褐色土（粘性なし、しまり強い、やや砂質強、径２～３㎝礫を少量含む）
6　10YR4/4　褐色土（粘性なし、しまり強い、砂質強、径５㎜礫を少量含む）
7　10YR4/4　褐色土（粘性なし、しまり強い、径１㎝明黄褐色（10YR6/6）・径１㎝黄褐色（10YR5/6）粗粒・を多く含む、白色を含む、径１㎝明黄褐色（10YR6/6）・径１㎝黄褐色（10YR5/6）粘土ブロックを少量含む、平面では、径10～15㎝の栗石・径２～３㎝に玉石を含む）
※1～3　表土　4～7　現石垣構築に伴う整地土

第2地点 南壁断面図



1　7.5YR5/8　明褐色土（粘性あり、しまり強い）クリカラ
2　10YR3/4　暗褐色土（粘性あり、しまり強い、径１～５㎝礫を多く含む、ビニール出土）
3　10YR2/3　黒褐色土（粘性なし、しまり強い、径１～５㎝礫を含む、ビニール出土）
4　10YR3/3　暗褐色土（粘性なし、しまり強い、径５㎜礫を多く含む、径１～３㎝礫を少量含む、黄褐色土がところどころ見られる、コンクリート出土）
5　10YR3/2　黒褐色土（粘性なし、しまりやや弱い、径５㎜礫を含む、径10㎝礫・径１～３㎝礫を少量含む、やや砂質が強い、コンクリート出土）
6　10YR3/3　暗褐色土（粘性なし、しまりやや強い、径５㎜礫を少量含む、上層より砂質強、上層より礫が少なくなり、緻密さが増す、ガラス出土）
7　10YR3/4　暗褐色土（粘性やや強、しまり強い、径２～３㎝礫主体、ガラス出土）
※1～7　近現代層

第2地点 東壁断面図

S=1/40
0　1m

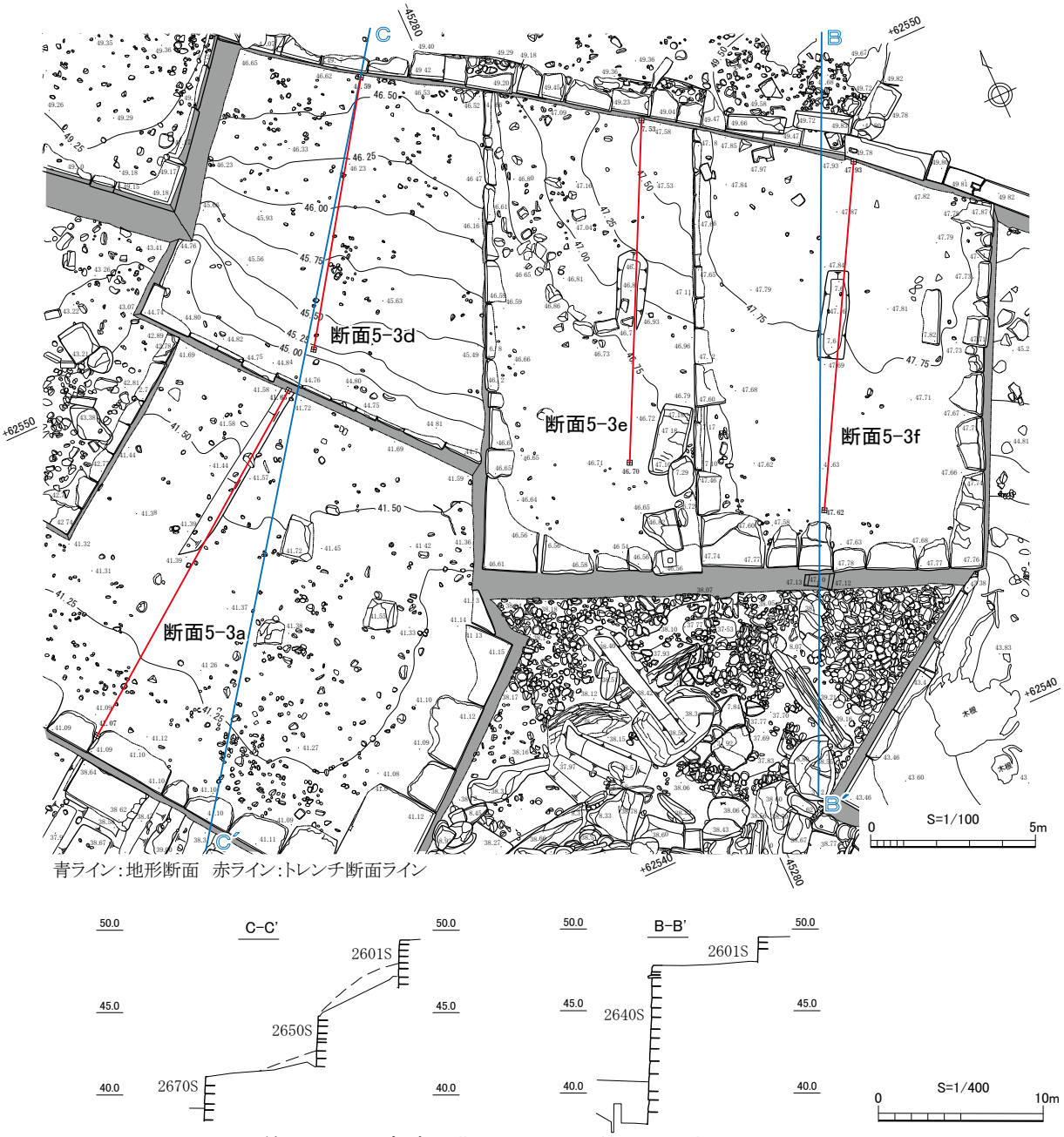
第232図　第2地点　平面図、断面図

第２節　玉泉院丸北石垣の立会調査

１．調査区の位置と調査の概要　（第227、228、233図）

玉泉院丸庭園整備工事に先立ち行われた玉泉院丸庭園の発掘調査は、庭園全体の構成や主要な施設についての構造などを明らかとするため、５つの地点において調査が行われた。これらの成果と江戸後期の絵図を参考にして、遺構保護のため本来の遺構面から嵩上げして庭園が整備された。整備の一環として玉泉院丸北にある雛段状の石垣群の上面に堆積した、崩落土の除去を行っており、本報告はその際の立会記録である。庭園発掘調査の第５地点と隣接しており、第５－３地点とした。庭園の発掘調査時で作業を実施したが、石垣の保存状況の把握の面もあり、今後の石垣保全に資する記録として、同様の目的でトレンチ調査を行ったいもり坂脇石垣と併せて報告することとした。

石垣前面の崩落土は、近代以降に二ノ丸側からの土砂等の廃棄に伴うものと考えられるが、作業に



第233図　玉泉院丸北石垣トレンチ位置図、地形断面図

際しては先行してトレンチを入れ、明らかに近代以降と判断できる土のみを除去することとした。

土層確認のトレンチは石垣2640S（色紙短冊積石垣）で２箇所、2670S、2610Sにおいて各１箇所、各石垣の奥に位置する石垣正面と直交するように設定した。トレンチ両壁にa～hまでの番号をつけて断面観察を行い、土砂の堆積状況がより明瞭に把握できた壁面について報告することとした。

２．土砂の堆積状況　（第234、235図）

石垣上面に堆積する土は、石垣の背後にあたる二ノ丸側から、流れ込むように堆積する。いずれも近代以降の堆積層とみられるが、含まれる遺物の様相からⅠ層とⅡ層に大別した。

Ⅰ層はガラスやコンクリートや空き缶などを多く含む明らかに近代以降の堆積土が該当する。Ⅱ層は、出土品がごく少量になるが、軍隊で使用されたアラビア数字を上絵付する茶碗が出土する。

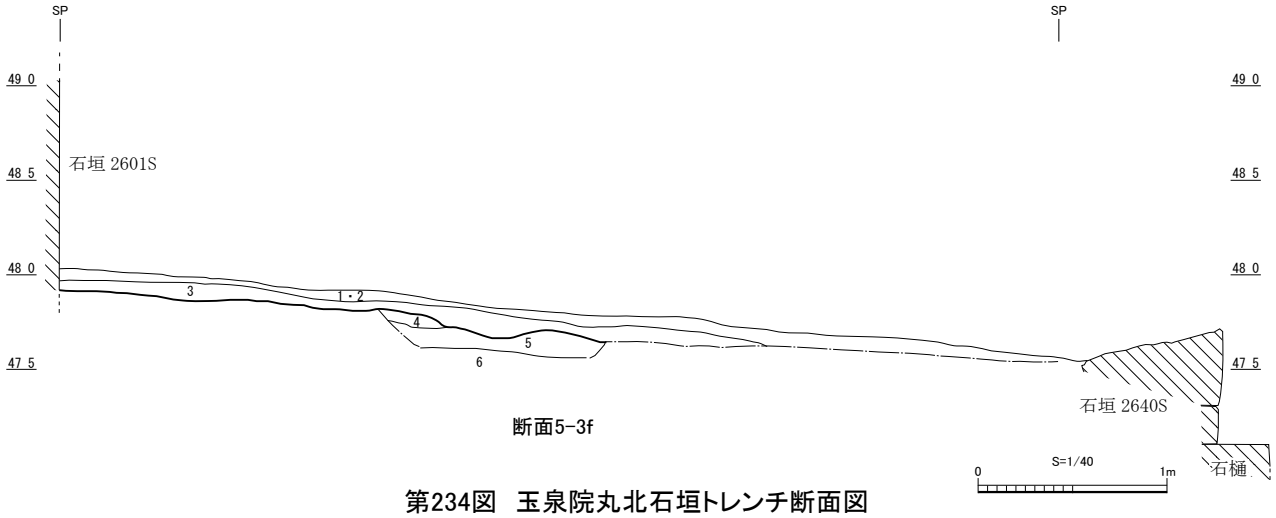
断面5-3f　2640S（色紙短冊積石垣）の上面のトレンチ東面で、Ｖ字型の石樋の長軸を通すように設定した。表土の被りが薄いことから、石樋の設置等に関係する掘方等が確認できる可能性もあり、慎重に掘り下げを行った。約20㎝掘り下げたが、近世の整地層は確認できなかった。しかし、上から10㎝程までは、ガラスやコンクリート等が入るⅠ層で、石垣天端とほぼ同じ高さから下は、Ⅱ層となる。石樋や石垣に関係する遺構は確認できなかった。

断面5-3e　2640S（色紙短冊積石垣）が一段低くなる西側上面のトレンチ東面である。上方の二ノ丸側からの流れ込みとみられるガラスやコンクリートを含むⅠ層が50㎝程の厚さで斜めに堆積し、2640Sの天端付近に向かって薄くなる。断面5-3f同様に、Ⅰ層の下位でⅡ層を確認した。

断面5-3a　2670S上面のトレンチ東面である。2650Sの前面で１ｍ程の厚さで三角堆積するが、その堆積の裾は２ｍほどの広がりで収まり、2670Sの天端に向かって薄くなり、天端石と表土のレベル差は無くなり、ほぼ水平に近くなる。このトレンチでもⅠ層とⅡ層ともに確認した。

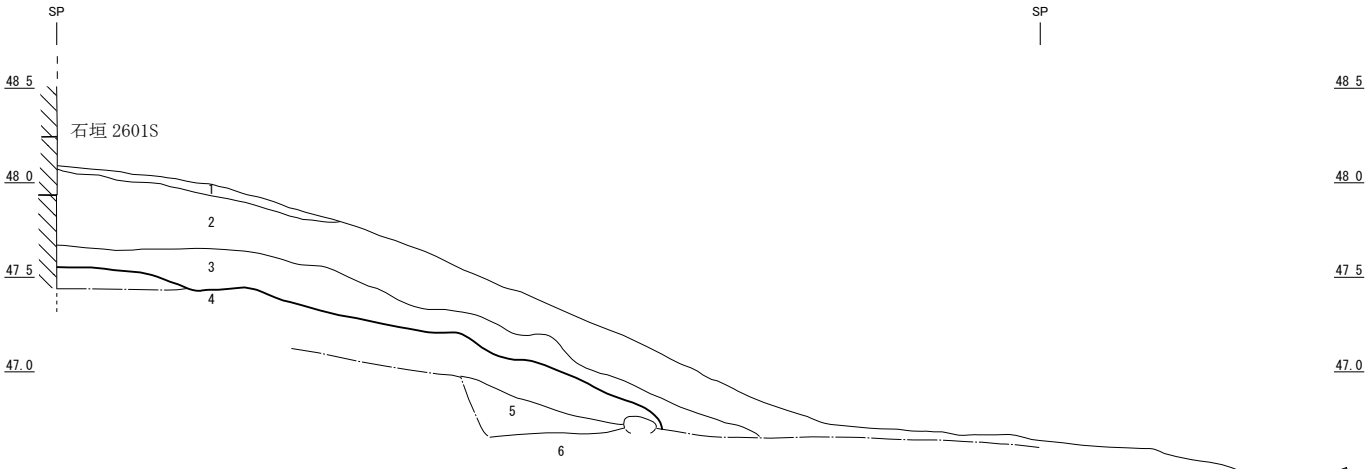
断面5-3d　2670Sの上面のトレンチ西面である。トレンチの主軸は2601Sの石垣面と直交するように設定した。この地点は、二ノ丸側からの土砂の堆積が最も厚く認められる箇所で、最も土砂が高い2601Sの直前と2650Sの天端の比高差は約2.8ｍある。2601Sは地表面から上の高さが約1.5ｍであることから、本来見えるはずの高さの2/3は近代以降の土砂の堆積によって埋没していると考えられる。

ただし、現状で2601Sは石垣面として弧形に前方へ孕み出している状態であった。ちょうどトレンチを入れた線状が最も出ている部分であった。土木部が行っている動態観測はこの石垣では平成23年から開始されたばかりで、現状で変位の累積があるのか、それとも過去に変形した状態なのか判断ができなかった。そのことから、石垣前面の土砂が変位の進行を抑えている可能性もあるため、今回の整備では土砂を全て撤去せず、基底部付近を残置した状態に留めている。

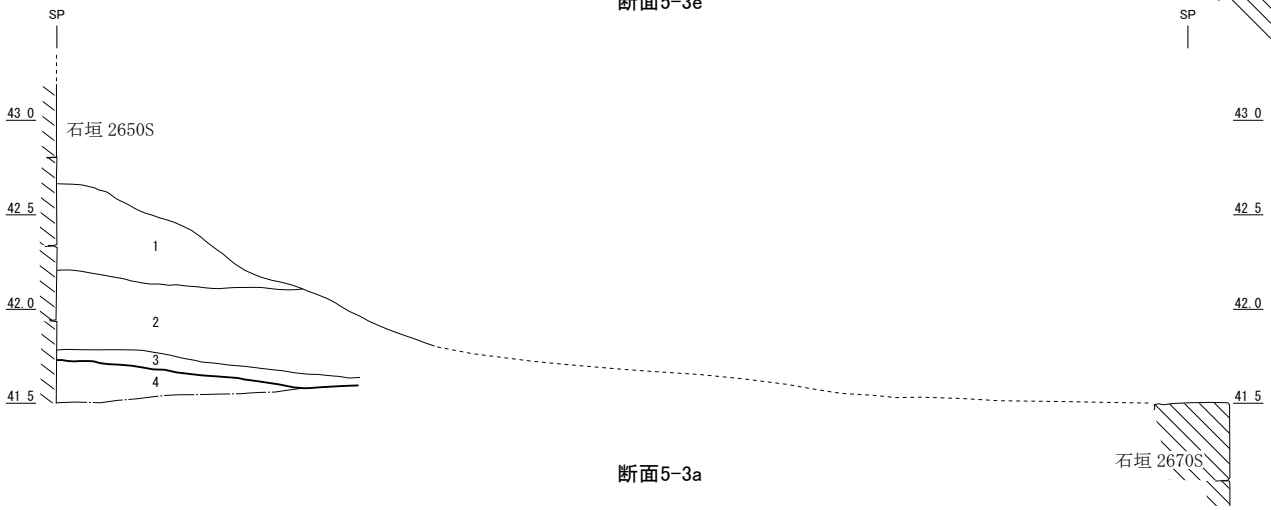


断面5-3f

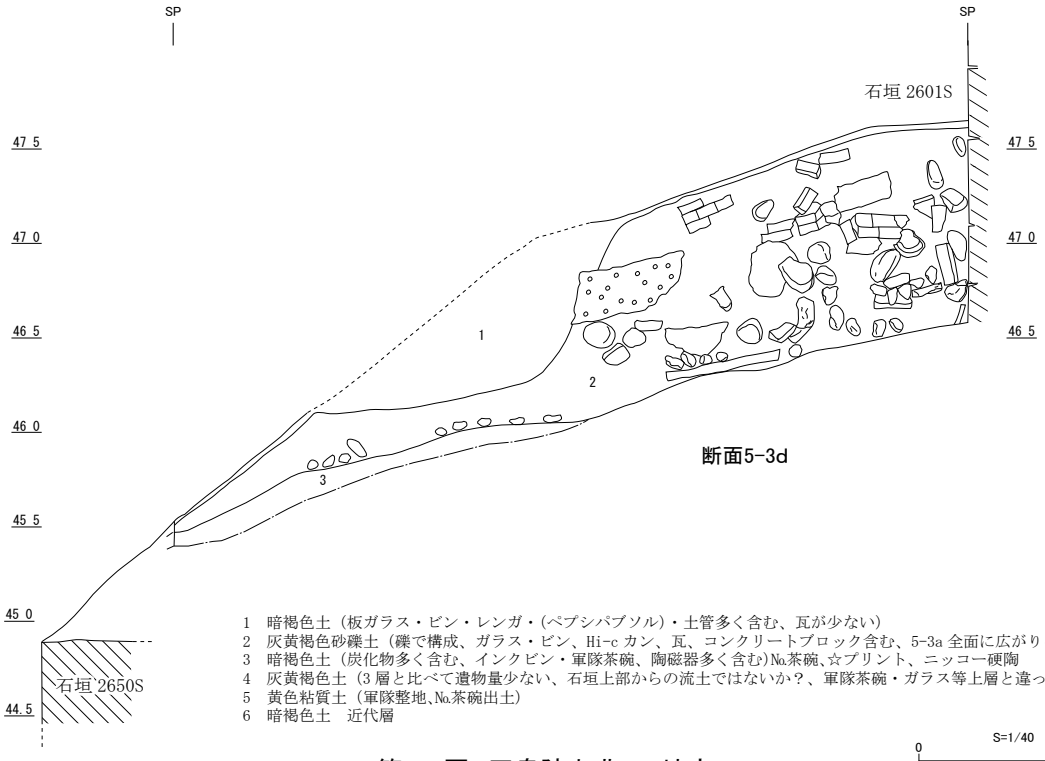
第234図　玉泉院丸北石垣トレンチ断面図



断面5-3e



断面5-3a



断面5-3d

1 暗褐色土（板ガラス・ビン・レンガ・(ペプシパブソル)・土管多く含む、瓦が少ない）
2 灰黄褐色砂礫土（礫で構成、ガラス・ビン、Hi-c カン、瓦、コンクリートブロック含む、5-3a 全面に広がりをみせる）
3 暗褐色土（炭化物多く含む、インクビン・軍隊茶碗、陶磁器多く含む)№茶碗､☆プリント、ニッコー硬陶
4 灰黄褐色土（3 層と比べて遺物量少ない、石垣上部からの流土ではないか？、軍隊茶碗・ガラス等上層と違って含まない）
5 黄色粘質土（軍隊整地､№茶碗出土）
6 暗褐色土　近代層

S=1/40
0 1m

第235図　玉泉院丸北5-3地点

第１地点全景（西から）

第１地点石垣検出状況

第１地点北壁

第１地点南壁

第１地点南北断面東壁

写真図版39　いもり坂石垣遺構写真１

第２地点南側全景（西から）

第２地点南側石垣検出状況（西から）

第２地点南側南壁

第２地点北側全景（北から）

第２地点北側東壁

写真図版40　いもり坂石垣遺構写真2

表土除去前　全景（南東から）

表土除去前2050S・2601S前面（南西から）

表土除去前　2601S前面（北西から）

断面5-3f

断面5-3e

断面5-3a

断面5-3d

整備後の2050S・2601S（南西から）

写真図版41　玉泉院丸北5-3地点

引用・参考文献

石川県1924『石川県史蹟名勝調査報告　第二集』
石川県1993『金沢大学跡地等の利用に関する提言』
石川県1995『金沢城跡整備実施計画報告書』
石川県2011『史跡金沢城跡保存管理計画書』
石川県2014『重要文化財金沢城石川門修理工事報告書』
石川県2015『特別名勝 兼六園保存管理計画書』
石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所2012『特別名勝兼六園 栄螺山石垣等修理工事報告書』
石川県金沢城調査研究所2008a『金沢城調査研究所年報１』
石川県金沢城調査研究所2008b『絵図でみる金沢城』
石川県金沢城調査研究所2008c『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2008d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2008e『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2009a『金沢城調査研究所年報２』
石川県金沢城調査研究所2009b『よみがえる金沢城２』
石川県金沢城調査研究所2010a『金沢城調査研究所年報３』
石川県金沢城調査研究所2010b『金沢城の三御門－河北門・橋爪門・石川門－』
石川県金沢城調査研究所2011a『金沢城調査研究所年報４』
石川県金沢城調査研究所2011b『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2011c『金沢城跡－河北門－』
石川県金沢城調査研究所2011d『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所2012a『金沢城調査研究所年報５』
石川県金沢城調査研究所2012b『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所2012c『城郭石垣の技術と組織』
石川県金沢城調査研究所2013a『金沢城調査研究所年報６』
石川県金沢城調査研究所2013b『金沢城普請作事史料１』
石川県金沢城調査研究所2013c『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2014a『金沢城調査研究年報７』
石川県金沢城調査研究所2014b『金沢城普請作事史料２』
石川県金沢城調査研究所2014c『金沢城跡－石川門付属太鼓塀－』
石川県金沢城調査研究所2014d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2015a『金沢城調査研究所年報８』
石川県金沢城調査研究所2015b『金沢城普請作事史料３　奥村栄実御用番幷御城方日記』
石川県金沢城調査研究所2015c『金沢城跡－橋爪門－』
石川県金沢城調査研究所2015d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所2015e『金沢城跡鼠多門・鼠多門橋遺構確認調査概要１』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2016a『金沢城調査研究所年報９』
石川県金沢城調査研究所2016b『金沢城普請作事史料４』
石川県金沢城調査研究所2016c『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2016d『金沢城跡－鶴ノ丸第１次・新丸第１次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷－』
石川県金沢城調査研究所2016e『金沢城跡鼠多門・鼠多門橋遺構確認調査概要２』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2017a『金沢城調査研究所年報10』
石川県金沢城調査研究所2017b『金沢城普請作事史料５　三壺聞書』
石川県金沢城調査研究所2017c『絵図にみる金沢城二ノ丸御殿』
石川県金沢城調査研究所2018a『金沢城調査研究所年報11』
石川県金沢城調査研究所2018b『金沢城総合年表　前編』
石川県金沢城調査研究所2018c『金沢城庭園調査報告書』
石川県金沢城調査研究所2018d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所2018e『平成30年度 切石積石垣確認調査の概要』（現地説明会資料）
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003a『年報１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003b『研究紀要 金沢城研究 創刊号』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004a『年報２』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004b『御造営方日並記』上巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005a『年報３』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005b『御造営方日並記』下巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005c『金沢城フォーラム　記録集　石垣の匠と技』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006a『年報４』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006b『金沢城跡Ⅱ』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006c『よみがえる金沢城１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006d『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007a『年報５』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007b『金沢城代と横山家文書の研究』
石川県教育委員会1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
石川県教育委員会1979『石川県の古庭園』
石川県教育委員会2001『金沢城フォーラム　いま甦る金沢城』
石川県教育委員会事務局文化財課「いしかわ文化財ナビ」[http://wwww.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/]
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991a『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢城史料編
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991b『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢御堂史料編
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター1998『金沢城跡を掘る 1998』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター1999a『金沢城跡を掘る 1999』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター1999b『金沢城跡を掘る 1999』vol. 2
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2000『金沢城跡を掘る 2000』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2001a『年報２（平成11年度)』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2001b『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002a『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002b『金沢市 木ノ新保遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002c『金沢市 経王寺遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002d『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002e『金沢市 前田氏（長種系）屋敷跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2007『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2010『金沢市 金沢城跡１』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2012『金沢市 金沢城跡２－堂形（第３・４次調査）－』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2013『小松市 八幡遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2014a『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点)』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2014b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2014c『金沢市 金沢城跡３－堂形（第５次調査）－』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2014d『金沢市 元菊町遺跡』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2015a『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）Ⅱ』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2015b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2016『金沢市 金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区)』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター2017『金沢市　金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区)』
石川県兼六園管理事務所1993『兼六園「明治紀念之標」修理工事報告書』
石川県土木部営繕課2001『金沢城公園菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等復元工事報告書』
石川県土木部公園緑地課2013『金沢城公園　河北門復元整備工事報告書』
石川県土木部公園緑地課2016『金沢城公園　橋爪門復元整備工事報告書』
石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2010『金沢城跡石垣修理工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』
石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2017『金沢城跡　玉泉院丸南石垣等』
石川県史調査委員会・石川県立図書館史料編さん室2011『石川県史資料　近世篇11（諸士系譜 四)』石川県
石川県史調査委員会・石川県立図書館史料編さん室2012『石川県史資料　近世篇12（諸士系譜 五)』石川県
石川県立埋蔵文化財センター1987『敷地天神山遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター1990『元菊町遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター1991『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝 兼六園（江戸町跡推定地）発掘調査報告　－附　本多家上屋敷跡試掘調査報告－』
石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター1997『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
井上鋭夫1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
井上喜久男1990「尾張陶磁（１）－近世初期の瀬戸物生産－」『愛知県陶磁資料館研究紀要』９
上野佳也1976「金沢城四十間長屋跡発掘調査概報」『日本海文化』No. ３　金沢大学法文学部日本海文化研究室
江戸遺跡研究会2001『図説　江戸考古学研究事典』 柏書房
岡　泰正2001「出島・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について」『国指定遺跡　出島阿蘭陀商館跡一護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書一』長崎市教育委員会
岡　泰正2010「出島南側護岸石垣前面出土の西洋陶器について」『国指定遺跡　出島阿蘭陀商館跡　南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』長崎市教育委員会

小川　望2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社
小野正敏1982「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№.２　日本貿易陶磁研究会
金沢市・金沢市教育委員会1991『瓢箪町遺跡』
金沢市教育委員会1995『金沢市本町一丁目遺跡』
金沢市教育委員会1997a『安江町遺跡』
金沢市教育委員会1997b『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ　鍛冶片原地点』
金沢市埋蔵文化財センター 1998『長田町遺跡　長町遺跡　穴水町遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター 1999『下本多町遺跡』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市醒ヶ井遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2002『石川県金沢市 彦三町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a『石川県金沢市 高岡町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d『野田山墓地』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅰ（測量図編）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005a『平成16年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005b『石川県金沢市 木ノ新保遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005c『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅱ（古代・中世編、測量図編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005d『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006a『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅲ（近世編１）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006b『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅳ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006c『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅳ（近世編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b『石川県金沢市 兼六元町遺跡　彦三一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007c『石川県金沢市 下堤・青草町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009a『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅴ（金沢能楽美術館地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b『辰巳用水調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010a『平成21年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011a『平成22年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅱ～西内惣構跡（主計町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅲ～西外惣構跡（武蔵町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011d『石川県金沢市 土清水塩硝蔵跡調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012a『平成23年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012b『本多家上屋敷関連遺構調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012c『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012d『石川県金沢市　金沢城惣構跡Ⅳ　金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺構編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012e『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013a『平成24年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013b『石川県金沢市　金沢城惣構跡Ⅴ　金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺物編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013c『石川県金沢市 小立野四丁目遺跡－天徳院前田家墓所－』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014a『平成25年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014b『石川県金沢市 片町二丁目遺跡（５番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅵ 東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015a『平成26年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015b『石川県金沢市 長家上屋敷跡調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016a『平成27年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016b『石川県金沢市 玉川町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2017『平成28年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』

金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018『平成29年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市史編さん室1965『金沢の百年　明治編』金沢市
金沢市史編さん室1967『金沢の百年　大正・昭和編』金沢市
金沢市役所1973『稿本　金澤市史』市街編第四　名著出版
金沢大学創立50周年記念事業後援会2001『金沢大学50年史』通史編
金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』２
金沢大学埋蔵文化財調査センター2002『金沢大学文化財学研究』３・４
金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』５
金沢大学埋蔵文化財調査センター2017『金沢大学構内遺跡－角間遺跡、宝町・鶴間遺跡－』
金沢御堂・金沢城調査委員会1993『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』石川県教育委員会
紺野義夫1993『新版・石川県地質図（10万分の１）および石川県地質誌』 石川県
紺野義夫2001「石川県の地質に関連する調査研究の百年史年表」『石川県地質誌・補遺』 北陸地質研究所
金子　智1994「近世瓦の基本分類-江戸遺跡出土品を中心に－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第20集 哲学・史学編』 早稲田大学大学院文学研究科
木越隆三2003a「元和～寛文期の金沢城修築について」『研究紀要 金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室
木越隆三2004「金沢城全域絵図の分類と編年－金沢城絵図調査報告Ⅰ－」『研究紀要 金沢城研究』第２号　金沢城研究調査室
木越隆三2006「金沢城作事所に関する断簡資料（１）－名倉氏採取襖下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）－」『研究紀要 金沢城研究』第４号　金沢城研究調査室
木越隆三2007「近世後期、石垣構築技術「秘伝」の形成過程」『研究紀要 金沢城研究』第５号　金沢城研究調査室
木越隆三2009「金沢城と辰巳用水」『辰巳用水調査報告書』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
木越隆三2013「金沢の惣構創建年次を再検証する」『日本歴史』第780号　日本歴史学会
北垣聰一郎1987『石垣普請』法政大学出版局
北野博司2001「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』№８　東北芸術工科大学
北野博司2003「金沢城石垣の変遷１」『研究紀要 金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室
北野博司2004「金沢城石垣の変遷２－切石積石垣－」『研究紀要 金沢城研究』第２号　金沢城研究調査室
久保智康1989a「越前における近世瓦生産の開始について」『福井県立博物館紀要』３　福井県立博物館
久保智康1989b「近世中～後期越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』７
久保智康1992「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』10
久保智康2001『北陸の瓦の歩み』日本セラミックス協会北陸支部
久保智康2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海歴史体系』第四巻　近世篇Ⅰ　清文堂
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
佐々木達夫1980「金沢城跡の発掘－一九七九年－」『日本海文化』№７　金沢大学文学部日本海文化研究室
佐々木達夫1981「金沢城跡の発掘－1977年－」『金沢大学日本海域研究所報告』第13号
貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦1986「金沢城の発掘－1981－藤右エ門丸北側法面裾部発掘報告」『金沢大学日本海域研究所報告』第18号
貞末堯司・前田清彦・児玉剛1989「金沢城の発掘－1986年－黒門横北側県外部発掘調査報告」『日本海文化』№5　金沢大学文学部日本海文化研究室
澤辺利明2019「金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）」『石川県埋蔵文化財情報』第40号　（公財）石川県埋蔵文化財センター
須川薫雄1995『日本の軍用銃と装具』国書刊行会
瀬戸　薫2000「『北信愛覚書』について－天正十五年の金沢城－」『加能史料研究』第12号　石川県地域史研究振興会
瀬戸市史編纂委員会編1993a『瀬戸市史』陶磁史篇四　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編1993b『瀬戸市史』陶磁史篇五　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編1998『瀬戸市史』陶磁史篇六　愛知県瀬戸市
滝川重徳1999「金沢城跡（本丸附段調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号（財）石川県埋蔵文化財センター
谷口明伸・増山　仁2004「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」『研究紀要』第１号（財）金沢文化振興財団
田端寶作1979『金沢城石垣刻印調査報告書』 城郭石垣刻印研究所
土田友信2000「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第４号　（財）石川県埋蔵文化財センター
坪井利弘1993『建築家のための瓦の知識』鹿島出版会
坪井利弘1999『図鑑　瓦屋根』理工学社
東京大学埋蔵文化財調査室2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７ 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
冨田和気夫・湊屋玲美2002「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第７号（財）石川県埋蔵文化財センター
長崎市教育委員会2010『国指定遺跡　出島阿蘭陀商館跡　南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』
日本海文化研究室1976『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻　金沢大学法文学部日本海文化研究室
白山市教育委員会2016『国指定史跡　鳥越城跡附二曲城跡　鳥越城跡発掘調査報告書』
白山市教育委員会2018『白山市史跡　舟岡山城跡確認調査報告書』
服部　郁1993「幕末から明治の瀬戸窯」『遺跡に見る幕末から明治』江戸遺跡研究会第６回大会発表要旨　江戸遺跡研究会
藤澤良祐1987「本業焼きの研究（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館

藤　則雄1999「金沢城「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会々誌第42号　石川考古学研究会
藤　則雄1975「河岸段丘」『金沢周辺の第四系と遺跡』
文化庁1969『重要文化財金沢城　石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
文化庁2005『史跡等整備のてびき』同成社
文化庁2013『発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー』同成社
文化庁文化財部記念物課2015『石垣整備のてびき』同成社
日置　謙1956『改訂増補　加能郷土辞彙』北國新聞社
北陸近世遺跡研究会・奥田　尚1995「北陸の焼塩壺ー金沢城下出土の鉢形焼塩壺を中心にー」『石川考古学研究会々誌』38　石川考古学研究会
増山　仁1997「金沢城下における近世墓ー久昌寺墓地を中心としてー」『第９回関西近世考古学研究会大会　西日本近世墓の諸様相』
増山　仁1999「金沢城跡」『金沢市史』資料編19考古　金沢市史編さん委員会
三浦ゆかり1999「金沢城跡いもり堀発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報』第２号（財）石川県埋蔵文化財センター
見瀬和雄2000「金沢城の創建と前田利家」『石川県史だより』第39号　石川県立図書館史料編さん室
湊屋玲美・土田友信2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第５号（財）石川県埋蔵文化財センター
湊屋玲美・土田友信ほか2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第６号（財）石川県埋蔵文化財センター
森田平次（日置謙校訂）1976『金澤古蹟志（上）』歴史図書社
米澤義直・米澤義光2008『江戸後期から昭和前期頃までの瓦資料について』
米澤義光2009『加賀国・本吉いぶし瓦（本吉瓦）について』（有）米澤義直商店
吉岡康暢1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書　第五巻　名著出版

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと　― ほんまるつけだん・きたのまる ―
書名	金沢城跡　― 本丸附段・北ノ丸 ―
副書名	金沢城史料叢書35
シリーズ名	金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	12
編著者名	西田郁乃、滝川重徳、辻森由美子、知田真衣子、梶ケ山真理、小林克也
編集機関	石川県金沢城調査研究所
所在地	〒920-0918　石川県金沢市尾山町10－５　TEL 076-223-9696
発行年月日	2019年３月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
かなざわじょうあと 金沢城跡	いしかわけん 石川県 かなざわしまるうち 金沢市丸の内	17201	130200	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	19980506～ 19980812	500 (本丸附段)	活用目的 調査
						20001212～ 20001225	20 (本丸附段)	
						20000613～ 20000825	850 (北ノ丸)	
						20081021～ 20081210	6 (いもり坂脇石垣)	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城跡	城館	近世	階段、石垣、土坑、空堀、火葬関連遺構	陶磁器、土製品、瓦、石瓦、金属製品、石製品	

要約

金沢城公園整備事業に伴い、本丸附段、北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）等を対象に埋蔵文化財調査を実施した。

・本丸附段では、近代に改変された北部の階段について基礎構造や周囲の石垣等を確認し、近世当時の形状・規模に係る知見を得た。また、階段が構築された17世紀前半以前の遺構を一部検出した。

・北ノ丸の御宮では、寛永20年（1643）に創建された東照宮関係の建物に葺かれていたと考えられる石瓦がまとまって廃棄された状態で出土した。藤右衛門丸では、整地土や土坑から灰や火葬骨が出土し、火葬に関連する遺構を確認した。

金沢城史料叢書 35
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 12

金 沢 城 跡

－本丸附段・北ノ丸－

平成 31 年（2019）3月 29 日　発行

編集・発行　石川県金沢城調査研究所

〒920-0918　石川県金沢市尾山町10－5
電話　076（223）9696　　FAX　076（223）9697
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html
メールアドレス　kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印　刷　　前田印刷株式会社